ISSN 2186-3229

日本語文法学会

The Society of Japanese Grammar

第25回 大会発表予稿集

2024年12月14日(土)・15日(日)

会場：九州大学

主催　日本語文法学会

公開シンポジウム　共催：言語系学会連合

〇2024年12月14日（土）午後［イースト2号館1階］
12:30- 受付開始　※13:00までにご着席ください。

研究発表	A会場 （D-１０３講義室）	B会場 （D-１０５講義室）	C会場 （E-１０９講義室）	D会場 （E-１１０講義室）
司会	江口 正（福岡大学）	志波彩子（名古屋大学）	丸山 岳彦（専修大学）	窪田 悠介（国立国語研究所）
13:00 ｜ 13:40	原田 走一郎 （長崎大学） ビールのほうがよく飲みます ―比較"に注目して―	大園 雄也 （関西外国語大学大学院生） 「てもらう」における恩恵性の背景化と受動性の前景化	中俣 尚己 （大阪大学） 文法形式に基づいた日本語文体の多次元的抽出	坂本 瑞生 （東北大学大学院生） 助詞「ハ」と文構造が担う主題的意味のタイプ
13:50 ｜ 14:30	有田 節子 （立命館大学） 佐賀西部方言の条件節の時制とモダリティ	田川 拓海 （筑波大学） モダリティ形式「方がいい」の形態統語的特徴	東寺 祐亮 （日本文理大学） 幼児における副助詞に対する接続形式の習得時期の差異	張 琴琴 （北海道大学大学院生） 数量詞の追加によるアスペクト性解釈の変化
14:40 ｜ 15:20	【招待】高田 祥司 （秀明大学） 日本語諸方言と韓国語の過去表現のムード的用法	高 恩淑 （獨協大学） ラレテアル文の構文的な特徴とその意味・用法について	山本 晃子 （立命館大学大学院生） 話し言葉における助数詞の選択に関する―考察―〈枚〉〈本〉〈つ〉〈個〉に注目して―	嘉藤 優太 （神戸大学大学院生） 日本語関係節の派生と節サイズ
15:20 -15:40	（休憩）			
司会	森 勇太（関西大学）	平子 達也（南山大学）	永澤 済（上智大学）	林 淳子（東京大学）
15:40 ｜ 16:20	佐藤 琢三 （学習院女子大学） 時の内部構造と境界―「このごろ」「最近」の類義関係―	【招待】竹村 明日香 （お茶の水女子大学） 謡伝書における音声観察―『音曲玉淵集』以外の資料から―	鄧 瑾瑄 （京都大学大学院生） 現代日本語における境界直後の「だ」について	池田 尋斗 （関西大学大学院生／神戸大学） 可能構文の対象を標示するガ･ヲの交替に情報構造は影響するか―指示距離による検証―
16:30 ｜ 17:10	岡﨑 友子 （立命館大学） 現場調査からみる指示詞の指示領域―評価･感情によるコソアの選択―	竹林 栄実 （東京大学大学院生） 「動くと撃つぞ」型条件文について―近世期以降のト条件文における例外―	【招待】森 篤嗣 （武庫川女子大学） 普通体応答における「だ」の有無―日本語教育文法として「「だ」は省略」は妥当か―	佐藤 友哉 （清泉女学院短期大学） 経路を表す「を」格の対象性
17:20 -17:55	会員総会　［イースト2号館1階 D-103講義室］			
17:55 -18:20	大会式典　［イースト2号館1階 D-103講義室］			
18:30 -20:00	懇親会　［イーストゾーン生協食堂 ビッグスカイ］			

〇2024 年 12 月 15 日（日）午前（パネルセッション）［イースト 2 号館］
9:00-　受付開始　※9:30 までにご着席ください。

	パネルセッション （大会委員会企画）	パネルセッション （一般）		
	A 会場 （D-１０３講義室）	B 会場 （D-１０５講義室）	C 会場 （E-１０９講義室）	D 会場 （E-１１０講義室）
	テーマ 副用語の歴史的研究の現在	テーマ 日琉諸方言の推量表現の諸相	テーマ 「“よい”文法記述」について考える―分類・周辺・例外・理論といかに向き合うか―	テーマ アカデミック・ライティングのための初級文法項目の再学習
9:30 ｜ 11:30	司会 川瀬 卓（白百合女子大学） 発表 1. 川瀬 卓（白百合女子大学） 文法史研究としての副詞研究 2. 林 禔映（全南大学（韓国）） 評価を表す陳述副詞の史的展開 3. 川村 祐斗（愛知淑徳大学） 接続詞における対人的意味の獲得―サレバを事例として― 4. 川島 拓馬（富山大学） 近代語における接続詞の成立と多様な展開	司会 舩木 礼子（神戸女子大学） 発表 1. 松丸 真大（滋賀大学） 「推量表現共通調査項目」の概要／京都市方言の推量表現 2. 日高 水穂（関西大学） 広島県三次市方言の推量関連表現 3. 仲原 穣（琉球大学非常勤講師） 沖縄語首里方言の推量関連表現 4. 舩木 礼子（神戸女子大学） 高知方言の推量表現	司会 三好 伸芳（武蔵野大学） 発表 1. 阿久澤 弘陽（京都大学） 分類といかに向き合うか 2. 大江 元貴（青山学院大学） 周辺といかに向き合うか 3. 鈴木 彩香（千葉大学） 例外といかに向き合うか 4. 井戸 美里（国立国語研究所） 理論といかに向き合うか 指定討論者 井原 駿（津田塾大学）	司会 高梨 信乃（関西大学） 発表 1. 高梨 信乃（関西大学） アカデミック・ライティングのための対比の「は」の再学習 2. 朴 秀娟（神戸女学院大学） アカデミック・ライティングのためのテンス・アスペクトの再学習―図表の提示を中心に― 3. 庵 功雄（一橋大学） アカデミック・ライティングのための自他の対応の再学習―漢語サ変動詞を中心に―
11:30 -12:30	（昼食休憩）			

〇2024 年 12 月 15 日（日）午後（シンポジウム）［イースト 2 号館 1 階 大講義室Ⅱ］

日本語文法学会　第 24 回大会シンポジウム（言語系学会連合共催・一般公開）	
12:30 ｜ 16:00	テーマ　音韻と文法の両面から見る「ドメイン」―音調句形成を中心に―」 講師 1．木部 暢子（人間文化研究機構） 「音調単位」と「文節」―西南部九州二型アクセントからの提言― 講師 2．松倉 昂平（金沢大学） 北陸方言のアクセントの実現領域―韻律的単位と形態統語的単位の不一致― 講師 3：下地 理則（九州大学） 「文節」概念を超えて―都城方言の韻律記述試論― 企画・司会・コメント：平子 達也（南山大学）

目　次

12 月 14 日（土）　［イースト 2 号館 1 階］

【研究発表】13:00～17:10

A会場　（D−１０３講義室）

（司会： 江口 正）

13:00～	ビールのほうがよく飲みます—“比較”に注目して—	原田 走一郎	… 1
13:50～	佐賀西部方言の条件節の時制とモダリティ	有田 節子	… 9
14:40～	【招待】日本語諸方言と韓国語の過去表現のムード的用法	高田 祥司	… 17

（司会： 森 勇太）

15:40～	時の内部構造と境界—「このごろ」「最近」の類義関係—	佐藤 琢三	… 25
16:30～	現場調査からみる指示詞の指示領域 —評価・感情によるコソアの選択—	岡﨑 友子	… 33

B会場　（D−１０５講義室）

（司会： 志波 彩子）

13:00～	「てもらう」における恩恵性の背景化と受動性の前景化	大園 雄也	… 41
13:50～	モダリティ形式「方がいい」の形態統語的特徴	田川 拓海	… 49
14:40～	ラレテアル文の構文的な特徴とその意味・用法について	高 恩淑	… 57

（司会： 平子 達也）

15:40～	【招待】謡伝書における音声観察 —『音曲玉淵集』以外の資料から—	竹村 明日香	… 65
16:30～	「動くと撃つぞ」型条件文について —近世期以降のト条件文における例外—	竹林 栄実	… 73

C会場　（E−１０９講義室）

（司会： 丸山岳彦）

13:00～	文法形式に基づいた日本語文体の多次元的抽出	中俣 尚己	… 81
13:50～	幼児における副助詞に対する接続形式の習得時期の差異	東寺 祐亮	… 89
14:40～	話し言葉における助数詞の選択に関する一考察 —〈枚〉〈本〉〈つ〉〈個〉に注目して—	山本 晃子	… 97

（司会： 永澤 済）

15:40～	現代日本語における境界直後の「だ」について	鄧 瑾瑄	… 105
16:30～	【招待】普通体応答における「だ」の有無 —日本語教育文法として「「だ」は省略」は妥当か—	森 篤嗣	… 113

D会場　（E−１１０講義室）

（司会： 窪田 悠介）

13:00～	助詞「ハ」と文構造が担う主題的意味のタイプ	坂本 瑞生	… 121
13:50～	数量詞の追加によるアスペクト性解釈の変化	張 琴琴	… 129
14:40～	日本語関係節の派生と節サイズ	嘉藤 優太	… 137

（司会： 林 淳子）

15:40～　可能構文の対象を標示するガ・ヲの交替に情報構造は影響するか―指示距離による検証―　池田 尋斗　… 145
16:30～　経路を表す「を」格の対象性　佐藤 友哉　… 153

12 月 15 日（日）　［イースト 2 号館 1 階］

【パネルセッション】9:30～11:30

A会場　（D−１０３講義室）　パネルセッション（大会委員会企画）

（司会： 川瀬 卓）

テーマ　副用語の歴史的研究の現在　… 161

発表 1　文法史研究としての副詞研究　川瀬 卓　… 162

発表 2　評価を表す陳述副詞の史的展開　林 禔映　… 167

発表 3　接続詞における対人的意味の獲得―サレバを事例として―　川村 祐斗　… 173
発表 4　近代語における接続詞の成立と多様な展開　川島 拓馬　… 179

B会場　（D−１０５講義室）　パネルセッション（一般）

（司会： 舩木 礼子）

テーマ　日琉諸方言の推量表現の諸相　… 185

発表 1　「推量表現共通調査項目」の概要／京都市方言の推量表現　松丸 真大　… 187
発表 2　広島県三次市方言の推量関連表現　日高 水穂　… 194

発表 3　沖縄語首里方言の推量関連表現　仲原 穣　… 200

発表 4　高知方言の推量表現　舩木 礼子　… 205

C会場　（E−１０９講義室）　パネルセッション（一般）

（司会： 三好 伸芳）

テーマ　「“よい”文法記述」について考える―分類・周辺・例外・理論といかに向き合うか―　三好 伸芳　… 209
発表 1　分類といかに向き合うか　阿久澤 弘陽　… 213

発表 2　周辺といかに向き合うか　大江 元貴　… 218

発表 3　例外といかに向き合うか　鈴木 彩香　… 223

発表 4　理論といかに向き合うか　井戸 美里　… 228

（指定討論者： 井原 駿）

D会場　（E−１１０講義室）　パネルセッション（一般）

（司会： 高梨 信乃）

テーマ　アカデミック・ライティングのための初級文法項目の再学習　… 233

発表 1　アカデミック・ライティングのための対比の「は」の再学習　高梨 信乃　… 235

発表 2　アカデミック・ライティングのためのテンス・アスペクトの再学習 —図表の提示を中心に—　朴 秀娟　… 242
発表 3　アカデミック・ライティングのための自他の対応の再学習 —漢語サ変動詞を中心に—　庵 功雄　… 249

【シンポジウム】12:30～16:00　［イースト 2 号館 1 階 大講義室Ⅱ］
日本語文法学会第 25 回大会シンポジウム（言語学系学会連合共催・一般公開）

音韻と文法の両面から見る「ドメイン」—音調句形成を中心に—

（司会： 平子 達也）

このシンポジウムで何を議論するのか（趣旨説明）　平子 達也　… 257

「音調単位」と「文節」 —西南部九州二型アクセントからの提言—　木部 暢子　… 264
北陸方言のアクセントの実現領域 —韻律的単位と形態統語的単位の不一致—　松倉 昂平　… 272
「文節」概念を超えて —都城方言の韻律記述試論—　下地 理則　… 280

日本語文法学会入会案内　… 288

ビールのほうがよく飲みます　―“比較”に注目して―

原田走一郎（長崎大学）　haradaso@nagasaki-u.ac.jp

1. はじめに

本発表ではまずいわゆる「排他の「が」」について考える。「排他の「が」」について野田（1996: 240）では「排他の「が」がつきにくいのは、対象を表す「～を」や、結果の状態を表す「～に（なる）」などである。こうした格成分は、主格的な性質をもてないので、「～が」になることはほとんどない。」と述べられている。本発表では、話しことばにおいては対象であっても「排他の「が」」をとることがあることを述べる。たとえば、次の例である。

（1）　（「ビール飲める？」に対して）　ビールのほうがよく飲みます
（小磯ほか 2023　国立国語研究所日本語日常会話コーパス　T006_004/95740）

しかし、同じ対象であっても「排他の「が」」の容認度は例によって異なるようである。次の 2 例では、容認度に差が出る。（2）のほうを容認する人数が多い。

（2）　A さんはビールよりワインのほうが飲むよ。
（3）　B さんはビールは一滴も飲まないけど、ワインのほうが飲むよ。

このようなことから、対象が「排他の「が」」をとりやすいのは、“比較”を表す場合だと考えられる。本発表では、この比較という概念が前述の現象以外の説明に際しても有用であることを示す。なお、本発表においては Stassen（2013）による「In semantic or cognitive terms, comparison can be defined as a mental act by which two objects are assigned a position on a predicative scale.」という記述を参考にし、比較を「段階性のある尺度に複数の点を位置づけて、それらの位置を比べること」とする。先行研究を引用する場合はこの限りではない。

本発表の構成は以下のとおりである。2 節で「排他の「が」」に関する先行研究を本発表に関する範囲で簡単にまとめる。3 節ではアンケート調査の結果を述べ、続く 4 節で「が」が比較の場合に許容されやすい理由について考える。5 節では諸方言の分析において比較という概念が有用であることを示す。6 節では今後の課題について述べる。

2. 先行研究

「排他の「が」」に関する先行研究は多い。久野（1973）においては「総記の「ガ」」と称される。本発表では「排他の「が」」と称する。野田（1996: 238）においては「（ア）2 つ以上の候補を比較して選択する文になっている（イ）「が」がつく成分が、主格的な性質をもっている」という 2 つの条件をみたす場合に排他専用の「が」が使われるとされている。（イ）の条件を備えていない場合として、次の例が挙げられている。

（4）　*私はお酒ではなくジュースが飲んだ。（野田 1996: 244（23））

つまり野田（1996）では、(4) の例は「2 つ以上の候補を比較して選択する文になっている」と判断されているものと思われる。これは、本発表における比較とは一致しないのであるが、この点については次節で述べる。

3. アンケート調査の概要とその結果

本発表ではアンケートによって得られた資料を用いる。2024 年 6-7 月に関東、中部、近畿、九州に所在する大学の学生に対してオンラインアンケート[1]を行った。日本語の例を示し、自分自身のことばとして「a. 言える」「b. 違和感はあるが、どちらかというと言える」「c. 言えない」の 3 択により回答を得た。有効回答数は 226。調査で用いた例文の一部とアンケートの結果を次の表に示す。上段の数字は実数、下段は割合である。

表 アンケート結果（下線はアンケート時に示したとおり）

	a	b	c
あ） A さんはビールよりワインのほうが飲むよ	152 (67.3%)	61 (27%)	13 (5.8%)
い） A さんはビールよりワインが飲むよ	1 (0.4%)	20 (8.8%)	205 (90.7%)
う） B さんはビールは一滴も飲まないけど、ワインのほうが飲むよ	51 (22.5%)	74 (32.7%)	101 (44.7%)
え） B さんはビールは一滴も飲まないけど、ワインが飲むよ	0	10 (4.4%)	216 (95.6%)
お）（いつもはワインを飲むけど）昨日は、C さんはワインよりビールのほうが飲んだよ	77 (34.1%)	93 (41.2%)	56 (24.8%)
か）（いつもはワインを飲むけど）昨日は、C さんはワインよりビールが飲んだよ	0	10 (4.4%)	216 (95.6%)
き）（いつもはワインを飲むけど）さっきは、D さんはワインじゃなくてビールのほうが飲んだよ	39 (17.3%)	68 (30.1%)	119 (52.7%)
く）（いつもはワインを飲むけど）さっきは、D さんはワインじゃなくてビールが飲んだよ	0	4 (1.8%)	222 (98.2%)

アンケートの結果、「A さんはビールよりワインのほうが飲むよ。（(2)、**あ）**」は 67%ほどが「言える」と回答した。「違和感はあるが、どちらかというと言える」まで含めると 94%であり、これを日本語として不適格と認めるのは困難と思われる。この結果と、野田（1996: 240）の「排他の「が」がつきにくいのは、対象を表す「～を」や、結果の状態を表す「～に（なる）」などである。」という記述とは矛盾するように思われる。では、これに対してどのような説明が可能であろうか[2]。本発表では、「のほうが」という表現が使用されているこ

[1] 非母語話者による回答と欠損のある回答を除いた。
[2] 世代差も考えられるが、現段階では十分な資料がない。（1）の日本語日常会話コーパスの例は収録当時（2016-19 年）20-24 歳の神奈川県出身の女性によるものとのことである。なお、発表者が個人的に尋ねた範囲では、発表者と同年代の中年層の話者は「A さんはビールよりワインのほうが飲むよ」を「言える」と判断することが多いようである。

とと恒常的な状態（野田 1996: 232）を表す文であることに加えて、この文が（本発表が述べるところの）比較を意味する文であることも野田（1996）の例外が生じた要因であると考える[3]。これは、比較という点で対立する「**あ）**vs. **う）**」、「**お）**vs. **き）**」などのペアの対比から言える。実は、先述の「のほうが」、“恒常的な状態”、“比較”という 3 点が野田（1996: 244）の例（(4)「私はお酒ではなくジュースが飲んだ。」）と（2）の例（「A さんはビールよりワインのほうが飲むよ。」（**あ）**））との違いである。本発表では比較という概念に注目しているので、ここで、比較という点においてこれらの例の違いを考える。(4) の例においては、「お酒」が飲まれたことは否定されているが、「ジュース」は飲まれている。そのため尺度上にある点は 1 つである。いっぽう、(2) の例の場合、「ビール」も「ワイン」も飲まれているため、同じ尺度上にそれぞれ点を占めていると言える。上述のペアの対比から、この意味上の差がこれらの容認度の違いの一因となっているものと考えられる。なお、ここで述べたような、一つの尺度上の複数の点の位置を比べる場合と、そうでない場合を峻別すべきであるという考えは他言語に基づいた研究においても見られる（Zeisler 2018）。

4. なぜ比較の場合に許容されやすいか

本節では、「が」が比較の場合に許容されやすい理由を考える。本発表では、「が」が非主題を標示する（野田 1996: 10-11、下地 2019）のが根本的な理由であると考える。ここでは、「が」が比較の解釈を受ける典型である形容詞文について考える。典型的な形容詞文の唯一項が「が」で標示された場合、（かつ、「が」が非主題を表すと考えると、）文全体が焦点になる文焦点の場合と、項だけが焦点になる項焦点の場合とが想定される。文焦点の例は「空が青い」のようなものである。項焦点の場合、2 つの場合が想定される。1 つ目は、A「どこが暑い？」B「佐賀が暑いよ」のような文脈の場合であり、この場合、意味上の尺度は先行文脈に存在するが、尺度上に点はない。いっぽう、A「九州では福岡が暑いよね」B「佐賀が暑いよ」のような場合、意味上の尺度のみならず尺度上の点も先行文脈に存在する。この場合に比較の解釈が生じるものと考える。なぜなら、尺度と点がすでに文脈上にあるため、結果的に複数の点が尺度上に置かれることになる（ことが多い）ためである。

このように「が」そのものにも比較の解釈を受ける素地があったものと思われるが、「のほう」が用いられることによって、比較であることが明示されるものと考える。これは、「ほ

[3] “比較”と“恒常的な状態”のどちらが優勢か、もしくはそれらの関係はどうかという点については興味を持っているが、本調査からは両者の関係は判断できなかった。まず、「のほう」を用いた場合に“比較”がより効いているという結果が出るのは当然のように思われるので、この場合は議論から除かなければならない。そこで、「が」のみの場合について“比較”に反応している人が多いか、“恒常的な状態”に反応している人が多いか比べてみた。しかし、そもそも「が」のみのいずれかの例文について「a. 言える」「b. 違和感はあるが、どちらかというと言える」のどちらかを回答した人が 24 名しかいなかった。このうち、“比較”と“恒常的な状態”の片方だけに反応している人は 6 名で、3 名ずつがそれぞれに反応していた。そのため、今回の調査結果からはなんとも言えない、という状況である。ただ、すくなくとも“比較”だけに反応している人もいるということは言える。

う」が方向を意味するためである。1 つの方向は必然的に他の方向の存在を含意するため、「のほう」がついたものとは別のものの存在が含意される。したがって、意味的な尺度上の点について考えた場合、「のほう」は別の点の存在を含意することになる。これが比較専用の標示として再解釈された結果、格関係や意味役割に関わりなく比較であれば使用可能な表現として使用している人もいるという状況なのではないかと、本発表では本調査の結果を解釈する[4]。

なお、南琉球宮古語諸方言において、属性的な概念を意味する語根から派生されたある種の形容詞や動詞が項焦点の場合に用いられ、比較の意味にも解釈されることが知られている（Koloskova and Ohori 2008、陶 2022）[5]。

5. 比較という概念が分析に有用なケース

本節では、これまで述べてきた比較という概念が他の日本語諸方言の現象の分析にも有用であることを述べる。福岡県柳川市方言の=*ga*、長崎県藪路木島（やぶろきしま）方言の「が」と「の」、和歌山方言の「しか」、西日本方言の「のが」の 4 つを取り上げる。

5.1. 福岡県柳川市方言の=*ga*

福岡県柳川市方言の焦点助詞=*ga* は比較の際に用いられる（松岡 2024: 190, 386-8）[6]。例の下線は発表者が追加した。

（5）　*taroozja naka. {zirooni/ *zirooniga} kuraserareta.*
「太郎じゃなくて次郎に殴られた。」

（6）　*taroonimo zirooniimo kuraserareta batten {zirooni/ zirooniga} yoo kuraserareta.*
「太郎にも次郎にも殴られたけど、次郎の方によく殴られた。」

このように比較の場合には焦点助詞=*ga* が使用される。したがって、柳川市方言の記述の際には比較という概念が必要である。

---

[4] どのような述語が尺度を持つかという点も関係があるように思うが、この点については今後の課題としたい。

[5] Jacques（2016）では「in comparative constructions, the comparee is more often the focus than the standard.」と述べられている。comparee などの要素については後述する。また、ニジェール・コンゴ語族の Jamsay では、比較の意味を持つ形容詞述語文、もしくは項焦点の形容詞述語文の場合、述部（すなわち形容詞）が脱焦点の音調（L-tone）で実現し、さらに、比較や焦点でない場合には現れる疑似動詞とそれに後接する主語標示の代名詞接尾辞が生じず、独立した代名詞として主語が形容詞より前に現れなければならない（Heath 2008: 432-3, 445）。ただし、このケースは、比較の意味を持たなくてもこのような特徴が生じるようである（Heath 2008: 433）。したがって、宮古語と同様に形容詞述語文主語の焦点化と比較解釈の親和性を示す例ではあるが、比較のみによって当該の特徴が現れるわけではない点において、5 節で扱う日本語諸方言の形式とは異なる。

[6] 格助詞に「が」が続く例は標準口語、古典語、他方言にも見られる（Nakagawa 2020: 130、山田 2015、原田 2024）。なお、韓国語にも似た連続が見られる（小島ほか 2021）。

5.2. 藪路木島方言の「が」と「の」

原田（2024）によると、長崎県の藪路木島方言においては、動詞述語かつ無生物主語かつ対比焦点の場合、主語の標示には「が」と「の」（もしくは「ん」。「ん」と「の」は異形態。）のどちらもが用いられる（7）。しかし、比較の場合に用いられるのは「が」だけである（8）。

（7）　寺ん焼けたっちぇなか、学校（がっこ）｛が／ん｝焼けたつ。
「寺が燃えたんじゃない。学校が燃えたんだ。」

（8）　寺よれ学校｛が／*ん｝焼けたっちゅよ。　「寺より学校が燃えたらしい。」

さらに、対象は「ば」という助詞をとるが、対象が比較される場合「ば」と「が」の両方が使用可能になる[7]。

（9）　アキラはビールじぇのーしち、酒｛*が／ば｝飲むをる。
「アキラはビールじゃなくて、酒を飲んでいる。」

（10）　アキラはビールよれ酒｛が／ば｝よー飲む。
「アキラはビールより酒をよく飲む。」

5.3. 和歌山方言の「しか」

和歌山方言[8]における「しか」という助詞は次のように用いられる。（11-15）は 1967 年和歌山市出身の話者に対する面接調査の結果である。

（11）　アキラよりタカシしかかしこい。　「アキラよりタカシのほうがかしこい。」

（12）　日本酒よりビールしか飲むなー。　「日本酒よりビールの方を（たくさん）飲む。」

（13）　昨日より今日しか雨降ってるやん。
「昨日より今日のほうが雨が降っているじゃないか。」

いっぽう、比較の意味でない場合この「しか」は不適格と判断される。

（14）　（クラスのなかで）*タカシしか一番かしこい。
「（クラスのなかで）タカシが一番かしこい。」

（15）　（A さんは日本酒はまったく飲まないが）*ビールしか飲む。　「ビールを飲む。」

このように和歌山方言の「しか」も比較という概念を用いて説明する必要がある。

5.4. 西日本方言の「のが」

西日本方言における「のが」は次のように比較する際に用いられる[9]。発表者（1982 年福

---

[7] 柳川市方言においても話者によっては対象に=*ga* を用いる（松岡 2024: 387）。
[8] 和歌山県のどの地域で使用されているか、また、和歌山県の近隣でも使用されているかなどは分からない。今後の課題である。
[9] 本発表では「のが」は 1 形態素と考える。つまり、比較を表す助詞ととらえる。

岡市出身）の内省に基づく[10]。

（16）　福岡より佐賀のが暑い。

（17）　A さんはビールより日本酒のが飲む。

（18）　（A さんは日本酒以外飲まない）*A さんは日本酒のが飲む。

この「のが」は比較の場合にのみ使用可能である。つまり、「佐賀のが暑い」とだけ言った場合、比較の基準の存在が含意される（「え？どこと比べて？」という反応が起こる）。この「のが」は「のほうが」と同義であるように思われるが、完全に一致するわけではない。そのため、「のが」と「のほうが」を同一視することはできない。次のような違いがある。

（19）　（勤務先の飲み屋によく飲む男女が来店。「どっちがよく飲んだ？」と尋ねられて）
男｛のほうが／のが｝飲んだよ。

（20）　（1 つしかない薬を男女が奪い合っていた。「どっちが飲んだ？」と尋ねられて）
男｛のほうが／*のが｝飲んだよ。

（20）のように、「のほうが」は必ずしも比較の意味で用いられるわけではない。しかし、その文脈においては「のが」は不適格である。「のが」はもっぱら比較を表すことに特化した表現と言えそうである[11]。このように、比較という概念は諸方言の分析に有用である。

6. まとめと今後の課題

本発表では「が」の特異なふるまいを説明するために比較という概念が有用であること、また、この概念が諸方言の現象の説明においても有用であることを示してきた。今後の課題はいくつもあるが、まず言語類型論的な位置づけについて考え（6.1.）、その後その他の課題について述べる。

6.1. 言語類型論的な位置づけ

類型論的位置づけは課題である。まず前提となる Dixon（2012）の枠組みを紹介する。Dixon（2012: 343-4）は comparative scheme の典型的な構成要素として次の 5 つを挙げている。

（21）

John	is	more	handsome	than	Felix.	（Dixon 2012: 344）
COMPAREE		INDEX	PARAMETER	MARK	STANDARD	

[10] 本節の判断は 1970 年生の神戸市方言話者、1983 年生の福岡市方言話者とも一致している。なお、西日本方言話者でもこの「のが」を使用しない話者も多数いるし、東日本方言話者がこの「のが」を使用していることを聞いたこともある。話者層未詳である。

[11] 標準語の「のほうが」、柳川市方言や藪路木島方言の「が」は比較でない場合も用いることができるようであるため、必ずしも比較に特化しているとは言えない。また、和歌山方言の「しか」は述部に否定の意味が含まれる場合、標準語と同様の“限定”の解釈になる。いずれの場合もどこまでを同一の形態素として認めるかという点には議論がありそうであるが、一旦同一形態素と考えた場合、比較専用とは言い難い。

本発表で扱ってきた比較の標示をこの Dixon（2012）の枠組みでとらえてみると、COMPAREE についていることがわかる。

（22）	福岡	より	佐賀	{のが etc.}	暑い。
	STANDARD	MARK	COMPAREE		PARAMETER

以下、2 点述べる。1 点目は COMPAREE に比較の標示を行うということの位置づけ。2 点目は比較を表す文の主語につきうる標示が他の統語的要素にもつきうることについてである。

1 点目の COMPAREE に比較の標示を行うことについて述べる。COMPAREE への標示で比較を表すのは通言語的に珍しいようである（八亀 2015）。しかし、例はあるようで、たとえば、Jacques（2016）によると Japhug（シナ・チベット語族）における *ku* という能格の接語（Jacques 2021: 303-4 によると後置詞）は多くの機能を持つが、そのうちのひとつが COMPAREE を標示することのようである。*ku* は能格の標示なので通常他動詞主語につくのであるが、比較の場合、自動詞主語につき、COMPAREE を標示する（Jacques 2021: 310）。また、Donohue（1999: 360）によると Tukang Besi（オーストロネシア語族）では比較でない場合には主格をとる名詞句（23）が比較の COMPAREE の場合に斜格（24）をとる。（R は Realis の意。）

（23）	*No-motika*	*na*	*ia*.	（24）	*No-motika*	*di*	*ia*.
	3R-old	NOM	3SG		3R-old	OBL	3SG
	‘She’s old’				‘She’s older’		

このように、比較表現の COMPAREE に標示を行う言語の報告はあるものの、わずかのようである [12]。いっぽうで、シナ・チベット、オーストロネシア、日琉と、異なる語族において報告があることから、他の言語においても類例が見つかる可能性はあるように思われる。

続いて、比較を表す文の主語につきうる標示が他の統語的要素にもつきうる点について述べる。本発表で述べてきた形式は「A さんのが B さんより飲む」のように主語につくことも可能であるが、同時に、「A さんはビールのが飲む」のように、主語以外にもつくことが可能であることを指摘してきた。しかし、Dixon（2012: 344）には「It seems that the Comparee is almost always some kind of subject --（中略）-- and is marked as such.」とあり、主語以外の COMPAREE はあまり想定されていないようである [13]。

比較の類型論ではこれまで、Dixon（2012）の枠組みで言うところの STANDARD と MARK の標示が主に議論されてきた（Stassen1985: 28、Dixon 2012、風間 2018）。しかし、本発表で示したとおり COMPAREE への比較の標示も見られることから、この点に注目した研究が今後行

---

[12] 『東京外国語大学語学研究所論集』23 号「否定、形容詞と連体修飾複文」特集に収録されている 24 言語のなかにも COMPAREE に特別の標示を行う言語は見当たらなかった。ただし、この特集も含めて、提示される例文の問題や、類型論的研究が扱う“その言語で優先的に使用される”形式の選定の問題のために COMPAREE が主題標示、主語標示されるケースがこれまでに多く取り上げられてきたのではないかと思われる。

[13] まったく想定されていないわけではない。*John speaks French better than Felix (speaks French)*という場合の COMPAREE は *John speaks French* とされている（Dixon 2012: 366）。

われてもいいはずである[14]。

6.2 その他の今後の課題

上述のもの以外にも課題は山積している。たとえば、「どのような述語（もしくは節）が尺度を持つか」という点は大きな課題である。本来はこの点を整理しておかないと、本研究の範囲が定まらないはずである。意味の記述の厳密性も欠けている。また、「が」の研究のなかでの本研究の位置づけも不明確なままである。「が」は統語上かつ情報構造上の標示と捉えることが提案されてきた（下地 2019: 11）が、さらに広い視点から捉えることが求められるように思われる。

参考文献　風間伸次郎（2018）「まえがき」『東京外国語大学語学研究所論集』23, 17-37.／久野暲（1973）『日本文法研究』大修館書店／小磯花絵・天谷晴香・居關友里子・臼田泰如・柏野和佳子・川端良子・田中弥生・伝康晴・西川賢哉・渡邊友香（2023）「『日本語日常会話コーパス』設計と特徴」『国立国語研究所論集』24, 153-168.／小島大輝・斉藤信浩・大和祐子（2021）「韓国語の助詞の結合形態「에가」に対する許容度の検証」『朝鮮学報』257, 77-97.／下地理則（2019）「現代日本共通語（口語）における主語の格標示と分裂自動詞性」竹内史郎・下地理則（編）『日本語の格標示と分裂自動詞性』1-36.／陶天龍（2022）「宮古語久松方言における形容詞の動詞化接辞-kar－焦点助詞との共起と総記用法に注目して―」『言語・地域文化研究』28, 197-213.／野田尚史（1996）『「は」と「が」』くろしお出版／原田走一郎（2024）「長崎県藪路木島方言における「が」と「の」―無生物主語の場合―」『方言の研究』10, 29-51.／松岡葵（2024）『福岡県柳川市方言の記述研究』九州大学博士論文／八亀裕美（2015）「現代日本語における「比較」へのアプローチ」『甲南大學紀要文学編』164, 13-22.／山田昌裕（2015）「副助詞「ガ」の存在―「カラガ」「テカラガ」を中心に―」『恵泉女学園大学紀要』27, 107-125.／Dixon, R. M. W.（2012）*Basic Linguistic Theory volume 3.* Oxford University Press.／Donohue, Mark（1999）*A Grammar of Tukang Besi.* Mouton de Gruyter.／Heath, Jeffery（2008）*A Grammar of Jamsay.* Mouton de Gruyter.／Jacques, Guillaume（2016）From ergative to comparee marker Multiple reanalyses and polyfunctionality. *Diachronica* 33 (1), 1-30.／Jacques, Guillaume（2021）*A grammar of Japhug.* Language Science Press.／Koloskova, Yulia and Toshio Ohori（2008）Pragmatic factors in the development of a switch-adjective language. A case study of the Miyako-Hirara dialect of Ryukyuan. *Studies in Language* 32 (3), 610-636.／Nakagawa, Natsuko（2020）*Information structure in spoken Japanese.* Language Science Press.／Stassen, Leon（1985）*Comparison and Universal Grammar.* Blackwell.／Stassen, Leon（2013）Comparative Constructions. In Dryer, Matthew S. & Haspelmath, Martin (eds.) WALS Online (v2020.3) [Data set]. Zenodo. https://doi.org/10.5281/zenodo.7385533 (Available online at http://wals.info/chapter/121, Accessed on 2024-05-25.)／Zeisler, Bettina（2018）Contrast instead of comparison: Evidence from West Tibetan differentiating property ascriptions. *Linguistic Discovery* 16 (1), 184-217.

謝辞　古川初義、野田智子、堀江直美、松丸真大、白岩広行、平塚雄亮、松岡葵、宮岡大の各氏に調査等でお世話になりました。心よりお礼を申し上げます。本研究は科研費 24K03928、24K03926、22H00007、22K00583、19H01255、19H01262 の結果である。

---

[14] 風間（2018）には「エウェン語およびナーナイ語の形式は必須のものではなく、本来指大辞や選別形「～の方」、「やや～だ」のような意味を示す」とあり、「～の方」を意味する要素がなんらかの比較の標示の由来になっているようである。

佐賀西部方言の条件節の時制とモダリティ

有田節子（立命館大学）

1. はじめに

時制の対立のある節を導く３つの条件形式（ギー、ナイ（バ）、トヤギ）を持つ佐賀西部方言（佐賀県南部の旧佐賀藩域の西部）において、ギー節では時制形式のアスペクト的性質が顕在化し、ナイ（バ）・トヤギ節ではテンス的性質が顕在化することを示す。

2. アスペクト的性質とテンス的性質

2-1　日本語の時制形式と時間解釈（有田 2019）

時制：事象を時間的に位置づける文法範疇

タ形：－タ *(-ta, -da* という異形態を含む）という屈折接尾辞。

基本形：動詞文では *-u* または *-ru*、形容詞文では *-i*、形容動詞文、名詞文では *-da, -dearu* という屈折接尾辞。

A）時制形態素の選択：　a, タ形: 事象時<基準時　　b. 基本形: 事象時≧基準時

B）発話時を基準にした時間解釈は発話時と基準時との時間的先後関係による。

2-2　アスペクト的性質とテンス的性質

C）状態性述語の基本形の時間解釈：事象時＝基準時（＝発話時の場合、現在時）
　動作性述語の基本形の時間解釈：事象時＞基準時（＝発話時の場合、未来時）

◊　動作性述語の基本形が現在時を指す場合の解釈は語彙的アスペクト[1]に依存する。

(1)「わたし、こういうところに泊ってみたかったんです」霧子は海に面した窓を開き、紺碧の地中海に向かって大きく息を吸う。(「化身」)[2]〈活動動詞〉動きの持続

(2) 大学の正門へ折れる、いつもの交差点だ。ぼくは必死でペダルを漕ぎ、信号の真下に止まる。(「どこにもない短編集」)〈到達動詞〉開始時／終結時

(3) 彼は帰り支度にかかる。持ち帰る書類を茶色の革鞄に入れ、スーツの上着を着る。(「アフターダーク」)〈達成動詞〉開始時／過程／終結時

D）動作性述語の基本形の「未来」解釈は、語彙的アスペクトに依存しない。

(4) a. あ、荷物が落ちる。(現在時の延長)
　b. この電車はまもなく東京駅に到着します。(時刻表)
　c. 田中さんは来年退職する。(定年退職の規程)
　d. もうすぐ友人が来る。(約束)
　e. 来週の金曜日は出張で東京に行きます。(出張計画)
　〈根拠に基づく確定的未来〉

(5) a. そんなに使うと、そのうちなくなるよ。
　b. たぶん、今日の試合は日本が勝つ。
　c. 心配しなくても、きっと見つかる。
　〈推定〉

---

[1] Vendler (1957)で定義された「活動動詞」「到達動詞」「達成動詞」「状態動詞」の４分類に従う。

[2] 出典記載の例文は『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ)より抽出した。

(6) a. もう部活やめる。　b. 明日、彼に会いに行く。　〈意志〉

E)　タ形の時間解釈[3]

動作性述語のタ形: 事象時<基準時　（＝発話時の場合、過去時の解釈）

F)　タ形の「近い過去」は動詞の語彙アスペクトに依る解釈である

(7) a. あ、一塁ランナー走りました!.....盗塁成功です。〈活動動詞〉開始局面直後

b. 「やっと起きたね」下から大きな信行の声がした。（鈴木 1979: 48）〈到達動詞〉変化の局面直後

c. ラフに入れても、グリーンを外しても耐えてパーをセーブ。バーディーは９番で４メートルを沈め、折り返して４つ。首位の川岸がスコアを落とし、とうとう並んだ。予選ラウンドは七十三、七十。安定しているように見える３日間を「相当こらえてる」。（産経新聞, 2005 年）〈達成動詞〉変化の達成局面直後

G)　タ形の「現在と切り離された過去」は動詞の語彙的アスペクトに依らない解釈である。

(8)昨日は、{映画を観た/正午に起きた/和服を着た}。（現在と切り離された）過去

表１　基本形・タ形の２種類の解釈とモダリティ

	動詞の語彙的アスペクトに依存	動詞の語彙的アスペクトに依存しない
基本形	発話時を含む幅のある現在	確定的未来（⇨推定・意志）
タ形	発話時につながる過去	現在と切り離された過去

3.日本語条件節の時制節性と条件文の用法分類

◆　日本語標準語の基本条件形式（「なら」「たら」「と」「ば」）のうち、「なら」のみ時制形式の対立がある。表１の２種類の解釈がナラ節の基本形・タ形に認められるか？

3-1 既定性と話し手の事実認識による分類

H)　既定性（有田 2017）

ある文に表される事象の事象時と発話時が次のような関係にある場合に、その文は当該事象の成立が発話時において決定している、すなわち、「既定性」を持つ:

事象時<発話時　または　事象時=発話時

(9) a. 昨日、映画を見た。　b. 昨日は天気が悪かった。　c. 今忙しい。

I)　発話時＜事象時であっても、〈発話時においてその成立が見込まれる〉場合も、「既定性」を持つ。

(10) a. 次のバスは 10 分後に来る。〈時刻表〉　b. 来週東京に出張する。〈出張計画〉

c. もう 6 時だから、そろそろ帰ってくる。〈日常〉

J)　発話時＜事象時で、発話時においてその成立が見込まれていない以下の下線部分は、既定性は持たない。

(11) a. もっとまじめに取り組むべきだ。　b. この荷物を運んでください。

---

[3] タ形に現在と切り離された過去の用法と、現在と結びついた近い過去の用法の２つを認めることは研究者間に大きな隔たりはないものの、それをタ形の２つの意味とするかどうかで考え方が異なる（井上 2011）。

K） 条件節事態（前件）の既定性と条件文の用法分類

表 2　既定性と話し手の事実認識による分類

	予測的条件文	認識的条件文	反事実的条件文	総称的条件文	事実的条件文
既定性	非既定的	既定的	既定的		
話し手の事実認識		知らない	知っている		

(12) 明日雨が｛降ったら／降れば｝、試合は中止になるだろう。
〈非既定的〉　予測的条件文

(13) 今からお菓子を食べるのは、危険ですか？（中略）これから寝るなら体脂肪になる危険はあります。夜通しはたらく[4]ならだいじょうぶでしょう。(Yahoo!知恵袋, 2005 年)
〈非既定的〉　予測的条件文

(14) 頑固で融通のきかない性格を、改めるように心がけましょう。なかなかむずかしいことだけど、努力家のあなたなら、きっとできるはずです。さらに、協調性も身につけたなら、怖いものナシとなるでしょう。(『With』講談社, 2001 年)〈非既定的〉予測的条件文

(15)あー、ここでも相当降ってるな。あっちも同じぐらい｛降っているんなら／降っていれば／降っていたら｝、試合は中止になるだろう。〈既定的〉　認識的条件文

(16) 午後８時に羽田を発つなら、６時には着いていたほうがいい。
確定的未来　〈既定的〉　認識的条件文

(17) 明日出張するなら、戻りがいつになるか教えてくれ。
発話時における推定・意志・予定　〈既定的〉　認識的条件文

L） 前件に対する話し手の事実認識

a-1　非既定的なことは誰にも知り得ない

a-2　既定的なことは知りうる→知っている／知らない

(18) あのとき、もっと気をつけていたなら、転ばずにすんだのに。
〈既定的〉反事実的条件文

M） ナラ節の時制形式のアスペクト的性質とテンス的性質

基本形＋ナラ　アスペクト的性質　テンス的性質（⇨推定・意志）

タ形＋ナラ　アスペクト的性質　テンス的性質

予測的／反事実的条件文の前件　認識的条件文の前件

◆　総称的条件文と事実的条件文をどう扱うか、問題になる。

4. 佐賀方言の条件節の時制

4-1 佐賀県の方言

四区画案（小野 1983, 藤田 2003）

---

[4] 「寝る（つもり）なら」「働く（つもり）なら」のように意志が含まれる解釈の場合は認識的条件文に分類される。

南部の旧佐賀藩域（東部・**西部**）・北部の旧唐津藩域・東部の旧対馬藩域

「佐賀西部方言」

◊　国立国語研究所(編)『方言文法全国地図』(GAJ)の条件表現が確認できる 19 図において、方言条件形式「ギー」の使用が確認できるのは旧佐賀藩域のみ。

4-2 佐賀西部方言の条件形式と時制形式の対立

表 3

標準語の基本条件形式	佐賀西部方言の条件形式	時制形式の対立
ナラ	ギー、（ト）ナイ（バ)、トヤギ	時制形式の対立あり
バ、タラ、ト	（タラ、トキャー）	時制形式の対立なし

◆　佐賀西部方言の 2 種類の時制の対立のある条件節において、それぞれの節の時制形式の機能に違いはあるのか。あるとすれば、それはどのような違いか。[5]

4-3 佐賀西部方言条件節におけるタ形

タ形＋ギ：**事実的条件文**、反事実的条件文（→完了アスペクト形式**-tor** が必要）

(19)ソッケー　イッタギー、カイノ　モー　オワットッタモンネ。

（そこへいったら、会はもうおわっていた。）

(20)エキマエバ　アルキヨッタギー　チューガクノ　トキノ　ドーキューセーニ　オータバイ。(駅前を歩いていたら、中学の時の同級生に会った。)

(21)チャント　ジュンビ　シ**トッ**タギー、イマ　アセランデ　ヨカッタトニ。

（ちゃんと準備していたら、いまあせらなくいいのに。）

(22)　アシモトヲ　ミ**トッ**タギー　コロバンヤッタトニ。

（足下を見ていたらころばなかったのに。）

タ形＋（ト）ナイ（バ）／トヤギ：認識的条件文、反事実的条件文（-tor）

(23)モシカッタ｛トナイバ／トヤギ｝、フタツメノ　キンメダルヤンネ

（もし勝ったのなら二つ目の金メダルだね。）

(24)アシモトヲ　ミ**トッ**タ｛（ト）ナイバ/トヤギ｝　コロバンヤッタトニ。

4-4 佐賀西部方言条件節における基本形

基本形＋ギ　予測的条件文、**総称的条件文**、**事実的条件文**、反事実的条件文（-tor-が必要）（認識的条件文）

(25)アメノ　フッギー　ウンドーカイワ　ナカロ

（雨が降れば運動会はないだろう）

(26)アンヒトノ　イエニ　イクギー　イツデン　ゴチソー　シテクルイヨネ

（あの人の家にいくといつでもご馳走してくれる）

(27)　トーチャンワ　アサ　ロクジニ　オキーギ　サンポニ　イクモンネ

---

[5]佐賀西部方言のデータは、武雄市山内町出身の 70 代男性に行った 3 回の面接調査（2023.9, 2024.6, 2024.9）による。

（父さんは、あさ、（たまたま）６時に起きれば散歩に行く。）

(28) ソイワ　ミセニ {a. **ハイッギー** b. *ハイッタギー} レジニ マッスグ イカイタバイ。

（そいつは、店にはいると、レジにまっすぐ行った。）

(29)チャント ジュンビ シトッギ、イマ アセランデ ヨカッタトニ。

(ちゃんと準備していたら、いまあせらなくいいのに。)

(30)（山本さんが来るらしいよ）ヤマモトサンガ クッギー オイモ イコーカナ

（山本さんが来るなら、わたしも行こうかな）

基本形＋（ト）ナイ（バ）／トヤギ　認識的条件文

(31)（山本さんが来るらしいよ）ヤマモトサンガ クッ{トナイバ /トヤギ} オイモ イコーカナ[6]

(32) ウンテン{スットナイバ/スットヤギ} サケバ ノムギイカンゾ。

（運転する**（つもり）**なら酒を飲んだらだめだぞ。）

4-5　分析

事実的条件文のギー節

N)　同一主体の連続動作((28))の場合、タ形ではなく基本形が現れる。

✧　ギー節の動作動詞の基本形を基準時よりも後とすると、基準時を発話時としても、基準時を主節事象時としても、(28a)が過去時で主節事象よりも前という解釈は出てこない。「はいる」の持つ「主体の**位置変化を表す**」という意味に着目し、(28a)の基本形が、動詞の**語彙的アスペクトに依存して、**その**変化の局面が基準時に成立する**というふうに**解釈**されるとすると、基準時が主節事象時と同時の場合、適切な時間解釈が得られる。

O)　ギー節と主節の主体が異なる場合、タ形が現れる。

✧　(19)のギー節のタ形は基準時よりも前である。(19)の「行く」の**「主体の位置変化を表す」というアスペクト的意味**に着目すると、(19)の「行った」は、**基準時より前の変化の事象の結果状態が基準時にある**という**アスペクト的性質が顕在化**した解釈として捉えられる。

総称的条件文のギー節

P)　総称的条件文には基本形が現れる。法則的な関係と習慣的な関係があるが、(27)はギー節事態が「たまたま」成立した場合には主節事態が成り立つという関係を表している。**習慣的な行為を表しているのではない。**

✧　習慣的行為の場合は、ギーではなくテ形を使う。cf.トーチャン　**マイアサ**　ロクジニ　オキテ　サンポニ　イクモンネ。

反事実的条件文のギー節、（ト）ナイ（バ）節、トヤギ節

Q)　動作性述語の場合は完了アスペクト形式「トル」を伴う必要がある。(21)と(39)に見ら

[6] 調査協力者によると、「クットナイバ」「クットヤギ」に比べ、「クッギー」の方がより率直に話し手の「行く」という気持ちが表されているとのことである。

れるように、時制形式としての基本形・タ形の対立は中和している。「(ト) ナイ (バ)」、トヤギも「トル」＋タ形（「トッタ」）に後続するが、ギーの方が優先的に選ばれる。

認識的条件文のギー節、（ト）ナイ（バ）節、トヤギ節

R) 基本形＋ギーは、(33)のような未来の推定を表す用法がある。

S) 一方、(36)のような意志を表す用法は、基本形＋ギーにはなく、基本形{(ト) ナイ (バ)／トヤギ} にはある。

表 4　佐賀西部方言の条件節時制の機能

	時制形式	テンス／アスペクト		モダリティ
（ト）ナイ（バ）節・トヤギ節	基本形	テンス的		推定、意志
	タ形			推定
ギー節	基本形	アスペクト的	テンス的	推定
	タ形	アスペクト的		

5　ギー節と限定の意味

◆ ギーは限定の意味を表す「ぎり」が起源とされる（藤田 2003)。表 4 のような時制形式のテンス・アスペクト・モダリティ的性質は限定の意味に関係するのか。

「限り」節の条件用法（中山 1997、北澤 2001, 川島 2022, 岩田 2024 など）とギー節について、時制形式の機能を比較し、考察する。

5-1　「限り」節の条件用法

「限り」節の条件用法は、「限り」節の事態の事象時が発話時よりも前の**用法 A**（「既定的」（中山 1997)）と、それ以外の**用法 B**（「予定的」および「仮定的」（中山 1997)）に分けられている。

(33)「概要」を{見た/見る} 限り，あまり説得力はない。　用法 A　**タ形が現れうる**

(34)お金が続く限り，太郎は切手を{集める・集めた}。　用法 B

(35)洋子が来ない限り，パーティは成功しない．用法 B

T) 用法 A に現れるタ形は常に発話時より前の解釈になる一方、基本形は基準時（＝主節の事象時）と同時で、基準時と発話時の時間的先後関係により、発話時より前の解釈にも発話時以後の解釈にもなる。

(36) 従って離婚の届出が両当事者の真意に基づいてなされた限り，法律上は婚姻を解消し，あとは内縁関係が残ると解すべきだろう」と述べた。(宮崎幹朗『婚姻成立過程の研究』)

(37) 村上新八郎は、死ぬ時と場所を探していたのかも知れない…。左近は善國寺の境内を出た。お静と新八郎死体を残して…。新八郎が死んだ限り、お静が身体を売って金を稼ぐ必要はなくなった。(藤井邦夫『愛染夢想剣』)

U) 「限り」節が否定の「ない」を含む場合((39))、「ない」は専ら命題否定解釈になり、述語否定解釈は抑制される。

(35)'[洋子が来]ない限り　[[パーティ成功し]ない]

◊ 主節に否定的なニュアンス、すなわち、「パーティが成功しないのは望ましくない」と

いう含みがある。[7]

5-2　ギー節と「限り」節の条件用法の時制形式の比較

V)　ギー節の基本形と「限り」節の基本形は、共に、基準時と同時で、基準時と発話時の時間的先後関係により、発話時よりも前の解釈にも発話時以後の解釈にもなる。

〈アスペクト的性質が顕在化〉

W)　基本形が「推定」の含みをもつことがある。

X)　ギー節のタ形と「限り」節のタ形は、ともに発話時よりも前に解釈されるという点では共通する。

✧　事実的条件節に現れるタ形＋ギーは、**基準時より前の変化の事象の結果状態が基準時にある**という解釈。**〈アスペクト的性質が顕在化〉**

✧　「限り」節の用法Ａのタ形は、**現在と切り離された過去**として捉えられる。**〈テンス的性質が顕在化〉**

5-3　ギー条件文とカギー（「限り」）の条件用法の主節のモダリティ

発話の時点の話者の持つ信念からなる集合を「K」、前件を「p」、後件を「q」とし、信念Kにpが仮定的に加えられる際に、pと矛盾しないように調整された信念を「K*」とする。（有田 2017:3）

条件文：　K　⇨　K*, p ⇨ K*, p→q

条件節の意味を「主節のモダリティが作用する領域を限定する」とする立場をとる(Kratzer 1986)。明示的なモダリティ形式がない場合も音形に現れないモダリティ（∅）を仮定する。

(36) 雨が降れば［試合が中止される］だろう／∅。

（以後、矢印は省略）

Y)　条件節としてのギー節は主節のモダリティの作用域を限定する。

(37)アメノ　フッギ　ウンドーカイワ　ナカ　ロ／∅

◊　事実的条件文は、発話時以前のある時点（「-t」とする）における信念（「K_{-t}」）に前件pが仮定的に追加されたものとして捉える。K_{-t} ⇨ K_{-t}*, p ⇨ K_{-t}*, p→q　（有田 2017:15）

(38) ソッケー　イッタギ　カイノ　モー　オワットッタ　∅

◆　「限り」節も主節のモダリティの作用域を限定する働きを持つのか？

(39) オカネノ　ツヅクギー　キッテノ　アツム　∅

(40) オカネノ　ツヅクカギー　キッテノ　アツム　∅

✧　(39)と比べ(40)の方が「集める」**意志を強く表す**。

(41)ケーヤクショバ　ダサンギー　ココニワ　スマレンバイ

(42)ケーヤクショバ　ダサンカギー　アンタワ　スマセンヨ

✧　どちらも、後件が成立することが望ましくないことが表されるが、(42)の方が、

[7] 「ない」を述語否定のように解釈すると、(35)は用法Ａ（既定的）に分類される。

「契約書を出す」ことに対するより**強い必要性**が表される。

6　おわりに

◊　時制の対立のある節を導く 3 つの条件形式（ギー、（ト）ナイ（バ）、トヤギ）を持つ佐賀西部方言では、基本的には、ギーの節の時制形式はアスペクト的性質が顕在化し、（ト）ナイ（バ）節、トヤギ節の時制形式はテンス的性質が顕在化することを示した。

◊　ギー節の時制形式のうち、基本形のアスペクト的性質は、範囲・限定を意味する「限り」節と共通する。一方、タ形は、ギー節ではアスペクト的性質が顕在化するのに対し、「限り」節では必ずしもそうではない。これは、ギー節が主節のモダリティの作用する領域を限定するという（仮定）条件節の機能を担っている一方で、「限り」節がそのような機能を担っているわけではないことに起因すると考えられる。

◊　佐賀西部方言におけるカギー（「限り」）節とギー節の比較については機会を改めて論じる。

謝辞　本研究は JSPS 科研費 19H01262 を受けて行った研究成果の一部である。

引用文献

有田節子(2017)「日本語の条件文分類と認識的条件文の位置づけ」有田節子編『日本語条件文の諸相：―地理的変異と歴史的変遷―』pp.3-32. くろしお出版.

有田節子(2019)「スル・シタ・シテイルの意味をめぐる 3 つの問い」　庵功雄・田川拓海編『日本語のテンス・アスペクト研究を問い直す　第 1 巻「する」の世界』, pp. 25-52. ひつじ書房.

有田節子(2024)「日本語条件節の時制とモダリティ」中部日本・日本語学研究会（2024.7.27 名古屋工業大学）

井上優(2011)「動的述語のシタの二義性について」『国立国語研究所論集』1-1, 21-34.

岩田美穂(2024)「形式名詞カギリの用法ー条件解釈を中心にー」京都日本語学研究会（2024.9.5　立命館大学）

小野志真男(1983)「佐賀県の方言」『講座方言学 9 九州地方の方言』国書刊行会

川島拓馬(2020)「現代日本語における「限り」の意味・用法」文藝言語研究, 78, 25-47.

北澤尚(2001)「条件表現形式「限り」の文法記述」『東京学芸大学紀要・第 2 部』52, 37-45.

鈴木重幸（1979)「現代日本語の動詞のテンス―終止的な述語につかわれた完成相の叙述法断定のばあい」（鈴木重幸（1996)『形態論・序説』pp.107–158. むぎ書房に所収

藤田勝良編(2003)『日本のことばシリーズ 41　佐賀県のことば』明治書院.

三井はるみ(2011)「九州西北部方言の順接仮定条件形式「ギー」の用法と地理的分布」『國學院雑誌』112 (12)

中山英治（1997)「「限り」とその周辺」『国語学会平成 9 年度春季大会要旨集』pp.47-54.

Kratzer, A. (1977). What “must” and “can” must and can mean. *Linguistics and Philosophy*, 1(1), 337–355.

Vendler, Zeno (1957) Verbs and Times. *The Philosophical Review*, Vol. 66, No. 2, 143-160.

日本語諸方言と韓国語の過去表現のムード的用法

高田 祥司（秀明大学）
shoji.takata@nifty.com

１．はじめに

日本語東北方言では、過去表現として「～タ」の他に「～タッタ」や「～ケ」が用いられる。標準語については、「～た」が〈過去〉〈完了〉といった時間的意味以外に、種々のムード的意味を表す現象が「ムードの『た』」として広く研究されてきたが、東北方言の各形式も同種の用法を持つ。高田(2021)では、特に岩手県遠野方言について、次のような現象を取り上げて論じた。

(1) コノ俳優、弟、{イダ／イダッタ／イルッケ}[1]。

<a> そのことを以前聞いていて思い出した場合―**〈想起〉**…三形式とも使用可
<b> そのことを今まで知らず初めて聞いた場合―**〈発見〉**…「～タ」のみ使用可

遠野方言では、「～ケ」は「～タッタ」と同様、「～タ」が持つムード的用法の一部しか持たないが、静岡市方言では、「～ケ」が<a>,<b>の両方に用いられる。また、韓国語でも、過去表現として-ess-の他に-essess-や-te-が用いられ、基本的用法では、遠野方言の三形式とそれぞれ酷似しているが、-essess-が<a>,<b>の両方に用いられるのに対して、-te-はどちらにも用いられない。

本発表では、遠野方言と静岡市方言、韓国語の過去表現を対照し、次のようなことを考察する。

(i) 遠野方言の三形式に見られるムード的用法の違い、それと基本的用法の関係（2 節）。
(ii) 静岡市方言の「～ケ」における用法の広がり、そこから分かる意味上の特徴（3 節）。
(iii) 韓国語と遠野方言の三形式のムード的用法における異同とそれが生じる理由（4 節）。

２．遠野方言の過去表現の用法[2]

2.1. 三つのムード的用法

高田(2021)では、過去表現のムード的用法として、①**〈発見〉**、②**〈想起〉**、③**〈認識更新〉**の三つを取り上げた。これらは、標準語では「～た」が担い、用語の違いはあれど、金水(2001)、定延(2004)で扱われているものにほぼ相当する。用法の説明、及び先行研究の用語・例文（文脈の補足や下線の追加等、若干変更した）を以下に示す。本発表でも、これらの用法を対象とする。

①**〈発見〉**：発話時以前には全く認識していなかった事態を、発話時に認識。
※先行研究の用語…発見（金水 2001、定延 2004）

(2) ［探していた本をカバンの中に発見して］あ、あった。（定延 2004: 15）
(3) おや、こんな夜遅くに汁粉屋が開いてたよ。（金水 2001: 62）

②**〈想起〉**：発話時以前に認識したが不確かになった事態を、発話時に再認識。
※先行研究の用語…回想（金水 2001）、思い出し（定延 2004）

(4) 確かあなたは、関西の出身でしたね。（金水 2001: 55）
(5) ［思い出しながら］彼の電話番号はこの番号だったかなあ。（定延 2004: 35）

③**〈認識更新〉**：発話時以前に仮に認識していた事態を、発話時に正確に認識。
※先行研究の用語…関連づけ（金水 2001）、知識修正（定延 2004）

(6) ［ドリルの答え合わせをして］おや、答えは 3 番だったか。（金水 2001: 55）
(7) ［クイズ番組で司会者が解答者に］正解は C でした。（定延 2004: 41）

これらは全て、事態が発話時にも成立しており、認識がいつ行われるかによって区別される。

	認識時の現在 / 認識時の過去		
比重		〈発見〉	現在の認識時のみが存在。
		〈認識更新〉	現在の主たる認識時の他に、過去の副次的な認識時が存在。
		〈想起〉	過去の主たる認識時の他に、現在の副次的な認識時が存在。

[1] 方言文は理解の便を考えて、漢字片仮名混じりで表記。遠野方言の文を読む際、次の点に注意：(a) 母音間の/t//k/→[d][g]の有声化（母音間の/d//g/は[ˋd][ŋ]になるが、区別せず）、(b) [ai]→[ɛ(:)]の融合、(c) 助詞「は・が」「を」の不使用。
[2] 本節の遠野方言の記述は、高田(2021)の要点を以下の議論に必要な範囲でまとめたものである。例文も同論文に依る。

2.2.「～タ」と「～タッタ」の違い

東北方言の一部では、過去形として「～タ」の他に「～タッタ」が用いられる[3]。遠野方言では、両形式がムード的用法において、次のような違いを見せる。

(8) a. コンナドゴ（所）サ、ツバメノ巣、{アッタ／＊アッタッタ} ！〈発見〉
b. 確カ、アソゴノ軒先サ、ツバメノ巣、{アッタ／アッタッタ}。〈想起〉
c. ［友達の言うことを信じていなかったが、実際にそうだと分かって＝文脈 A］
アイヅノ言ウ通リ、ツバメノ巣、{アッタ／？アッタッタ}。〈認識更新〉

「～タ」が三つのムード的用法を持つのに対し、「～タッタ」は、〈想起〉の場合は用いられるが、〈発見〉の場合は用いられない。また、〈認識更新〉の場合は不自然になる。類例を挙げる。

(9) a. 三浦、中国語、{話セダ／＊話セダッタ} ノ！　知ラネガッタ。〈発見〉
b. 三浦、中国語、{話セダ／話セダッタ} ガナ。前ニ話シテラッタ気スルガ。〈想起〉
c. ［文脈 A］三浦、ホンドニ中国語、{話セダ／？話セダッタ}。〈認識更新〉

なぜ「～タッタ」のムード的用法が「～タ」に比べて制限されているかは、両形式のアスペクト・テンス的用法を見ることで理解できる。これらは、運動動詞では完成相過去の形式となる。

(10) コノ間ノ祭リノ日、浴衣、{着タ／着タッタ}。ソレデ、盆踊リ、{踊ッタ／踊ッタッタ}。

(11) 浴衣、{着タ／＃着タッタ} ノ。カワイーナ。ヨグ似合ッテラ。　＃：文脈的に不適切

「～タ」が〈過去〉の〈完成性〉［(10)］に加えて〈現在パーフェクト〉［(11)］、即ち現在と関係付けられた過去を表すのに対し、「～タッタ」はそれを表さない。ここから、「～タッタ」は〈過去〉の〈完成性〉に特化した形式で、**「現在との断絶性」**を持つと言える。両形式は、このような事態の捉え方を認識についても行うことで、ムード的意味を表していると考えられる。〈発見〉は現在の認識時のみがあり、〈認識更新〉はそれが主たる認識時であるが、現在の認識時は、厳密には発話時直前の認識時であるため、これらは現在と関係付けられた過去の認識を表すと言える。よって、〈現在パーフェクト〉を表す「～タ」はこれらを表す。対して、過去の認識時を主とする〈想起〉は、現在の認識時が副次的に存在するものの、基本的に現在と切り離された過去の認識を表すと言える。よって、〈現在パーフェクト〉を表さない「～タッタ」もこれを表す。

2.3.「～タ」と「～ケ」の違い

東北方言では、いわゆる「回想」の「ケ」が標準語より広い用法を持っている。遠野方言では、「～ケ」[4]がムード的用法において、「～タ」と次のような違いを見せる[5,6]。

(12) a. 山口、歌、{ウメガッタ／＊ウメガッケ} ノ！〈発見〉
b. 山口、確カ歌、{ウメガッタ／ウメガッケ}。〈想起〉
c. ［文脈 A］アイヅノ言ウ通リ、山口、歌、{ウメガッタ／？ウメガッケ}。〈認識更新〉

先の「～タッタ」と同様、「～ケ」は、「～タ」が持つ三用法のうち、〈想起〉の場合は用いられるが、〈発見〉の場合は用いられない。また、〈認識更新〉の場合は不自然になる。類例を挙げる。

(13) a. 早希ノ結婚相手、{医者ダッタ／＊医者ダッケ} ノ！〈発見〉
b. ソー言エバ、早希ノ結婚相手、{医者ダッタ／医者ダッケ}。〈想起〉
c. ［文脈 A］早希ノ結婚相手、ホンドニ {医者ダッタ／？医者ダッケ}。〈認識更新〉

「～ケ」のムード的用法については、その基本的な用法を見ることで理解できる。

(14) ワラス（子供）ノ頃、毎週、ソノ番組、見ダッケ（ナー）。

(15) 昨日ノ対局、羽生サン、逆転デ勝ッタッケ（ヨ）。

---

[3]『方言文法全国地図』190,196 図「いた」、197 図「行った」では、青森県東部・岩手県（旧南部藩領）、秋田県から、宮城県、山形県内陸部を経て、福島県、さらに北関東等に「～タッタ」が分布。遠野方言では動詞のみがこの形をとる。
[4] 述語の無標形に「ケ」が付いた形を「～ケ」とし、助動詞「ケ」と区別。遠野方言ではイ形容詞の場合、連用形接続。
[5]「～ケ」は動詞述語以外にも用いられるので、形容詞・名詞述語の例文を挙げるが、2.2 節で見た存在動詞・可能動詞の例文のような状況でも、「アルッケ」「話セルッケ」が「アッタッタ」「話セダッタ」と同様の振る舞いを見せる。
[6]「ウメガッタッケ」「医者ダッタッケ」という形式もある。遠野方言の「～タッケ」のムード的用法は「～ケ」と同様。

東北方言でも、「ケ」は標準語と同様、記憶を検索しながらの独り言的な発話に用いられるが［(14)］、記憶の検索が完了した事態を伝達する発話にも用いられる［(15)］。独り言的な文の「ケ」は**「思い出し」**[7]を表すが、伝達文の「ケ」の意味は次のように考えられる。記憶の検索が完了したということは、事態が確かに記憶中にあったということになる。ここから、「ケ」は伝達文では「ある事態を発話時以前に認識したこと」（以下、**「過去の認識」**）を表す。ここで言う**「認識」**は、五官を通した事態の直接知覚（主に目撃）というエビデンシャルな意味である。これは主体の人称制限（基本的に一人称不可）[8]［(16)］や歴史的事実に用いられない点［(17)］に表れている。

(16)　［先生に］｛＊俺／浩｝、グランド 10 周、走ッタッケ（ヨ）。

(17)　＊竹中半兵衛、秀吉ノ軍師サ、ナッタッケ（ヨ）。

このことから、「～ケ」のムード的用法が説明される。〈想起〉が過去の認識時を主とする一方、〈認識更新〉は現在の認識時を主とし、〈発見〉は現在の認識時のみがある。そのため、「過去の認識」を表す「～ケ」は、〈想起〉は表すが、〈認識更新〉〈発見〉は表さないのだと考えられる。

2.4. 「～タッタ」と「～ケ」の違い

以上のように、「～タッタ」と「～ケ」は、それぞれ「現在との断絶性」「過去の認識」を表すことから、共に過去の認識時の比重が大きい場合にのみ用いられるが、両者には異なる点もある。

(18)　［何となく思っていたことを確認したところ、実際にそうだと分かって＝文脈 B］
　　思ッタ通リ、ツバメノ巣、｛アッタ／アッタッタ｝。

(19)　［文脈 B］三浦、ヤッパス（やっぱり）中国語、｛話セダ／話セダッタ｝。

これらは、発話時以前に仮の認識が行われている点で〈認識更新〉の場合だと言えるが、前掲の〈認識更新〉の例文(8c),(9c)では不自然であった「～タッタ」が用いられている。前掲の場合、仮の認識が行われた時点で、事態の成立に疑いが持たれていたのに対し、これらの場合は、仮の認識が行われた時点で、漠然とではあるが、事態が成立すると考えられている。ここで、前者を**〈認識更新 A〉**、後者を**〈認識更新 B〉**と呼ぶことにすると、仮の認識が誤っていた〈認識更新 A〉より正しかった〈認識更新 B〉の方が相対的に過去の認識時の比重が大きいと見られる。「～タッタ」は、〈認識更新 A〉の場合は不自然になるが、〈認識更新 B〉の場合は問題なく用いられる。

一方、「～ケ」は〈認識更新〉の場合には、相対的な認識時の比重に関わらず、用いられない。

(20)　［文脈 B］思ッタ通リ、山口、歌、｛ウメガッタ／？ウメガッケ｝。

(21)　［文脈 B］早希ノ結婚相手、ヤッパス｛医者ダッタ／？医者ダッケ｝。

前掲の〈認識更新 A〉の例文(12c),(13c)と同様、これらの〈認識更新 B〉の例文でも、「～ケ」は不自然になる。これは、「～ケ」が「過去の認識」を表すことによると考えられる。「～タッタ」は事態成立時が過去であることを表しつつ、認識時が過去であることも表すが、「～ケ」は認識時が過去であることを表すところに本質的機能がある。そのため、相対的に過去の認識時の比重が大きいとは言え、やはり現在の認識時を主とする〈認識更新 B〉の場合に用いられないのだろう。

このような「～タッタ」「～ケ」の用法を、「～タ」と合わせて整理すると、下表のようになる。三つのムード的用法が認識時のあり方によって区別されることは、過去形が「～た」のみである標準語では直ちに見えてこないが、三形式ある遠野方言では形態的な面からはっきり示される。

PT□ST	<	=		=
PT′□ST	=	<		
形式＼ムード的用法	〈想起〉	〈認識更新 B〉	〈認識更新 A〉	〈発見〉
～タ	○	○	○	○
～タッタ	○	○	△	×
～ケ	○	△	△	×

※［PT : 主たる認識時］［PT′ : 副次的な認識時］［ST : 発話時］［< : 前者が後者に先行］［= : 前者と後者が同時］

[7] 事態が発話時に成立している場合に過去表現が表す派生的意味の〈想起〉と異なり、これは元来のムード的意味である。
[8]「徹夜シタガラ、眠ガッケ」のように、一人称主体でも知覚可能な内的状態の場合は用いられる。韓国語の-te-も同様。

３．静岡市方言との対照[9]

3.1. 静岡市方言の「～ケ」のムード的用法

静岡市方言でも、「ケ」が標準語より広い用法を持っており、独り言的な文で「思い出し」を表す場合［(22)］に加えて、伝達文で「過去の認識」を表す場合［(23)］にも用いられる。

(22)　昔、浅草ニ行ッタ時、人力車、乗ッタッケ（ナー）。

(23)　太郎ワ、プラモデル、作ッテタッケ（ヨ）。

ここから、静岡市方言の「ケ」も事態の認識に関わるムード的用法を持つが、遠野方言とは大きな違いがある。まず、形容詞述語の例を挙げる（前節の遠野方言の例文(12a)～(12c),(20)に対応）。

(24) a.　山口ワ歌ガ｛ウマカッタ／ウマイッケ[10]｝！〈発見〉

b.　山口ワ、確カ歌ガ｛ウマカッタ／ウマイッケ｝。〈想起〉

c.　アイツノ言ウ通リ、山口ワ歌ガ｛ウマカッタ／ウマイッケ｝。〈認識更新 A〉

d.　思ッタ通リ、山口ワ歌ガ｛ウマカッタ／ウマイッケ｝。〈認識更新 B〉

全ての用法で「～ケ」が用いられることが目を引く。遠野方言では、「～ケ」は〈想起〉の場合のみ用いられ、〈発見〉の場合は使用できず、〈認識更新〉の場合は A,B ともに不自然であった。対して、静岡市方言では、「～ケ」が〈想起〉だけでなく〈発見〉や〈認識更新〉の場合も問題なく用いられる[11]。名詞述語の類例を挙げる（前節の遠野方言の例文(13a)～(13c),(21)に対応）。

(25) a.　早希ノ結婚相手ワ｛医者ダッタ／医者ダッケ｝！〈発見〉

b.　ソー言エバ、早希ノ結婚相手ワ｛医者ダッタ／医者ダッケ｝。〈想起〉

c.　早希ノ結婚相手ワ、本当ニ｛医者ダッタ／医者ダッケ｝。〈認識更新 A〉

d.　早希ノ結婚相手ワ、ヤッパリ｛医者ダッタ／医者ダッケ｝。〈認識更新 B〉

以上から、次のことが言える。2 節で確認したように、〈想起〉は過去の認識時、〈認識更新〉は現在の認識時を主とし、〈発見〉は現在の認識時のみがある。遠野方言の「～ケ」は「ある事態を発話時以前に認識したこと」を表すため、〈想起〉の用法しか持たないが、静岡市方言の「～ケ」は〈認識更新〉〈発見〉の用法も持つので、「ある事態を発話時（厳密には発話直前）に認識したこと」（以下、**「現在の認識」**）も含めて、広く「ある事態を認識したこと」を表すと考えられる。

3.2. 「～ケ」の過去形としての使用

静岡市方言では、「～ケ」がテンス的用法の範囲も広げている（cf. 山口 1968）。非動的述語のテンスでは、事態成立時の他に認識時が関わるため、〈過去〉に大別して二種類の場合がある。静岡市方言の「～ケ」は両方に使用可能で、「～タ」と共に非動的述語の過去形として用いられる。

（Ⅰ）事態成立時（ET）が過去（同時に認識時（PT）も過去）。

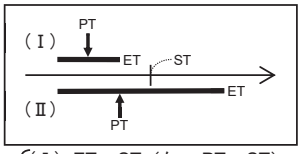
(26)　森ワ子供ノ頃、足ガ｛速カッタ／速イッケ｝。

(27)　山田ワ高校生ノ頃、学級委員｛ダッタ／ダッケ｝。

（Ⅱ）事態成立時が発話時（ST）を含み、認識時のみが過去。

(28)　コノ前競争シタケド、森ワ足ガ｛速カッタ／速イッケ｝。

(29)　コノ間話シタケド、山田ワ学級委員｛ダッタ／ダッケ｝。



（Ⅰ）ET < ST（かつ PT < ST）
（Ⅱ）ET ⊃ ST かつ PT < ST

ET ⊃ ST である(Ⅱ)の場合は、非過去形「速イ」と交替できる。遠野方言では、「速ガッケ」は「速ガッタ」と異なり、(Ⅱ)の場合は用いられるが、ET < ST である(Ⅰ)の場合は使用できない（cf. 高田 2004）。対して、静岡市方言では、「～ケ」が(Ⅰ)の場合にも用いられるが、これは ET < ST であることを表さず、あくまで PT < ST であることに注目していると考えられる。ここから、遠野方言では、ET ⊃ ST である場合にのみ、認識時に注目した過去表示が行えるが、静岡市方言では、ET < ST の場合であろうと、ET ⊃ ST の場合であろうと、それが可能だと言える。

---

[9] 静岡市方言の記述は、2024 年 8 月の臨地面接調査とその前後の通信調査に基づく。インフォーマントは 70 代女性、40 代男性、10 代女性各 1 名。「～タッケ」の用法等、話者による違いもあったが、今回扱う現象に関する違いはなし。

[10] 遠野方言では、イ形容詞の場合、「ケ」が「ウメガッケ」のように連用形に付くが、静岡市方言では終止形に付く。

[11] 山口(1968)も静岡県中部方言の「コンナトコニアッケ」という〈発見〉の例を挙げる。小林(1999)は種子島方言について、同様の例の他に「ワーモ ワラーワ スッケラー（お前も笑うんだなあ）」という〈認識更新〉に類する例を挙げる。

ここまで、静岡市方言の「～ケ」について、二つの点で認識を表す用法が広いことを見てきた[12]。

①認識時が過去と現在のどちらかに関わらず、「ある事態を認識したこと」を表し得る。 ②事態成立時が過去か発話時を含むかに関わらず、認識時が過去であることを表し得る。

山形市方言や米沢方言では、静岡市方言と同様、「～ケ」が非動的述語において(Ⅰ) ET < ST の状況でも使用できるが、ムード的用法に制限がある。遠野方言と同様、〈想起〉は表すが、〈認識更新〉〈発見〉は表さない。これらの方言では、非動的述語の過去形として専ら「～ケ」が用いられ、「～タ」は通常使用されないが、〈認識更新〉〈発見〉の場合に限って用いられる（cf. 高田 2004）。つまり、山形市方言や米沢方言の「～ケ」は、②の特徴は持つが、①の特徴は持たない。このような方言の存在から、①と②は相関する特徴ではないと考えられるが、静岡市方言は、「～ケ」が二方向に認識を表す用法を広げている点で、興味深い事例を提供してくれている。

3.3. 「～ケリ＞～ケ」の意味・用法の変遷

「ケ」の原形である古代語の過去の助動詞「ケリ」は「詠嘆」も表した。これは、ただの詠嘆ではなく、今まで気づいていなかったことに気づいた驚きを伴うものである（気づきの「けり」）。

(30) 山川に 風のかけたる しがらみは 流れもあへぬ もみぢなりけり（古今集 秋下 303）

この「～ケリ」の詠嘆、気づきの意味は「～タ」の〈発見〉の意味に類似している（上例の訳は「～紅葉であったことよ」）。「～ケリ」が〈発見〉のような意味を表したのは、「来アリ」に由来するためだろう。事態が過去から来て目の前にあるというところから、本来は「現在の認識」を表した。そこを起点として、「過去の認識」の方へ意味を広げ、〈認識更新〉や〈想起〉の用法を持つに至った。それにより、「～ケリ」は現在か過去かに関わらず「認識の成立」を表したと見られる[13]。この「～ケリ」の機能は、一般言語学で言う**「ミラティブ」**（話し手にとって意外な新情報を伝える、DeLancey 1997 等）に相当する。静岡市方言の「～ケ」も同様に、現在か過去かに関わらず「認識の成立」を表し、〈発見〉〈認識更新〉〈想起〉の全ての用法を持つ点で、「～ケリ」に近い古い段階の用法を保持していると言える。遠野方言の「～ケ」は、この段階からさらに変化を進めて、「現在の認識」を切り捨て、「過去の認識」のみを表すようになったのだろう。

この**「～ケリ＞～ケ」の変化は、「～タリ＞～タ」と並行的**に捉えられる。「～タリ」は「～テアリ」に由来し、事態が起こり結果が目の前にあるというところから、本来は「現在の状態」を表した（存続の「たり」）。そこを起点として、現在の状態をもたらした先立つ運動に重点を移すことで、〈現在〉の〈結果〉→〈現在パーフェクト〉→〈過去〉の〈完成性〉と、その意味を広げたが、現代語の「～タ」は、主節末では「現在の状態」を表さない。この事態の側面における変化と同様、「～ケリ＞～ケ」は**認識の側面における重点を現在から過去へ移した**と考えられる。

4. 韓国語との対照[14]

4.1. 韓国語の過去表現のムード的用法

韓国語にも、「～タ」に相当する-ess-だけでなく、-essess-、-te-という過去表現が存在する。

-ess-は〈過去〉の〈完成性〉[(31)] と〈現在パーフェクト〉[(32)] を表すが、-essess-は〈現在パーフェクト〉を表さない。これは、遠野方言の「～タ」と「～タッタ」の違いと同様である。

(31) Ilcen=ey nwuna=hantheyse cim=i wa-*ss*-ta/wa-*ssess*-ta.[15]
この間、お姉ちゃんから 荷物が 来タ／来タッタ。

(32) Nwuna=hantheyse cim=i wa-*ss*-ta/#wa-*ssess*-ta. Pwa, an=ey_tu-n_ke=n sakwa=ya.
お姉ちゃんから 荷物が 来タ／＃来タッタ。見て、中身は リンゴだ。

---

[12] さらに、「アリガトーッケ」のような表現も可能である。これは過去の事態に対する発話時の認識（評価）を表す。
[13] 小林(1999)は種子島方言の「ケル」の機能を、話し手の発話時における認識の成立の表示とし、「ケリ」に近いと見る。
[14] 韓国語の例文の文法性判断は鄭恩朱氏にお願いした。ただし、4.2 節の(37),(38),(40)は許(2008)の例文（表記は改変）。
[15] ハングルの転写は Yale 式ローマ字で行う。以下、遠野方言の例文は、韓国語の日本語訳を兼ねさせるために、述部のみを片仮名の方言形で（有声化は捨象）、他の部分は標準語で示し、韓国語の例文に対応する形で分かち書きする。韓国語の例文は、接辞境界を「-」、接語境界を「=」、日本語で分かたれない箇所を「_」で表し、グロスは省略する。

また、-te-も遠野方言の「ケ」と同様、独り言的な文での用法と伝達文での用法を持つ[16]。

(33) Hyeng=un nwukwu=eykey phyenci=lul sse-ss-*te*-la. ― 独り言的な文…「思い出し」
お兄ちゃんは 誰に 手紙を 書イタッケ（ナー）。

(34) Hyeng=i chinkwu=eykey phyenci=lul sse-ss-*te*-la. ― 伝達文…「過去の認識」
お兄ちゃんが 友達に 手紙を 書イタッケ（ヨ）。

このようなことから、ムード的用法でも、韓国語の-essess-、-te-は遠野方言の「～タッタ」「ケ」と類似しているのではないかと考えられるが、予想に反して、両者の間にはかなりの違いがある。

(35) a. I kakey=nun pingkwalyu=ka manh-*ass*-kwuna/manh-*assess*-kwuna/*manh-*te*-la!
この 店は アイスが 多カッタ／＊イッペアッタッタ[17]／＊多カッケ！（30 種類以上も売ってるなんて知らなかった。）〈発見〉

b. Kuleko_po-ni, i kakey=nun pingkwalyu=ka manh-*assess*-kwuna/*manh-*te*-la.
そう言えば、この 店は アイスが イッペアッタッタ／多カッケ。〈想起〉

c. ［友達の言うことを信じていなかったが、実際にそうだと分かって＝文脈 A］
Cinccalo i kakey=nun pingkwalyu=ka manh-*assess*-kwuna/*manh-*te*-la.
本当に この 店は アイスが ？イッペアッタッタ／？多カッケ。〈認識更新 A〉

d. ［何となく思っていたことを確認したところ、実際にそうだと分かって＝文脈 B］
Yeksi i kakey=nun pingkwalyu=ka ?manh-*assess*-kwuna/*manh-*te*-la.
やっぱり この 店は アイスが イッペアッタッタ／？多カッケ。〈認識更新 B〉

※manh-ass-kwuna／「多カッタ」は全ての例で使用できるので、a の〈発見〉の場合のみ提示。

①「～タッタ」は相対的に過去の認識時の比重が大きい〈想起〉〈認識更新 B〉の場合に用いられるが、-essess-は現在の認識時の比重が大きい〈認識更新 A〉や〈発見〉（後述の条件付き）の場合にも用いられる。反面、〈認識更新 B〉の場合には不自然になる。 ②「～ケ」が三つのムード的用法のうち、〈想起〉の場合に限って用いられるのに対し、-te-は〈想起〉の場合であっても用いられることはなく、いずれの用法も持たない。

類例を挙げる（先の例と同様、sengsilhay-ss-kwuna／「マジメダッタ」は〈発見〉のみ提示）。

(36) a. I salam sengsilhay-*ss*-kwuna/sengsilhay-*ssess*-kwuna/*sengsilha-*te*-la!
この 人 マジメダッタ／＊マジメニ話セタッタ／＊マジメダッケ！（知らなかった。）〈発見〉

b. Cen=ey malhay-ss-nuntey, ku salam sengsilhay-*ssess*-kwuna/*sengsilha-*te*-la.
前に 話したけど、あの 人 マジメニ話セタッタ／マジメダッケ。〈想起〉

c. ［文脈 A］I salam sil=un sengsilhay-*ssess*-kwuna/*sengsilha-*te*-la.
この 人、実は ？マジメニ話セタッタ／？マジメダッケ。〈認識更新 A〉

d. ［文脈 B］Sayngkak=taylo, i salam ?sengsilhay-*ssess*-kwuna/*sengsilha-*te*-la.
思った通り、この 人 マジメニ話セタッタ／？マジメダッケ。〈認識更新 B〉

以下、韓国語と遠野方言の形式に見られる上記①,②の違いについて、それぞれ考察を行う。

4.2. -essess-と「～タッタ」の違い

韓国語の-essess-は遠野方言の「～タッタ」と異なり、現在の認識時の比重が大きい〈認識更新 A〉の場合にも用いられる［前掲(35c),(36c)］。さらに〈発見〉の場合にも用いられるが［前掲(35a),(36a)］、これには条件がある。インフォーマントによれば、前掲(35a)で manh-ass-kwuna と manh-assess-kwuna は、「この店は、そんなにアイスの種類が多いとは思わなかったのに～」という場合なら使用できるとのことであった。この場合、話し手は種類がどの程度あるのかに関する何らかの想定を有していたことになり、前掲(35c)の〈認識更新 A〉の場合に近いと言える。

---

[16] 五官を通した知覚を表すことによる主体の人称制限（基本的に一人称不可）や、歴史的事実に用いられない点も同様。
(i) Ku ttay=ey *na/ku=nun kunye=wa iyakiha-*te*-la. その 時、＊俺／あいつは 彼女と 話シタッケ（ヨ）。
(ii) *Yupi=nun kongmyeng=ul sey_pen chacaka-ss-*te*-la. ＊劉備は 孔明を 三回 訪ネタッケ（ヨ）。

[17] 形容詞述語の「多カッタッタ」は遠野方言では用いられないので、類似の意味を表す動詞述語で代える。(36)も同様。

ただし、そこでは、話し手が種類が多いという話を疑い、誤った仮の認識を持っていたのに対し、この場合の想定は、あくまで無意識になされているという点が異なる。なお、発話時以前には、そのような無意識の想定さえなかった場合は、過去表現を含まないmanh-kwunaが用いられる。

このように〈発見〉の用法では、-essess-が条件付きで使用されるが、そもそも単純な過去形-ess-の使用にも同様の条件があることに注意すべきである。許(2008)は、日本語の「～タ」が話者の「想定していなかった」状態の発見［(37)］、「想定していた」状態の発見［(38)］、いずれの場合にも用いられるのに対して、韓国語の-ess-は、後者の場合には用いられにくいとしている。

(37) ［小学生の時に書いた日記がどこかに行ってしまった。たぶん部屋の中にあるだろうと思いながら、あまり気にしていない。数日後、引越しのため、荷物を整理していたところ、タンスの中に教科書と一緒に入っている日記を偶然見つけて］
E, ile-n kos=ey ilki=ka iss-*ess*-ney.　あ、こんな ところに 日記が あった。

(38) ［夏休みに家族連れで海外旅行に行く。現地の空港にAさんが出迎えに来ることになっている。到着ロビーに着いてAさんを探す。しばらく経って、向こうで手を振っているAさんを見つけて］
*E, iss-*ess*-ta, iss-*ess*-e.　あ、いた、いた。

この「想定していた」状態の発見の場合（前後で状態の切り替えなし）は用いられにくいという特徴は、-ess-だけでなく-essess-にも当てはまる韓国語の過去形に共通するものだと考えられる。

-essess-が現在の認識時の比重が大きい〈発見〉〈認識更新A〉も表すのは、「～タッタ」より原形に近い用法を保持しているためだと見られる。-essess-／「～タッタ」は、-e iss-ess-／「～テアッタ」（韓国語には現存。遠野方言にはないが、津軽方言にある）という“中止形＋存在動詞過去形”の構造を持つ形式が縮約したもので、元々〈過去〉の〈継続性〉を表したと考えられる（cf. 高田 2008、Song 2001）。「～タッタ」はこの用法を失っているが、-essess-は依然有する。

(39) Cengwen=uy photo=ka yellye-*ssess*-e/yellye_*iss-ess*-e.
庭の ブドウが ＊実をツケタッタ／実をツケテアッタ（津軽方言）。
※遠野方言は「ツケテラッタ」。…「ツケテイダッタ」に相当。「～テダッタ」に縮約後、[d]→[r]。

これは過去のある時点の状態を述べる文であるが、状態が発話時に成立している場合、〈発見〉を表す文になる。このことや、標準語でも「～実をつけていた！」のように「～ていた」が〈発見〉を表すことから、〈発見〉は〈過去〉の〈継続性〉を表す形式の派生的意味だと言える。-essess-は〈過去〉の〈継続性〉を表す用法を残していることで、〈発見〉を表せるのだと考えられる。

一方、〈認識更新B〉の用法では、-essess-は「～タッタ」と異なり、不自然になる［前掲(35d),(36d)］。これも〈発見〉の用法と同様、「想定していた」状態の場合には用いられにくいという韓国語の過去形の特徴に起因すると見られる。〈認識更新B〉は、仮の認識が正しかったことを発話時に認識する用法であるため、-essess-が不自然になるのだろう。-ess-はこの用法でも使用できるが、許(2008)は、一見「想定していた」状態の発見のような場合にも-ess-が用いられると述べている。

(40) ［太郎に電話しても出ない。もしかして駅前の居酒屋にいるのではないかと思い、行ってみると、太郎が一人でお酒を飲んでいる］Yeksi, iss-*ess*-ney.　やっぱり、いた。

ここでは、「もしかして駅前の居酒屋にいるのではないか」「いや、いないかもしれない」のような思いまどいにより、「想定していた」状態と発見した状態の食い違いの可能性が生じ、-ess-の許容度が上がるという。対して、-essess-は「現在との断絶性」を持つため、より強い食い違いが必要で、思いまどいがあっても、「想定していた」状態の場合は用いにくいのだと考えられる。

4.3. -te-と「～ケ」の違い

遠野方言の「～ケ」が三つのムード的用法のうち、〈想起〉のみは持つのに対し、韓国語の-te-は、これを含めていずれの用法も持たない。〈想起〉は、一度は認識したが不確かになった事態を、発話時に再認識する用法である。-te-が〈想起〉の用法を持たないのは、認識時が具体的でなければならないという使用上の条件があり、認識した事態が不確かになりにくいためだろう。

-te-は遠野方言の「～ケ」と異なり、(Ⅰ) ET < ST の状況でも「過去の認識」を表す用法で使用できるが、次のような点から、その際、認識時が具体的であることが必要だと言える。

(a) -te-が(Ⅰ)の状況で「過去の認識」を表す用法で用いられるのは、一時的状態の場合である。

(41) Cepen ilyoil=un tewe-*ss*-ta/tep-*te*-la. この間の 日曜は 暑カッタ／＊暑カッケ。

(42) Ku ai=nun elye-ss-ul ttay=nun kwiyewe-*ss*-ta/*kwiyep-*te*-la.
あの 子は 小さい 頃は カワイカッタ／＊カワイカッケ。

(b) 一時的状態であっても、遠い過去に認識した事態の場合は、-te-を使用しにくい。

(43) *10nyen cen ku nal=un tep-*te*-la. ＊10 年前の あの 日は 暑カッケ。

(c) ただし、遠い過去のことでも、認識時の状況を明確に記憶している場合、-te-が使用可能。

(44) ［大人になってから、高校時代に野球の大会で優勝した時のことを思い出して］
Ku ttay=nun cengmal kippu-*te*-la. ＊あの 時は 本当に ウレシカッケ。

〈想起〉の場合は ET ⊃ ST であるが、(Ⅰ) ET < ST の状況と同様、認識時が具体的でなければならないことで、-te-は不確かになった事態を再認識するこの用法を持たないのだと考えられる。

このように認識時が具体的なのは、-te-が本来の用法に近い特徴を保持していることによると見られる。崔(1995)によれば、中期韓国語では、-te-は過去時制において-Ø-とアスペクト的に対立する未完了相（imperfect）であったという。これは出来事の内部に視点を置き、過程の一段階を捉えるものである。崔は-te-の機能を「認識時への視点の移動」とするが、これは未完了相の機能に由来すると見られる。認識時が具体的だということは、特定の一時点に視点を移動するということであり、出来事の一段階を捉える未完了相の特徴を強く受け継いでいることになる。

５．おわりに

以上、本発表で述べたことをまとめると、次のようになる（番号は冒頭に挙げた内容に対応）。

(i) 遠野方言の「～タッタ」「～ケ」は〈想起〉等、過去の認識時の比重が大きい用法のみ持つ。
…「～タッタ」が「現在との断絶性」を持ち、「～ケ」が「過去の認識」を表すことと関係。

(ii) 静岡市方言の「～ケ」は、現在の認識時の比重が大きい〈発見〉〈認識更新〉の用法も持つ。
…認識時が現在か過去かに関わらず、「認識の成立」を表す、「～ケリ」に近い用法を保持。

(iii) 韓国語の-essess-は〈発見〉〈認識更新 A〉の用法も持ち、-te-は〈想起〉の用法も持たない。
…それぞれ〈過去〉の〈継続性〉、認識時の具体性という本来の用法に近い特徴を保持。

今後の課題は次の研究を行い、過去表現のムード的用法同士の関係を追究することである。

・諸方言におけるムード的意味の表し分けの様相（特に静岡県方言の世代差・地域差）を調査。
・韓国語以外の類似の用法を持つ形式（中国語の「來着」やトルコ語の-di, -miş 等）と対照。

参考文献

金水　敏(2001)「テンスと情報」音声文法研究会(編)『文法と音声Ⅲ』, 55-79, くろしお出版.

小林　隆(1999)「種子島方言の終助詞『ケル』」黒田成幸・中村捷(編)『ことばの核と周縁―日本語と英語の間―』, 265-286, くろしお出版.

定延利之(2004)「ムードの『た』の過去性」『国際文化学研究』, 1-68, 神戸大学国際文化学部.

高田祥司(2004)「岩手県遠野方言の非動的述語及び否定のテンス―〈過去〉の場合における『―ケ』の使用を中心に―」『日本語文法』4-2, 103-119.

高田祥司(2008)「日本語東北方言と韓国語の〈過去〉の表現について」『日本語の研究』4-4, 32-47.

高田祥司(2021)「東北方言から見る『した』とムード」『日本語のテンス・アスペクト研究を問い直す 2―「した」「している」の世界―』, 113-135, ひつじ書房.

許宰碩(2008)「日本語の『タ』のムード的意味用法について―韓国語との対照の観点から―」『日本学報』74-1, 131-142, 韓国日本学会.

山口幸洋(1968)「静岡県方言の過去表現について」『国語学』75, 63-74.

Song, Chang-sen (2001) "'-essess-'=uy hyengthay=wa uymi." *Mwunhak=kwa ene* 23, 103-120.

崔東柱 (1995) "國語 時相體系=uy 通時的 變化=ey kwanha-n 研究." Sewul 大學校 大學院 博士學位論文.

DeLancey, Scott (1997) "Mirativity: the grammatical marking of unexpected information." *Linguistic Typology* 1, 33-52.

時の内部構造と境界
――「このごろ」「最近」の類義関係――

佐藤琢三（学習院女子大学）

１．　はじめに

■「このごろ」と「最近」の類義性：
比較的近いと認識される過去から発話時に至る時間の幅

(1)　{ok このごろ／ ok 最近}、肩が凝って困っている。
(2)　「辛(つら)み」ということばが一時期、SNS 上ではやったけど、{ok このごろ／ ok 最近}はそれほど耳にしない。
(3)　{ok このごろ／ ok 最近}の暑さは、もはや尋常ではない。

・「このごろ」「最近」の対立的類義関係
・意味的特徴と文法的ふるまいの関係（連体修飾、主題、焦点）
・２つの対立的意味機能（内部構造 vs 境界）の普遍性、認知的な背景

２．　基本的な意味特徴

2.1　一回性の事態の叙述可能性

■「このごろ」:（比喩的に言うと）「金太郎飴」のイメージ
時間幅がその内部構造の全体を通し、ある特徴を有している
⇒　「このごろ」: ○状態の叙述 複数回の事態の発生　×一回性の事態
「最近」　: 制約なし（境界を示すのみ）

(4) a　{*このごろ／ ok 最近}、太郎は恋人にふられた。
b　{ok このごろ／ ok 最近}、太郎はよく女性にふられている。
c　{ok このごろ／ ok 最近}、太郎は何かと女性にもてる。
(5) a　イタリアのプーリアで、{*このごろ／ ok 最近}、G7 サミットが開かれた。
b　{ok このごろ／ ok 最近}、ニュースでよくサミットのことが報じられている。
c　{ok このごろ／ ok 最近}、G7 サミットは低調だ。
(6) a　{*このごろ／ ok 最近}、このあたりで強盗事件が発生した。
b　{ok このごろ／ ok 最近}、次々に物騒な事件が起こっている。
c　{ok このごろ／ ok 最近}、犯罪の取り締まりが厳しい。
(7) a　それは{*このごろ／ ok 最近}の出来事だ。
b　それは{ok このごろ／ ok 最近}の傾向だ。

2.2　叙述内容と話者の日常経験

■叙述内容の特徴

「このごろ」：話者の経験の及ぶ範囲　日常の出来事、雑感など

「最近」：　　特段の制約なし

(8)　{??このごろ／ ok 最近}、我々の目に見えない地中の奥深くで、大陸側と海洋側のプレートが激しくきしみ合っている。

(9) a　江戸時代半ばまでの庶民は一日二食が普通だった。庶民の歴史全体から見れば、一日三食なんて{??このごろ／ ok 最近}の傾向だ。

b　赤ん坊に男女の区別のない名前をつけるのは、{ok このごろ／ ok 最近}の傾向だ。

(10) a　{??このごろ／ ok 最近}、オゾンホールが急速に拡大している。

b　（毎日、観測を続けている研究員の発話）
{ok このごろ／ ok 最近}、オゾンホールがずいぶん大きくなってきているな。

(11)　担当者１人でキリキリ舞いしている姿に、わたしは申し訳なさと、この先の日本はどうなるんだろうという不安を強く持ちました。このごろは飲食店も同じで、働き手が急速に減っていると肌で実感しています。（2023 年 12 月 22 日）

(12)　ホームレスが販売することで彼らを支援する雑誌「ビッグイシュー」の販売員さんを、このごろ立川駅前で見かけなくなっていた。（2023 年 11 月 24 日）

(13)　マスクをしないで過ごすことが増えたこのごろ。毎日フルメイクをするようになり、新しいコスメを買いに出かけた。（2023 年 10 月 31 日）

2.3　時間軸上の位置指定の可能性

■「最近」：時の境界　⇔　「このごろ」：境界表示機能希薄

「最近」：　　発話時からの境界の遠近の程度や比較の表現可能

「このごろ」：時間軸上の精緻な位置づけを行わない

(14)　{ok このごろ／ ok 最近／*かなりこのごろ／ ok かなり最近}、このあたりでもゲリラ豪雨にみまわれるようになってきた。

(15)　専門家が指摘しているのは、{ok このごろ／ ok 最近／*もっとこのごろ／ ok もっと最近}の円高傾向についてだ。

(16)　{?このごろ／ ok 最近}までで、夏でもこれほど暑くはなかった。

(17)　{つい／さらに／より／もっと／かなり／ずいぶん}{*このごろ／ ok 最近}

(18)　もう一カ月も前のことになるので、もしかしたら前の飼い主も諦（あきら）めているかもしれないと思ったのだが、貼り紙はそんなに古い感じではなく、かなり最近貼り替えられたようだった。（1998 年 10 月 12 日）

(19)　そう思った大野芳さんは「随分昔の話ですね」と残念な気持ちを口にした。すると藤田さんは「もっと最近見た人がいる」と言い、伊藤巳之助さん（当時７５）の家に連れて行ってくれた。（2016 年 01 月 09 日）

(20)　桜島は大隈半島と陸続きなのになぜ「島」なのかというと、一九一四年に噴火したせいで陸続きになる前は島だったからだそうなのだが、スケールがでかすぎるし最近すぎる。（2017 年 09 月 04 日）

３． 文法的振る舞い

3.1 連体修飾を受ける割合

■傾向とその理由

・「このごろ」

高い頻度で連体修飾節構造の主名詞に　非制限的修飾節の補足説明

← 時間幅の内部構造を述べる　「どんな時間幅か？」が問題になる

・「最近」

連体修飾節構造の主名詞になる例は少ない(ただし、矛盾するわけではない)

← 時間幅の内部構造が問題にならず、特段の結びつきはない

☆ 2023 年 12 月 31 日現在　「このごろ」「最近」それぞれ最新 300 例[*1]
（朝日新聞クロスリサーチ）

		総数	連体修飾節主名詞
このごろ	このごろ（単独）	249	65（26.1%）
	今日このごろ	51	50（98.0%）
	計	300	115（38.3%）
最近		300	0(0 %)

表１：連体修飾節を受ける割合

・「このごろ」に対する補足説明(非制限的連体修飾節）の実例：

発話時を含む時間幅における、話者の経験、観察や、それに基づく日常の雑感

(21) 「さあ挑戦しよう」と言われても、保身を考え、二の足を踏む今日このごろ。(2023 年 12 月 27 日)

(22) 夫は８９歳。できることなら９０歳の大台まで、悲しみ、苦しみ、つらさも喜びに変えてお互いにがんばりたいと思うこのごろである。(2023 年 12 月 27 日)

(23) オートマ車が大勢を占めるこのごろ、表さんはマニュアル車。(2023 年 12 月 24 日)

(24) そんな小さな幸せを感じながら、日々を過ごしていこうと思う今日このごろだ。(2023 年 05 月 19 日)

・「最近」の実例（上記検索対象範囲外）：　特段の結びつきはないものの矛盾もしない

(25) 最後に、コロナ禍だからこそのこんなコメントも。「コロナが流行している最近は家にこもりきりで、人間関係も自然とリセットされている。コロナが収束して、人間関係の煩わしさを早く体験してみたい」(2022 年 03 月 12 日)

*1「このごろ」については、平仮名表記のものを検索対象とした。「この頃」の場合、性質の異なる「このごろ」と「このころ」の両方に対応するため。

3.2　述語名詞としての機能

3.2.1　全体の傾向

■実例の分布：　2023 年 12 月 31 日現在　最新 300 例　（朝日新聞クロスリサーチ）

「このごろだ。」OR「このごろである。」OR「このごろです。」300 件　連体修飾節のみ
「最近だ。」OR「最近である。」OR「最近です。」　300 件　分裂文優勢

		総数	分裂文焦点位置	連体修飾節主名詞(非分裂文)	その他(単独)
このごろ	このごろ(単独)	181	0(0%)	181(100%)	0(0%)
	今日このごろ	119	0(0%)	119(100%)	0(0%)
	計	300	0(0%)	300(100%)	0(0%)
最近		300	269(89.7%)	11(3.7%)	20(6.7%)

表２：名詞述語文としての機能

3.2.2　「このごろ」の名詞述語文

■「このごろ」を述語とする名詞文
・述語名詞を主題とする＜主題－解説＞構造（26a）
・主題部＜ X ハ＞が文中に現れない（26c）
　cf. 益岡(1995a)：情報付加型非限定的連体修飾節表現の＜主題－解説＞構造[*2]
・(事態の時間軸上の位置(範囲)を特定するのではなく）前提的情報として時を提示
・言語化されないが、＜連体修飾構造全体(含主名詞)の主題＞＝先行する文脈全体

(26)a　親のありがたさをしみじみと感じる$\boxed{\text{このごろ}}$だ。
　　コメント　　主題
　b　このごろは親のありがたみをしみじみと感じる。
　c *それは、親のありがたさをしみじみ感じる$\boxed{\text{このごろ}}$だ。

■「このごろ」を述語とする名詞文の実例と主名詞の主題性

(27)　私には娘はいないが、こんな風に思いやってくれるめいがいるという幸せを、つくづく思い知らされた$\boxed{\text{このごろ}}$だ。(2023 年 06 月 23 日)
(27)’ $\boxed{\text{このごろは}}$、こんな風に思いやってくれるめいがいるという幸せを、つくづく思い知らされた。

*2 益岡（1995a)は、連体節を主名詞の指示対象を限定する「限定的連体節」と限定しない「非限定的連体節」に二分したうえで、さらに後者を意味内容からすると述定として機能している「述定的装定」のタイプと、「情報付加」のタイプに分類し、情報付加のタイプの連体節において、主名詞を主題とする＜主題－解説＞構造が成り立っていることを指摘している。また、三上(1953)は主題をもつものの「は」が現れない「陰題」の文を指摘している。

(28)　このドラマをきっかけに、昔買った分厚い手話辞典を引っ張り出して、勉強しているこのごろです。(2023 年 03 月 05 日)

(28)’ このごろは、昔買った分厚い手話辞典を引っ張り出して、勉強している。

■テキストの中の機能：**「このごろ」**が前の文脈を受け前提情報として提示

(27)’’　今年の母の日。今度はかわいいオシャレなバッグが届いた。またびっくりして電話で問うと、「私にとっては『母の日』と『おばさんの日』だから」と言う。小さいころからずっと「おばさん」にかわいがってもらったからだそうだ。めいは、私の母がまだ存命のころ、たびたび大阪の実家に姉に連れられて遊びに来ていた。時には家族で集まり旅行に行ったこともある。私には娘はいないが、こんな風に思いやってくれるめいがいるという幸せを、つくづく思い知らされたこのごろだ。(2023 年 06 月 23 日)

※新聞の写真説明等に同じ構造の連体修飾構造がみられる。

(29)　【写真説明】ウクライナ中部のドニプロで２９日、ロシアの攻撃で破壊されたショッピングセンター。ウクライナ非常事態庁提供＝ロイター(2023 年 12 月 31 日)

※少数例：文末述語名詞の「最近」が連体修飾節を受けている例

(30)　「認めれば帰してやる」。誤認逮捕時にそうささやかれた際、私ならどうするか。家族の顔を思い浮かべてはそんなことを考え、「手の位置」に気を使いながら電車に揺られる最近である。(2007 年 02 月 19 日)

3.2.3　分裂文と焦点化可能性

■**「最近」**を述語とする名詞文：　多くが分裂文の焦点

「最近」：　時の境界を示し、焦点として機能しうる

←　時の特定：述語が表す動きや状態の時間軸上の位置を示す

「このごろ」：分裂文の焦点になることができない

←　時間幅の内部構造に関心。前提的情報として時を提示

時の設定：事態の叙述に必要な前提的(予備的)情報を提示

(cf. 益岡(1995b)「時の特定」「時の設定」)[*3]

(31)a　{ok このごろ／ ok 最近}、肩がこってつらい。

b　肩がこってつらいのは、{*このごろ／ ok 最近} だ。

---

*3 益岡(1995b)は、「～ときに」「～あいだに」等の格助詞を伴う時間節は、時間節の焦点化解釈が可能であり、文の格成分として述語の事態の時を特定する働きをし、他方、「～とき」「～あいだ」等の格助詞を伴わない時間節は、時間節の焦点化解釈が不可能であり、文の状況成分として事態の叙述の前提となる時を設定する働きをすると主張している。本研究の観察と照らし合わせると、格助詞を伴う時間節と伴わない時間節の関係は、「最近」と「このごろ」の関係と並行的である。

(32) a　{ok このごろ／ ok 最近}、太郎と花子が仲良くしている。
　b　太郎と花子が仲良くしているのは、{*このごろ／ ok 最近} だ。
(33) a　{ok このごろ／ ok 最近}、このあたりでよく不審者が出没している。
　b　このあたりでよく不審者が出没しているのは、{*このごろ／ ok 最近} だ。

■**「最近」**を述語とする名詞文の実例：分裂文焦点

(34)　「パソコンサポート詐欺」と呼ばれるものだと知ったのは最近だ。(2023 年 06 月 08 日)
(34)’　最近、「パソコンサポート詐欺」と呼ばれるものだと知った。
(35)　グローバルヘルスという用語が使われ始めたのは最近です。(2023 年 04 月 17 日)
(35)’　最近、グローバルヘルスという用語が使われ始めました。
(36)　(そんなウミウシを「越前ガニに続く観光の目玉に」と、) 越前町観光連盟の理事も務める三田村さんが行動を始めたのは最近だ。(2022 年 11 月 04 日)
(36)’最近、越前町観光連盟の理事も務める三田村さんが行動を始めた。

4. 他の現象との関連

■空間、時間等の領域における「全称量化」「存在量化」: 定延 (2013) (2024)

・全称量化 :「全要素がそうである」
・存在量化 :「全要素がそうでない、というわけではない」
　　「少なくとも一部の要素はそうである」　　(定延 2024 : 37)

(37) a　この海域じゅうに財宝が埋まっている。　＜全称量化＞【空間】
　b　この海域ちゅうに財宝が埋まっている。　＜存在量化＞【空間】
(38) a　８時まで家事をした。　＜全称量化＞【時間】
　b　８時までに家事をした。　＜存在量化＞【時間】
(39) a　このごろ、このあたりで痴漢がよくでる。　＜全称量化＞【時間】
　b　最近、このあたりで痴漢がでた。　＜存在量化＞【時間】

■認知操作

・集合的イメージング : 或る限定された領域を、より小さな領域の集まりでできていると捉える (定延 2013 : 341)
　全称量化 : 集合的イメージング関与 (定延 2013)
　　スキャニング表現 (定延 2024)
　存在量化 : (集合的イメージングは関与せず) 1 つの領域としてイメージされる (定延 2013)

・「このごろ」(全称量化) におけるスキャニング
　→　話者の経験の範囲のことがらのみ
　　時間幅はそのスキャニングの結果としてできる

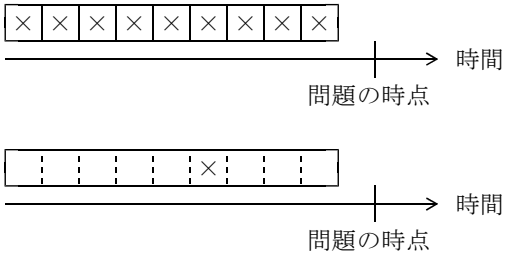


図 1　時間の全称量化（上）と存在量化（下）　（定延 2024:40 図 2）

(8)　{??このごろ／ ok 最近}、我々の目に見えない地中の奥深くで、大陸側と海洋側のプレートが激しくきしみ合っている。

(9) a　江戸時代半ばまでの庶民は一日二食が普通だった。庶民の歴史全体から見れば、一日三食なんて{??このごろ／ ok 最近}の傾向だ。

b　赤ん坊に男女の区別のない名前をつけるのは、{ok このごろ／ ok 最近}の傾向だ。

(10) a　{??このごろ／ ok 最近}、オゾンホールが急速に拡大している。

b　（毎日、観測を続けている研究員の発話）
{ok このごろ／ ok 最近}、オゾンホールがずいぶん大きくなってきているな。

５．おわりに

5.1　まとめ

(40)「**このごろ**」の意味と文法

意味的特徴

a　内部構造のあり方として、その全体を通してある特徴を有する時間幅

b　時間幅の境界に特段の関心なし

c　叙述される内容は、話者の経験（スキャニングに由来）

d　共有された前提的情報

e　時の設定：事態の叙述に必要な前提的（予備的）情報を提示

文法的特徴

f　連体修飾を受ける割合が有意に高い（時間幅の内部構造が問題）

g　連体修飾構造主要部において主題して機能（前提的情報）

h　分裂文の焦点として機能しない（内部構造に関心 前提的情報）

(41)「**最近**」の意味と文法

意味的特徴

a　時間幅を他の時間と区別する境界に基づき示す

b　内部構造が問題とならない時間幅

c　叙述される内容に制約がない

d　時の特定：述語が表す動きや状態の時間軸上の位置を示す

文法的特徴

e　分裂文の焦点位置で機能する

5.2　今後に向けて

■状況成分／格成分らしさの度合い

状況成分（時の設定）

(42) a　むかしむかし、あるところにおじいさんとおばあさんがいました。
　　b　このごろ、人のあたたかさをしみじみと感じます。
　　c　最近、つらいことが多いです。
　　d　12 月 14 日に大会が開かれました。

格成分（時の特定）

※「昨日」「明日」「来年」等：「に」を伴わないダイクティックな時の名詞
　「最近」と同じ振る舞い

(43) a　肩が凝って困っていたのは｛*このごろ／ ok 最近／ ok 昨日／ ok 先週｝です。
　　b　肩が凝って困っていた｛ok このごろ／?最近／?昨日／?先週｝です。

■その他の関連形式

・「ここ最近」：境界を示し、かつ、内部構造も問題にする

(44)　若手選手が台頭してきたのは｛*このごろ／ ok 最近／ ok ここ最近｝だ。

(45)　｛*このごろ／ ok 最近／*ここ最近｝、このあたりで事故があった。

・「ころ（頃）」の連濁：分裂文焦点位置で機能しなくなる

(46)　親のありがたみを感じているのは｛*このごろ／*近ごろ／*今ごろ／ ok このころ／ ok あのころ／ ok そのころ／ ok 最近｝です。

参考文献

定延利之（2013）「量化の意味への言語的手がかり」　木村英樹教授還暦記念論叢刊行会編『木村英樹教授還暦記念中国語文法論叢』　白帝社
定延利之（2024）『やわらかい文法』　教養検定会議
寺村秀夫（1983）「時間的限定の意味と文法機能」　渡辺実編『副用語の研究』 明治書院 pp.233-266
益岡隆志（1995a）「連体節の表現と主名詞の主題性」　益岡隆志・野田尚史・沼田善子編『日本語の主題と取り立て』pp.139-153　くろしお出版
益岡隆志（1995b）「時の特定、時の設定」　仁田義男編『複文の研究（上）』pp.149-166　くろしお出版
三上章（1953）『現代語法序説』　くろしお出版

用例出典　朝日新聞クロスリサーチ

現場調査からみる指示詞の指示領域－評価・感情によるコソアの選択－

岡﨑友子（立命館大学）

1.はじめに

指示詞コソアの指示領域（指示代名詞の直示用法）はこれまで、主として研究者の内省によって盛んに議論されてきた。また、多くはないが現場調査によるものに高橋・中村（1992）安部（2008）堤（2011）岡﨑（2011、2020）等がある。その中で岡﨑（2020）はゴキブリ等の嫌な対象の場合にはソが早く出現するのに対し、好ましい対象の場合はコの領域が広くなるとしている。これについて岡﨑（2020：12）は「「好ましくない対象／好ましい対象」という違いが、どのように指示領域に影響するか、今後、調査の方法を変えて調べる必要がある」とし、それ以上の言及はない。

そこで本発表は話し手の評価・感情に焦点をあて調査し、分析した結果を述べていく。さらに比較のため指示副詞についても調査し、分析した結果を述べる。これらの結果から指示詞コソアの選択には話者の評価・感情が様々な形で影響することを示していく。

2.先行研究

指示詞の現地調査である高橋・中村（1992）安部（2008）堤（2011）岡﨑（2011）は高橋・中村（1992）の調査法（図 1）を用いてコソアの指示領域の調査、さらに年代や地域の違いにより指示に差異があることを明らかにしている。ただし、これらの研究は被験者全体の指示の傾向を指摘するものであり、個人・指示対象の違いによる差異は観察できない。

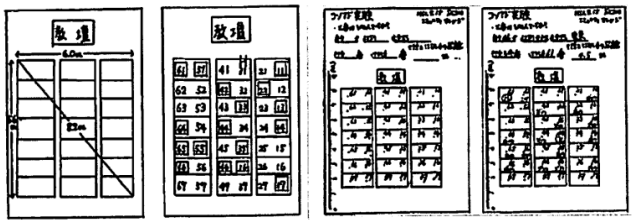
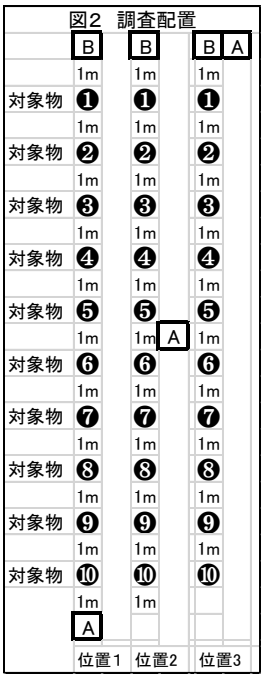


図 1　高橋・中村（1992）の調査シート

そこで、岡﨑（2020）ではそれらを明らかにするため調査法を変更し、図 2 の位置条件と 3 パターンの指示対象（指示詞の語形は 2 つ）を用いて調査を行っている。以下に調査法を示す（調査は 2019 年 3 月大学生 21-22 歳の女 9 人・男 1 人の計 10 人）。



○調査者（A）・被験者（B）の位置条件

（図 2、調査者（A）は A、被験者（B）は B、名称は一部変更）

【位置1】調査者（A）・被験者（B）は 11m離れて向かい合う

【位置2】調査者（A）・被験者（B）は 5.5m離れて向かい合う

（調査者（A）が位置❺と❻の間に立つ）

【位置3】調査者（A）・被験者（B）は並んで同じ方向をみる

○指示対象物（3 パターン）と調査文

［第 1 問］［第 3 問］は調査者（A）が指示対象の位置を被験者（B）に問いかける形、［第 2 問］は被験者（B）から調査者（A）に話しかけ、被験者（B）が指示対象の位置を教える形となっている。

[第1問]対象物は「芸能人の写真(上半身 A3)」調査者（A)「(❶～⑩の芸能人の名前）は、どの人ですか？」被験者（B)「(この・その・あの）人です。」**[第2問]対象物は「害虫等の好ましくないものの絵(A 3)」**被験者（B)「＜調査者の名前＞さん！（❶～⑩の害虫等の名前）がいます！」調査者（A)「えっ！どこですか？」被験者（B)「(ここ・そこ・あそこ）です！」**[第3問]対象物は「名札(A4)を掲げた人」**調査者（A)「(❶～⑩の人）はどの人ですか？」被験者（B)「(この・その・あの）人です。」

岡﨑（2020）の調査・分析の結果を要約すると以下となる。

（1） 全体：【位置 1】［第 1 問～第 3 問］の各問で 7 名「コ→ソ 1→ア→ソ 2」(コ→ソ 2 名、コ→ア（→ソ）1 名)。ソ 1 は中距離、ソ 2 は聞き手領域と考えられる（中距離ソ 1、聞き手領域ソ 2 とする)。コ❶❷、ソ 1❸❹、ア❻、ソ 2❾⑩が中心。【位置 2】全問、全員「コ→ソ→ア」。コ❶❷、ソ❹❺❻、ア❽❾⑩が中心。【位置 3】［第 1 問］「コ→ソ→ア」9 名（コ➔ア 1 名)、［第 2 問］全員「コ→ソ→ア」、［第 3 問］「コ→ソ→ア」8 名（コ➔ア 2 名)。コ❶、ソ❸、ア❺❻❼❽❾⑩が中心。以上から、それぞれの指示領域は **1)** コは被験者（B）から 1-2m、**2)** ソ 1 は被験者（B）から 3-4 m、**3)** 調査者（A）と被験者（B）間のアは被験者（B）から 6m、**4)** ソ 2 は【位置 1】調査者（A）から 2m、【位置 2】調査者（A）の前 1.5・後 0.5-1.5m。

（2） 個人的傾向：【位置 1】２名が全問「コ→ソ」(中距離ソ 1 と中間のアがない)。その２名うち 1 名は【位置 3】でソが現れず「コ→ア」(［第 2 問:害虫等］は「コ➔ソ➔ア」)。つまり、1 名は対象物「害虫等」以外は中距離ソ 1 が出ない。

（3） 指示対象（指示詞）による傾向：**指示対象「好ましくないもの（害虫等)」の「ソコ」の範囲が広く、前寄りに現れる傾向がある（【位置３】)**。中距離ソ 1 は、場所「ソコ」に現れやすいと予測される。また、**芸能人より身近な友人のほうにコが広いという結果から「好ましさ（精神的距離の近さ)」が現れた可能性がある。**

なお、岡﨑（2020）は個人・指示対象の違いによる指示領域の差異を中心に調査したものであり、本発表の目的とは異なる。そこで、本発表は評価・感情に焦点をあてた形に指示対象・質問を変更し、調査を行った。次節で本発表の調査法を説明する。

３.調査法について

本発表の位置条件は岡﨑（2020）と同じである（図２。以降、位置条件は【位置１】【位置２】【位置３】と記載する)。指示対象は「花（A4 の紙に印刷)」と「ゴキブリ（動く玩具)」、指示代名詞の語形はココ・ソコ・アソコとした。さらに比較のために、指示副詞コンナ（ニ)・ソンナ（ニ)・アンナ（ニ）の調査も行った。以下に質問文を記載する。

[質問1：対象1花]（ランダムに指定）位置❶～⑩の花の名前［●●］を入れて、話しかけてください。〈あなた〉「△△さん（調査者）！［●●］が、きれいに咲いてます」
調査者が次のように聞きます。〈調査者〉「えっ！？どこですか？」選んで答えてください。
（答えたあと、○で答えをかこってください）〈あなた〉「ここ・そこ・あそこ　です」

[質問2：対象2ゴキブリ]以下のように、話しかけて下さい。(ゴキブリは位置❶～⑩にランダムに出現します)〈あなた〉「△△さん（調査者）！ゴキブリがいます」

調査者が次のように聞きます。〈調査者〉「えっ！？どこですか？」選んで答えてください。
（答えたあと、○で答えをかこってください）〈あなた〉「ここ・そこ・あそこ　です」

[質問3：対象3荷物]私（調査者）が、指さしながら次のように言います。❶～⑩は、大きな荷物です。〈調査者〉「ちょっと、悪いけど、❶～⑩の荷物、持ってきてくれない？」
選んで答えてください。（答えたあと、○で答えをかこってください）
〈あなた〉「こんな・そんな・あんな　荷物　一人じゃ持てません!!」

[質問4：対象4花]私（調査者）が次のように言います。位置❶～⑩［●●］は花の名前です。
〈調査者〉「見て見て。［●●］いっぱい咲いてる」選んで答えてください。
（答えたあと、○で答えをかこってください）〈あなた〉「へえ～、こんなに・そんなに・あんなに　綺麗に咲いてるの初めてみた！」

調査日時は 2024 年 7 月 19・22 日 13：00-17：00、調査場所は立命館大学平井図書館カンファレンスルーム、被験者は立命館大学学部生・大学院生 19-23、36、57 歳の計 22 名（男性 6 名・女性 16 名）である。［質問 1］22 名、［質問 2］21 名、［質問 3・4］10 名の回答を得た（表 1 指示代名詞と指示副詞で、アルファベットが同じ場合は同一人物である）。

表 1　被検者情報

指示代名詞				指示副詞			
	年齢	性別	出身地		年齢	性別	出身地
A	20	女性	岐阜県	C	21	男性	大阪府
B	20	男性	福井県	D	20	女性	兵庫県
C	21	男性	大阪府	E	20	女性	静岡県
D	20	女性	兵庫県	F	21	女性	愛媛県
E	20	女性	静岡県	G	21	女性	奈良県
F	21	女性	愛媛県	H	20	男性	山形県
G	21	女性	奈良県	I	21	女性	静岡県
H	20	男性	山形県	K	20	女性	京都府
I	21	女性	静岡県	L	23	男性	奈良県
J	20	女性	富山県	Q	22	男性	千葉県
K	20	女性	京都府				
L	23	男性	奈良県				
M	57	女性	東京都				
N	36	女性	鳥取県				
O	21	女性	兵庫県				
P	22	男性	滋賀県				
Q	22	男性	千葉県				
R	19	女性	大阪府	Rは質問１のみ			
S	20	女性	滋賀県				
T	20	女性	京都府				
U	20	女性	愛知県				
V	21	女性	兵庫県				

岡﨑（2020）の調査法からの変更点について述べる。岡﨑（2020）は㋐評価・感情に焦点をあてた調査ではない、㋑調査の条件（指示詞の語形・質問形式）は揃えていない、㋒指示対象を手前から順（位置❶から⑩）に回答する形式であった。本調査はまず㋐対象物に好悪が出やすいように「花（写真）」と「ゴキブリ（動く玩具）」[1]を選んだ。次に㋑指示代名詞の質問は被験者（B）から調査者（A）に話しかけ、被験者（B）が指示対象の位置を教える形、指示詞はココ・ソコ・アソコに揃えた。この質問形式をとったのは、被験者（B）に調査者（A）をより意識させるためである。そして、㋒岡﨑（2020）では被験者（B）は位置❶から⑩の順に回答する形であったため「コ→ソ→ア」と無意識に答えてしまうのではないのかという質問を受けたことがある（岡﨑（2019）質疑応答）。そこで、本調査では位置❶から⑩の対象をランダムに質問し、回答を得ることにした（ただし、指示副詞は位置❶から⑩の順に質問した）。また、岡﨑（2020）の調査は机上に対象物を置き一直線に並べたため、後ろの対象物が

[1] 「花（写真）」は位置❶赤いバラ❷ひまわり❸白いバラ❹蓮の花❺チューリップ❻あじさい❼タンポポ❽朝顔❾蘭⑩ユリ、岡﨑（2020）の「害虫等」は蛇、鼠、蛙等であったが本調査はゴキブリのみとした。

見えにくくなるという問題が発生していた。今回はその問題を解消するために床の上に置いた（写真）。そのため岡﨑（2020）とは目線の高さが違う。

４．調査結果：指示代名詞

指示代名詞の調査結果を表２から表７に示す（※「ソ・ア」◎「コ・ソ」と迷ったもの）。各位置条件で「花」と「ゴキブリ」に対する指示詞を比較する（表の※◎はカウントせず）。

表２【位置1】（向かい合う）［質問１：対象１花］

1*1	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	O	P	Q	R	S	T	U	V
❶	コ	コ	コ	コ	コ	コ	コ	コ	コ	コ	コ	コ	コ	コ	コ	コ	コ	コ	コ	コ	コ	コ
❷	コ	コ	ソ	ソ	コ	コ	ソ	コ	コ	コ	コ	コ	ソ	コ	ソ	コ	コ	ソ	ソ	コ	ソ	コ
❸	コ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ア	ソ	ソ	コ	コ	コ	ソ	コ	ソ	コ	ソ	ソ	ソ	ア	ソ	ソ
❹	コ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ア	ソ	ア	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	コ	ソ	ア	ソ	ア	ア	ア
❺	ソ	ソ	ア	ソ	ア	ソ	ア	ア	ア	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ア	ソ	ソ	ア	ア	ア	ア	ア
❻	ソ	※	ア	ソ	ソ	ア	ア	ア	ア	ソ	ア	ソ	ソ	ア	ソ	ソ	ソ	ア	ア	ア	ア	ア
❼	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ソ	ソ	ソ	ア	ソ	ア	ア	ア	ア	ア	ア
❽	ソ	ソ	ソ	ソ	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ソ	ア	ア	ソ	ソ	ソ	ソ	ア	ア	ソ	ア	ア
❾	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ア	ア	ア	ア	ア	ソ	ア	ソ	ア	ソ	ソ	ア	ア	ソ	ア	ア
❿	ソ	※	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ア	ア	ア	ア	ソ	ア	ソ	ア	ソ	ソ	ソ	ア	ア	ソ	ア

表３【位置2】（❺と❻の間）［質問１：対象１花］

2*1	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	O	P	Q	R	S	T	U	V
❶	コ	コ	コ	コ	コ	コ	コ	コ	コ	コ	コ	コ	コ	コ	コ	コ	コ	コ	コ	コ	コ	コ
❷	コ	コ	コ	ソ	コ	コ	ソ	ソ	コ	コ	コ	コ	コ	コ	コ	コ	ソ	ソ	コ	コ	コ	コ
❸	コ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	コ	ソ	コ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	コ	ソ	ソ	ソ
❹	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ア	ソ	ソ	ソ
❺	ソ	ソ	コ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ア	ソ	ソ	ソ
❻	ソ	ソ	ア	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ア	ソ	ソ	ア	ア	ソ	ア	ア
❼	ソ	ソ	ア	ソ	ソ	ソ	ソ	ア	ソ	ア	ア	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ア	ア	ソ	ソ
❽	ソ	ア	ア	ソ	ア	ソ	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア
❾	ソ	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア
❿	ソ	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア

表４【位置3】（並び合う）［質問１：対象１花］

3*1	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	O	P	Q	R	S	T	U	V
❶	コ	コ	コ	コ	コ	コ	コ	コ	コ	コ	コ	コ	コ	コ	コ	コ	コ	コ	コ	コ	コ	コ
❷	コ	ソ	コ	ソ	コ	コ	コ	ソ	ソ	コ	コ	コ	コ	ソ	コ	コ	ソ	ソ	ソ	コ	ソ	コ
❸	ソ	ソ	コ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	コ	ソ	ソ	ソ	ア	ソ	ソ
❹	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ア	ソ	ア	ア	ソ	ソ	ソ	ア	ア	ソ	ソ	ソ	ソ	ア	ア	ソ
❺	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ア	ア	ソ	ア	ア	ア	ソ	ソ	ソ	ソ	ア	ソ	ア	ア	ア	ア	ア
❻	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ア	ア	ア	ア	ア	ソ	ソ	ソ	ソ	ア	ソ	ソ	ア	ア	ア	ア	ア
❼	ソ	ア	ア	ソ	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ソ	ア	ア	ア	ア	ア	ア
❽	ソ	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア
❾	ソ	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア
❿	ソ	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア

表５【位置1】（向かい合う）［質問２：対象２ゴキブリ］

1*2	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	O	P	Q	S	T	U	V
❶	コ	コ	コ	コ	コ	コ	コ	コ	コ	コ	コ	コ	コ	コ	コ	コ	コ	コ	コ	コ	コ
❷	コ	コ	ソ	コ	コ	コ	ソ	コ	ソ	コ	コ	コ	ソ	コ	ソ	コ	コ	コ	コ	コ	コ
❸	ソ	◎	ソ	ソ	コ	コ	ソ	ソ	ソ	コ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	コ	ソ	ソ	ア	コ	ア
❹	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	コ	ソ	ソ	ア	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ア	ア	ア
❺	ソ	ソ	ア	ソ	ソ	ア	ア	ソ	ア	ア	ソ	ソ	ソ	ソ	ア	ソ	ソ	ソ	ア	ア	ソ
❻	ソ	ソ	ア	ソ	ソ	ア	ア	ソ	ア	ア	ア	ソ	ソ	ソ	ア	ア	ソ	ア	ア	ア	ア
❼	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ア	ア	ソ	ア	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ア	ア	ア	ア
❽	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ア	ア	ソ	ア	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ア	ソ	ソ
❾	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ア	ア	ソ	ア	ソ	コ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ア	ソ	ソ
❿	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ア	ソ	ソ	ア	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ

表６【位置2】（❺と❻の間）［質問２：対象２ゴキブリ］

2*2	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	O	P	Q	S	T	U	V
❶	コ	コ	コ	コ	コ	コ	コ	コ	コ	コ	コ	コ	コ	コ	コ	コ	コ	コ	コ	コ	コ
❷	コ	コ	コ	コ	コ	コ	ソ	ソ	コ	コ	ソ	コ	ソ	ソ	コ	コ	コ	コ	ソ	ソ	コ
❸	ソ	コ	ソ	ソ	コ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	コ	コ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ
❹	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ
❺	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ
❻	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ア	ソ	ソ	ソ	ソ	コ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ
❼	ソ	ソ	ア	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ア	ア	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ア	ソ
❽	ソ	ソ	ア	ソ	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ソ	ア	ア	ソ	ア	ア	ソ	ア
❾	ソ	※	ア	ソ	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア
❿	ソ	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア

表７【位置3】（並び合う）［質問２：対象２ゴキブリ］

3*2	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	O	P	Q	S	T	U	V
❶	コ	コ	コ	コ	コ	コ	コ	コ	ソ	コ	コ	コ	コ	ソ	ソ	コ	コ	コ	コ	コ	コ
❷	コ	コ	コ	ソ	コ	コ	ソ	コ	ソ	コ	コ	コ	ソ	ソ	ソ	コ	ソ	コ	コ	ソ	ソ
❸	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ア	コ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ア	ソ	ソ
❹	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ア	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ア
❺	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ア	ア	ア	ア	ソ	ソ	ソ	ア	ソ	ソ	ソ	ア	ア	ア	ア
❻	ソ	ソ	ア	ソ	ソ	ソ	ア	ア	ア	ア	ア	ソ	ア	ア	ア	ア	ソ	ア	ア	ア	ア
❼	ソ	ア	ア	ソ	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア
❽	ソ	ア	ア	ソ	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア
❾	ソ	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア
❿	ソ	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア

4.1【位置１】（向かい合う、調査者（A）・被験者（B）は 11m離れて向かい合う）

表８【位置１】において両対象とも位置❶ココのみ❷ココ優位❸ソコ優位であり、嫌な対象（ゴキブリ）にソコが早く現れるといった傾向は見られない。これは岡﨑（2020）でも同様の報告がある（【位置３】に早く見られる）。【位置１】の特徴は位置❼から❿に見られ、「花（表２）」はアソコ、「ゴキブリ（表５）」はソコの回答が多い。これについて被験者Ｄはインタビューで「相手がそれを踏まないように/相手がその場から逃げられるように"いち早く相手に知

表８　【位置１】表2と表5の対照

表２	コ	ソ	ア	表５	コ	ソ	ア
❶	**22**	0	0	❶	**21**	0	0
❷	**14**	8	0	❷	**16**	5	0
❸	6	**14**	2	❸	5	**13**	2
❹	2	14	6	❹	1	16	4
❺	0	11	11	❺	0	13	8
❻	0	9	12	❻	0	9	12
❼	0	10	12	❼	0	**14**	7
❽	0	10	12	❽	0	**17**	4
❾	0	12	10	❾	1	**16**	4
❿	0	12	9	❿	0	**19**	2

らせないと"という場合は、(相手を強く意識するため) 相手の立ち位置によって指示詞が変わる」とする。これは表 9「花」では、聞き手である調査者（A）手前の位置❿をアソコで指示する被験者 7 名が、「ゴキブリ」ではソコとしていることからも伺える。

表9　【位置１】被験者I・J・M・O・S・T・V

I	花	ゴ	J	花	ゴ	M	花	ゴ	O	花	ゴ	S	花	ゴ	T	花	ゴ	V	花	ゴ
❶	コ	コ	❶	コ	コ	❶	コ	コ	❶	コ	コ	❶	コ	コ	❶	コ	コ	❶	コ	コ
❷	コ	ソ	❷	コ	コ	❷	ソ	ソ	❷	ソ	ソ	❷	ソ	コ	❷	コ	コ	❷	コ	コ
❸	ソ	ソ	❸	コ	コ	❸	ソ	ソ	❸	ソ	ソ	❸	ソ	ソ	❸	ア	ア	❸	ソ	ア
❹	ア	ア	❹	ソ	ソ	❹	ソ	ソ	❹	ソ	ソ	❹	ソ	ソ	❹	ア	ア	❹	ア	ア
❺	ア	ア	❺	ソ	ア	❺	ソ	ソ	❺	ア	ア	❺	ア	ソ	❺	ア	ア	❺	ア	ソ
❻	ア	ア	❻	ソ	ア	❻	ソ	ソ	❻	ソ	ア	❻	ア	ア	❻	ア	ア	❻	ア	ア
❼	ア	ア	❼	ア	ソ	❼	ソ	ソ	❼	ソ	ソ	❼	ア	ア	❼	ア	ア	❼	ア	ア
❽	ア	ア	❽	ア	ソ	❽	ア	ソ	❽	ソ	ソ	❽	ア	ソ	❽	ア	ア	❽	ア	ソ
❾	ア	ア	❾	ア	ソ	❾	ア	コ	❾	ソ	ソ	❾	ア	ソ	❾	ア	ア	❾	ア	ソ
❿	ア	ソ	❿	ア	ソ	❿	ア	ソ	❿	ア	ソ	❿	ア	ソ	❿	ア	ソ	❿	ア	ソ

このように調査者（聞き手）に近い位置でソコが「ゴキブリ」＞「花」であるのは「あなたの領域（聞き手領域ソ 2）に危険（ゴキブリ）が存在するよ」と聞き手に素早く正確に伝えたいという話し手の評価・感情によるものと予想する[2]。被験者 B も「「そこ」は正確に指す、「あそこ」は大まかに指すイメージ。ゴキブリは正確に指す必要があるから、「そこ」の範囲が広がったのかも」と回答する。これも同様の理由であろう。

4.2【位置２】（調査者（A）が位置❺と❻の間に立つ。調査者・被験者は 5.5m 離れて向かい合う）

表 10【位置２】は【位置１】と比べ、両対象の違いは大きくはない。傾向として位置❻から❾の「ゴキブリ（表６）」にソコが多いことが指摘できる。この位置は調査者（聞き手）背面であり、【位置１】と同じく聞き手を意識する形で出たソコであると予想される。

表10　【位置2】表3と表6の対照

表3	コ	ソ	ア	表6	コ	ソ	ア
❶	22	0	0	❶	21	0	0
❷	17	5	0	❷	14	7	0
❸	4	18	0	❸	4	17	0
❹	0	21	1	❹	0	21	0
❺	1	20	1	❺	0	21	0
❻	0	17	5	❻	0	**19**	1
❼	0	16	6	❼	0	**17**	4
❽	0	3	19	❽	0	**6**	15
❾	0	1	21	❾	0	**2**	19
❿	0	1	21	❿	0	1	20

4.3【位置３】（並び合う、調査者（A）・被験者（B）が並んで同じ方向をみる）

表 11【位置３】も【位置１】に比べ違いは大きくない。この位置条件の特徴は、位置❶で被験者 I・N・O にソコの回答が見られたことである（表 12）。他の位置条件では位置❶にソコは出ない（発表者も 1m 手前に、もしもゴキブリが出現したら、真横にいる聞き手にソコで知らせる）。

表11　【位置3】表4と表7の対照

表4	コ	ソ	ア	表7	コ	ソ	ア
❶	22	0	0	❶	18	**3**	0
❷	13	9	0	❷	12	9	0
❸	2	19	1	❸	1	18	2
❹	0	15	7	❹	0	17	4
❺	0	11	11	❺	0	10	11
❻	0	10	12	❻	0	7	14
❼	0	3	19	❼	0	2	19
❽	0	1	21	❽	0	2	19
❾	0	1	21	❾	0	1	20
❿	0	1	21	❿	0	1	20

表12【位置３】被験者I・N・O

I	花	ゴ	N	花	ゴ	O	花	ゴ
❶	コ	ソ	❶	コ	ソ	❶	コ	ソ
❷	ソ	ソ	❷	ソ	ソ	❷	コ	ソ
❸	ソ	ア	❸	ソ	ソ	❸	ソ	ソ
❹	ア	ア	❹	ア	ア	❹	ア	ソ
❺	ア	ア	❺	ソ	ア	❺	ソ	ソ
❻	ア	ア	❻	ソ	ア	❻	ソ	ア
❼	ア	ア	❼	ア	ア	❼	ア	ア
❽	ア	ア	❽	ア	ア	❽	ア	ア
❾	ア	ア	❾	ア	ア	❾	ア	ア
❿	ア	ア	❿	ア	ア	❿	ア	ア

この【位置３】は【位置１】【位置２】とは違い、聞き手である調査者（A）と並び合っており、前方に聞き手領域はない。岡﨑（2020）で指摘するような、嫌な対象を話し手自らが忌避する感情（早く自分の領域コから離したい）からソコを使用していると予想する。

以上のように、指示詞の選択は対象までの距離に加え、聞き手と指示対象に対する話し手の評価・感情が影響を与えていると予想される。

[2]「花」は 6 節の美しさの程度を指示副詞で示す際に、好ましいものとして評価・感情の影響が現れる。

まず、聞き手領域がある【位置１】【位置２】では聞き手に対し、聞き手の領域にある危険を素早く正確に伝えるためにソコ（聞き手領域ソ２）を選択し、聞き手と並び合った【位置３】の場合には自らの領域コから排除したい感情からソコ（中距離ソ１）を選択してるのではないだろうか[3]。

4.4 その他

その他、本調査のデータで特徴的なものについて述べる。表 13 被験者 A は全て「コ→ソ」でありアが出ない。インタビューで「自分から近ければ「ここ」遠ければ「そこ」を使う。相手の立ち位置はあまり気にしていない。「あそこ」はほぼ使わない。50m くらい離れてたり、その場にないものを話すときに使う」とする。被験者 A 以外にも【位置１】で「コ→ソ」とした被験者 D・L・Q がいたが、いずれも【位置３】で「コ→ソ→ア」と回答しており、アが出ない被験者 A とは相違する。この被験者 A にとって今回使用した教室では、アで示すような遠方のものはない、または聞き手領域ソ２がない可能性がある。

表13　被験者A

A	表2	表5	表3	表6	表4	表7
❶	コ	コ	コ	コ	コ	コ
❷	コ	コ	コ	コ	コ	コ
❸	コ	ソ	コ	ソ	ソ	ソ
❹	コ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ
❺	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ
❻	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ
❼	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ
❽	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ
❾	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ
❿	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ

次に、被験者 M（表 14）は【位置１】位置❾と【位置２】位置❻にココが出る。どちらも対象物が「ゴキブリ」で聞き手（調査者）の近くにココが出ている。インタビューで「相手の立場（調査者）に置き換わってコと指した」とする。また、被験者 C は対象物「花」の【位置 2】位置❺でココが出る。インタビューで「どちらかといえば調査者目線。調査者と花の距離で変わる」としており被験者 M と同じく、聞き手を意識した指示と予想される。

表14　被験者M・C

M	表5	表6	C	表3
❶	コ	コ	❶	コ
❷	ソ	ソ	❷	コ
❸	ソ	ソ	❸	ソ
❹	ソ	ソ	❹	ソ
❺	ソ	ソ	❺	コ
❻	ソ	コ	❻	ア
❼	ソ	ア	❼	ア
❽	ソ	ア	❽	ア
❾	コ	ア	❾	ア
❿	ソ	ア	❿	ア

表15【位置１】2020年（第２害虫等）

2*1	NM	YS	SA	AY	UY	SR	UR	OY	TT	IU
❶	コ	コ	コ	コ	コ	コ	コ	コ	コ	コ
❷	ソ	ソ	コ	コ	コ	コ	コ	コ	コ	コ
❸	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	コ	コ	ソ	コ	ソ
❹	ア	ア	ソ	ソ	ソ	ソ	ア	ソ	ソ	ア
❺	ア	ア	ソ	ア	ソ	ソ	ア	ソ	ソ	ア
❻	ア	ア	ア	ア	ソ	ア	ア	ソ	ソ	ア
❼	ソ	ア	ア	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ア	ア
❽	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ア	ソ
❾	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ア	ソ
❿	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ

表16【位置2】2020年（第２害虫等）

2*2	NM	YS	SA	AY	UY	SR	UR	OY	TT	IU
❶	コ	コ	コ	コ	コ	コ	コ	コ	コ	コ
❷	コ	コ	コ	ソ	コ	コ	コ	ソ	コ	ソ
❸	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ
❹	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ
❺	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ
❻	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ
❼	ア	ア	ソ	ソ	ア	ア	ソ	ソ	ソ	ソ
❽	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア
❾	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア
❿	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア

表17【位置3】2020年（第２害虫等）

2*3	NM	YS	SA	AY	UY	SR	UR	OY	TT	IU
❶	コ	コ	コ	コ	コ	コ	コ	コ	コ	コ
❷	ソ	ソ	ソ	ソ	コ	ソ	ソ	ソ	コ	ソ
❸	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ア	ソ	ソ
❹	ア	ア	ア	ソ	ソ	ア	ア	ア	ソ	ソ
❺	ア	ア	ア	ソ	ア	ア	ア	ア	ア	ア
❻	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア
❼	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア
❽	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア
❾	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア
❿	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア

5．岡﨑（2020）との比較

岡﨑（2020：表 15 から表 17）と今回の調査のデータを比較する。実は、調査前には岡﨑（2020）のデータから【位置１】位置❿はほぼソであると予想していた。しかし、今回の調査でアの回答がある程度見られ意外な結果であった。これについては対象物を机上ではなく床置きにした影響があったかもしれない。写真は 2019 年の調査のものであり聞き手前 1m の机上の方が、床置き下方の対象よりも、聞き手近くには見える。

[3] 三上（1970）の double binary に近いが、「我々がぐる」になってもソは没収されない。

また、この位置の変更は 4.3 節で指摘した「ゴキブリ」【位置３】位置❶にソコが早く出たことにも影響を与えた可能性がある。しかし、同位置条件の「花」【位置３】位置❶は全てココであること、加えて 4.1 節で述べたように表９【位置１】位置❿「花」をアソコで指す被験者７名が、「ゴキブリ」ではソコであることから指示詞の選択に何等かの評価・感情の影響はあると考える（【位置１】位置❿で両対象に対しアソコで指示するのは２名）。

次に、評価・感情と関わらないが、今回の調査で明らかになったことを述べておく。まず、岡﨑（2020）の表 15【位置 1】「コ→ソ」２名を特殊な指示のケースとしていた。しかし、今回の調査でも表５被験者（A）D・E・L・N・Q が「コ→ソ」と回答している。このことから中距離ソ１と中間のアが出ない指示は、特殊なケースではないと判断される。

次に、岡﨑（2020）で【位置１】「コ→ア→ソ 2」と中距離ソ１がない回答が１名見られたが、これも今回、被験者 F・T・U の３名が同じ回答をしている（どちらも【位置３】では中距離ソ１が出る）。さらに今回の調査で、中距離ソ１が全く出ない被験者 T がいた。被験者 T はインタビューで、このようなソコ（中距離）は使用しないと回答している。以上から、何等かの条件で中距離ソ１が出ない、または中距離ソ１を使用しない人がいる。

最後に、今回の調査では位置❶から❿までの対象をランダムに回答させた。そのためであろうか、例えば被験者Qは【位置３】でコ・ソ・ア・ソ・アと回答している（表７）。岡﨑（2019）で「コ→ソ→ア」と被験者が無意識に答えてしまうのではないかという疑問があったが、その可能性は高いように思われる。今後も調査法を調整する必要がある。

６．調査結果：指示副詞

指示副詞を調査した結果を表 18 から表 23 にまとめる（◎「コ・ソ」、※「ソ・ア」と迷ったもの）。対象「花」を全ての位置条件においてコで回答する被験者 D（被験者 Q の【位置１】も）が見られた。被験者 D はインタビューにおいて、「もっと距離が遠ければ"あんな"を使うかもしれないと思いました。例えば、新幹線の中から富士山を見た時、「あんな富士山ってデカいん？！すご！」等。しかし、今日の教室の距離では"あんな"は出てきませんでした」と回答する。ま

表18【位置１】［質問３：対象３荷物］

1*3	D	E	F	G	C	L	H	Q	I	K
❶	コ	コ	コ	コ	コ	コ	コ	コ	コ	コ
❷	コ	コ	コ	コ	コ	コ	コ	コ	コ	コ
❸	コ	コ	コ	ソ	ソ	ソ	ソ	ア	コ	コ
❹	ア	ソ	ソ	ア	ソ	ソ	ソ	ア	◎	ソ
❺	ア	ソ	ソ	ア	ソ	ソ	ソ	ア	ソ	ソ
❻	ア	ア	ソ	ア	ア	ソ	ア	ア	ソ	ア
❼	ア	ア	ア	ア	ア	ソ	ア	ア	ソ	ア
❽	ア	ソ	ソ	ソ	ア	ソ	ア	ソ	ソ	ア
❾	ア	ソ	ソ	ソ	ア	ソ	ア	ソ	ソ	ソ
❿	ア	ソ	ソ	ソ	ア	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ

表19【位置2】［質問３：対象３荷物］

2*3	D	E	F	G	C	L	H	Q	I	K
❶	コ	コ	コ	コ	コ	コ	コ	コ	コ	コ
❷	コ	コ	コ	コ	コ	コ	コ	コ	コ	コ
❸	コ	ソ	コ	ソ	コ	ソ	コ	ソ	ソ	ソ
❹	ア	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ
❺	ア	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ
❻	ア	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ
❼	ア	ソ	ソ	ア	ア	ア	ア	ソ	ア	ア
❽	ア	ア	ソ	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア
❾	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア
❿	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア

表20【位置3】［質問３：対象３荷物］

3*3	D	E	F	G	C	L	H	Q	I	K
❶	コ	コ	コ	コ	コ	コ	コ	コ	コ	コ
❷	コ	コ	コ	コ	コ	コ	コ	コ	コ	コ
❸	コ	ソ	ソ	ア	コ	ソ	ソ	ア	ソ	ソ
❹	ア	ア	ソ	ア	ソ	ソ	ア	ア	ア	ソ
❺	ア	ア	ア	ア	ソ	ア	ア	ア	ア	ア
❻	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア
❼	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア
❽	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア
❾	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア
❿	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア

表21【位置１】［質問４：対象４花］

1*4	D	E	F	G	C	L	H	Q	I	K
❶	コ	コ	コ	コ	コ	コ	コ	コ	コ	コ
❷	コ	コ	コ	コ	コ	コ	コ	コ	コ	コ
❸	コ	コ	コ	ソ	コ	ソ	ソ	コ	ソ	ソ
❹	コ	ソ	コ	ソ	ソ	※	ソ	コ	ア	ソ
❺	コ	ア	ソ	ア	ソ	ア	ソ	コ	ア	ソ
❻	コ	ア	ソ	ア	ア	ア	ア	コ	ソ	ア
❼	コ	ア	ア	ア	ア	ア	ア	コ	ソ	ア
❽	コ	ア	ア	ア	ア	ア	ア	コ	ア	ア
❾	コ	ア	ア	ア	ア	ア	ア	コ	ソ	ア
❿	コ	ア	ソ	ア	ア	ソ	ア	コ	ア	ア

表22【位置2】［質問４：対象４花］

2*4	D	E	F	G	C	L	H	Q	I	K
❶	コ	コ	コ	コ	コ	コ	コ	コ	コ	コ
❷	コ	コ	コ	コ	コ	コ	コ	コ	コ	コ
❸	コ	コ	コ	ソ	コ	ソ	コ	コ	ア	コ
❹	コ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	コ	コ	ソ	ソ
❺	コ	ア	ソ	ソ	ソ	ソ	コ	コ	コ	ソ
❻	コ	ア	ソ	ソ	ア	ソ	ソ	コ	ソ	ソ
❼	コ	ア	ソ	ソ	ア	ア	ソ	ア	ソ	ア
❽	コ	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア
❾	コ	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ソ	ア
❿	コ	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ソ	ア

表23【位置3】［質問４：対象４花］

3*4	D	E	F	G	C	L	H	Q	I	K
❶	コ	コ	コ	コ	コ	コ	コ	コ	コ	コ
❷	コ	コ	コ	ソ	コ	コ	コ	コ	コ	コ
❸	コ	コ	コ	ソ	コ	ア	コ	コ	コ	コ
❹	コ	ソ	ソ	ソ	ソ	ア	ソ	ア	ア	ソ
❺	コ	ア	ソ	ア	ソ	ア	ソ	ア	コ	ア
❻	コ	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	コ	ア
❼	コ	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ソ	ア
❽	コ	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	コ	ア
❾	コ	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	コ	ア
❿	コ	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	コ	ア

た、被験者Ｉは【位置１】コソアソアソア【位置２】コアソコソアソ【位置３】コアコソコと入り組んで回答し、インタビューでは「距離ではなく、花の価値、花の親しみ度」とする。なお、多くの被験者が❹蓮の花は実際に見たことがないと述べ、興味深いことに被験者Ｉは❹蓮の花に【位置１】【位置３】でアを選択している。

今回の指示副詞の調査も対象３「一人では持てそうにない重い荷物（を持てという依頼）」と対象４「綺麗に咲いている花（に感動）」のように、指示対象に好悪の評価・感情を意識している。「花」に対し全てコで指示する被験者Ｄに加え、被験者Ｑ・Ｉもコの範囲が「荷物」の場合よりもかなり広い。この結果は、好ましいものにはコを使用するという岡﨑(2020)の指摘と合致する。このように被験者Ｄにとっては調査した教室がアを使用するには小さかった可能性はあるが、指示代名詞の場合にはアを使用しており、被験者Ｉのインタビューもあわせ考えると、指示副詞を使用する場合はより評価・感情の影響があるように思われる。

なお、【位置３】（表 20・表 23）のソが指示代名詞に比べかなり少ない。被験者Ｅはインタビューで「「そんなに」は、あまり言わないかも」と回答する。発表者の感覚でもソンナ（ニ）は使用しない。中距離に関しては指示副詞のソは使用しにくいと予想される。

7.まとめ

本発表で明らかにしたことをまとめておく。

調査の結果、指示代名詞において「花」よりも「ゴキブリ」の指示にソコが選ばれる位置がある。【位置１】【位置２】は聞き手に対し、聞き手領域に存在する危険を伝えたいという話し手の評価・感情がソコを選択させ、【位置３】は嫌な対象を自らの領域コから忌避したいという話し手の評価・感情からソコを選択したものと予想する。

次に、指示副詞の調査結果では「花」に対しコンナニの指示領域がかなり広い被験者や、「花」の種類によってコンナニ（アンナニ）を選択する被験者が見られた。このことから指示代名詞に比べ、指示副詞の指示はより話し手の評価・感情の影響があることが予想される。今後も調査法を調整しながら、調査・分析することが必要であろう。

参考文献

安部清哉(2008)「指示代名詞の現場指示の領域―高橋調査法による 2008 年若者のコソアド―」『学習院大学文学部研究年報』55、pp.73-112.

岡﨑友子（2011)「指示代名詞の直示用法における領域調査―高橋調査法による、2010 年中国四国地方の若者のコソア―」『就実論叢』40、pp.29-48.

岡﨑友子（2019)「現代語コソアの指示について」日本語文法学会第 20 回大会（於,学習院大学）.

岡﨑友子（2020)「現代日本語の指示詞コソアの指示領域」『文学論藻』第 94 号、東洋大学文学部紀要第 73 集日本文学文化篇、pp.140（1）-124（17）.

高橋太郎・中村祐里子（1992)「1991 年、わかもののコソアド」『麗澤大学論叢』3、pp.1-35.

堤良一（2011)「西日本の若者のコソア―高橋調査法による岡山大学での調査から―」『岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要』31、pp.15-26.

三上章（1970)『文法小論集』くろしお出版

追記：本研究は科学研究費補助金 20K00636、23K00551 による。調査協力者に記して感謝する。

「てもらう」構文における恩恵性の背景化と受動性の前景化

大園雄也（関西外国語大学大学院生）

1. はじめに

本稿では、補助動詞「てもらう」を使用した構文（以降、「てもらう構文」とする）における非恩恵的な用法について、本動詞「もらう」の特徴を引き継いだ結果によるものとの見方を示す。

「てもらう」に限らず、「てやる」、「てくれる」を含んだ構文は、「利益態」(松下 1930)や「恩恵文」(益岡 2021 等)、「ベネファクティブ」(山田 2004 等)などと呼ばれるように、その名の通り、利益や恩恵性を付帯した行為のやりもらいを表す。高見(2000)は、被害受身文との対比から、「てもらう構文」を以下のように分類している。

(1) a. 娘が、ピアノを夜遅くまで弾いた。（客観的描写）
b. 私は、娘にピアノを夜遅くまで弾かれた。（被害・迷惑）
c. 私は、娘にピアノを夜遅くまで弾いてもらった。（恩恵・利益）

高見(2000: 215)

高見(2000)によると、(1a)は「娘がピアノを夜遅くまで弾いた」という事象を話し手の感情を交えず、客観的、中立的に描写した文であるのに対し、(1b)は話し手がその事象により被害・迷惑を被っていることを、(1c)は話し手がその事象により恩恵・利益を受けていることをそれぞれ示しているという。このように、「てもらう」をはじめ「てやる」、「てくれる」も含む恩恵文では、その行為の恩恵性という面からは避けて通れないのであるが、山田(2004)が示すように、「てもらう構文」には、恩恵性を表すとは言えない事例も以下のように存在する。

(2) ヘミングウェイは彫刻家ではない。忘れてもらっては困る。私は彫刻家なんだ。
（池田満寿夫『エーゲ海に捧ぐ』）

(3) しかし間違ってもらってはいけない。（多田裕計『長江デルタ』）

「てもらう」構文を使用するからには、本来であれば「忘れる」、「間違う」などの行為が、受益者にとって恩恵的であることを示すはずなのだが、上の例のように、「てもらう」構文に「困る」や「いけない」が後接すると、一転して、行為の受け手が迷惑を被っていることを示す文となる。

本稿では、本動詞の特徴はその補助動詞形に「コト[1]拡張」として引き継がれる点を説明した益岡(2013, 2021)を引き継ぎつつ、「てもらう」構文におけるこのような非恩恵的な事例も、その本動詞「もらう」の特徴を引き継いだ結果の産物であることを述べる。

2. 先行研究と問題の所在

[1] 補助動詞構文では、もとになる動詞の構文（本動詞構文）における名詞句の部分が述語句に置き換えられる。名詞句（モノ）が述語句（コト）に置き換えられることが、益岡(2013)では「コト拡張」と呼ばれている。

2.1. 先行研究

「てもらう」構文を扱った研究には、先述の高見(2000)のように、受身文との比較から、恩恵性・被害性に焦点を当てた研究と、奥津・徐(1982)や高橋ほか(2005)、澤田(2009)のように、使役性・受動性に焦点を当てた研究とに大きく二分される。益岡(2001, 2013, 2021)はこれら 2 つの観点から「てもらう構文」はもとより、恩恵文を分析しており、「てもらう構文」における使役性・受動性や、この構文も含めた恩恵文に認められる恩恵性の源泉は、その本動詞形に求められるとしている。例えば、以下の例ではその適格性から、「受け取る」が単なるモノの授受を表すのに対し、「くれる」は授受の対象物が恩恵をもたらすようなものに限定されることから、モノの授受に恩恵の授受が伴うことを示している。

(4)　督促状を受け取った。

(5)　?督促状をくれた。　(益岡 2013: 24)

加えて、「てもらう構文」が、(6)のように与益者に対する働きかけが認められる例と、(7)のように認められない例に分かれるのは、本動詞の「もらう」自体が、授与者への働きかけによりモノの受領を実現する(8)の用法（「使役型受益」）と、働きかけが認められない(9)の用法（「受動型受益」）とを有するからであるとの説明がされる。

(6)　太郎は弟に代わりに行ってもらった。　(益岡 2021: 100)

(7)　太郎は木村先生に褒めてもらった。　(益岡 2021: 101)

(8)　イチローはジローに頼んで梨をもらった。　(益岡 2013: 32)

(9)　イチローは思いがけずジローに梨をもらった。　(益岡 2013: 33)

また、「てもらう構文」には認められず、「てくれる構文」の場合には認められる事例として、(10)のような、事態に対する話し手の評価的な用法（「対事態評価」）があることも併せて述べられている。

(10)　ようやく涼しくなってくれた。　(益岡 2021: 110)

益岡(2021)では、(8)、(9)のように与益者・受益者の二者関係が保持され、本動詞自体に源流を求められる意味・用法を「構成的意味」、(10)のように与益者・受益者の二者関係から解放され、補助動詞構文が本動詞から派生させた意味・用法を「派生的意味」と呼ぶ。上の (6)～(10) の例は、いずれの用法にしても、受益者にとって恩恵的な行為や好ましい事態であることを表す文である。このような受益表現について、益岡(2021)では、受益を表す領域内で「てもらう」が専ら行為性の面を、「てくれる」が専ら結果性の面を担うという形で、受益の意味領域を適正に分かち合うことにより、受益文の「てもらう」構文と「てくれる」構文が共存可能となっているとの説明がなされている。

2.2. 問題の所在

益岡(2001, 2013, 2021)では、「てもらう構文」は、「受動型受益」、「使役型受益」の 2 つの用法を有しており、「てくれる構文」においては、「受動型受益」に加え、この補助動詞構文特有の派生的な用法である「対事態評価」の用法も認められるとされている。しかし、上のような恩恵的事態を表す事例がある一方で、山田(2004)では、先述の(2)、

(3)のように、話し手にとって好ましいとは判断できない事態にも「てもらう」が使用される例が数多く示されている。中でも特筆すべきは、(10)の例を「てもらう」で置き換えて、「*涼しくなってもらった」とはできないにもかかわらず、「困る」などの語を伴うと、(11)のように非恩恵的な事態における、当該事態のマイナス評価的な用法として「てもらう」を使用することができるようになる点である。この(11)の用法は、(12)の被害受身文と並行的であるとみることができる。

(11)　涼しくなってもらっては困る。

(12)　涼しくなられては困る。

益岡(2001, 2013, 2021)では、上記のような非恩恵的「てもらう構文」については触れられていないため、この点は追加の説明が必要であるように思われる。また、山田(2004)では多くの事例が挙げられているものの、なぜ「てもらう構文」においてこのような用法が生じているのかということには触れられていない。そのため、本動詞の特徴が補助動詞に引き継がれるという点を見直すことで、非恩恵的な「てもらう構文」が成立する要因を探りたいと思うが、その前に、「てもらう構文」におけるこのような表現は、どのような位置づけとして解釈されるべきなのかを次節にて先に確認しておこう。

3. 非恩恵的「てもらう構文」の位置づけ

「てもらう構文」に限らず、「てやる」や「てくれる」を使用した恩恵文においては、いずれの補助動詞にも非恩恵的な用法がみられる。

例えば「てやる」であれば、「その根性、叩き直してやる」のように、相手に何か危害を加えようという意志を示す事例や、「絶対にテストに合格してやる」のように、その行為の受影者が希薄ではあるものの、その行為者の何かを達成しようとする意志を示すような事例がある。

「てくれる」においても、「成敗してくれる」のように、先ほどの「てやる」の事例同様、相手に何か危害を加えようという意志を示す事例や、「よくも可愛がってくれたな」のように、自身への危害を示す事例もある。

「てもらう」であれば、「そこまで言うなら見せてもらおうじゃないか」のように、相手の挑発に対して同じ調子で言い返すような事例も存在する。

これらの用法はとりわけ、恩恵文の特徴である恩恵性を逆の意味として使用した、皮肉的な意味合いが強い。それに対し、先述の(2)、(3)や、以下の(13)のような、「～してもらっては困る」などの表現は、「てもらう」に後接する、「困る」などの語を伴うことで表現として安定しており、これ無しでは(13')のように、受益者にとって何かしらの面で「恩恵的な行為を受けた」ということを表すに過ぎないため、皮肉的な用法とは分けて考える必要がある。この構文が非恩恵的であるのは、後接する語を前提とした条件と言える。

(13)　会議室に入ってきてもらっては困る。

(13’)　会議室に入ってきてもらった。

また、先述の通り、「雨が降ってくれた」のように、ただその事態や他人の行為が話

し手にとって恩恵的であるということを表す、「てくれる」構文の対事態評価の用法とも異なり、恩恵性の面が背景化してしまっている。この「てもらう構文」では、恩恵性もその逆の皮肉も、どちらの意味も持たないのである。

それでは、「～してもらっては困る」という表現の「てもらう」はどのような機能を持つということができ、それは、本動詞「もらう」のどのような特徴を引き継いでいるといえるのだろうか。この点を考えるために、次節では、本動詞「もらう」の用法を再検討するところから始めたいと思う。

4. 「もらう」の非恩恵的事例

「てもらう」「てやる」「てくれる」をはじめ、「てある」「ておく」「てみる」など補助動詞を使用した補助動詞構文では、その元となる動詞を使用した本動詞構文の名詞句が述語句に置き換えられるのであるが、この現象に「コト拡張」との名称を付けたのは、益岡(2013)であった。益岡(2013)では、恩恵文はコト拡張により、授受動詞の〈モノの授受＋恩恵の授受〉という特徴を〈コトの授受＋恩恵の授受〉という形で受け継ぐとしている。また、授受動詞における恩恵の授受という特徴は、以下の例から確認される。すなわち、「与える」、「渡す」、「受け取る」とは異なり、「やる」、「もらう」、「くれる」は、対象物が当事者にとって好ましいモノ、恩恵をもたらすモノに限定されるのである。

(14) a.　多くの学生に優を与えた。
　　 b.　多くの学生に優をやった。
(15) a.　一部の学生に不可を与えた。
　　 b.　?一部の学生に不可をやった。
(16) a.　職員に優待券を渡した。
　　 b.　職員に優待券をくれた。
(17) a.　即座にイエローカードを渡した。
　　 b.　?即座にイエローカードをくれた。
(18) a.　教え子から歳暮を受け取った。
　　 b.　教え子から歳暮をもらった。
(19) a.　脅迫状を受け取った。
　　 b.　?脅迫状をもらった。　(益岡 2001: 27)

また、「てもらう構文」に、使役型・受動型の用法が認められるのも、本動詞「もらう」の特徴を引き継ぐことに因る。

しかし、ここで特筆すべきは、本動詞「もらう」における対象物が、受け手にとって好ましくないモノである場合にも使用される例があるという点である。

(20)　風邪をもらう。　(『広辞苑第七版』)
(21)　小言をもらう。　(『広辞苑第七版』)
(22)　「自分たちファミリーのボクシングスタイルも、相手のパンチを外して打つ。パンチをもらわない。どんなときでもガードをきちんとする。特にオマールは経験が積み重なって、本当にディフェンスが巧かったんだ」

(『現代ビジネス』2023.10.25)

(23) 「ファンのところに行ったら、イエローカードを貰うなんて知らなかったよ！ まあいいか！」 (『SOCCER DIGEST Web』2024.5.12)

広辞苑第七版では、「もらう」の意味として、「自分が望まないものを与えられる」という意味が掲載されており、その用例として、(20)や(21)の文が掲載されている。また、ボクシングなどの格闘技では(22)のように「パンチをもらう」や「アッパーをもらう」などの表現も使用されるし、(23)のように「イエローカードをもらう」といった事例もある。これらの例における対象物である「風邪」や「小言」や「パンチ」、「イエローカード」といったモノは、望まないモノであることから、受け手に恩恵をもたらすモノとは直ちには判断できず、これらを恩恵的な対象物であると判断するには、特別な文脈が必要である。

これに加えて、「もらい〇〇」といった語句の中にも、以下のように、対象物が好ましいモノであるとは直ちには言い切れない事例がある。

(24) 「もらい欠伸」「もらい親」「もらい聞き」「もらい事故」「もらい泣き」「もらい涙」「もらい腹」「もらい火」「もらい笑い」

上の表現では、「欠伸」、「涙」、「笑い」など、「他人につられて生理現象が起きる」場合や、「事故」や「火」など、「何らかのアクシデントに巻き込まれる」場合などに、「もらう」の名詞形との複合語として使用されている。「もらい〇〇」という表現がすべて恩恵性という特徴を持たないということではないのだが、意図せずにモノやコトを受け取った、あるいは意図せず影響を受けたという表現の中には、恩恵性の面が背景化しているとも考えられる事例が散見される。このように、「もらう」の対象物が恩恵をもたらすようなモノではない事例も少なくないのである。それでは、これらの事例がどのように非恩恵的「てもらう構文」に関わってくるのだろうか。

5. 考察

前節では、本動詞「もらう」を使用する際、恩恵をもたらすとは言い切れないモノが対象物となる事例や、「もらい〇〇」という語の中にも恩恵的とは言えない対象物が含まれる事例を確認した。これらの例に共通するのは、話し手が意図的に何かモノを受け取ろうとしたわけではなく、「思いがけずにモノを受け取った」という、非意図的な性質である。このような表現においては、「恩恵性」の面が背景化し、非意図的に対象物を受け取った、あるいは影響を受けたという「受動性」の面が前面に出る。ここから、本動詞「もらう」から補助動詞「てもらう」へと意味特徴が引き継がれる際に抽出されるのは、「恩恵性」や「働きかけ性」に加え、「受動性」も抽出されるものと解釈できる。これは、「私は思いがけず夕飯をごちそうしてもらった」というように、「思いがけず」などの行為者の意思が含まれないことを示す語と共起可能である点からも了解される。加えて、「もらう」自体もその特徴を有することから、「てもらう」にも、恩恵性が背景化し、受動性が前景化するという複合的な特徴が引き継がれると想定できる。しかし、補助動詞「てもらう」を使用する場合、基本的には恩恵的な行為の授受を表す用法に限

定されており、「恩恵性」が背景化される「てもらう構文」が無条件に生じるわけではない。そこで重要なのが、その成立条件である。何がトリガーとなって非恩恵的「てもらう構文」が成立するのか、ここで、この構文の用例をもう少し確認してみよう。

(25) 制限速度をオーバーしたからって、勝手に急ブレーキをかけてもらってはたまらない。 (山田 2004: 156)

(26) 父親がそのせいで、ケチな息子への面あてに自殺したなどと言ってもらっては、ぼくとしては本当に立つ瀬がないと、息子は愚痴をこぼしたのである。 (山田 2004: 156)

(27) ここへ来た時第一番に氷水を奢ったのは山嵐だ。そんな裏表のある奴から、氷水でも奢ってもらっちゃ、俺の顔に関わる。 （夏目漱石『坊っちゃん』）

(28) ちょっと、電話して断れよ、いまここへ来られちゃ迷惑だって。 (山田洋二『男はつらいよ』)

先の「～してもらっては困る」や「～してもらってはいけない」の例に合わせて、ここで確認されるのは、「たまらない」、「立つ瀬がない」、「迷惑だ」など、行為の受け手が当該の事態を「好ましいものではない」と、マイナス的に評価する語が「てもらう」の後に続いていることである。このように、当該の非意図的な事態を受影者が自身にとって好ましくない事態であると認識している場合に、非恩恵的「てもらう構文」が使用されるのである。そして、その構文内では、「困る」、「迷惑だ」などの語との兼ね合いから、本来「てもらう」が有している恩恵性の面が背景化し、当該の行為を受けた、あるいは当該の事態から影響を受けたという「受動性」の面が前景化する。この場合の「てもらう」は、恩恵性や被害性といった評価的な意味は帯びないことから、マイナス評価的な語と共起することにより、受影者が非意図的に受けた行為や事態が当該の人物にとって好ましくないことであることを表出する文として成り立つものと考えられる。

6. まとめと今後の課題

以上、本稿では、非恩恵的「てもらう構文」が成立する要因や条件について説明を与えた。ここでの主張は、以下の 3 点に集約される。

Ⅰ）本動詞「もらう」には、恩恵性の面が背景化し、受動性の面が前景化するという、複合的な特徴が認められる。

Ⅱ）上の「もらう」における複合的な特徴は、「てもらう」にも引き継がれており、「困る」、「たまらない」、「立つ瀬がない」等の、当該の行為や事態に対するマイナスの評価を示す語句との共起によって、非恩恵的「てもらう構文」の用法が成立する。

Ⅲ）非恩恵的「てもらう構文」における「てもらう」には、恩恵性や被害性といった評価的な意味は持たず、後接する「困る」などの語が、当該の行為や事態に対する評価の役割を担っている。

最後に、未だ明らかになっていない部分を、今後の課題として 3 点提示しておきたい。すなわち、「「もらう」における受動的な意味の源流」という点と「受動文と「てもらう」

構文の違い」という点、「非恩恵的「てもらう構文」の分類」という点である。

まず、「「もらう」における受動的な意味の源流」についてであるが、なぜ「もらう」が受動的な意味を保持し、「もらい〇〇」などの名詞形として使用され得るのかという点を明らかにする必要がある。これについては、「もらう」という語の語源から突き止められる可能性がある。例えば、『日本語語源広辞典』には、その語源について以下のように記載があり、「もらう」自体が受身の語形変化を伴ってできた語である可能性が示されている。

(15) もらう【貰う】

語源は、「モラ（盛ら）＋フ（接尾語受容）」です。モル（人に食べさせる）に対し、これを受ける表現（人から食わせていただく）表現が、モラウです。人に頼むか、許しを得て自分のものにすることを表します。例：この本箱は、僕がもらう。補助動詞として、―てモラウの用法もあります。例：助けてもらう。

（『日本語源広辞典』（増補版））

次に、「被害受け身文と「てもらう」構文の違い」についてであるが、「～してもらっては困る」といった表現は、上述の(11)、(12)の例のように、被害受け身の文と平行的であると思われる事例があり、どのような動機に支えられて、これらの似た表現が使い分けられるのかという点が明らかにされる必要がある。

(11) 涼しくなってもらっては困る。再掲

(12) 涼しくなられては困る。再掲

これに関しては、語用論的な観点から考察できる可能性がある。「～されては困る」といった表現では、被害受け身の文自体がその名の通り、被害性・迷惑性を帯びた文であるのに加えて、「困る」などの被害性・迷惑性を帯びた語を重ねることにより、受影者の迷惑感を前面に押し出した表現となる。その一方で「～してもらっては困る」の場合、基本的には恩恵性を帯びる「てもらう」が使用されていることにより、「困る」が有する被害性・迷惑性が緩和されるといった働きがあるのではないかと推測される。そのため、この発言の聞き手に対して、「悪いことをしている自覚がない、または良いことをしているつもりなのかもしれないが、受け手側は恩恵的な行為とは捉えていない」といったような、多少の行為者への配慮を持つことができるのではないかと考えられる。

最後に、「非恩恵的「てもらう構文」の分類」についてであるが、この用法は、構成的意味か派生的意味のどちらに分類されるのかという点を考える必要がある。「会議室に入ってきてもらっては困る」のように、行為の与え手・受け手が保持される事例もあれば、「雨に降られては困る」のように、その二者関係が保持されない事例もあり、二者関係という点のみではその分類が難しい。本動詞の意味特徴を受け継いでいるという点では、構成的意味に分類されるが、「困る」など外部の要素に支えされて成立する用法であるため、この構文に特有の派生的意味とも解釈が可能である。この点については、現状用意できる回答がないため、事例を再整理する必要がある。

上の 3 つの課題のいずれにおいても、未解決となっており、用意され得る回答も推論

の域を出ないため、根拠を重ねて結論を導く必要がある。そのため、「もらう」の語源や、被害受け身文と「てもらう構文」の文脈を含めた用例などをさらに分析し、上で述べた未解決の問題を明らかにすることを今後の課題としたい。

参考文献

大江三郎 (1975)『日英語の比較研究―主観性をめぐって―』南雲堂

奥津敬一郎・徐昌華 (1982)「「～てもらう」とそれに対応する中国語表現―“清”を中心に―」『日本語教育』46, pp.92-104

澤田淳 (2006)「ヴォイスの観点から見た日本語の授受構文」上田功・野田尚史（編）『言外と言内の交流分野―小泉保博士傘寿記念論文集―』pp.253-264, 大学書林

高橋太郎・金子尚一・金田章宏・斎美知子・鈴木泰・須田淳一・松本泰丈 (2005)『日本語の文法』ひつじ書房

高見健一 (2000)「被害受身文と「～に V してもらう」構文―機能的構文論による分析」『日本語学』vol.19, pp.215-223, 明治書院

増井金典 (2012)『日本語源広辞典』ミネルヴァ書房

益岡隆志 (2001)「日本語における授受動詞と恩恵性」『月刊言語』Vol.30. No.5, pp.26-32 大修館書店

益岡隆志 (2013)『日本語構文意味論』くろしお出版

益岡隆志 (2021)『日本語文論要綱―叙述の類型の観点から―』くろしお出版

松下大三郎 (1930)『改撰標準日本文法』中文館書店

山田敏弘 (2004)『日本語のベネファクティブ―「てやる」「てくれる」「てもらう」の文法―』明治書院

用例出典

サッカーダイジェスト Web 編集部 (2024)「「イエローを貰うなんて知らなかったよ！」“決勝点誘発”の前田大然、ダービー後の投稿が現地で反響！「もし知ってたら？」「魔法の瞬間をありがとう」『SOCCER DIGEST Web』2024 年 5 月 12 日 https://news.yahoo.co.jp/articles/81ec6440e47c99986becfcd0231868c7f6fbd39a（最終閲覧日 2024 年 10 月 10 日）

森合正範 (2023)「井上尚弥と戦うまで「まともにパンチをもらったことがなかった」世界王者の告白」『現代ビジネス』2023 年 10 月 25 日 https://gendai.media/articles/-/117575（最終閲覧日 2024 年 10 月 10 日）

モダリティ形式「方がいい」の形態統語的特徴

田川 拓海（筑波大学）*

1. はじめに：目的と主張

本発表では、現代日本語（共通語）において「勧め」や「提案」として用いられる「方がいい」を取り上げ、拘束的（deontic）モダリティを担うモダリティ形式として（どのくらい）文法化しているか検討する。

(1) 北海道に行くなら早くホテルを予約した方がいい。

特に、形態統語的な点からこの形式がどのようなまとまりになっているのか関連する言語現象と問題点を整理する。主な主張は下記の通りである。

(2) 本発表の主張

a. 「方がいい」全体で拘束的モダリティとしての統語的特徴を持っていることが複数の言語現象から支持される。
b. 拘束的モダリティの「方がいい」は形態的緊密性、音韻的緊密性のどちらについても持っているとは言えない（一語になっているとは考えにくい）。
c. 省略現象に関する振る舞いから、動詞のタ形の「た」まで含めた「た方がいい」でまとめてモダリティ形式として機能している可能性がある。

2. 「方がいい」の基本的性質と先行研究における位置付け

日本語研究では「方がいい」は主な分類としては評価のモダリティとされ（高梨(2002)、日本語記述文法研究会編（2003)など)、拘束的モダリティとしての用いられ方については用法や意味の観点から言及される[1]。拘束的モダリティとしてのラベルは先行研究によって「忠告」や「勧め」など異なっている。

(3) 比較：高いより安い方がいいに決まっている。
(4) 忠告：そんなに頭が痛いんだったら医者に行った方がいいよ。
（グループ・ジャマシイ（2023: 454))

* tagawa.takumi.kp@u.tsukuba.ac.jp

[1] 森山（2000)では「価値判断的事態選択形式群」に分類されている。

モダリティ形式の研究では「方がいい」はそれほど取り上げられず、高梨（2002)が比較から評価への文法化について検討しているが[2]、拘束的モダリティとしての用法についてはそれほど詳しく論じていない。

(5)「ほうがいい」はもともと比較表現からなり、2 つの事態を比較する用法を持つ。だが、評価的複合形式としての文法化が進んだ結果、(63)で規定したような独自の意味を持つに至っており、両者は区別が必要だということである。(高梨（2002: 103))

(6)評価的複合形式「P するほうがいい」(上記引用中の(63)に該当)
：当該事態 P を望ましいものとして評価すると同時に、それと反対の事態～P を望ましくないものとして評価する。(高梨（2002: 102))

個別のモダリティ形式の研究（川端（2002, 2012)、申（2006)など）では、どのような文脈において「方がいい」が使用（不）可能か、他の類似形式との意味・用法上の異同は何かという観点からの記述・整理が多く統語的特徴についてはあまり触れられない。

日本語記述文法研究会編（2003)のごく基本的で簡潔な記述が「方がいい」の形態統語的特徴の整理としては貴重である。

(7)モダリティ形式「方がいい」の形態統語的特徴

a. 非過去形と過去形（タ形）に接続する[3]
b. 述語が否定の場合は過去形（タ形）にならない
c. イ形容詞、ナ形容詞にも接続する
d. 「方がいい」自体は否定にならない

（日本語記述文法研究会編（2003: 102-103))

ここに挙げられている振る舞いだけを見ても、単なる名詞「方」と形容詞述語「いい」の組み合わせだけでは導けない特徴を「方がいい」全体で持っている可能性を窺わせる。

一方、Mizutani and Ihara (2021)は「方がいい」の拘束的モダリティとしての意味が「方」「が」「いい」の組み合わせから構成的（compositional）に導けるという分析を提案しており、現時点ではおそらく「方がいい」についての最も詳細な研究である。

---

[2] 高梨（2002: 85)では「評価的複合形式は、全般的に文法化の度合いが低い」とも述べられている。

[3] 「方がいい」に言及する場合はほかの文献でもル形とタ形が生起可能であることと実際にはテンスの対立がないことに触れられているが、さらに踏み込んだ分析は管見の限り見当たらない。

本発表ではMizutani and Ihara (2021)の意味論的分析そのものの検討を行うことはできないが、形態統語的特徴についての記述もあるので部分的に言及する。

3. 「方がいい」の形態統語的特徴

3.1. 拘束的モダリティ形式「方がいい」としてのまとまりを示す特徴

3.1.1 述語の範疇に関する制限

まず、拘束的モダリティの「方がいい」は比較や評価の場合とは異なり、動詞述語のみを取ると考えられる。形容詞や名詞述語の場合はタ形で未来（未実現）のことを表せないからである。

(8) 述語に関する統語的制限

a. 動詞述語：明日は授業に 行く／行った 方がいい。

b. 形容詞述語：先生、今日は厳しかったので明日はもう少し
優しい／*優しかった 方がいいです。

c. 名詞述語:明日友達が来たときには部屋が きれいな／*きれいだった 方がいい。

動詞であれば状態述語でもタ形で生起可能なので、述語の意味的な性質よりも範疇による制限によるものであろう。

(9) 明日の朝はずっと校門の前にいた方がいいよ。

拘束的モダリティとしての意味・用法が比較／評価の「方がいい」と文脈の組み合わせのみから導けるのならこのような述語の範疇に関する制限は予測するのは難しく、拘束的モダリティ形式としての「方がいい」が範疇に関する選択制限という統語的特徴を持つ可能性を示唆する。

3.1.2. 「が」の固定性

「方がいい」の「が」は他の助詞に置き換えることが難しく、形式として固定されている可能性がある。

まず、「が」を「は」や「も」などに置き換えることができない。

(10) 「が」が他の形式に交替不可1：とりたて詞
明日行く方 が／*も／*は いい
cf. 比較：温泉はぬるい方もいい

ただしこの振る舞いについてはすでにMizutani and Ihara (2021)による意味論的分析

が提案されており、「が」の固定性の強い証拠とまでは言えない。

また、「方がいい」の「が」は主格属格交替で「の」に置き換えることもできない。

(11)　「が」が他の形式に交替不可 2：主格属格交替

明日行く方 が／*の いいイベント

（cf. 比較：できるだけ高い方 が／*の いい食材）

この特徴について詳しく取り上げられてはいないが、Mizutani and Ihara (2021)の「が」が総記であるという仮定から分析できる可能性はある。比較の場合にも「の」との交替が難しいこともその仮定に合う。ただし、「方がいい」の「が」が確かに総記の「が」なのか、総記の「が」であれば主格属格交替が不可能なのかということについてはさらなる検証が必要である。

さらに、拘束的モダリティの「方がいい」の「が」は「いい」なしの応答で省くことが難しい。比較の場合には「が」がなくても容認されることと比べると、拘束的モダリティにおける「方」「が」の組み合わせの固定性を示すと考えることができる[4]。

(12)　「いい」を省いて応答に用いる際に「が」が脱落不可

A: 明日は開場時間ちょうどに行けば大丈夫かな。

B: もっと早く行った方*(が)。

cf. 比較：

A: 本は買うのと借りるのどっちが多い？

B: 買う方(が)。

なお、この「が」の固定性は形態的緊密性に関わる現象と考えることもできる。

3.1.3. 従属性の減少

比較の場合は「方がいい」の節内で主格属格交替が可能なのに対し、拘束的モダリティの場合は不可能である。これは「方がいい」全体で拘束的モダリティ形式としてのまとまりになっている（主節化）ことを支持する（cf. 大島（2010)の従属度)。

(13)　「方がいい」節の従属性

明日は太郎 が／*の 来た方がいい。

cf. 比較：リビングはもっと窓 が／の 大きい方がいい

[4] 「が」が総記の「が」であるため省きにくいという可能性も考えられるが、主格属格交替の可否では拘束的モダリティと比較の差が出ないということと整合しない。

以上のことから、言語現象によって異なりはあるものの、拘束的モダリティとしての「方がいい」は比較の「方がいい」に比べ１つのまとまりとして固定化の度合いが高く統語的な制限も生じているため、文法化が進んでいると言えるのではないだろうか。先行研究が想定する比較→評価→拘束的モダリティという流れが意味・用法の面からの派生関係だけではないことが経験的にも示せたと言える。

3.2.　拘束的モダリティ形式「方がいい」の語としてのまとまり

3.1で見たのは「方がいい」が統語的に１つのモダリティ形式としてのまとまりを持つということであり、そこから「方がいい」が一語になっているという結論をすぐに導くことはできない。言語現象からはむしろ「方がいい」は形態的にも音韻的にも緊密ではなく、語としてのまとまりは持たないようである。

3.2.1. 形態的緊密性

拘束的モダリティの「方がいい」はモダリティ形式であるため外部からの修飾の可否といった形態的緊密性のテスト（Dixon and Aikhenvald (2002)など）を用いるのが難しい。しかし、Mizutani and Ihara (2021)が示しているように「方が」と「いい」の間には他の語（副詞など）が挿入でき、この点において形態的緊密性は確認できない[5]。

(14)　「方がいい」の形態的緊密性：他要素の挿入が可能
明日は早く来た方が 絶対に／たぶん／ね いいよ。

また、カバーできる意味は完全に同じではないが「いい」を「まし」「好ましい」などに置き換えてモダリティ形式として用いられることも形態的緊密性（固定性）の低さとみることができるかもしれない。この場合のタ形にもテンスの対立はないようである。

(15)　何もやらないよりは少しでも勉強した方が ましだ／?好ましい。

3.2.2. 音韻的緊密性

音韻的緊密性についても検討に用いることのできる言語現象は限られている。少なくとも韻律の点から見ると「方がいい」が音韻的に１つにまとまっているとは考えにくい。「方がいい」はそれぞれの要素間でも前接する述語ともアクセントはまとまらない。

(16)　「方がいい」の音韻的緊密性：アクセント
寿司はすぐなくなるからすぐに（食’べた）（ほ’うが）（い’い）。

---

[5] 3.1.2で見た「が」の固定性は形態的緊密性の現れと見なしうるかもしれない。

統語的には節を取るモダリティ形式でも述語とアクセントが独立しているものとまとまるものの両方があるため、統語的な特徴と音韻的緊密性は別に考える必要がある。

(17)　アクセントが述語と独立しているモダリティ形式
　　そのプリンは太郎が（食’べた）（らし’い）。(cf. 研究者らしい部屋)
(18)　アクセントが述語とまとまるモダリティ形式
　　そのプリンは太郎が（食べたっぽ’い）。(cf. 研究者っぽい部屋)

3.3.　「方がいい」のまとまり性に関するまとめ

言語現象によってどのくらい根拠として採用できるかは異なるものの、ここまで見てきた「方がいい」の特徴はおおよそ次のようにまとめることができる。特徴ごとのまとまり性は連動しておらず、またそれぞれのまとまり性自体にも程度があるため「方がいい」は一語になっているかそうでないかという形で議論を単純化するのは難しい。

(19)　拘束的モダリティ「方がいい」のまとまり性
　　a. 統語：「方がいい」全体で固有の統語的特徴を持っている
　　b. 形態：低い（確認できない）
　　c. 音韻：低い（確認できない）
　　cf. 意味：構成的に分析可能（Mizutani and Ihara (2021)）

4. 省略現象と「た方がいい」としてのまとまり

4.1.　モダリティ形式と命題部分の省略

本節では小辞残留省略（particle stranding ellipsis）や dependent grafted speech（Sadanobu (2021)）として研究が進められている現象から「方がいい」の特徴を探る。

Sato and Maeda (2019: 361-362)では小辞残留省略が「みたい」のような節を取る要素にも見られるという指摘があるが（cf. Sadanobu (2021: 171)）、モダリティ形式が単独で前の発話を受けられるかどうかは形式ごとの形態統語的性質によって異なる。

(20)　モダリティ形式が命題を照応するパターンの異同（øの場合が小辞残留省略）
　　A: 明日、太郎練習に来るって?
　　a. B: そう／ø みたいだ／かもしれない／らしい よ。
　　b. B: *そう／*ø／その はず／よう だよ。
　　c. B: *そう／*ø／そうする べきだよ。

4.2.　「方がいい」と命題部分の省略

「方がいい」については同じく名詞由来のモダリティ形式である「はず」「よう」に似た振る舞いを見せるほか、「た方がいい」の形式でも受けることができるようである。

(21)　A: この桃、明日 食べる／食べた 方がいいですかね。
　　B: その／*ø 方がいいよ。
　　B: た／*る 方がいいよ。

また、先行する発話でル形を用いても「る方がいい」で受けるのは難しい。「方がいい」に接続する述語のル形とタ形の違いについては日本語記述文法研究会編 (2003: 103)に出現する文脈の傾向についてわずかな言及があるくらいだが、形態統語的にはタ形の場合「た方がいい」で1つのまとまりになっている可能性が考えられる。タ形の「た」は形態的には語幹との結び付きが強い（接辞である、宮岡 (2015)など）一方、音韻的には独立性もある（助詞的である、田川 (2021)など）ため「方がいい」とのまとまりを形成することができるのかもしれない。

さらに興味深い現象として、この「た方がいい」で応答する場合、前接する動詞の形態的性質に関わらず「た」が現れるというものがある。

(22)　A: この本も読むべきでしょうか。
　　B: た方がいいね。

「読む」はタ形では「読んだ」になるので、この場合の「た」は動詞のタ形から語幹部分を削除するといった分析で導くことはできない。これは具現的（realizational）な形態理論の有用性を支持する[6]。

5. おわりに：まとめと課題

本発表のまとめと今後の課題は以下の通りである。

(23)　本発表のまとめ
　　a. 拘束的モダリティとしての「方がいい」は比較・評価の「方がいい」にはない統語的特徴を持っている（文法化が進んでいる）
　　b. その一方、形態的・音韻的には「方がいい」で1つにまとまっているわけではない（一語化はしていない）
　　c. 「た方がいい」でまとまりになっている可能性がある。

[6] 近年の形態理論の発展や分類、特徴については乙黒・田川 (2024)を参照。

(24)　今後の主な課題

a. 「方がいい」のまとまり性や文法化の度合いに関連する言語現象の整理を進める。

b. 具体的な統語的分析を考える。

c. Mizutani and Ihara (2021)の分析と統語／形態／音韻的特徴との整合性を検討する。

d. 省略現象に関する記述・データを整理・検討する。

参照文献

Dixon, R.M.W. and Alexandra Y. Aikhenvald (2002) *Word: A Cross-linguistic Typology*. Cambridge, MA: Cambridge University Press.

グループ・ジャマシイ編著 (2023)『改訂版 日本語文型辞典』くろしお出版.

川端芳子 (2002)「表現形式と表現意図の対応-シタホウガイイとスレバイイを比較して」『新潟産業大学人文学部紀要』13: 1-16.

川端芳子 (2012)「適当・提案」を表す形式：シタホウガイイとスレバイイについて」『立教大学日本語研究』19: 2-12.

宮岡伯人 (2015)『「語」とはなにか・再考: 日本語文法と「文字の陥穽」』, 三省堂.

森山卓郎 (2000)「1 基本叙法と選択関係としてのモダリティ」『日本語の文法 3 モダリティ』, 1-78,岩波書店.

Mizutani, Kenta and Shun Ihara (2021) Decomposing the Japanese Deontic Modal *hoo ga ii*. *Japanese/Korean Linguistics*. 28. CSLI Publications.

日本語記述文法研究会編 (2003)『現代日本語文法 4 第 8 部 モダリティ』, くろしお出版.

大島資生 (2010)『日本語連体修飾節構造の研究』, ひつじ書房.

乙黒亮・田川拓海 (2024)『形態論の諸相 6 つの現象と 2 つの理論』, くろしお出版.

Sadanobu, Toshiyuki (2021) Is discourse made up of sentences? Focusing on dependent grafted speech in modern standard Japanese. *Journal of Japanese Linguistics* 37: 151-180.

Sato, Yosuke and Masako Maeda (2019) Particle stranding ellipsis involves PF-deletion. *Natural Language and Linguistic Theory* 37: 357-388.

申鉉竣 (2006「日・韓両言語における「必要」を表す評価のモダリティ形式について-「といい」、「ばいい」、「たらいい」、「方がいい」を中心に」『日本エドワード・サピア協会研究年報』, 20: 85-96.

田川拓海 (2021)「形態論・活用論から見る「した」」庵功雄・田川拓海編『日本語のテンス・アスペクト研究を問い直す 2 「した」「している」の世界』, 1-19, ひつじ書房.

高梨信乃 (2002)「第 3 章 評価のモダリティ」『新日本語文法選書 4 モダリティ』, 80-120. くろしお出版.

ラレテアル文の構文的な特徴とその意味・用法について

高（コウ）　恩淑（ウンスク）（獨協大学）

１．はじめに

「動詞の受身形＋テアル」という形式（以下、ラレテアル文）は、対象となる主語の状態を描写する結果相を表すという点で「他動詞＋テアル」形（以下、テアル文）と類似しているが、非文とされることが多かったため研究対象として取り上げられることは少なかった。しかし、実例が少なからず存在している点を考慮すると、どのような構文的な条件のもとでラレテアル文が成立するかを把握しておく必要がある。本発表では、実例をもとにラレテアル文の構文的な特徴を探ると共に、その意味・用法も合わせて明らかにしたい。

２．先行文献におけるラレテアル文の概要

まず、意味的に類似するラレル文と関連付けて取り上げている先行研究を見ていきたい。寺村（1984: 147-152）は、意味的な側面からテアル文を「眼前の状態を描写する場合」と「現在の状況を述べる場合」に分けている。前者は「ある目的のための準備という意味合いはない場合が多い」が、後者は「あることに対する準備という意図でするものであるという意味合いが強くなる」と述べている。ラレテアル文については、理屈から成立しないと指摘しながらも、「実際には小説などでわりによく見かける」とし、意味的には「他動詞受身形＋テイル」形（以下、ラレテイル文）とほとんど同じであると記述している。また、寺村はラレテアル文に、テアル文がもつ意図的な処置の既然の結果という性質はないと捉えているが、今回の調査結果を見ると、ラレテアル文にはテアル文のように動作主の意図のもとで行われた行為の結果を表す例文が少なくなかった。

(1) 二月十四日、いつもは処方箋や検査伝票やメモが入れてあるコップ大のケースに赤い包みが入れられてあった。ひとりひとりのドクターに短いメッセージが書いてあるチョコレートだった。(LBo4_00044　BCCWJ)

(2) そのシステムでちょっと問題点になると思われるのがやはりそのＨＴＭＬなどで書かれたえ一教材っていうのはえ一皆が見れるように書かれてあるのでできる人もできない人も同じような内容を見なければいけない（後略）(A04M0392　CSJ)

一方、益岡（1987）は、統語的観点からテアル文を「A 型：(対象）ガ　～テアル（受動型)」と「B 型：(動作主）ガ（対象）ヲ　～テアル（能動型)」に大別した上で、各類型をさらに二つに分類している（A1、A2：B1、B2)。益岡は、テアル文の中でラレテアル文が出現できるのは、広義の存在表現の一種とされる A１型（配置動詞）に限られるとし、これはテ形に接続するアルが存在動詞の性格を強く反映することに起因すると述べている（(3)、(4)は益岡 1987 の例文)。

(3) 菊代の家には、タンスや三面鏡や電気洗濯機、冷蔵庫、蓄音機などが相変わらず

置かれてあった。（松本清張「鬼畜」）

（4）額にはいった四人の写真が飾られてあった。（石井代蔵「天下盗り狼」）

従来の研究において、ラレテアル文に焦点を当てた研究がほとんど行われていなかった中で、森（2001）はラレテアル文の使用実態を調査している点で意義がある。森は、益岡（1987）のテアル文の分類（A1、A2：B1、B2）に従い、ラレテアル文の実例を分類し、「～テアル」の「アル」が存在の意義を反映していると解釈される場合、A1型に限らず、A2型、B1型、B2型にもラレテアル文が許容されると主張している。

しかし、益岡（1987）のテアル文の分類をラレテアル文にそのまま適用し、分類することには無理がある。また、ラレテアル文の成立条件を単に「アル」が「存在」として解釈できるか否かを基準とする考えは明確な基準とは言い難い。そもそもテ形に接続する存在動詞「アル」の意義は文によって反映する度合いが異なるだけで、テアル文であれ、ラレテアル文であれ、「アル」の意義は存在し、ある対象の状態を言い表す結果相を表すと考えられるからである。

一方、裵（2018）は、テアル文とラレテアル文との関連性を論じていて、「可視性の制限」によってラレテアル文を A、B、C に分類し、目に見えない形で存続していることを描写するタイプの文（C）は、テアル文に存在しないと主張している。しかし、杉村（1996）の「情景描写文」にも見られるように、テアル文には次のように視覚以外の感覚によって捉えられるものもある（(5)、(6) は杉村 1996 の例文)。

（5）イチローの部屋はいつもクラシックがかけてある。（聴覚）

（6）イカサマ神殿にはえも言われぬ雰囲気が漂わせてある。（心）

韓（2024）も、裵（2018）の主張（目に見えない形で存続していることを描写するCタイプの文は、テアル文に存在しないという考え）を全面的に否定し、テアル文に可視性という制限はないと指摘している。韓（2024）は、テアル文との距離を基準とし、ラレテアル文を「存在文」と「準備文」に大別しているが、その分類基準には検討の余地がある。また、韓は「存在文」を「単純存在文」と「動作主前面化存在文」に分けているが、「動作主前面化存在文」と「準備文」の違いについては言及していない。

これまでの先行研究から共通して言えるのは、ラレテアル文はある対象の状態を言い表す結果相で、用法によってはテアル文、またはラレテイル文に近い性格を有するということである。

従来の研究において、結果相を表すテアル文（「他動詞＋テアル」形)、テイル文（「自動詞＋テイル」形)、ラレテイル文（「他動詞受身形＋テイル」形）に関する研究は数多く行われてきたが、ラレテアル文に焦点を当てた研究は数が少ない。本発表では先行研究を踏まえながら、ラレテアル文の使用実態を調査し、その構文的な特徴および意味・用法について考察を試みたい。

調査対象には、現代日本語書き言葉均衡コーパス（以下、BCCWJ）と、日本語話し言葉コーパス（以下、CSJ)、日本語日常会話コーパス（以下、CEJC）を用いる。例文は、文字列検索（[あ-ん]れてあ[りるっ]）を行い、BCCWJ では 612 例を抽出し、CSJ では 42 例、

CEJC では 5 例を抽出した。以下では、その調査結果を中心に見ていくことにする。

３．ラレテアル文の構文的な特徴

3.1 ラレテアル文の動詞構成

テアル文に用いられる動詞は、基本的に他動詞や自動詞の意志動詞である[1]が、ラレテアル文の場合は意志性のある自動詞であっても、「寝られてある」「動かれてある」「通われてある」のような使い方はできない。

(7) ここ数日、十分に休んである／寝てあるから一日残業ぐらい平気だよ。

(8) *[2]ここ数日、十分に休まれてある／寝られてあるから一日残業ぐらい平気だよ。

ラレテアル文の動詞のほとんどは他動詞の意志動詞で、659 例のうち無意志動詞は他動詞の「忘れる」「書き忘れる」と自動詞の「熟成する」のみである。他動詞と言っても動作性の強い典型的な意志動詞（「食べる、飲む、見る、聞く、読む、する、殺す、殴る、蹴る、倒す、など」）ではなく、出現動詞「書く、記す、描く、示す、刻む、したためる、掘る、揚げる、作る、用意する、記載する、など」（総 659 例のうち約 5 割）や、配置動詞「置く、貼る、敷く、並べる、掛ける、飾る、積む、付ける、つなぐ、隠す、入れる、しまう、囲む、設置する、安置する、など」（約３割）が多い。他に、状態変化動詞「切る、潰す、染める、薄める、磨く、畳む、など」や状態存続動詞「備える、挙げる、残す、押す、吊るす、選ぶ、展示する、保管する、保存する、予約する、など」、処置動詞「施す、任せる、言う、考える、まとめる、指示する、説明する、など」が見られる。

吉田（2012）は、書記動詞と作業動詞には何段階も動作の積み重ねがあり、その過程性がラレテアル文を不自然に感じさせると主張しているが、今回の調査では 659 例のうち４割近い書記動詞と作業動詞の例が見られた。特に書記動詞の場合、単に眼前描写を表す文が多く、そこからは動作の積み重ねや動作主の意図などは読み取れなかった。

(9) ある年の元旦の日記には、神々や祖先の霊を祀ったことが記されてあるが、そこにはほかのいくつかの神の名と並んで（後略）。(PB12_00160　BCCWJ)

(10) でまーちなみにあのこの本の中で何が書かれてあったかということ簡単に触れときますと。(S08M0683　CSJ)

一方、主語はガ格で表される物名詞がほとんどで、人名詞は 659 例のうちわずか 7 例（「彼が選ばれてある」「行者が祀られてある」「母と父とが合葬されてある」など）に過ぎず、抽象名詞を含めても１割に満たない。また、文の構造は基本的に益岡（1987）の A 型（(対象）ガ　～テアル）のように、対象となる名詞が主語となる受動構造をとっている。全用例の約８割を占めている出現動詞や配置動詞は、位置を表す句や節を伴う文がほとんどで、約８割以上の文が「(～ガ)　～（場所）ニ　ラレテアル」、「(～ガ)　～（場

[1] 益岡（1987）は、自動詞が用いられるラレル文はＢ２型（行為指向性が最も強く、行為の結果が基準時において有効性を示す）に限られるとしている。

[2] 非文法的な文の場合（統語レベルで不適格）「*」、非文法的ではないが文脈から不自然な場合「＃」（テキストレベルで不適格）を、該当文の前に付け加える。

所）ニ　～ト　ラレテアル」、「（～ガ）　～（場所）ニ　～（方法）デ　ラレテアル」といった構文をとっている。また、他の動詞においてもニ格との共起が著しいことから、補助動詞「-テアル」における存在動詞「アル」の影響が考えられる。

3.2 存在動詞「アル」との関係

上述したように益岡（1987）は、ラレテアル文が出現できるのは A1型（配置動詞）に限られると指摘している。この点について、益岡は「A1型が広義の存在表現の一種であり、この型において、テ形に接続するアルが存在動詞のアルの有する「存在」の意義を強く反映している、ということと関係がある」（p.232）と論じている。また、テ形に接続する「アル」の意義が存在動詞「アル」の意義を反映する度合いは、A1型において最も高く、B2型において最も低いと記述している。これはラレテアル文にも当てはまる指摘で、ラレテアル文においてもテアル文のように存在動詞「アル」の影響に度合いが見られる。次の例文のように、単に話し手の眼前の情景を描写するラレテアル文（「存在描写文」の「眼前描写」）は、存在表現に近い性質を有すると考えられる。

（11）工場は運河に沿って建てられた平家作りのそう大きくない構えで、とある官庁に附属することが入口の標札に書かれてあった。（PB29_00654 BCCWJ）

（12）カーマの岩山基地で、私は五日間過ごした。基地は、石積みの壁で囲んだ小さな岩室で、床に枯草が敷かれてあった。（PB12_00067 BCCWJ）

これらは存在動詞「アル」の意味が強く影響している文で対象の視覚化が強く、動作主の存在は特に意識されない。

一方、同じ動詞であっても動作主の意図やその存在が前面に現れる場合は、次のように動作主の意志的な行為の結果が存続している状態（「行為結果描写文」）を表す。

（13）僕の書いた打合せの手紙を、セリナは一瞬のうちにドイツのエッセン市へ運び、すぐに先生の返事を貰って来てくれた。先生の手紙には、こう書かれてあった。（LBb9_00116 BCCWJ）

（14）桐の木の下に座を構えておられますが、ただ子の場合は、誰かが、どこからか探し出して来たらしい、一枚の毛皮様のものが、子のために敷かれてありました。（OB3X_00163 BCCWJ）

以上の点から考えると、ラレテアル文の意味は述語動詞の有する意味だけに依存するのではなく、動作主の存在が意識されるか否か、また結果存続の状態が動作主の意図のもとで行われた行為の結果であるか否かも重要要素の一つであると言えよう。この点については、４節で詳しくみていくことにする。

3.3 ラレテアル文の性質

テアル文は、通常意志的行為の結果もたらされる状態を表す表現であるとされるが、ラレテアル文は無意志的な行為や自然情景を表す例文も少なからず存在する。今回の調査では 10 例にとどまっているため一般化はできないが、ラレテアル文の方がテアル文より状態

性が強いと言えるかもしれない。

（15）千九百七十年前後の小説雑誌は、東海道新幹線の一つの車両に一、二冊は置き忘れられてあるといわれたぐらいによく売れていた。（PB19_00034　BCCWJ）

（16）それでも、愛と享楽への資質に恵まれてありさえすれば、五年間に一度や二度は優勝してしまうのが、ベースボールというものなのだ。（LB17_00071 BCCWJ）

（17）ハルシュタット湖は、ザルツブルグ市とグラーツ市とを結ぶ線上、ザルツブルグ市から東南約五十ｋｍ、高い山にかこまれてあるのです。（LBa4_00002 BCCWJ）

これらはテアル文への置き換えはできないが、ラレテイル文（「他動詞受身形＋テイル」構文）に置き換えが可能で受身文に近い性質を有すると考えられる。

一方、上述したようにラレテアル文は通常ガ格をとり、対象となる名詞が主語として用いられる受動構造をとるが、次のようにヲ格をとる構文も見られる。わずか５例ではあるが、これらは益岡（1987）のＢ型（(動作主）ガ（対象）ヲ　～テアル）の構文特徴を持っていて、テアル文に置き換えることが可能である。

（18）あなたの所に初めて遊びに行った時、ゴミ箱から溢れるほどくしゃくしゃに丸められた便箋には「君は、君は、君は…」とだけ、その一言だけを何度も何度も書き潰されてありました。（PB19_00302　BCCWJ）

（19）（ランディング・サイトは：筆者注）ともかく抽象に先立ち、ごくわずかの干渉で流動するものを、配置されてあるかのように見せ掛けるよう、デザインされたものなのです。（PB45_00064　BCCWJ）

このように、ラレテアル文はテアル文と違って、ラレテイル文のように無意志的な行為や自然情景を表す場合もあれば、テアル文のように動作主の意図的な行為の結果を表す場合もある。こういった点から考えるとラレテアル文はテアル文とラレテイル文の性質を両方あわせ持っていると捉えられそうだ。また、ラレテアル文にはよりテアル文に近い性質を有するタイプと、ラレテイル文のようにより受身に近い性質を有するタイプが存在することが考えられる[3]。

４．ラレテアル文の類型　―動作主の意図の有無による分類

テアル文の意味を論じる際、「準備」や「有効性」、「意図性」という用語がよく用いられる（寺村 1984、益岡 1987、杉村 1996、吉田 2012 など）が、いずれも動作主の行為の結果が何らかの形で影響を与えているという意味を表すという点で共通している。杉村（1996）は、益岡（1987）のテアル文の分類（「A1、A2：(対象）ガ　～テアル」と「B1、B2：(動作主）ガ（対象）ヲ　～テアル」）を取り上げ、「が格の性質」による分類と「意図性」による分類は異なると指摘している。杉村（1996: 77）によると、「意図性」の観点からすると、A1、A2、B1の場合、話し手の関心は「対象の状態存続」にあるため、その

[3] 吉田（2012）は、ラレテアル文を直接受身文のテアル文と捉えている。また、ラレテアル文は、テアル文のように動作結果存続を表す「現存文」を表し、対象の存在が前面化される場合は「準備」を表す「意図達成文」を表し得ると述べている。

状態が何らかの目的のために作り出されたのかということは二次的な問題であるが、B2は話し手の関心が「行為の結果の有効性」にあるため意図性は一次的な問題になると論じている。この点について益岡（1987）は、B2型は行為指向性が強い表現で、「テアル表現に関してよく指摘される「準備」等の含意は B2型にもっとも顕著に認められるようである」（p.235）と記述している。

ラレテアル文もテアル文のように、対象となる主語の状態を描写する結果相を表すが、その状態の存続が動作主の意図を問題にしているか否かによって大きく二つに分けられる。次の例文（20）は、動作主の意図は不問で単に目の前に対象が置かれている状態を描写している「存在描写文」であるのに対し、例文（21）は動作主の意図のもとで行われた行為の結果状態を描写している「行為結果描写文」である。

（20）この版画作品の左下には「ふるさと　大道」の文字が刻まれてあった。
（PB32_00156　BCCWJ）

（21）空石の金庫は、それ自体が空石を加工したもので作られていて、池のすぐ上に静止浮遊してるわ。でも、厳重な魔力調整が施されてあるせいで、少しでも余計な重みがかかると下に沈んじゃうし（後略）。（LBp9_00057　BCCWJ）

以下では、このようなラレテアル文の「存在描写文」と「行為結果描写文」の構文的な特徴に注目し、その意味・用法について考察する。

4.1「存在描写文」の意味・用法

「存在描写文」は、動作主の存在は特に意識されず、動作主の意図も読み取れない文で、単に対象となる主語の状態を描写する結果相を表す。このタイプの文には、話し手の目の前にある対象の状態を表す「眼前描写文」と、目には見えないが存在するとされる抽象的な対象の状態を表す「非眼前描写文」がある。「眼前描写文」は眼前の現象をそのまま描写する時に用いられる文で、対象の視覚化が強く、動作主の存在は前面にあらわれない。基本的に物主語で場所ニ格句を必要とし、出現動詞や配置動詞に偏って見られる。存在表現に近い文でラレル文やラレテイル文に置き換えることができる。

（22）祭壇の上には、なにやら妖しい香りをたてる香炉やら剣やら、得体の知れない道具が置かれてある。（LBd9_00183　BCCWJ）

（23）定期購読している経済雑誌が数冊、書斎のソファーの前のテーブルに積まれてある。（PB49_00499　BCCWJ）

（24）雑誌か何かの記事でえー私はたまたま読んだんでありますけれども。アメリカのボストンの黄葉黄葉って黄葉ですね。黄色の葉の素晴らしさは日本の比ではないという記事が書かれてありました。（S10M0727　CSJ）

一方、次のように「非眼前描写文」の対象となる主語は抽象名詞で、名詞を修飾する連体形の構文が多く、書き言葉に偏って見られる。

（25）死とは日常と切り離されてあるものではなく、その延長としてあるものだと思う。（LBp7_00058　BCCWJ）

(26) それぞれの時代に、また、それぞれの地域に、性にまつわる固有の民俗が営まれてあったことを認めることなしには、真澄の残してくれたドキュメント＝記録に向かい合うことはできない。(PB12_00160　BCCWJ)

(27) いま与えられてあるものだけで感謝して満足する、足ることを知る、そのほうが人間らしいのではないか。(OB5X_00190　BCCWJ)

「非眼前描写文」は、意味的に受身表現に近い文で、通常ラレテイル文で表現されるが、あえて補助動詞「-テアル」をつけることで存在動詞「アル」の意味が反映されることになり、さらにその状態性が強まると考えられる。このタイプの文は、そもそも動作主の存在自体が不問で、単にある対象の存在を表す文でため、動作主の行為の結果を前提とする「眼前描写文」とは異なり、テアル形に置き換えることができない。

4.2「行為結果描写文」の意味・用法

「行為結果描写文」は、動作主が行った行為の結果に重点が置かれる表現で、動作主の意図が明らかに表れる文である。対象の視覚化の有無は問題にならず、動作主が意図して行った結果が存続する状態を表す。文中では、動作主の目的を表す表現「するために、するように」や、準備過程を表す副詞成分「こまごまと、綿密に、きちんと、隈なく、何度も、執拗に」などの共起が目立つ。述語動詞は、状態存続動詞（「備える、挙げる、残す、押す、吊るす、選ぶ、展示する、保管する、保存する、予約する、など」）や処置動詞（「施す、任せる、言う、考える、まとめる、指示する、説明する」）が多いが、出現動詞、配置動詞なども使われている。

(28) 左に後衛駆逐艦二隻の三列縦陣をくんでいた艦隊は、また単縦陣をとり、邀撃態勢を完全にととのえた。作戦も数々の夜戦の経験にもとづき、**綿密に**たてられてあった。(LBf9_00166　BCCWJ)

(29) 彼は巨大な図体を持ち黒い千貫の重量を持つ。彼の身体の各部はことごとく測定されてあり彼の導管と車輪と無数のねじとは**隈なく**磨かれてある。
(LBi1_00017　BCCWJ)

(30) 板橋区にはん中山道という大きな街道が通っております。本によりますと、板橋区というものを知る為に中山道という街道がとても重要なことが書かれてありました。(S09F1379　CSJ)

このように、「行為結果描写文」は動作主の目的や意図が顕著に表れる表現で、動作主の存在が前面化される。ある目的のための「事前準備」として行われる動作の結果状態を表すことから、能動的な性質を持つテアル文には置き換えることができるが、受身文のラレテイル文には置き換えることが難しい。

５．おわりに

本発表では、実例をもとにラレテアル文の構文的な特徴を明らかにすると共に、その意味・用法について考察を行った。その内容を簡単にまとめると、次のようになる。

① ラレテアル文の動詞は基本的に他動詞の意志動詞で、出現動詞と配置動詞に偏っており（全用例 659 件のうち約８割）、そのほとんどが位置を表す句や節を伴う。

② ニ格との共起が著しいことから、補助動詞「-テアル」における存在動詞「アル」の影響が大きいと考えられる。

③ 文の構造は、基本的に対象となる名詞が主語となる受動構造（「（対象）ガ　～ラレテアル」）で、主語は物名詞が約９割を示す。

④ ラレテアル文の意味は、述語動詞の有する意味に依存するところが大きいが、動作主の存在が意識されるか否か、また結果存続の状態が動作主の意図のもとで行われた行為の結果であるか否かも決め手の一つと言える。

⑤ ラレテアル文は、動作主の意図の有無によって「存在描写文」と「行為結果描写文」に大別される。

⑥ 「存在描写文」は可視化の有無で、さらに「眼前描写文」と「非眼前描写文」に分けられるが、「非眼前描写文」は基本的に動作主の存在自体が不問であるためテアル形に置き換えることができない。

⑦ 「行為結果描写文」は、動作主の目的や意図が顕著に表れる文で「事前準備」といった意味合いを表すため、ラレテイル文に置き換えることができない。

⑧ ラレテアル文は、テアル文とラレテイル文の性質を両方あわせ持っていて、存在表現に近い性質を有するタイプ（「眼前描写文」）とラレテイル文のようにより受身表現に近い性質を有するタイプ（「非眼前描写文」）、能動的な性質を持つテアル文に近い性質を有するタイプ（「行為動作描写文」）が存在する。

今回の調査では、「非眼前描写文」が書き言葉に偏って見られること以外は、書き言葉と話し言葉において出現する動詞や構文上の特徴に有意差はなかった。ただ、ラレテアル文が話し言葉より書き言葉に多く用いられる傾向があることは確かである。

【参考文献】

韓済蓬（2024）「「動詞の受動形＋テアル」構文についての一考察」『東アジア文化研究』（9）pp.221-235、國學院大學大学院文学研究科.

杉村泰（1996）「テアル構文の意味分析－その「意図性」の観点から－」『名古屋大学人文科学研究』（25）pp.73-96.

寺村秀夫（1984）『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版.

裵銀貞（2018）「結果を表す「受動動詞＋テアル」構文の出現様相の分析」『日本近代学研究』（60）pp.7-26、韓国日本近代学会.

益岡隆志（1987）『命題の文法』くろしお出版.

森貞（2001）「「他動詞受動形＋テアル」構文について」『福井工業高等専門学校研究紀要《人文・社会科学編》』(35) pp.21-26、福井工業高等専門学校.

吉田妙子（2012）「第４章 テアルとテイルの相互交渉と「受身形＋テアル」構文の出現条件」『日本語動詞テ形のアスペクト』pp.135-159、晃洋書房.

謡伝書における音声観察
――『音曲玉淵集』以外の資料から――

竹村明日香（お茶の水女子大学）

一．はじめに―『音曲玉淵集』に関して―

中世日本語の発音を知ろうとする際、近世の謡指南書である『音曲玉淵集』（享保十二年[1727]刊）が参照されることが少なからずある。本書の巻一・二には豊富な用例と共に連声・四つ仮名・ガ行鼻濁音・開合等についての記述があり、例えば、「つめ字」（促音）から母音へと移る夕行連声に関しては、次のような解説がある。

（一）一　つめ字よりうつりやうの事　凡そつめ字をチャトトウむれはをのつ音韻叶

○　あ　い　う　え　を
　　た　ち　つ　て　と
　　チャトモ　チエトモ　ト唱ヲ

月庵（クツタン）　佛意（フツチ）　悉有（シツツ）　法縁（ホウヤン）　佛恩（フツトン）　［後略］　（『音曲玉淵集』巻一）

しかし、「つめ字」に関する記述は、近世に流布した謡伝書『麗筆抄』（天正十一年［1583］）では、次のように簡素な記述となっている。

（二）一　つむる字へ　前の程をすこしおそく出して　はやく詰て　次の字へうつりたるよし
　　法花読誦のこゑ絶す愛別離苦のことわり　此等也　書尽されす

能楽研究で『音曲玉淵集』は、「編者の見識が発揮された独自性を持つ内容」（能研編一九九八：四一六頁）と評されており、実際その通り本書は当時出回っていた他の謡伝書とは毛色が異なる。

本書には、契沖などの国学の知見が取り入れられていること（宮澤一九四四他）、そして、「日常ではなくなっている音韻特徴と発音方法を詳細に解説する」（『日本語学大辞典』[1]）ものであるという見方が従来行われてきた。しかし近年、本書以外の謡伝書を調査した研究では、むしろ反対に、謡伝書の発音知識を国学者らが自著に取り込んでいること、また謡伝書は先進的な音声分析を行っていたことが明らかになりつつある（後述）。

本発表ではこうした点をさらに明らかにすべく、謡伝書における音声観察と、近世国学者におけるそれらの摂取状況を示したい。

二．室町後期以降の謡伝書の特徴――表・竹本（二九八八）より――

▶権威付けのために故人に仮託する傾向あり。師から相伝された伝書を、謡数寄の素人が合成・再編して再伝するため内容が没個性的。流派の特定ができない。

---

[1] 「音曲玉淵集」の項（坂本清恵執筆）、日本語学会編（二〇一八）『日本語学大辞典』東京堂出版、一〇五頁。

▶「ほとんどが能楽論にはほど遠い内容の語の技術指南書で、世阿弥・禅竹の音楽論とは明らかな一線を画し、禅鳳の論よりもさらに具体的かつ便宜的である。」（三一一頁）

一方で日本語学的観点から見ると、興味深い記述が随所に見られる。（以下、傍線部は筆者注）

三、例（一）濁音前鼻音

中世までは［ⁿŋa］［ⁿda］［ⁿba］のようにガ・ダ・バ行濁音に前鼻音が伴っていたことが知られている。濁音前鼻音に関する記述は、中世では『日本大文典』（1604-08年）のような外国人宣教師によるものが最も早く、日本人の手になるものとしては『以敬斎口語聞書』（1697-1731頃か）が最初とみられている（高山一九九八）。ところがそれより三十年ほど早い寛文二年［1662］刊の『謡鏡集』（別名：うたひ鏡）には、ガ行・バ行の濁音前鼻音を記したと見られる例がある。

（三）牙音の清音と云ハ。牙歯ともにひと敷ひらき舌を上あぎ（カミ）につけず。下ばのうちに付て。声を出す濁音と云ハ牙歯髄かに合て。はなの中く少声をかよハしてうたふ事なり

（『謡鏡集』「第一　五音清濁之事」）

（四）唇の音の清と云ハ上下の歯をひらき。舌を正中（マン）に置。急に声を出すなり。濁声と云ハ上下の歯を髄に合て。声を出すくしとおもふ時。鼻のうちく心をかけ（ヒカ）。声を出す事也

（『謡鏡集』　同右）

▶上巻のみ（元三巻本か）[2]　著者不明。版元「京　一条通新町西入」。

▶「先行諸書そのままの転載とおぼしき記事は皆無に近く、当世風に演繹して説き直され、（中略）貴人に所望されて清経の曲舞以後を謡った由が見え、どこかの段階で玄人が編纂に関与して成立したらしい。」（能研編一九九八、二八六頁）

四、例（二）アクセント

胡麻章でアクセントを示す例としては、世阿弥能本や近松浄瑠璃謡本がよく知られている（坂本二〇〇〇他）。金春禅竹『毛端私珍抄』にも「いぬ（犬）」の方言アクセントを述べた記述があるが、謡伝書の中には、より多くのアクセントを示した例がある。

▶奈良県宇山寺所蔵の金春家旧蔵伝書の一つ。仮綴大本。江戸初期の写しか。

▶伝・金春宗筠著『宗筠袖下』[3]記載後の数丁に、胡麻章付きで「いろは」順に並べた語彙やアクセント型ごとに並べた語彙が掲載されている。

【図一】『金春流詠口伝集　宗因袖下』（般若寺文庫二-019）

---

[2] 早稲田大学演劇博物館、神戸女子大学泰修文庫、野上記念法政大学能楽研究所（刊本の写し、鴻三七-113）、高知城歴史博物館山内文庫（書名『手多伊茂の』）に所蔵がある。

[3] 金春宗筠は、禅竹の子で、禅鳳の父である金春元氏。『宗筠袖下』は、全百ケ条の書で写本も多いが、内容からみて宗筠の著述であることは否定されている（表・竹本一九八八：三一三一三一四頁、能研編一九九八：一三二頁）。

主に、高アクセントを示す「－（平胡麻）」「＼（上げ胡麻）」と、低アクセントを示す「／（下げ胡麻）」を朱で附している。いろは順語彙は約二百語、数字が約二十語、「上下の文字」が約百語、「下ををとす文字の事」が約三十語、「中ををとす文字の事」が約二十語あり、「上下の文字」以降はアクセント型ごとに語を羅列している（※以下、Hは高アクセント、Lは低アクセントを示す）

（五）
－ －－ －
憚（HHH）　春（LH）　花（HL）　原（LH）　濱（HH）
＼ －＼ －
橋（HL）　生（HLL[4]）　葉（H）　（いろは語彙「は」の項）

（六）
＼ ＼ ＼ ＼ ＼ ＼ ＼ ＼ ＼ ＼ ＼ ＼
春ル　秋キ　夏ツ　冬ユ　空ラ　其方（世）タ　中ウ　経ネ　常ネ　（※傍線部アクセントは存疑）
＼ ＼ ＼ ＼ ＼ ＼ ＼ ＼ ＼ ＼ ＼ ＼
舞イ　酔イ　誠ト　露ユ　出テ　御ン　我レ　縁ン　只タ　（「上下の文字」）

（七）
＼ ＼ ＼ ＼ ＼ ＼ ＼ ＼ ＼ ＼
月キ　雪キ　花チ　波ミ　雲モ　清ミ　夏ツ　北タ　山マ
＼ ＼ ＼ ＼ ＼ ＼ ＼ ＼ ＼ ＼
天ン　音ト　寺ラ　歌ヲ　事ト　後ン　本ト　旅ル　又タ　（下ををとす文字の事）

「女（HHL）」（現代京アはHLL）等の例から、本資料は近世初期の京阪アクセントを反映していると見られる。単語をアクセント型ごとに分類をしようとする試みは、現代の「アクセント類別語彙表」とも通じるものがあり、分析観点として注目される。

五、『麈不抄』と『筆之次』

謡伝書の中で最も著名で、永く流布した謡伝書に『麈不抄』とその解説書の『筆之次』がある。

▶『麈不抄』：天正十一年［1583］年成立。一つ書きで謡・音曲関係の説を羅列し、謡の用語の解説が主体となっている。伝本多数。後代への影響力が大きい（能研編一九九八）。

▶『筆之次』：寛永十九年［1642］成立。進藤以三[5]著。『麈不抄』の本文を一つ書きで引用した後に解説を付す（辻一九八二a・b）。積極的に門弟に書き与えて同門の弟子たちへと伝播していったらしく、伝本多数（田草川二〇一二）。

---

[4] 《－／－》の胡麻章はHLLと解釈すべきことが坂本（二〇〇〇）でも指摘されている。

[5] 進藤以三（？－寛文二［1662］没）。進藤流の始祖・進藤久右衛門忠次の嫡男。舞台には立たず、寛永～元禄初年頃まで京都で素謡の普及・指導に努めた。近衛尚嗣や飛鳥井雅章の日記に以三の謡に関する記述が現れ

『音曲玉淵集』には「進藤以三」の名が見え、また「筆之次三」（巻四）という形で引用もしている（辻一九八二a）。その『筆之次』には発音に関する記述が頻出する。

五、一、アクセント核を表わす「アタル」

『筆之次』ではアクセントを説明する際、「アタル」という節名をアクセント核を表す術語のようにして用いている（竹村二〇二四）。「アタル」は一モーラ目を高く発音し、後続のモーラを低くする節である。

（八）源氏供養の曲舞に、心をかけてといふ心のなかのこの字を字あげて、世間にうたひなれたれども、あしきふしなり。はじめのこの字に、あたりてうたふべし。

（「文字なまりはわろし」）

（九）又関寺に、さゝなゝやはまの真砂へつくる共、此くの字のあたりやうにて、作の字に成てわろし。くの字をあげて、るの字さげて、るの字ひゞくやうに［※発表者補―くの字と］あたる、（中略）かやうにあたれば、盡の字になりてよし。（「しやうを文字にうたふといふは」）

「アタル」は中世から使用されていたと見られ、永禄三年［1560］奥書の謡伝書にも見られる。

（十）a．■［節曲］当。文字アタリ。此次ノフシ必ヲガル成。
b．一、「当」の字付ル事、一字はつて二字あさがる也。

（『節章句秘伝抄』所収「温泉彦次郎久長伝書」）

右の通り、『筆之次』では、下降を表す節である「アタル」を用いてアクセントの正誤を説いている。それは即ち、「単語のどこに下降があるか」というアクセント核の位置を問題にしているということであり、「語内の下降位置によりその語が同定される」という日本語アクセントの一特徴を近世の謡役者が認識していたことを表しているのである。

また本書では、「常にいふ詞（＝日常で言う言葉）」ではどうか、という記述が複数回見られる。

（十一）［※漢字の四声に合わせて謡うべきだと説いた後］但、かやうに四声のせんさくのゝにしては、一ふしもなるまじき也。故いかにといふに、常にいふ詞にもゝがひ多し。たとへば、［※発表者補―山の一字ではヤの部分が高くなるが］山姥と云時は、山といふやの字さがる也。

（『筆之次』「章句のならひの事」）

従来、『音曲玉淵集』では、中世からの伝承音が保存されていると見なされがちであった。しかし少なくとも近世前期に流行した進藤流の謡伝書では、「常（日常）」で用いる語のアクセントをも分析対象とし、日常語の発音を合理的に分析しようとする科学的態度を示していた事がわかる。

六、近世国学者と謡伝書―「分析の枠組み」としての間接的利用―

近年、謡伝書の発音分析が国学や歌学に取り込まれていたという指摘が行われている。

る。堂上公家衆の愛顧に支えられて活躍した（宮本二〇〇五）。江戸初期には進藤流謡本は観世流謡本に次いで多く刊行されており、観世座に並ぶ勢いであった（表一九六五）。

▶本居宣長『漢字三音考』（天明五年［1785］刊）の四声観は、『塵芥抄』の「チャワンテンモク（茶碗天目）」の四声観に由来する（竹村二〇二三）。

▶契沖の仮名遣書には、進藤以三著の謡伝書『筆之次』の利用の跡がある（竹村二〇二四）。

▶歌学書の四つ仮名に関する言説は、謡曲から流入している可能性がある（山田二〇二四）。

契沖や宣長は、「本文の引用」という直接的な形で謡伝書を利用せず、「分析の枠組み」として用いるという間接的な利用していると発表者は考える。つまり彼らの音声分析の背景には、謡伝書の発音知識が存在したと考えるのである。以下、その事例を二点挙げる。

六　ヱ・ヲは軽くオは重し　―オヲの軽重―

本居宣長の『字音仮字用格』（安永五年［1776］）における「喉音三行弁」と「おを所属弁」は、約八百年にわたる五十音図のオヲの位置錯誤を糺したものとして名高い。宣長は「喉音三行の区別を大枠開合で説明し、『於乎』については『皇国の音の軽重』という独自の概念を設定」（釘貫二〇〇七、百頁）することで解決を図った。

（十二）ソモ〳〵古ヘノ仮字ハサラニ開合ヲ以テ分ヶタルモノニハ非レドモ、自然ト開合ニテ分ル、理アリ、マヅ開口音ハオノヅカラ軽ク、合口音ハオノヅカラ重シ、〈此軽重ハ韻書ニ云トコロノ者ニ非ズ、御国ノ音ノ軽重ヲ以テ云也〉

（『字音仮字用格』「字音仮字総論」『本居宣長全集』巻五、三三七頁）

釘貫（二〇〇七）では「古代国語の発音を独自に規定した『軽重』のアイデアがどこからもたらされたのか詳らかにしないが、ア行ワ行の仮名の弁別を『軽重』で説明するのは武州麻布の遁危子『和歌童蒙抄』に先例がある」（九五頁）と述べる。

『和歌童蒙抄』は、宝暦四年［1754］刊のテニヲハと仮名遣いに関する書である（佐藤一九七六）。本書では確かに、左のようにオヲの軽重について触れている。

（十三）［前略］いろは四十七字の内　いゐ　をお　江ゑと同しこゑのあるはいはかうくゐはおもし。をは。かうくおはおもし。江はかうくゑはおもし。

（『和歌童蒙抄』、佐藤一九七六：五九頁より引用）

一方で、謡伝書でも「かろし」「おもし」は謡の基本的な用語として中近世に頻出する。

（十四）音曲をかろきおもきと云事　世上に申あつかひ伝る　いかん大方ハはやさをかろきといひ　しつかなるをおもきと申伝るか　此意得大事の相伝也

（『音曲口伝』「音曲に条々儀あり」永正十八［1521］年奥書）

（十五）一、惣別、うたひに、おもふ・かろいといふ事、よくしりたるがよし。

（『金春安照秘伝書』慶長十一［1606］年奥書）

（十六）惣別軽き字ハ小に　重きハ大成くし　［中略］　口伝の上　亦分別成くし

（『塵芥抄』「同四十余殺の口伝と云事有」）

宣長に先行する契沖は、稿本『和字正濫鈔』にて明確に、「音曲」を生業とする者が「オはヲより重い」と言っていることを記している（刊本では削除）。

（十七）〈冊頭〉わゐうゑお、此ゐうゑおの四字は、ゐは和以切、うは和宇切、ゑは和江切、おは和遐切にて、能生のわの聲既に尤も重けれは、所生のゐうゑお、本音のいうえをよりは重き理なり、音曲を業とする者、おはをより重しといふは、此理をきける欤、其外は沙汰なき欤〉　（自筆稿本乙本『和字正濫鈔』、全集十巻、二九八―二九九頁）

「音曲」が謡を指すとすれば、どのような記述があったのだろうか。その一例となるのが宝暦五年［1755］山岡孫三郎筆『謡遺秘蔵抄』[6]である。本書は、『和歌童蒙抄』刊行翌年の成立である。

（十八）一　文字あつかひ開合の事

附　色　当　色落　息当

カロシ　ト　オモシ　カロシ　ト　オモシ　カロシ　ト　オモシ　カロシ　ト　オモシ

いゐ　ゐ　を　ヲ　お　く　ク　え　し　シ　ち　チ

じやう　ちやう　そう　はう　きやう　けふ

じ　ぢ　よく／＼調分候事

色当やはらかにあたる　色落やはらかにおとす女に多し　息当のともりはなく返し当ル　（宝暦五年山本孫三郎筆『謡遺秘蔵抄』）

ただし記述内容には差が大きく、両者に影響関係は見出しがたい。仮名の軽重や開合、四つ仮名を記すことから、右の記事は先行する仮名遣書からの引用である可能性もある。しかし「し」と「ち」も軽重で捉えていること、節の説明も添えていることなどを勘案すると、仮名遣書とは別の、謡の世界におけるオヲの軽重に関する説を収めたものとも考えられる。宣長や契沖のオヲの軽重に関する言説は、こうした謡伝書の中から借用された可能性が十分想定し得るのである。

六、二、仮名を引くと母音が出る―長音における母音の析出―

宣長の「おを所属弁」では、五十音図のア行とワ行のヲとオの錯誤を修正するために、①於が安以宇衣と同類であること、②於が「お」に連なることを統一的に捉えようとした（釘貫二〇〇七、一一二頁）。その①の証拠として、「地名の引き母音として安以宇衣類とともに於類の仮名が用いられること」、神楽や催馬楽などの「長ク引テウタフ声」に於が用いられていることを指摘する。

（十九）［…］本国ヲ紀伊トカクガ如シ、「伊ハきゝ韻也」、［…］備中ノ郷名都宇［…］日向ノ郷名覩唹［…］をノ仮名ヲ加ゝズシテ、皆おニ用ル飫唹等ノ仮字ヲ加ゝタル（中略）凡テ韻ハあいうえおニ限レルコトナレバ、是又あ行ハおナル明証ナリ、

[6] 鴻山文庫三七―77。能研編（一九九八）によると山岡が師匠の厩橋修貞から許されて転写した本であるという。本書は、「観世大夫の法名列記や観世流演目記載からも、本書が観世流の人の手で編まれていることは確かである。厩橋修貞が観世流を嗜んだ人物で、黒雪の指導を受けた人物の編者などに基づいて編んだ書ではあるまいか。筆者の山岡はそれを忠実に転写しただけのようである」（二四三頁）とある。山岡、厩橋ともに未詳だが、山岡は江州の武士かと推測されている。山岡は寛延四年山岡孫三郎筆『謡書』（鴻山文庫三七―42）も残している。

（『字音仮字用格』「おを所属弁」『本居宣長全集』巻五、三三二頁）

（二十）又神楽サイバラ歌ノ古本ニ、長ク引テウタフ聲ニハ、各其韻ノ安以宇衣於ノ字ヲ下ニ添ヘテ書ルニ、こそとのほもよろをノ聲ニハ、ミナ於ノ字ヲ添タリ、求子ノ歌ニ、安波禮袁千者也布留賀袁能也之呂於［中略］云々　（同右）

特定の音節（仮名）を引くと母音が出るという記述は、謡伝書にしばしば見られる。『筆之次』を含む『麗不抄』系謡伝書においては、「文字うつり」の条に現れる。

（二十一）此うつり［※発表者補―文字うつり］の事、たとへば井筒に、何の音にか、此のより、音のをに取つく程也。のをひけば、をの字出る也。［中略］又、二字うつりと云も、たとへば江口に、捨人をおもふ、此捨人のとより、をの字出るうくに、又をの字二つ有。［中略］きの字にいの字出、くの字にうの出る也。　（『筆之次』「文字うつりとハ」）

（二十二）是ハ何にても字を引候くハあとに一字つゝ字をうむ物なりたとへば　らの字を長く引候くハあの字出きたとくハさひしき道すから秋のかなしみと云所　らの字を引　あの字を云にをよばさるや　（『謡伝書（謡書）』「文字うつり」　慶安三年［1650］刊）

契沖『和字正濫鈔』巻一では、梵字の説明において、音を引けば摩多（母韻）になることを述べる。ここでは『筆之次』（二十一）と同じくカ行の例を挙げている点が注目される。特に自筆稿本（乙本）では仮名を用いて書いていることから、『筆之次』と類似性が高い。

（二十三）枳を引けば伊となり。倶を引けは宇となり。計を引けは曵（え）となり。古を引けば遠となりて。韻皆摩多の声に帰（ひしき）る故。点畫すなはち韻なり。

（刊本『和字正濫鈔』十一ウ、『契沖全集』巻十、一一八頁）

（二十四）〈（朱）きを引けはいとなり・くを引けはうとなり、けを引けはえとなり、こを引けはをとなりて〉ひゝき〈（朱）旨〉摩多の声〈（朱）に帰〉（とな）る故・点畫すなはち韻なり．

（自筆稿本乙本『和字正濫鈔』九ウ、『契沖全集』巻十、一二九頁）

宣長や契沖の記述を読むと、地名や催馬楽、梵字などの例から母音の析出に気づいたかのように受け取れる。しかしこれらは検証材料として挙げているだけであって、「仮名を引けば母音が出る」という着眼点そのものは、検証以前から謡や謡伝書を通じて知っていたとしても不思議ではない。彼らは謡伝書の発音知識を援用し、演繹的に検証を行ったとも考えることができよう。

勿論、謡伝書では引き母音を「を」としており、「お」を想定した宣長の理解とは隔絶している。宣長は謡伝書の記述を盲信するのではなく、音声的分析として信用に値する部分のみを「分析の枠組み」として利用したと言えよう。つまり引用のような直接的利用ではなく、間接的利用である。その態度は『筆之次』の不整合な部分を削除し、合理的な部分のみを仮名遣書の記述に利用した契沖とも通じている（竹村二〇二四参照）。

近世において謡伝書は、当代語をも分析対象とした先進的な音声観察を行っていた。国学者らはそこから学び取り、有用な部分だけを間接的に利用する手法を採ったと考えられるのである。

七、まとめ

一、近世初期の謡伝書では、調音音声学的な分析や、アクセント型の体系的把握を行うなど先進的かつ合理的な試みを行っていた。特に『筆之次』では「アタル」という節名で語のアクセント核を示す他、日常語の分析も行っている。

二、近世国学者らは謡伝書の発音知識を間接的に利用している。契沖や宣長の著述に現れる「オヲの軽重」や「長音化による母音の析出」という観点は、謡伝書でなじみのある内容であり、彼らは分析の枠組みとしてそれらを利用したと見られる。

【参考文献】※傍線部の略称名を用いたものもある。

岩淵悦太郎（一九四四）「謡曲英音資料としての謡曲英華抄」橋本博士還暦記念会編『国語学論集』、岩波書店

表章（一九六五）『鴻山文庫本の研究』わんや書店

表章・竹本幹夫（一九八八）「四　室町後期・江戸初期の伝書とその特質」『岩波講座　能・狂言Ⅱ　能楽の伝書と芸論』岩波書店

釘貫亨（二〇〇七）『近世仮名遣い論の研究』名古屋大学出版会

坂本清恵（二〇〇〇）『中近世音調史の研究』笠間書院

佐藤宣男（一九七六）「和歌童蒙抄――翻刻――」『藤女子大学国文学雑誌』一九

田草川みずき（二〇一二）『浄瑠璃と謡文化――宇治加賀掾から近松・義太夫へ――』早稲田大学出版部

竹村明日香（二〇一三）「宣長と謡伝書――『漢字三音考』にみる四声観の根取――」第一回日本文献研究会発表資料

竹村明日香（二〇一四）「契沖の仮名遣書における『麈芥抄』系謡伝書『筆之次』の利用の跡」第一三四回国語語彙史研究会発表資料

高山知明（一九九八）「十七世紀末の前鼻音の実態について――『以敬斎聞書』『和字正濫鈔』の再検証――」『香川大学国文研究』二十三

辻宏一（一九八一a）「資料紹介　筆の次」『芸能史研究』七八

辻宏一（一九八一b）「進藤以三の謡の特徴について―謡本と『筆の次』を中心に」『国語と国文学』五九―一

野上記念法政大学能楽研究所編（一九九八）『鴻山文庫蔵能楽資料解題（中）「第二部　注釈書・伝書」他』野上記念法政大学能楽研究所

宮本圭造（二〇〇五）「第五節　進藤家の人々」『上方能楽史の研究』和泉書院

山田昇平（二〇一四）「『うむの下濁る』という言い習わしの歴史」『国語国文』九一―一

【調査資料（引用したものに限る）】（鴻山文庫＝鴻、般若寺文庫＝般）※引用順に掲載。

三浦庚寅著・濱田敦編並開題（一九七五）『音曲玉淵集』臨川書店、『麈芥抄』金泥装紙本（鴻二七-10）、『謡鏡集』（神戸女子大学森修文庫本）、『金春流詠口伝集　宗因袖卜』（般二-019）、謡の秘本『筆の次』（彦根城博物館葵堂文庫本。引用には辻一九八一aを用いた）、表章校訂・法政大学能楽研究所編（一九七三）『能学資料集成二・細川五部伝書』わんや書店（※『節章句秘伝抄』収録）、表章・小田幸子校訂・法政大学能楽研究所編（一九七八）『能学資料集成九・金春安照伝書集』わんや書店、久松潜一校訂代表（一九七三）『契沖全集　第十巻』岩波書店、大野晋担当編者（一九七五）『本居宣長全集第五巻』筑摩書房、宝暦五年山本孫三郎筆『謡道秘蔵抄』鴻二七-77、慶安三年刊『謡花伝書』（「謡書」）鴻二七-38

付記：本発表は、科研費19K13200、24K03916の研究成果の一部である。

「動くと撃つぞ」型条件文について

――近世期以降のト条件文における例外――

竹林栄実(たけばやしえいみ)(東京大学大学院生)

1．はじめに

現代語において順接仮定条件を表すト条件文は「*夏休みになると絶対海に行く(ぞ)」という文が成り立たないように、文末に意志表現は現れないとされる(ソルヴァン・前田 2005 等)。ただし、例外的に「動くと撃つぞ」のような文が成り立つという指摘がある(角田 2004、日本語記述文法研究会 2008、前田 2009 等)。

また、時代を遡ると、近世期の狂言台本においては「早々国元へ行ト迎ヲ登セウ　心ヲ慰テマタシマセ」(狂言・保教本 墨塗)のような、ト条件文の文末に意志表現が現れる例が見られることを小林(1996)が指摘している(小林 2002 にも同様の指摘がある)。

これらの事実を踏まえ、本発表は文末に意志表現が現れる順接仮定条件のト条件文について、近世期[1]～現代までの様相を明らかにすることを目的とする。なお、本発表では、意志表現は、話し手が意図してなそうとする、話し手によってコントロール可能な動作の実行を表明しているものと定義する。具体的な形式は、仁田(1991)や土岐(2010)を参考に、動詞の終止形・意志形(例：「明日こそは 1 人で旅行に｛行く／行こう｝」)および意志・否定意志を表す助動詞「ない」「ず」「まい」「む」「べい」(例：「宿題が終わるまで遊びには｛行かない／行くまい｝」)とする。

2．調査の方法と結果

調査は江戸・東京語を中心に行い、用例は【調査資料】に示した資料から収集した[2]。調査の

---

[1] 順接の接続助詞「ト」は、近世初期の成立とされている(岡崎 1980 等)。中世末期の口語日本語を反映しているとされる虎明本狂言にも例が見られるものの、主に(i)のようにト書きに使用されており、会話文中にはほとんど現れず、意志表現を伴う例も見られないため、本発表では扱わない。

(i)こしらへ出きて、かつこになり、笛ふきいだす**と**、になひ茶屋を、橋がかりへもつてのく。

(虎明本狂言・煎物・40-虎明 1642_01023,14610)

なお、虎明本狂言において、文末に意志表現を伴う例は、タラバ条件文やバ条件文に見られる。

(ii)「にくひ事をいふ、そのつれな事いふ**たらば**、此宿にはおくまひぞ」

(虎明本狂言・老武者・40-虎明 1642_01027,14410)

(iii)「そちがゆかふ**ば**身共も行」　(虎明本狂言・宗論・40-虎明 1642_06026,14500)

[2] 用例の検索方法は以下の通りである。得られた用例はすべて目視で確認し、本発表で調査の対象としない用例は除いた。

キー：語彙素を「と」、品詞の小分類を「接続助詞」に指定(「ト」)。語彙素を「た」「たり」、品詞の大分類を「助動詞」、活用形を「未然形」「仮定形」に指定(「タラ(バ)」)。後方共起(キーから 10 語以内)：品詞を「動詞」、活用形を「終止形」「意志推量形」／品詞を「助動詞」、活用形を「終止形」「意志推量形」、語彙素を「ます」「ちまう」「ない」「ず」「まい」「む」／語彙素を「べい」に指定。ただし、「近松浄瑠璃」「洒落本」「人情本」「落語 SP 盤」は意志表現がキーから 10 語以上後に現れる例も目視で拾った。

結果、近世期において、文末に意志表現が現れる順接仮定条件のト条件文の多くは前後件に以下の特徴が見られることが分かった。まず、前件は聞き手が意志を持ってなす動作((1)(3))、あるいは聞き手に成立の責任があると話し手が考える事態((2)(4))である。そして、後件は当然すべて話し手の意志的動作であるが、その事態が聞き手にとってマイナスな場合((1)(2))とプラスな場合((3)(4))に分かれる。結果として(1)(2)は聞き手が事態を実現させるとマイナスなことが起きるという脅し表現、(3)(4)は聞き手が事態を実現させるとプラスなことが起きるという行為誘導の表現になる[3]。

このような特徴に着目し、下記のような分類の枠組み A～D を設定する[4]。これに当てはまらない、(5)のように前件の事態成立に聞き手の関与がないタイプを E とする。この枠組みに沿って、近世期～現代語の用例数を表 1 にまとめる。

A：［聞き手の動作］ト［聞き手にとってマイナスな話し手の動作］

(1)「あんまり寐なんす**と**くすぐりえすよ」　（洒落本・駅舎三友 1779）

B：［聞き手の責任事態］ト［聞き手にとってマイナスな話し手の動作］

(2)「詮議の仕様が手ぬるい**と**此斎藤次祐家が、鎌倉表へ言上いたすぞ」

（江戸歌舞伎・御摂勧進帳 1773）

C：［聞き手の動作］ト［聞き手にとってプラスな話し手の動作］

(3)「坊さんになる**と**おいらが又可愛がつてやるよ」

（人情本・春色梅児与美 3 編 7・53-人情 1833_02007,48670）

D：［聞き手の責任事態］ト［聞き手にとってプラスな話し手の動作］

(4)「むむ／＼当て見な／＼。すつかり当る**と**おごるぜ」

（人情本・春色辰巳園 2 編 5・53-人情 1834_04005,52350）

E：A～D 以外[5]

(5)「何でも夜が明る**と**畳まで上て見やう」

（人情本・花廼志満台 3 編中・53-人情 1837_01008,73360）

表 1 をみると、文末に意志表現が現れるト条件文は、一般的な仮定条件文として想定される E タイプの例が 1 割程度と比較的少ないのに対し、A タイプは 7 割以上を占めており、A タイプが中心的であることが分かる。これは、以下に示す文末に意志表現が現れるタラ(バ)条件文の用例

---

[3] 「金を出せ**ば**、命だけは助けてやる」(堀 2004:123)のような、前件が聞き手の動作や責任事態で後件が聞き手にとってプラスの事態の文(C・D タイプ)も脅しを表すことが可能であるが、本発表の調査範囲のト条件文においてはそのような用例は見られないため、A・B タイプのみ脅し表現として扱う。

[4] 用例を示す際は、句読点を附すなど読みやすいように適宜改める。

[5] E タイプには、(5)のように、後件がニュートラルな事態で単なる予定を表す例だけでなく、「君の事は何でもこっちに分ってるから、もし悪い事がある**と**、僕からお父さんの方へ知らせてやるぜ、好いかね」(青空・夏目漱石『明暗』「朝日新聞」1916)のように後件がプラスやマイナスの意味を持つが前件が聞き手の動作や責任事態でない例が含まれる。

数をまとめた表２と比較することでより明らかになる。タラ(バ)条件文の場合、(6)のような E タイプの例が７割以上を占め、A～D タイプの中でも A タイプに集中するわけではなく、ト条件文とは対照的である。

(6)「わたくしも些やすみまし**たら**、坊をつれて梅屋しきの七くさから蓮華寺の大師さまへお参り申ませう」　（人情本･仮名文章娘節用 ３編上･53-人情 1834_05007,101790）

表１　文末に意志表現が現れるト条件文の用例数(江戸・東京語)

	A		B		C		D		E		合計
江戸笑話	3										3
江戸歌舞伎	10		3								13
花暦八笑人	2									1	3
洒落本	17								1		18
人情本	7		1		1		1		3	1	14
滑稽本	1									1	2
近世期合計	40[75.5%]		4[7.5%]		1[1.9%]		1[1.9%]		7[13.2%]		53[100%]
雑誌-文芸	5		1						1	1	8
小説									1		1
教科書	4										4
落語	2										2
雑誌・新聞・初期口語-非文芸	6								4		10
青空-小説	25		1		2				3		31
青空-戯曲	10										10
明治・大正期合計	52[78.8%] (17[68%])		2[3%] (1[4%])		2[3%] (0[0%])		0[0%] (0[0%])		10[15.2%] (7[28%])		66[100%] (25[100%])
現代語　合計	106[93.8%]		1[0.9%]		2[1.8%]		1[0.9%]		3[2.7%]		113[100%]
総計	198[85.3%] (57[73.1%])		7[3%] (5[6.4%])		5[2.2%] (1[1.3%])		2[0.9%] (1[1.3%])		20[8.6%] (14[17.9%])		232[100%] (78[100%])

※各タイプの左側は無標形、右側は有標形(「う」「まい」「む」「べい」)の用例数を示している。
※タラ(バ)条件文(表２)との比較のため、「明治・大正合計」の行の()内は「青空文庫」を除いた用例数を、「総計」の行の()内は「青空文庫」と現代語の用例数を除いた用例数を示している。
※「黄表紙」「新聞-文芸」「初期口語-文芸」は用例が見られないため表には含んでいない。

表２　文末に意志表現が現れるタラ(バ)条件文の用例数(江戸・東京語)

	A		B		C		D		E		合計
江戸笑話	1							1			2
江戸歌舞伎	1										1
黄表紙								1			1
洒落本	1					1		1	1	6	10
人情本	1				1		1	2	9	12	26
滑稽本					1					5	6
近世期合計	4[8.7%]		0[0%]		3[6.5%]		6[13%]		33[71.7%]		46[100%]
雑誌・新聞-文芸	3				2	1	3	3	27	22	61
小説			1						17	10	28
教科書			1				2		2	5	10
落語							1	2	4	2	9
雑誌・新聞-非文芸	2		1		1	1		1	7	15	28
明治・大正期合計	5[3.7%]		3[2.2%]		5[3.7%]		12[8.8%]		111[81.6%]		136[100%]
総計	9[4.9%]		3[1.6%]		8[4.4%]		18[9.9%]		144[79.1%]		182[100%]

※各タイプの左側は無標形、右側は有標形(「う」「まい」「む」「べい」)の用例数を示している。
※「花暦八笑人」「初期口語-文芸」「初期口語-非文芸」は用例が見られないため表には含んでいない。

３．分析

3.1　近世期の様相

A タイプのト条件文の特徴として、前件は(7)のようにまもなく実現しそうな将然の事態であるか、(8)のように既実現の事態である場合が多いことが挙げられる。それに対し、タラ(バ)条件文にはそのような偏りは見られない(明治・大正期には、前件には既実現の事態は見られず、生起するかどうか不明な事態が近世期より多く現れている)。特に、前件が既実現の事態である文は、基本的に未実現の事態を仮定するものである仮定条件文としては特殊である。

(7)「重てうなりおる**と**くらわすぞ」　(江戸笑話・聞上手 1773)

(8)「そのやうにさわぐ**と**おさつどのにつげるぞ」(洒落本・郭中奇譚・52-洒落 1769_01001,37400)

(9)「うそをつき、そちへ呼ふ**だら**、かゝ様にいふて、おんをひかへるぞ」

(江戸笑話・きのふはけふの物語 下 1596～1645 頃)

また、C・D タイプのト条件文は、「庭掃除をしてくれたら、お小遣いあげるよ」のような、前件が話し手の強い希望である典型的な行為誘導(いわゆる、餌で釣って行動を促すタイプ)とはやや性質が異なる。もちろん、前件は話し手の希望する事態ではあるが、たとえば(4)の「当てる」という事態は、上に挙げた例ほどは希望度が高くないように思われる(明治・大正期においても同様の傾向で、(14)も、飴屋の、飴を買った子供に対しての発話であり、子供が「おとなしくしている」ことが飴屋にとって大きなプラスになるわけではない)。これに対して、タラ(バ)条件文の場合は、ト条件文と異なり(10)(11)のような典型的な行為誘導の例も現れている。

(10)「…其盗人の時次郎といふやつがこつちの方へうろついてこべいから、からめ捕て出し**たら**ほうびの金は望次第やるべい」　(人情本・明烏後の正夢 4 編 12・53-人情 1824_08012,5730)

(11)「此湯壺の中へ、面妖不思議の玉を落したり。あわれ取り得**たらば**、汝、われが夫妻にせん」

(江戸笑話・鹿の子餅 1686)

3.2　明治・大正期の様相

〔明治・大正期の用例〕

A：(12)「あら、お隠し遊ばす**と**くすぐりますよ」　(青空・泉鏡花『照葉狂言』「読売新聞」1896)

B：(13)「...母に眼前で泣かれて、お前の浮沈に委せて居るのだから、お前に萬一の事でもある**と**、私も淵川へ身を捨ると云はれると、自分の思ふ儘にばかりもされぬ」

(60M 太陽 1901_01029,114000 広津柳浪『櫨紅葉』1901)

C：(14)「さあ、おいしい飴ですよ。これを食べて、おとなしくして居て下さる**と**、復た私が飴をかついで來てあげますよ」　(青空・島崎藤村『ふるさと』1920)

D：なし

E：(15)「この通り出発が急になッて、明日はおそくも帰艦せにゃならんです。一月ぐらいする**と**帰って来ます」　(青空・徳冨蘆花『小説 不如帰』1898-99)

明治・大正期においては、D タイプ以外はすべてのタイプが見られ、基本的には近世期の様相と類似している。ただ、B タイプの例は近世期と異なり、引用句内に現れる例しか見られない。

引用句内の発話は、実際に文末に意志表現が置かれて発話されたという確証はないため、引用句に入らない用例とは異なり確例として認定しにくい。また、C タイプの例は 1 作品の 2 例しか例が見られない。総合すると、B・C タイプは A タイプと比べて、実際に発話する文として豊富に存在していたとは言い切れない。

3.3　現代語の様相

〔現代語の用例〕

A：(16)「少し口留め料を出さねえ**と**、かみさんに告げ口するぞ」

(LBl9_00054,8560 南英男『暴き屋』1997)

B：(17)「…しまいには、正しく話せるようにならない**と**、もういっしょに住んでやらないぞ、なんて言って脅かしたよな」(LBg9_00195,83850 ジョギンダー・バウル(著)/工藤道子(訳)/岳真也(編訳)『現代インド短篇小説集』1992)

C：(18)お好み焼き屋「ぴいぷる」の、「一円硬貨ばかりで料金を払う**と**、半額にします」という作戦がユニークだ。　(昭和・平成-雑誌 80M 文春 1989_07080,570・『文芸春秋』目・耳・口 1989)

D：(19)「糸ちゃん、望みが叶う**と**、よ、もやいの石鹸なんか使わせやしない。お京さんの肌の香が芬とする、女持の小函をわざと持たせてあげるよ」

(青空・泉鏡花『薄紅梅』「東京日日新聞」「大阪毎日新聞」1937)

E：(20)「草を取る**と**また寝床にもそれを(えーしんー)しようと思ってますね」[6]

(話し言葉 S07M0867,24200・生年代 1935-39,収録時の年齢 65-69)

(21)「門限は夜十一時半ですわ。門限を過ぎる**と**玄関をしめますから、気をつけてください」

(LBq2_00072,10910 中村智志/富士森和行『新宿ホームレスの歌』2002)

現代語においては、近世期～明治・大正期以上に A タイプに用例が集中する(93.8%)が、B～E タイプも見られる。ただ、(17)(18)(20)は引用句内に現れており、実際の発話から遠ざかっていると思われる。また、(18)(21)の場合、「こういう場合にはこうすることになっている」という制度説明を表しており、話し手個人の意志とは捉えにくい。また、(19)は昭和初期の例である。挙例していない C・E タイプの用例も同様であり、このようなことから、現代語において生産的に使用されているのはAタイプのみであると考えてよいであろう。

3.4　3 節のまとめ

下記の 2 点から、ト条件文と A タイプの脅し表現の結びつきの強さがうかがえる。

・近世期～明治・大正期にかけて文末に意志表現が現れるト条件文とタラ(バ)条件文を比較すると、タラ(バ)条件文と異なり、ト条件文は A タイプの例を中心とする。

---

[6] (20)のように、近世期～現代語のト条件文の E タイプには、前件が話し手の動作である例もわずかながら見られる。現代語においては、前節述語が意志的で後件が表出であり、前後件の主体が同一の場合、「タラ」「ナラ」のみが使用される(ト条件文は使用されない)という指摘が前田(2009:64)にあるが、その例外といえる。

・現代語において、目の前の聞き手に対する個人的な発話として生産的に使用される、文末に意志表現が現れるト条件文は、A タイプのみである。

4．考察

4.1　脅し表現の広がり

ト条件文による脅し表現は、(22)～(25)のように文末に意志表現が現れないものもあり、本発表で扱った文末に意志表現が現れるタイプの文より広い範囲で成立している。しかし、文末が意志表現であるものも、そうでない(22)～(25)のようなものも、ト条件文による脅し表現は前件が聞き手の動作であるものが多数を占める点で共通している。２・３節で示した B タイプのように、前件が聞き手の動作でなく聞き手の責任事態の場合、一定の責任があるとはいえ聞き手の意志で完全に事態をコントロールすることはできないため、聞き手を脅したとしても前件事態の成立を防げるわけではない。脅し表現による前件事態の成立回避というのは、A タイプのように聞き手が事態の成立をコントロールできる場合において効果的なのである。

(22)「身うごきする**と**命がないぞ」　（江戸歌舞伎・御摂勧進帳 1773）

(23)「そんなら申いすから。いやといゝなんす**と**、すみいせんにへ」　（洒落本・一事千金 1777）

(24)「一抵手前は誰の子だ、親を棄る**と**天罰があたるぞと、肱枕して鼾を作るに、…」
（60M 太陽 1895_07030,95840・大橋乙羽『子煩悩』1895）

(25)友達からは「そんなに仕事をする**と**死ぬぞ！」と言われていたのに、次の日も休日出勤で出かけて…　（PB55_00209,29000・伊藤欽次『あなたの知らないトヨタ』2005）

また、脅しを表す際、「動いたら撃つぞ」(角田 2004:48)「金を出したら、命だけは助けてやる」(堀 2004:123)のように「タラ」を使用すると「「もし仮に」といった含みが生じて「現実性」が薄れ、脅迫する言葉の威力が弱まる」(角田 2004:48)、「脅しとしては前件と後件の緊張感に欠け、迫力のないものになる」(堀 2004:123)という指摘があり、タラ条件文には見られない、脅し表現との親和性がト条件文にはあるものと考えられる。したがって、ト条件文と「動くと撃つぞ」のような脅し表現の結びつきの強さの背景を明らかにするためには、ト条件文と前件が聞き手の動作である脅し表現全体の関係性について検討する必要がある。

4.2　脅し表現とト条件文の結びつき

近世期以降のト条件文について、矢島(2013)は、確定条件文に関する言及であるものの、前件が起こった後自動的に後件が起こることを表すのをト条件文の本質的な特性と見ている。現代語のト条件文については、益岡(1993)が「ト形式の文の基本は、前件と後件で表される二つの事態の一体性を表す点にあると見ることができる。前件で表される事態と後件で表される事態とが継起的に実現するものとしてわかちがたく結びついていることを表す」(p.14)と述べている。それは、未実現の事態を表す場合についても言えることで、「後件の事態が前件の事態に連動して起こるという意味において二つの事態が一体の事態であるということが強調されている」(p.16)としている。つまり、「ト」はもともと自動的な継起を表しており、それが条件表現としての一体性に結びついたのだと思われる。

そして、ト条件文と脅し表現との結びつきは、「ト」の持つこの「自動的な継起関係を表す」「前後件の事態の一体性を表す」という性質に支えられていると考えられる。脅し表現というのは結局のところ、前件事態の成立を抑止することを目的とする。ト条件文を用いて、前後件は一体的であり、聞き手が前件を起こすと聞き手にとってマイナスな後件が自動的に生起するということを強調することで抑止力を強め、脅しの効果を最大限に高めることが出来る。ここに、ト条件文を用いて脅しを表現する動機がある。また、同じ脅し表現でも、Bタイプは聞き手の行為を抑止するものではなく、行為誘導(C・D タイプ)や E タイプ[7]は脅しのように差し迫った緊急性がないため、前後件の一体性を強調する動機がなく、したがって、近代以降「ト」と「タラ」の文末モダリティ制約の有無がはっきり分かれていく(竹林 2024)中であえてト条件文を選択することなく、文末に意志表現が現れても構わない「タラ」を使用すれば済むのである。

5．おわりに

本発表では、文末に意志表現が現れる順接仮定条件のト条件文について、近世期～現代までの様相を明らかにした。調査・考察の結果を以下にまとめる。

①文末に意志表現が現れるト条件文は、近世期～明治・大正期において、タラ(バ)条件文とは対照的に、一般的な仮定条件を表す E タイプは少なく、聞き手に対する脅し(A タイプ)が中心的であり、脅しを表すという役割を積極的に担っていた。近世期～明治・大正期にかけて少数用例が見られた B～E タイプも現代語においては量・質的な面で減少し、個人間の発話として生産的に用いられているのは脅し(A タイプ)のみとなる。

②脅しの表現がどの時期においても文末に意志表現が現れるト条件文の中心的なタイプとして現れ、モダリティ制約の例外として現代語にも残っているのは、「自動的な継起関係を表す」「前後件の事態の一体性を表す」という性質を持つト条件文の使用により、前後件が一体的で連動して起こる事態であるということを強調することで前件事態(聞き手の動作)に対する抑止力を強め、脅しの効果を最大限に高めることが出来るためであると考える。

現代語のト条件文は、タラ(バ)条件文など、他の条件文に比べてモダリティ制約が強いことが知られている(宮島 1964、鈴木 1978、稲葉 1991、益岡 1993、蓮沼・有田・前田 2001、ソルヴァン・前田 2005 等)。本発表はその例外である文末に意志表現が現れるト条件文について以上の点を明らかにすることによって、このモダリティ制約の内実の一端を示したものである

[7] E タイプの用例について、ト条件文はタラ(バ)条件文に比べ、前件がまもなく起こりそうな事態であることが多い。前件事態が起こるかどうか不確実であるという仮定条件らしい仮定条件は、タラ(バ)が典型的に表すのに対し、ト条件文は前後件の事態が一体的に起こることを表すのが本来的な性質であり、益岡(1993:16)に指摘があるように、「ト形式が仮定表現の側面を持つのは派生的なものであるに過ぎない」と思われる。

【調査資料】
・中世期
国立国語研究所『日本語歴史コーパス』(ver.2024.3,https://clrd.ninjal.ac.jp/chj/)(「狂言」) *
・近世期
国立国語研究所『日本語歴史コーパス』(ver.2024.3,https://clrd.ninjal.ac.jp/chj/)(「近松浄瑠璃」「洒落本」「人情本」) *
花暦八笑人(『花暦八笑人』岩波書店　より) *
金々先生栄花夢／高漫斉行脚日記／手前勝手御存商売物／御手料理御知而巳大悲千禄本／順廻能名題家莫切自根金生木／江戸生艶気樺焼／文武二道万石通／孔子縞于時藍染／大極上請合売心学早染艸／敵討義女英(『黄表紙　洒落本集』岩波書店　日本古典文学大系 62　より) *
参会名護屋／傾城阿佐間曾我／御摂勧進帳(『江戸歌舞伎集』岩波書店　新日本古典文学大系 96　より)
きのふはけふの物語　上／きのふはけふの物語　下／鹿の巻筆／軽口露がはなし／軽口御前男／鹿の子餅／聞上手／鯛の味噌津／無事志有意(『江戸笑話集』日本古典文学大系 100　岩波書店　より) *
酩酊気質　上／酩酊気質　下／浮世床(『洒落本　滑稽本　人情本』小学館　新編日本古典文学全集 80　より) *
遊子方言／辰巳之園／婦美車紫鹿子／青楼楽美種／寸南破良意／郭中掃除雑編／妓者呼子鳥／遊北穴知鳥／花売新駅／世説新語茶／広街一寸間遊／傾城買指南所／契情買虎之／大通秘密論／胡蝶夢／一事千金／廻覧奇談深淵情／伊賀越増補合羽之竜／駅舎三友／粋町甲閨／南客先生文集／貧幸先生多佳余宇辞／当世真似山気登里／芳深交話／遊婦里会談／風俗砂払伝／喜夜来大根／娼註銚子戯語／通仁枕言葉／にやんの事だ／大劇場世界の幕なし／山下珍作／古契三娼／志羅川夜船／閨中狂言廓大帳／傾城買四十八手／繁千話／娼妓絹麗／せいろうひるのせかい錦之裏／傾城買二筋道(『洒落本大成』中央公論社　より) *
・明治・大正期
国立国語研究所『日本語歴史コーパス』(ver.2024.3,https://clrd.ninjal.ac.jp/chj/) *
「青空文庫」(https://www.aozora.gr.jp/)
・現代語
国立国語研究所『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(ver.2021.3,https://chunagon.ninjal.ac.jp/bccwj-nt/) *
国立国語研究所『日本語話し言葉コーパス』(ver.2018.1,https://chunagon.ninjal.ac.jp/csj/)
国立国語研究所『日本語日常会話コーパス』(ver.2023.3,https://chunagon.ninjal.ac.jp/cejc/)
国立国語研究所『昭和話し言葉コーパス』(ver.2022.2,https://chunagon.ninjal.ac.jp/ssc/)
国立国語研究所『名大会話コーパス』(ver.2022.10,https://chunagon.ninjal.ac.jp/nuc/)
国立国語研究所『現日研・職場談話コーパス』(ver.2018.3,https://chunagon.ninjal.ac.jp/shokuba/)
国立国語研究所『日本語歴史コーパス』(ver.2024.3,https://clrd.ninjal.ac.jp/chj/)
国立国語研究所『昭和・平成書き言葉コーパス』(ver.2023.5,https://chunagon.ninjal.ac.jp/shc/) *
「青空文庫」(https://www.aozora.gr.jp/)／岩松了(2022)『岩松了戯曲集 1986-1999』リトルモア／大石静、市川森一(2024)『月刊 ドラマ 3 月号』映人社／日本脚本家連盟(2005)『テレビドラマ代表作選集 2005 年版』日本脚本家連盟／年鑑代表シナリオ集出版委員会(2016～2022)『年鑑代表シナリオ集』日本シナリオ作家協会
※「タラ(バ)」の用例を収集した資料は * を附したものに限られる。
※『現代日本語書き言葉均衡コーパス』の「知恵袋」「ブログ」は検索の対象外とした。

【参考文献】

稲葉みどり(1991)「日本語条件文の意味領域と中間言語構造――英語話者の第 2 言語習得過程を中心に――」『日本語教育』75
岡崎正継(1980)「順態接続助詞「と」の成立について」『國學院雑誌』131-3
小林賢次(1996)『日本語条件表現史の研究』ひつじ書房
小林賢次(2002)「順接の接続助詞「ト」再考――狂言台本にみる近代語条件表現の流れ――」『国語と国文学』79-11
鈴木忍(1978)『教師用日本語教育ハンドブック③ 文法Ⅰ』国際交流基金
ソルヴァン，ハリー・前田直子(2005)「「と」「ば」「たら」「なら」再考」『日本語教育』125
竹林栄実(2024)「ト条件文・タラ条件文における文末モダリティ制約の史的変遷」日本語学会 2024 年度春季大会予稿
角田三枝(2004)『日本語の節・文の連接とモダリティ』くろしお出版
土岐留美江(2010)『意志表現を中心とした日本語モダリティの通時的研究』ひつじ書房
仁田義雄(1991)『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房
日本語記述文法研究会(2008)『現代日本語文法 6 第 11 部 複文』くろしお出版
蓮沼昭子・有田節子・前田直子(2001)『日本語文法セルフマスターシリーズ 7 条件表現』くろしお出版
堀恵子(2004)「バ条件文の文末制約を再考する――日本語母語話者に対する適性判断調査から――」『言語と文明』2
前田直子(2009)『日本語の複文――条件文と原因・理由文の記述的研究――』くろしお出版
益岡隆志(1993)「日本語の条件表現について」『日本語の条件表現』くろしお出版
宮島達夫(1964)「バとトとタラ」『講座現代語 第 6 巻 口語文法の問題点』明治書院
矢島正浩(2013)『上方･大坂語における条件表現の史的展開』笠間書院

文法形式に基づいた日本語文体の多次元的抽出

中俣尚己（大阪大学）
n.nakamata.ciee@osaka-u.ac.jp

1. 研究の背景

1.1 文体研究と「語の文体」

文体研究とはどのような研究であろうか。CiNii で「文体論」を検索すると 1,500 件以上ヒットする一方、「計量文体論」では 20 件にとどまる。このうち、最もまとまったものは陳(2012)であり、雑誌や新聞を対象に出版社ごとの違いを分析したものである。馬場(2022b)は計量文体論について、「単語や文の長さ、品詞の使用率、単語の使用率、文字種・句読点などの様々な特徴に基づいて、著者推定、執筆時期推定、文学作品・作者の類型、同一作者の文体変化、文章ジャンルの特徴などに関する分析」を行うものとしている。基本的には「文章」を対象にした研究であり、2024 年時点では、英語を対象にしたものが多い。

一方で、日本語の文体研究では、馬場(2022b)が指摘するように文章よりも「語の文体」(宮島 1977)に注目したものが多い(宮島 1977, 井上 2009, 佐野 2016, 馬場 2018, 中俣 2020)。これは、日本語では論説文で使ってもよい語・いけない語の区別がはっきりしている（井上 2009）というような特性を持つためであると思われる。「語の文体」の研究としては柏野(2015)のデータに基づいて、馬場(2022a)が 13 万語の文体値データを公開しており、これを一つの到達点と呼ぶこともできるだろう。

さらには浅原(2015)、馬場(2022b)のように「語の文体」を定めてから、それぞれの語の多寡でジャンルの文体を評価するような研究も見られる。

1.2 「語の文体」研究の限界

しかし、「語の文体」の研究に全く問題がないわけではない。馬場(2022a)を例に説明すると、これは柏野(2015)が BCCWJ の図書館サブコーパスの文章に作業者の主観で付した「専門度」「客観度」「硬度」「くだけ度」「語りかけ性度」という５つの評価軸に依拠している。まず、この５つの評価軸が文体の違いを捉えるのに適切かという妥当性の問題がある。また、馬場(2022b)によれば、「専門度」「客観度」「硬度」「くだけ度」はそれぞれ中程度から強い相関があることがわかっており、結局のところ一次元的な尺度となっていることが問題である。他の研究も同様で、井上(2009)は白書で使われるか否かという軸、佐野(2016)は語彙密度という軸を使っており、いずれも一次元的である。このような一次元的な尺度は、ある語を論説文で使ってよいか、というような実用的な課題を解決するのには向く。しかしながら、多様な書き言葉・話し言葉の全容を記述するには足りない。

なお、石黒(2015)は理論的に「情報の伝達」と「感情の伝達」に問題を切り分け、「かたさ／やわらかさ」「あらたまり／くだけ」という二次元で文体を捉えることを提案している。

1.3 Biber の多次元的文体研究

英語の文体研究に目を向けると Biber(1988)は多次元的文体研究を提唱し、その後の研究のスタンダードとなった。これはラジオ放送、電話会話から SF 小説、論文まで多様なジャンルのテキストを集め、そこから単語の頻度や各種の指標などの客観情報のみを抽出する。その後、因子分析により次元（評価軸）を取り出し、それによってジャンルの特徴を分析していく。Biber(1988)は 1.Involved vs Information Production, 2.Narrative vs Non-narrative, 3.Explicit vs Situation Depended, 4.Overt Expression of Persuasion, 5. Abstract vs Non-Abstract, 6.On-Line Information Elaboration という 6 つの次元(Biber et. al. 1999 では 5 次元)を提唱しており、この概念はその後も広く使われている。この評価軸は主観ではなく客観情報のみから抽出されており、因子間の相関も抑えられている。

だが、英語では 40 年近く前から存在するこの手法を日本語の書き言葉・話し言葉に対して実施した研究は管見では見当たらない。日本語でもより客観性の高い文体の評価軸を抽出するため、本研究を実施した。

2. 多次元的分析の方法

2.1 指標の選定

Biber(1988)の多次元的文体研究の特徴は 1. Past tense, 2.Pefect Aspect など、67 種類の Linguistic Feature によって分析を行った点にある。これらの指標は英語の文体研究ではその後も引き続き使われることが多いが、それをそのまま日本語に応用することは不可能である。「た」を例に挙げても、これを過去テンスと完了アスペクトに分類することはできない。また、指標の中には 42. Adverbs のようなものもあるが、中俣(2020)が示すように副詞の中にも大きな文体差があり、これをまとめてしまえば見落としが生じる可能性もある。さらに、アスペクト形式などは非縮約形「ている」と縮約形「てる」にも文体差があると考えるべきであろう。

そこで、方針として、表層形に注目し、「構造格」から３形式、「意味格」から３形式、のようにある程度細分化した文法カテゴリーから最大で３形式ずつ機能語を選び、100 語あたりの調整頻度（テキスト内の出現頻度÷テキスト内の出現語数×100）を指標として利用することにした。３形式は BCCWJ 語彙表において頻度が多い順に選定した。Biber(1988)には平均語長（単語が何文字か）や、語彙多様性(Type/Token Ratio)といった個別の語に依存しない指標もわずかに存在するが、今回は文法形式と文体の関係を見るために、文法形式の頻度に絞る。選んだ指標は次ページの表 1 の通りであり、合計 89 形式である。

2.2 サンプルテキストの選定

使用したコーパスは『現代日本語書き言葉コーパス（BCCWJ)』『日本語話し言葉コーパス（CSJ)』『日本語日常会話コーパス(CEJC)』の３種類である。これらのコーパスから次ページの表 2 の通り書き言葉 5 ジャンル、話し言葉 5 ジャンルの 10 ジャンルを選定した。

表1 利用した文法的指標(89 形式)

カテゴリ	形式	カテゴリ	形式	カテゴリ	形式
構造格	が、を、に	意味格	N と、N で、N から	疑問詞	いつ、何、誰
連体助詞	N の N	提題助詞	N は、N も、N って	副助詞	だけ、など、ほど
テンス	た	否定	V ない、V ん、ません	動詞丁寧形	ます
人称代名詞	あなた、わたし、僕	アスペクト	ている、てしまう、ていく	アスペクト(縮約)	てる、ちゃう、てく
指示連体詞	その N、この N、あの N	指示代名詞	それ、あれ、これ	条件節	と、ば、たら
ヴォイス	れるられる、せるさせる、可能動詞	複合格助詞	N として、について、にとって	C 類節	けど、けれど、し、から
時間副詞	すぐ、まだ、もう	程度副詞	ちょっと、まったく、少し	連体節	っていう N、という N
コピュラ	だ、である、です(終止形)	接続詞	しかし、そして、また	接続助詞	て(補助動詞除く)
恩恵	てあげる、てくれる、てもらう	恩恵(敬語)	ていただく、てくださる	同時節	たまま、つつ、ながら
準体表現	のだ、のである、のです(終止形)	準体表現(縮約)	んだ、んです(終止形)	終助詞	よ、ね、か(文末)
証拠性判断	そう様態、よう様態、みたい	評価性判断	なければならない、ばいい、べき	推量性判断	かも、だろう、と思う

表 2 ジャンルとサンプル数(N=880)

ジャンル	サンプル[1]	平均語数*	ジャンル	サンプル	平均語数
白書(BCCWJ, コア)	62	664	学会講演(CSJ, コア)	70	3,094
雑誌(BCCWJ, コア)	86	600	模擬講演(CSJ, コア)	107	2,104
自然科学(BCCWJ 出版・書籍[2]より抽出)	100	620	用談(CEJC)	96	4,689
文学(BCCWJ 図書館[2]より抽出)	100	638	会議・会合(CEJC)	59	4,397
新聞(BCCWJ, コア)	100	632	雑談(CEJC)	100	4,365

そのうえで、各ジャンルから最大で 100 サンプルのテキストをランダムに選定した。そして、「中納言」を用い、選ばれた各サンプルにおける指標の出現頻度を調査した。各ジャンルのサンプル数と語数は表 2 の通りで合計 880 の文章サンプルを利用した。

なお、BCCWJ の平均語数が CSJ や CEJC と比べて少ないのは、調整頻度を正確に計算するため、固定長(1,000 文字)サンプルのみを利用したためである。実際には検索結果をダウンロード可能な 10 万語以内に押さえる必要もあった。また、山崎(編)(2014)によれば出版・書籍コーパスは専門書が多く含まれ、図書館コーパスは相対的にその割合が小さい。「自然科学」と「文学」の違いを明確にするため、前者はより専門的な出版・書籍コーパスからサンプリングし、後者は図書館コーパスからサンプリングしている。

2.3 因子分析の方法

880 サンプル×89 形式のデータセットに対して、R を用い、4 因子モデルで因子分析を行った。因子の抽出は最尤法、回転はプロマックス回転を用いた。重要なのは分析においてサンプルのジャンルのデータは用いていないという点である。因子分析では各テキストの頻度データのみを基に因子＝文体を特徴づける軸を決定する。その後、因子と形式の関係を因子負荷量から、因子とジャンルの関係を因子得点から分析するのである。

3. 因子分析の結果

抽出された 4 因子の寄与を表 3 に、因子間の相関を表 4 に示す。プロマックス回転の結果、因子間の相関はほとんど見られなかった。D1 と D2 には弱い負の相関がみられ、散布図を作成すると共に正の値で高いというサンプルは見られないことがわかった。

表 3 抽出された4因子

	D1(ML1)	D2(ML3)	D3(ML2)	D4(ML4)
因子寄与	14.577	4.812	4.230	2.581
説明力	0.556	0.184	0.161	0.099
累積説明力	0.556	0.740	0.901	1.000

表4 因子間の相関

	D1	D2	D3	D4
D1	1.000			
D2	-0.345	1.000		
D3	-0.125	-0.281	1.000	
D4	-0.180	-0.153	0.038	1.000

4. 考察

4.1 評価軸の分析

ここからは抽出された評価軸を分析する。まず、それぞれの評価軸に影響を与えている文法形式と、それぞれの評価軸によって特徴づけられるジャンルを表で示す。その後、評価軸によって特徴づけられるサンプルの例文を示し、評価軸を命名、分析する。

4.1.1 D1:共感的対話 VS 客観的伝達

+の形式	−の形式	+のジャンル	−のジャンル
終助詞、だ、から（接続）、んだ、縮約形、指示代名詞、推量性判断、疑問詞、たら、けど、ない、ちょっと、もう、みたい、ばいい、まだ、し、あのN、Nって、これ、だけ、そう（様態）	格助詞、NのN、受身、ている、など、て、について、という、よう(様態)	雑談(1.47) 用談(1.39) 会議(0.96)	白書(-1.22) 新聞(-0.78) 科学(-0.78) 学会(-0.73)

(1)　うち仲いんだよな早く出てかないとな。そんなうらやましい。まじでいいことよ。うん。そうかもね。だってあたしこないだあたし唐突にあたし社会人なったらうち出るからってばさってちょっとゆってみたの。　（雑談、T009_005b_030、D1=2.32）

(2)　また、これにより得られたデータの分析・評価により、森林の整備の状況等に関する評価手法等の検討を行う。（白書、OW6X_00071_8810、D1=-1.51）

D1 は説明力の強い対立軸である。要素が多いため命名は難しいが終助詞や縮約形を使って相手の共感を呼び起こしながら話す文体と、格助詞を使って論理関係を明確にし、受身形などで主観を廃して伝える文体の対立である。「共感的対話 VS 客観的伝達」と命名する。単純な音声対文字の対立でないことは、学会発表が客観的伝達の性質が強いことからわかる。Biber(1988)の D1:involvement vs information processing に相当する。

4.1.2 D2:語り VS 非語り

+の形式	−の形式	+のジャンル	−のジャンル
Nは、た、のだ、Vない、ている、構造格、て、Nも、しかし、ば、使役、てしまう、ほど、ながら、だろう	です、Nって、んです、ね、けど、っていうN	文学(1.59) 雑誌(0.56) 自然(0.41)	会議(-0.77)用談(-0.68)雑談(-0.68)白書(-0.67)

(3)　私が知っている女性はかなりの減量に成功した。彼女はこう話している。「前より体調がよくなり、元気も出てきました。（自然、PB14_00100_15010、D2=3.22）

(4)　コリンは、大きな深呼吸をひとつしてから、ドアのベルを鳴らした。もったいをつけてでもいるように、ファーガソン医師はなかなか出てこない。コリンは緊張をほぐそうとした。ここが正念場だ。ぶち破るべき壁なんだ。（白書、OW6X_00071_8810、D2=3.20）

(5) 今回はあの私の住んでいる町っていうタイトルで、別名マイタウン青葉。続けていきます。でえーとね、位置としては神奈川県の横浜市なんですけど、電車のアクセスはまず東急の田園都市線と後はあざみ野っていう駅から市営地下鉄が出ていてあのニュータウンの方に行けるんですね。（模擬、S03F0062_170、D2=-1.72）

D2 は正方向には提題助詞と「た」が含まれ、さらに出来事の連鎖を表す「て」、同時の「ながら」、出来事に対する捉え方を表す「のだ」、転換を表す「しかし」、評価的意味を含む「てしまう」「ほど」が含まれる。これは Biber(1988)の D2:Narrative vs Non-Narrative に対応する「語り VS 非語り」の評価軸と命名できる。南(2009)は「語り」の 6 つの特徴をまとめているが、そこには「出来事（なにが起きたか）」に加え、「設定（いつ、どこで、何を）「評価」が含まれるのである。なお、(3)と(4)は翻訳文であった。

4.1.3 D3:新情報の解説

＋の形式	－の形式	＋のジャンル	－のジャンル
んです、可能、けれど、っていうN、そのN、Nって、と思う、て、てしまう	N.A.	模擬講演(1.88) 学会(0.41)	白書(-1.06) 新聞(-0.78)

(6)　真夏ことなんですがえーと夜遅く庭先であの洗濯物干してましたらあの寝ていた娘きゃーって悲鳴を上げたんですねそして何事かと思いましたらあーの太ってる猫がぽんと娘の寝てる上に乗っちゃったらしいんですそれがあのーその猫が来るう来てるんだってきっかけみたいだったんですね（模擬講演、S01F1522、D3=3.35）

D3は形式を見ると、Nという情報について「んです」で解説を行っているというように読み取れる。実際にはこれは模擬講演を特徴づける文体で、上位70サンプルは全て模擬講演である。模擬講演には(6)のように「～んです」で話を展開する一群のサンプルが存在する。過去の話が多く、一種の語りと位置づけられるが、格助詞は時折省略され、引用なども少ない。「ちゃう」より「てしまう」、「けど」より「けれど」のように完全にくだけているわけではないのは、模擬講演というジャンルの特徴であろう。「新情報の解説」と命名した。

4.1.4 D4:聞き手への配慮

＋の形式	－の形式	＋のジャンル	－のジャンル
ます、ません、というN、です、ていただく、この、のです、よう（様態）、これ	N.A.	学会(1.45)会議(0.39) 模擬講演(0.43)	白書(-0.87) 新聞(-0.71)

(7)　あたし何度女子力学んだかみたいなって思う。はい学ばせていただきましたって思って。ほんとにほんとなんか人によりますけど（会議、K001_006_87760、D4=4.48）

(8)　ちょっと問題があります。問題といいますか、何が問題かと言いますと、日本語のあってのは皆さん御存じのようにあの前後の対立がありません。日本語は前寄りのあであっても後ろ寄りのあであっても一応あなんですね。（学会、A01M0074、D4=2.56）

D4 は「です」「ます」という丁寧語の使用によって特徴づけられる文体であり、「ていただく」や「よう」も多い。また、聞き手を意識するからこそ、近称詞も出現するのだろう。ジャンルでは学会の得点が高いがD3と異なり、様々なジャンルに出現する。「聞き手への配慮」と命名した。

4.2 他の研究結果との比較

今回の分析結果は他の文体研究の結果とも整合するものである。中俣(2020)は 164 の副詞を使って、BCCWJ内のレジスターに対し主成分分析を行ったものであり、その結果第1軸として「双方向的VS一方向的」という軸が抽出されているが、名称は異なるものの、これはD1「共感的対話VS客観的伝達」と同じと見なしてよい。中俣(2020)ではブログやYahoo!知恵袋を共感的対話と見なしており、これは共感的な書き言葉と言える。学会講演が客観的な話し言葉であることと対照的である。格助詞の省略などは書き言葉か話し言葉かという媒体の違いではなく、D1の文体差を反映したものである。

また、中俣(2020)の第２軸は「自己表現的 VS 公共的」と命名されているが、ジャンルで言えば、文学 VS 広報誌・国会会議録・白書の対立である。中俣(2020)は副詞のみに絞っていたため、「語り」という特徴を見いだせなかったが、PC2 が高い副詞とは「何ひとつ」「どんなに」「むろん」「じつに」といった書き手が主観的に評価する副詞であり、これは D2「語り」の特徴の一つとみなせる。

また、Biber(1988)と比較すると、D1 と D2 が形式は異なるものの対応を見せている。一方、Biber の D3 は名詞句や関係節が多用される"Explicit"と副詞が多用される"Situation-Dependent Reference"の対立である。本研究の D3 は模擬講演に強く特徴づけられた新情報の解説であった。中俣(2020)の第３軸は雑誌に特徴づけられ、評価的な副詞が多く現われていた。日本語と英語では丁寧語の有無など文体の表現方法に大きな違いがあり、完全に一致するはずがない。にもかかわらず、言語や手法を問わずに抽出された D1「共感的対話 VS 客観的伝達」と D2「語り VS 非語り」はかなり頑健な文体の評価軸として認めてよいのではないかと考えられる。いわばこの 2 軸が、日本語の（あるいは言語の？）文体の大分類として存在し、その下にジャンルごとの中分類が、さらには個人ごとの小分類が存在するという構造が提案できる（大江ほか 2020)。

4.3 日本語文体の全体像

D1 と D2 を用いて今回分析した 10 ジャンルをプロットしたものが図 1 である。

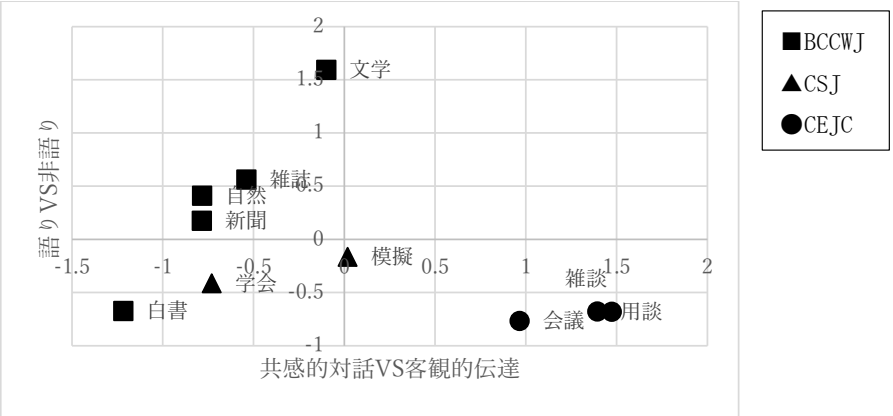


図1 D1 と D2 によるジャンルの分類

まず、図 1 の右上が空白であり、共感的な語りという文体は存在していない。これが D1 と D2 に-0.345 という弱い負の相関が見られた所以である。他研究も同様の結果である。

概ね右側に CSJ,左側に BCCWJ が配置され、その中間に CSJ が配置されているが、実際には模擬講演、学会講演はそれぞれ D3,D4 によって別次元で特徴づけられていることを忘れてはならない。この点をふまえると、話し言葉は書き言葉よりも文体的に多様ということができる。あるいは独話と対話は文体的には非常に異なると言えるかもしれない。本研究の D2 は基本的には小説の地の文に対応し、話し言葉における語りが D3 に対応していると見ることもできる。

4.4 ジャンル内変異

最後に、ジャンル内の変異について触れると、白書は全ての評価軸で標準偏差が最も小さく、文体的に最も安定している。D2 の「語り」は自然科学で標準偏差が大きかった。D3「新情報の解説」は学会講演と模擬講演で標準偏差が大きかった。D4 の「聞き手配慮」は新聞、白書、雑談、学会講演以外では変異が大きかった。

5. 本研究のまとめと貢献

本研究では日本語を対象として Biber 流の多次元的文体分析を行った。４因子モデルを作ることができ、特に D1「共感的対話 VS 客観的伝達」と D2「語り VS 非語り」は他の研究とも通底する頑健な評価軸として抽出可能と言える。これにより、日本語の文体研究における評価軸を主観的かつ一次元的なものから、客観的かつ多次元的なものに更新したい。

参考文献

浅原正幸(2020)「Bayseian Linear Mixed Model による単語親密度推定と位相情報付与」『自然言語処理』27(1):133-150.

石黒圭(2015)「書き言葉・話し言葉」と「硬さ／軟らかさ」『日本語学』34-1:14-25.

井上次男(2009)「論説文における語の文体の適切性について」『日本語教育』141:57-67.

大江元貴・居關友里子・鈴木彩香(2020)「日本語の左方転移構文はいつ、どのように使われるか？」『社会言語科学』23(1):226-241.

柏野和佳子(2015)　『BCCWJ 図書館サブコーパスの文体情報』(2015 年公開第 1 版) https://doi.org/10.15084/00003109

佐野大樹(2016)「語彙密度から見た語彙シラバス」森篤嗣(編)『ニーズを踏まえた語彙シラバス』79-93, くろしお出版

陳志文 (2012)『現代日本語の計量文体論』くろしお出版.

中俣尚己(2020)「主成分分析を用いた副詞の文体分析」『計量国語学』32(7): 419-435.

馬場俊臣(2018)「接続詞の文体差の計量的分析の試み―『BCCWJ 図書館サブコーパスの文体情報』を用いて―」『北海道教育大学紀要　人文科学・社会科学編』69(1): 1-14.

馬場俊臣(2022a)　『語の文体値データ』(2022 年 2 月公開第 1 版) https://doi.org/10.15084/00003532

馬場俊臣(2022b)「「語の文体」と「文章の文体」―「語の文体値データ」を利用した「文章の文体」の確定―」『計量国語学』33(7):435-450

南雅彦(2009)『言語と文化』くろしお出版.

宮島達夫(1977)「単語の文体的特徴」松村明教授還暦記念会(編)『国語学と国語史』871-903, 明治書院.

山崎誠(編)(2014)『書き言葉コーパス―設計と構築―』朝倉書店.

Biber, D.(1988)*Variation across speech and writing*, Cambridge Univ. Press

Biber, D., Conrad, S. & Reppen, R.(1998) *Corpus Linguistics,* Cambridge Univ. Press

幼児における副助詞に対する接続形式の習得時期の差異

東寺祐亮（日本文理大学）

1. はじめに

副助詞には，(1a)のように体言と接続するだけでなく，(1b)のように動詞等の用言と接続する形式を持つ語（ダケ，クライ・グライ，バカリ・バッカリ等）がある。成人の文法では副助詞に対して体言接続も用言接続も使用される。

(1) a. 体言接続：宿題はあと国語だけだ。
　　b. 用言接続：あとは国語の宿題をするだけだ。

ダケを例にとると，大久保 (1967) は「パパダケ　ブーブージドウシャ　ノンノ？(1;11)」（大久保 1967: 92，下線は著者）という幼児のダケの使用例が 1;11（1 歳 11 ヵ月，「年;月」で記載する）に観察されたことを指摘している。また，同時期に「パパト　アッタカラ　ダイジョウブ。(1;11)」（大久保 1967: 92，下線は著者）という，用言と接続している接続助詞カラの使用例が観察されることも指摘している。ダケなどの副助詞の用言接続も同時期に習得されるのだろうか。本発表では，幼児は，体言接続と用言接続の両方を持つ副助詞の使用において，用言接続形式よりも体言接続が先行する傾向があるということを指摘する。

先行研究において，幼児の副助詞の使用について接続形式の習得時期の差異に着目した記述は管見の限りない。永野 (1959: 391-393) は，2 歳代に副助詞の使用が観察され始めることを指摘し，助詞の習得としては終助詞・格助詞が早く，次いで接続助詞が習得され，その後副助詞が習得される傾向を指摘している。また，大久保 (1967: 93-100) は，ダケが 1;11 に，グライが 2;5 に，マデが 2;1 に，バカリ・バッカリ・バッカシが 2;11 に，シカが 3;1 に，ナドが 4;0 に発話され始めたことを指摘している。高橋 (1975: 167) は，ダケの用言接続形式について年少児（4;2）の「オネエチャンノ ジ ミルダケデ カケルノ」という発話や，バカリについて年長児（6;6）の「ジブンデ ヨムバッカリダモン」という発話を記述している。しかし，いずれの研究も副助詞に対する接続形式の習得時期の差異に関する詳しい記述はない。

2. 調査方法と調査結果

2.1. 調査方法

本研究では，CHILDES データベース（MacWhinney 2000）に収録されている Ogawa コーパス（Ogawa 2016）と Noji コーパス（Noji 1973-77）の 2 人の幼児（Ogawa コーパス：Ayumi，Noji コーパス：Sumihare）を対象として，幼児の副助詞の使用における接続形式を調査した。調査データは CLAN プログラムを使用して，Ayumi (Ogawa 2016) と Sumihare (Noji 1973-77) の全ファイル（Ayumi 00900-60100，Sumihare 00000-61100）を対象に，副助

詞（ダケ，クライ・グライ，バカリ・バッカリ，マデ，シカ，ホド，ナド，ナリ）の発話頻度と発話行を検索した。その検索結果に対して手作業で副助詞の使用例を抽出し，歌の一部や親の発話の繰り返しを除外した。1 度の発話で繰り返し調査対象語を発話している場合（たとえば(2b)）はその文全体で頻度 1 として加算した。

分類するにあたって，副助詞が名詞・代名詞・数詞など自立語で活用がなく主語になる語と接続している場合を体言接続，動詞・形容詞・形容動詞など自立語で活用があり述語になる語と接続している場合を用言接続とした（用言，体言の定義は森山・渋谷 2020: 110 による）。副詞・助動詞・助詞との接続，誤用についてはその他とした。なお，以下の発話の下線は筆者によるものである。

2.2. ダケ

ダケについて，Ayumi (Ogawa 2016) においては 2;11 から体言接続の使用例（(2a)）が観察され，3;02 から用言接続の使用例（(3a)）が観察される。Sumihare (Noji 1973-77) においても，2;01 から体言接続の使用例（(2b)）が観察され，2;05 から用言接続の使用例（(3b)）が観察される。それぞれの幼児の使用例累計は図 1，図 2 に示す。

(2) 体言接続

a. CHI: お茶だけ持って行くの？ (Ayumi, 2;11.00)

b. CHI: おちゃだけ，おちゃだけ，おちゃだけ。 (Sumihare, 2;01.07)

(3) 用言接続

a. CHI: 飲んだだけだよ。 (Ayumi, 3;02.00)

b. CHI: みるだけ。 (Sumihare, 2;05.07)

表 1　ダケにおける体言接続・用言接続の発話頻度と初出月齢

話者	体言接続		用言接続		その他（副詞・助詞等）	
	頻度	初出月齢	頻度	初出月齢	頻度	初出月齢
Ayumi (Ogawa 2016)	124	2;11.00	79	3;02.00	43	3;06.00
Sumihare (Noji 1973-77)	90	2;01.07	17	2;05.07	9	2;03.07

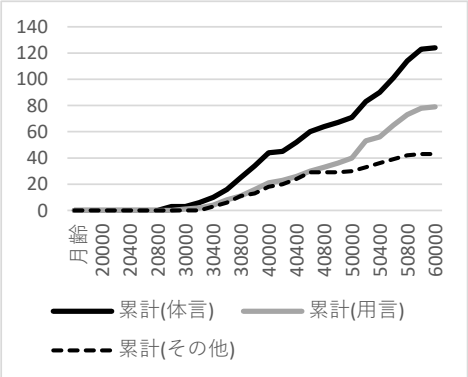


図 1　ダケの体言接続・用言接続・その他の累計数（Ayumi）

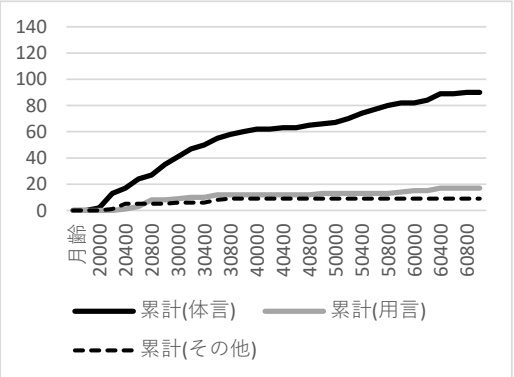


図 2　ダケの体言接続・用言接続・その他の累計数（Sumihare）

2.3. クライ・グライ

クライ・グライについて，Ayumi (Ogawa 2016) においては 3;01 から体言接続の使用例（(4a)）が観察され，4;02 から用言接続の使用例（(5a)）が観察される。Sumihare (Noji 1973-77) においては 2;07 から体言接続の使用例（(4b)）が観察され，4;00 から用言接続の使用例（(5b)）が観察される。なお，クライという形式とグライという形式については，明確な使い分けがなされていると判別できなかったため，異形態として集計している。それぞれの幼児の使用例累計は図 3，図 4 に示す。

(4) 体言接続

a. CHI: あと十分くらいかかるの。 (Ayumi, 3;01:00)

b. CHI: ぼくみっつくらいたべる。 (Sumihare, 2;07.21)

(5) 用言接続

a. CHI: 汗かくくらい大変だよ。 (Ayumi, 4;02.00)

b. CHI: 重いくらいいっぱいあるんでー。 (Sumihare, 4;00.00)

表 2　クライ・グライにおける体言接続・用言接続の発話頻度と初出月齢

話者	体言接続		用言接続		その他（副詞・助詞等）	
	頻度	初出月齢	頻度	初出月齢	頻度	初出月齢
Ayumi (Ogawa 2016)	101	3;01.00	15	4;02.00	10	3;10.00
Sumihare (Noji 1973-77)	26	2;07.21	2	4;00.00	13	2;08.00

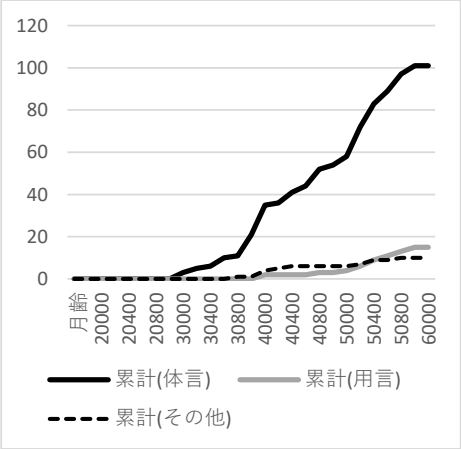


図 3　クライ・グライの体言接続・用言接続・その他の累計数（Ayumi）

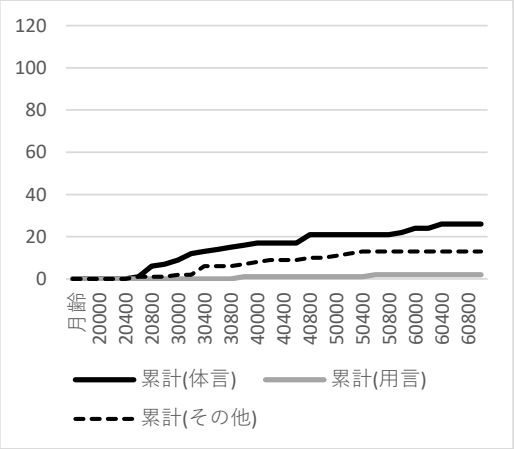


図 4　クライ・グライの体言接続・用言接続・その他の累計数（Sumihare）

2.4. バカリ・バッカリ

バカリ・バッカリについて，Ayumi (Ogawa 2016) においては 2;11 から体言接続の使用例（(6a)）が観察され，4;01 から用言接続の使用例（(7a)）が観察される。Sumihare (Noji 1973-

77) においても，2;00 から体言接続の使用例（(6b)）が観察され，2;05 から用言接続の使用例（(7b)）が観察される。なお，バカリという形式とバッカリという形式においても，明確な使い分けがなされていると判別できなかったため，異形態として集計している。それぞれの幼児の使用例累計は図 5，図 6 に示す。

(6) 体言接続

a. CHI: お風呂ばっかりだね。 (Ayumi, 2;11:00)

b. CHI: しっこばっかり (Sumihare, 2;00.00)

(7) 用言接続

a. CHI: お腹すいてばっかりばっかりだ。 (Ayumi, 4;01.00)

b. CHI: ていちゃんが遊んでばっかりのにいかん。 (Sumihare, 2;05.21)

表 3 バカリ・バッカリにおける体言接続・用言接続の発話頻度と初出月齢

話者	体言接続		用言接続		その他（副詞・助詞等）	
	頻度	初出月齢	頻度	初出月齢	頻度	初出月齢
Ayumi (Ogawa 2016)	35	2;11.00	15	4;01.00	2	3;11.00
Sumihare (Noji 1973-77)	23	2;00.00	8	2;05.21	2	3;01.00

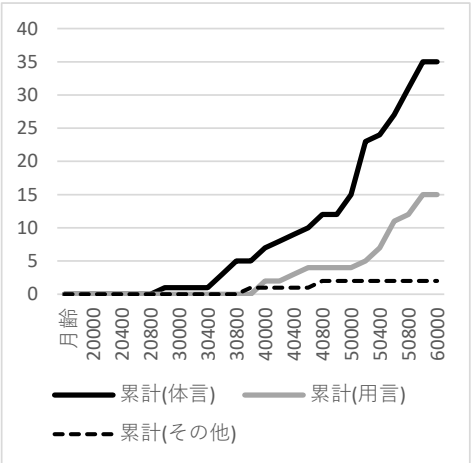


図 5 バカリ・バッカリの体言接続・用言接続・その他の累計数（Ayumi）

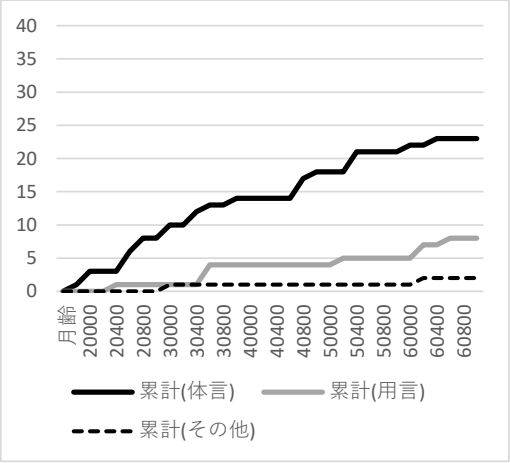


図 6 バカリ・バッカリの体言接続・用言接続・その他の累計数（Sumihare）

2.5. マデ

マデについて，Ayumi (Ogawa 2016) においては 2;09 から体言接続の使用例（(8a)）が観察され，3;09 から用言接続の使用例（(9a)）が観察される。Sumihare (Noji 1973-77) においても，1;11 から体言接続の使用例（(8b)）が観察され，2;02 から用言接続の使用例（(9b)）が観察される。なお，Sumihare (Noji 1973-77) の用言接続の使用例は，53 例中 32 例（約 60%）が「行ったよ遠くまで（Sumihare, 2;02.14）」のような「遠くまで」であり，生産的

に使用していない時期がある可能性がある。それぞれの幼児の使用例累計は図 7，図 8 に示す。

(8)　体言接続

a.　CHI: 上までジャンプ。　(Ayumi, 2;09.00)

b.　CHI: 天まであああれ。[1]　(Sumihare, 1;11.07)

(9)　用言接続

a.　CHI: できるまで歩美ちゃん，ふーふーふーって遊んでみる。　(Ayumi, 3;09.00)

b.　CHI: しゅむまでまってんちゃいねねー。　(Sumihare, 2;02.14)

表 4　マデにおける体言接続・用言接続の発話頻度と初出月齢

話者	体言接続		用言接続		その他（副詞・助詞等）	
	頻度	初出月齢	頻度	初出月齢	頻度	初出月齢
Ayumi (Ogawa 2016)	99	2;09.00	10	3;09.00	10	4;02.00
Sumihare (Noji 1973-77)	117	1;11.07	53	2;02.14	8	2;02.14

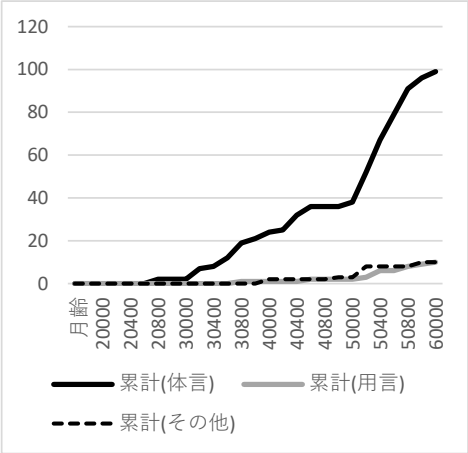


図 7　マデの体言接続・用言接続・その他の累計数（Ayumi）

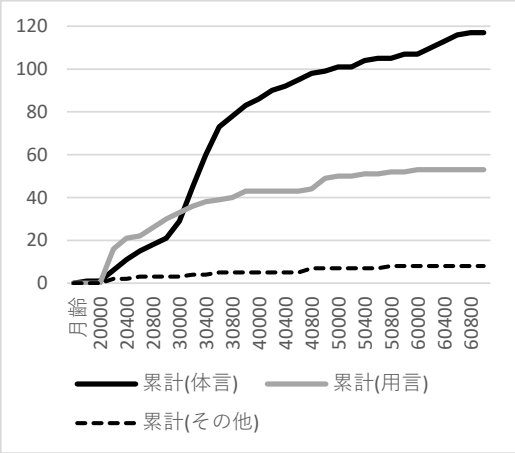


図 8　クライ・グライの体言接続・用言接続・その他の累計数（Sumihare）

[1] Sumihare (Noji 1973-77) は 1;11.00 に「たこ天まーであげ。(Sumihare, 1;11.00)」という発話がある。この発話については Noji (1973-77) に歌の一節であることを推測させる説明がある。(8b)については Noji (1973-77) の説明に具体的な記述はないが，「たこ天まで揚がれ」という類似した表現であるため歌の一節である可能性がある。(8b)の次に現れる例は「どこまで行くん？(Sumihare, 2;02.14)」で，用言接続と同月齢である。

2.6. シカ

シカについて，Ayumi (Ogawa 2016) においては 2;08 から体言接続の使用例（(10a)）が観察され，3;09 から用言接続の使用例（(11)）が観察される。一方，Sumihare (Noji 1973-77) においては用言接続が観察されず，体言接続（(10b)）は 4:03 から観察された。しかし，頻度は 11 例で，Ayumi (Ogawa 2016) と比較して少数であった。

(10) 体言接続

a. *CHI: 一回しかない。 (Ayumi, 2;08.00)

b. *CHI: しとつしかおらんのんよう。 (Sumihare, 4;03.00)

(11) 用言接続

*CHI: 作ったの，やっぱり作るしかなかったから？ (Ayumi, 3;09.00)

表 5　シカにおける体言接続・用言接続の発話頻度と初出月齢

話者	体言接続		用言接続		その他（副詞・助詞等）	
	頻度	初出月齢	頻度	初出月齢	頻度	初出月齢
Ayumi (Ogawa 2016)	106	2;08.00	31	3;09.00	36	3;03.00
Sumihare (Noji 1973-77)	3	4;03.00	0	-	8[2]	2;09.00

2.7. ホド・ナド・ナリ

ホド・ナド・ナリについては用例が少数，あるいは，観察されなかった。文語的で会話における頻度が少なくインプットが少ないためであると考えられる。ホドについて，Ayumi (Ogawa 2016) においては 3;11 から体言接続の使用例（(12a)）が 1 例のみ観察される。Sumihare (Noji 1973-77) において 4;00 から体言接続の使用例（(12b)）が観察され，5;11 から用言接続の使用例（(13)）が観察されるが，合計 5 例のみである。

(12) 体言接続

a. *CHI: 歩美ちゃんこれ食べないよ，日本のほどおいしくないから。 (Ayumi, 3;11.00)

b. *CHI: 三つほど頂戴。 (Sumihare, 4;00.00)

(13) 用言接続

*CHI: なんぼでも父ちゃんの好きなほど取って頂戴。 (Sumihare, 5;11.00)

[2] 表 5 の Sumihare (Noji 1973-77) のその他 8 例中 5 例は「こっこさんたまたますこしかない。(Sumihare, 2;09.00)」のような「少ししか」である。

表 6　ホドにおける体言接続・用言接続の発話頻度と初出月齢

話者	体言接続		用言接続		その他（副詞・助詞等）	
	頻度	初出月齢	頻度	初出月齢	頻度	初出月齢
Ayumi (Ogawa 2016)	1	3;11.00	0	-	0	-
Sumihare (Noji 1973-77)	3	4;00.00	1	5;11.00	1	4;06.00

ナドについては, Sumihare (Noji 1973-77) において 2 例のみ体言接続で観察された((14))。

(14)　体言接続

*CHI: 墜落言うたらね飛行機などがねこうなってこんなになることよ。

(Sumihare, 5;02.00)

表 9　ナドにおける体言接続・用言接続の発話頻度と初出月齢

話者	体言接続		用言接続		その他（副詞・助詞等）	
	頻度	初出月齢	頻度	初出月齢	頻度	初出月齢
Ayumi (Ogawa 2016)	0	-	0	-	0	-
Sumihare (Noji 1973-77)	2	5;02.00	0	-	0	-

ナリについては Ayumi (Ogawa 2016) でも Sumihare (Noji 1973-77) でも観察されなかった。

3. 結論と課題

以上の調査結果から，幼児は副助詞の接続において体言接続を先行して使用し始める傾向があることが明らかになった。これは，副助詞の使用において，体言接続から用言接続への移行に期間があるということである。動詞等と接続する接続助詞のカラについて，先行研究は「パパト　アッタカラ　ダイジョウブ。（1;11）」（大久保 1967: 92，下線は筆者），「オオキイカラトドク。（2;3）」（永野 1959: 390，下線は筆者）という使用例を示しており，2 歳前後からカラを使用し始めると考えられる。そのため，副助詞の接続形式において体言接続が先行し，用言接続が遅れる事実は，副助詞と接続助詞の文法習得の過程が異なることを示している。

本調査データは，今後複数の観点から検討する必要がある。第一に，用言接続のどのような構造構築が習得を遅らせているのかを明らかにする必要がある。第二に，各副助詞においてどのような用法の習得が先行するかを明らかにする必要がある。たとえば，Ayumi (Ogawa 2016) のクライ・グライでは, (4a)のほか,「八時くらいかなあ？（Ayumi, 3;05.00）」など概数用法が先行する傾向が見られた。第三に，その他データに関しても観察・分析を行う必要がある。一部の副助詞においてその他のデータに特徴が見られたためである。たとえば，Ayumi (Ogawa 2016) のシカでその他に分類されている 36 例中 25 例は，「子供だけしか買えない。（Ayumi, 3;09.00）」に見られるダケシカや，クライシカ，ニシカといっ

た「助詞＋シカ」であった。一方，Ayumi (Ogawa 2016) の他の副助詞における助詞接続の使用例はシカほど多くない。これらの観察・分析については今後の課題である。

表 10　幼児の体言接続・用言接続の発話頻度と初出時期

話者	副助詞	体言接続		用言接続		その他（副詞・助詞等）	
		頻度	初出月齢	頻度	初出月齢	頻度	初出月齢
Ayumi	だけ	124	2;11.00	79	3;02.00	43	3;06.00
	くらい・ぐらい	101	3;01.00	15	4;02.00	10	3;10.00
	ばかり・ばっかり	35	2;11.00	15	4;01.00	2	3;11.00
	まで	99	2;09.00	10	3;09.00	10	4;02.00
	しか	106	2;08.00	31	3;09.00	36	3;03.00
	ほど	1	3;11.00	0	-	0	-
	など	0	-	0	-	0	-
	なり	0	-	0	-	0	-
Sumihare	だけ	90	2;01.07	17	2;05.07	9	2;03.07
	くらい・ぐらい	26	2;07.21	2	4;00.00	13	2;08.00
	ばかり・ばっかり	23	2;00.00	8	2;05.21	2	3;01.00
	まで	117	1;11.07	53	2;02.14	8	2;02.14
	しか	3	4;03.00	0	-	8	2;09.00
	ほど	3	4;00.00	1	5;11.00	1	4;06.00
	など	2	5;02.00	0	-	0	-
	なり	0	-	0	-	0	-

参照文献

大久保愛 (1967) 『幼児言語の発達』，東京堂出版.

高橋太郎 (1975) 「幼児語の形態論的な分析－動詞・形容詞・述語名詞－」『国立国語研究所報告』55 号，国立国語研究所.

永野賢 (1959) 「幼児の言語発達について：主として助詞の習得過程を中心に」『ことばの研究１』，pp.383-396.（国立国語研究所論集 http://doi.org/10.15084/00001725）

森山卓郎・渋谷勝己 (2020) 『明解日本語学辞典』，三省堂.

MacWhinney, Brian. (2000) *The CHILDES Project: Tools for analyzing talk*. Third Edition. Mahwah, N.J.: Lawrence Erlbaum Associates.

Noji, Junya. (1973-77) *Yooji no gengo seikatsu no jittai I-IV*. Bunka Hyoron Shuppan.

Ogawa, Yoshiki. (2016) *Ogawa Corpus*. Pittsburgh, PA: TalkBank. doi:10.21415/T5H314

話し言葉における助数詞の選択に関する一考察
—〈枚〉〈本〉〈つ〉〈個〉に注目して—

山本晃子（立命館大学大学院生）

1. はじめに

日本語の助数詞について、その用例を新聞から収集し分析した飯田（1999）によると、新聞では約 360 種もの助数詞が使用されているという。しかし、三保（2006）で「日常会話では、「携帯電話」も「牛乳パック」も「ひとつ・ふたつ」で済ませることもある。」（p.7）と述べられるように、助数詞の使い分けは義務的なものではない。そして、特に日常会話のようなインフォーマルな場面では対象名詞の範囲の広い〈つ〉のような助数詞が多く使用されると考えられる。以下、本発表では「携帯電話一つ」、「牛乳パック二つ」のように、助数詞を用いて表された数量と対応する「携帯電話」「牛乳パック」のような語を「対象名詞」と呼ぶ。

〈つ〉は、日本語の助数詞のうち対象名詞の範囲が最も広く、無生物であれば基本的に何にでも使用することができる（松本 1991, 飯田 1999, 眞野 2004 等）。そのため、前述の「携帯電話」や「牛乳パック」のように他の助数詞を使用可能なものにも、〈つ〉を用いることができる。一方〈個〉は、〈枚〉〈本〉〈粒〉のような助数詞と同様に、対象名詞の形状によって使用が規定される助数詞で、典型的には「持ち運び可能な三次元的なもの」に使用されることが指摘されている（松本 1991, 飯田 1999, 谷原・顔・リー等）。しかし、Shimojo（1997）、伊藤（2015）は、話し言葉では〈つ〉と同様に〈個〉も、形状を持たない抽象的なものを含む広い範囲に使用され、他の助数詞を使用可能なものにも用いられることが明らかにされている。

本発表では、他の助数詞を使用可能な対象名詞に〈つ〉あるいは〈個〉が用いられる場合、助数詞の選択にどのような要因が関わるのか、『日本語日常日常会話コーパス』（以下、CEJC）から収集した例を対象に分析を行った。分析は、対象名詞の形状に使用が規定される助数詞のうち、CEJC 内で使用頻度の高い〈枚〉〈本〉について、これらの助数詞を使用可能なものが〈つ〉〈個〉を用いて数えられている例に注目し行った[1]。

2. 研究方法

本研究では、CEJC を対象に、オンライン検索ツール『中納言』を利用し〈枚〉〈本〉〈つ〉〈個〉の用例収集を行った[2]。〈つ〉の用例の検索条件を(1)に示す。

(1) キー: 品詞 LIKE "名詞-数詞%" AND 後方共起: 語彙素="つ" ON 1 WORDS
FROM
キー WITH OPTIONS tglKugiri="|" AND tglBunKugiri="#" AND
limitToSelfSentence="1" AND tglWords="20"
AND unit="1" AND encoding="UTF-16LE" AND endOfLine="CRLF"

---

[1] 松本(1991)では対象名詞の形状に使用が規定される助数詞を「形状類別詞」と呼び、日本語の形状類別詞は〈個〉〈枚〉〈本〉〈粒〉〈筋〉〈面〉の 6 つとしている。CEJC では〈個〉1094 例、〈枚〉457 例、〈本〉452 例、〈粒〉9 例、〈筋〉4 例、〈面〉5 例が見られた。

[2] 『中納言』のバージョンは 2.7.2，CEJC のデータバージョンは 2023.03 である。

まず、収集した用例について、前後文脈や CEJC に収録されている映像を用いて対象名詞の確認を行った。そのうち、「二枚爪」「一本釣り」のように助数詞が複合語の一部になっているもの、歌詞や本からの引用、対象名詞が判断できない例は、分析の対象外とした[3]。これらの例を除き、〈枚〉443 例、〈本〉416 例、〈つ〉1423 例、〈個〉1066 例を対象に分析を行う。以降、3 節では、〈枚〉の対象名詞の特徴を確認し、〈枚〉が使用可能な対象名詞に〈つ〉〈個〉が使用される場合、助数詞の選択にどのような要因が関わるのか、共起する数詞と、対象名詞の形状の観点から分析を行う。4 節では、3 節と同様の分析を〈本〉について行う。5 節で、これらの分析結果をまとめる。

3 〈枚〉について

3.1 〈枚〉の対象名詞の特徴

〈枚〉443 例の異なり語数は 113 語であった。その上位 20 語を表 2 に示す[4]。

表2：〈枚〉上位20語

順位	対象名詞	用例数	順位	対象名詞	用例数
1	カード	39	11	習字	9
2	チケット	34	12	皿	8
3	写真	33	13	すし	7
4	紙	25	14	年賀状	7
5	布	25	15	さつま揚げ	7
6	フラックガーランド	17	16	ローストビーフ	7
7	Tシャツ	15	17	ページ	5
8	板	12	18	資料	5
9	座布団	11	19	十円玉	5
10	用紙	9	20	封筒	5

〈枚〉は典型的には「二次元的（平面的）な広がりが目立つもの」に使用されることが指摘されている（松本 1991, 谷原・顔・リー1990, 飯田 1999 等）。表 2 からも〈枚〉がカード、写真、布のように、二次元的、平面的で厚みの目立たないものに使用されていることがわかる。しかし、厚みには程度差があり、カード、チケット等の全く厚みのない紙状のものから、板、皿、さつまあげのような、ある程度厚みのあるものにも〈枚〉が使用されている。〈枚〉の対象名詞の上位には、厚みのない紙状のものが多く見られる。

3.2 〈枚〉を使用可能な対象名詞に〈つ〉〈個〉が使用されている例の収集

〈枚〉を使用可能な対象名詞に〈つ〉〈個〉が使用されている例を収集するために、以下の作業を行った。まず、〈つ〉〈個〉の用例のうち、〈枚〉の対象名詞に含まれるのと同じ語を対象名詞とする例を取り出した。そのような例として、「座布団」「写真」「皿」等が挙げら

[3] 対象名詞が判断できない例とは、発話からも前後文脈からも対象名詞が判断できなかった例、あるいは、発話現場にある何らかの対象に言及しているが、CEJC に収録された映像にその対象が映っていないために対象名詞が判断できなった例を指す。

れる。次に、〈つ〉〈個〉の用例のうち、CEJC では〈枚〉の使用が見られなかった対象名詞でも、〈枚〉を使用可能であると考えられる例を取り出した。そのような例として、「ハンカチ」、「枕カバー」等が挙げられる。最後に、前述の方法で取り出した例のうち、対象名詞が同じであっても、〈枚〉を使用する場合と、〈つ〉または〈個〉を使用する場合で、対象名詞が表すものが異なる例を確認した。たとえば、(2a)から(2c)の対象名詞はすべて「原稿」であるが、〈枚〉を使用する場合には原稿用紙の数（枚数）を表し、〈つ〉〈個〉を使用する場合には原稿自体の数を表している。

(2) a. こうすると 一枚一枚で プレビューの なんか 原稿みたいななるよ
（K007_015,7080）
b. 同じ話題を二つの原稿に書いてしまったか ちょっと確認 （T016_008,40940）
c. 一個ずつで（原稿が）完結してる感じじゃない （T016_003,72160）

また、〈個〉に関しては、〈枚〉を使用する場合と〈個〉を使用する場合とで、表すものの形状が異なる例が多く見られた。例えば(3a)(3b)は、ボードゲーム中のシーンであるが、(3a)の〈枚〉は、ゲーム中で「レンガ」の役割を持つカードを示し、(3b)の〈個〉は、ボード上で動かす駒を示している[5]。

(3) a. これはレンガが二枚に付き二枚捨てて好きなカード一枚取れるって
ゆうところが
（K013_020,71660）
b. でもさ レンガ一個しかないもん （K013_020,68990）

このような例を除き、〈枚〉を使用可能な対象名詞に〈つ〉〈個〉が使用されている例として〈つ〉49 例（異なり語数 23 語）、〈個〉70 例（異なり語数 21 語）が収集された。

3.3 〈枚〉を使用可能な対象名詞に〈つ〉〈個〉が使用されている例の特徴

表3に〈枚〉〈つ〉〈個〉の異なり語数と用例数を示す。助数詞ごとに比較すると、異なり語数、用例数ともに〈枚〉の使用が圧倒的に多い。そのため、日常会話でも〈枚〉を使用可能なものに〈つ〉〈個〉が使用される頻度はそれほど高くなく、対象名詞の範囲もそれほど広くないことがわかる。

表3：〈枚〉〈つ〉〈個〉異なり語数

助数詞	異なり語数	用例数
枚	113	443
つ	23	49
個	21	70

次に、それぞれの助数詞ごとに共起する数詞とその割合を表4に示す。表中の「その他」には十以上の数と共起する例、「不定の数」には「いく」「何」と共起する例が分類される。

---

[4] 表 2 中のフラックガーランドは三角形の飾り布で、壁やテントの周りにつるして使用される。
[5] 同様の例として、「貝」（〈枚〉は貝殻、〈個〉は貝そのもの）、「メニュー」（〈枚〉はラミネート加工された一枚もののメニュー、〈個〉は冊子体のメニュー）、「フラックガーランド」（〈枚〉

表4：〈枚〉〈つ〉〈個〉数詞との共起						
数詞	〈枚〉		〈つ〉		〈個〉	
一	168	36.8%	**17**	**34.7%**	**48**	**68.6%**
二	110	24.1%	**13**	**26.5%**	9	12.9%
三	29	6.3%	**9**	**18.4%**	5	7.1%
四	26	5.7%	2	4.1%	2	2.9%
五	13	2.8%	0	0.0%	1	1.4%
六	3	0.7%	0	0.0%	0	0.0%
七	1	0.2%	1	2.0%	0	0.0%
八	9	2.0%	0	0.0%	0	0.0%
九	9	2.0%	0	0.0%	1	1.4%
その他	**55**	**12.0%**	0	0.0%	3	4.3%
不定の数	34	7.4%	7	14.3%	1	1.4%
総計	457	100.0%	49	100.0%	70	100.0%

〈枚〉は、比較的満遍なく様々な数詞と共起し、十以上の数詞との共起も見られる。一方、〈つ〉〈個〉は共起する数詞に偏りがあることがわかる。〈つ〉は、一から三との共起にほぼ限られている。また、〈個〉は、一との共起が約7割を占めている。このことから、助数詞の選択には、共起する数詞が要因として関わることが示唆される。

次に、形状的特徴から〈つ〉〈個〉の対象名詞を確認する。表 5、表 6 に〈つ〉〈個〉の対象名詞のうち、上位 10 語を示す。

表5：〈枚〉→〈つ〉対象名詞上位10語		
順位	対象名詞	用例数
1	皿	9
2	資料	6
3	座布団	4
4	パンフレット	4
5	チョコレート	3
6	写真	2
7	ラップ	2
8	封筒	2
9	羽（風力発電）	2
10	フラックガーランド	2

表6：〈枚〉→〈個〉対象名詞上位10語		
順位	対象名詞	用例数
1	皿	19
2	ハム	9
3	チョコレート	8
4	肉	5
5	さつま揚げ	4
6	ＣＤ	4
7	シート	3
8	ラップ	2
9	シール	2
10	座布団	2

〈枚〉と比較すると、〈つ〉〈個〉ともに上位の対象名詞には厚みのない紙状のものが少ない。その特徴は、特に〈個〉に顕著である。厚みが増すほど、そのものの形状は〈枚〉の典型を離れ、また、形状的に〈個〉の範疇に近づいていくことになる。対象名詞の形状が〈枚〉の典型からどれだけ離れているかという点も、〈つ〉〈個〉の選択の要因として考えられる[6]。

は布一枚の状態、〈個〉は五枚で一組になった状態）等に見られた。

[6] 対象名詞の厚みが増すことで〈個〉が用いられやすくなることの指摘は、Shimojo(1997)、飯田

4〈本〉について

4.1 〈本〉の対象名詞の特徴

〈本〉416 例の異なり語数は 137 語であった。その上位 20 語を表 7 に示す。

表7：〈本〉対象名詞 上位20語

順位	対象名詞	用例数	順位	対象名詞	用例数
1	糸	30	11	指	8
2	恵方巻	17	12	電車	8
3	ワイン	14	13	ボールペン	7
4	足	13	14	マイク	7
5	バス	12	15	たこ糸	6
6	ビール	12	16	パウンドケーキ	6
7	ねじ	9	17	ヒット	6
8	映像	9	18	鉛筆	6
9	焼き鳥	9	19	線	6
10	ウィンナー	8	20	ジュース	5

多くの先行研究で指摘されているように、〈本〉は典型的には「一次元的な細長いもの」に用いられるが、形状をもとに拡張した用法も多く見られる（Lacoff1987, 松本 1991, 飯田 1999 等）。そのようなものとして、ヒット等の野球用語、交通手段、映像・映画等の作品、撮影や仕事のような活動等の例が挙げられる。表 7 からも、〈本〉が糸や恵方巻のような一次元的な細長い形状を持つものから、具体的な形状を持たない映像、野球のヒット、交通手段（バス、電車）のようなものにまで広く使用されていることがわかる[7]。

4.2 〈本〉を使用可能な対象名詞に〈つ〉〈個〉が使用されている例の収集

収集は、〈枚〉と同様の方法で行った。まず、〈つ〉〈個〉の用例のうち、〈本〉の対象名詞に含まれるのと同じ語を対象名詞とする例を取り出した。そのような例として、「ねじ」「ボールペン」「ウィンナー」等が見られた。次に、〈つ〉〈個〉の用例のうち、CEJC では〈本〉の使用が見られなかったが、〈本〉を使用可能であると考えられる例を取り出した。そのような例として「スプーン」「懐中電灯」等が見られた。最後に、取り出した例のうち〈本〉を使用する場合と、〈つ〉または〈個〉を使用する場合で、対象名詞が表すものが異なる例を確認した。そのような例として、(4a)から(4c)が挙げられる。ここでは同じ「つくね」でも、〈本〉では串にささった状態のものを、〈つ〉では注文数を、〈個〉では串にささずに皿に乗せられた状態のものを表している[8]。

(1999)にも見られる。また、〈枚〉が使用可能な対象で厚みのあるものの多くに、〈個〉も使用可能であることが飯田(1999)でも指摘されている。

[7] 交通手段に〈本〉が用いられていた例を(ｉ)に示す。

(ｉ) 二風谷のほうに向けてバスが一本あんの (K005_003,50910)

[8] 同様の例として、「うどん」（〈本〉は麺の本数、〈つ〉〈個〉は一玉のうどん）や、植物が対象名詞である場合に、〈本〉ではその植物自体の本数を表し、〈つ〉〈個〉ではその植物が束になった状態を表すものが見られた。

(4) a. つくね二本ですよね (T024_010,42860)
b. つくね三つ頼んで (T016_008,40940)
c. （つくね）一皿三個入りだよ (W006_001,29270)

このような例を除き、〈本〉を使用可能な対象名詞に〈つ〉〈個〉が使用されている例として〈つ〉39 例（異なり語数 23 語）、〈個〉48 例（異なり語数 28 例）が収集された。

4.3 〈本〉を使用可能な対象名詞に〈つ〉〈個〉が使用されている例の特徴

表7に〈本〉〈つ〉〈個〉の用例数と異なり語数を示す。〈つ〉〈個〉と比較して、用例数、異なり語数ともに〈本〉の使用が圧倒的に多い。そのため、〈枚〉と同様に、日常会話でも、〈本〉を使用可能なものに〈つ〉〈個〉が使用される頻度はそれほど高くなく、対象名詞の範囲もそれほど広くないと言える。

表7：〈本〉〈つ〉〈個〉異なり語数

助数詞	異なり語数	用例数
本	137	416
つ	23	39
個	28	48

次に、共起する数詞とのその割合を表8に示す。ここでも、助数詞によって数詞に偏りが見られる。〈本〉は比較的満遍なく様々な数詞と共起し、十以上の数詞との共起も見られる。一方で〈つ〉は、不定の数以外には、一から五までの共起しか見られず、その中では一、二と共起する例が6割以上を占める。〈個〉は、一との共起が約7割を占め、残りのうち約2割が二と共起する例となっている。ここでも助数詞の選択には、共起する数詞が関わることが示唆された。

表8：〈本〉〈つ〉〈個〉数詞との共起

数詞	〈本〉		〈つ〉		〈個〉	
一	195	46.9%	**11**	**28.2%**	**35**	**72.9%**
二	66	15.9%	**15**	**38.5%**	11	22.9%
三	35	8.4%	**3**	**7.7%**	0	0.0%
四	21	5.0%	**3**	**7.7%**	0	0.0%
五	10	2.4%	**1**	**2.6%**	1	2.1%
六	3	0.7%	0	0.0%	0	0.0%
七	2	0.5%	0	0.0%	0	0.0%
八	11	2.6%	0	0.0%	0	0.0%
九	3	0.7%	0	0.0%	0	0.0%
その他	**49**	**11.8%**	0	0.0%	1	2.1%
不定の数	21	5.0%	6	15.4%	0	0.0%
総計	416	100.0%	39	100.0%	48	100.0%

次に、形状と用法の点から〈つ〉〈個〉の対象名詞を確認する。表 9、表 10 に〈つ〉〈個〉

の対象名詞のうち、上位 10 語を示す[9]。

表9：〈本〉→〈つ〉対象名詞上位10語

順位	対象名詞	用例数
1	コース	5
2	ヘラ	5
3	瓶	3
4	のり巻き	3
5	企画	2
6	映画	2
7	ねじ	2
8	ボトル	2
9	番組	1
10	板	1

表10：〈本〉→〈個〉対象名詞上位10語

順位	対象名詞	用例数
1	ねじ	5
2	民間	4
3	ティースプーン	4
4	歯	3
5	企画	2
6	点滴	2
7	ウィンナー	2
8	ビーカー	2
9	瓶	2
10	老眼鏡	2

〈つ〉〈個〉ともに、一次元的な細長い形状を持つものだけでなく、具体的な形状を持たない対象名詞にも使用が見られる。形状を持つものに注目すると、〈本〉で上位にあった「糸」のような極端に細長く幅のないものには〈つ〉〈個〉の使用が見られなかった。反対に、〈つ〉〈個〉の対象名詞には、ねじや歯のように長さのないもの、ヘラのように先が広がっているもののように、細長さの目立たないものが見られた[10]。細長さが目立たなくなるほど、その形状は〈本〉の典型を離れることになり、そのことが〈つ〉〈個〉の選択に関係していると考えられる。また、形状を持たないもののうち、映画、番組、企画等の対象名詞には〈つ〉〈個〉ともに使用が見られるのに対し、〈本〉で上位にあった交通手段には、〈つ〉〈個〉どちらの使用も見られなかった。また、野球関係の用語は〈つ〉で一例のみ「ヒット」への使用が見られたが、その発話では、〈つ〉の直後に〈本〉での言い直しが見られた[11]。そのため、形状を持たない対象名詞のうち、交通手段と野球関係の用語には〈つ〉〈個〉を使用しにくい可能性がある。このことから、〈本〉を使用可能な対象名詞に〈つ〉〈個〉を使用する場合には、形状以外にも対象名詞の用法が要因として関わる可能性が示唆された。

---

[9] 表 10 中の「民間」を対象名詞とする例を(ⅱ)に示す。これは就職活動中の発話で、話者は聞き手に「民間企業に受かっていること」を伝えている文脈である。

(ⅱ) 民間一個 受かってて (K003_005,4670)

話者は異なるが、同じ会話で「民間」に〈本〉が使用される例も見られた。その例を（ⅲ）に示す。この文脈では、話者は聞き手に「民間企業だけを受けるのではない」ことを伝えている。

(ⅲ) 絶対もう全然もう（民間）一本じゃなくて (K003_005,39400)

[10] 先が広がっているものとしては、このほかに「懐中電灯」や「トンカチ」等の例が見られた。

[11] その例を(ⅳ)に示す。

(ⅳ) ヒットもう二つ 二本打ってっから (T004_001,44490)

5 まとめ

本発表の結果から、日常会話のようなインフォーマルな場面であっても、〈本〉〈枚〉が使用可能な対象名詞に〈つ〉〈個〉が使用される頻度は高くなく、使用される対象名詞の範囲も限られることがわかった。また、助数詞選択の要因として、「共起する数詞」「対象名詞の形状」「用法」が条件として関わることが示唆された。「共起する数詞」については、〈つ〉は五以下の小さい数詞（特に一、二）と共起する場合に選択されやすく、〈個〉は一と共起する場合に選択されやすいと考えられる。また、「形状」という点では、対象名詞が〈枚〉〈本〉を用いる典型的な形状から離れるほど、〈つ〉〈個〉が使用されやすいと考えられる。さらに、具体的な形状を持たないが〈本〉を使用可能な対象名詞については、用法によって〈つ〉〈個〉の使用に差が見られ、野球関係の用語や交通手段を表す用法には〈つ〉〈個〉を使用しにくい可能性が示された。

本発表では、〈つ〉〈個〉を広い範囲の対象名詞に用いることのできる助数詞として同じように扱い、分析を行った。そのため、両助数詞の特徴や違いについて十分に検討することができなかった。今後はそれぞれの特徴や違いをふまえたうえで、〈つ〉〈個〉が〈枚〉〈本〉を使用可能な対象に用いられる場合、両助数詞にどのような違いが見られるか、詳細な分析を行いたい。また、今回は〈枚〉〈本〉という対象名詞の形状に規定される助数詞の一部を対象とした。それ以外の特徴を持つ助数詞（〈台〉〈軒〉〈歳〉等〉に関しての分析も、今後の課題としたい。

参考文献

飯田朝子（1999）「日本語主要助数詞の意味と用法」博士論文, 東京大学.

伊藤由貴（2015）「近代を中心とした助数詞の通時的研究」博士論文, 大阪大学.

谷原公男・顔瑞珍・デビー・リー（1990）「助数詞の用法とプロトタイプ―〈面〉・〈枚〉・〈本〉・〈個〉・〈つ〉―」『計量国語学』17-5, pp. 209-226.

松本曜（1991）「日本語類別詞の意味構造の体系－原型意味論による分析－」『言語研究』99, pp. 82-106.

眞野美穂（2004）「類別詞「個」と「つ」の認知的考察」西光義弘・水口志乃扶（編）『類別詞の対照』pp. 129-148, くろしお出版.

三保忠夫（2006）『数え方の日本史』吉川弘文館.

Lacoff, George (1987) *Woman, Fire and Dangerous Things: What Categories Reveal About the Mind*. Chicago: University of Chicago Press.

Shimojo, Mitsuaki (1997) The role of the general category in the maintenance of numeral classifier systems: The case of tsu and ko in Japanese. *Linguistics* 35-4. pp. 705-733.

現代日本語における境界直後の「だ」について

鄧 瑾瑄（京都大学大学院生）

要旨

現代日本語共通語では、判定詞「だ」が、発話冒頭（「だよね」）、文節末（「お店にだなぁ、人がだなぁ…」）、「なんて」を伴って名詞以外の品詞後（「9 月に雪が降るだなんて」）などの、談話・発話構造上の境界の直後に出現できる。本発表は、100 人以上の日本語母語話者を対象とした自然さ調査、及び『日本語日常会話コーパス』の実例に対する考察を通して、これらの境界直後の「だ」の実体を明らかにするものである。境界直後の「だ」は、通常の文末の「だ」として発せられることで、境界を越えて結束性を保つと同時に、文脈によって、話し手の発話時点の判断を明示する機能、あるいは話し手の発話時点の判断でない命題を構成する機能を発動し、先行発話をそれぞれ話し手の発話時点の判断、話し手の発話時点の判断でない命題として認定する*。

キーワード：「だ」、 境界、発話冒頭、文節、「だなんて」

1 はじめに

現代日本語共通語では、判定詞「だ」が、(1) のように、発話冒頭に現れうる[1]。

(1)（「あの人って、話、長くない？」と訊かれて）
だよね。 (定延 2019: 11)

「だ」は、(2) のように、文節末にも出現しうる。

(2) お店にだなぁ、人がだなぁ、いっぱいだなぁ、入ってだなぁ… (定延 2019: 105)

さらに、「だ」が (3) のように、「なんて」を伴って名詞以外の品詞に続くこともある[2]。

(3) 9 月に雪が降るだなんて、見たことない。

以上の例は、「だ」が談話・発話構造上の境界の直後に出現するという点で共通している。(1) では、「だ」が発話冒頭という談話構造上の大きな境界の直後に出現している。(2) と (3) の場合、「だ」は、名詞以外の品詞に後続する点で、発話構造上の境界の直後に出現すると考えられる。

---

* 本発表は、JST 次世代研究者挑戦的研究プログラム JPMJSP2110 の支援を受けたものである。

1 本発表における「だ」は、「だ」の終止形を指す。境界直後の「だ」に適宜、下線を引く。

2 以下、出所が明記されていない例文は全て発表者による作例である。

本発表では、境界直後の「だ」が、文脈によって、話し手の発話時点の判断を明示する機能、あるいは話し手の発話時点の判断でない命題を構成する機能を持つと主張する[3]。境界直後の「だ」のこれらの機能は、文末に出現する「だ」の用法に基づいている。話し手は境界の直後に、通常の文末のように「だ」を発することによって、境界を越えて結束性を保つと同時に、先行発話を話し手の発話時点の判断、あるいは話し手の発話時点の判断でない命題として認定すると考えられる。

次節から、境界直後の「だ」の位置付けを明らかにした上で、発話冒頭の「だ」、文節末の「だ」、及び、「なんて」を伴って名詞以外の品詞に続く「だ」を考察する。

2　境界直後の「だ」の位置付け

田野村 (1990) は、判断の有無によって、同じ構造を持つ名詞述語文を以下のように二分した。

(4) a.（アノ風体カラスルト）あの男はヤクザだ。
　　b.（君ハシラナイダロウガ）あの男はヤクザだ。　(田野村 1990: 785)

田野村 (1990: 785) は (4a) について、「話者はいままさに判断―この場合、推量的判断―をくだした、もしくは、くだしつつあると言える」、(4b) について、「話者が知識として持っている情報が表明されているにすぎない。発話の時点において判断がくだされるわけではない」と述べている。

「だ」は境界直後に、(4a) 、(4b) のような文末の「だ」として発せられることで、話し手の発話時点の判断を明示する機能、話し手の発話時点の判断でない命題を構成する機能を発動し、先行発話をそれぞれ話し手の発話時点の判断、話し手の発話時点の判断でない命題として認定する。

3　発話冒頭の「だ」

ここでは、3.1 節及び 3.2 節で、それぞれ「だと思う」と「だと思う」以外の「だ」で始まる発話を中心に、発話冒頭の「だ」の持つ 2 種類の機能を観察する。

3.1　「だと思う」

「だ」で始まる発話「だと思う」で特に注目すべきは、多くの場合、発話冒頭の「だ」がなくても、発話「と思う」が依然として自然である点である。例えば、次の (5) を見られたい。

(5)（友人にひっかけクイズを出したら、案の定、ひっかかって、おかしな答えを出してきた。それを訂正する発話として）
　a. と思ったら大間違い。
　b. だと思ったら大間違い。

[3] 本発表での「明示する」ことは、日常語とは異なり、必ずしも意図的ではないものとする。

ウェブページを介したアンケートで、(5a) 、(5b) の自然さを調査したところ、以下の図1、図 2 に示す結果を得た。この調査は、20 代から 70 代以上までの日本語母語話者 104 人に（性別・出身地域を問わない）、自然さを 1 点〜5 点の 5 段階（1 点：とても不自然〜5 点：とても自然）で問うものであった。図の横軸と縦軸はそれぞれ点数、人数である。

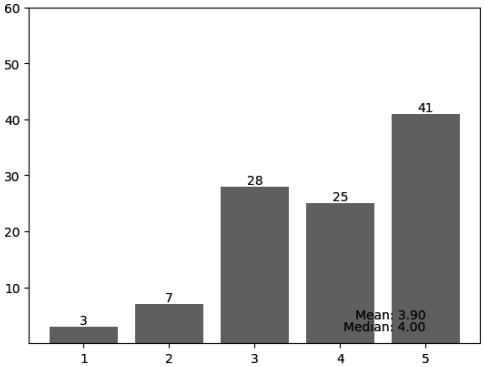


図 1: (5a)「と思ったら大間違い」の自然さ

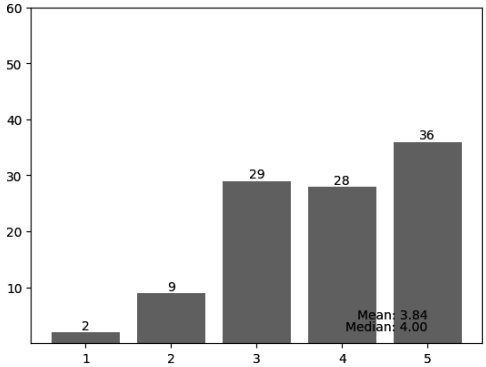


図 2: (5b)「だと思ったら大間違い」の自然さ

図 1、図 2 は、(5a) と (5b) が総じて自然であることを示している。5% の有意水準でウィルコクソンの符号順位検定（Wilcoxon signed-rank sum test）を行った結果、(5a) と (5b) の自然さには統計的な有意差がない（$p = 0.44$）。

(5) では、判断する認知活動を行う主体が聞き手（友人）であるため、発話冒頭の「だ」は話し手の発話時点の判断でない命題（聞き手の思考の内容）を構成する。また、(5) のように判断する主体が話し手でない場合、「思う」という動詞自体が判断を表すため、話し手の発話時点の判断でない命題を構成する「だ」がなくても、先行発話は「思う」により話し手の発話時点の判断でない命題として認定される。よって、「だ」の出現は任意である。

同様なことは、発話冒頭の「だ」が話し手の発話時点の判断を明示する例においても観察できる。例えば、次の『日本語日常会話コーパス』（以下 CEJC）の実例において、慎による発話冒頭の「だ」を削除しても、発話の自然さは大きく変わらないと思われる。

(6)（友人たちと、高齢者の運転免許証の自主返納について話している）
貞：だからねやっぱり事故起こす人しか免許持ってないんだよ。年寄りって。
慎：だと思いますね。 (CEJC: S002_004)

(6) のように判断の主体が話し手の場合、「思う」という動詞自体が判断を表すため、話し手の発話時点の判断を明示する「だ」がなくても、先行発話は「思う」により話し手の発話時点の判断として認定される。(5) と同じように「だ」の出現が任意である。

しかし、話し手の発話時点の判断を明示する必要があると考えられる文脈において、先行発話が「思う」により話し手の発話時点の判断として認定されても、判断を明示する「だ」

がないと、発話は若干不自然になる[4]。例えば、次の (7) を見てみよう。

(7)（いつも約束の時間に遅れてくる友人と、待ち合わせをした。約束の時間になると、スマホの電話が鳴り、出るとその友人であった）
友人：ごめんごめん。ちょっと急用で、5 分遅れるわ。
（それに返答する発話として）
a. ？と思ったよ。
b. だと思ったよ。

(5) と同じアンケートで (7a) 、(7b) の自然さを調査したところ、以下の図 3、図 4 に示す結果を得た。

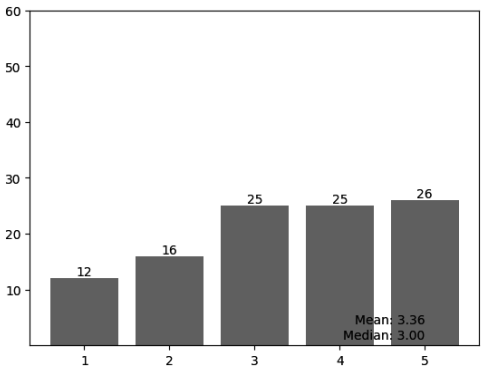


図 3: (7a)「と思ったよ」の自然さ

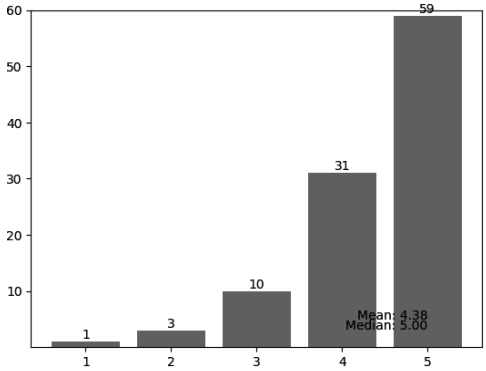


図 4: (7b)「だと思ったよ」の自然さ

図 3 と図 4 からわかるように、(7a)「と思ったよ」は自然さの中央値と平均値が共に低く、若干不自然と言える。その一方で、(7b)「だと思ったよ」は右肩上がりの分布を呈しており、非常に自然である。5% の有意水準でウィルコクソンの符号順位検定を行ったところ、(7a) と (7b) の間の自然さの差は統計的に有意であることがわかった（$p = 2.27e\text{-}10$）。

発話冒頭の「だ」に関する先行研究 (奥津 2001, 劉 2010) は、発話冒頭の「だ」が述語あるいは言語的・非言語的文脈を代用する機能を持つと主張した。だが、「だ」を代用語と考えても、なぜ (6) は「だ」がなくても自然なのに、(7) は「だ」がないと若干不自然になるのかという問題には答えられない。

本発表の主張によって、この現象の説明が可能となる。(7) の文脈において、友人からの遅刻の連絡に対する返答発話「（だ）と思ったよ」が自然に聞こえるには、次の 2 つの必要条件を満たさなければならない。それは、友人から連絡がくる前の段階で、話し手がすでにそう（連絡内容のように）判断していたことと、この過去の判断が現在の友人の連絡内容によって裏付けられることである。ただし、「友人から連絡がくる前の段階で、話し手

[4] 例文冒頭の単一の疑問符「?」は当該発話の若干の不自然さ、二重疑問符「??」は当該発話の不自然さを表す。以下も同様。

がすでにそう判断していたこと」にとって重要なのは、話し手が実際にそう判断していたかどうかではなく、聞き手にそう思わせることである。つまり、話し手は、連絡がくる前の段階で自分がすでにそう判断していたことを、現在の会話の場で明示する必要がある。話し手が (7b) で発話時点の判断を明示する発話冒頭の「だ」を発することによって、友人の連絡がくる前に行った判断を、発話時点でもう一度行ってみせている[5]。そのため、発話冒頭の「だ」のある (7b) が自然である一方、「だ」のない (7a) は若干不自然である。

3.2 「だと思う」以外の「だ」で始まる発話

先行研究と CEJC から収集した実例に基づき、発話冒頭の「だ」の 2 種類の機能に応じて、できるだけ網羅的に「だ」で始まる発話を表 1 のように整理した。

表 1:「だ」の機能による「だ」で始まる発話の分類

命題構成	だっけ、だと（いいね/いいな/いいけど）、だと（さ）（伝聞）、だって（よ/さ）（伝聞）、だそうだ、だし、だもんね/で/だから
判断明示	だね/な/よね/よな/わな/わね

以下、話し手の発話時点の判断でない命題を構成する「だ」で始まる発話から観察する[6]。

「だっけ」は先行発話を受け、過去を回想したり、記憶を確かめたりする際に発する発話である。そうであると判断をくだす段階にはまだ至っていないため、「だっけ」は先行発話を未確定の命題として認定する。ここで、発話冒頭の「だ」は、話し手の発話時点の判断でない命題を構成する[7]。

(8)（母と、おやつの価格について話している）
日野：カルビーとかコビ湖池屋って百六十円ぐらい。今。
正和：だっけ。わかんない。正規の値段がわかんない。 (CEJC: C002_004)

「だと（いいね/いいな/いいけど）」の場合、話し手の発話時点の判断でない命題を構成する発話冒頭の「だ」と条件表現「と」が組み合わさって、先行発話を、話し手のこれから述べる後件の成立条件である命題として認定する。

---

[5] 田野村 (1990) も、(4a) について、「(a) を発すること自体が判断をくだすことに相当する」「その文を発すること自体が判断という精神の営みに即応する」「推量的判断という心的な営みとその文を発話する行為とが明確的に分離しがたい様相の中にある」と述べ、発話行為と認知活動の関連性を指摘している。

[6] 加藤 (2016: 97) は、形式文脈を、「同一セッションの内部で言語的に具体化される発話の連続的な蓄積からなる。原則として、セッション参加者が共有していなければならないものであり、命題の形で談話記憶に蓄積できる陳述性の記憶である」のように定義した。先行発話を話し手の発話時点の判断でない命題として認定する「だ」は、先行発話を命題の形にし、形式文脈として談話記憶に蓄積するという認知過程を言語的に反映していると考えられるだろう。

[7] 「。」は発話末尾、「 [」は重なった発話の開始を表す。意味のないカタカナは言いよどみである。

(9)（友人たちと、父親に完全に縁を切られた知り合いの子供について話している）
岡崎：やっぱりちょっと男の子だからお父さんとちょっと繋がっててほしいかな
[ってゆうのはちょっとあたしん中ではあんのね。
西： [そうね。うーん。だといいね。ほんとに。 (CEJC: T017_018)

話し手の発話時点の判断でない命題を構成する発話冒頭の「だ」に伝聞の表現が後続する「だと（さ)」、「だって（よ/さ)」、及び「だそうだ」は、先行発話を、伝聞情報からなる命題として認定する。

(10)（いつも朝早くから出勤する田中さんの姿がいないことに気づいた社員たちのもとに課長がやってきた。そして、課長が社員 A に向かって）
「田中さんは盲腸炎で緊急入院したそうです。今週はお休みということで」
（課長が座席に戻って行く。社員 A が自分の後に座る社員 B に）
だそうです。/ だってさ。 (劉 2010: 93)

話し手の発話時点の判断でない命題を構成する発話冒頭の「だ」と事実を並べて示す接続助詞「し」が組み合わさる「だし」は、先行発話を客観的な事実に基づく命題として認定する。

(11)（家族と、ある電気オーブンについて話している）
平沢：電気あの手前あの開けた時のもう熱の逃げ方が早すぎて [なんかもう。
志麻子： [だし。余熱をカかけるのにむちゃくちゃ時間かかるし。 (CEJC: K012_004)

話し手の発話時点の判断でない命題を構成する発話冒頭の「だ」に原因や理由を表す助詞「もん（もの)」が続く「だもんね/で/だから」は、先行発話（以下の (12) の場合、先行する自分の発話「お兄さんがね具合悪い時いる」）を理由や原因を述べる命題として認定する。

(12)（義理の娘（由美）と、病気のお兄さんのために、お兄さんの自宅まで訪問して本を渡したある人物について話している）
義母：近くまで来ましたってゆって来てくれてあのお兄さんがね具合悪い時いる。
由美：うんうん。
義母：だもんだからあの自宅まで来て僕の本ですって。 (CEJC: T003_006)

発話冒頭の「だ」に同意や同感の終助詞が後続する「だね/な/よね/よな/わな/わね」の場合、話し手はまず「だ」によって発話時点の判断を明示して、そして聞き手に対し同意や同感を表示、または要求する。

(13)（友人と、就職活動について話している）
柚本：内定押さえときたいよなってゆうのが [実際のところ。
安藤：　　[だよな。　　(CEJC: T009_005a)

(13) では、先行発話が会話相手の発話であるが、次の (14) では、話し手は先行する自分の発話を発話時点の判断として認定し、事後的に聞き手に対して同意を要求する。

(14)（先生が、学生たちと懇親会で）
溝口:だから苦瓜ったらこれなこれゴーヤってさ日本語に普通にゆうと大和コト言葉でゆうと苦瓜ってゆうじゃん。
内山：[うんうんうんうんうん。
田辺：[あー。
溝口：だよね。　　(CEJC: T013_014a)

4　文節末の「だ」

文節末に出現する「だ」の例として、ここでは (2) を再掲する。

(15) お店にだなぁ、人がだなぁ、いっぱいだなぁ、入ってだなぁ…　　(定延 2019: 105)

定延 (2019: 107) は、例えば、「人がだなぁ」という文節の意味内容は、「私は「人が」と言いたいんだがなぁ」であると指摘した。その上で、「この発話は、「人が」という一般的なレベルの発話を、発話について語るメタ的なレベルから「だなぁ」と語っており、「人が」と「だなぁ」の間は深く区切れている」と述べた。このことから、文節末の「だ」は、話し手自身の発話に対して、「言いたいことはその通りである」というような話し手の発話時点の判断を明示する機能を持っていると考えられる。

5　「なんて」を伴って名詞以外の品詞に続く「だ」

「なんて」を伴って名詞以外の品詞に続く「だ」は、話し手の発話時点の判断でない命題を構成する機能を持つと考えられる。例えば、次の (16) と (17) を見てみよう。

(16)（9 月のある日、「札幌で初雪を観測」というニュース記事を読んで発する発話として）
a. 9 月に雪が降るだなんて、見たことない。
b. 9 月に雪が降るなんて、見たことない。

(17)（9 月のある日、札幌で実際に雪が降っているのを見て発する発話として）
a. ?? 9 月に雪が降るだなんて、見たことない。
b.　 9 月に雪が降るなんて、見たことない。

同じ発話 (16a) と (17a) が、(16) の文脈では自然である一方、(17) の文脈では不自然になる。ここで、「だ」が話し手の発話時点の判断でない命題を構成すると考えると、この

現象の説明が可能となる。

(16) の文脈では、ニュース記事による先行発話（「9 月に雪が降る」）が話し手の発話時点の判断ではないため、「だ」が出現できる。その一方で、(17) では、話し手が目の前で実際に雪が降っているのを見ているため、先行発話を話し手の発話時点の判断でない命題として捉えられず、「だ」も出現できない。(17b) のように、「だ」を削除すれば、発話が自然になる。

また、次の (18) も見られたい。

(18)（親しい関係にあった友人の告別式の前に、最後に友人の顔を拝見しながら、そばにいる知人に）

a. あの人が亡くなっただなんて…

b. あの人が亡くなったなんて…

(18) のように、親しい関係にあった友人のお別れの儀で、亡くなった友人の顔を実際に見ているにも関わらず、先行発話の内容（友人が亡くなったこと）を心の中で認識しがたい、あるいは認識したくない、つまり、話し手の主観的現実を離れた命題として認識する場合、「だ」の出現も自然である。

参考文献

奥津敬一郎 (2001)「接続のうなぎ文ーやっぱり述語代用説ー」『日本語教育』111: 2-15.

加藤重広 (2016)「文脈の科学としての語用論ー演繹的文脈と線条性ー」『語用論研究』18: 78-101.

定延利之 (2019)『文節の文法』. 東京: 大修館書店.

田野村忠温 (1990)「文における判断をめぐって」崎山理・佐藤昭裕（編）『アジアの諸言語と一般言語学』785-795. 東京: 三省堂.

劉雅静 (2010)「談話レベルから見た「だ」の意味機能ー「だ」の単独用法を中心にー」『言語学論叢 オンライン版』29(3): 90-107.

普通体応答における「だ」の有無

――日本語教育文法として「「だ」は省略」は妥当か――

森篤嗣（武庫川女子大学）

1. 問題提起

本稿で主として考察対象とするのは，(1) や (2) のような話し言葉の普通体において応答として用いる「ナ形容詞語幹単独用法」である（以下，「ゼロ形」）[1]。「だ」が付く形（以下，「ダ形」），「です」が付く形（以下，「デス形」と比較してみる。

(1) （ケーキを作る道具について話をしている場面で）
妻：今度、料理用の秤、買おうかな。ちゃんとね。
夫：そして、お母さんはそれを実行するのに何年かかることやら。
妻：うん、大丈夫｛φ／??だ／?です｝。最近、いいお店見つけたから。
（CEJC：K004_011）

(2) （旅行について話をした場面の後で）
男：俺はもう仕事なんで（うん）忙しさのピークなんで。
女：お茶、淹れよっか。
男：そう。いやー、別に大丈夫｛φ／?だ／?です｝。
（CEJC：T021_003）

三枝（2001）では，ナ形容詞とほぼ同じ振る舞いをする名詞述語による文末について，「だ」が用いられるのは「自分に向けた発話」と「他者目当ての発話」があるとし，後者は男性だけが使うとしている。確かに (1) は，女性の発話であるため「だ」の使用に強い違和感があるとも取れる。しかし，(2) は男性による「他者目当ての発話」であるが，「だ」がない方が自然だと思われる。

もちろん，文末の「だ」は女性が使うよりも男性が使う方が自然であるという傾向は先行研究で多くの指摘があり，ある程度認められている。しかしながら，(1) と (2) で示したように，話し言葉の普通体においてナ形容詞の肯定応答として用いる場合には，女性が使いにくいのはもちろん，男性にも使いにくい場合もある。そうであれば，話し言葉の普通体においては，ナ形容詞はゼロ形，すなわちナ形容詞語幹単独用法が無標であるとした方が妥当ではないだろうか[2]。

---

[1] 用例は『日本語日常会話コーパス』（Corpus of Everyday Japanese Conversation（以下、CEJC））による。ID のうちアルファベットで始まる前半は協力者 ID，後半はセッション ID である。

[2] 既に荘司（1992:44）において，ナ形容詞文と名詞文共にゼロ形が普通体に当たるという主張がされており，本稿はこれに倣う形になる。また，李（2012）は三枝（2001）の「他者に向けた発話」を「丁寧さのカテゴリ内の発話」とし，デス名詞文を「丁寧体」，ゼロ名詞文を「普通体」，ダ名詞文を「威圧体」と位置づけており，ゼロ形を無標と位置づけている点，ダ形に付加的な意味を与えているという点で本稿の主張と重なる。さらに，ナ形容詞のゼロ形は基本形から活用語尾

この主張は日本語教育文法として扱う場合に意義を持つ。『みんなの日本語初級Ⅰ 第2版』では，練習Ａでナ形容詞の丁寧形「きれいです」に対し，普通形「きれいだ」という体系を提示している（スリーエーネットワーク 2012:172）[3]。つまり，形態論としてはダ形を無標として認めている。その一方，例文（p.170）として「今、暇？―うん、暇。何？」や，練習Ｂ（p.174）として「元気？―うん、元気。」のようなゼロ形による応答を掲載している。このように，ナ形容詞の普通体の導入においては，会話における応答を典型例としてゼロ形を示している。

なお本稿では，文体としての「普通体」と，形態論としての「普通形」は分けて考える。日本語教育において「普通形」の導入は，「○大丈夫だけど／×大丈夫けど」や「○大丈夫だと思う／△大丈夫と思う」という従属節内での使用する形を教えるためにおこなわれる。したがって，活用体系として「ナ形容詞の普通形はダ形である」という説明は必要である。しかし話し言葉における「普通体」については，少なくとも初級の初出時においては，ゼロ形によるナ形容詞語幹単独用法を無標として扱うことを明記すべきであることを主張したい。

2. 日本語教育における「だ」の扱い

多くの日本語教師にとって，普通体応答において「名詞＋だ」と「ナ形容詞語幹＋だ」については，「だ」を省略するという説明は，半ば常識であると言って過言ではない。しかし，それは経験的説明とも言えるもので，日本語文法解説書を見てみると，それほど一般的な説明であるというわけではない。例えば，庵ほか(2001:503)では「ダ体」として「名詞＋だ」と「ナ形容詞語幹＋だ」と省略されない形が示されている。一方，日本語記述文法研究会（2009:205）では「ジェンダーによる文体差」として，男性語では「学生だよ」「大丈夫だよ」となるところが，女性語では「だ」が省略されて「学生よ」「大丈夫よ」を示しているが，普通体との関係が明示されているわけではない。

そうした状況の中，『みんなの日本語初級Ⅰ　教え方の手引き』スリーエーネットワーク（2005:200-201）及び『みんなの日本語初級Ⅰ第 2 版 教え方の手引き』スリーエーネットワーク（2016:174）では，明示的に「だ」の省略を扱っている。

(3) 練習１ 丁寧体を与えて質問と答えを作らせる。

例１Ｔ：元気ですか → Ｓ１：元気？

Ｔ：はい → Ｓ２：うん、元気。

スリーエーネットワーク（2005:201）

まず，(3)は初版の練習問題である。タイトルは「「だ」の脱落」で，別箇所の解説に「な形容詞や名詞の疑問文においては、「です」の普通形「だ」が省略される。また肯定の答えの場合、「だ」の言い切

「な」が脱落した形とみなすことにできる。これは形態的には今野（2012）などで指摘されるイ形容詞の「イ落ち表現」に対応することとなる。同様の現象について，冨樫（2006）では「形容詞語幹単独用法」，清水（2015）では「形容詞語幹型感動文」と呼んでいる。

[3] 名詞についても練習Ａで丁寧形「あめです」に対し，普通形「あめだ」を体系として提示しているが，こちらはナ形容詞とは異なり，問題（p.177）で「あの人は結婚している？―ううん、独身だ」のようなダ形による応答を掲載している。

りは強く響くので、「だ」を省略したり、終助詞「ね」「よ」をつけたりして語調を和らげる。女性は「～だ」の言い方をほとんどしない」という説明がある。

(4) あした、　ひま？
　…うん、　ひま。
　…ううん、ひまじゃない。

スリーエーネットワーク（2016:174）

次に(4)は，第2版の例文である。タイトルは「な形容詞文／名詞文の普通体会話」で，「普通体のやりとりを導入する。質問文は「だ」が落ち、答える場合も「だ」をあまり使わないことを示す。「あした、暇？」「うん、暇」などの簡単なやりとりで「だ」が落ちることを確認する」という説明がある。「女性は「～だ」の言い方をほとんどしない」という記述が削除されていることがわかる。

さて，このときの「簡単なやりとり」とは何を指すのだろうか。それが「質問文も応答も短い」ということを指すのだとすれば，それは適切ではない。コーパスによる実例では質問文が長いことは多々あり，応答も「だけど八時間九時間は寝てるから大丈夫（CEJC：K002_017）」など長くなることもある。

以上，本稿で取り扱う普通体応答における「だ」の有無に対するスリーエーネットワーク（2005:200-201）及びスリーエーネットワーク（2016:174）の解説は非常に示唆的なものであり，日本語学に基づく文法解説書よりも実際的であると言える。これを日本語文法研究の立場から提言できていないのは非常に口惜しい。日本語教育文法という観点からすると，日本語学習者の理解という点では普通体応答の「だ」は男女問わずあり得るということとを抑え，なおかつ「簡単なやりとり」でなくても多用される事実があるということを，コーパスで検証することは責務なのではないか。

コーパスによる検証の結果，「少なくとも普通体応答に限って言えば，男女問わずゼロ形で返せば問題ない」ということであれば，普通体の導入時に提示される応答に関して言えば，「「だ」は省略できる」ではなく「ゼロ形が無標」とした方が習得にも誤用回避にも有効な記述ではないだろうか。本稿ではこの点を改めて検証していきたい。

3. 使用データと全体の傾向について

データとしてCEJCとJ-TOCCを用いた。CEJCは国立国語研究所による日本語日常会話を収録したコーパスで，個人密着法で185時間，特定場面法で15時間の計200時間を収録している。J-TOCCは，話題が語彙・文法・談話ストラテジーなどに与える影響を検討するためのコーパスである。5分ごと15話題について120ペア，合計150時間の会話が収められており，およそ11万語に相当する。ペアは性別の組み合わせや録音地の東西でバランスをとったコーパスである（中俣ほか2021:11）。

まずCEJCで検索したゼロ形・ダ形・デス形等の分布を検討する。コーパス検索ツール「中納言」を用い，「発話単位末」を基準として「形状詞-一般」と「名詞-普通名詞-一般／形状詞可能」のゼロ形，ダ形，デス形に加え，終助詞が付与されたダヨ形，ダネ形，デスヨ形，デスネ形も検索した[4]。その際，

[4] 形状詞は「形状詞-一般」の他に「形状詞-助動詞語幹（「そう」「みたい」など）」と「形状詞-タリ（「満々」「爛々」など）」

形状詞及び助動詞「だ」は活用形を終止形に限定した。

表１　CEJC におけるゼロ形・ダ形・デス形等の分布

	ゼロ形	ダ形	ダヨ形	ダネ形	デス形	デスヨ形	デスネ形
ナ形容詞	2,305	414	319	209	350	87	71
名詞	19,937	1,108	1,010	571	604	256	518

CEJC の「発話単位末」は，疑問か応答かの区別がつかない。ナ形容詞のゼロ形をランダムに 50 件調べてみたところ，疑問は 7 件だった。したがって，ナ形容詞のゼロ形は実際には 14%ほど少ないと見られる。名詞のゼロ形についてはあまりに多様な出現があり得るため，参考程度の数値とみて欲しい。それでもダ形に比べてゼロ形の使用がかなり多いことは見て取れる。なお，CEJC は普通体が多いが，若年層のみで取得した J-TOCC に比べると比較的に丁寧体も出現する。

次に J-TOCC でのゼロ形・ダ形・デス形等の分布を検討する。コーパス検索ツール「J-TOCC_kwic.ipynb」を用い，句点「。」を基準として CEJC と同様の形式の検索をおこなった[6]。ただし，検索ツールの都合上，形状詞及び助動詞「だ」は活用形を終止形の限定はおこなわず，同条件を手作業で再現した。

表２　J-TOCC におけるゼロ形・ダ形・デス形等の分布

	ゼロ形	ダ形	ダヨ形	ダネ形	デス形	デスヨ形	デスネ形
ナ形容詞	1,781	239	122	93	48	5	19
名詞	11,404	159	245	219	307	43	92

J-TOCC は，句点「。」で検索しているため，疑問と応答の区別はできており実数に近いと見て良い。J-TOCC は比較的に仲の良い大学生ペアの会話を収録しているため，かなり普通体に偏っている。ここでもゼロ形の使用はダ形を圧倒している。

4. CEJC における出現上位語の傾向について

本節では，ナ形容詞や名詞のうちどのような語がゼロ形，ダ形，デス形それぞれで使われているのかについて，ややコーパス規模の大きい CEJC を用いて見ていく。

表３　CEJC におけるナ形容詞頻度上位 10 件[7]

	ゼロ形	ダ形	デス形	計

があった。

[5] 西日本方言では，ダ形の代わりに「形容動詞語幹＋や（以下，ヤ形）」が使われることがある。CEJC では，ナ形容詞のヤ形は全体で 18 件，名詞のヤ形は 114 件あった。ここでは影響は軽微なものとして論を進め，東日本話者と西日本話者が半数ずつに統制を取った J-TOCC で改めて検証することとする。

[6] 中俣尚己氏作成。2024 年 6 月 16 日現在では非公開。

[7] BCCWJ の品詞分類では形状詞一般ではあるが，ダ形やデス形で使いにくい「そんな(173)」を除いた（括弧内は合計頻度）。「そんな」のダ形とデス形は 0 件だった。

大丈夫	804▲	29▽	251▲	1,084
嫌	41▽	307▲	8▽	356
大変	120	38	5▽	163
好き	126▲	5▽	6▽	137
同じ	93▲	2▽	0▽	95
まじ	70▲	5▽	13	88
確か	76▲	1▽	1▽	78
大事	71▲	1▽	0▽	72
奇麗	57▲	2▽	2▽	61
可哀想	54▲	2▽	0▽	56

表3の10種類のナ形容詞についてカイ二乗検定をおこなったところ，ゼロ形，ダ形，デス形の出現数間に偏りが認められた（$x2(18)=1551.663$ $p<.01$, Cramer's V=0.595）。残差分析の結果も示した。

ここで非常に特徴的なのが「嫌だ」である。CEJCでは語彙素「嫌だ」307件のうち266件が「や」，41件が「嫌」と文字化されている。「や」と「嫌」の文字化精度は不明だが，1モーラの「や」が多数を占めることから「や。」よりも「やだ。」の方が安定することからダ形が優先して使用されると思われる[8]。ゼロ形を無標とする原則より形態的特徴を優先するというこの現象は，金水（2023:43）の「断定の「～だ」は，それ自体としては話し相手へのコミュニケーション上の効果を持つような要素ではない」を裏付けるものと言えるかもしれない。

表4　CEJCにおける名詞頻度上位10件[9]

	ゼロ形	ダ形	デス形	計
本当	1,157	331▲	3▽	1,491
駄目	277▽	149▲	36▲	462
嘘	262▲	10▽	2▽	274
無理	107	22	14▲	143
一杯	81▲	5▽	0	86
普通	68▲	1▽	2	71
終わり	52	4▽	6▲	62

[8] イ形容詞に名詞化接辞「め」が後接するとき，通常は「イ形容詞語幹＋め」となるが，語幹が1モーラの「濃い」では「濃め」より「濃いめ」が好まれるという現象と類似していると言える。また類似した形式として，副詞「そう」＋「だ」や，イ形容詞＋ナ形容詞型助動詞語幹「そう」（例「おいしそう」）もある。ゼロ形「そう」15,090件に対しダ形「そうだ」543件でダ形出現率3.47%，語幹1モーラに限れば「そ」1,860件（うち30件は助動詞語幹）に対し「そだ」15件でダ形出現率0.80%と，副詞「そう」については語幹1モーラで「そだ」が好まれるという傾向はなさそうである。

[9] BCCWJの品詞分類では名詞ではあるが，単独で使いにくい名詞「事(930)」「奴(741)」「感じ(622)」「訳(517)」「人(468)」「所(170)」「子(150)」「辺(79)」「家(69)」「会(66)」「茶(63)」「下(59)」「物(43)」「半(53)」「語(52)」，人への呼びかけとして使われている名詞「ママ(153)」「先生(142)」「パパ(84)」，決まり文句や機能語の一部「御免(352)」「御覧(51)」を除いた（括弧内は合計頻度）。

無し	44▲	0▽	4▲	48
次	44▲	2▽	1	47
平気	46▲	0▽	1	47

表 4 の 10 種類の名詞についてカイ二乗検定をおこなったところ，ゼロ形，ダ形，デス形の出現数間に偏りが認められた（$x2(18)=310.789$, $p<.01$, Cramer's V=0.239）。残差分析の結果も示した。

名詞については，「本当だ」「駄目だ」のダ形使用が比較的に目立つ。「本当だ」「駄目だ」は，会話の中にあっても三枝（2001）の言う「自分に向けた発話」と解釈されやすいことが要因と考えられる。「自分に向けた発話」の判定は難しいが，「あ、本当だ」が 64 件，「あっ、本当だ」が 16 件あり，これだけでもダ形の 24.17%を占める。

同じく「駄目だ」についても，「あ、駄目だ」7 件，「ああ、駄目だ」2 件，「もう駄目だ」が 12 件，「全然駄目だ」が 4 件など「自分に向けた発話」と見られる例が見られた。ただ，いずれにしても実数ではダ形の方が多いということも事実である。

5. J-TOCC における男女別の傾向について

本節では，120 ペアのうち「男性-男性 40 ペア」「男性-女性 40 ペア」「女性-女性 40 ペア」と男女各 120 人ずつの統制が取れた J-TOCC を用いて，主に「ダ形は男性が使う」「形容動詞語幹＋よ（以下，ゼロヨ形）は女性が使う」という先行研究の主張を検証していく。

表５　J-TOCC におけるダ形とゼロヨ形

	ナ形容詞ダ形	ナ形容詞ゼロヨ形	名詞ダ形	名詞ゼロヨ形
男性	96	21	80	125
女性	143	12	79	104

J-TOCC による調査では，名詞ダ形を除き「ダ形は男性が使う」「ゼロヨ形は女性が使う」とは反対の結果となった。ただし，ナ形容詞ダ形の男女計 239 件のうち 209 件までが「嫌だ」である。「嫌だ」の占める割合を性別で見ると，男性 78/96（81.25%），女性 131/143（91.61%）であった。「嫌だ」に限ると，やや女性の使用率が高かった[10]。

(5) 2F：まあ、土日とかでもいいけど、休みだから。
1F：ああ、そうなの。いいね。土日休みで、9 時 5 時はいいね。
2F：うん。
1F：それはいいわ。
2F：ってことになってるけど、実際、どうなるかは分からないね。

[10] 「嫌だ」の発音形については，「イヤ」が 129 件（男 47／女 82），「ヤ」が 80 件（男 31／女 49）で男女の大きな偏りはなかった。ちなみにナ形容詞ヤ形における「嫌や」は，88/162（54.32%）で発音形は全て「イヤ」であり，「ヤ」はなかった。

1F：まあ、分からない、それが社会のね、うん。社会の荒波に乗っていかなきゃいけないもんね。大変だ。

(J-TOCC：E312-04)

「嫌だ」以外の使用は男性 18 件，女性 12 件と少なくはあったが大きな偏りはなく，(5)のように女性の使用も見られた。ナ形容詞ゼロヨ形については，男性による発話「チャリは大変よ」「親父、結構グローバルよ」など，男性でも自然な使用が多く観察された。

6. J-TOCC における話者個人別の分布について

5 節の表 2 において，既に J-TOCC におけるゼロ形とダ形の分布は示している。しかしこれだけでは，話し言葉の普通体においてゼロ形，すなわちナ形容詞語幹単独用法が無標であるとする主張には弱いと考えられるため，話者個人別の分布を掘り下げてみたい。

CEJC は被調査者の居住地が 90%以上関東に偏っているため，西日本方言の影響が少なかった。一方，J-TOCC は 240 ペアのうち 120 ペアを西日本で収録しているため，方言の影響が大きい。そこで，表 6 ではダ形の代替として使われる可能性のあるヤ形（「大丈夫だ」→「大丈夫や」）を集計に含めた[11]。

表６　J-TOCC における話者個人別分布

	ナ形容詞				名詞			
	ゼロ形	ダ形	ヤ形	ダ＋ヤ	ゼロ形	ダ形	ヤ形	ダ＋ヤ
使用者率	98.33%	40.42%	32.50%	68.33%	100.00%	42.08%	54.17%	80.42%
平均頻度	7.42	1.00	0.68	1.67	47.52	0.66	3.12	3.78
標準偏差	5.21	1.87	1.31	2.07	21.46	1.02	4.81	4.74

表 6 を見てみると，ゼロ形とダ形＋ヤ形を比べても使用者率，平均頻度共にゼロ形が高い。この傾向を確認するために，話者 240 人のゼロ形とダ形＋ヤ形の差について対応のある t 検定をおこなったところ，ナ形容詞（$t(239)=17.213$, $p<.01$, $r=.219$），名詞（$t(239)=33.922$, $p<.01$, $r=.420$）ともに有意な差が得られた。

この結果は，ダ形に「嫌だ」と「自分に向けた発話」が含まれていたとしてもなお，話し言葉の普通体においてはゼロ形，すなわちナ形容詞語幹単独用法が無標であるという主張を支えるものと言える。

7. まとめ

本稿では，話し言葉における普通体応答において，ゼロ形によるナ形容詞語幹単独用法を無標として扱うべきであるという主張について，コーパスによる量的調査によって検証してきた。日本語教育文法としては，「自分に向けた発話」と「他者目当ての発話」及び，男女での使用傾向差（権威性の差）があるとしても，「嫌だ」を除けば全てゼロ形によるナ形容詞語幹単独用法を無標として扱った方が効率

[11] ダ形もしくはヤ形のいずれかを使用していたのは形状詞では 153 人，名詞では 155 人，両方使用していたのは形状詞では 11 人，名詞では 38 人だった。ちなみにヤ形のみを使用していたのは形状詞で 67 人（うち 2 人が東日本話者），名詞で 92 人（うち 7 人が東日本話者）と影響が少なくないことが確認できた。

的であると結論づけられ，日本語教育文法として「「だ」は省略」という説明は妥当ではないと言える。

野田（2005:6）は「体系主義の悪影響というのは，日本語教育での必要度とは関係なしに，体系的にまとめやすい部分を重視し，体系的にまとめにくい部分を軽視する傾向である」と述べた。これを本稿の例に当てはめてみると，形態論としてナ形容詞の基本形が「大丈夫だ」であるので，話し言葉においても丁寧形「大丈夫です」の普通形は「大丈夫だ」と決め込んでしまっていないかという，日本語教育文法としての見直しを試みたということになる。

参考文献

庵功雄・高梨信乃・中西久実子・山田敏弘（2001）『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク.

金水敏（2023）「役割語のジェンダーとパワー」『社会言語科学』26(1)，pp.37-48，社会言語科学会.

国立国語研究所「多世代会話コーパスに基づく話し言葉の総合的研究『日本語日常会話コーパス』の概要」（https://www2.ninjal.ac.jp/conversation/cejc/design.html）2024 年 6 月 16 日参照

今野弘章（2012）「イ落ち：形と意味のインターフェイスの観点から」『言語研究』141，pp.5-31，日本言語学会.

三枝令子（2001）「「だ」が使われるとき」『一橋大学留学生センター紀要』4，pp.3-17，一橋大学留学生センター.

清水泰行（2015）「現代語の形容詞語幹型感動文の構造：「句的体言」の構造と「小節」の構造との対立を中心として」『言語研究』148，pp.123-141，日本言語学会.

荘司育子（1992）「疑問文の成立に関する一考察：「デス」という形式をめぐって」『日本語・日本文化研究』2，pp.39-50，大阪外国語大学日本語講座.

スリーエーネットワーク（2005）『みんなの日本語初級 I 教え方の手引き』スリーエーネットワーク.

スリーエーネットワーク（2012）『みんなの日本語初級 I　第 2 版』スリーエーネットワーク.

スリーエーネットワーク（2016）『みんなの日本語初級 I　第 2 版 教え方の手引き』スリーエーネットワーク.

冨樫純一（2006）「形容詞語幹単独用法について：その制約と心的手続き」『日本語学会 2006 年度春季大会予稿集』pp.165-172，日本語学会.

中俣尚己・太田陽子・加藤恵梨・澤田浩子・清水由貴子・森篤嗣（2021）「『日本語話題別会話コーパス：J-TOCC』」『計量国語学』33(1)，pp.11-21，計量国語学会

日本語記述文法研究会（2009）『現代日本語文法 7』くろしお出版.

野田尚史（2005）「コミュニケーションのための日本語教育文法の設計図」野田尚史（編）『コミュニケーションのための日本語教育文法』pp.1-20，くろしお出版.

李明熙（2011）「話し言葉における名詞文の文末形式の使い分け」『日本語／日本語教育研究』2，pp.207-220，日本語／日本語教育研究会.

助詞「ハ」と文構造が担う主題的意味のタイプ[1]

坂本瑞生（東北大学大学院生）[2]

1. 主題の多層的把握

日本語の主題の研究は助詞「ハ」をめぐる問題を中心として進められてきた。特に、「ハ」を伴う有題文(=(1a))と、「ハ」を伴わない無題文(=(1b))の間の対比が注目される。

(1) a. 花子は言語学を専攻した [有題文]

b. 花子が言語学を専攻した [無題文]

しかし、主題の問題は助詞「ハ」だけの問題ではない。野田(2021)は、主題表示の方略として(2)に挙げられた 3 つの手段があることを指摘する。また尾上(1995)は「題目(語)の要件」の中に要素の位置（≒構造）にかかわる条件を挙げている。

(2) 主題表示方略（野田(2021: 80)）

a. 形態的な手段：「は」のような主題のマーカー

b. 文法的な手段：文の前の方に置くという語順

c. 音声的な手段：後に短い音声的休止を入れるような音調

(3) 尾上(1995: 31)の「題目（語）の要件」

①一文の中で、その成分が表現伝達上の前提部分と言う立場にある。

①-a **表現の流れにおいて、その部分が全体の中から仕切り出されて特別な位置にある**。

①-b その成分は、後続の伝達主要部分の内容がそれと決定されるために必要な原理的先行固定部分である。

②その成分が、後続部分の説明対象になっている。 (強調は引用者)

しかしながら、形態・統語・音声のどの点を取っても、主題であることの必要条件ということはできない。なぜなら、これらの表示を欠いていながらにして主題文とみなされるような文が存在するからである。主題名詞句が、提題助詞を欠く(4a)、構造的に卓越しない(4b)、主題要素が後続部と同じイントネーション句(ι)にフレージングされ、主題要素の直後にポーズが置かれない(4c)のいずれも、従来、有題文に含まれてきた。

(4) a. 形態的表示を欠いた例

花子、大学生だよね

b. 統語的表示を欠いた例 (cf. 三尾(1948), 佐治(1991), 三宅(2011))

田中が犯人だ （cf. 犯人は田中だ）

---

[1] 本発表は 2024 年 7 月 6 日に日本語文法学会で行われた「ポスターフォーラム」での発表（「転位陰題文の主題性の検討―顕題との比較から―」）の内容を拡大したものである。本研究は、JST 次世代研究者挑戦的研究プログラム JPMJSP2114 の支援を受けている。

[2] mizuki.sakamoto.p7@dc.tohoku.ac.jp

c.　音韻的表示を欠いた例 (Nakagawa (2020))

(それは一大事だね)ι

以上の事情を踏まえ、本論では「主題」を一枚岩の概念として扱うのではなく、いくつかの要素が入り混じった、家族的類似によって特徴づけられる複合的概念として捉えることにする。具体的には、助詞「ハ」はなんらかの主題らしさに関わる意味 1 に、構造は主題らしさに関わる意味 2 に、音韻は主題らしさに関わる意味 3 に対応しており、これらの要素がすべて揃ったケースが最も典型的な主題表現と感じられる、というように考える。これを簡単に図示すると(5)のようになる。

(5)

		花子は	言語学を専攻した		
a.	形態的手段：	NP-ハ	…	⇒	[主題的意味 1]
b.	統語的手段：	[主部]	[述部]	⇒	[主題的意味 2]
c.	音韻的手段：	(　)ι	(　)ι	⇒	[主題的意味 3]

このような多層的な主題把握を念頭に、本論では形態的手段（助詞「ハ」）と統語的手段(文構造上の卓越)の 2 つの主題表示方略が、どのような種類の主題的意味を担っているのか、ということを検討する。結論を先取りすると、本論は、助詞「ハ」は contrast を、構造は aboutness を表示すると結論付けることになる。

(6)　リサーチクエスチョン：

形態的手段（助詞「ハ」）と統語的手段（文構造）が担う主題的意味はどのようなものか

(7)　主張

a.　「ハ」は contrast を表す

b.　構造は aboutness を表す

以下、2 節では本論が分析対象とするデータの範囲を明示し、分析上の予測を立てる。 3 節では問題となる主題的意味の類型を導入し、これに基づいて 4 節と 5 節で各構文が示す主題的意味は何かを検証する。 6 節では、 4 節・ 5 節の結果に基づき助詞「ハ」と構造が担う主題的意味の種類が何かを結論付ける。

2.　主題関連構文の整理

本論では、(8)に示す 4 種類の構文を主題関連構文として取り上げる。それぞれ、主題のハ、転位陰題文、主題性の無助詞、対比のハ、と呼ばれる構文である。

(8)

a.	田中さんは幹事だ	[主題のハ]
b.	幹事が田中さんだ	[転位陰題]
c.	田中さん、大学院生なんだよ	[無助詞]
d.	雨は降っているが、風は吹いていない	[対比のハ]

これらを①助詞ハが付されているか（[±ハ]）、②主題要素が構造的に卓越した位置にあるか（[±構造]）という 2 つの観点から整理した上で分析を行う。

主題のハと対比のハは助詞「ハ」を伴うため[+ハ]の文である。また、主題のハは文頭に限られ、対比のハは非文頭位置のハに対応する（久野(1973: 31)）。

(9)　先頭の「ハ」は主題、後続する「ハ」は対比（久野 (1973: 31)）

a.　私はタバコは吸いますが、酒は飲みません

b.　私は今週末には本は読みますが、勉強はしません　(久野(1973: 31))

このことから、主題のハは[+構造]、対比のハは[-構造]であると考えることにする。

続いて、転位陰題文を検討する。従来、「ＡハＢダ」(=(10a))と「ＢガＡダ」(=(10b))の間にパラフレーズ関係があるように見えることがよく指摘されてきた。このパラフレーズ関係に動機づけられる形で、(10b)における「田中さん（だ）」を主題だとみなす立場が存在する(三尾(1948), 佐治(1991), 三宅(2011))。この種の主題を「転位陰題」と呼ぶ。

(10)　a.　田中さんは幹事だ

b.　幹事が田中さんだ

転位陰題は助詞「ハ」を伴わず、また文構造上特別な位置にあるとも言えない。そこで、本論では転位陰題を[-ハ]かつ[-構造]に相当するケースとして取り上げる。

最後に無助詞であるが、無助詞要素が文中に現れるか文頭に現れるかで振る舞いが異なる。文中の無助詞は脱落できる格助詞の種類に制限があり、特にガ・ヲは脱落しやすいが、それ以外は脱落しにくい。

(11)　a.　ここ、つくし｛∅／が｝多いんだ

b.　あいつ、車｛∅／を｝買ったぞ

c.　山田君がきのうあの子｛*∅／に｝電話してたよ　(丹羽(1989: 42))

他方、文頭の無助詞はこのような格助詞の種類に関する制限が見られない。

(12)　あの子｛∅／に｝きのう山田君が電話してたよ　(丹羽(1989: 42))

この違いから、文中無助詞は脱落可能な格助詞（ガ・ヲ）が脱落した場合と見ることができる一方、文頭無助詞は格の種類とは無関係に名詞句を主題として提示していることを示唆する。また、文中の無助詞は既知性と関連が無いが、文頭の無助詞は既知名詞句に限られる。このことも、文頭無助詞の主題性を示唆するものである。

(13)　a.　さっきから玄関のところに変な人｛∅／が｝いるよ

b　変な人｛?∅／が｝さっきから玄関のところにいるよ　(丹羽(1989: 44))

以上の違いから、文中の無助詞は格助詞の省略である一方、文頭の無助詞名詞句は主題として文と結びついていると考えることができる（丹羽(1989), 野田(1996), 杉本(2000)など）。本論では文頭無助詞を主題性の無助詞と考え、分析の対象にする。主題性の無助詞は助詞ハを伴わないが、文構造上卓越した位置に現れるため、[-ハ]かつ[+構造]の主題関連構文だと言える。

以上の議論より、本論が扱う４つの主題関連構文は[±ハ]と[±構造]の２変数による以下のような交差分類で整理することができる。

(14)　[±ハ]と[±構造]による交差分類

	[+構造的卓越]	[-構造的卓越]
[+ハ]	主題のハ	対比のハ
[-ハ]	主題性の無助詞	転位陰題

この交差分類をもとに考えると、主題のハと対比のハだけに共通してみられる特性があるならば、それは[+ハ]という性質に帰せられるべきだと言える。また、主題のハと無助詞だけに共通してみられる特性があれば、それは[＋構造]の性質である。この整理にもとづけば、助詞「ハ」が担う主題的意味と、構造が担う主題的意味を峻別することができるはずである。以下では、この手続きによって助詞と構造が担う主題的意味を明らかにする。

3.　主題の類型

本論は Bianchi and Frascarelli (2010)にしたがい、主題にまつわる意味を３つのタイプに分けて考える。Bianchi and Frascarelli はイタリア語や英語の主題関連構文を論拠に主題的意味のタイプ分けを行っている。たとえば英語には 2 種類の異なる主題関連構文が存在する。１つは主題化 topicalization(=(15a), (16a))であり、もう１つは左方転位 left dislocation である(=(15b), (16b))。Bianchi and Frascarelli は、この２つの主題関連構文が異なる文脈に生起することを指摘しており、これを根拠にして、両構文が担う主題的意味のタイプが異なると論じている[3]。具体的には、主題化は主題要素「について」述べる文脈で適切となる一方(=(15))、左方転位は話題を切り替える場合に適切となる(=(16))。

(15)　What can you tell me about John?

　a.　John Mary kissed.

　b.　* John, Mary kissed him.　(Bianchi and Frascarelli (2010: 62))

(16)　What can you tell me about John?

　a.　* Nothing. But Bill Mary kissed.

　b.　Nothing. But Bill, Mary kissed him.　(*ibid*.)

この観察から、主題化は Aboutness Topic、左方転位は Contrastive Topic という異なる主題タイプを担う構文だとされる。

以上のような議論から、Bianchi and Franscarelli は以下３つのタイプの主題を区別する。

(17)　a.　Aboutness Topic (A-Topic)

　b.　Contrastive Topic (C-Topic)

　c.　Givenness Topic (G-Topic)

A-Topic は主文現象であり、文が何について述べているかを表すものである。C-Topic は対照物が存在する場合の主題であり、「A については述べるが、B については述べていない」

[3] 主題化や左方転位に関する最初期の論考として Gundel(1988)が挙げられる。

というようなある種の不完全性・非網羅性をもった主題である（富岡(2010)）。G-Topic はいわゆる旧情報のことである。本論では A-Topic と C-Topic に注目して議論を進める[4]。

以下では、本論が取り上げる 4 つの主題関連構文が A-Topic／C-Topic として解釈されうるかを検討する。その結果を、先に提示した交差分類と照らし合わせることで、助詞「ハ」と構造がそれぞれに担う主題的意味の類別を明らかにする。

4. A-Topic のテスト

本節では、4 つの主題関連構文が A-Topic として解釈可能かを検討する。A-Topic 解釈が可能かを調べる第 1 のテストとして、「Tell me about テスト」を用いる((Erteschik-shir (2007))。これは「X について教えて」と問われた直後には「X」が A-Topic になることを利用したテストである。例えば、(18)は John について尋ねており、(18B)では He=John が A-Topic として解釈される。

(18) Tell me about テスト (Erteschik-shir (2007: 19))

A: Tell me about John.

B: He's very nice. (Erteschik-shir (2007: 19))

このテストを 4 つの主題関連構文に適用すると以下のような結果が得られる。

(19) Q: 事件 A の犯人について教えて

A1: 事件 A の犯人は田中だ [主題のハ]

A2: #田中が事件 A の犯人だ [転位陰題]

A3: 事件 A の犯人-∅ 田中だよ [無助詞]

A4: #私は [事件 A の犯人**は**田中だ]と聞いた[5] [対比のハ]

(20) Q: 田中について教えて

A1: 田中は事件 A の犯人だ [主題のハ]

A2: #事件 A の犯人が田中だ [転位陰題]

A3: 田中-∅ 事件 A の犯人だよ[6] [無助詞]

A4: #私は [田中**は**事件 A の犯人だ]と聞いた [対比のハ]

この結果から、主題のハと無助詞は A-Topic として適切に解釈可能であるのに対して、転位陰題と対比のハは A-topic として解釈することは難しいことが分かる。

---

[4] A-Topic については Reinhart (1981), Lambrecht (1994)を、C-Topic については Büring (2003), Tomioka (2010), 富岡(2010)も参照。

[5] 太字と下線は強勢の位置を示している。

[6] (20A3)の容認度が低く判断される場合があるが、その容認度の低下は「田中」を繰り返すことが談話法規則に違反するからだと考えられる。次例のように代名詞などを用いれば問題なく容認される。

(i) 田中について教えて ― {彼／あいつ} -∅、事件 A の犯人だよ。

A-Topic 性をはかる第 2 のテストとして「従属節生起テスト」を用いる。Bianchi and Frascarelli (2010)によると A-Topic は主文現象であり、従属節には生起できない。これを踏まえて、4 つの主題関連構文を従属節に埋め込んだ以下の例を見てみよう。

(21) a. *田中は[責任者は佐藤のときなら]いつでも仕事を引き受ける [主題のハ]
b. 田中は[佐藤が責任者のときなら]いつでも仕事を引き受ける [転位陰題]
c. ?? 田中は[責任者-∅ 佐藤のときなら]いつも欠席するよ [無助詞]
d. 田中は[責任者**は**佐藤だけど会計**は**山本のときなら]いつでも仕事を引き受ける [対比のハ]

主題のハと無助詞は従属節に埋め込むことが難しい一方、転位陰題と対比のハは容易に従属節に埋め込むことができる。この結果からも、主題のハと無助詞は A-Topic である一方、転位陰題と対比のハは A-Topic とは言い難いと結論付けることができる。

5. C-Topic のテスト

続いて、C-Topic 性を検討することにしよう。C-Topic は「A については知らないが、B は～」というような、ある主の不完全性・非網羅性を持つ文脈での主題である(富岡(2010))。そこで、そのような文脈に 4 つの主題関連構文が生起可能かを検討することにしてみよう。

(22) Q: 山田と佐藤は何の専門家なの？
A: 山田は知らないけど…
A1: 佐藤は文法の専門家だよ[7] [主題のハ]
A2: #文法の専門家が佐藤だよ [転位陰題]
A3: #佐藤-∅ 文法の専門家だよ [無助詞]
A4: 僕は [佐藤**は**文法の専門家だ]と聞いたよ [対比のハ]

この文脈では「山田については知らないが、佐藤については～」というように「山田」と「佐藤」を対比する C-Topic の環境が成り立っている。主題のハと対比のハは問題なくこの文脈と整合する。一方、転位陰題と無助詞はこの文脈で用いると文のつながりが悪くなってしまう。つまり、転位陰題と無助詞は C-Topic として解釈できないことがわかる。

6. 結論

ここまで、4 つの主題関連構文が A-Topic, C-Topic としての解釈を持ち得るかをテストしてきた。その結果をまとめると下記の表の通りになる。

[7] この例は[+ハ]かつ[+構造]の例と見ることができるので、主題のハと認定している。

(23)

	顕題「Xハ」 (ハあり/構造卓越)	対比のハ (ハあり / 非卓越)	無助詞 (ハ無し/構造卓越)	転位陰題「Yダ」 (ハ無し/非卓越)
A-Topic	○	×	○	×
C-Topic	○	○	×	×

さて、ここで、4つの主題関連構文が[±ハ]と[±構造]の交差分類で整理されていたことを思い出そう。交差分類の表を下記に再掲する。

(24)　[±ハ]と[±構造]による交差分類

	[+構造的卓越]	[-構造的卓越]
[+ハ]	主題のハ	対比のハ
[-ハ]	無助詞	転位陰題

この交差分類から、①主題のハと対比のハに共通する性質は助詞「ハ」に帰せられ、②主題のハと無助詞に共通する性質は構造に帰せられる、と言うことができる。この予測と(23)の結果を総合すると、以下のような結論を得ることができる。

(25)　a.　Aboutness は構造上の卓越に帰せられる

　　b.　Contrast は助詞「ハ」の使用に帰せられる

これが「形態的手段（助詞「ハ」）と統語的手段（文構造）が担う主題的意味はどのようなものか」という問いに対する本論の答えである。すなわち、助詞「ハ」は contrast を、構造的卓越は aboutness を表す。

本論の結論に基づくと、典型的な主題とは、助詞ハによる C-Topic 表示と、構造による A-Topic 表示が「重なった」場合だということができる[8]。

(26)　　花子は　言語学を専攻した

　　a.　形態的手段：　NP-ハ　…　⇒　Contrastive-Topic

　　b.　統語的手段：　[主部]　[述部]　⇒　Aboutness-Topic

このような考え方では、C-Topic 性と A-Topic 性をどちらも兼ね備えた主題のハは典型的な主題表現だということができる。他方、C-Topic としての資格しか持たない対比のハ、A-Topic としての資格しか持たない主題性の無助詞は周辺的な主題表現と呼ぶべきであり、C-Topic でも A-Topic でもない転位陰題文は更に周辺的な主題構文と言うべきである[9]。

---

[8] ただし、主題のハにおいては文が持つ「根源的排他性」と助詞「ハ」の対比性が重なることによって、表現上は助詞による対比解釈が感じられなくなる(尾上(1995))。ここで、尾上が文の持つ根源的排他性と呼ぶものは、aboutness の作用によって文の話題を神羅万象から選び出すことに由来すると考えることができるように思われる。

[9] この議論の結果から、主題のハの文と転位陰題の文の間の「パラフレーズ関係」は、厳

最後に残る課題について触れておく。本論は Bianchi and Frascarelli (2010)の主題類型のうち A-Topic と C-Topic に注目して議論を行った。G-Topic が日本語のどのような現象とかかわるかは今後更なる検討が必要である。また、日本語の主題表示方略には助詞「ハ」と構造に加えてイントネーションも含まれる。イントネーションが担う主題的意味がどのような意味であるのか、という点についても今後の検討課題としたい。

参考文献

尾上圭介(1995)「「は」の意味分化の論理：題目提示と対比」『言語』(24)-11, 28-37.

佐治圭三(1991)『日本語の文法の研究』ひつじ書房

杉本武(2000)「無助詞格のタイプについて」『文藝言語研究　言語篇』38, 103-116.

富岡諭 (2010)「発話行為と対照主題」長谷川信子（編）『統語論の新展開と日本語研究』301-331, 開拓社.

西山佑司(2003)『日本語名詞句の意味論と語用論』ひつじ書房

丹羽哲也(1989)「無助詞格の機能」『国語国文』58 (10), 38-57.

丹羽哲也(2006)『日本語の題目文』和泉書院

野田尚史(1996)『「は」と「が」』くろしお出版

野田尚史(2021)「日本語の文の主題と言語類型論」窪園晴夫・野田尚史・プラシャント パルデシ・松本曜（編）『日本語研究と言語理論から見た言語類型論』74-97, 開拓社.

三尾砂(1948)『国語法文章論』三省堂

三宅知宏(2011)『日本語研究のインターフェイス』くろしお出版

Bianchi, Valentina and Mara Frascarelli (2010) “Is Topic a Root Phenomenon?,” *Iberia* 2.1,43-88.

Büring, Daniel (2003) “On D-trees, beans, and B-accents,” *Linguistics and Philosophy* 26, 511-545.

Erteschik-shir, Nomi (2007) *Information Structure*, Oxford University Press, Oxford.

Gundel, Jeanette K. (1988) *The Role of Topic and Comment in Linguistic Theory*, Garland Publishing, New York / London.

Lambrecht, Kund (1994) *Information Structure and Sentence Form: Topic, Focus, and the Mental Representations of Discourse Referents*, Cambridge University Press, Ca,bridge.

Nakagawa, Natsuko (2020) *Information Structure in Spoken Japanese: Particles, Word Order, and Intonation*, Language Science Press, Berlin.

Reinhart, Tanya (1981) “Pragmatics and linguistics,” *Philosophica* 27, 53-94.

Tomioka, Satoshi (2010) “Contrastive Topics Operate on Speech Acts,” Malte Zimmermann and Caroline Féry (eds) *Information Structur: Theoretical, Typological, and Experimental Perspectives*, 115–138, Oxford University Press, Oxford.

密には成り立たないということが言える。両者は真理条件においては共通するかもしれないが、文が持つ主題という点ではまったく異なる文なのである。この結論は、転位陰題文を主題文に含めない見方をとる西山(2003)や丹羽(2006)に通じる立場であると言える。

数量詞の追加によるアスペクト性解釈の変化

張　琴琴
（北海道大学大学院生）

1. 問題となる現象

日本語において、「ル形」は未来の意志動作、「テイル形」は進行中動作あるいは完了動作という対立が観察される。

(1)　a. 苺を食べる。　　b. 苺を食べている。[1]

そして、連体数量詞文（2a）は既定的単位、連用数量詞文（2b）は未定的単位を表すという両文の意味の違いが加藤（2003）により明らかになっている。数量詞の移動（遊離）という視点から奥津（1983）では属性 Q と部分数量と解釈できると指摘されている。

(2)　a. 30 個の苺を食べる。　　b. 苺を 30 個食べる。
(3)　a. 30 個の苺を食べている。　　b. 苺を 30 個食べている。

しかし、(2) と (3) の違いについてはまだ十分に議論されていない。そのため、本研究は数量詞の追加がアスペクト性の解釈に及ぼす影響を考察し、連体数量詞文と連用数量詞文の意味を比較することにより、アスペクト性解釈の変化のメカニズムを解明することを試みる。

2. アスペクトとアスペクト性

現代日本語において、「相（Aspect）」は一般的にアスペクトと呼ばれる。このアスペクトは、働きの時間的局面の取り上げ方を表す文法カテゴリーであり、一方でテンス（時制）は、事態を発話時との時間軸上の関係において位置づける文法カテゴリーであると日本語記述文法研究会（編）（2007）で記述されている。日本語のアスペクトには語彙的アスペクトと文法的アスペクトが存在し、「テイル形」は典型的な文法的アスペクトである。また、アスペクトはアスペクチュアリティを表すための文法概念である。工藤（2004）は、文中にえがきだされる出来事の時間的な内部構造をアスペクチュアリティと定義しているが、

[1] 本論に取り上げる用例について、出典を明記していない用例は筆者による作例である。

本稿では文法形式をアスペクトとし、それによって表される意味をアスペクト性（aspectuality）と呼ぶこととする。さらに、アスペクチュアリティーの種類については、文法形式が表す意味を文法的アスペクチュアリティー（grammatical aspectuality）、語によって表されるアスペクトを語彙的アスペクチュアリティー（lexical aspectuality）に細分化する研究（山岡 2019）も見られる。

3. 先行研究

議論に入る前に、まず数量詞とアスペクトはこれまでどのように捉えられてきたかを概観し、その後、先行研究から見られる問題点を指摘する。

数量詞とアスペクトというテーマについて、初めて触れたのは矢澤（1985）だと言える。矢澤は連用数量詞が動詞を表す動作・作用に関連した数量を表している視点から、達成量と同時量という概念を提案している（以下に引用した例文を平仮名表記にした）。

(4) ピサの斜塔は 1950 年よりも 5 度程傾いている。
(5) 車が 3m スリップした。
(6) 世界記録を十秒三更新した。
(7) 牛肉を 500g 食べる。
(8) 一キロ買ってきた牛肉を 500g 食べる。　（矢澤 1985：97–98）

上記の例文について、数量詞は動作・作用に伴って増減し、その完了時に達成される数量（仮に「達成量」と呼ぶ）を表していると（矢澤 1985：104）述べられているが、ここではいくつかの問題が発生する。まず、「食べる」は消滅的な動詞であり、「傾く・スリップ・更新する」は状態を表す動詞である。そのため、連用数量詞と共起する際にそれらを同様に扱うことができるか否かという問題である。そして、(8) のように、先行詞「牛肉」の量はすでに修飾節「一キロ買ってきた」により限定され、動作が完了時に達成される数量は精々1 キロしかない。これに対し、(7) の先行詞は特定の数量で限定されておらず、つまり、どのくらいの牛肉が存在するかを把握できていない状況下で 500g を食べるということになる。さらに、500g を食べた後に、肉の量を追加して食べることも可能だと考えられる。田中（2022）では、(7) の 500g が「結果様態」として捉えられ、「動作が行われた後の状態・数量を表している」と説明されているが、「食べる」は「非過去（テンス）」を表すため、動作を完了しない限り、結果となるか否かは容易に判断できないと思われる。例えば、「牛肉を 500g 食べる。その後、200g 追加して食べた」という文になると、動作「食べた」に伴う数量は「700g」に変更できる。そうすると、田中（2022）で言う「結果様態」は、必ずしも動作完了時の結果を指しているとは限らない。数量詞とテンスにも関わって

いるという点について、矢澤（1985）も言及していない。

また、アスペクトを中心として数量詞について考察を行ったのは三原（1998、2004、2022）などが挙げられる。これについて、主に動詞のアスペクト的意味が連用数量詞文と密接に関連しており、結果状態を含意するアスペクト限定が連用数量詞文の成立要件であると主張している。

(9) 子供がおもちゃをもう 2 つ壊した。

(10) 彼はレンガを花壇に 6 つ積んだ。 （三原 2022：92）

三原は「壊す・積む」のような動詞を強影響動詞と名付け、この種類の動詞が描写する動作には必ず終了限界があると考えている。「この限界点において、動作の「結果」（状態変化または位置変化）が生じるということである。例えば、おもちゃを 2 つ壊すという動作は、壊し終わった時点で終了し、そして壊れた 2 つのおもちゃが現出する。これはすなわち、動作が限界的（delimited、完了的（telic）とも言う）であり、必然的に結果状態が現れるということである。強影響動詞は動詞そのものが限界的なのであり、数量詞は、動作の結果状態を数量的に補足していると言えよう」と三原（2022：92）で述べられている。つまり、ここでの結果状態は矢澤（1985）で提案された「達成量」と同じものである。では、「20 個のミニトマトを食べた。」という連体数量詞文の場合、連用数量詞文と同様に、数量詞は「食べる」という動作の数量（達成量）と捉えられるだろうか。同じく捉えられない場合、両者の間にはどのような違いが生じるかという問題が残る。

4. 考察となる動詞の種類

日本語の動詞分類と言えば、まずアスペクトの観点から「状態動詞」「継続動詞」「瞬間動詞」「第四種の動詞」という 4 類型が金田一（1976）によって分類された。その後、アスペクトの研究が進むに連れ、この動詞 4 類型は奥田（1978）、工藤（1995、2014）、三原（2002、2022）などの研究者によって批判されてきた。本稿では、数量詞の有無がアスペクト性の解釈に影響を及ぼさない自動詞（例：遊ぶ、消える）、移動動詞（例：来る、歩く、泳ぐ）、存在動詞（例：ある、いる）を考察の対象外とした。数量詞の追加がアスペクト性解釈に影響を及ぼす動詞について、消滅系動詞、出現・作成系動詞に分類して説明できると考えている。

- 消滅系動詞：動作主体の動作によって動作対象がなくなることを表す動詞（食べる、食う、飲む、消す、焼く、燃やすなど）。
- 出現・作成系動詞：動作主体の動作によって動作対象が現れることを表す動詞（書く、

作る、握る、編む、建てる、彫る、炊くなど)。

(11) 友達が来ている。
(12) 3 人の友達が来ている。
(13) 友達が 3 人来ている。

「来る」は典型的な移動動詞である。(11) の「友達」がすでに目的地に到着していると推測されるため、「テイル」は動作の結果状態を表すことが分かる。(12) (13) にそれぞれ連体数量詞と連用数量詞が付加されているにもかかわらず、「テイル」は同様な解釈を得る。

5. 連体・連用数量詞文におけるアスペクト性解釈の違い

加藤 (2003) では、存在数量を表す数量詞を存在数量詞 (3 冊)、そうでないものを非存在数量詞 (120m) とされている。

(14) a. 3 冊の本を読んだ。　　b. 本を 3 冊読んだ。
(15) a. 120m の釣り橋を歩く。　　b. 釣り橋を 120m 歩く。

(加藤 2003 : 442–445)

存在数量詞の場合では、連体数量詞は「既定的単位」であることを表し、連用数量詞 (加藤 2003 では「遊離数量詞」と呼ばれている) は「未定的単位」であることを表す。これに対し、非存在数量詞の場合、連体数量詞は「属性」、連用数量詞は「動作量」を表すと主張されている。張 (2024) は加藤 (2003) から示唆を受け、数量詞を特定数量詞、不特定数量、準特定数量詞の 3 つに分類し、それぞれに所属する数量詞が存在数量を表す場合、連体数量詞文において未定的単位と動作量を同時に表現できると指摘した。このように、数量詞構文について議論する際には、本来両者を分けるべきであるが、アスペクト性の解釈において顕著な差異が見られないため、本稿では特に区別せずに扱うこととする。これに関しては 5.2 節で詳述する。

5.1 消滅系動詞の場合

(16) a. 30 個の苺を食べている。　　b. 苺を 30 個食べている。　　(再掲 (3))

連体数量詞文の（16a）は、動作主体が「食べる」という動作を進行していることを示し、「テイル」が未完了の状態を表す。一方、連用数量詞文の（16b）は、「食べる」という動作が終了限界を超え、結果状態を示すため、「テイル」が完了と解釈される。具体的には、「30 個の苺」という数量は、前者においては事前に存在する数量として認識され、動作が終了するとアスペクト性も完了に変わる。この場合、「30 個」は動作の結果量としても捉えられる。しかし、連体数量詞文では、事前に存在する数量は「30 個」しかなく、追加で食べることはできない。もちろん、苺がまだある場合、「30 個の苺を食べた。また、5 個食べた。」のように、「食べる」動作を続けることができるが、その際に動作の量が繋がらなくなる。「30 個の苺を食べた。まだあるので、今 31 個目を食べている。」という文であれば、動作の量が連続的に累積できる。対照的に、連用数量詞文では「苺」の具体的な数量が不明であるが、少なくとも 30 個以上あると推測されるため、「30 個」は動作の結果数量と解釈される。この場合、「苺を 30 個食べている。あまりにも美味しいので、また 5 個食べる。」のように、動作主体が継続的に動作を行うと、「30 個」に対する動作が完了し、追加の「5 個」を食べ終わると、「食べる」動作も完了を表す。そうなると、動作の結果量は最初の 30 個を超え、35 個に達する。つまり、連体数量詞文における未完了の「テイル」は動作の終了によって完了に変わり、連用数量詞文の完了の「テイル」は終了した動作の量が変化していく。すなわち、全体的にアスペクト性が随時数量詞の追加によって変化する。これは、苺の数量が不明であるため、動作主体が無限に動作を続けることが可能であると考えられる。図に示すと以下のようになる。

連体数量詞文の場合：30 個の苺を食べている。

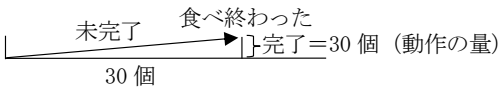


図 1

連用数量詞文の場合：苺を 30 個食べている。

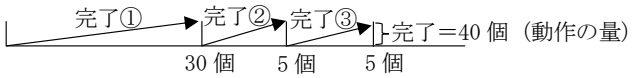


図 2

5.2　出現・作成系動詞の場合

冒頭で数量詞が事物の存在数量を表すか否かがアスペクト性の解釈に大きな差をもたらさないと述べたが、ここから具体例を挙げて説明する。

(17) a. 2 本の論文を書いている。　　b. 論文を 2 本書いている。

目的語「論文」に対し、「2 本」は (3) の「30 個」と同様に存在数量詞であるが、異なる点は、30 個の苺が実際に存在しているのに対し、2 本の論文は動作主体の頭の中にのみ存在することである。つまり、後者は動作主体が動作を行う前に設定した目標数量である。本稿では、このような数量を「事前存在目標数量」と呼ぶこととする。(17a) では、2 本の論文を 1 本ずつ書くことや、同時に書くことが想定でき、どちらも完成していない場合は未完了となり、すべて完成した場合には完了の意味となる。しかし、「2 本の論文を 1 本書いている。」という文となると、目標数量に対する「書く」動作が完全に終了していないものの、全数量の中の一部分は完了となっていると見なさざる得ない。なお、この文には連体数量詞と連用数量詞が同時に存在するため、同じように扱うことができないことに留意されたい。この現象については、今後詳しく議論したい。連体数量詞の (17a) においても、動作が終了すればアスペクト性は未完了から完了に変わり、「2 本」は動作の結果量として捉えることができる。また、「今、2 本の論文を書いている。でも、書きたい内容があって、もう 1 本の論文を書くことにした。」のように、論文を書くことを現実には続けることができるが、その場合は最初の命題内容が偽となり、発話者の認識が間違っていたと言わないと成立しにくい。この点は消滅系動詞と明らかに異なる。

一方で、連用数量詞の (17b) では、論文を 2 本書き終えたことから、「書く」という動作が終了限界を超え、結果状態を示していることが分かる。この場合、「テイル」も完了と解釈できる。しかし、(3b) でも見たように、連用数量詞は未定的単位を表すため、論文の総数量が把握できない。そうなると、「論文を 2 本書いている。時間の余裕があって、短編論文も 1 本書く。」のように、追加で書くことが可能である。したがって、この場合では、出現・作成系動詞は消滅系動詞と同様に、アスペクト性が数量詞の付加によって変化することが解釈できる。

(18) a. 10 頁の論文を書いている。　　b. 論文を 10 頁書いている。

「10 頁」について、研究者によって定義が異なり、奥津 (1983) では属性 Q、加藤 (2003) では非存在数量詞とされている。本稿では「属性数量」と呼ぶこととする。(18a) の「10 頁」は事前に設定された数量 (事前存在目標数量) であり、「書く」動作が終了しない限り、「10 頁の論文」は存在し得ない。そのため、属性数量も (17a) の論文の存在数量とほぼ同じ意味で解釈される。例えば、「私は 10 頁の論文を書いている。今書くことがたくさんあって、11 頁目を書いている。」と言えるが、これは動作主が最初に設定した既定的単位と矛盾する。すなわち、10 頁の論文は 10 頁以内でなければならず、完成状態で 10 頁である

必要がある。さらに、「私は 10 頁の論文を書いた。でも、量が増えたので、16 頁の論文になった。」と言うこともできるが、その時点で「10 頁の論文を書いている。」とは言えなくなる。16 頁になる場合、発話者がすでにそれを認識しているため、その時点で「10 頁の論文」は書かれていないわけである。つまり、動作主の認識が変わると、連体数量詞文における事前目標数量は偽となり、会話としては成立しなくなる。しかし、アスペクト性解釈において、属性数量の「10 頁」は存在数量を表す「30 個」「2 本」と同様である。

5.3　証拠性について

本節では、証拠性の有無という観点から（3）（17）（18）を改めて見ておく（例文の再掲は省略する）。前述の通り、（3a）の「30 個の苺」は実在し、動作主による動作が終了する時点で、苺の量が減少し、どのくらい食べたかをすぐに確認できる。このことから、消滅系動詞の場合、連体数量詞は証拠性を持つと言える。一方、（3b）の「テイル」は動作の結果状態を表すため、30 個食べ終わったという証拠が存在し、証拠性を持つと考えられる。これに対し、（17a）（18a）の「2 本の論文」「10 頁の論文」は、動作主の頭の中にのみ存在する事前数量であり、未来の予定を示している。要するに、動作が終了するまで、その論文は実物として現れることはない。このことから、連体数量詞は本来証拠性を持たないと解釈できる。一方、連用数量詞文における「テイル」は、（3b）と同様に動詞の結果状態を表し、論文の量を直接確認できることから、証拠性という特徴を持つと推測される。

上記のことをまとめると、表 1 のようになる。

消滅系動詞の場合	連体数量詞	証拠性を持つ
	連用数量詞	証拠性を持つ
出現・作成系動詞の場合	連体数量詞	証拠性を持たない
	連用数量詞	証拠性を持つ

表 1

6.　結論

一般的に、数量詞が欠如している文に連体数量詞を追加する場合、未完了の解釈および完了の解釈が可能となる。一方、連用数量詞を追加する場合では、通常は完了の解釈が成立する。ただし、これは完全に動作が完了したという意味でなく、部分的に完了したことを示しているに過ぎないということが明らかになった。また、証拠性の観点から、消滅系動詞の場合、連体数量詞および連用数量詞は証拠性を持つが、出現・作成系動詞の場合では、連体数量詞は証拠性を持たず、連用数量詞のほうが証拠性を持つことが確認された。本研究の結果は、従来のアスペクト性に関する研究を精緻化することに寄与するものであ

ると考えられる。

参考文献

奥田靖雄（1978）「アスペクトの研究をめぐって（上）（下）」『教育国語』53 号-54 号.

奥津敬一郎（1983）「数量詞移動再論」『人文学報』160 号、pp. 1-23.

奥津敬一郎（1996）『拾遺日本文法論』ひつじ書房.

加藤重広（1997）「日本語の連体数量詞と遊離数量詞の分析」『富山大学人文学部紀要』26 号、pp. 31-64.

加藤重広（2003）『日本語修飾構造の語用論的研究』ひつじ書房.

工藤真由美（1995）『アスペクト・テンス体系とテクスト』ひつじ書房.

工藤真由美（2004）「ムードとテンス・アスペクトの相関性をめぐって」『阪大日本語研究』16 号、pp. 1-17.

工藤真由美（2014）『現代日本語ムード・テンス・アスペクト論』ひつじ書房.

金田一春彦（編）（1976）『日本語動詞のアスペクト』むき書房.

金水敏（2000）「時の表現」『時・否定ととりたて（日本語の文法 2）』（仁田義雄・益岡隆志（編））、pp. 1-92.

田中佑（2022）「名詞「試合」の助数詞への用法拡張」『日本語文法』22 巻 2 号、pp. 20-36.

張琴琴（2024）「日本語数量詞種別による意味用法の分析」北海道大学国語国文学会『国語国文研究』第 162 号、pp. 16-35.

日本語記述文法研究会（編）（2007）『現代日本語文法 3 アスペクト・テンス・肯否』くろしお出版.

三原健一（1998）「数量詞連結構文と「結果」の含意【上】【中】【下】『月刊言語』6 月号-8 月号.

三原健一（2002）「動作類型とアスペクト限定」『日本語文法』2-1、pp. 132-152.

三原健一（2004）『アスペクト解釈と統語現象』松柏社.

三原健一（2022）『日本語構文大全 第 I 巻 アスペクトとその周辺』くろしお出版.

矢澤真人（1985）「連用修飾成分の位置に出現する数量詞について」『学習院女子短期大学紀要』23、pp. 96-112.

山岡洋（2019）「英語の進行形が表す含意に関する一考察」桜美林論考『言語文化研究』第 10 号、pp. 49-69.

〈付記〉稿を成すにあたり多くのご教示を賜った加藤重広先生に深く御礼申し上げる。文責はすべて筆者にある。なお、本研究は、JST 次世代研究者挑戦的研究プログラム JPMJSP2119 の支援を受けたものである。

日本語関係節の派生と節サイズ

嘉藤優太（神戸大学大学院生）

1. はじめに

関係節（relative clause）は，統語論研究において，これまで重要な位置を占めてきた。それは，関係節が統語論における重大な問題である「移動（movement）」を含むと考えられたためである。英語には，who や which のような顕在的な関係詞が存在するため，関係節化において，関係詞の移動操作が広く仮定されている（Chomsky 1977; 三原 1992 など）。[1] 他方，そのような顕在的な関係詞が存在しない日本語のような言語においても，それに相当する空の（null）関係詞を仮定した分析が一般的になされている（三原・平岩 2006 など）。

しかしながら，久野（1973）は数種の経験的事実を下に日本語には空の関係詞及びその移動は存在しないと主張している。また，Murasugi（1991, 2000）は，日本語関係節を CP ではなく TP（Murasugi は IP と表記）と分析している。

しかしながら，本研究は，日本語関係節の節サイズが TP ではなくむしろ CP であること，そして，日本語関係節の派生には移動が関与することを示す。本研究の眼目は，そのようなことを示す新たな経験的事実を提供することにある。そしてその中で,「ことがある」が CP ではなく TP をその補部に取ること，及び,「も」に束縛された未確定代名詞の NPI としての認可には局所性の制限があることも，その帰結として示す。

2. データと分析

2.1. 否定極性項目の認可

本節では，否定極性項目（negative polarity item: NPI）の認可可能性から，日本語関係節が CP を有することを示す。NPI は Neg「な」に C 統御されるとき，適切に認可される。[2]

---

[1] 英語関係節において空の関係演算子を仮定する妥当性は，複合名詞句制約（Complex NP Constraint），及び, WH 島の制約（WH-Islands Constraint）に違反するかどうかで確かめることができる（三原 1992）。

（i）a. the man [Mary thinks [that John met e]]
b. *the man [John discussed [the claim that Mary criticized e]]
c. *the man [John wondered [who killed e]]

（三原 1992: 88-89）

（ia）から，長距離の（long-distance）抜き出しが可能であることが示される一方で,（ib-c）から，島の内部からの抜き出しは容認されないことがわかる。これらの事実は，英語では，顕在的な関係詞が存在していない場合であっても，何らかの移動操作が関与していることを示唆する。

[2]「ない」は Neg「な」＋T「い」の複合体であるため，本研究は Neg を「な」として示す。

（1）a. 太郎がチョムスキーの本しか読まなかった（こと）
b. 太郎しかチョムスキーの本を読まなかった（こと）

（1a）では，目的語「チョムスキーの本」に付加された NPI「しか」が適切に認可されている。（1b）では，主語「太郎」に付加された NPI「しか」が適切に認可されている。したがって，（1a）は「太郎がチョムスキーの本だけ（を）読んだ（こと）」，（1b）は「太郎だけ（が）チョムスキーの本を読んだ（こと）」の解釈となる。これは，Neg「な」がそれぞれの要素を C 統御していることによる。

しかしながら，「と」節のような CP が Neg と NPI の間に介在する場合は，NPI の認可は不可能となる（Kishimoto 2007; cf. Oyakawa 1975）。

（2）?*ジョンは［$_{CP}$メアリーが｛本しか/何一つ本を｝読むと］思わなかった。
（Kishimoto 2007: 267）

（2）では，Neg「な」が NPI「しか」を C 統御しているにもかかわらず，非文法的となっている。このような事実から，Kishimoto（2007）は，否定極性項目はそれと Neg「な」の間に CP が介在するとき，認可（license）されないと主張している（cf. Oyakawa 1975）。したがって，NPI は，CP が介在せず，それが「な」の作用域内となるときに認可される。よって，NPI の認可には局所性の制限があることになる（Kishimoto 2007）。

これを踏まえて，日本語関係節における NPI の振る舞いを見てみよう（関係節のラベルを??で表す）。

（3）a. 太郎｛が/は｝［［$_{??}$ 花子しか読んでいない］本を］知っている。
b. 太郎｛が/は｝［［$_{??}$ 花子が読んだ］本しか］知らない。
c. *太郎｛が/は｝［［$_{??}$ 花子が読んでいない］本しか］知っている。

（3a）では，「な」は「しか」を C 統御し，それらが同一節（CP）内に存在するため，NPI は予測通り適切に認可される。（3b）でも，「な」は「しか」を C 統御し，それらが同一節（CP）内に存在しているため，NPI は適切に認可される。（3b）の「しか」は主節の目的語「本」に付加しているため，主節内要素であることに注意しなければならない。一方で，（3c）は非文法的である。これは，「しか」が主節の目的語「本」に付加されており，関係節内の「な」の作用域外にあるからである。勿論，「しか」が主節に生じる「な」により C 統御される場合は文法的である。

（4）a. 太郎｛が/は｝［［花子が読んでいない］本しか］知らない。
b. 太郎｛が/は｝［［花子が読んでいる］本しか］知らない。

（3c）は, Neg が NPI よりも構造的に低い位置に存在するため, 関係節が CP を有しているかどうかは示さない。関係節が CP を有することを示すには, Neg が NPI よりも構造的に高い位置（C 統御する位置）に存在した上で, それにもかかわらず NPI が認可されないような事実が必要である。そのようなことを示唆するデータを（5）に示す。

（5）a. *太郎｛が/は｝［[?? チョムスキーの本しか読んだ］少年を］知らない。
b. *太郎｛が/は｝［[?? 花子しか読んだ］本を］知らない。

（5）では,「な」は「しか」よりも構造的に高い位置に存在するため,「な」は「しか」を C 統御している。そのため, NPI「しか」は認可されてもよいはずである。しかしながら, (5) において NPI は適切に認可されない。このことは, (5) では, NPI「しか」と Neg「な」の間に CP が介在し, それが障壁となっていることを示唆する。(5) において, Neg と NPI の間にはいずれも関係節が存在するため, この関係節がそれぞれ障壁となっていると考えるのが自然である。したがって, 日本語関係節は CP を有していることになる。

ここで, 本研究は, この分析の帰結として, 日本語の「ことがある」という表現がその補部に CP ではなく TP を取ることを示す。「ことがある」はその補部に節的要素を取る。

（6）［?? 太郎は統語論の本を｛読む/読んだ｝］ことがある。

「ことがある」の補部には現在時制及び過去時制が生起可能なので,「ことがある」は少なくとも TP をその補部に取ることがわかる。ここで,「ことがある」がその補部に CP を選択しているか考えてみよう。「ことがある」は形式名詞「こと」を含むため, 名詞修飾節「太郎は統語論の本を読んだ」が「こと」の補部であると思われるかもしれない。しかしながら, 本研究は,「太郎が統語論の本を読んだ」は形式名詞「こと」の補部ではなく,「ことがある」の補部であると主張する。たしかに, 形式名詞「こと」自体は CP をその補部に取る。

（7）a.［［勉学に励む］こと］は重要である。
b. *［［勉学にしか励む］こと］は重要でない。

（7b）は,「こと」節内の NPI「しか」は主節の Neg によって認可されないことを示している。しかしながら,「こと」節内に Neg が存在する場合は,「こと」節内の NPI は適切に認可される。

（8）［［(子供が）勉学にしか励まない］こと］は親にとってむしろ不安となる。

（8）では，「な」が「しか」を同一節内でC統御しているため，文法的となっている。(7)及び（8）の事実から，形式名詞「こと」自体はCPをその補部に取ることがわかる。

しかしながら,「ことがある」の否定形「ことがない」はその補部内のNPIを適切に認可することが可能である。

（9）a. 太郎は統語論の本しか読んだことが**な**い。
　　b. 太郎は（普段）統語論の本しか読むことが**な**い。

もし「こと」がその補部にCPを取っているとすると，それが障壁となり，その内部にあるNPIは適切に認可されないと予測される。しかしながら,「統語論の本しか」は適切に認可されるため，「な」とその間にはCPが存在しないことになる。したがって,「ことがある」はその補部にCPではなくTPを取っていることがわかる。このことは,「ことがある」が文法化によりCP領域に存在することを示唆する。

次に，未確定代名詞束縛（indeterminate pronoun binding）に関する事実から，日本語関係節がCPを有していることを示す。Kishimoto（2001）によると,「何」や「誰」といった日本語の未確定代名詞は，焦点化詞「も」によって束縛され，その作用域に入るとき,NPIとして解釈される（cf. Kuroda 1965）。Kishimoto（2001）は,「も」は主要部に付加され，それらが複合主要部（complex head）を形成するとしている。それにより,「も」はその付加された主要部の最大投射内の未確定代名詞を束縛することができる。したがって,Vに付加された「も」はVP内の未確定代名詞を束縛することができ,Cに付加された「も」はCP内の未確定代名詞を束縛することができるとKishimoto（2001）は主張する（Vは主要部移動により*v*に着地するため,Vに付加された「も」は*v*P内要素を束縛できる）。

（10）a. 太郎は何を買いもし**な**かった。
　　b. 太郎は｛どこから/どこで｝走りもし**な**かった。

（Kishimoto 2001: 600）

（10）から明らかなように，目的語や場所句（locative phrase）といった*v*P内に生起すると考えられる要素は「も」により束縛される。したがって，これらの要素は*v*P内に存在していることが示される。しかしながら,TP内要素と考えられる主語や時間句等は「も」によって束縛されない。

（11）a. *誰が笑いもし**な**かった。
　　b. *太郎は｛いつ/どういう理由で｝走りもし**な**かった。

（Kishimoto 2001: 600）

（11）より，主語や時間句は「も」により束縛されないため，それらの要素は TP 内に存在することが示される。

また, Kishimoto（2001）は（12）の事実から, C に付加された「も」は CP 内の未確定代名詞を束縛することができるとしている。

（12）太郎には［花子が誰を褒めたとも］思え**な**かった。

Kishimoto は,（12）の「も」が C「と」に付加されているため，その補部を作用域に取り，したがって，「も」はその内部の未確定代名詞を束縛できるとしている。しかしながら，筆者にとって（12）は容認不可能である。すなわち，「太郎には花子が誰も褒めなかったと思えた」という解釈，及び,「太郎には花子が誰も褒めたと思えなかった」という解釈は不可能であると考える。この観察から，本研究は, Kishimoto（2001）とは異なり, C に付加された「も」は CP 内の未確定代名詞を束縛することはできるものの，その未確定代名詞は NPI として適切に認可されないと主張する。すなわち,「も」により束縛される未確定代名詞の認可にも局所性の制限があるということである。これは,「も」により束縛される未確定代名詞が NPI として解釈されるためである。そうすると,（39）の非容認性は, Neg「な」と NPI「誰も」の間に障壁が存在すること，すなわち, CP の介在に起因することになる。

これを踏まえて，未確定代名詞束縛が関係節においてどのように振舞うか観察しよう。

（13）a. 太郎は,［［弟に何を貸しもし**な**かった］少女が］花子であると知った。
b. *太郎は,［［誰が買いもし**な**い］本を］昨日買った。

（13）はいずれも「も」が V に付加されているため，関係節内の *v*P 内に存在する未確定代名詞を束縛できる。したがって, Kishimoto（2001）の予測通り，目的語が未確定代名詞である（13a）は容認可能であるが，主語が未確定代名詞である（13b）は容認不可能である。

しかしながら，関係節主名詞に「も」を付加すると，関係節内の未確定代名詞は NPI として認可されず容認されない。

（14）a. *田中教授は昨日,［何を読んでいる］学生も叱ら**な**かった。
b. *田中教授は昨日,［誰が読んでいる］本も捨て**な**かった。

（14a）において「田中教授は昨日，何も読んでいない学生を叱らなかった」の解釈，そして（14b）において「田中教授は昨日，誰も読んでいない本を捨てなかった」の解釈はそれぞれ不可能である。もし,「も」の束縛する未確定代名詞の NPI としての認可に局所性の制限がないとすると,（14）はいずれもそのような解釈で容認可能なはずである。なぜなら，まず,（14）では「も」は主名詞に付加されており，主名詞は関係節内の未確定代名詞よりも構造的に高い位置に存在するため,「も」は関係節内の未確定代名詞を束縛することができる。

そうすると，主節の「な」は「未確定代名詞＋も」を C 統御するため, NPI として適切に認可すると予測されるからである。しかしながら,(14) は容認されないため，この事実は,「な」と関係節内の未確定代名詞の間に CP が介在することを示唆する。実際に,「な」が関係節内に存在する場合は,「も」に束縛された未確定代名詞は NPI として適切に認可される。

（15）a. 田中教授は昨日,［何も読ま**な**かった］学生を叱った。
b. 田中教授は昨日,［何を読みもし**な**かった］学生を叱った。
c. 田中教授は昨日,［誰も読ま**な**かった］本を捨てた。
d. *田中教授は昨日,［誰が読みもし**な**かった］本を捨てた。

したがって，本研究は,「も」によって束縛された未確定代名詞の NPI としての認可可能性からも，日本語関係節が CP を有していると主張する。

2.2. 日本語関係節と ATB 移動

本節では，日本語関係節の派生において移動操作が関与していることを示す。このことは, 日本語の関係節内で ATB 移動（across-the-board movement）の適用が可能であることから示される（cf. Williams 1978）。

Kishimoto（2011）及び岸本（2013）によると，相関等位接続された二つの節内の同一の空所は ATB 移動している。相関等位接続とは，以下のような選言の接続詞「か」による接続のことである。Kishimoto（2011）及び岸本（2013）は，このような選言の接続詞は TP を等位接続することができるとしている。

（16）a.［$_{TP}$ジョンが走ったか］［$_{TP}$メアリーが転んだか］だ。
b.［$_{TP}$ジョンが走りか］［$_{TP}$メアリーが転びか］した。
（岸本 2013: 16）

また，岸本（2013）は，相関等位接続された二つの節内の同一の空所は ATB 移動していると主張している。

（17）a. 公園へは$_i$（おそらく）［ジョンが t_i 行くか］［メアリーが t_i 行くか］だ。
b. 公園へは$_i$（おそらく）［ジョンが t_i 行きか］［メアリーが t_i 行きか］する。
（岸本 2013: 19）

（17）において,「公園へは」は二つの等位節から同時に抜き出されているため容認される。しかしながら，一方の等位節からの抜き出しは容認されない。ATB 移動の適用を受けられないたからである。

（18）a. *公園へは$_i$（おそらく）［ジョンが t_i 行くか］［メアリーが学校へ行くか］だ。
b. *公園へは$_i$（おそらく）［ジョンが t_i 行きか］［メアリーが学校へ行きか］する。
c. *学校へは$_i$（おそらく）［ジョンが公園へ行くか］［メアリーが t_i 行くか］だ。
d. *学校へは$_i$（おそらく）［ジョンが公園へ行きか］［メアリーが t_i 行きか］する。
（岸本 2013: 19）

（17）及び（18）より，もし相関等位接続された二つの節内で同一要素が空所となっていれば，それらは ATB 移動していることになる。

それでは，関係節が相関等位接続しているデータを観察しよう。

（19）a.［［$_{TP}$ 太郎が e_i 読みか］［$_{TP}$ 花子が e_i 書きか］した］論文$_i$
b.［［$_{TP}$ 太郎が e_i 買いか］［$_{TP}$ 花子が e_i 貰いか］する］絵$_i$

（19a）において，［$_{TP}$ 太郎が e_i 読みか］と［$_{TP}$ 花子が e_i 書きか］はそれぞれ相関等位節であるため，Kishimoto（2011）及び岸本（2013）に従い TP であると考える。ここで，空所 e は相関等位接続された二つの関係節における同一要素であるため，（19）の空所は ATB 移動していることになる。このことは，関係節においても，一方の等位節のみが空所を持つことができないことから裏付けられる。

（20）a. *［［太郎が e_i 読みか］［花子が小説を書きか］した］論文$_i$
b. *［［太郎が e_i 買いか］［花子が写真を貰いか］する］絵$_i$
（21）a. *［［太郎が小説を読みか］［花子が e_i 書きか］した］論文$_i$
b. *［［太郎が写真を買いか］［花子が e_i 貰いか］する］絵$_i$

（20）及び（21）に示されるように，一方の等位節のみが空所を持つことはできない。これらの事実から，関係節の相関等位接続においても，（17）及び（18）と同様の統語的特性を示すことがわかる。すなわち，日本語関係節においても，相関等位接続された関係節から ATB 移動で要素を抜き出すことが可能である。したがって，（19）では，関係節主名詞は ATB 移動の対象となっていることが傍証される。この事実は，日本語の関係節化において，移動操作が関与していることを如実に示している。そして，前節で示したように日本語関係節が CP を有しているとすると，この移動先は関係節 CP の指定部ということになる。[3] 以上を踏まえて，（19a）の統語構造を（22）に示す。

[3] 本研究は，主名詞繰り上げ分析（head-raising strategy）ではなく，演算子移動分析（operator (Op)-movement strategy）を仮定する（cf. Miyamoto 2017）。

（22）［$_{CP}$ Op$_i$［$_{TP}$ 太郎が t$_i$ 読みか］［$_{TP}$ 花子が t$_i$ 書きか］した］論文 $_i$

3. 結論

以上より，本研究は，まず，否定極性項目の認可可能性を検証することにより，日本語関係節が CP を有することを示した。さらに，相関等位接続された関係節内において ATB 移動が可能であることから，日本語関係節には移動操作が関与することを示した。また，それらの分析の中で,「ことがある」がその補部に CP ではなく TP を取ること，及び,「も」に束縛された未確定代名詞の NPI としての認可には局所性の制限があることも，その帰結として示した。

参考文献

Chomsky, Noam. 1977. On wh-movement. In Peter W. Culicover, Thomas Wasow, and Adrian Akmajian (eds.) *Formal Syntax*, 71-132. New York: Academic Press.

Kishimoto, Hideki. 2001. Binding of indeterminate pronouns and clause structure in Japanese. *Linguistic Inquiry* 32, 597-633.

Kishimoto, Hideki. 2007. Negative scope and head raising in Japanese. *Lingua* 117, 247-288.

Kishimoto, Hideki. 2011. Topicalization and coordination in Japanese. Andrew Simpson (ed.) *Proceedings of 7th Workshop on Altaic Formal Linguistics* (*WAFL7*): *MIT Working Papers in Linguistics* 62. 171-186.

岸本秀樹（2013）「日本語の統語構造—相関等位節から見た階層—」『世界に向けた日本語研究』，遠藤喜雄（編），15-43，開拓社.

久野暲（1973）『日本文法研究』大修館書店.

Kuroda, Shige- Yuki. 1965. *Generative grammatical studies in the Japanese language*. Doctoral dissertation, MIT, Cambridge, Mass.

三原健一（1992）『時制解釈と統語現象』くろしお出版.

三原健一・平岩健（2006）『新日本語の統語構造』松柏社.

Miyamoto, Yoichi. 2017. Relative clauses. In: Masayoshi, Shibatani. Shigeru, Miyagawa. and Hisashi, Noda. (eds.) *Handbook of Japanese syntax*, vol 4. 611-634. Berlin: De Gruyter Mouton.

Murasugi, Keiko. 1991. *Noun phrases in Japanese and English: A study in syntax, learnability, and acquisition*. Storrs, CT: University of Connecticut dissertation.

Murasugi, Keiko. 2000. Japanese complex noun phrases and the antisymmetry theory. Roger Martin, David Michaels, and Juan Uriagereka, (eds.) *Step by Step: Essays on Minimalist Syntax in Honor of Howard Lasnik*, MIT Press, Cambridge, Massachusetts, 211-234.

Oyakawa, Takatsugu. 1975. On the Japanese *sika nai* construction.『言語研究』67, 1–20.

Williams, Edwin. 1978. Across-the-Board Rule Application. *Linguistic Inquiry* 9, 31-43.

可能構文の対象を標示するガ･ヲの交替に情報構造は影響するか
―指示距離による検証―

池田尋斗（関西大学大学院生／神戸大学）
k909064@kansai-u.ac.jp

1.　はじめに

可能構文では対象を標示する格助詞としてガ･ヲがともに用いられる。可能構文におけるガ・ヲの交替要因として，これまで他動性（藤村ほか 2004，青木 2008），節タイプ（南部・佐野 2019），動詞の活用型（田村 1992）などが指摘されてきた。

一方で，同じく対象の標示にガ・ヲが使用できる願望構文や「好きだ」を述語とする構文（以下，「好きだ」構文）では情報構造（新情報 vs 旧情報）の影響が指摘されており，対象が旧情報であればヲが使用されやすいという（生田 1996, 池田 2024）。しかし，可能構文におけるガ・ヲの交替について情報構造の影響を指摘した研究は管見の限り見当たらない。

以上を踏まえ，本発表では可能構文におけるガ･ヲの交替に情報構造が影響しているかを用例採集調査によって検証する。なお，可能構文の格フレームには以下の三つが存在しているが，このうち本発表で問題とするのは(1b-c)についてである。

(1)　a.［ニ　ガ］格　：［わたしに　日本語が　話せる］こと
　　b.［ガ　ガ］格　：［わたしが　日本語が　話せる］こと
　　c.［ガ　ヲ］格　：［わたしが　日本語を　話せる］こと

2.　先行研究と問題のありか

2.1. 可能構文におけるガ･ヲの交替

可能構文におけるガ・ヲの交替については，これまで主に他動性，節タイプ，動詞の活用型の影響が指摘されてきた。以下，それぞれの影響について順に確認していく。

まず，他動性の影響について確認する。他動性の先駆的研究である Hopper & Thompson（1980）は他動性の 10 項目として表 1 を挙げている。ガ・ヲの交替に関しては，他動性の高い特徴を示す文ではヲ，低い特徴を示す文ではガが選択されやすい（あるいは容認されやすい）という傾向が指摘されている。以下に具体的な例を示す。まず，(2b)のように述語に「E.意志性」「H.動作主性」を高める要素が後接すると，(2a)と比較してヲの容認性が高くなるという（青木 2008）。また，述語動詞の意味的特徴によって「I.被動作性」が高いと，ヲの容認性が高くなる。例えば(3)では，強い物理的影響を与えるタイプの動詞「割る」のほうが「食べる」と比較してヲと相いれやすいという（藤村ほか 2004）。また，(4)のように「J.対象の個体性」が低いとガの容認性が高くなることが指摘されている（藤村ほか 2004）。

(2)　a.休み時間になったら，雑談｛ガ／*ヲ｝できる。
　　b.休み時間になったら，雑談｛ガ／ヲ｝できるようにしておく。（青木 2008）

(3) ?あの子はアレルギー体質だ。でもあの子は卵を食べられる。
≦ あの子は不器用だ。でもあの子は卵を割れる。（藤村ほか 2004）

(4) ?保育所に赤ちゃんが任せられるものか。≦コンピュータに仕事が任せられるものか。（藤村ほか 2004）

表１　他動性の 10 項目（Hopper & Thompson1980 より）[1]

	高い	低い
A. Participants（参加者）	２人以上：動作者と対象	１人
B. Kinesis（動作様態，動き）	動作	非動作
C. Aspect（アスペクト）	動作限界あり	動作限界なし
D. Punctuality（瞬間性）	瞬間	非瞬間
E. Volitionality（意図性，意志性）	意図的	非意図的
F. Affirmation（肯定）	肯定	否定
G. Mode（現実性）	現実	非現実
H. Agency（動作能力，動作主性）	高い	低い
I. Affectedness of O（被動作性，影響性，受影性，対象への影響，動作が対象に及ぶ度合い）	全体的に影響	部分的に影響
J. Individuation of O（対象の個別化，対象の個体化，個体性）	高い	低い

次に，節タイプの影響について確認する。ガ・ヲが交替する構文（可能構文を含む）について，その交替要因を扱った南部・佐野（2019）は，ガ・ヲの出現傾向を定量的に分析し，従属節のほうが主節と比較してヲの使用頻度が高いことを指摘している。

最後に，動詞の活用型の影響について確認する。田村（1992）は，小説を資料とする用例採集調査の結果から，五段動詞ではガが多く一段動詞ではヲが多いことを指摘している。

以上，可能構文におけるガ・ヲの交替に影響する要因について述べてきた。本発表では，ここに挙げた要因を排除した環境で，情報構造の影響の有無を検証する。

2.2. ガ･ヲの交替と情報構造

ここでは，願望構文と「好きだ」構文におけるガ・ヲの交替について，情報構造がどのように影響しているか確認する。

まず，願望構文について分析した生田（1996）は，述語の中には「開ける」「殺す」「覚える」「待つ」「購入する」などのように「対象の存在を前提としている」ものがあり，このような述語はヲをとりやすいとしている。生田（1996）は，「殺す」を例に挙げて，「何でもいいから何か殺したい」から「では，ハエを…」という状況は（普通は）考えにくく，その辺にブンブンと飛んでいるうっとうしいハエがいるから初めて「（そのハエを）殺したい」と

[1] 日本語訳については角田（2007）に準拠した。

思う，のだという。生田（1996）のいう「前提」というのは，発話の場（あるいは文脈）に既に存在しており，会話の参与者がともに認識している存在という点で「旧情報」と言い換えてもよいだろう。すなわち，対象が旧情報であればヲが使用されやすいということである。

また，「好きだ」構文について分析した池田（2024）では，『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（BCCWJ）で得られた用例の情報構造を指示距離という手法（本発表でも用いる，後述）で分析し，ヲは対象が旧情報の文で使用されやすいことを指摘している。

2.3. 問題のありか

ここまでで，可能構文におけるガ・ヲの交替については他動性，節タイプ，動詞の活用型といった要因の影響が指摘されてきた一方で，情報構造の影響については指摘されてこなかったことを確認した。以上を踏まえ，本発表では他動性，節タイプ，動詞の活用型の要因を排除した環境において，情報構造が可能構文のガ・ヲの交替に影響しているかを検証する。願望構文や「好きだ」構文と同様の傾向を示すとすれば，可能構文においても対象が旧情報であればヲが選択されやすい，という傾向が予測される。

3. 調査と分析の枠組み

3.1. 調査方法

国立国語研究所『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（BCCWJ）で用例を採集した。（ⅰ）-（ⅳ）の手順で分析する用例を選定し[2]，用例がガ・ヲともに 10 件以上得られた 14 種の動詞と意味の用例（表２参照）を分析対象とする。なお，「J.対象の個体性」の要因を排除するため，基本的には対象名詞が無生の用例のみを分析対象としたが，「許す」のみ対象名詞が有生の用例のみを分析対象とした。また，［ニ-ガ］の格フレームをとるものや主語がガで明示的に標示されているもの，「自発」などの異なる意味のもの，情報構造を分析するのにふさわしくない引用文や箇条書きの文・訳文・歌詞・タイトル・慣用表現，さらに対象が疑問詞のものは分析対象から除外した。

（ⅰ）『日本語基本動詞用法辞典』記載の五段動詞の可能動詞形でガ・ヲが述語と隣接する用例を採集[3]（「動詞の活用型」の影響を排除）

（ⅱ）（ⅰ）から述語が主節に現れるものを抽出（「節タイプ」の影響を排除）

（ⅲ）同辞典の記述に基づいて意味分類[4]（「他動性」の影響を排除）

（ⅳ）「B.動作性」「E.意志性」「H.動作主性」を高める要素[5]が後接する用例を除外（「他動性」の影響を排除）

---

[2] 三項動詞は分析対象外とした。また，対象名詞句の意味によってガ・ヲの分布が著しく異なっていた「出る」も分析対象から外した。

[3] キー＝各動詞の語彙素読み AND 活用型：下一段 前方共起＝品詞：助詞-格助詞 AND 語彙素："が|を"

[4] 同じ動詞でも，動詞の意味的特徴によって「I.被動作性」などに差がある可能性がある。その要因を排除するために意味分類を行った。

[5] 「～ようになる」「～ようにする」など。

表２　分析対象とする動詞と意味[6]

動詞	意味	例文
買う	お金を払って品物や権利やものを自分のものにする。	株｛が／を｝買える。
持つ	ある考えや，思い・感情などを心に抱く。	好感｛が／を｝持てる。
言う	口を動かして言葉で表現する。	意見｛が／を｝言える。
使う	ある事のために物を働かせたり，役立たせる。	携帯｛が／を｝使える。
楽しむ	ある事によって心の満足を感じる。	お花見｛が／を｝楽しめる。
作る/造る	ある物・事を原料・材料にして別の事物を生み出す。	料理｛が／を｝作れる。
掴む	物事を自分の物とする。	チャンス｛が／を｝掴める。
思い出す	忘れていたこと，または，昔あったことなどを記憶に呼び戻す。	名前｛が／を｝思い出せる。
送る	時間を過ごす。	充実した生活｛が／を｝送れる。
許す[7]	罪や失敗をとがめないで済ませる。	彼｛が／を｝許せる。
選ぶ	いくつかのものの中から，条件・目的に合うもの，または，好ましいものを取り出す。	好きなもの｛が／を｝選べる。
受け取る	自分の方へ来るものや渡されるものを手に受けて収める。	代金｛が／を｝受け取れる。
防ぐ	害を受けそうな物事から守る。	乾燥｛が／を｝防げる。
過ごす	何かをしてある一定の時間を費やす。	楽しい時間｛が／を｝過ごせる。

3.2. 分析手法

用例の情報構造を分析する手法として，Givón（1983）の「指示距離（Referential Distance，以下 RD）」を用いる。RD とは，分析対象とする名詞句と，その名詞句の先行詞との距離を計測することによって，分析対象とする名詞句の「旧情報性」を段階的，客観的に測ることができるというものである（Givón 1983，Imamura 2014，今村 2020）。Shimojo（2005）は，談話において情報は意識の中で活性化（activated）されたり非活性化（deactivated）されたりすると仮定し，談話中にある語が参照されれば意識の中で活性となり，参照されなければ後続の発話を処理するにつれて非活性になるとした。そして，RD によって計測されるのは参照語の活性化度（activation）のレベルであるとしている。すなわち，RD 値が低い語（直前

[6] 意味は『日本語基本動詞用法辞典』より。例文は BCCWJ の用例を一部改変した作例。
[7] 対象名詞が一人称または二人称の用例は除外した。対象が談話の参与者（participant）である一人称または二人称のものは，その時点で旧情報であると考えられる（Huddleston ＆ Pullum 2002）。このような用例は本発表で用いる分析手法（詳しくは 3.2.）に向かないと判断した。

に先行詞が出てくる語）は活性化度が高く，旧情報性が高いといえる。なお，RD の最大射程は 20 節であり，1 から 20 の数値を付与するのが標準的な手法であるとされている（Imamura 2014 など）ため本発表もそれに倣う。以下，具体的な分析例を挙げる。まず(5)の場合，対象名詞「株」の先行詞は(5c)から数えて 2 節前の(5a)に現れているため，対象名詞の RD 値は 2 となる。

(5) a. そろそろ株を買いたい気がします。
b. でも，どうやれば
c. 【株を買えるの】？（Yahoo!ブログ，OY11_04610，269）

このように，RD は分析対象とする語とその先行詞の距離を計測する手法であるが，先行詞の認定基準については，Imamura（2014）に準拠した。まず，分析対象とする語の同一指示物が先行文脈にある場合（direct relationship）だけでなく，分析対象とする語と同一のものを指すと推論可能な情報（inferable information）も，それを先行詞としてみなす。例えば，(6)では先行文脈に対象名詞「この武器」という語は直接表れていないが，(6b)の「フェロモンの匂い」は同じ指示対象を指しているという点で，先行詞としてみなす。よって対象名詞の RD は 2 となる。

(6) a. 甘酸っぱい芳香が，鼻孔を刺激する。
b. それは鱗粉に含まれたフェロモンの匂いなのだ。
c. アプサラスは羽を拡げて初めて，
d. 【この武器を使える】。（アプサラスリターンズ，LBn9_00139，79170）

また RD 計測においては，文脈上言語化されていない要素を照応するゼロ照応（zero anaphore）も考慮する必要がある。例えば(7)では，(7c)で「牛肉」が直接言及されているわけではないが，二重下線部「ご馳走してくれた」はその対象を必須で要求する述語であり，その対象とは「牛肉」であると考えられる。よって，対象名詞の RD は 3 となる。

(7) a. 俺だって，牛肉を食ったのは，上野の美術学校を出て，
b. 新聞社に勤め始めたとき，
c. 社長の徳富先生が，ご馳走してくれたのが，最初だ」
d. 「そらあ，あなたのお父さんが，大酒飲みで
e. 甲斐性がなかったから，
f. 【牛肉が買えなかったんでしょ】。（食い食い虫，LBm5_00053，19150）

以上の基準に基づいて可能構文の対象の RD を計測し，ガ文とヲ文の対象の RD 値を比較することで，対象の旧情報性を比較する。可能構文において，願望構文や「好きだ」構文と

同じく対象が旧情報の文でヲが使用されやすいとすると，ヲで標示される対象は先行詞との距離が短い（＝RD 値が低い），という予測が立つ。

4.　結果と考察

表３に RD 値ごとの用例数および RD 値の平均と標準偏差，統計処理の結果を示す。

まず，ガ・ヲごとの用例数の合計に着目すると，「買う」「持つ」「使う」「言う」「楽しむ」「作る/造る」「掴む」「思い出す」「送る」「受け取る」「許す」ではガが優勢，「選ぶ」「防ぐ」「過ごす」ではヲが優勢であることが分かる。しかし，ガ・ヲの用例数の差については動詞によって異なりが大きく，「ガが優勢な動詞」「ヲが優勢な動詞」のように一括りに考えるのは適切とはいえない。本発表では情報構造の影響の有無を検証することに主眼を置くため，この分布の違いにどのような要因が影響しているかについては別の機会に検討する。

次に RD 値に着目する。ガ・ヲの RD 値を比較すると，「防ぐ」と「過ごす」を除いて，ヲのほうが RD 値の平均が低いことが分かる。ガ・ヲの RD 値に有意差があるかを調べるために，有意水準 5%で Brunner - Munzel test[8]を行ったところ，「買う」「持つ」「使う」「楽しむ」「受け取る」の５種の動詞で有意差がみられた（表３網掛け）。すなわち，これらの動詞ではヲのほうが対象の RD 値が低い傾向があるといえる。以上の結果から，少なくとも一部の動詞において，情報構造はガ・ヲの交替に影響を与えており，ヲは対象の旧情報性が高い文で使用されやすい傾向があると考えられる。

次に，RD 値に有意差がみられた動詞に共通する特徴があるかを考えてみる。これらの動詞のうち「買う」「持つ」「使う」「楽しむ」については，用例全体に対するヲの使用比率が比較的に低い動詞であるといえる。言い換えるならば，基本的にはガが選択されやすく，ヲは特殊な環境で選択されるような動詞であるということである。このような動詞では，ガ・ヲの選択要因として情報構造が影響してくる，という可能性が考えられる。仮にこのような傾向があるとすれば，その傾向は「好きだ」構文における現象と類似性がある。「好きだ」構文も可能構文と同じく対象の標示にガ・ヲが使用されるが，可能構文よりもさらにヲは選択されにくいとされている（南部・佐野 2019）。そして，「好きだ」構文について本発表と同様に RD による検証を行った池田（2024）では，ヲが RD 値の低い対象の標示に用いられやすいことが指摘されている。すなわち，可能構文のうちヲが選択されにくい動詞（と意味）の文や，構文的にヲが選択されにくい「好きだ」構文においてヲが選択される場合には，情報構造がその要因として影響している，という可能性が考えられるのである。

ただし，ヲの使用比率が低いにもかかわらず RD 値に有意差がみられないものや，「受け取る」のようにガ・ヲの使用比率にほとんど差がない動詞で有意差がみられるなど，上記の考察を支持しない結果も確認されている。この点については今後の課題としたい。

---

[8] RD 値の解釈には *t* 検定を用いることが多い（Imamura2014，池田 2024 など）が，十分な用例数が確保できなかったため Brunner - Munzel test を採用した。また統計処理には R（R Core Team（2023））を用いた。

表３　RD 計測結果と検定結果[9]

動詞	助詞	RD 値ごとの用例数					平均	標準偏差	検定結果
		1-5	6-10	11-15	16-20	合計(%)			
買う	ガ	9	4	3	84	100(88.5)	17.76	5.43	統計量 = -3,
	ヲ	5	1	1	6	13(11.5)	11.38	8.55	$df = 13, p < .001$
持つ	ガ	9	4	1	237	251(82.0)	19.14	3.62	統計量 = -2,
	ヲ	6	3	2	44	55(18.0)	17.22	6.01	$df = 61, p = .02$
使う	ガ	26	8	3	101	138(77.5)	15.81	7.23	統計量 = -3,
	ヲ	15	4	1	20	40(22.5)	11.75	8.35	$df = 60, p < .001$
言う	ガ	50	6	4	36	96(77.4)	9.55	8.46	統計量 = 0.1,
	ヲ	15	3	0	10	28(22.6)	9.14	8.23	$df = 48, p = .9$
楽しむ	ガ	36	7	6	371	420(73.8)	18.20	5.14	統計量 = -6,
	ヲ	47	9	3	90	149(26.2)	13.50	8.34	$df = 189, p < .001$
作る/造る	ガ	19	10	2	82	113(72.4)	15.84	6.99	統計量 = -1,
	ヲ	12	3	1	27	43(27.6)	14.19	7.97	$df = 63, p = .3$
掴む	ガ	2	2	2	53	59(72.0)	18.68	4.06	統計量 = -2,
	ヲ	6	0	0	17	23(28.0)	15.52	7.57	$df = 28, p = .1$
思い出す	ガ	7	1	0	53	61(70.9)	17.66	5.93	統計量 = -2,
	ヲ	7	0	1	17	25(29.1)	14.84	7.85	$df = 37, p = .1$
送る	ガ	1	0	1	18	20(58.8)	18.75	4.01	統計量 = -1,
	ヲ	2	1	2	9	14(41.2)	15.85	6.74	$df = 17, p = .2$
受け取る	ガ	0	1	0	12	13(56.5)	18.92	3.73	統計量 = -2,
	ヲ	3	2	0	5	10(43.5)	11.80	8.32	$df = 11, p = .03$
許す	ガ	9	0	1	7	17(51.5)	10.41	8.58	統計量 = -0.8,
	ヲ	9	3	1	3	16(48.5)	7.07	6.97	$df = 30, p = .4$
選ぶ	ガ	2	2	2	37	43(43.0)	18.26	4.57	統計量 = -1,
	ヲ	10	1	1	45	57(57.0)	16.54	6.82	$df = 98, p = .3$
防ぐ	ガ	6	3	0	18	27(32.9)	14.74	7.22	統計量 = 0.2,
	ヲ	12	4	1	38	55(67.1)	15.02	7.64	$df = 63, p = .9$
過ごす	ガ	2	0	0	23	25(29.8)	18.52	5.02	統計量 = 1,
	ヲ	0	0	0	59	59(70.2)	20.00	0	$df = 24, p = .2$

5.　まとめと課題

本発表では，可能構文の対象を標示するガ・ヲの交替に情報構造が影響するかを，RD という手法を用いて検証した。その際，願望構文や「好きだ」構文における現象を踏まえ，ヲ

[9] 表中の動詞は，動詞ごとの用例の合計数に対するヲの使用比率が小さいものから順に並べている。すなわち，表の上部に行くほどヲの使用比率が低く，下部に行くほどヲの使用比率が高い。

は対象が旧情報の文で使用されやすいという予測を立てた。結果として，一部の動詞において予測と一致する結果が得られた。以上から，可能構文におけるガ・ヲの交替において，情報構造が影響している可能性があることを主張した。また，本調査で情報構造の影響がみられた動詞は，（一部を除いて）ヲの使用比率が低いという共通点がみられることを確認し，「好きだ」構文における現象との類似性を指摘した。

一方，有意差がみられなかった動詞の解釈については課題が残る。現段階では，これらの動詞では本調査で考慮しきれなかった要因がより強く影響している可能性があると考えている。本調査ではできる限り情報構造以外の要因を排除することを目指したが，調査の性質上排除できなかったものもある。例えば，可能の実現条件が外的であるか内的であるか（藤村ほか 2004）という文全体の意味的な要因や，対象名詞の特定性の高低のような連続体として捉えるべき要因などである。また，他動性の 10 項目のうち肯定か否定かを表す「F.肯定」などは，ガ・ヲの交替に影響するかどうかも含めて検証する必要がある。これらの課題を解決するためには，本発表で考慮しなかった要因や除外した用例を含めて，個別の動詞（と意味）ごとに分析するのが有効であると考えている。

参考文献

青木ひろみ（2008）「可能表現の対象格標示「ガ」と「ヲ」の交替」『世界の日本語教育』18，133-146，国際交流基金日本語国際センター

生田裕子（1996）「願望表現における「を/が」の交替について」『人文科学研究』25，39-72，名古屋大学大学院文学研究科・人文学研究編集委員会

池田尋斗（2024）「「好きだ」構文の対象を標示するヲの使用要因―情報構造に着目して―」『日本語の研究』20-1，35-51，日本語学会

今村怜（2020）「後置文の機能的分析」『日本言語学会第 161 回大会予稿集』，57-62，日本語言語学会

小泉保・船城道雄・本田畠治・仁田義雄・塚本秀樹 編（1989）『日本語基本動詞用法辞典』大修館書店

田村泰男（1992）「可能表現における対象格マーカー「が」「を」について―小説における実態調査」『広島大学留学生センター紀要』2，11-21，広島大学留学生センター

角田太作（2007）「他動性の研究の概略」，角田三枝・佐々木冠・塩谷亨（編）『他動性の通言語的研究』，3-11，くろしお出版

南部智史・佐野真一郎（2019）「「が／を」交替の定量的分析」『コーパスからわかる言語変化・変異と言語理論 2』，289-304，開拓社

藤村逸子・寺島啓子・寺島佳子・萩原由貴子・大曾美恵子（2004）「「が」と「を」の交替と「他動性」：コーパスを利用した検証」『日本語学習辞書編纂に向けた電子化コーパス利用によるコロケーション研究報告論文集』，41-72，広島大学留学生センター

Givón, Talmy（1983）”Topic continuity in discourse” *Topic Continuity in Discourse*, 4-41. John Benjamins Publishing.

Hopper, Paul J. & Thompson, Sandra A.（1980）”Transitivity in grammar and discourse” *Language* 56-2, 251-299.

Huddleston, Rodney & Pullum, Gerffrey K.（2002）*The Cambridge Grammar of the English Language.* Cambridge University Press. （ロドニー.ハドルストン&ジェフリー・K.プラム.保坂道雄・長谷川信子・塚本聡・一條祐哉・佐藤健児・小澤賢司（訳）『「英文法大事典」シリーズ第９巻　情報構造と照応表現』開拓社）

Imamura, Satoshi（2014）”The Influence of Givenness and Heaviness on OSV in Japanese” *Proceedings of the 28th Pacific Asia Conference on Language, Information and Computation*, 224-233. Chulalongkon University.

R Core Team（2023）R: A Language and Environment for Statistical Computing. R Foundation for Statistical Computing, Vienna, Austria. <https://www.R-project.org/>.

Shimojo, Mitsuaki（2005）*Argument encoding in Japanese conversation*. Palgrave Macmillan.

参考資料

国立国語研究所『現代日本語書き言葉均衡コーパス』BCCWJ 中納言 2.7.2 データバージョン 2021.03 https://chunagon.ninjal.ac.jp/bccwj-nt/search

経路を表す「を」格の対象性

佐藤　友哉（清泉女学院短期大学）

1　はじめに

現代語格助詞「を」には、①対格（太郎が木を切る）、②離点（太郎が家を出る）、③経路（太郎が階段を上がる）、④状況（捜索隊は大雨の中を（次郎を）探した）、⑤時間（太郎が東京で3年を過ごす）を表す用法がある。

筆者は佐藤（2024）で自動詞が「を」と共起する離点用法を論じ、同用法の対象性を指摘した（詳細は4節にて後述）。本研究では、同じく自動詞が「を」と共起する経路用法を取り上げ、経路用法にも対象性が認められるとすれば、それはどのようなものかを中心に論じる。

2　問題のありか

従来の指摘の中で、経路用法の「を」格名詞句に対象性を認めるものを取り上げ、それらが抱える課題を提示する。

国広（1967）：格助詞「を」の全ての用法について「動作・作用の対象を示す」（p. 223）。

奥田（1983）：「町をあるく」「坂をのぼる」における「を」格名詞句と動詞との結びつきは「たんに空間的でなく、対象的でもある」（pp. 143-144）。

川端（1986）：「を」の経路用法について「移動のプロセスそれ自体としての事態が、それを包む拡がりをもったものとしての空間において成立すると把握された関係」（p. 21。傍点原文）であり、同用法は「場所的対格」（同頁）である。

田中（1997）：「を」が示す経路は「移動動作が作用する対象」（p. 32）である。

上記研究と本研究とは「を」の経路用法に対象性を認める点で同じではあるが（詳細は3節にて後述）、経路用法における作用や対象とは具体的にどのような意味なのか、さらに詳しく論じる必要がある。

年代は前後するが、**柴谷（1978）**は「ヒバリが空を飛んでいた。」を挙げ、「ヒバリが空を全面的にカバーして飛んでいたという意味合いが強い」（p. 291）ため、「空を」は「『対象』を表わしていると考えることは不可能ではない」（p. 292）とする。

同様の指摘に**姚（2007）**がある。姚（2007）によれば、「移動性自動詞構文において、『移り動く』行為を表すパターンについては」「ヲ格名詞句で示された場所の中を全体的に移動していくという事態関係」（p. 12）がある。また、「ヲ格名詞句は動詞の表わす事態の成立に必要な『対象的』な存在として捉えられる」（p. 14）とする。

柴谷（1987）、姚（2007）に関し、場所の中を全体的にカバーし移動していくと、なぜその場所が対象となるのかが判然としない。さらに、「対象」をどのような意味で用いているのか姚（2007）に説明はない。

謝（2010）は「を」格を取る移動自動詞構文を他動性の強いものから順にⅠ類、Ⅱ類、Ⅲ類に分け、さらにⅠ類をa類、b類、c類に細分している（下線の引き方は私に改めてい

る)。本研究と関わりの深いⅠ類 c とⅡ類を挙げる[1]。

Ⅰ類　c　越え難い海の浪を渡り　(謝 2010:96)

Ⅱ類　　橋の下を通る　(同上:97)

謝 (2010) はⅠ類は「対象物の『場所』に働きかけて、何らかの変化・結果を被らせる」(p. 94) 意味を表し、c 類は「場所に接触し、征服可能の意味合いを出す」(p. 94) とする。Ⅱ類は「通過経路・点と出発点に重点を置き、運動の過程と移動を重視している点に特徴があ」(p. 97) り、「場所を一方的に全面的に接触し、占めて移動する意味合いがあ」(同頁) る。また、Ⅰ類とⅡ類には「移動行為によって場所を支配下に置くカバー性と方向性がある」(p. 99) という共通点があるとする。

謝 (2010) におけるⅠ類 c で、「海の浪を渡る」際に「浪」に接触することは、仮に主体が「浪」を越えて渡ったとしても、自身の動作をコントロールしたとはいい得るが、自律的に動く「浪」を征服・コントロールしたとはいい難い。Ⅱ類で、「橋の下を通る」動作は「橋の下」という場所に一方的に全面的に接触し、「橋の下」を主体がその都度占めつつ移動するが、「通る」動作は「橋の下」に物理的変化をもたらす訳でもなく、また、「橋の下」のあり方を決定する訳でもないため、いかなる意味で「橋の下」を支配下に置いているといえるのか不明である。

3　「を」の経路用法の対象性

3-1　方向性と「を」格の関連

方向性と「を」格との関連については既に杉本 (1995) が指摘するところだが (移動格の「を」は「移動の方向性の明確さ」という特徴がある。杉本 1995:120)、方向性と「を」格との関連について論じる。

両者の関連は次の現象からも確認することができる (「を」格名詞句の意味役割が場所となる場合、「(場所) を」と表記する。他の助詞の場合も同様の表記を用いる。離点は考察の対象外とする)。

A群　「(場所) を」と共起し、「(場所) で」と共起しない移動動詞

上がる、行く、下 (降) りる、通う、下る、来る、進む、辿る、伝う、伝わる、通る、上 (登) る、向かう、巡る、戻る、渡る

B群　「(場所) を」とも「(場所) で」とも共起する移動動詞

歩く、いざる、うろうろする、うろつく、泳ぐ、駆ける、転がる、さまよう、滑る、飛ぶ、這う、走る、ぶらつく、ぶらぶらする、舞う

A群は、奥田 (1983) における「移動動作を方向性という観点からとらえている」(p. 141)

---

[1] ちなみに、Ⅰ類 a、b、Ⅲ類は以下の通りである。

Ⅰ類　a　梯子を最上の段まで上りつめた　(謝 2010:95)

　　b　梯子を上って来る　(同上:95)

Ⅲ類　　鼻の先が少し上を向いていて　(同上:97)

ものとほぼ重なる。具体的には、上または下の方向を表すものには「上がる」「下（降）りる」「下る」「上（登）る」が挙げられ、曲線的方向を表すものには「巡る」が、求心的方向を表すものには「来る」が、横方向を表すものには「横切る」が、前方向を表すものには「行く」「通う」「進む」「辿る」「伝う」「伝わる」「向かう」「渡る」が、それぞれ挙げられる。

Ｂ群は、奥田（1983）における「移動動作を様態という観点からとらえている」(p. 141) ものとほぼ重なる。

参考までに、「(場所）を」と共起せず、「(場所）で」と共起する動詞（Ｃ群）を示す。

Ｃ群　「(場所）を」と共起せず、「(場所）で」と共起する動詞

遊ぶ、運動する、考える、くつろぐ、暮らす、過ごす、倒れる、飛び上がる、成り立つ、寝る、働く、勉強する

Ｃ群は方向性を表さないし、この種の動詞に移動動詞は含まれない。

Ａ～Ｃ群の特徴を表にすれば、次のようになる（表 1)。

表１

	共起する格助詞	動作の特性
Ａ群	「(場所）を」○、「(場所）で」×	移動動作が一定の方向性を表す
Ｂ群	「(場所）を」○、「(場所）で」○	移動様態を表す
Ｃ群	「(場所）を」×、「(場所）で」○	非移動動作

Ａ群を見れば、「(場所）で」との共起を排除するという意味で、移動動作が一定の方向性を表すことと「(場所）を」との関連は強固なものとわかる。ただし、Ｂ群（うろうろする、さまよう）を見れば、「(場所）を」との共起にとって移動動作の方向性は必ずしも一定である必要はないとわかる。Ｃ群を見れば、「(場所）を」との共起には移動、即ち、或る方向性を持った位置変化は必要なものとわかる。したがって、「(場所）を」との共起は、或る方向性を持った位置変化との関係から考察すべきだといえる。

3-2　方向性と対象性との関連

2 節では多くの先行研究が「を」の経路用法に対象性を認めていることを見た。本研究では対象という語を、作用の目標、の意で用いるが、或る方向性を持った位置変化と「を」格の対象性とはどのように関連するのか（対象性を認めることの妥当性は 4 節で後述)。

これについて、まずＡ群より「上がる」と「通る」を例に取って考える。

(1)　イングリッドはそっけなく手をふると、わたしの腕をとってロビーの階段をあがった。　(LBj9_00058 3850 五木寛之『晴れた日には鏡をわすれて』)

(2)　リュウたちは、待ちかまえていたように立ちあがり、通路を通って、艇庫のほうへいそいだ。　(LBan_00029 940 福島正実『フェニックス作戦発令』)

(1) (2) で「あがる」「通る」はそれぞれ（斜め）上方向、前方向に移動する動作であり、

その方向に延びる通路の存在が前提される。「(ロビーの) 階段をあがる」では、動作実現時に主体は一段一段に接触しつつ上方向に移動し、「通路を通る」では、主体は一足一足の直下に存在する空間に接触しつつ前方向に移動し、その都度主体は当該空間を占めることになる。このように、当該空間を逐次占めていくことにより、「階段」「通路」における既接触空間が逐次的に増加するという変化が認められる。この変化に注目すれば、「あがる」「通る」動作は「階段」「通路」に変化をもたらす働き、つまり作用をなすといえる。この、未接触空間から既接触空間への逐次的変化をもたらす作用を認めるとき、その作用を受ける（変化を被る）客体は、「を」格名詞句の指示物に他ならず、これを作用の目標、即ち、対象ということができる。

続いて、Ｂ群における「を」格の対象性について考える。まず「歩く」を例に取る。

(3)　新宿からＪＲ総武線で１つ目の大久保駅で電車を降りる。(中略) 狭い路地を(*で) 歩いて十分、古い住宅街の中に淀橋中学校がある。

(LBk3_00104 760 土屋英男『学校園の栽培便利帳』)

Ｂ群は「(場所) を」とも「(場所) で」とも共起する動詞だが、実際には(3)のように「(場所) を」とは共起するが、「(場所) で」に置き換えられない例がある。(3)で「歩く」動作は、前方向に延びる「狭い路地」に沿って逐次的に当該空間を占めつつ進むことを意味し、「狭い路地」は、逐次的に未接触空間を既接触空間へと変えていく作用の対象となる。このように、「歩く」は通路通行に叙述の重点が置かれる場合、「(場所) を」との結びつきが強くなる。

(4)　それ (引用者注、自分の鼻が低いと感じた出来事) 以来、鼻の低さが気になりはじめて、街で歩いても彼女の視線は「鼻の高い女性」にばかり向けられて、ますます自信をなくしていった。

(PB21_00165 12800 石原加受子『恋が長続きしない理由』)

一方、(4)で「歩く」は「(場所) で」と共起している。(4)の「街で歩いて」は「街」に出て、結果的に人目にさらされるように動くという意味を表す。そのため、「歩く」は通路通行のような、客体への作用を表す動作というより、主体の様態を表す動作と見た方が良い。このような見方が優勢になるとき、「街」は、「歩く」動作が展開する背景となり、「で」と共起する。

続いて、Ｂ群から「うろうろする」を例に取る。

(5)　先生は、さっきから玄関を (cf. で) うろうろしている。

(PB29_00447 5040 恩田陸『不安な童話』)

「うろうろする」は方向が定まらない移動を表すため、移動様態としての意味合いが強い。しかし、主体が逐次的に当該空間を占めつつ移動する意味は保たれており、そのため、(5)の「玄関」は、逐次的に未接触空間を既接触空間へと変えていく作用の対象となる。

以上の考察により「を」の経路用法について以下のことがわかる。

○　動詞が表す作用について

（ア）　主体が「を」の示す空間を占めつつ移動する際に、未接触空間を既接触空間に逐次的に変えていく作用を表す。

○　「を」格の対象性について

（イ）　「を」格名詞句は、動詞が表す、未接触空間を既接触空間に逐次的に変えていく作用の対象となる。

（ア）と（イ）をまとめると、次のようになる。

○　「を」の経路用法が表す作用及び対象性について

（ウ）　主体が「を」の示す空間を占めつつ移動する際に、当該空間を対象に取り、その空間における未接触空間を既接触空間に逐次的に変えていく作用を表す。

柴谷（1987）、姚（2007）、謝（2010）との違いは、空間の全面的なカバーや支配という語句、要素を対象性の規定に含めていない点である。

3-3　「空間を占める」ことに関する他の助詞との差異

本節では「空間を占める」ことについて、他の助詞による表現と比較することで、「を」の経路用法の特徴を探りたい。

まずは「に」と比較する。

(6)　今、桂子はぼくの傍らにいる。

（PB29_00534 35500 もえぎゆう『パーソナルニーズ』）

(6)のような「に」の存在地点を表す用法でも「いる」状態の主体である「桂子」はそれぞれ「ぼくの傍ら」という空間を占めている。「に」の存在地点を表す用法は状態的であるのに対し、「を」の経路用法は動的である（(1)(2)(3)(5)参照）という違いがある。

(7)　私が夜行列車で上野を発って青森に着いたのは翌日の午後であった。

（LBb9_00063 190 山岡荘八『小説太平洋戦争』）

(8)　太郎が2階に上がっている　（川野 2006:283。下線筆者）

(7)(8)のような「に」の着点を表す用法では、動作が実現した際に、主体である「私」「太郎」が着点となる「青森」「2階」を占めた状態になる。川野（2006:283-284）が指摘するように、「に」の同用法はアスペクト特性として結果性を有するが[2]、「を」の経路用法には結果性がない[3]。これを援用すれば、「を」の経路用法における「を」格名詞句は、動作の過程においてその作用を受けるもの（(1)(2)(3)(5)参照）ということができる。

続いて、「で」と比較する。

(9)　夫は鉄鋼工場で働いた。

（PB53_00101 1100 太田康男『海のむこうのヒロシマ・ナガサキ』）

(9)のような「で」の、動作の行われる場所を表す用法では、動作実現のさなか、主体である「夫」は「で」が表す「鉄鋼工場」を占めている。既に見た、「（場所）を」と共起す

---

[2] 川野（2006）によれば「太郎が2階に上がっている」は結果継続を表す（p.283）。

[3] 川野（2006）はアスペクト特性として結果性を持たないのは、「を」格を取る全ての動詞の特徴であるとする（p.287）。

る動作の場合（例「階段をあがる」）は、主体が当該空間を逐次的に占めつつ移動することで未接触空間を既接触空間に変えていくさまに叙述の重点があるのに対し、「(場所) で」と共起する動作の場合、「で」が表す空間は動作が展開する背景であり、主体が当該空間を対象に取り、その空間を逐次的に占めていくさまに叙述の重点がある訳ではない。「(場所) で」と共起する動作は、当該空間を背景にして展開する主体の様態に叙述の重点がある。

「を」の経路用法における「空間を占めること」についての特徴は、以下の通りである。

① 空間の占め方は動的である。

② 動作の過程において空間を占める。

③ 主体が当該空間を対象に取った状態でその空間を逐次的に占めていくさまを表す。
（対象に取るとは、未接触空間を既接触空間に逐次的に変えていく作用の目標に据えるという意味である。）

4 非情物が主語に立つ例について

4-1 非情物が主語に立つ例の対象性

「を」の経路用法では、次のように非情物も主語に立つ。

(10) わけがわからなくなって、私は缶を縁側に投げ捨てた。缶はゴロゴロと鈍い音をたてて縁側を転がり、茶の間の障子の桟にぶつかって止まった。

(PB29_00054 60420 小池真理子『夢のかたみ』)

(11) 砂箱の下に敷いたシートを、すべり台のように勾配をもたせて砂箱の前に張ればよいのです。砂はシートをすべって元の砂箱に戻ってきます。

(LBr5_00070 11830 平井工『一人でできる特許の取り方・活かし方』)

次例の「体」も非情物相当のものと見なせる。

(12) （人が動物用の罠に捕まる様子）「おや、足に何かひっかかったかな」と思うまもなく足をすくわれ、体がぽーんと勢いよく宙を舞った。

(PB59_00206 12660 平川陽一『水滸伝』)

このような例の「を」格名詞句も対象性を有するだろうか。(10)～(12)では、主体である「缶」「砂」「体」が移動することで、それぞれ「縁側」「シート」「宙」を逐次的に占めていく意味が読み取れる。したがって、非情物が主体となる「を」の経路用法も 3-2 節**(ウ)**に示した作用性及び対象性を有する。

4-2 離点用法との違い

このように「を」の経路用法では、非情物が主体に問題なく立つのであるが、この点において次に挙げる「を」の離点用法とは若干異なる。佐藤（2024）によれば、「を」の離点用法では、当該動作に「自律性」即ち「主体に内在する規律に従って動く性質」(p. 18) があると見なせることが必要である。

(13) その一部（佐藤 2024 注、黒潮の一部）は日本海に入るが、大部分は本州の南岸を洗って、関東の東端の銚子から陸岸を離れ、北太平洋を東へ進む。

（佐藤 2024:14。茂在寅男『船と古代日本』）

(14)　涙が目（*を/から）こぼれた。　（三宅 1995:68）

佐藤(2024)は(13)の「離れる」は、主体となる潮の流れの自律的動作と見なせるが(p. 18)、(14)の「こぼれる」はその実現を「外的要因に依存し、かつ自然発生的（＝自然とそうなる）現象」(p. 19) のため、自律性を有すると見なせないとする。

離点用法には、このような制約が見られるのであるが、経路用法には同様の制約は見られない。先に挙げた(10)～(12)で「転がる」「すべる」「舞う」は、それぞれ人が缶を投げる、人がシートに勾配をもたせる、罠が体を引き上げるという外的要因をきっかけとし、自然発生する現象と捉えられるため、主体の自律性によって実現したとはいい難い。

離点用法と経路用法におけるこの違いは何に起因するのだろうか。佐藤（2024）によれば、離点用法に自律性が必要なのは、それがあることによって当該動作実現時に主体は「客体・対象の扱いをいかにするかを選択」(p. 19) できる存在となり、当該の場所を「場所との接触を断とうとする作用の対象」(同頁) と捉えられ、それによって離点用法が「対象用法（引用者注、本研究対格用法に同じ）と連続するが故」(p. 21) である。

一方、経路用法では当該動作に自律性がなくても、前述のように対象性を有するのはなぜか。離点用法で仮に自律性がなければ、離点は移動の始点であっても対象とは見なし難く、したがって、「から」で示されるが「を」は不可となる（(14)参照)。離点が移動の始点であると同時にそれが動作･作用の対象となるには、自律的選択による空間の離脱が必要ということだと解される。他方、経路用法では、主体に移動する能力がある、もしくは主体が自然に移動できる状況にあれば、3-2 節(**ウ**)に示した作用性及び対象性を持ち得る。そのため、経路用法では対象性の獲得に動作の自律性は必ずしも要しないのである。

離点用法に自律性が必要で、経路用法に自律性が必ずしも要しないのは、畢竟当該名詞句を対象と見なせるかどうかに起因する。自律性の要不要という制約の存在理由が対象性と深く関わるという事実は、「を」の経路用法に 3-2 節(**イ**)のような対象性を認めることの妥当性を示すと考える。

5　対格、離点、経路、三用法の関係

対格用法、離点用法、経路用法はいずれも「を」格名詞句が対象性を有する点で共通することになる。対象性を有するということは、当該動作が或る作用を表し、「を」格名詞句がその目標になることを意味するが、これは、当該動作が他動性を有することでもある。

この他動性は用法によって強弱がある。最も他動性が強いのは、(全てではないが) 対象そのものに物理的変化をもたらし得る対格用法である（例、木を切る)。そして、離点用法がこれに続く。離点用法では対象に物理的変化は生じない。が、対象の扱い方を自律的選択によって決することは、その分、自律性を必ずしも要しない経路用法よりも他動性が強い。三用法のうち、最も他動性が弱いのが経路用法である。経路用法も離点用法と同じく対象に物理的変化は生じない。経路用法に自律性は必ずしも要しない分、離点用法よりも

他動性は弱まる。以上をまとめると、次のようになる。

○　三用法の他動性の強さ

（強い）対格用法：対象の物理的変化あり得る

（中間）離点用法：対象の物理的変化なし、要自律性

（弱い）経路用法：対象の物理的変化なし、自律性不要

3-2 節(**ウ**)に述べたように、「を」の経路用法は、対象への作用性、即ち、他動性を有する。ただし、対象に物理的変化を与えずに主体が移動するさまを表すことからすれば、同用法は、自動性も同時に有する。つまり、「を」の経路用法は<u>他動性と自動性を兼ね備えた用法</u>と位置づけることができる。

6　おわりに

本研究の意義・独自性とでも呼べそうなものを挙げよう。

① 経路用法の「を」格名詞句がいかなる意味で対象といえるのか詳述した点。

② 「を」の経路用法における動作の方向性と、「を」格名詞句の対象性との関連を説明した点。

③ 「を」の経路用法が自律性を必ずしも要しないことについて、当該名詞句を対象と見なせるかという観点により、その理由を説明した点。

本研究を基に状況用法、時間用法を考察し、延いては「を」の各用法の統一的説明の足掛かりとしたい。

【調査資料】

国立国語研究所『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(中納言 2.7.1 データバージョン 2021.03)

【引用文献】

奥田靖雄（1983)「を格の名詞と動詞とのくみあわせ」『日本語文法・連語論（資料編)』むぎ書房

川野靖子（2006)「移動動詞と共起するヲ格句とニ格句――結果性と限界性による動詞の分類と格体制の記述――」『現代日本語文法　現象と理論のインタラクション』ひつじ書房

川端善明（1986)「格と格助詞とその組織」『論集　日本語研究（一）現代編』明治書院

国広哲弥（1967)『構造的意味論――日英両語対象研究――』三省堂

佐藤友哉（2024)「格助詞『を』の離点用法の成立条件と格表示の仕組み――動詞の他動性の観点から――」『清泉女学院短期大学研究紀要』第 42 号　清泉女学院短期大学

柴谷方良（1978)『日本語の分析』大修館書店

謝新平（2010)「プロトタイプ論による日本語の移動構文の他動性に関する解釈――中国語訳との比較アプローチ――」『比較文化研究』92 号　日本比較文化学会

杉本武（1995)「移動格の『を』について」『日本語研究』15 巻 東京都立大学

田中茂範（1997)「空間表現の意味・機能」『日英語比較選書 6　空間と移動の表現』研究社出版

三宅知宏（1995)「ヲとカラ――起点の格標示――」『日本語類義表現の文法（上)』くろしお出版

姚艶玲（2007)「日本語のヲ格名詞句を伴う自動詞構文の成立条件――認知言語学的観点からのアプローチ――」『日本語文法』7 巻 1 号　日本語文法学会

副用語の歴史的研究の現在

川瀬卓（白百合女子大学）
林禔映（全南大学）
川村祐斗（愛知淑徳大学）
川島拓馬（富山大学）

全体趣旨

本パネルセッションは、「副詞」「接続詞」「感動詞」といった、いわゆる副用語に注目し、文法変化を考えるうえで副用語がもたらす知見とその可能性について示すことを目的とする。

副詞、接続詞、感動詞は、自立的な語でありながら、語彙的・内容的な意味を表すものではなく、文法的・機能的な意味を表す一群（小柳（2018）の言う「自立的機能語」）である。副用語（副用言）というカテゴリーは、文の骨組みとなる自用語（体言・用言）に対して、文の骨組みにならない副次的依存的な類として設定されたものであるが（工藤 2000）、副用語を自立的機能語と捉えた場合、助詞や文末の文法形式を見るのとは、また異なった様々な文法的問題が立ち上がってくる。渡辺実が「いわゆる副用語の扱いに成功しない限り、構文論も意義論も、やり易い所だけを論じているにすぎない（中略）いつかは副用語の問題と対決しないと、構文論も意義論も完いものとは言えまい」（渡辺(編)1983：475）と述べるように、研究上の困難さはあるが、その重要性は言を俟たない。本パネルセッションでは、歴史的研究の立場から、副用語にとりくむことが日本語文法研究にどのような実りをもたらすのかを考えたい。

各発表の概要

川瀬発表「文法史研究としての副詞研究」では、語構成的側面への注目、連体修飾構造という統語的環境への注目、感動詞化における語用論的要因への注目という 3 つの観点をとりあげ、文法変化の問題を考えるうえで副詞が様々な知見をもたらしうるものであることを示す。**林発表「評価を表す陳述副詞の史的展開」**では、評価を表す陳述副詞へと変化した事例を複数とりあげ、その史的展開に見られる意味変化、形態・統語変化の諸相を示す。**川村発表「接続詞における対人的意味の獲得―サレバを事例として―」**では、いわゆる接続詞が対人的意味を獲得する変化の事例としてサレバを取り上げ、本文種別と発話における出現位置に注目して、歴史的変遷を記述する。**川島発表「近代語における接続詞の成立と多様な展開」**では、近代語における接続詞の多様なあり方を捉えることを目的に、新たな接続詞の成立、および文章ジャンルによる使用傾向に関わる論点を提示する。

これらの発表を通して多様な論点を提示するとともに、副詞、接続詞、感動詞に関する歴史的研究、ひいては日本語文法史研究のさらなる活発化に資するような議論を会場の方々と行いたい。

文法史研究としての副詞研究

川瀬卓（白百合女子大学）
skawase@shirayuri.ac.jp

1. はじめに

本発表の目的

- 文法変化の問題を考えるうえで副詞が様々な知見をもたらしうるものであることを示す。
- また、あわせて本パネルセッションにおける各発表との関係を示す。

副詞と文法変化

- 形容詞・形容動詞と同質（あるいは連続的）な内容的意味を表す情態副詞ではなく、文法的意味を表す程度副詞、陳述副詞に関わる歴史変化が中心的な課題となる。
  - ある言語形式がどのように程度副詞に変化するのか、陳述副詞に変化するのか。
  - それらの文法的意味がどのように変化するのか。副詞内部での変化だけでなく、副詞から感動詞への変化なども注目される。
- 本発表では、副詞の文法変化を捉えるうえで必要・有効な観点をいくつかとりあげる。
  - 2 節では形態と意味変化の関係、副詞の構成要素といった語構成的な側面に注目する。
  - 3 節では副詞の文法変化が起きる統語的環境として連体修飾構造に注目する。
  - 4 節では副詞の感動詞化における語用論的要因に注目する。

  2 節と 3 節は林発表と関連する。4 節では語用論的観点だけでなく、出現位置という統語的条件にも言及するが、その点、川村発表、川島発表（前半）と関連する。
  なお、2 節の一部と 3 節は川瀬（2024b）の一部を元に加筆修正を加えたものである。

2. 語構成的な観点

形態と意味変化―語尾「に」「と」の脱落―

- 副詞には決まった形はないものの、副詞らしい形として「―に／と」や重複形がある。早くから、意味・機能の変化に伴って、語尾「に」「と」が脱落する傾向が指摘されてきたが（濱田 1955）、この点はまだ追求すべき余地が残されている。例えば、「に」の有無の違いという点に関しても、「たしか（に）」「多分（に）」などは「に」の有無によって意味用法が異なるが、「相当（に）」「大変（に）」などの「に」の有無は（おそらく）文体的な違いであるし、「だいぶ」「たいそう」「随分」などは「に」が伴わない形のみになっている。また、漢語副詞については、鳴海（2014）が、近世までの漢語副詞においてはむしろ φ が基本である可能性を指摘している点や、「自然」のように「自然に」→「自然 φ」→「自然と」のような経緯をたどったものもあることなどを指摘しており、一概に「―に／と」が基本とは言いきれないことにも注意が必要である。

構成要素への着目

- 副詞には複数の要素が結合して出来上がっているものも多い。それらの構成要素に注目し、

構成要素自体の変遷との関連も見すえつつ考察することで、さまざまな事象との関連において、個々の副詞の歴史も位置づけることが可能になるだろう。例えば、現代語には、古代語で生産的であった指示副詞を素材とするものが数多く存在する。「とかく」「とにかく」「ともかく（も）」「とても」などの「と～かく～」の表現に由来するもの、「さぞ」「さも」「さほど」など「さ」に由来するものなどがそれである。これらは傾向を表す表現と結びつくもの（「とかく」）、談話の展開に関わるもの（「とにかく」「ともかく」）、認識的なモダリティと親和性の高いもの（「さぞ」）、比喩との結びつきが強いもの（「さも」）、否定と呼応するもの（「さほど」）など、それぞれに個性の異なる文法的意味を表す副詞となっている。これらは、岡﨑（2010）で明らかにされたような指示詞体系の変遷（「かく」「さ」の 2 系列から「こ」「そ」「あ」の 3 体系へ）の中で、複合的な形で副詞化したものが残存、独自に発達したものであると考えられる。元の素材である“親”表現との関係において、どのように発生し、それがどのように慣用化され、固定化し、あるいは歴史的に展開していったのかといったことが課題となる。

ここでは指示副詞についてのみ述べたが、「さぞ」「さも」「さほど」の後部要素である助詞、形式名詞も視野に入れる必要がある。

3. 連体修飾構造と文法変化

- 連体修飾は副詞の例外的現象のように扱われてきたが、文法変化を考えるうえで重要な統語的環境である。

連体修飾構造における量副詞化

- 副詞は連用修飾するだけでなく、「少しの間」「かなりの人だかり」「全くの嘘」など連体修飾することがよく知られている。とくに量を表す副詞は連体修飾が可能な場合が多い。小柳（2019）は連用修飾機能を持たない名詞が副詞化する統語的環境の一つとして、「X＋の」という連体修飾句をあげる。古典語の名詞「露」は「つゆ（名詞）＋の＋名詞」という構造（例「露の命」）において「つゆ（露）」にわずかな量という量的意味が看取され、「つゆ（副詞）＋の＋名詞」のように量副詞と読み替えられて、連体修飾から離れた連用修飾語になったという。量的意味から程度的意味へ（量副詞から程度副詞へ）という意味変化の類型については鳴海（2015）で論じられているが、連体修飾構造という統語的環境に注目することで、量的意味の発生や、その後の程度的意味の発生についてより理解が深まると思われる。

「相当」の場合

- 一例として「相当」の副詞化を見てみる。鳴海（2015）によれば、〈対応する〉といった意味を表す動詞「相当す」の漢字文献以外の例は中世前期から見られ、中世末期以降に、量を表すと思われる例として「相当の」「相当に」が現れる。また、近代以降、「相当の」の多用、「相当に」の増加、語尾「に」のない「相当 φ」の例の出現が見られ、意味的には量ではなく程度を表す例も現れるようになるという。統語的側面に注目すると、量的意味を表すものとしてまず「相当の」という連体修飾から量的意味が看取される点が注意される。鳴海の調査における「相当の」「相当に」の初出例はそれぞれ以下の例である。

(1) a. しかりといへども、たゞ一つのわづかなる御をんにたいしても、<u>さうたうの</u>御れい

を申たつとみ奉る事かなはずとわきまへ、さんげし奉る也（こんてむつすむん地［1610］巻 3・鳴海 2015：145）

b. ハテ、俺が内に居れば、家賃から米代木代、相当に銭をやらにゃ掛ける者が無い。（韓人漢文手管始［1789］・鳴海 2015：145）

ただし、全ての漢語が必ず連体修飾経由で連用修飾語になるわけではない。鳴海（2015）によれば、中古から見られる「随分」の場合は、原義の〈分相応〉から離れた量的意味を表すものとして「随分に」のほうがやや先に見られるようである。

程度量的意味のタイプ（量・時間量・程度）と統語的位置

- 深津（2022）は様態を表す「ちっと」「そっと」の程度副詞化において、元の語彙的意味が関連して、「量」「時間量」「程度」の獲得の順序と、統語的性質の獲得の順序が相関することを示している。やや簡略化してまとめると以下の通り（実際は述語での使用などもあるが省略する）。
  - 動作が軽度であることを表す様態副詞「ちっと」は、その意味に含意される「程度」が前景化し、程度副詞化する。その後、「量」を表すようになり、さらに「ちっと＋の＋名詞（時間名詞）」という連体修飾句でも用いられるようになって「時間量」も表すようになる。
  - 動きや変化が素早いことを表す様態副詞「そっと」は、まず「そっと＋の＋時間名詞」において時間量を表すようになり、その統語的環境の中でさらに量や程度も表すようになった後に、程度的意味で連用修飾語としても使われるようになる。

副詞と連体修飾の問題

- 連体修飾という環境において、量的意味との密接な関係があることを示した。一方で、もう一つ注意されるのは、連体修飾で用いられる副詞は量副詞には限られないということである。BCCWJ を資料として副詞の連体修飾用法を調査した野田（2017）では、「程度・量の副詞」が多いが、「モダリティの副詞」（「せっかく」「もちろん」「まさか」など）、「評価の副詞」（「当然」「さすが」「あいにく」）にも連体での使用が見られることが示されている（ここでの副詞の種類名は野田が示しているものである）。これらの副詞の連体修飾についても視野に入れる必要があるだろう。
- 連体修飾構造への注目の重要性は、副助詞を中心に文法変化が起こる環境を考察する宮地（2020）でも示されている。小柳（2019）が「副詞の入り口」と述べたように、連体修飾構造は名詞の世界と副詞の世界を行き来する場所として、文法変化を考える際に注目すべき統語的環境である。

4. 文法変化における語用論的要因—副詞の感動詞化—

- 「陳述副詞の中でも、文相当のものを導き出すような性質を持つものは、単独で文を成すような性質をも、比較的容易に獲得する。「どうぞ。」などは、「どうぞ、お入り下さい」の省略を言うより、すでに一つの感動詞と認めてよいかも知れない。特にこのような応接・挨拶の言葉は高速度に慣用化され、応答詞に近接し感動詞にまぎれ込む」（渡辺 1980：201）

「ちょっと」の感動詞化

- 深津（2018）は、量・程度の小ささから派生して行為指示における配慮を示す副詞「ちょ

っと」が、聞き手の注意を引く機能を持つ呼びかけの感動詞になることを論じている。(2a)のように行為指示における配慮を示す副詞「ちょっと」は、聞き手への配慮のために(2b,c)のように行為指示が表示されず、「ちょっと」自体が行為指示を果たす語用論的使用（「ちょっと＋φ」）を経て、(2d)のような呼びかけの感動詞になったとする。

(2) a. ちよつと呼うで来てくだされ（冥途の飛脚［1711］下・深津 2018：221）

b. 「忝い御情此上はあこぎながら、とてもの事に今爰で、ちよつと／＼」とすがりしを（堀川波鼓［1707］上・深津 2018b：223）

c. 「急に御目ニ懸（かゝ）りたい。ちよつと／＼」（聞上手［1773］12 オ・深津 2018：229）

d. 夏「一寸（ちよつと）小金さん何だへ来たのかへ」（春色恋廼染分解［1860-1862］初編 34 ウ・深津 2018：231）

深津は「ちょっと」の感動詞化の意味的条件、統語的条件を次のように示している。まず意味的には、「ちょっと＋φ」の中でも、相手を呼び出す場面における(2c)のようなもの（〈呼び出し〉タイプ）は「呼ぶ」という点で呼びかけと意味的に連続する。次に統語的には、(2b,c)の出現位置は発話末であるが、とくに(2c)のような〈呼び出し〉タイプにおいては「ちょっと」が文として独立した形で一語文的に現れ、それは発話末である一方で文レベルでは頭に位置していることにもなる点で、呼びかけの感動詞に近い。これらの意味的、統語的な特徴が、発話冒頭で現れる呼びかけの感動詞「ちょっと」の成立につながったというわけである。

「どうぞ」の感動詞化（川瀬 2024a）

- 「どうぞ」も「どうぞお座りください」のような〈勧め〉を表す副詞として使われるだけでなく、「どうぞ」一語のみで応接場面における促し（部屋へ通す、椅子に座ってもらうなど）や、聞き手の許可願いに対して是とする応答をするなどの感動詞的使用が一般化している。「どうぞ」は近現代において行為指示の内容の変化（話し手利益の行為指示から聞き手利益の行為指示へ）が生じるが、聞き手利益の行為指示への変化と連動して、単独で一語文として発話される感動詞的使用が増加する。「どうぞ」の聞き手利益化は来客の応対のように、話し手・聞き手双方ともに相手への高い配慮が求められる場面で進んだと考えられるが、そうした場合には明示的な行為の指定を避けて、(3a)のように述語が非表示となることもしばしばある。こうした使用から(3b)のような感動詞的用法が発生し、定型的な表現の一つとして定着した。

(3) a. 由「イエナニ今日（こんち）はモウ大きによろしうございます。御遠慮なさいませんで、どうぞこちらへ。（春色梅児誉美［1832-1833］3 編巻 8・川瀬 2024a：79）

b. 「お入りなさい、—どなた」と、声をかけた。「居らしたのね」扉をあけて現れたのは、高崎であつた。「まあ珍しいこと！どうぞ」（宮本百合子・伸子・60N 伸子 1924_12008,7900・川瀬 2024a：79-80）

「どうも」の感動詞化（川瀬 2023：第 8 章）

- 行為指示以外においても感動詞化のきっかけとなる述語非表示は生じうる。たとえば、感謝・謝罪の際の副詞としてだけでなく、出会いの挨拶としても用いられる「どうも」がある。「どうも」は、話し手の望ましくない事態が発生したことを強調的に示すものだったところから、(4a)のように文脈的に、相手への恐縮という対人的意味を表すものが現れ、さらに(4b)のように配慮を示すために述語非表示の例もしばしば見られるようになる。恐縮は

(4b)のように挨拶においてなされることも多い。そこから(4c)のように、恐縮という意味が薄れた単なる挨拶としての感動詞的使用もなされるようになったと思われる。

(4) a. きぬ「ナニ一人で帰りますから。決して送りにはおよびません。併(しかし)折角の吾儕(わたし)が心。お役にはたゝずとも。この二品(ふたしな)は何様(どう)なりと。宜(よい)やうにして下さいましト いふを止めて　幸「どうも夫(それ)じやァ。吾儕(わたし)の気が済ない（毬唄三人娘［1862-1865］初編巻中・川瀬 2023：160）

b. Senjitsu wa makoto ni o kamai môshimasen' dé dômo haya. （会話篇［1873］16・6・川瀬 2023：162）

c. （倉）然り。まづ蚊屋のなかへはいりたまへ（継）ヤアどうも。今度ばかりは我輩も失敗したぞ。君達が来ないと。実に究迫を究める処だつた（当世書生気質［1885-1886］第 7 回・川瀬 2023：164）

副詞の感動詞化の契機

- 副詞が感動詞化する際の一つのパターンとして、聞き手への配慮という語用論的要因による述語非表示がなされ、そこからさらに一語文的使用が見られるようになり、感動詞として定着するという流れがあげられる。もちろん、個々の形式ごとの事情の異なりも考慮する必要がある。「どうぞ」の場合は、客への応対という場面の特性も関与している。これは出会いの挨拶として用いられているとも言え、「どうも」と合わせて、挨拶における感動詞化の例と言えるだろう。
- 深津（2018）においては、出現位置（発話の中での位置）についても明示的に議論が展開されていた。文法変化を把握する際の、出現位置へ注目することの有効性については、接続詞（的表現）から応答表現への変化を論じる川村発表や、接続詞の成立について論じる川島発表などでも示される。

使用テキスト・コーパスは各文献が使用しているものに基づく。

参考文献

岡﨑友子（2010）『日本語指示詞の歴史的研究』ひつじ書房／川瀬卓（2023）『副詞から見た日本語文法史』ひつじ書房／川瀬卓（2024a）「副詞「どうぞ」の歴史変化—変化の語用論的要因に注目して—」『日本語文法』24(1)／川瀬卓（2024b）「【テーマ解説】副詞」青木博史・小柳智一・高山善行(編)『日本語文法史研究 7』ひつじ書房／工藤浩（2000）「副詞と文の陳述的なタイプ」森山卓郎・仁田義雄・工藤浩『日本語の文法 3 モダリティ』岩波書店／小柳智一（2018）『文法変化の研究』くろしお出版／小柳智一（2019）「副詞の入り口—副詞と副詞化の条件—」森雄一・西村義樹・長谷川明香(編)『認知言語学を拓く』くろしお出版／鳴海伸一（2014）「漢語形容動詞・副詞の品詞性と用法変化—通時的観点からみた近現代の特徴—」新野直哉(編)『近現代日本語における新語・新用法の研究』国立国語研究所／鳴海伸一（2015）『日本語における漢語の変容の研究—副詞化を中心として—』ひつじ書房／野田春美（2017）「副詞＋「の」による名詞修飾の諸相—書き言葉コーパス調査に基づいて—」森山卓郎・三宅知宏(編)『語彙論的統語論の新展開』くろしお出版／濱田敦（1955）「国語副詞の史的研究(2)　あながちに」『人文研究』6(5)（濱田・井手・塚原（1991）所収）／濱田敦・井手至・塚原鉄雄（1991）『国語副詞の史的研究』新典社（増補版、2003 年）／深津周太（2018）「副詞「ちょっと」の感動詞化—行為指示文脈における用法を契機として—」高田博行・小野寺典子・青木博史(編)『歴史語用論の方法』ひつじ書房／深津周太（2022）「様態副詞の程度副詞化—「ちっと／そっと」の対照から—」『静言論叢』5／宮地朝子（2020）「副助詞類の史的展開をどうみるか—これからの文法史研究—」『日本語文法』20(2)／渡辺実（1980）「感動詞」国語学会(編)『国語学大辞典』東京堂出版／渡辺実(編)（1983）『副用語の研究』明治書院

【付記】　本研究は JSPS 科研費（JP19K13198）の成果の一部である。

評価を表す陳述副詞の史的展開[1]

林禔映（全南大学(韓国)）

1. はじめに

評価[2]を表す陳述副詞にはアイニク、サイワイのようないわゆる「評価副詞」(工藤1997・2016)と呼ばれるものと、サスガ(ニ・ハ)、セッカクのような「叙法副詞」(同2000・2016)と呼ばれるものがある。前者は語彙的に評価性・情意性を有しているが、後者は意味変化を経て評価を表すようになったものが多い。本発表では歴史的に評価を表さないものが評価を表すようになった語類を主な対象として、評価を表す陳述副詞へ変化する過程に見られる意味的、形態・統語的特徴を考察する。

2. 評価を表す陳述副詞化の特徴

2.1 意味変化

副詞の形成には名詞や動詞など他品詞からの転成が多い(工藤2000)。評価を表す陳述副詞の出自も名詞出自をもつもの(イッソ(←一双)、ショセン(←所詮)、セッカク(←折角))、動詞出自をもつもの(セメテ(←せむ(迫・責))、複合構成要素から成り立ったもの(「サスガ(ニ・ハ)(←さ＋す＋がに)」、「ドウセ(←どう＋せ(よ・い)」)」などさまざまである。このような出自をもつ個々の語は全体の傾向として具体的な事物や動作の様態・様子を表す意味から、「望ましい、好ましい」か「仕方がない、うまく行かない」(プラスかマイナス)といった評価を表す意味へ変化している。

表1　評価を表す陳述副詞類の意味展開(概略)

	出自		原義	意味の展開		
イッソ	名詞	一双	対をなす二つ、二つ一組	まとめて、一度に	→	〈マイナス評価〉 やむを得ず選択することへの自暴自棄的な気持ち
ショセン	名詞	所詮	経典によって説き明かされる内容	詮ずる所、結局	→	〈マイナス評価〉 最終的には好ましくない結果になることへの諦めの気持ち
セッカク	名詞	折角	角を折る、論争で相手を負かす	力・心を尽くして	→	〈プラス評価〉 価値や意義のある、好ましいこと
セメテ	動詞	せむ(迫・責)	対象に間隔を置かず差し迫る	つとめて、しいて	→	〈マイナス評価〉 最小限の範囲内において願うしかない嘆きの気持ち
サスガ(ニ・ハ)	複合構成	さ＋す＋がに	そのようにあるほどに	そう言っても(やはり)	→	〈プラス評価〉 そうなるのも順当だと認める気持ち
ドウセ	複合構成	どう＋せよ	どのようにしても、どっちみち		→	〈マイナス評価〉 話し手の意志や意図とは無関係に成り立ってしまうことへの諦めの気持ち

表 1 のように具体的な意味が希薄になり、抽象的な意味(評価性)を獲得する意味変化の一般的な傾向が見られる。しかし、個々の語における意味変化の過程には①語構成要素や②文脈上読み取れる意味(構文的な意味)、③類似表現との関係などからの影響によってさまざまな経緯を辿っている。例えば、①と③の事例にドウセがある。ドウセは不定語の「どう」とサ変動詞「す」の命令形の「せよ(せい)」が組み合わさった「どうせよ(せい)」

[1] 本発表の内容は主に林禔映(2021a, 2021b)に基づき、大幅に加筆修正したものである。

[2] 本発表では、評価という意味機能を「望ましさの観点から文の叙述内容・当該事態について話し手の価値判断や感情面の注釈を示すもの」と考える。

を出自とする。その語構成に含まれる命令形が本来の行為実現の積極的要求の意を持たず、放任の意味を表す(小柳 2018、北﨑 2023)[3]ことから、ドウセが副詞として用いられた当初（近世前期）、どのような場合であっても当該事態の成立に影響がないことを表す「どのようにしても、いずれにせよ、どっちみち(結局成立する)」のような意味で用いられる(＝1a)。放任の意味を基盤としたドウセの意味は、話し手の意志や意図に関係なく事態が成り立つこと、換言すれば、その事態はどうなっても動かしがたい事態であることを表すなかで、場合によってはその事態が話し手にとって不本意なもの、望ましくないものに捉えられることもある。このような例を経て、近世後期以降、ドウセは当該事態の成立に対する否定的評価（「どうしようもない、仕方がない」）を表すようになり、(1b,c)のように当該事態の成立を確信する述べ方や(語彙的、文法的)否定述語と共起する例に偏る傾向を見せる。

(1)a. お前お一人にあのお心遣ひは、どふせ此世ばかりの終の縁ではござりませぬ。
（傾城禁短気・1711年・p.344）

b. 文「十八さ。おめへは」縫「主よりやア一ツうへさ」文「十九か」縫「アイそれだものヲ。どふせ叶ねへ事た」（深川新話・1779年・p.224・52-洒落1779_01025）

c. 遊女のくま「御存の通りわが儘ものだから、どふせ男の気に入る事ちやァありませんは」
（春告鳥・1836-1837年・p.508）

関連して、近世期に多用されるドウデはドウセと同じく不定語を語構成要素として有し、同じ意味の展開を辿っているが、ドウデとドウセの間には地域による使用の偏りがあったことが知られる[4]。また、近世において不定語を語構成要素にもつ副詞ドウモ・ナニモは、ドウセとの間で「不定語＋α」の形が「反復形→単独形」「否定述語との共起増加」という類似した形態・統語上の特徴を獲得している。しかし、副詞ドウモ・ナニモは推定や非存在を表すことで事態の成立をどう認識するかを表す意味を持つのに対して(川瀬2023)、副詞ドウセは成立した（とみなす）事態について否定的評価の意味を持つことから、意味の面では異なるといえる。その違いの根源には前述した通り、ドウセが命令形の逆接仮定条件形式への変化と関連していることが、その意味の展開(範囲)に影響を与えていると考えられる。他に、不定語を語構成要素に含まないが、ドウセと類似した変化を辿るものとして、「とてもかくても」から成立するトテモがある。

(2)a. 山姥が山また山に山巡りハハハ面白い、どうでもかうで吾妻殿を奥へ連れてと、引き立つる。（山崎与次兵衛寿の門松・1718年・p.502・51-近松1718_10001）

b. イヤ、夫ハ病による、或ハつき物か、外から身入等の病なれハ、加持きとうでのく事も有ふが、五臓から損じて出る病き、どうで治る道理がない。
（噺本・慶山新製曲雑話・1800年・p.310）

c.「きのふ、お庭拝見にいたハい。ドウダ。とんだことよ。泉水つき山、どふもかふもいへ

[3] 小柳(2018)と北﨑(2023)では対人化の反例として、命令形が本来の命令の意を失って(逆接仮定または順接仮定)条件形式的に用いられるようになる変化が取り上げられている。

[4] 近代以降はドウセが共通語として広く使われ、ドウデは明治・大正期にその例が数例見られるが、昭和期以降は例が見られなくなり、現在の東京語（共通語）では用いられていない。

ぬ。おく庭の亭で一盃したが、此庭が又ドウモいへぬ」（噺本・仕形噺・1773年・p.292）

d. 女君「…ここには何もかもな賜びそ。君達にあまねく奉らせたまへ」
（落窪物語・986年・p.286・20-落窪0986_00004）

e. …葵のいと小さき。何も何も、小さきものは、みなうつくし。
（枕草子・1001年・p.271・20-枕草1001_00145, 川瀬2023：51）

f. 千太郎「何もそのやうにあんじることはない。いふて見たがよひ」
（箱まくら・1822年・p.138・52-洒落1820_01048, 川瀬2023：53）

g. 豊なるたづき求め顔に、ねぢけがましきに、ながらへ侍らば、とてもかくても同じ事なるべけれども、（浜松中納言物語・1062年頃・p.300）

h. 日本国に平家の庄園ならぬ所やある。とてものがれざらんものゆゑに、
（平家物語・1250年・p.250・30-平家1250_03017）

次に、②の事例としてイッソがある。イッソは「対をなす二つ」あるいは「二つ一組」という意を表す漢語「一双（一雙）」を語源とし、中世後期以降、(3a)「に」を伴った「いつさうに」の形で「（両者を）まとめて、一度に」の意の様態副詞として用いられはじめた[5]。副詞用法の発生当初からイッソが用いられる文の構造は、「Pであるなら(Pではなく、その代わりに)、イッソQ」と捉えられ、比較選択の副詞「むしろ」と類似したものであった。近世になると、イッソは様態的意味は薄れていくものの、(3b,c)のように中世後期と同様の構文環境で用いられ、さらにイッソの後続内容を選ぶしかない、という否定的な気持ち（自暴自棄や諦めなど）を表す例に偏り、現在の使われ方に至っている。

(3)a. 鬼「ごんご道断にくひ事をいひをる、身共がままにならずは、いつさうにふたりながらくはふ」（虎明本狂言集･鬼の継子・1642年･p.489・40-虎明1642_04007）

b. [食べてはいけない魚を勧められたお坊さんが]あまりつよくしんしやくいたしたらバ、またじやうがこわいとて、人にそしらるゝであらふほどに、人にそしられうよりハ、いつそのこと[6]くハふといふた。（噺本・初音草噺大鑑・1698 年・p.150）

c. 徳兵衛「子はありながらその甲斐なく、無縁の手にかからうよりいつそ行き倒れの釈迦荷ひがましでおぢやるわ」（女殺油地獄･1721 年・p.244・51-近松 1721_05003）

なお、小柳(2019：314-317)は(程度、陳述)副詞化する際の意味的条件として様相性あるいは量性を含意する、または推意させることを指摘しており、陳述副詞化する語類に注目すると、例えば「決して」は「確実性・決定性」、「偉い事」は「評価性・情意性」という意味的条件を満たしていると述べている。この副詞化の意味的条件を、本発表の考察対象の語類に直接適用し得るか否か定かではないが、イッソは量性・多様性、セッカクは評価性・情意性を基盤としていると見える。

2.2 構文環境や形態・統語変化

以下、評価を表す陳述副詞化に見られる構文環境や形態・統語的特徴について見ていく。

---

[5] 漢語「一双(一雙)」はイッサウからイッソウ、さらにイッソと音変化している。

[6] イッソノコト（ニ）はイッソを強調した表現とされる（湯澤1954、飛田･浅田1994）。近世後期に見られるイッソノヤケニ、イッソノクサレ（ニ）も同様に捉えられる。

まず、全体的な特徴として、構文的に単文構造ではなく複文構造を取り、(4)のように単文・主節ではなく従属節における出現例に偏るようになる。(4a,d)は単文・主節で使われる例、(4b,c,e)は従属節で使われる例である。また、文内の述語の直前から文の周辺部(特に、文頭)で事態全体の前に位置するようになる出現位置の変化が見られる。

(4)a. ある人→十二三なる子「せつかくならへ、やがて、十月十三日に成ぞ、百はたごくいにつれてゆかふぞ、よくおほえて其時うたへ」
(噺本・整版九行本昨日は今日の物語・1636年・p.168)

b. 又は一歩小判を取出し四五年に折角延しけるかひなしと算用してゐるも有、
(本朝二十不孝・1686年・p.137)

c. 女房→客「せつかく煮やしたから、あがりやし」 (噺本・近目貫・1773年・p.201)

d. 文「十八さ。おめへは」縫「主よりやア一ツうへさ」文「十九か」縫「アイそれだものヲ。どふせ叶ねへ事た」(深川新話・1779年・p.224・52-洒落1779_01025, (1b)の再掲)

e. 中居その「どふせおざしきが明てをりますから、おひとりはこちらにいたしませう」
(深川新話・1779年・p.221・52-洒落1779_01025)

次に、小柳(2019:317-321)は副詞の統語的特徴である連用修飾機能を、もともと有している形容詞連用形や動詞テ形などと異なり、本来的に有していない名詞は、連用修飾機能を獲得する統語的条件として、(ⅰ)「に、と」のような接辞類の添加や重複、(ⅱ)挿入句経由、(ⅲ)「X+の」という連体修飾句経由を挙げている。本発表の名詞出自の語類では(ⅰ)と(ⅲ)のケースが見受けられ、(ⅰ)に関してはイッソは「に」を伴って連用修飾機能を担っている(前掲の(1a))。ただし、ショセン・セッカクはそれ単独で副詞として用いられる。(ⅲ)に関してはセッカクが該当する。(5)のセッカクは「能楽を演じる三日の中で特に苦労や尽力するほどの大事な」という意味を表しており、[[副詞のX]+の]+名詞]に読み取れ、(4a)の連用修飾語化した例に近い。

(5)をよそ、三日に三庭の申楽あらん時は、指寄の一日なんどは、手を貯いて、あいしらいて、三日の中に、殊に折角の日と覚しからん時、よき能の、得手に向きたらんを、眼睛を出してすべし (風姿花伝・1400年頃・p.396)

また、語によっては多義的で複数のタイプにまたがることもあれば、歴史変化によって所属が移行することもある(川瀬2023:5)。例えば、サスガ(ニ・ハ)は接続詞出自の副詞用法から感動詞に近い用法へという変化を辿る。語構成の面でサスガ(ニ・ハ)は「中称の指示副詞「さ」+サ変動詞「す」+程度や様態を表す助詞「がに」」から成り立っており、本来「そのようにあるほどに」という意を持つが、上代から逆接の意を表す接続詞として用いられたシカスガニと歴史的に派生関係にあり、中古から例が見られるサスガ(ニ・ハ)は、使用当初から逆接の接続詞のような意を表す副詞用法で用いられる。その意味は出自の影響から前文の内容を容認しながらも、話し手の想定と対立する当該事態もやはり認めざるを得ないことを表し、「それでも、そうはいうものの、そう言ってもやはり」といった意味で用いられていた(=6a)。形態面ではサスガニの「に」が接辞(活用語尾)となったサスガナリのような形(=6c)や、「に」を伴わないサスガ(=6b)も見られはじめる。中世以降、話し手の想定と適合する当該事態に対して順当だと認める(6d,e,f)のような例が見え、

これが現代語の「さすが(首都だ)！」のようなプラス評価を表す感動詞的用法[7]に拡張していく。このような例ではサスガと「は」を伴うサスガハが多く使われ、近世期にサスガ(ニ・ハ)の語形すべてが揃うようになった。

(6)a. …年ごろわたらひなどもいとわろくなりて、家もこぼれ、使ふ人なども徳ある所にいきつつ、ただふたりすみわたるほどに、さすがに下種にもあらねば、人にやとはれ、使はれもせず、（大和物語・951年・p.375・20-大和0951_00001）

b. 頭の中将「などかまろをまことに近く語らひたまはぬ。さすがにくしと思ひたるにはあらずと知りたるを、…」（枕草子・1001年・p.243・20-枕草1001_00129）

c. 人のほどの心苦しきに、名の朽ちなむはさすがなり。（源氏物語・末摘花・1010年・p.301・20-源氏1010_00006）

d. 大名「国本へのみやげものを、町へいでてかはふと存る、(中略)、かひ物をととのへて、急でくだらふ、さすがみやこにて御ざあるぞ、かりそめにまかり出ても、にぎやかにて、何をかはふ共ままで御ざる」（虎明本狂言集・饅頭・1642年・p.319・40-虎明1642_02030）

e. この方遺恨なき上は心しだいに、師弟の仲、何とぞ挨拶いたしたいと、さすがは武士の神妙さ。（心中万年草・1710年・p.209・51-近松1710_16001）

f. 半兵衛「在所の親の遺恨もなくエエ、さすがぢや、見事に死んだ」（心中宵庚申・1722年・p.473・51-近松1722_21003）

最後に、副詞の主な機能は連用修飾語(以下、連用用法)に立つことであるが、語によっては「の」を伴って連体修飾機能で用いられる場合(以下、連体用法。「さすがのベテラン」「せっかくの休み」)がある[8]。連用用法と連体用法の関連性をめぐって、蓮沼(2012, 2014)は現代語のセッカクの例を取り上げ、両用法における順接関係と逆接関係の分布をBCCWJを使用して調査している。その結果、いずれの用法においても逆接関係の例が順接関係の例より多く使われていると述べた。この指摘に関連して、表2を見ると、セッカクは現代語のような意味的、構文的特徴がほぼ揃ったと見なされる近世を通して、逆接関係の構文環境に多く用いられていることがわかる。歴史的にもセッカクの構文環境(特に、複文の従属節)において、まず近世前期に逆接関係の複文(＝4b)が、その後、近世後期に順接関係（原因・理由）の複文(＝4c)が成立していることと関係している可能性が考えられる。

---

[7] 中世前期までのサスガナリ(中古の(6c))、サスガヂヤ等は当時の副詞用法と同様、「そうは言ってもやはり何々だ」という意味を表していた。感動詞的用法と見なされる例には近世期の(6f)の他に、(ⅰ)「アルチバァシェフが、これからの興味は百姓と私娼に集注されると云ふ意味の事を言つてゐるさうだが、これはさすがだ！と感歎せざるを得なかつた。(太陽1925-11・木村毅「最近の小説に現れた女性(後略)」60M太陽1925_11015)、(ⅱ) 郷子「…行こう、あ、同室の人は一人でよかったんだよね」と、見舞いの品を見せる。将一「うん…さすが」(BCCWJ・PB39_00325・岡田惠和「恋文」2003年)がある。

[8] 他に、「せっかくだけど、せっかくだったのに、せっかくだから」「どうせなら」のように用いられる場合がある。これらは従属節の事態が省略されてできたもので、渡辺（2001）の言う「副用語から自用語化したもの」「圧縮表現」に該当する。これらも主節との意味関係を示すが、それ全体で副詞句として前置き表現に近い用法と見なされる。

表2　セッカクの連用用法と連体用法における順接・逆接の分布

	連用用法						連体用法			
	近世前期上方語		近世後期上方語		近世後期江戸語		近世前期上方語	近世後期上方語	近世後期江戸語	
順接関係	2	7%	4	10%	17	16%			9	45%
逆接関係	25	93%	36	90%	91	84%	1	1	11	55%
計	27		40		108		1	1	20	

＊前件と後件との意味関係が定まらない例は除外した。

また、表2から、連用用法に比べて連体用法においては順接関係の例が逆接関係の例と大差なく用いられていたことが見て取れる。近代のセッカクの例も調査し、現代語の使用傾向に近づいていくのか検討の余地がある。なお、セッカクのようなプラス評価を表す副詞は前述したように逆接関係が順接関係より多いことが確認できたが、それと反対の使用傾向が、マイナス評価を表す副詞に見られるか否かについても追加検証が必要である。

3. おわりに

本発表では、評価を表す陳述副詞の史的展開に見られる意味的、形態・統語的特徴を考察した。今後も、個別の副詞の語史記述とともに、文法史研究としての副詞(化)研究を進めていきたい。その際、単なる個別の現象に見えるものが、実はある一定のまとまりを持った表現類が辿る変化パターンに属する可能性があるため、副詞の共時的かつ通時的分析において関連する事例との比較検討が有効であると思う。また、これまで言及した副詞化という言語現象は、言語変化の一般的な傾向に共通する場合もあれば、日本語独自の特徴といえる場合もある。本発表で示した、日本語における評価を表す陳述副詞化の特徴を対照言語的、通言語的事例に照らし合わせて捉え直すことも試みたい。

【調査・引用資料】○大和物語・落窪物語・枕草子・源氏物語・平家物語・虎明本狂言集・近松世話浄瑠璃・深川新話・箱まくら…『日本語歴史コーパス(CHJ)』(国立国語研究所，中納言 2.7.2 データバージョン 2024.03)，○浜松中納言物語・風姿花伝・傾城禁短気…日本古典文学大系(岩波書店)，○本朝二十不孝 …新編西鶴全集(勉誠出版)，○噺本…噺本大系(東京堂出版)，○春告鳥…日本古典文学全集(小学館)，○太陽…『日本語歴史コーパス 明治・大正編Ⅰ雑誌』(国立国語研究所，中納言 2.7.2 データバージョン 2024.03)，○BCCWJ…「現代日本語書き言葉均衡コーパス」(国立国語研究所，中納言 2.7.2 データバージョン 2021.03)

【参考文献】(紙幅の関係上、注に載せたものは省く) 林禔映(2021a)『日本語副詞の史的研究―評価を表す叙法副詞を中心に―』J&C，ソウル／林禔映(2021b)「近世資料の文体差による叙法副詞の使用実態 ―「サスガ(ニ・ハ)」を例にして―」『日本語教育』98，pp.237-250，韓国日本語教育学会／川瀬卓(2023)『副詞から見た日本語文法史（ひつじ研究叢書(言語編)194巻)』ひつじ書房／北﨑勇帆(2023)「意味変化の方向性」と統語変化の連関」ナロックハイコ・青木博史編『日本語と近隣言語における文法化』pp.291-318，ひつじ書房／工藤浩(1997)「評価成分をめぐって」川端善明・仁田義雄編『日本語文法―体系と方法―』ひつじ書房，pp.55-72／工藤浩(2000)「副詞と文の陳述的なタイプ」森山卓郎・仁田義雄・工藤浩『日本語の文法3 モダリティ』pp.161-234，岩波書店／工藤浩(2016)『副詞と文』ひつじ書房／小柳智一(2018)『文法変化の研究』くろしお出版／小柳智一(2019)「副詞の入り口―副詞と副詞化の条件―」森雄一・西村義樹・長谷川明香編『認知言語学を拓く』pp.305-323,くろしお出版／鳴海伸一（2015）『日本語における漢語の変容の研究―副詞化を中心として―』ひつじ書房／蓮沼昭子(2012)「事態の既定性と「せっかく」構文」『日本語日本文学』22，pp.19-42，創価大学日本語日本文学会／蓮沼昭子(2014)「副詞「せっかく」による構文と意味の統制―コーパスにおける使用実態の観察を通して―」益岡隆志他編『日本語複文構文研究』pp.427-467,ひつじ書房／深津周太(2022)「様態副詞の程度副詞化―「ちっと／そっと」の対照から―」『静言論叢』5，pp.111-124，静岡大学言語学研究会

接続詞における対人的意味の獲得—サレバを事例として—

川村祐斗（愛知淑徳大学）

１．はじめに

近年，歴史語用論などの観点から，副詞が対人的意味（呼びかけ・応答等）を持つ感動詞に変化する現象が注目されるようになってきた。たとえば,「なんと」「ちょっと」の呼びかけの感動詞への変化を扱った深津(2018a, 2018b),「どうも」の対人的使用や「どうぞ」の感動詞的使用に着目した川瀬(2019,2024),「まことに」「いかにも」「なかなか」の応答型感動詞用法の例について記述した林(2018) などがある。一方，いわゆる接続詞[1]が対人的意味を持つ表現に変化する歴史については, サラバやサヨウナラの“別れの挨拶語”化を扱った研究（川村 2021,2024 等）を除けば，あまり見られない。前件・後件をつなぐ働きを持つ接続詞が, そのような統語的特徴を喪失した表現へとどのように変化するのかについては, 事例研究を積み重ね, 変化の特徴を明らかにしていく余地があろう。そこで本発表では，対人的意味を獲得するとされるサレバを事例として，いわゆる接続詞が対人的意味を持つ表現に変化する過程を観察する。

２．問題の所在

サレバはもともと，先行する事態の当然の帰結として後続する事態が起こることを示す，順接確定条件を表していた(1)。

(1) 歌の返し，箱に入れて，返す。（略）とぞありける。<u>されば</u>，帰りいましにけり。（竹取物語，10 世紀初期頃，新編日本古典文学全集（以下，新全集）12p.42，20-竹取 0900_00001,79270）

しかし，時代が下ると，対人的に使われるサレバが一定数見えるようになる(2)。『日本国語大辞典第二版』（以下，日国）の「され-ば」の項目では「相手のことばが思うつぼにはまった時，受けて答える語。さよう。いや。そのことだ。」と説明される。

(2) （大名）「（略）おもしろひ所へいてなぐさミたひが，どこがようあらふずるぞ（太郎冠者）「<u>されハ</u>都の事にてござ有る程に，おもしろひ所ハさま／＼ござあらふずる，（虎明本狂言，萩大名，1642 年写，翻刻註解上 p.313，40-虎明 1642_02029,2220）

順接確定条件のサレバは，必ずしも相手の発話内の要素を受ける必要がない。一方，対人的意味を表すサレバは，相手の発話を受けることが必須であり，順接確定条件とは一線を画す。順接確定条件を表していたサレバは，どのように対人的意味を獲得したのだろうか。この種のサレバについては岡﨑(2015)でも触れられているが，サレバの歴史全体を扱った研究であり，対人的意味の詳細な獲得過程は不明である。そこで本発表では，サレバの歴史を観察し，対人的意味の獲得過程を明らかにする。

３．対人的意味を獲得する時期とその特徴

[1] ここでは「単に語が連続しているだけで，一語として認められない（1 つの品詞として位置付けられない）もの」も含め，前後の文脈をつなぐ表現を広く「接続詞」として扱っている。

まず，対人的意味を表すサレバの特徴について整理する。岡﨑(2015)によれば，聞き手を指向したサレバは，中世末期以降増加するとされる。また，いわゆる接続詞としての用法を喪失したことが窺える指標の 1 つに，前件・後件が存在しない単独での使用が挙げられるが，サレバが単独で使用されるようになるのは 17 世紀半ば以降である(3)（サレバヨ，サレバコソの形で単独使用される例は除く）。

(3) ▲おな のふとつさま。のふはぢしらずがきました。▲おや さればいやい ▲むこはゝ。おんなどものこゑがする。(狂言記, 巻第一 18 ウ, 1660 年, 北原・大倉 1983p.129)

この点から，サレバは中世末期～近世初期に対人的意味を獲得したのではないかと考える。

対人的意味のサレバは発話冒頭でよく使用されると予想される。そこで 16 世紀末から 17 世紀半ば頃の，発話冒頭のサレバの例をいくつか見てみると，大きく相手が提示した疑問に応答するタイプ(2)(4)や，相手の発話内容に同意するタイプ(5)等があることがわかる。

(4) 「さても、拝殿にての御作の詩は御自作にて候か。又いにしへもかかる詩の侍りける事にて候か」と申ければ、「されば、いにしへよりありし事なり。(一休ばなし，巻之四，1663 年，新全集 64p.331)

(5) （孫二）「（略）此間ハお目にかゝらなんだ（孫一）「されハ此間ハおめにかゝらなんだ（虎明本狂言，薬水，1642 年写，翻刻註解上 p.105，40-虎明 1642_01021,3580）

この頃の発話冒頭におけるサレバの多くは，相手の疑問に応じたり相手に同意したりすることで，その話題を受け入れていることを相手に知らせる働きを持つと考える[2]。

以下，サレバがこのような働きをどのようにして獲得していくのかを見ていく。

４．調査方法

本発表ではサレバの用例を観察し，対人的意味の獲得過程を調査する。いわゆる本文種別（発話・地の文・その他・不明）と発話中の出現位置（冒頭，途中，末，単独）を指標とし，対人的意味のサレバが現れやすい発話冒頭を中心に論じる。

適宜サレバがどのようなタイプの発話を受けるのかにも言及する。その際，16 世紀末から 17 世紀半ば頃に多く見られる疑問応答タイプと同意タイプを典型例と見なす。解釈による判断の影響を少なくするため，同意タイプは(5)のような「サレバの後続発話が相手の発話と同じ内容のもの」とする。

調査平安期から 17 世紀半ば頃までとする[3]。資料は新全集等を使用し，『日本語歴史コーパス』（以下，CHJ）収録作品は「コーパス検索アプリケーション『中納言』」（https://chunago

---

[2] 発話冒頭のうち「相手の話題を受け入れる」という特徴に合致しない例も見える。(ア)は対人的に使用されているが，何度も同じことを言う相手に反発している点で，(4)(5)等とは性質が異なる。詳細な検討は本発表では行わない。

(ア) （聟）「なふそれをくハふ（妻）「それとハなんでござるぞ（聟）「なふいかうむまかつた，はやうこしらへてくれさしめ（妻）「いやなんでござる（聟）「いやわごりよがしやうをしつた程に，させてくへといハれた，はやうこしらへさしめ（妻）「されハなんでござるぞぞんぜぬ，名を仰られひ（虎明本狂言，岡太夫，1642 年写，翻刻註解上 p.375，40-虎明 1642_03006,13580）

[3] コ(レ)ハサレバ，サレバコ(レ)ハ，サレバコソ（已然形終止を伴うか否かを問わない），サレバトテ，サレバ(ト)ヨは調査対象から除く。漢字表記され，読みが特定できない例も（サレバの形態論情報が付与されていても）除外する。

n.ninjal.ac.jp/）で検索した[4]。

CHJ の場合，本文種別は原則，形態論情報に従うが，情報が付与されていない場合や，テキスト内容に合わない場合は適宜，情報を追加・修正した。CHJ 以外の作品も同様に情報を付与した。「地の文」には「割書き」「引用-評」等も含む。「その他」は「心内，手紙，和歌」等とし，発話で心内表現を引用する場合もこれに含める。また，鍵括弧（「）直後にサレバが書かれていても，同一話者の発話が前から続いている場合は「発話途中」に数えた。

５．調査結果

サレバの本文種別および発話における出現位置について調査した結果を作品ごとにまとめた（表 1）。表 1 から，サレバは平安期の時点で発話の例が多く（91 例中 56 例），次いで地の文の例が多いことが看取される（29 例）[5]。

また，発話の中では冒頭より，発話途中での使用が目立つ（56 例中 53 例）。平安期のサレバは前件・後件が明示される位置（発話途中や地の文）に出現しやすかったことがわかる。このことは，サレバの順接確定条件としての性質を表していると言える。

一方，平安期の発話冒頭の例は 3 例のみである。『落窪物語』の例(6)は，少将と契りを結んだことを北の方に非難されると恐れる姫君に対し，あこぎが邸を離れることを提案する場面である。あこぎは姫君の発話を受け入れてはいるものの，疑問への応答や同意といった対人的意味の典型例ではない。また，サレバ以下の発話は相手の発話を根拠とした提案であり，前件を根拠とする順接確定条件の用法での解釈も可能である。

(6)　（姫君）「（略）北の方いかにのたまはむ。（北の方）『わが言はざらむ人のことをだにしたらば，ここにも置いたらじ』とのたまひしものを」とて，〔姫君ガ北ノ方ヲ〕＜いみじ＞と思ひたまへれば，（あこぎ）「<u>されば</u>，なかなか思ひ離れたてまつりたらむが，よからむ。（落窪物語，10 世紀後半，新全集 17p.45，20-落窪 0986_00001, 101860）

(7)は息子の顕信が出家したことを受け，道長が僧正（僧官の最高位）を与えると発言する場面である。サレバが用いられる発話は伝聞（引用）された内容であり，実際にどのような状況で発話されたのか（疑問を受けるのか相手に同意しているのか）は不明である。

(7)　（世次）…殿の御ためにもまた，法師なる御子のおはしまさぬが口惜しく，こと欠けさせたまへるやうなるに，〔藤原顕信ガ出家シタノヲ〕（藤原道長）「<u>されば</u>，やがて一度に僧正になしたてまつらむ」となむ仰せられけるとぞうけたまはるを，…（大鏡，1100 年頃，新全集 34p.303，20-大鏡 1100_02009,36510）

---

[4] 検索キーは「キー: (語彙素="然る" AND 語彙素読み="サル" AND 活用形 LIKE "已然形%")AND 後方共起: 語彙素="ば" ON 1 WORDS FROM キー」「キー: 語彙素="されば"」である。明らかにサレバと異なる例は除外した。

[5] ただし，発話 56 例中 46 例が大鏡の例である点は注意を要する。大鏡は公宅世次や夏山繁樹，侍らの対話形式で物語が進行するため，地の文相当の部分が世次らの発話で構成されている。CHJ で世次らの発話に「会話」の情報が付与されていても，他作品の「会話」とは性質が異なると言える。世次らの発話（41 例，すべて発話途中）を例外とすると，純粋な発話と言える例は 56 例中 15 例となる。蜻蛉日記以前に発話の例が見られない点も考慮すれば，平安期のサレバはそもそも地の文と比べ発話で使用されにくかったと言える。

表1)サレバの本文種別と発話における出現位置

		発話					地の文	その他	不明	総計
		冒頭	途中	末	単独	小計				
平安	竹取物語						1			1
	伊勢物語						3			3
	土佐日記						1			1
	大和物語						4			4
	平中物語						10			10
	蜻蛉日記						4	1		5
	落窪物語	1	2			3	2	1		6
	枕草子							2		2
	源氏物語		6			6	1			7
	讃岐典侍日記	1				1	3			4
	大鏡	1	45			46		2		48
	小計	3	53			56	29	6		91
鎌倉	方丈記						1			1
	住吉物語		1			1				1
	宇治拾遺物語	1	18			19	20	1		40
	保元物語	1	13			14	11			25
	建礼門院右京大夫集						1	2		3
	平治物語		2			2	1			3
	十訓抄						10			10
	平家物語	1	26			27	45	2	4	78
	十六夜日記							1		1
	とはずがたり		4			4		5	1	10
	徒然草		2			2	16			18
	小計	3	66			69	105	11	5	190
室町	義経記	1	11			12	11		2	25
	天草版平家物語	5	10			15	1			16
	天草版伊曽保物語	1	1			2				2
	虎明本狂言集	34	12	1		45				47
	小計	41	34	1		76	12		2	90
江戸	狂言記	32	2		2	36				36
	かなめいし		1			1	1			2
	一休ばなし	5	1			6	6			12
	浮世物語		11			11	2			13
	小計	37	15		2	54	9			63
総計		84	168	1	2	255	155	17	7	434

(8)は死期を悟った堀川天皇が，死ぬ前にすべきことを白河院に伝えるよう忠実に頼んだ後，白河院のもとから戻った忠実の報告の場面である。サレバは，堀川天皇の考える「死ぬ前にすべきこと」への同意を示しているとも解釈できる。しかし，(7)同様，伝聞（引用）された内容であり，実際の発話状況は不明である。

(8) 帰り参らせたまひて，（藤原忠実→堀川天皇）「（白河院）『されば。去年一昨年の御ことにも，さるさたにはさぶらひしかど，宮の御年のをさなくおはしますによりて，今日までさぶらふにこそ』となんはべる」と奏せらるるにぞ，（讃岐典侍日記，1110年頃，新全集 26p.395，20-讃岐 1110_00001,17470）

平安期の全サレバに占める発話，および発話冒頭の割合の少なさを踏まえ，(6)～(8)は対

人的意味を持つサレバではなかったと見ておく。

鎌倉期も地の文が多く（190 例中 105 例），発話がそれに次ぐ（69 例）。発話途中の例も 69 例中 65 例と多数である。一方，発話冒頭は 3 例と少なく，うち 1 例は別本でサラバとなっており（川村 2024:7），サレバの確例とは言えない。

残り 2 例のうち(9)は，「なぜ食事の準備が遅いのか」と国守が言ったのを受け，調理人が「まだ羊を殺すな」と国守の妻に言われた旨を伝える場面である。サレバは国守の疑問に対して応答する形で使用されており，順接確定条件の解釈も成り立たない。

(9) （妻）「しばし，この羊な殺しそ。殿帰りおはしての後に，案内申して許さんずるぞ」といふに，守殿，物より帰りて，「など人々参物は遅き」とてむつかる。（調理人）「されば，この羊を調じ侍りてよそはんとするに，うへの御前，『しばし，な殺しそ。殿に申して許さん』とて，とどめ給へば」（宇治拾遺物語，13 世紀前半，新全集 50p.411，30-宇治 1220_13007,5260）

(10)は阿波の内侍の発言を受けた法皇が「お前は阿波の内侍であるのだな」と返す場面である。サレバの後続には相手の発話内容の一部の繰り返されており（波線部），同意の対人的意味を表すサレバの特徴に合致する。ただし，サレバ以下の発話は相手の発話を根拠として「そう言うということは，〜なのだな」と順接確定条件として解釈する余地も残る。

(10) 「（略）阿波の内侍と申しし者にてさぶらふなり。母は紀伊の二位，さしも御いとほしみふかうこそさぶらひしに，御覧じ忘れさせ給ふにつけても，身のおとろへぬる程も思ひ知られて，今更せんかたなうこそおぼえさぶらへ」とて，袖をかほにおしあてて，しのびあへぬ様，目もあてられず。法皇も，「されば汝は，阿波の内侍にこそあんなれ。（平家物語，13 世紀頃，新全集 p.513，30-平家 1250_13003,16330）

以上，鎌倉期は発話の用例も増加し，対人的意味を表すサレバの特徴に合致する例が見られるようになる時期である。

室町期には発話 76 例が地の文 12 例を上回る。また，発話の中でも冒頭 41 例が途中 34 例より多くなる（特に狂言では発話冒頭に大きく偏る）。発話冒頭のサレバ 41 例のうち，疑問応答タイプが 24 例(2)(11)，同意タイプが 6 例である(5)(12)。

(11) 右馬．木曾が京で狼藉をしたは何たる事ぞ？喜．さればその事で御座る〔Sareba ſonocotode gozaru〕．京中には源氏の勢が満ち満ちて，（略）狼藉をして御座る．（天草版平家物語，巻 3 第 13，大英図書館蔵本 p.219，40-天平 1592_03013，870）

(12) 「下六ハおそひな（藤六）「されハおそうござるが，も参らふ（虎明本狂言，麻生，1642 写，翻刻註解上 p.165，40-虎明 1642_02001,20990）

江戸期は資料の偏りがあることは考慮する必要があるが，全体として地の文 9 例より発話 54 例が多い。また，発話 54 例の中でも冒頭 37 例が途中 15 例を上回り，単独 2 例も見られる(3)(13)。発話冒頭 37 例のうち疑問応答タイプ 30 例(4)(14)，同意タイプ 3 例(15)である。

(13) ▲おは（略）めでたいおしゆくらうが。あつたによつて。はつ酒を。おましたわいの　▲おい はあ。それや。めでたう御ざりまする　▲おは さればいの（狂言記，巻第二 12 オ，1660 年，北原・大倉 1983p.189）

(14) ▲いなか者 はあ。こりや。仕合で御さる。してこなたは。どのながれで御ざるぞ▲ふつし　されは。うんけい。たんけい。あんなみと。いふておちやる。それかしはあんなみでおちやる（同，巻第三 32 ウ，北原・大倉 1983p.285）

(15) ▲大名 して。これははや。ゑぼしが。おそふくるな▲藤六 さればおそふ。御ざりまする（同，巻第一 2 ウ，北原・大倉 1983p.104）

以上，室町期以降には対人的意味を表すサレバの特徴に合致する例が増加し，江戸期には僅かだが単独使用の例も見られた。

４．おわりに

本発表では，サレバの対人的意味の獲得過程を調査した。サレバの対人的意味は鎌倉期に萌芽が見え，室町期以降に対人的意味を表すサレバの特徴に合致する例が増加し，江戸期には僅かだが単独使用も見えることがわかった。順接確定条件を表したサレバがなぜこのような変化を遂げたのか，変化の理由を明らかにすることが今後の課題である。

また，対人的意味を表すサレバは「相手の疑問に応じたり相手に同意したりすることで，その話題を受け入れていることを相手に知らせる働き」を持つと考えられる。このサレバは相手の発話に応じる点で応答表現であると言えるが，相手が提示した命題を「そうだ，その通りである」と肯定するタイプの応答表現とは働きが異なる（たとえば疑問詞疑問文に応じるサレバを「そうだ」と解釈することはできない）。相手の発話を肯定する応答表現には「いかにも」「なかなか」等の副詞由来のものの他，サレバと同様指示詞を含む「さよう」「そう」等もある。このような表現とは異なる種類の応答を表す上でなぜ接続詞であるサレバが採用されたのだろうか。このような点も明らかにしていくことで，副詞や接続詞を含めた副用語が対人的意味を獲得する背景や条件を明らかにしたい。

【使用テキスト】※以下，下線は「国立国語研究所(2024)『日本語歴史コーパス』（中納言 2.7.2 データバージョン 2024.03）https://clrd.ninjal.ac.jp/chj/（2024 年 5 月 14 日確認）」【平安】竹取物語，伊勢物語，土佐日記，大和物語，平中物語，蜻蛉日記，落窪物語，枕草子，源氏物語，讃岐典侍日記，大鏡…新編日本古典文学全集（以下，○）【鎌倉】方丈記，住吉物語，宇治拾遺物語，保元物語，建礼門院右京大夫集，平治物語，十訓抄，平家物語，十六夜日記，とはずがたり，徒然草…○【室町】義経記…○，天草版平家物語，天草版伊曽保物語…大英図書館蔵本，虎明本狂言…大塚光信 2006『大蔵虎明能狂言集翻刻注解』清文堂出版【江戸】狂言記…北原保雄・大倉浩(1983)『狂言記の研究』勉誠社，かなめいし，一休ばなし，浮世物語…○

【引用・参考文献】林禔映(2018)「中・近世日本語における副詞の感動詞化：応答型感動詞用法を例にして」『日本言語文化』43.／岡﨑友子(2015)「「カカレバ・サレバ」の歴史的用法と変化について」『文学論藻　東洋大学文学部紀要　日本文学文化篇』89.／川瀬卓(2019)「感謝・謝罪に見られる配慮表現「どうも」の成立」『近代語研究』21.／同(2024)「副詞「どうぞ」の歴史変化 ： 変化の語用論的要因に注目して」『日本語文法』24-1.／川村祐斗(2021)「接続表現サヨウナラ（バ）の“別れの挨拶語”化」『Nagoya Linguistics』15.／同(2024)「サラバの史的展開：サレバ・未然形バとの対照」『日本語の研究』20-1.／日本国語大辞典第二版編集委員会(2000-2002)『日本国語大辞典第二版』小学館.／深津周太(2018a)「近世における副詞「なんと」の働きかけ用法：感動詞化の観点から」『形式語研究の現在』和泉書院.／同(2018b)「副詞「ちょっと」の感動詞化：行為指示文脈における用法を契機として」『歴史語用論の方法』ひつじ書房.

近代語における接続詞の成立と多様な展開

川島 拓馬（富山大学）

1. はじめに

・「近代・現代の日本語の接続詞は、古代から現代にいたる各時代の接続詞のオンパレード（田中 1984）」←他の品詞にはあまり見られない、接続詞の特色とされる。

・近代語における接続詞の多様な発達を探るための試みとして、新たな接続詞の成立（およびその認定）、また文章のジャンルによる使用傾向に関わる論点を提示したい。

2. 接続詞の成立

・日本語の接続詞はすべて複合語か転成語であると指摘される（京極・松井 1973 など）。

・接続詞の成立として一定の事例が見られるタイプとして、接続助詞から接続詞が生まれるという変化がある（小柳 2018）。

(1) a. ［～終止連体形＋接続助詞］、～→［～終止連体形］。接続詞、～

b. 連接前部＋【連接後部】→先行文末。【句頭部】、～

e.g. ところで、が、けれども、と、ところが

・接続助詞と接続詞で共通する要素を含んでいる事例については、田野村（2002）が指摘し、まとめている。　e.g. 途端（に）、一方（で）、反面、結果、ついでに、おかげで

・以下では「一方」を取り上げ、接続助詞としての用法との関係性、また接続詞の成立に対する捉え方について考える（調査には『日本語歴史コーパス』を使用）。

○「一方」の用法（接続詞と接続助詞）

・助詞の付かない「一方φ」が接続詞および接続助詞として使われている用例を抽出。

(2) 圖中の童男童女は泰西風なるに拘らず、同じく農家の繪圖に於て一方草を苅るの農夫は西洋服を着くるに拘らず、他方苗を挿む男女の服裝日本風なるは果して一致を保ち兒童の心を迷はさざるを得るや否や、吾人は敢て著者の注意を乞はざるを得ず

（「近刊雜書」、60M 国民 1888_30020, 7460）

(3) 新鐵道完成の上は、左なきだに年々夥しく増加する、清國移住民の數は一層増加し、萬一清國と事を構ふる場合には、その攻撃に備へざる可からざるが故に、其の對重として自國民の増加せんこと尤も必要なればなり。一方黒龍江州の人口收容力を見るに、現下の人口は頗る稀薄にして、（中略）優に尚ほ許多の人口を吸收するを得べし

（「黒龍江鐵道の大目的」、60M 太陽 1909_01043, 71600）

(4) 跡取りの兄は茂助とて親讓りの堅い一方、足袋穿いて疊の上にばかり坐つて居ても濟むべき身で鍬柄執つて日を暮らさねば身躰の遣り所に困ると云ひ、樂みといへば植付前一度收入濟ませて一度朶華の温泉に湯治して眞の養生するばかり

（「新學士」幸田露伴、60M 太陽 1895_04012, 10020）

・調査範囲において、「一方φ」の接続詞としての用例は 1888 年が最も早く、接続助詞としての用例は 1895 年を初出とする。

→両者の先後関係について確たる判断はできないが、「一方φ」に関しては接続助詞から接続詞が生まれたとは言いがたい。

→更に、用例数で見ると、単独の「一方φ」の接続詞の例が 242 例であるのに対して接続助詞の例は 17 例と僅少であり、ここからも接続助詞からの変化を想定することはできない。

○「一方」による接続機能の由来

・次いで「一方で（は)」「一方において（は)」「一方には」の用例を収集。

(5) それ故、其國文學者と申すものも、右の美文の發達を研究し、其美を構成する種々の要件を論定し、そして一方で純正な理想を涵養してまゐりますると同時に、又他の一方では其理想を實在にする著述に、始終心懸けねばならぬ者でありまする。

（「國語研究に就て」上田万年、60M 太陽 1895_01007, 46360）

(6) 然れども人多ければ天に勝つ時の勢如何ともすべきにあらざれば一方に於ては石鏃を造るの法を精くし蠻民の暴を防くに供へざる可からずと雖も蒸氣力の有用なる事を知る以上はこれを世に用ふる事を勉めずして可ならんや

（「非時事小言論（一)」上田秀成、60M 東洋 1881_03001, 41810）

(7) 政府は結婚及び離婚の景況を監察するの權を有し并に公共交際上の平和に着眼して唯一夫一妻の婚姻を許し且つ一夫の數妻を娶り一妻の數夫に嫁する事及び犯姦の所行を以て國家の大罪として嚴罰するの權あり。然るに一方にはモルモーネン一夫の數妻を娶るを以て其神道の許す所となし又一方には自由戀愛黨。夫婦共時々戀愛する所の變ずるに隨て縱に配偶を改るを以て眞の自由となせる一黨あり。

（「米國政教（三)」トムソン(作)/加藤弘之(訳)、60M 明六 1874_13001, 13720）

・先ほど示した「一方φ」と異なり、これらは助詞を伴っているため、接続詞のように見えたとしても、そのまま接続詞として認定してよいか（接続機能を担う形式として機能語化しているか否か）は問題となる。

・「一方」は、語彙的に「二つ（以上）あるもののうちの一つ」という意味を持っており、そこから「複数の事柄を対比的に述べる」機能を有するように変化するのは自然な発想と思われる。

・実際に、そのような対比的な文脈で用いられている例は、近代以前に既に見られる。

(8) 上といひ下といひ、何れ勝劣あるべしとも思えず。ただし、合戦の慣ひ、必ず一方は勝ち、一方は負く。（保元物語、30-保元 1223_01004, 26010）

(9) 其月の末つかた、わか侍共の、いひあらそふ事起りて、其親戚黨類たちわかれ、大かた戸部の家人等のこりすくなく、十二月の初に、つゐに両方相戦むとす。一方は皆々、我父の年頃したしき人々にて、関といふ人の許に馳集り、けふの未の初には、うちたつべしと聞ゆ。（折りたく柴の記、51-白石 1716-12032, 1790）

・「一方φ」「一方で（は）」「一方において（は）」「一方には」の用例で、見かけ上接続詞と見なせる用例のうち、49%は「一方」もしくは「他方」とともに使われている（529/1072）。

(10) 政治世界の腐敗は、社會の腐敗を導くの誘因と云はざる可らず、一方に於て不相應に權力を有する者あれば、他方に於ては又不相應に權力を有せざるものあり

（「平家物語を讀む」、60M 国民 1887_05002, 24380）

→「一方」がこのように複数の事柄を対比的に述べる場合にしばしば用いられるところから接続の機能が生じたと考えられ、「一方」で指される対象が具体性を欠いたものへと移行することで、「一方で」等も接続詞として成立したと捉えることができる。

(11) 此の方針に出でると前述の如く支那内地に勃興しつつある製造工業に對しても十分競爭に堪へるのみならず、彼等を壓倒して優越な地歩を占めることも比較的容易である。一方に於ては工業教育の普及を計り、專門技術の研鑽を奬勵し、同時に工場管理及び經營の方法を改良し、關税其他工業政策上適當の措置を講ぜねばならぬ。

（「工業上の戰後經營策」阪田貞一、60M 太陽 1917_08030, 13280）

・また、同様に見かけ上接続詞と見なせる用例のうち、21%はその前（一部は後）に他の接続詞が用いられており、接続詞の二重使用になっている（222/1072）。

(12) 現今の日本に於ては、斯る茫漠たる事は、迚も時と場所が承知せぬ、又た一方に於ては、固有と云ふ人あり、即ち外國風に何事をもすればこそ、外國人の下に附け、日本は日本で、ドコドコ迄も固有の日本を以て遣り通すと云ふ議論なり

（「現今の日本は適用の時代なり批評の時代なり」徳富蘇峰、60M 国民 1888_20003, 3400）

→既存の接続詞と重ねて、同じ位置で使われることによって、「一方」を含む一連の形式が接続機能を有する文法形式へと変化することを促したのではないかと考えられる。

⇒「一方」が接続詞として成立し得たのは、もとの名詞の語彙的意味によるところが大きく、加えて形式の用いられる構文的な環境が、「接続詞」化の要因となった。

⇒「一方」に接続助詞の用法が存在するのは別の事情によると思われ、同一形式に接続詞と接続助詞の用法が存在してはいても、(1)に挙げた事例とは異なるタイプとみられる。

⇒小柳（2018）で、(1)とは反対の「接続詞から接続助詞」への変化例は見出せないと指摘される。「一方」はこの例外にも見えるが、接続詞として確立した後に接続助詞の用法が生じたと見なす根拠はない。よって、これが反例であるとは判断できない。

3. 接続詞と文章ジャンル

・接続詞は、文章のジャンルや文体によって出現傾向に差があることが知られている。

→現代語については石黒ほか（2009）、中俣（2022）など。

→近代語については近藤（2021a,b,2023）など。

・「接続詞」全般を取り上げた調査となると、対象を設定するのが困難であり（コーパスで

品詞を「接続詞」と設定するだけでは足りない)、規模の大きな調査が必要となるので、現代語以外を対象とした研究はあまり行われていない。

・近藤の研究では文語／口語という軸によって分析が行われており、重要であるが、現代語を対象とした研究では文章ジャンルごとの出現傾向が調査されており、問題意識がやや異なっている。

→近代語における接続詞のジャンル的な使用状況は、十分に解明されていないと言える。

○近代の演説における接続詞の出現傾向について（川島 2024）

・文章ジャンルが特徴づける傾向を取り出すため、あまり取り上げられることのない演説資料を対象に、接続詞の用例を収集した（目視での調査により、網羅的な収集が可能)。

・演説資料として金澤・相澤(編)（2015）を使用。比較対象として『日本語歴史コーパス』『昭和・平成書き言葉コーパス』を調査し、雑誌『太陽』（1917 年・1925 年）と『中央公論』（1933 年・1941 年）から用例を収集した[1]。

・川島（2024）では順接・逆接・添加の接続詞について調査したが、本発表ではそれ以外の接続詞についても追加で調査を行った。具体的な形式は以下の通り。

【対比】一方、あるいは

【転換】ところで、さて、では

【同列】すなわち、要するに、つまり、たとえば、殊に、特に

【補足】ただ、ただし、なお

・演説および雑誌における接続詞の用例数について 1000 文あたりの調整頻度を算出した上で、それらを比較し、その接続詞が演説において相対的に出現しやすいか否かを測った[2]。

【表】演説において特徴的な出現傾向を見せる接続詞[3]

	演説で出現しやすい接続詞	演説で出現しにくい接続詞
順接	ここにおいて、よって、ゆえに、それゆえ、その結果、されば、で	だから
逆接	しかるに、しかしながら、しかれども	ところが、だが、けれども、が
添加	しかして、そうして、また	そして
転換		ところで
同列	要するに、すなわち	たとえば、特に
補足		ただし、ただ

[1] 接続詞は文頭に現れるもののみを対象としている。また『太陽』については口語体記事のみに限定した。

[2] 具体的な数値の取り扱い、および比較の方法については川島（2024）を参照。

[3] 対比の接続詞については、演説において特徴的な使用傾向を見出せなかったため、表に入れなかった。

○指摘できる傾向

・演説においては、一般的な書き言葉よりは接続詞の出現頻度が高い。

・順接および逆接の接続詞に関しては、雑誌において文語体を中心に用いられる形式の方が演説において相対的に出現頻度が高く、口語体を中心とする形式は頻度が低くなる。

→演説は音声として実現するものであるが、どちらかといえば典型的な書き言葉に近い性質を見せる（川島 2024）。

・しかし、演説において出現頻度の高い接続詞は、文体的に硬い、文語的な形式（ここにおいて、ゆえに、それゆえ、されば、しかるに、しかれども、しかして）ばかりではない。

→先に述べた内容に関連する事柄を次々と述べていく機能をもつ「で」は、演説という談話スタイルに合致しやすい接続詞である（川島 2024）。

→同列の接続詞の中でも「要するに」「すなわち」という換言に関わるものは演説での使用が顕著に多いと言える。

→言い換えを行う目的として石黒（2001）は、受け手の理解に対する送り手の配慮から生じ、象徴的な表現と具体的な表現、詳しい表現と簡潔な表現を相互補完的に示すことで受け手の理解を深めようとするものと指摘する。これが、音声によって実現する演説というメディアの特性に適ったものと考えられる。

○『日本語話し言葉コーパス』との比較

・演説は、話者が聴衆に向かって一方的に話す談話スタイルである。時代を比較するため、同様の特徴を持つ資料として『日本語話し言葉コーパス』の独話のデータを調査した。

・「しかし」と「しかしながら」⇒　雑誌：「しかし」7290 例　「しかしながら」964 例
演説：「しかし」　54 例　「しかしながら」　45 例
話し言葉コーパス：「しかし」1339 例　「しかしながら」198 例

・「そして」と「そうして」　⇒　雑誌：「そして」5221 例　「そうして」945 例
演説：「そして」　10 例　「そうして」　30 例
話し言葉コーパス：「そして」4157 例　「そうして」　41 例

→歴史的に見て「しかし」は「しかしながら」から生じたもので、「そして」は「そうして」から生じたものである（田中 1984）ことを踏まえると、演説においてはより伝統的な形式への選好を見て取ることができる[4]。

→この点（裏を返せば「しかし」「そして」といった、同時代においても一般的に用いられる接続詞の使用が少ない点）が、近代期演説の特異な点と言えるのではないか（現代の独話体談話とも異なる特徴を見せるので、ジャンル的な特性だけでは説明は難しい）。

[4] ただし「殊に」と「特に」など、この傾向に該当しない例もある。演説・雑誌ともに「殊に」の方が頻用されており（演説で 21 例・3 例、雑誌で 1003 例・370 例）、時代的な要因による差であると思われる。

⇒種々の資料を横断的に調査することで、特定の資料、特定の時代に特徴的な振る舞いを見出していくことが課題であろう[5]。

4. おわりに

・近代語の接続詞は、現代語との違いが一見して分かりにくいこともあるが、用法や出現傾向など、分析する際の観点、特に比較対象を適切に設定することで有意義な知見が得られると考えられる。

・副用語研究は「閉じた」研究領域ではなく、様々な問題意識、アプローチを活用することで「参入」が可能であろうし、それによって研究のさらなる進展が期待される。

【調査資料】

金澤裕之・相澤正夫(編)（2015）『大正・昭和戦前期 政治・実業・文化 演説・講演集―SP 盤レコード文字化資料―』日外アソシエーツ

国立国語研究所『日本語歴史コーパス』（データバージョン 2024.03、中納言バージョン 2.7.2）／『昭和・平成書き言葉コーパス』（データバージョン 2023.05、中納言バージョン 2.7.2）／『日本語話し言葉コーパス』（データバージョン 2018.01、中納言バージョン 2.7.2）

【参考文献】

●石黒圭（2001）「換言を表す接続語について―「すなわち」「つまり」「要するに」を中心に―」『日本語教育』110●石黒圭・阿保きみ枝・佐川祥予・中村紗弥子・劉洋（2009）「接続表現のジャンル別出現頻度について」『一橋大学留学生センター紀要』12●川島拓馬（2024）「大正～昭和前期の演説における接続表現の使用状況―雑誌と比較して―」『富山大学人文科学研究』80●京極興一・松井栄一（1973）「接続詞の変遷」鈴木一彦・林巨樹(編)『品詞別学校文法講座 6 接続詞・感動詞』明治書院●小柳智一（2018）『文法変化の研究』くろしお出版●近藤明日子（2021a）「明治・大正期の書き言葉における文体と語彙の通時的変化―逆接の接続詞を例に―」近代語学会(編)『近代語研究』22，武蔵野書院●近藤明日子（2021b）「明治・大正期の書き言葉における文体と語彙―順接の接続詞を例に―」田中牧郎・橋本行洋・小木曽智信(編)『コーパスによる日本語史研究 近代編』ひつじ書房●近藤明日子（2023）「『昭和・平成書き言葉コーパス』雑誌レジスターに見る順接・逆接の接続詞の通時的変化」言語資源ワークショップ 2023 発表予稿集●田中章夫（1984）「接続詞の諸問題―その成立と機能―」鈴木一彦・林巨樹(編)『研究資料日本文法 4 修飾句・独立句編 副詞・連体詞・接続詞・感動詞』明治書院●田野村忠温（2002）「辞と複合辞」玉村文郎(編)『日本語学と言語学』明治書院●中俣尚己（2022）「並列を表す接続詞と文体―「まとめて検索 KOTONOHA」を利用して―」『計量国語学』33-7

付記　本発表は、JSPS 科研費 23K12189 の助成を受けたものである。

---

[5] 現代の演説（内閣総理大臣の所信表明演説・施政方針演説）を対象に予備的な調査を行っているが、近代の演説では使用の少ない「たとえば」が現代ではかなり頻繁に用いられている。近現代で演説の性質を揃えることは困難であり単純な比較はできないが、演説において採られる談話展開に異なりが見られる可能性がある。

日琉諸方言の推量表現の諸相

舩木礼子（神戸女子大学）
松丸真大（滋賀大学）
日高水穂（関西大学）
仲原穣（琉球大学非常勤講師）

1. 目的

このパネルセッションでは，「推量表現」に焦点を当てて日琉諸方言の対照研究を行う。方言の文法記述が進んでモダリティについての研究も深まりつつある現在，「推量表現」に相当するものだけ見ても，形態論的特徴，構文的特徴，意味的・運用的な制約など，さまざまな様相が観察される。また，現代の標準語では「推量表現」としては使われていない諸形式が方言の体系内でどのような位置づけにあるのかを見ることも，モダリティの史的変化を考えていく上で示唆に富む。「推量表現」をめぐる各方言の多様な報告をきっかけに，参加者とともに日琉諸方言のモダリティについて理解を深めたい。

2. 経緯

発表者らはこれまで，日高水穂氏が主催する方言文法研究会において，『全国方言文法辞典』の記述の拡充を目指して要地方言の条件表現や逆接表現の記述，活用体系の記述などを進めてきた。またデータベースの構築も進め，それらを用いた時空間変異対照研究を多角的な展開を目指している。

2023 年からモダリティにとりかかった（高木千恵・舩木礼子・松丸真大，2023 年 3 月 27 日）。まずは日本語記述文法研究会編（2003）を参考にしながら日本語標準語におけるモダリティの捉え方について整理し，本研究での「推量」を「認識のモダリティ」と位置づけ，標準語の「だろう」や「のではないか」の意味的特徴・文構造的特徴を次のように捉えることにした。

意味的特徴 1：命題内容に対する発話時の話し手の判断であること
意味的特徴 2：命題を真として主張していること
文構造的特徴：主に主節末に生起すること

ただ，標準語の「だろう」だけを見ても，表現類型としては「情報系」のなかの「叙述」と「疑問」と「感嘆」にまたがって使われるうえ，「伝達のモダリティ」の「伝達態度」や「丁寧さ」にも広く使われているように，ひとつの形式が担う表現の幅は広いことがある。

さまざまな立場，考え方があるが，諸方言の対照の出発点として標準語の「だろう」の性質を中心に据えつつ，同じ枠組みで諸方言のそれぞれの形式について記述できるようにした「推量表現　共通調査項目」を作成した（2023 年 9 月 3 日）。

現在，この「推量表現　共通調査項目」に沿って要地方言の調査を行い，推量表現の項目記述の準備を進めると同時に，調査結果について方言文法研究会研究例会 2024#1（2024 年 3 月 2・3 日，於：関西大学／オンライン）で報告や検討を行ってきた。

3. このパネルセッションの構成

このパネルセッションでは，まず「推量表現　共通調査項目」について説明したあと，標準語と似た体系であっても部分的には異なる京都市方言の例に言及する。次に，標準語の「だろう」とは異なるタイプの形式をもつ広島県三次市方言，沖縄語首里方言，高知方言の推量関連表現について発表する。

発表 1：「推量表現　共通調査項目」の概要／京都市方言の推量表現

発表 2：広島県三次市方言の推量関連表現

発表 3：沖縄語首里方言の推量関連表現

発表 4：高知方言の推量表現

最後にまとめとして，諸方言を対照することによって見えてきた推量表現の方言間の異同や特徴について整理し，理解を深めていきたい。

質問は，フォームでも受け付けております。右の QR コードまたは下記の URL からフォームに入り，ご入力ください。

https://forms.gle/2369Syr3zHDPmpCn7

参考文献

大西拓一郎編（2006）『方言文法調査ガイドブック 2』科研費報告書

風間伸次郎（2011）「テーマ企画：特集　モダリティ　まえがき」『語学研究所論集』16，pp. 29-55，東京外国語大学

日本語記述文法研究会編（2003）『現代日本語文法 4 第 8 部 モダリティ』，くろしお出版

付記

このパネルセッションは，科学研究費補助金基盤研究（A）『全国方言文法辞典』データベースの拡充による日本語時空間変異対照研究の多角的展開（課題番号：20H00015，代表者：日高水穂）の研究の一環のものである。

「推量表現 共通調査項目」の概要／京都市方言の推量表現

松丸 真大（滋賀大学）

1. 背景

1.1. なぜ推量表現か？

このプロジェクトは、日琉諸方言の文法形式を網羅的に記述することを最終的な目標にしている。プロジェクトの中のモダリティ班（現在メンバーは高木千恵・舩木礼子・松丸真大）は、諸方言のモダリティに関わる形式を適切な精度で記述することを目指している。それぞれの方言のモダリティ体系全体を調査するのが理想であるが、調査票の設計にも、それを用いた記述調査の実施にも時間がかかってしまい、現実的ではない。そこで、モダリティの意味領域ごとに調査項目を作成することにした。

今回は、モダリティの意味領域の中でも「推量」を選び、調査票を作成した。この背景には、次のような予想があった。

1. 多くの方言に推量を表す形式が存在するだろう。ただし、全ての方言に存在するとは考えていないし、推量という確固としたカテゴリがあると考えているわけでもない。できるだけ多くの方言にありそうなものから調べようという方針による。
2. 形式のバリエーションが豊富だろう。舩木（2007）や大西編（2016）によると、推量を表す形式には様々な出自のものがある。
3. 用法のバリエーションが豊富だろう。上の 2. と関連して、形式の出自が異なれば、その用法も異なることが予想される。

1.2. 共通調査の目的

この調査の目的は次の通りである。

(a) **日琉諸方言の推量表現に関わる形式をすべて捉える**：典型的な推量形式だけでなく、推量に関わる形式を全て収集することを目標とした。推量と他の意味領域とにまたがる形式を観察することで、推量と他のモダリティ的意味との関連を探ることが可能になると考える。

(b) **各形式の異同を方言内・方言間で比較できるようにする**：多くの方言では複数の形式が推量の意味・用法を担う。その場合、それらの形式はどの点で共通していて、どの点が異なるのか、が課題となる。また、異なる方言における推量形式を比較する場合も同様の課題が設定できる。これを解決するためには、それぞれの方言が共通の概念・例文を用いて調査されているのが良い。

(c) **調査結果を共有できるようにする**：調査結果は、今後、方言文法研究会のサイトで公開する予定である。日琉諸方言の推量表現に関わる研究者・学生のみならず、古典語研究・対照言語研究などにも寄与できると考える。ただし、現代の諸方言以外を扱う場合には、

調査項目の追加・修正が必要になろう。

2. 調査項目の設計方針

2.1. 可能な限り先行調査の質問文を踏襲する

先行調査との比較を目的として、この方針を立てた。ただし、本調査の設計方針や調査項目間の連関との間に齟齬が生じる場合は、設計方針・項目間の連関のほうを優先した。参照した先行調査は、国立国語研究所（1994,1999,2002）およびその準備調査、舩木（2006)、全国方言分布調査およびその準備調査の調査票である。また、調査票の構成として風間（2011）も参考にした。

2.2. 標準語の「だろう」の用法をベースにする

推量表現の諸用法を調査する項目の作成に際して、暫定的に現代標準語の「だろう」の用法を基本とした（日本語記述文法研究会編 2003、宮崎ほか 2002 などを参照した)。ただし、「だろう」が推量の典型的な用法を持つと考えているわけではない。標準語「だろう」の研究が最も進んでいるために、それを参照した。このため「だろう」にない用法の調査項目は手薄になっている。本発表でいただいた意見や、各地の調査で得られた結果に基づいて改善していきたい。

2.3. 推量表現に隣接する意味・用法もカバーする

いわゆる推量用法だけでなく、「あのとき寝坊しなければ、今頃は就職が決まっていただろう」のような反実仮想用法、「そんなことをしたら痛いだろう？」のような確認要求用法、「本当だろうか」のような疑い用法、「誰がそんなことをするだろうか（いや、誰もしない)」のような反語用法、「なんて綺麗な景色だろう」のような感嘆用法など、非推量用法も調査する。さらに、「どうやらあの人は役場に行くようだ」のような様態用法や、「よし、私が行こう」のような意志用法など、標準語の「だろう」が持たない用法も調査項目に含めている。これは、1.1 の 2、3 で述べたように、様態や意志を表す形式が推量の用法も担うことがあるためである。

2.4. 否定証拠も収集する

この調査では、「……」という文で「○○」のところをどのように言いますか、のような方言翻訳式の調査に加えて、当該方言で非文法的になる文や語句の情報も収集する。例えば、対象とする推量形式が過去・否定・条件・中止形などの活用形を持つかどうか（「だろう」はいずれも持たない)、「もしかして／どうやら／幸い」などの副詞類と共起するかどうか（これらの副詞は「だろう」とは相性が悪い)、他のモダリティ形式との共起や、従属節での生起など、対象とする推量形式が「できない」ことも積極的に収集する。

2.5. 非研究者への調査を前提として設計する

本調査項目は、一般の話者（研究者ではない協力者）に対して調査することを前提として

いる。そのため、(a)可能な限り調査項目数を抑える、(b)設定した文脈が伝わるようワーディングに注意を払うことを心がけた。ただし上の 2.4 のように、方言翻訳式の調査方法に混じって、当該方言に存在しない形式や共起関係を確認する項目があり、話者を混乱させる可能性がある。また、細かな意味・用法の違いを捉えきれないというデメリットもある。それぞれの地域では、この調査を出発点として、さらなる意味記述が期待される。

3. 調査項目の構成と概要

本節では調査項目の概要を示す。質問文番号は調査項目と同一で、[ ]に入れて示している。紙幅の都合上すべてを掲載することが不可能なため、項目の説明と代表的な調査例文をあげるにとどめる。そのため以下では質問文番号が連番になっていない。調査項目全体は参考文献に示した場所で公開している。適宜参照されたい。

なお、以降の発表で調査票の質問番号を参照する場合、[ ]で括った質問番号を例文の末尾に付す。また、調査例文に付した「*」「?」「??」などの記号は、標準語の「だろう」では使用できない/不自然になることを表す。

3.1. 推量形式の確認

3.1.1. 推量形式の認定

ここでは、対象方言で「推量」の意味を表すために用いられる形式を引き出すことを目的とする。これに加えて、次の点を確認するために質問項目を設定した。

a) 推量形式が動詞述語・名詞述語・形容詞述語・形容動詞述語（もしあれば）すべてと共起できるのか、それとも一部の品詞とのみ共起するのか。

b) 推量形式が述語のどのような形と共起するのか。これによって推量を表す形式が、屈折接辞として現れるのか、あるいは終助詞のように文を終止する述語形態に付加されるのか、あるいは助動詞のようなふるまいをするのかを確認できる。例えば、関西方言のヤロは動詞にも（イクヤロ）、名詞にも（学生ヤロ）、形容詞にも（赤いヤロ）、形容動詞にも（元気ヤロ）接続できる。一方、従来の静岡方言のラは動詞（行くラ）、形容詞（赤いラ）にはそのまま接続するが、名詞（*学生ラ）や形容動詞（*元気ラ）には直接接続できない。

c) 活用型によって異形態が現れるか否か。例えば、過去推量を表すツローは、子音語幹動詞の語幹末子音が g、m、n の場合にヅローという異形態が現れる。

[1]録〔友達から「あの人は今日役場に行くだろうか」と聞かれ、迷いながら〕
たぶん行くだろう。

：

[18]録この着物はたぶん高いだろう。

：

[20]録あそこは、車が通らないので、たぶん静かだろう。

[21]録あしたはたぶん雨だろう。

加えて、当該方言に否定推量、過去推量、「のだ」推量、丁寧推量のように、推量と他の文法的意味が 1 つの形式で表される現象の有無を確認する項目もある。ビョン（津軽・秋田）、ヨーモン（福岡）、チャロ（熊本・鹿児島）など、共通項目では対応していない形式については、各方言で適宜例文を用意してもらう。

[22]録〔友達から「あの人は今日役場に行くだろうか」と聞かれ、迷いながら〕
　　{たぶん／まさか} 行かないだろう。

：

[27]録〔友達から「あの人は昨日役場に行っただろうか」と聞かれ〕行っただろう。

：

[32]録〔友達から「あの人は旅行に行きたがらないのに、どうして今回は行くのだろうか」と聞かれ〕仲の良い人に誘われたから仕方なく行くのだろう。

：

[37]録たぶん行くでしょう／行きまっしゃろ。

3.1.2. 形態変化の確認

推量形式自体の形態変化を確認する。

[42]　行く［　　］た　　cf. *行くだろうた
[43]　行く［　　］ない／行く［　　］でない　　cf. *行くだろうない／行くだろうでない
[44]　行く［　　］ならば　　cf. *行くだろうならば
[45]　行く［　　］て　　cf. *行くだろうて

3.1.3. 副詞との共起

調査対象とする形式が推量の意味を持つか否かを、副詞との共起で確認する。

《推量形式と共起しやすい副詞類》

[46]　{たぶん／きっと／おそらく} 行くだろう。

[47]　{さぞ／さぞかし} 喜ぶだろう／嫌がるだろう／寒いだろう。
（程度性を持つ述語と共起）

[48]　まさか行かないだろう。　（否定の述語と共起）

《推量形式と共起しにくい副詞類》

[49]　{もしかして／もしかしたら／ひょっとすると} ??行くだろう。
（「かもしれない」や「のではないか」類と相性がいい副詞）

[50]　{どうやら／どうも／みたところ} ??行くだろう。
（視覚情報に基づく推論と相性がいい副詞）

[51]　{聞いたところによると／噂では} ??行くだろう。　（伝聞情報と相性がいい副詞）

[52]△{嬉しいことに／幸い／運悪く} ??行くだろう。　（断定形と相性がいい副詞）

[53]△たしか??行くだろう。　（「と思う」と相性がいい副詞）

3.1.4. その他

キャンセル可能性と否定のスコープに入るか否かを確認する。

[54]　??あの人が行く[　　]。でも、行かない[　　]。
　　cf. あの人が行くかもしれない。でも、行かないかもしれない。
[55]　*あの人が行く[　　]んじゃない。行くんだよ。
　　cf. あいつが行く｛かもしれない/はずな｝んじゃない。行くんだよ。

3.2. バリエーションの把握

3.2.1. 共起関係

他の認識的モダリティ形式、丁寧形式、終助詞類との共起を調査する。

[56]　行くかもしれない[　　]　　cf. ｛*たぶん/　ほら｝行くかもしれないだろう↑
[57]　行くらしい[　　]　　cf. ｛*たぶん/??ほら｝行くらしいだろう↑
：
[60]　行く[　　]かもしれない　　cf.*行くだろうかもしれない
[61]　行く[　　]らしい　　cf.*行くだろうらしい
：
[64]　行きます[　　]。　　cf.行きますでしょう/行きますやろ
[65]　行く[　　]｛です/ます/す｝。　　cf.*行くだろうです/行くべす

[66]　行く[　　]｛か/かい/け　など｝　《疑問系》　cf.行くだろうか
[67]　行く[　　]｛ね/な/じゃん　など｝　《確認要求系》　cf.行くだろうね

3.2.2. 従属節への生起

[70]　??行くだろう｛人／とき｝を教えて　《連体節》
[71]　??あの人が行くだろうならば、彼は行かないだろう　《仮定条件》
[72]　??旅行に行くだろうために、お金を貯めた　《目的理由》
[73]　　あの人も行くだろうから、私も参加する　《原因理由》
[74]　　あの人は行くだろう｛が／けど｝、私は行かない　《逆接》
[75]　　あの人は行くだろうし、お土産も買ってくるだろう　《並列》
[76]　　行くだろう(と)言う　《「言う」の補文》
[77]　　行くだろう(と)思う　《「思う」の補文》
[78]　??あの人が行くだろう(か)知らない　《間接疑問（真偽疑問）》
[79]　??誰が行くだろう(か)知らない　《間接疑問（疑問詞疑問）》

3.2.3. 推量に隣接する意味・用法

[80]録もし雨が降れば、運動会は中止になるだろう。　《仮定条件の帰結》
：
[83]録あんなところに一人で行くだろうか（いや行かない）。　《反語（真偽疑問）》
[84]録そんな大変な仕事を誰がするだろうか（いや誰もしない）。　《反語（疑問詞疑問）》
[85]録うーん、あの人が行くだろうか。　《疑い（真偽疑問）》

[86]録うーん、あの人だったらどこに行くだろうか。　《疑い（疑問詞疑問）》
[87]　なんとよく食べるんだろう（か）。　《感嘆（動詞）》
[88]録なんと美しいんだろう（か）。　《感嘆（形容詞）》
：
[91]録ほら、同級生に高木っていた(のを覚えてる)だろう？ あの背の高い男の子。
《確認要求-知識確認の要求-潜在的共有知識の活性化》
[92]録何をするんだ。そんなことをしたら危ない(のがわかる)だろう。
《確認要求-知識確認の要求-認識の同一化要求》
[93]録長旅で疲れただろう。　《確認要求-命題確認の要求-弱い見込み》
[94]録ここのラーメン、なかなか美味いだろう。《確認要求-命題確認の要求-強い見込み》
[95]録ちゃんと宿題やってきただろうね。　《確認要求-だろうね》
[96]録〔封筒を持って歩いている人を見て〕
あの人はどうやら役場に｛行くようだ／行くみたいだ／行くらしい｝。　《様態》
：
[98]録〔布団を干そうとしている人に〕今日は雨が降るかもしれないよ。　《可能性》
[99]録彼は私より 2 つ下だから、今年で 30 になるはずだ。　《必然性-はずだ》
[100]録あの人はいい背広を着ていい車に乗っている。きっと金持ちにちがいない。
《必然性-にちがいない》
[101]録今にも雨が降ろうとしている（降りそうだ）。　《将然「とする」（非過去）》
：
[105]録よし、私が｛行こう／行くべ｝。　《意志》
[106]録今度ご飯でも食べに｛行こう／行くべ｝。　《勧誘》
[107]録さて、行こうか。どうしようか。　《意志の自問》
[108]録〔子供に〕トイレぐらい一人で｛行こう(よ)／行くべ｝。　《行為要求（命令）》
[109]録絶対に、言うまいぞ。　《行為要求（禁止）》
[110]録 なんだべや。　《談話標識（自分では判断がつかない事態について述べる）》
[111]録 あなたはすごいべ。　《終助詞的用法》

4. 京都市方言の推量表現

本節では「推量表現 共通調査項目」を用いた調査の一例として、京都市方言の推量関連表現の簡単な報告を行う。京都市方言では推量表現として「ヤロ(ー)」（以下、ヤロで代表させる）を用いることが知られている。これは標準語の「だろう」と出自が同じ形式で、ふるまいも「だろう」とほぼ同じである。ただし、共通調査項目によって、2 つの特徴（「だろう」との違い）を捉えられる。以下、順に述べる。(( )の例文番号は本発表の通し番号)

4.1. 丁寧形式とヤロの共起

標準語では「でしょう」があるため「だろう」が丁寧形式と共起できないが、京都市方言では共起できる。またマッシャロ（＜マス+ヤロ）、ドッシャロ（＜ドス+ヤロ）もある。

(1) たぶん｛行きマスヤロ／行きマッシャロ｝。[37]　　cf. *行きますだろう
(2) たぶん｛高いデスヤロ／高いドスヤロ／高いドッシャロ／たこオスヤロ｝。[38]
(3) たぶん｛楽デスヤロ／楽ドスヤロ／楽ドッシャロ｝。[39]

4.2. 「のだ」推量形式のバリエーション

当該方言では、「のだ」相当の意味を表す形式として、ンヤ、ノヤ、ニャ、ネン（過去事態の場合には中止形の語幹にテンを付した形；例「行っテン」）がある。これらに対応して、「のだ」推量の形式にも、ンヤロ、ノヤロ、ニャロ、ネンロがある。ただしネンロは比較的新しい形である。（以下の例で調査票番号に「改」を付したものは、例文を変更して調査を実施したことを示す）

(4) なんで行く｛ンヤロ／ノヤロ／ニャロ／ネンロ｝。[1 改]
(5) a. なんでとる｛ンヤロ／?ノヤロ／?ニャロ／?ネンロ｝。[9 改]
　b. なんでとん｛*ンヤロ／ノヤロ／ニャロ／ネンロ｝。[9 改]
(6) この着物はなんで高い｛ンヤロ／ノヤロ／?ニャロ／ネンロ｝。[18 改]
(7) なんで静か｛なんヤロ／?なノヤロ／*ニャロ／ヤネンロ｝。[20 改]
(8) なんで行かん｛*んヤロ／ノヤロ／ニャロ／ネンロ｝。[22 改]

ンヤロとノヤロ、ニャロは音韻的な条件にもとづいて使い分けられるが、これら 3 形式に用法上の違いは見られない。一方、ネンロはこれらよりも用法が限られるという特徴がある。

(9)〔友達から「あの人は旅行に行きたがらないのに、どうして今回は行くのだろうか」と聞かれ〕仲の良い人に誘われたから仕方なく行く｛んヤロ／ノヤロ／ニャロ／??ネンロ｝。[32]
(10)〔旅行に行くのを嫌がっていた相手が旅行の準備をしているのを見て〕
　あんなに嫌がっていたのに、どうして行く｛んヤロ／ノヤロ／ニャロ／ネンロ｝か（と思う）。[36]

引用文献

大西拓一郎編（2016）『新日本言語地図』朝倉書店
風間伸次郎（2011）「テーマ企画：特集　モダリティ　まえがき」『語学研究所論集』16, pp.29-55, 東京外国語大学
国立国語研究所（1994,1999,2002）『方言文法全国地図 第 3～5 集』大蔵省印刷局
日本語記述文法研究会編（2003）『現代日本語文法 4 モダリティ』くろしお出版
舩木礼子（2006）「推量表現」「様態表現」「確認要求表現」大西拓一郎編『方言文法調査ガイドブック 2』科研報告書
舩木礼子（2007）「推量とその分布」『日本語学』26(11), pp.148-155, 明治書院
宮崎和人・安達太郎・野田春美・高梨信乃（2002）『新日本語文法選書 4 モダリティ』くろしお出版

ウェブサイト

推量表現 共通調査項目 https://x.gd/xczAi
全国方言分布調査（FPJD） https://www2.ninjal.ac.jp/hogen/dp/fpjd/fpjd_index.html
方言文法研究会 第 1 サイト https://hougen.sakura.ne.jp
方言文法研究会 第 2 サイト https://sites.google.com/view/hogenbunpo/home
（すべて 2024/10/08 最終閲覧）

広島県三次市方言の推量関連表現

日高水穂（関西大学）

1. 広島県三次市方言の推量関連表現の注目点

本発表では「推量表現 共通調査項目」による調査に基づき，広島県三次市方言の基本的な推量表現形式ジャロー形および oR 形（いわゆるウ・ヨウ形）の用法について述べたうえで，推量関連表現としてジャーナーカとその省略形ジャーナーおよびジャーと，山口方言の文末詞ジャとの比較を試みる。

広島県三次市方言では，推量表現および推量関連表現として以下の表現が使用される（動詞「行く」を前接する形で示す）。

① 断定形＋ジャロー形：{イク／イッタ} ジャロー

② oR 形：イコー／イッタロー

③ oR 形＋ジャーナーカ：{イコー／イッタロー} ジャーナーカ

④ 断定形＋ジャーナーカ：{イク／イッタ} ジャーナーカ

①のジャローは「だろう」に相当する形式である。②の非過去 oR 形（イコー）は，意志形と同形であり，単独では意志の意味が強く表れるため推量表現としては用いにくいが，過去 oR 形（イッタロー）は意志の意味が現れないため単独でも推量表現として使用可能である。また，oR 形は，③のようにジャーナーカを後接すると推量の意味が補強され，この場合，非過去 oR 形も推量の意味で用いることができるようになる。ジャーナーカは「ではないか」に相当する形式であるが，標準語の「行こうではないか」が意志・勧誘の意味になるのに対し，この方言の「oR 形＋ジャーナーカ」は推量表現としても用いられ，またイコージャーのようにナーカを略した表現も可能である点が標準語の「ではないか」とは異なる。

この方言のジャーナーカは，標準語の「ではないか」と同様に，断定形に後接する④のような用法も持つ。④は推量ではなく，確認要求の表現となるが，特筆すべきは，この場合もイクジャーのような省略形を用いることができる点である。このジャーは，山口方言の文末詞ジャ（舩木 2001）と機能が近いが，山口方言のジャが上昇音調をとるのに対して，下降音調をとる点でナーカを省略した形であるという由来を維持しており，ここに「ではないか」相当形式が文末詞化する文法化の過程を観察することができる。

2. 先行研究

2.1. 広島県三次市方言の意志・推量形式

まず，小西（2017）の活用表と本文の解説から，広島県三次市方言の意志・推量形式を整理して示す。

表１　広島県三次市方言の意志・推量形式（小西 2017 より）

	動詞「書く」	形容詞「赤い」	形容名詞述語「静かだ」	名詞述語「学生だ」
意志	カコー			
推量	カコー※ カクジャロー	アカカロー アカェージャロー	シズカジャロー シズカナカロー シズカナロー	ガクセージャロー
否定推量・否定意志	カクマー			

※を付したカコーのような形（非過去 oR 形）については，「単独では用いにくく，終助詞を伴う形で現れる。終助詞が意志・推量の意味の区別を助けているものと思われる。」として，以下のような例文があげられている。

・ハナコモ　ソノ　バングミュー　{ミョーテ／ミルジャロー（テ)}。(花子もその番組を見るだろう（よ)。)

・ハナコガ　モースグ　ココエ　{コーデ／クルジャロー（デ)}。(花子がもうすぐここに来るだろう（よ)。)

後述する本発表の三次市方言話者は，oR 形の推量の意味を補強する形式として，上記の例文に見られる終助詞テのほかに，ジャーナーカを用いるが，この表現はカを省略したジャーナーや，ナーカを省略したジャーの形でも用いられる。ナーカを省略したジャーは，一見すると終助詞のようにも見えるが，隣接する山口方言では実際に，同様の機能をもつ終助詞ジャの使用が確認される。

2.2. 山口方言のジャについて

山口方言には断定辞のジャとは別に文末詞ジャがある。舩木（2001）は，「山口方言の文末のジャが標準語の「ではないか」「じゃない(か)」(田野村 1988 の第Ⅰ類)にほぼ置き換えられる場合，暫定的にこれを文末詞とし」，文末詞ジャの生起する文環境について，以下のような特徴を指摘している。

①接続面の特徴:文末調ジャは体言だけでなく形容動詞，形容詞，動詞，助動詞などの用言にも後接し，文の末尾に位置する。なお，山口方言の文末詞ジャは，標準語のジャナイカは共起しない推量の助動詞ジャロウ／ウ・ヨウとも共起する。

・体言：おっ，誰かと思ったら○○さんジャ↑。(○○さんじゃないか)

・形容詞：どうしたの，ずいぶん顔が白いジャ↑。(白いじゃないか)

・動詞：ほお，金賞か。おまえもやるジャ↑。(やるじゃないか)

・助動詞：多分あいつは｛打つジャロージャ/打トージャ｝↑。(打つだろうよ，ねえ)

②用言とはいっても，ジャは命令，依頼，意志，勧誘などのデオンティックな表現とは共起しない。

・命令：*おまえが行けジャ。(*行けじゃないか)

・依頼：*百円貸してくれジャ。(*貸してくれじゃないか)

・意志：*よし，僕が行コージャ。(行こうじゃないか)

・勧誘：*一緒に行コージャ。（行こうじゃないか）

③音調面の特徴：体言に文末詞ジャが接続する場合には，文末イントネーションが上昇（↑），上昇下降(↑↓)のどちらかとなり，下降(↓)にはならない。

文末詞ジャが上昇となるか上昇下降となるかは意味によってきまり，例えば(a)A1 は上昇下降，(a)A3 は上昇となるが，その逆は不自然に感じられる。

(a) A1：去年の球技大会の時，焼き肉を食べたジャ↑↓。（食べたじゃないか）

B2：そうだったっけ？

A3：ええ，忘れちゃったの？「炭屋」で食べたジャ↑。（食べたじゃないか）

なお，推量の助動詞ジャロウ／ウ・ヨウに文末詞ジャが後接する場合，上昇イントネーションは共起するが上昇下降イントネーションは共起しない。これにも，文末詞ジャとイントネーションのそれぞれの意味が関わっていると思われる。

(b)*A1：次の打席であいつはヒットを｛打つジャロージャ／打トージャ｝↑↓。

B2：そうかなあ？　あいつ，今日は調子悪そうだよ。

A3：いや，あいつならきっと｛打つジャロージャ／打トージャ｝↑。（打つだろうよ，ねえ）

（舩木 2001：100-101，一部省略・例文番号を改変）

上記の記述は，山口県出身の発表者の内省にも概ね一致するが，異なるのが推量形式に後接するジャ（発表者はジャー）の音調が下降調になる点である。

・多分あいつは｛打つジャロージャー／打トージャー｝↓。

この違いは，以下で観察する広島県三次市方言話者のジャーの音調との比較により，段階的な言語変化の過程を示す現象として理解される。

3. 調査結果

【調査概要】

・実施：2024 年 1～3 月

・調査方法：対面およびオンラインによる面接調査。共通調査項目の例文の方言翻訳式。

・調査協力者（話者Ａ）：広島県三次市出身（18 歳まで在住）の女性 1 名（1942 年生まれ，調査時 81 歳）

※　補助的に，発表者（話者Ｂ）（山口県柳井市出身（18 歳まで在住），1968 年生まれ）のデータも参照する。

※　例文は共通調査項目の例文番号を［1］と示す。また，調査の際は問題となる述語形式を中心に方言訳を求めたため，当該の述語形式のみをカタカナ表記で示す。

3.1. 推量用法

話者Ａにおいて単独で推量を表す基本的な形式は，ジャロー形と oR 形である。oR 形は，動詞の非過去形の場合単独では使用しにくいが，終助詞テ（「よ」相当）や接続助詞ケー（「から」相当）のような後続要素があれば使用できる場合がある。動詞過去形，形容詞，形容名詞述語の oR 形は，単独でも使用可能である。

(1) あの人はたぶん手紙を｛カクジャロー／*カコー／カコーテ（書くだろうよ）／カコーケー（書くだろうから）｝。[2]

(2)〔友達から「あの人は昨日役場に行っただろうか」と聞かれ〕イッタジャロー／イッタロー。[27]

(3) この着物はたぶん｛タカージャロー／タカカロー｝。[18]

(4) あそこは，車が通らないので，たぶん｛シズカジャロー／シズカナロー｝。[20]

(5) あしたはたぶんアメジャロー。[21]

oR 形は，「ではないか」に相当するジャーナーカおよびその省略形のジャーナー，ジャーを後接することにより，推量の意味が補強される。

(6) あの人はたぶん手紙をカコー｛ジャーナーカ／ジャーナー／ジャー｝。[2]

(7)〔友達から「あの人は昨日役場に行っただろうか」と聞かれ〕イッタロー｛ジャーナーカ／ジャーナー／ジャー｝。[27]

(8) この着物はたぶんタカカロー｛ジャーナーカ／ジャーナー／ジャー｝。[18]

(9) あそこは，車が通らないので，たぶんシズカナロー｛ジャーナーカ／ジャーナー／ジャー｝。[20]

ジャロー形にジャーナーカ，ジャーナー，ジャーを後接させた形の許容度は低いが，ジャーはほかの 2 形式に比べると許容される。

(10) あしたはたぶんアメジャロー｛??ジャーナーカ／??ジャーナー／?ジャー｝。[21]

(6) ～ (10) のジャーはいずれも，ジャーナーカのジャーと同じ「HL」の音調（文音調としては下降調）をとる。

話者Ｂは，(1) のような終助詞テを用いない，ジャーナー（カ）がジャナイ（カ）になる，という違いのほか，単独の oR 形はやや許容度が低く，特に (4) のような形容名詞述語の oR 形は用いない。また，oR 形＋ジャナイ（カ）は推量の意味では使用しない。一方，動詞・形容詞の oR 形＋ジャーは使用し，ジャロー形＋ジャーも自然な表現として使用する。ジャーの音調は下降調である。

3.2. 確認要求用法

話者Ａは，ジャロー形，oR 形を確認要求でも用いる。ただし，動詞の非過去 oR 形は，確認要求では用いることができない。

(11) キュー　ツケニャー　ケガ｛スルジャロー／*ショー｝。（気をつけなければ怪我するだろう？）

(12) ほら，同級生に高木って｛オッタジャロー／オッタロー｝。[91]

ジャーナーカ（ジャーナー，ジャー）が断定形に後接する場合は，「じゃないか」相当の確認要求の表現になる。

(13) キュー　ツケニャー　ケガスル｛ジャーナーカ／ジャーナー／ジャー｝。（気をつけなければ怪我するじゃないか。）

(14) ほら，同級生に高木ってオッタ｛ジャーナーカ／ジャーナー／ジャー｝。[91]

（13）（14）のジャーの音調は上昇調でも下降調でもよい。

話者Ｂも，ジャロー形，oR 形を確認要求で用いる。動詞の非過去 oR 形を確認要求で用いることができない点も同様である。単独の oR 形は，推量用法よりも確認要求用法のほうが許容度が上がる。断定形＋ジャナイ（カ）は標準語的に感じられ，方言会話では使用しない。一方，断定形＋ジャーは使用し，ジャーの音調は上昇調のみ可能である。

3.3. 意志・勧誘用法

話者Ａは，意志動詞の非過去 oR 形を，意志・勧誘用法で用いる。意志動詞の非過去 oR 形にジャーナーカが後接した場合，推量・意志・勧誘のいずれの意味も表せる。ジャーナーが後接した場合は推量の意味になり，意志・勧誘の意味では用いることができない。ジャーが後接した場合は推量・勧誘の意味になり，意志の意味では用いることができない。

（15）よし，私が｛イコー／イコージャーナーカ／*イコージャーナー／*イコージャー｝。［105］

（16）今度ご飯でも食べに｛イコー／イコージャーナーカ／*イコージャーナー／イコージャー｝。［106］

（16）のような勧誘表現に用いられるジャーの音調は下降調である。

話者Ｂも，意志動詞の非過去 oR 形を，意志・勧誘用法で用いる。意志動詞の非過去 oR 形＋ジャナイ（カ）は，推量の意味は表せず，意志・勧誘の意味となる。ただし，この表現は標準語的に感じられ，方言会話では使用しない。一方，非過去 oR 形＋ジャーは推量の意味になり，意志・勧誘の意味では用いることができない。

3.4. まとめ

以上により，広島県三次市方言話者Ａと山口方言話者Ｂの推量関連表現の適格性を比較すると，表 2 のようになる（動詞における当該形式の単独使用の場合の適格性を示す）。

表 2　推量関連表現の意味・用法ごとの適格性の比較

推量関連表現	話者Ａ（広島・80 代）				話者Ｂ（山口・50 代）			
	推量	確認要求	意志	勧誘	推量	確認要求	意志	勧誘
①ジャロー形	○	○	×	×	○	○	×	×
②動詞非過去 oR 形	×	×	○	○	×	×	○	○
動詞非過去以外の oR 形	○	○	×	×	△	○	×	×
③oR 形＋ジャーナーカ/ジャナイカ	○	×	○	○	×	×	(○)	(○)
oR 形＋ジャーナー/ジャナイ	○	×	×	×	×	×	(○)	(○)
oR 形＋ジャー	○	×	×	○	○	×	×	×
④断定形＋ジャーナーカ/ジャナイカ	×	○	×	×	×	(○)	×	×
断定形＋ジャーナー/ジャナイ	×	○	×	×	×	(○)	×	×
断定形＋ジャー	×	○	×	×	×	○	×	×

○：自然　△：やや不自然　×：不自然　(○)：自然だが標準語的

また，話者Ａ，話者Ｂのジャーおよび舩木（2001）のジャの音調を比較して示すと，表 3 のようになる。

表 3　ジャー（ジャ）の音調の比較

	話者Ａ（広島・80 代）	話者Ｂ（山口・50 代）	舩木（2001）（山口）
oR 形＋ジャー	下降調	下降調	上昇調
断定形＋ジャー	下降調・上昇調	上昇調	上昇調

古典語の助動詞「む」まで遡れば明らかなように，広島・山口方言でもかつては，語彙的な制限なく，意志・推量の両方を oR 形によって表していたと考えられる。ところが，意志動詞の非過去 oR 形が意志の意味に片寄るようになり，推量はジャロー形もしくは oR 形にジャーナーカ（ではないか）を後接する形によって表されるようになった。このジャーナーカは断定形に後接して確認要求を表す一方，カが略されてジャーナー，ナーカが略されてジャーの形でも使用されるようになった。

話者Ａはジャーナーカ，ジャーナー，ジャーを併用する段階にあり，ジャーの音調は oR 形に後接する場合も断定形に後接する場合も，ジャーナーカのジャーと同じ下降調を維持している。話者Ｂはジャーのみを使用する段階にあり，ジャーの音調は oR 形に後接する場合は下降調であるが，断定形に後接する場合は上昇調のみになっている。話者Ｂと同様に，舩木（2001）もジャのみを使用する段階の記述とみられ，ジャの音調は oR 形に後接する場合も断定形に後接する場合も上昇調である。ここで見られるジャー（ジャ）の音調が上昇調に固定していく現象は，この形式が「ではないか」の「では」に由来することが，意識されなくなったことを意味するだろう。

以上のように，広島県三次市方言話者Ａと山口方言話者Ｂおよび舩木（2001）の山口方言の記述には，段階的に進む「ではないか」相当形式の文法化の過程が観察される。

4.　おわりに

本発表では，広島県三次市方言を中心に，隣接する山口方言の記述を加えて現象の観察を行ってきたが，関東・中部方言のジャン（ジャー），九州方言のダイ（ダー，ダン）など，「ではないか」に由来すると見られる文末詞には，oR 形に後接する例が相当数見られる（藤原 1986）。広く全国の諸方言を俯瞰した上で，oR 形の意味変化と「ではないか」の文法化の連動関係を明らかにすることを，今後の課題としたい。

参考文献

小西いずみ（2017）「要地方言の活用体系記述　広島県三次市方言」方言文法研究会編『全国方言文法辞典資料集(3)活用体系(2)』科研費研究成果報告書
田野村忠温（1988）「否定疑問文小考」『国語学』152
藤原与一（1986）『方言文末詞〈文末助詞〉の研究（下）』春陽堂
舩木礼子（2001）「山口方言の文末に見られるジャについて―断定辞のジャと文末詞のジャ―」『阪大社会言語学研究ノート』3

沖縄語首里方言の推量関連表現

仲原　穣（琉球大学 非常勤講師）

1. はじめに

本発表では「推量表現 共通調査項目」を用いた調査で得られた用例により，沖縄県那覇市首里方言の基本的な推量関連表現ハジについて述べた後，その他の推量表現形式（ラ語尾，エーサニ，テー，アラニ，ガヤー）の特徴やハジとの相違点について述べる。

以下が首里方言の推量表現である。

1　連体形，否定形＋ハジ：（カチュル「書く」／カカン「書かない」）ハジ
2　ラ語尾（ラ語尾＋ハジ）：カチュラ「書くだろう」（カチュラ　ハジ「書くだろう」）
3　尾略形[1]，否定形＋エーサニ：（カチュ「書く」／カカン「書かない」）エーサニ
4　断定形＋テー／デー　：（カチュン「書く」）テー
5　否定形＋ヤ＋アラニ　：（カカンタノー「書かなかったのでは」）アラニ
6　尾略形＋ガヤー　　：（カチュ「書く」）ガヤー

1のハジは推量の「だろう」に相当する形式である。2のラ語尾，またはラ語尾に終助詞「ヤー」が付き，推測の「だろう」になる。3のエーサニは推量的な判断の「のではないだろうか」に相当する形式である。4の断定形＋テー（デーの場合もある）は「のでしょうね」を表す。5のアラニは否定形，あるいは否定形＋ヤ（～は）に付く形式である。6のガヤーは会話で用いられる際に「だろうか」に相当する形式としても用いられる。

2. 先行研究

2.1. ハジの先行研究

那覇市首里方言の推量表現形式ハジについて，国立国語研究所（1963：210）では「hazi ①（名）㊀筈。当然そうあるべきこと。cuuru ～ ’jaru Qcunu kuuN. 来るはずの人が来ない。（中略）㊁（主として，文末で）だろう。だろうこと。多分…だろうという推量の場合に用いる。Cuuru ～。来るだろう（来るはずだの意ではない）」と説明している（下線は引用者）。

仲原（2014）の活用表と本文の解説から，那覇市首里方言のハジの接続を示す。

	動詞「持つ」	形容詞「赤い」	形容詞述語「静かだ」	名詞述語「大学生だ」
推量	ムチュル ハジ ムチュラ ハジ	アカサル ハジ	シジカ ヤル ハジ	ダイガクシー ヤルハジ
否定推量	ムタン ハジ	アカコーネーラン ハジ	シジカー アラン ハジ	ダイガクシーヤ アラン ハジ

ARAKAKI（2016：27）は沖縄語のハジを「証拠様態の一つである推測エヴィデンシャル」とし，「確信度や情報の信頼性に関する判断を重視する傾向が見られた」と述べ，「推測の根拠が明確であること，また，その根拠の質が[日本語の「はず」と]異なる」としている。また，日本語の「はず」にある「さとり」の用法を沖縄語「ハジ」が所有していないことも指摘している。

崎原（2018：54）はハジの文が表せるモダリティーを分析し，「(1)《事実未確認（ポテンシャル）》」を「(a)〈推量〉」（〈推論〉〈推定・仮定〉〈推測・憶測〉〈確信〉）と「(b)〈反事

[1] 「尾略形」は動詞の断定非過去形の語尾-Nを省略した語形のことで，特定の助詞（接続助詞や終助詞の一部）が下接する。

実仮想〉に分け，「(2)《事実確認（レアル)》」を「(a)〈予定不実現〉(b)〈思い出し（記憶)〉(c)〈さとり〉(d)〈断定回避〉」と分類している。また，ハジの文について「《根拠》の有無だけでなく，直接確認による《根拠》か，パターン化された事象からの《根拠》なのかという《根拠》の種類も問わない。また，hadʑi の文の《根拠》は，その情報獲得の方向（視覚・聴覚等）も問わない。」と分析している。

2.2. ラ語尾の先行研究

首里方言のラ語尾は仲原（2014）の活用表に以下のように示されている。

	動詞「持つ」	形容詞「赤い」	形容詞述語「静かだ」	名詞述語「大学生だ」
推量	〔ガ〕ムチュラ	〔ガ〕アカサラ	〔ガ〕シジカ ヤラ	〔ガ〕ダイガクシー ヤル ハジ

国立国語研究所（1963：62）に「② 動詞のいろいろな形」の「融合語幹から」作られる語形の一つに「'junur-」に下接する「-a（読むだろうか)」があり，同（1963：67）に「'junura⓪（読むだろうか)」で「疑わしいと思う気持ちを表わす。文末に用いるほか，連用形の『中止法』のようにも用いる。sjumuçiga⓪ 'junura⓪（本を読むのだろうか。）読むこと自身が疑わしい場合には 'jumiga⓪ sjura①（読むのだろうか）となる。'junura⓪ hazi①ともいう。」と説明している。

このラ語尾に推量のハジが付いた語形について，仲原（2014：139）は「連用語幹の基幹ウ段に「ル」が付き，さらに「ハジ」(はず）が後接したものが推量形である。首里方言では現在 80 歳[1930 年代生まれの話者]以上の高齢者には「～ル=ハジ」と「～ラ=ハジ」の区別がみられる。「～ル=ハジ」は現代日本語の「はず」のように，「当然のこと」「道理」が元になり，「きっと～だろう」の意味を表すこともできる。しかし，「～ラ=ハジ」は，「ハジ」で言い切ることがあり，「もしかすると～かもしれない」のように確信度がやや低い場合に用いられることが多い。」と述べている。

一方，崎原（2018：42）では，このラ語尾＋ハジについて「-ra hadʑi は，推論の根拠がある場合や，話し手が確信している場合などにあらわれやすい。」と述べている。さらに，同（2018：54）で「つまり，-ra hadʑi のあらわれ方が意味的に限定されていて，-ru hadʑi の用例の方が制限もなく，使用数が圧倒的に多い。話者によっては-ru hadʑi しかあらわれない場合もあるため，時代の変化とともに，-ra hadʑi の使用は廃れ，-ru hadʑi が〈推量〉を表す専用形式になりつつあるかもしれない。」と述べている。

3. 調査結果

【調査概要】

・実施：2024 年１月～２月

・調査方法：臨地面接調査。共通調査項目の例文の方言翻訳式。

・調査協力者（話者Ａ）：那覇市首里出身・在住の男性１名（1940 年生まれ）

※補助資料として 2007 年，2014 年に調査した那覇市首里出身・在住の高年層（話者Ｂ：女性，1923 年生まれ)，（話者Ｃ：男性，1932 年生まれ）のデータも参照する。

※例文は共通調査項目の例文番号を[1]と示す。カタカナ表記（沖縄県 2022）で表記する。

3.1. 推量用法―ハジと'エーサニの併用状況

那覇市首里方言の推量形式のうち，最も使用例が多いのはハジである。話者Ａの場合，推

量形式，否定形式，過去推量形式など，ほとんどの例文で併用されている状況である。

(1) アンチョー ウーカタ ティガミ{カチュル ハジドー／カチュエーサニ}。[2]

(2) アマー, クルマヌ アッカンクトゥ, イーサコー{シジカ ヤル ハジ ドー／シジカ ヤエーサニ}。[20]

(3) アチャー ウーカタ アミ{ヤル ハジ ヤサ／ヤエーサニ}。[21]

(4) クヌ チノー ’エーディン{タカコーネーラン ハジドー／タカコーネーラン エーサニ}。[23]

(5) アヌチョー クヌグルンシェー イチュナサギサ ソータクトゥ，{イカンタル ハジドー／イカンタエーサニ}[28]

ただし，推量に隣接するさまざまな用法では，(6)に示した《様態》のようにハジとエーサニが供用できるものも一部みられるが，併用できない用例が増えてくる。エーサニに比べ，ハジの使用範囲が広いことがわかる。

以下の用例ではハジが使用できるもの（①②）と，使用できないもの（③④）に分かれる。

① ハジが用いられる（《反実仮想》用例(7)）

② ハジの他にエーサニ以外の形式が用いられる（《仮定条件の帰結》用例(8)）

③ ハジが併用できないがエーサニは使用できる（《確認要求-知識確認の要求-潜在的共有知識の活性化》用例(9)，《同-同-認識の同一化要求》(10)

④ ハジとエーサニのどちらも用いられず，別の形式が用いられる（《反語（真偽疑問）》用例(11),《反語（疑問詞疑問）》用例(12)),《疑い（真偽疑問）》用例(13)。《疑い（真偽疑問文》）

(6) アヌッチョー ウーカタ ヤクスンカイ{イチュル グトーン「行くようだ」；イチュル ハジドー／イチュエーサニ／イチュンテー「行くみたいだ」／イチギサン「行くらしい」}。[96]

(7) ’ウカサッサー。アヌッチュヤレー ヌーガ ヌーヤラワン イチュル ハジ ヤシガ。[81]

(8) ユーシ アミヌ フイドゥンシェー，ウンドークゥイヤ{クンディール ハジドー。／サノーアラニ}。[80]

(9) アネ, マジュヌーンカイ タカギンディシガ {’ウタエーサニ？／’ウタノー アラニ？}。アヌ フドゥヌ タカサル ウィキガ ワラビヨー。[91]

(10) ヌースガ。ウンナクトゥ シーネー ’ウカーサシェー ワカイエーサニ。[92]

(11) アングトール トゥクルンカイ チュイッシ{イチュガテー／イチュガヤー}。（アラン イカンシガ）。[83]

(12) アンネール デージナ シクチェー ターガ スガテー（アランサ{ターガン サンサ／ターヤティン サンヨー）。[84]

(13) アヌッチュガ {イチュガヤー／イチュガテー／イチュガテーヤー}。[85]

(14) アヌッチュ {ヤレー マーカイ イチュガヤー／ヤラー マーカイガ イチュラテーナー}。[86]

(7)(9)のノーアラニ「ではないか」のアラニは，直前にとりたて助詞ヤ「は」が必要となる（前の音と融合してノーに変化）。(11)～(14)の「だろうか」に用いられるテーとガヤーが供用される。さらに「だろうよ」相当のテーヤーが用いられる場合がある。なお，(14)では ga 結び形[2]（ラ語尾）＋テー＋ナー「の？」が下接する例も併用される。

[2] ラ語尾となる語形のうち，【ga 結び形】は係助詞 ga と呼応することで，推量・疑問文となる。例：ターガガ イチュラ。「誰が行くのだろうか」

3.2. 確認要求用法―ラ語尾と他形式との併用

このラ語尾に終助詞ヤーが付いた形式は[93]～[94]《確認要求-命題確認の要求》と[95]《確認要求-だろうね》で主に用いられる。

(15) ナガタビサーニ {'ウタタラヤー／'ウタテーンテー}。[93]

(16) クマヌ ラーメノー，'イーサクネー {マーサラヤー／マーサエーサニ}。[94]

(17) シカットゥ イーチケー {シッチャラヤー／シッチェーンデーヤー[3]}。[95]

このようにテー，デーやエーサニとも供用される《確認要求》の場合には，ラ語尾にヤーが付いた語形を用いる。ラ語尾だけだと推量形「だろう」にしかならないが，聞き手と共有した情報に対して確認，同意を求めるヤーが下接することによって聞き手への働きかけが生まれるとみられる。では，ヤー以外との組み合わせについてみてみよう。

以下の(18)(19)ようにワカラン（分からない）が後続する際にもラ語尾が用いられる。

(18) イチュガ スラ　ワカラン。イカンガ　スラ　ワカラン。［54]cf

(19) フイガ スラ　ワカランドー。[98]

(20) ターガ イチュガ スラ シラン。[79]

(18)～(20)はいずれも推量形のラ語尾にワカランやシランなど，話し手自身が確たる情報を得ていないことを示すことにより，「かもしれない」という《可能性判断》や《可能性》を示している例である。

3.3. 意志・勧誘用法

次の例は意志や勧誘を表す用法であるが，ハジ，エーサニは使用できない。

(21) トー，ワーガ {イチュサ／イチュンテー}。[105]

(22) クヌイチ ムヌンデー カミーガ {イカナ／イカニ／イカンナー／イチュンテーヤー}。[106]

用例(21)《意志》では話し手の意志や判断を伝える終助詞サと動詞の尾略形が結びついた例であるが，断定形に「テー」が付いた語形も併用される。この「テー」について仲原（2014）では「のだ」相当としたが，それは通常の「イチュン」に比べ，「イチュンテー」の方が話し手の意志を示すためである。「のだ」に相当する語形ではないが，その行為を行う意志を相手に伝える形式とみてよいだろう。なお，沖縄語には(21)以外にも志向形という意志を伝えたり，行為を予告したりする語形がある。その場合，ラ語尾と同じく-a 語尾になる。これは「未然形＋む」由来の語形であり，「む」が脱落したために未然形と同じく-a 語尾になったものである。用例(22)の《勧誘》の場合，動詞イチュンの否定形，イカンの志向形「イカ」に誘いを示す終助詞ナやニが付く語形が《勧誘》を示している。また，イカンナーは「行かないか」に相当する語形であり，テーの付いた語形が《勧誘》を示していることがわかる。

4. ラ語尾＋ハジ

最後に推量表現を示すラ語尾とハジが結びついた形式の用例をあげる。用例は仲原（2007：8）から引用する（表記は本発表の用例に合わせた（以下同じ）。また，原因・理由表現も代表的な例だけに限定した。詳しくは元の文献を参照。調査協力者は話者C）。

(23) ヤマウテー　ウフォーク フトータラ ハジ ヤクトゥ，ナダレヌ　シワ ヤッサー。
「山では多く降っていただろうから，雪崩が心配だ。」

(24) フカー フィーサラ ハジ ヤクトゥ，チノー カサビティ ʔンジラ。

[3] シッチェーンはシテアル形である。

「外は寒いだろうから，着物を重ねて出かけよう。」

(25) ナマヌ ヨーシカラシーネー アチャン アミ ヤタル ハジ ヤクトゥ， ’エンスコートゥヤミンカイ ナイラ ハジ。

「この様子からすると明日も雨だろうから，遠足は取り止めになるだろう。」

上記のように那覇市首里方言でラ語尾にハジが付いた形式が以前はみられた（話者Ｂ，Ｃの年代あたりまで。）。しかし，話者の年齢が下るにつれ，近年はラ語尾＋ハジの用例を集めるのが難しくなっている。

以下の(26)(27)のように，通常のル語尾＋ハジとラ語尾＋ハジとでは，意味にも違いがありそうである（用例は仲原 2014：139-140。今回の発表に合わせ，日本語訳を一部改めた。）ru 語尾＋ハジの方が語源「筈」の意味を少し残していると考えられる。

(26) アレー ガッコー’ウティ ビンチョーソール ハジドー。

「彼／彼女は[きっと]学校で勉強しているはずだよ。）

(27) アレー グテーヤクトゥ，ウヌアタイェー ムチュラ ハジ。

「彼／彼女は力持ちだから，[たぶん]そのくらいは持つだろうよ。」

5. まとめ

上記の例文(1)～(22)で使用されている首里方言の推量表現の使用状況をまとめた。例文番号は共通調査項目の番号である。

例文［番号］ 推量表現	2	20	21	23	28	96	81	80	91	92	83	84	85	86	93	94	95	54	98	79	105	106
連体形・否定形＋ハジ	＋	＋	＋	＋	＋	＋	＋	＋	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
尾略形・否定形エーサニ	＋	＋	＋	＋	＋	＋	－	－	＋	＋	－	－	－	－	－	＋	－	－	－	－	－	－
ラ語尾＋ヤー（その他）	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	＋	＋	＋	＋	＋	＋	＋	－	－
断定形＋テー／デー	－	－	－	－	－	＋	－	－	－	－	＋	＋	＋	＋	＋	－	＋	－	－	－	＋	＋
否定形＋ヤ＋アラニ	－	－	－	－	－	－	－	＋	＋	－		－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
尾略形ガヤー	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	＋	－	＋	＋	－	－	－	－	－	－	－	－

首里方言の推量表現ではハジ，エーサニの用例が多くみられる。今回の発表では「推量に隣接する意味・用法」の例を多く取り上げたため，ラ語尾やテーの用例も多いようにみえるが，使用範囲が限られている。現状ではハジが使える範囲が最も広く，制限が少ない。よってハジは《推量》に近く，エーサニは根拠を必要とする《推定》に近い形式とみることができそうである。今後は共通調査項目の全項目で上記のような分析をしていきたい。

参考文献

国立国語研究所（1963） 『沖縄語辞典』大蔵省出版局

崎原正志（2018） 「琉球語沖縄首里方言のモダリティ ： 叙述・ 実行・ 質問のモダリティ を中心に」琉球大学（博士論文）

TOMOKO ARAKAKI (2016) 「A Comparative Study of the Evidential/Epistemic Markers：*hazi* in Ryukyuan, *hazu* in Uchinaa-Yamatuguchi, and *hazu* in Japanese」『沖縄キリスト教学院大学論集』12, pp. 15-27, 沖縄キリスト教学院大学

仲原 穣（2007） 「沖縄県那覇市首里方言の原因・理由表現」方言文法研究会『全国方言文法辞典《原因・理由表現編》』pp. 2-9, 方言文法研究会

仲原 穣（2014） 「沖縄県那覇市首里方言」『全国方言文法辞典資料集(2)活用体系』, pp. 136-145, 方言文法研究会

高知方言の推量表現

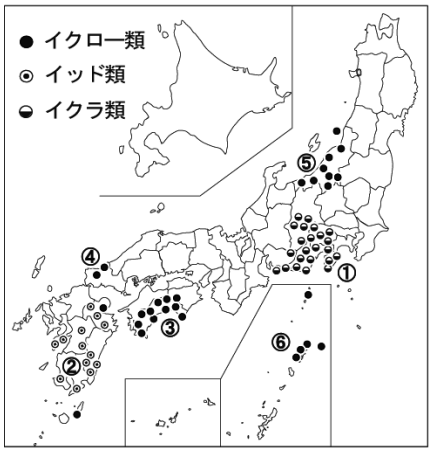
舩木礼子（神戸女子大学）

1. 高知方言の推量表現の注目点

高知方言の推量表現には，動詞や形容詞の終止形に接続する形式「ロー」がある（右図③）。ローは「らむ」に由来するといわれており，少なくとも幕末頃の資料には用例が確認できる。ただし，時期によってローの接続の制約が変化しており，また推量表現に関連するほかの形式（ウ／ヨウ，ヂャロー，マイなど）の使用状況も変わってきている。

この発表では，現在の高知方言のローがどのような使われ方をしているかを報告し，形態や接続の変化が何をもたらすかを考えたい。

図　ラム由来形式使用地域



（『方言文法全国地図 5』237 図より）

2. 接続の変化と意味の変化―先行研究から―

高知方言の推量表現形式ローについては，次の 2 つの指摘がなされている。

1 つめはローの接続の変化についてである（舩木 2000，2014）。1865 年頃の武市瑞山の消息をみると，まだ「だろう」相当形式が成立していないこの時期は，ロー（「ろふ」）は動詞や動詞接辞（丁寧マスを含む）の終止形に後接する例しか得られない。過去推量ではツローの用例が多い（わずかにタローもある）。またこの資料の用例では，ローは形容詞や否定辞などには付かない（ウ類やマイを使用）。それが，1935 年刊の土井八重『土佐の方言』（春陽堂）になると，ローは動詞だけでなく，否定辞ンにも，形容詞終止形にも後接するようになった（ただし「サムカロー」「ナカロー」などのウ類の推量形と併用）。この時期には「だろう」相当形式のヂャローも定着しているが，あくまで名詞・形容動詞語幹に接続するものだった。

(1) 此着物ははでになったけんどまだ一二年は着れるろー。（土井 1935:249）

(2) この干物はもちっとなましかったらおいしかっつろーに。（土井 1935:173）

(3) どーして一羽だけふとらんろー。（土井 1935:211）

(4) やーさんらーに泣かれちゃーなんぼかたまりなさいませんろー。（土井 1935:257）

(5) このかきゃ赤いけんど澁いろー。（土井 1935:259）

(6) あの置物はからつぢゃろか金属（かね）ぢゃろか（土井 1935:59）

この時点で，〈1〉動詞・形容詞にはローが後接する，〈2〉名詞・形容動詞語幹にはヂャローが後接する，〈3〉分析的傾向が進み，否定辞などにもローが後接するようになる，などの接

続上の変化が見られた。

2008 年になると，ヂャローがヤロー（若年層はヤオ）に変わり，動詞や形容詞にも付くようになった。一方で，形容詞に残っていたウ類の推量形や否定推量のマイ，過去推量のツローは使われなくなった。つまり，〈4〉ヤローの接続する範囲が広がってローと競合する状態となり，〈5〉分析的傾向の進行により融合形が衰退したといえる。

2 つめはローの担う意味の変化についてである。横井（1981）によると，1980 年頃には若年層（当時 20 歳の話者）が動詞などにヤローを接続する使い方を始めており，その場合はローとヤローで意味が異なっていると説明している。動詞＋ローは「発話者自身が判断を下した結果なされる主観的立場にたった表現」,「推量した事象について，それが起こるであろうという確信は大きい」,「推量した事象が起こることに対する疑問の気持ちは小さい」という。これに対して動詞＋ヤローは「不確実な推量」の意味で用い，「判断を下した結果のことなどあまり重視しない，ごく軽い気持ちでなす推量表現」だという。

この意味に関する指摘から 40 年経ったが，形式の交替に付随する一時的な現象だったのか，複数の形式による意味の棲み分けが定着したのか。現在の使用状況から検討してみたい。

3. 調査結果

【調査概要】

・実施：2024 年 2 月 15 日

・調査方法：臨地面接調査。共通調査項目の例文の方言翻訳式。

・調査協力者：高知市出身・在住の女性 1 名（1948 年生まれ，調査時 75 歳）

※　補助的に，2008 年に調査した高年層男性 2 人，若年層女性 2 人のデータも参照する。

3.1. ローとヤローの併用状況

結論から述べると，現在は，動詞・形容詞の終止形に接続するローと，動詞終止形・形容詞終止形・形容動詞語幹・名詞に接続するヤローとが，併用されている状況である。「イクロー」と「イクヤロー」には意味的な違いはほぼないようだ。なお，今回の調査協力者の世代はすでにジャロー（ヂャロー）は使わなくなっている。また，若年層が使う新しい形式ヤオも使用しない。以下，共通調査項目の例文番号を［1］と示す。

(7) タブン｛イクロー／イクヤロー／*イクジャロー／*イクヤオ｝［1］

(8) コノ　キモノワ　タブン｛タカイロー／タカイヤロー／??タカカロー｝［18］

(9) アノ　ヒトガ　ツクッタ　リョーリヤッタラ　タブン｛オイシーロー／オイシーヤロー／*オイシカロー｝

推量に隣接するさまざまな用法においても，ほとんどローとヤローは併用の状態にあり，どちらも使用できる（共通調査項目の仮定条件の帰結［80］，反実仮想［81］［82］，疑い［85］［86］，確認要求［91］［93］［94］［95］）。ただし，確認要求のうち「知識確認の要求・認識の同一化要求」［92］では，ローは使えるがヤローは非常に不自然で，否定疑問形「ヤッカー」や「ヤイカ」を主に用いる。

(10) イヤー　ソンナコト　シタラ{コワイロー／??コワイヤロー／コワイヤッカー}[92]

このことから，ローや否定疑問形は話し手の認識したこと（命題）を聞き手に押しつけ，同じ認識を持つよう迫る用法を持つが，ヤローにはこの用法がないか不安定で，ヤローは命題内容を推論したものとして聞き手に伝えて確認を求めるという，あくまで「推量」の範囲での用法しかないと説明できる。

ただし，若年層は「アブナイロー／アブナイヤロ／アブナイヤオ」がすべて使えるようになっており，若い世代ではヤロやヤオとローとの間に違いがない状態に至っている。

高知方言では推量形式のローやヤローは反語［83］［84］や感嘆［87］～［90］では非常に使いづらい。使ったとしても《疑い》の意味が強く，疑問の意味を持つ「ドレ」「ナンボ」を用いた感嘆文ではローが使えるが，疑問の意味を失っている「ナント」とは共起しない。

(11) ダレガ｛スルノヤロカ／スルローカ（ゆ)｝[84]

(12) ナント　マー　ヨー｛タベルネー／*タベルロー｝[87]

(13) (飲み過ぎる人にあきれて)｛ドレバー／ナンボ｝ノムローネァ（※2008 年調査）

なお，高知方言のローやヤローは，東北地方の「ベー」のように感動詞化，終助詞化するところまでは運用的な拡張が進んでいない（例文［110］［111］)。

3.2. 否定推量形式の分析的傾向と形式の隆盛・衰退

動詞否定推量形式には否定辞＋ローを専用しており，否定辞＋ヤローやマイは使わない。形容詞の否定推量形式としても，この調査協力者はナイ＋ローを使っており，ナイ＋ヤローは使わないという。すでにウ類による「ナカロー」は使わなくなっている。

(14) タブン｛イカンロー／*イカンヤロー／*イクマイ｝[22]

(15) タコーナイロー／*タコーナイヤロー／*タコーナカロー［23]

(16) アメヤナイロー／*アメヤナイヤロー／*アメヤナカロー［26]

高年層においては，否定推量の形式は「-ンロー」か「ナイロー」で固定化され，ヤローはまだ否定辞やナイへの接続が認められていないといえる。ただし中年層や若年層は「イカンヤロ」「イカンヤオ」も使用するようになっている。

3.3. 「のだ」＋推量形式

高知方言のローは「のだ」の意味を含んだものとして使われているように見える。準体助詞ガ／ンを使用する場合は，名詞接続に準じてヤローを使用する。

(17) ナカノ　エイ　ヒトニ　サソワレタキ　シカタノー｛イクンヤロー／イクロー(ゆ)｝[32]

(18) アノ　キモノダケ　ベツノ　トコロニ　シモーテ　アルキ　タブン｛タカインヤロー／タカイロー（ゆ)｝[33]

(19) ドーイテ｛イクガヤロー／イクンヤロー／*イクロー｝[36]

今回の調査協力者は（17）（18）では誘導確認をすると使用すると答え，(19) では「イクロー」を「意味はわかるが言わない」と回答したが，少し上の世代に 2008 年に調査した際はローを使用し，また聞き手に直接に質問する（22）でもローが使えるとのことだった。

(20)「どうしてこんなに雨が<u>降るのだろう</u>」《疑い》

ナゼ　コンナニ　アメガ｛フルロー／フルガヤロ｝（※2008 年調査）

(21)「あいつ，旅行かばんなんか持って，一体どこに行くんだろう？」《疑い》

イクガヂャオ(カ)／イクガヤロカ／イクガヤオ(カ)／イクローカ(ゆ)(※2008 年調査)

(22) オマー　ドコ｛イクロー／イクガ｝？《聞き手への質問》（※2008 年調査）

高知方言では「のだ」が未分化な段階にあってローがこうした振る舞いを見せていたが，準体助詞「ン」「ガ」が成立した現在もこうした状況が残るのは，ローが動詞や助動詞，形容詞といった活用する語にしか後接できない（準体助詞に付かない）という接続上の制限をもつためでもあると考えられる。

3.4. 丁寧推量形式の状況

今回の調査協力者は，丁寧体使用場面では「標準語」を使用するため，動詞＋デショー，形容詞＋デショーを使用する。動詞＋マスローや形容詞＋デスローは不使用だが，理解語彙であり，自分より上の世代のことばとしてなら「イキマスロー」「タカイデスロー」なども使ったと述べている。

(23) タブン｛イクデショー／#イキマスロー／*イキマスヤロー／イキマスデショー｝[37][64]

(24) *イクローデス／*イクヤローデス［65］

(25) タブン｛タカイデショー／#タカイデスロー｝[38]

(26) タブン｛アメデショー／#アメデスロー｝[40]

つまり，高知方言の推量表現では，京都や大阪の「イキマッシャロ」のように，丁寧形式に推量専用形式のローが後接するという分析的な用法が一旦は成立したが，丁寧形式が必要な場面は標準語スタイルを選択するようになり，現在はデショーに取って代わられたといえる。また，丁寧形式にはヤローが付かないことから，丁寧推量ではローの領域にヤローが浸透して置き換え可能になる前に標準語形デショーに移行したといえるだろう。

4. まとめ

高知方言のローとヤローは接続上の使い分けがあったが，近年この使い分けが変わりつつあり，文末のモダリティ形式の再編が進んでいることを報告した。ローとヤローに意味的な違いは認められなかったが，否定推量や丁寧推量などにヤローが使えないなど，細かくみれば完全に置き換え可能にはなっていないことがわかった。しかし，名詞に接続しないというローの特徴は変わっておらず，そのことが「のだ」＋推量などに影響していると考えられることなど，接続が用法に関与する可能性も確認できた

参考文献

国立国語研究所編（2002）『方言文法全国地図 5』財務省印刷局
土井八枝（1935）『土佐の方言』春陽堂（復刻版：国書刊行会，1975 年）
舩木礼子（2000）「幕末以降の土佐方言における意志表現・推量表現形式の変化」『地域言語』12
――――（2014）「高知方言にみる推量表現形式のバリエーションと機能の変化」『日本語学会 2014 年度秋季大会予稿集』
横井真紀子（1981）「高知県中央部方言における推量表現」『高知女子大國文』17

「“よい”文法記述」について考える

―分類・周辺・例外・理論といかに向き合うか―

質疑応答用
QR コード

【発表構成】

司会者……三好伸芳（武蔵野大学）
発表者……阿久澤弘陽（京都大学）、大江元貴（青山学院大学）、鈴木彩香（千葉大学）、井戸美里（国立国語研究所）
指定討論者…井原駿（津田塾大学）

趣旨説明（三好伸芳）……5 分
発表［1］：分類といかに向き合うか（阿久澤弘陽）…… 15 分
発表［2］：周辺といかに向き合うか（大江元貴）…… 15 分
発表［3］：例外といかに向き合うか（鈴木彩香）…… 15 分
発表［4］：理論といかに向き合うか（井戸美里）…… 15 分
休憩……5 分
指定討論者からの発議（井原駿）…… 15 分
質疑応答…… 35 分

1. パネルセッションの趣旨と背景

本セッションでは、「“よい”文法記述」とはどのようなものかという点について、多くの文法研究者が直面するであろう研究上のタスクを取り上げながら、具体的な事例とともに議論することを目的とする。背景として、以下のような問題意識がある。

(1) a. “よい”文法記述を実現するために必要な技術的な問題については、あまり議論される機会が少なく情報の集積も十分でない。
b. 文法研究コミュニティにおける暗黙の了解を可視化し、建設的な議論や他分野との接触を活性化させたい。

→文法研究に際して頻出する問題やその対処法については、部分的に触れた論考が存在するものの（後述）、表立って議論されることは少ない。「“よい”文法記述」について考えることは、研究者のすれ違いを解消し、より建設的な議論を可能にしてくれるだけでなく、これから文法研究を志す人にとって極めて有益な知見を提供することができる。
→今回は探索的な試みとして「言語直観を用いて現代日本語共通語の文法研究を実践している発表者（＋理論的研究を実践している指定討論者）」という構成でパネルセッションを行うが、ぜひそのようなコミュニティの外側からの問題提起（歴史的研究、方言研究、理論的研究、自然言語処理、日本語教育などの立場からの批判）も期待したい。

“よい”文法記述を実践するためには、言語事実の分類や一般化、分析結果の新規性の検証など、さまざまな技術的問題が生じる。例えば田窪（1998：34）は、分類という作業に関連し以下のように述べている。

> しかし、特定の語、構文を取りあげて、その用法を分類することが日本語という一言語の特徴、ひいては、言語そのものの特徴の解明にどのような寄与をするのかは、あまり明らかではない。その語、その構文の用法の分類は、説明されるべき現象の提示であり、説明の対象を構成するだけである。それらの形式がなぜ複数の振る舞いをするのか、複数の形式がなぜ重なり合う分布をするのかを、分類に使った基準より少ない数の基準で説明するか、あるいは、別のすでに一般的になっている基準から導出するか、ができなければ一般化とはならない。（田窪 1998：34）

→ただ分類を行うだけでは、むやみに概念装置を増やして記述を複雑化させてしまうという可能性がある。つまり、“よい”分類とは、「分類基準や概念装置を最小限に抑えつつ、より多くの言語事実の振る舞いを説明できるもの」であるということになる。
→一方、田窪（1998）の指摘は『国語学』展望号において多くの論考を取り上げるなかで部分的に分類についての留意点を述べたものであり、研究の技術的問題そのものが議論の俎上に載せられているわけではない。

また、小柳（2020：72）は歴史的研究の論文の書き方について解説しているが、現代語の文法記述と通底する論点も指摘されており、論文の評価を左右する観点として「(1) 内容の新規性」と「(2) 問題の重要性」を挙げている。

> (1)（引用者注：「内容の新規性」のこと）は不可欠です。すでに言われていることから出なければ、論文を発表する理由がありません。（小柳 2020：72）

> また、(2)（引用者注：「問題の重要性」のこと）は（1）とも密接に関係します。内容に新規性があっても重要な問題を取り上げていなければ、学術的な価値は低いと言わざるをえないからです。（同：72）

→学術的研究である以上は、新規性が求められることは当然のことである。加えて、新規のことがらであっても、暗黙のうちに自明のものと了解されている（通説に対するインパクトが弱い）論考は、それほど重要ではないということになる。
→小柳（2020）の指摘は学会誌のチュートリアル企画という文脈でなされているものであり、論文を執筆するうえでの有益な解説が多くなされているが、「何をもって重要と見なすのか」などの踏み込んだ議論はない。

2. 「“よい”文法記述」のための観点

上記のほかにも文法記述の技術的な問題について扱った論考は散発的に見られるが[1]、例えば比較言語学の分野において仮説を評価する観点に一定の基準があるのに比べ[2]、文法記述においては議論の余地が多く残されていると思われる。そこで本パネルセッションでは、少なくとも次のような観点が「“よい”文法記述」を実践する際に重要になると考え、各パネリストがそれぞれの研究事例を題材として発表を行う。

(2) a. **正確性**…言語事実を正確に一般化することができているか。
b. **経済性**…より少ない概念や単純な規則のもとで，広範な言語事実を説明できるか。
c. **明瞭性**…提示されている概念や規則が客観的で明示的なものになっているか。
d. **新規性**…既出の知見や自明の事柄ではなく，新しい事実を捉えられているか。

→これらの観点に十分配慮すれば「“よい”文法記述」が実現することはある意味で当然と言える（もちろん、これらの観点が全てというわけではない）。しかし、各観点の緊張関係によって両立が難しい場合もあり、完全に実現することは必ずしも容易ではない。

以下、各観点の簡単な説明とともに、どのような場合に各観点の対立が生じるのかを、助詞「は」を例に概観していく（併せて、対応する論点を持つ発表を紹介する）。助詞「は」には、周知のように「主題／対比」という 2 つの用法があることが指摘されている。

(3) a. 太郎<u>は</u>学生です。 〈主題〉
b. 嘘<u>は</u>言えない。（本当のことしか話せない。） 〈対比〉
(4) a. 太郎｛??<u>は</u>／<u>が</u>｝学生であることは秘密だ。
b. 嘘｛<u>は</u>／<u>が</u>｝言えない私だが、本当のことなら話せる。

→「は」に「主題／対比」という 2 つの用法を認めることは、母語話者の直観だけでなく、(4) のような連体修飾節における現れ方という別の事実を説明するという点でも、一定の妥当性を有しているように思われる。つまり、「は」を 2 つの用法に分類するのは、より言語事実を正確に捉えているという点で**〈正確性〉**という観点に沿った記述と言える。

---

[1] 森山（2010）が文法記述の過程を具体的に説明しているほか（ただし、やはり分類や一般化などにおける技術的問題に対する言及は少ない）、山泉（2019）は研究コミュニティ―が抱えるバイアスとそれが言語分析に与える影響について論じている。

[2] 平子他（2024：46）は比較言語学について概説する中で、祖語の再建は「自然性（naturalness）、経済性（economy）、一般性（generality）」という 3 つの観点から評価されるという明瞭な基準を示している。音韻変化は身体的・生理的な制約を受けやすいという違いはあるが、「技術的論点と評価の基準に一定の合意がある」という点は、議論の透明性という点で極めて重要であると考えられる。

一方で、分類を立てるということは必然的に説明すべき概念が増えるということを意味し（**阿久澤発表**）、以下のような論点が生じうる。

（5）　a.　「は」の意味はあくまでも一元的なものに帰着させることが可能であり、「主題／対比」は個別の文脈における解釈の差でしかないのではないか。

b.　「主題／対比」を標示する形態は必ずしも言語普遍的なものとは言えないないため、より一般的と思われる概念（「旧情報／新情報」など）に還元できるのではないか。

→上記のいずれかの分析を採用した場合、より少ない概念で「は」を記述できるかもしれないので**〈経済性〉**の観点からは好ましい。一方、〈経済性〉の追求によって過度に記述が抽象化する可能性（**鈴木発表**）や日本語研究とは別の文脈で生じた理論的な概念の援用によって二次的な論点が生じる可能性（**井戸発表**）も考慮すべきである。

→このように、しばしば分類という操作においては〈正確性〉が〈経済性〉と（あるいは、後述する〈明瞭性〉とも）対立することがある。

さらに、「は」についてより詳細な言語事実を明らかにするために、以下のようなあまり典型的とは言えない事例を検討し、「話題（aboutness）」のような分類を新たに立てたとする。

（6）　a.　あの形<u>は</u>雲が綿アメみたいですね。

b.　刺身<u>は</u>マグロだ。

→このような周辺事例は十分に分析が行き届いていないことが多いので新たな事実を発見しやすく、**〈新規性〉**の観点と親和性が高い（場合によっては分類概念そのものが〈新規性〉を持つ）。しかし、このような周辺事例を分析するための概念はしばしば臨時的なものになりやすく、誰でも参照できるような**〈明瞭性〉**（「主題」との違いは何か、どのように区別されるのか、など）を慎重に検討する必要が生じる（**大江発表**）。

→上記の事例は、用法の違いを正確に捉えようとしつつ分類概念を増やしている点で、前述の〈正確性〉、〈経済性〉とも密接に関連している。本パネルセッションでは、上記のような課題を踏まえたうえで「“よい”文法記述」を実践するための方法を考えていきたい。

［付記］
本研究は JSPS 科研費 23K12174 の助成を受けた成果である。

【参考文献】

●小柳智一（2020）「歴史研究の論文」『日本語文法』20-1，pp. 71–78．／●田窪行則（1998）「文法（理論・現代）」『国語学』193，pp. 31–38．／●平子達也・五十嵐陽介・トマ ペラール（2024）『日本語・琉球諸語による歴史比較言語学』岩波書店．／●森山卓郎（2010）「文法記述の舞台裏」『日本語学』29-2，pp. 14–20．／●山泉実（2019）「言語学の理論的研究を阻害する諸バイアス」『日本語・日本文化研究』29，pp. 44–72，大阪大学大学院言語文化研究科日本語・日本文化専攻．

分類といかに向き合うか

阿久澤弘陽（京都大学）

1.　はじめに

文法記述において分類は(ほぼ)不可避の作業である。多くの場合，分類は現象に接近するための第一歩であり，被説明項の構成・限定にも必須である。“よい”分類とは，①何らかの形にサポートされる，②明確な基準があり(=明瞭性を満たし)相互排他的である，③網羅的である，④理論的基盤がある，といった基準をできる限り満たすものであるというのが一般的な見解であろう(田窪 1998 を参照)。特に，分類自体が何らかの理論的(例：説明概念になる)または実践的(例：言語教育において有効である)な目的の達成を志向する場合においては，上記の基準をできるだけ遵守することが望ましい。

しかし，言語現象には連続性があるのが常であり，必ずしも全ての現象が明瞭な基準によって切り分けられるわけではないし，また，表層的な分類では捉えきれない微細なニュアンスが文法記述に有効なこともある。同時に，分類の粒度も重要である。細かい分類粒度による現象の整理は、記述の精度を上げ個々の事実を的確に捕捉するという正確性に資する反面，現象限定的な記述ともなり得るという意味で経済性の低減と表裏一体である。こうした点に，自然言語の分類という作業の技術的な難しさがある。

本稿では，発表者の既発表論文における(述語の語彙意味)分類の省察を通して，上記④の理論的基盤に依拠することが分類において最も重要であることを示す。以降，2 節・3 節では，個々の具体的な分類事例を紹介し，①②③がいくぶんか犠牲にされても，④によって分類は価値を失わないことを示す。4 節ではさらに踏み込んで，④が分類と不可分であることを論じる。なお，先行研究を含む各々の分類方法と分析の是非を問うことが本稿の目的ではないことをあらかじめ断っておく。

2.　「つもりだ」の語法研究と分類

態度述語の「(x が P)つもりだ」には様々な用法が観察されている。多くの先行研究が挙げる代表的なものとして,「転職するつもりだ〈意志〉」「宿を予約したつもりだ〈思い込み〉」「旅行に行ったつもりで，貯金する〈仮想〉」がある。その他，文脈的な微妙な意味合いの違いを反映して,〈錯誤〉(吉川 1989),〈意図〉(中村 2017),〈評価〉(角田 2011),〈仮想〉と〈思い込み〉を統合した〈信念〉(高梨 2016),〈想定〉〈予想・予定〉(中村 2017)など，少なくとも 9 の用法名が確認できる。

こうした分類は，形にサポートされるとも，分類に明確な基準があるとも言えず，それぞれの概念が相互排他的でないので網羅的である保証もない。しかし，それらをもって即この分類に価値がないと断ずることはできない。なぜなら，語法研究においては分類が現象の正確な理解に向けた第一歩であり，それが現象分析の見取り図となるからである。すると必然的に，分類は，それそのものではなく，分類の妥当性を支える理論的基盤によって評価され

ざるを得ないということになる。

上記の分類は,「つもりだ」という形式の意味を精査する足がかりとなる。代表的な用法に絞って,「つもりだ」の語彙意味をめぐる分類に関する議論を素描すると次の通りである。〈思い込み〉と〈仮想〉は，態度保持者 x の P に対する信念的な意味を持つことから,〈意志〉対〈思い込み・仮想〉という対立が「つもりだ」の意味に接近する際に適切な粒度の分類であるとされることが多い(高梨 2016; 川島 2020 など)。

阿久澤(2022)は，これに対し,〈思い込み〉にも x の〈意志〉的行為が P の成否に「責任を負う」という「責任関係(responsibility relation, Farkas 1988)」が認められること，および，それが〈仮想〉では認められないことを示し(具体的な対立は(1)を参照されたい),〈意志・思い込み〉と〈仮想〉という分類が「つもりだ」の語彙意味を分析するうえで適切な分類(の粒度)であると考えている。

(1) a. ?? 太郎は薬を飲み忘れたつもりだ。〈思い込み〉

b. 太郎は子どもになったつもりで，遊んだ。〈仮想〉(a, b：阿久澤 2022: 40, 36)

ここで注視すべきは，阿久澤(2022)の分類も，基準 A と¬A のような閉じた分類ではなく，その点で，相互排他的・網羅的である保証はなく，1 節冒頭の②③を(厳密な意味では)満たさない。また,〈仮想〉は従属節に現れやすいという傾向があるものの，明確に形にサポートされる分類であるとも言いきれず，その意味で①も限定的な形でしか満たさない。

したがって，この分類の価値は理論的基盤を持つか否かで測られるしかない。先に述べた通り，阿久澤の分類は「責任関係」という汎用的な意味概念が分類への動機を駆動している。これによって，それが実際に成功しているかは別問題として,「つもりだ」の語法研究を「意図報告(intention report, Grano 2017)」というより広範なモダリティ研究の文脈に位置づけられることに強みがある。例えば，英語の意図報告述語 intend との差分を検証できるようになるわけである。

このように，文法形式の分類を単なる眼前の事実の記述的分類に留めずに，分類がより広い文脈の中でいかなる位置づけを持ち，それが根源的な「何か」を明らかにできる視座となり得るかという視点が，分類においては重要であると思われる。

3. コントロール述語の語彙的意味と分類

生成文法におけるコントロール現象(主節の先行詞と埋め込み節主語の義務的な照応関係)は，その成立環境をめぐって，統語的・意味的観点から多くの議論がある。Akuzawa and Kubota (2024, 以下 A&K)は，コト節(=時制を伴う定形節)に見られるコントロール(例えば(2))は，コントロールは述語の意味的性質によって引き起こされるという立場をとり，該当する述語の語彙意味を精査している。

(2) ケン $_i$が[$\varnothing_{i/*j}$ 転職する]ことを決意した。

一見すると，コト節をとる述語は意味的に雑多であるという印象を受ける。これを，A&K は(3)のように分類している。

(3) コト節をとるコントロール述語の意味分類と述語例：

a.　試行(attemptive)：試みる、取り掛かる、手間取る
b.　態度(attitudinal)：決意する、決心する、企てる、遠慮する、断念する
c.　行為拘束(commissive)：誓う、表明する
d.　叙実(factive)：後悔する、反省する、自負する
e.　含意(implicative)：成功する、失敗する、自粛する、没頭する
f.　アスペクト(aspectual)：始める、続ける、止める
g.　属性(dispositional)：秀でる、長ける、苦手だ

この分類も，「つもりだ」の語法分類と同様，1 節冒頭の②③の基準をクリアしないし，①も(一部の意味クラスを除き)限定的にしか満たさない。したがって，例えば，「(3)の分類は各々が相互排他的でなく，妥当な分類とは言えない」といった批判は成り立つし，これは，ある面からは極めて正当な批判である。一例を挙げると，「態度」に振り分けられている「断念する」は「含意」的意味も持つのではないか，といった類の批判である。

しかし，2 節でも述べたように，分類としての不十分さが即分析の価値を毀損するわけではない。こうした意味分類は，似た振る舞いを見せる雑多な集まりに共通する「何か」を見つけるにあたって有効であり(Vincent 2024: 632)，むしろ，(必ずしも厳密でない)何らかの基準による分類を切り口として，そこから鍵となる意味概念を特定するというのが標準的な接近法の一つであるとも言える(例えば Jackendoff and Culicover 2003)。

A&K の主張の核心は，(3)の分類そのものにはなく，そこで示される述語群に共通して見られる意味的特性が，*de se* 態度(Chierchia 1989)と責任関係(Farkas 1988)であると論じた点にある。また，(3)の分類に基づく語彙意味の精査によって，長年議論されている埋め込み節述語の時制形態素の分布の謎(例：なぜ「～たことを試みる」は許容されないか)に一定の説明を与えた点にもある。2 節での議論と同様，コントロールの語彙意味分類の価値も，そこから得られる理論的含意によって測られるのである。

当然，異なる理論的仮定(=(3)の述語群の補文は実質的には不定形節であるという仮定)に基づく陣営からの A&K への直接の批判として，例えば Fujii et al. (2023)があるように，論争は依然決着を見ておらず, A&K の主張は広く合意を得たものではない。しかしこれは，分類そのものに対する批判ではなく，経験的事実を基にした議論の応酬であり，研究という営為におけるプロセスの一つに過ぎない。

4.　分類といかに向き合うか

1 節冒頭で示したように，分類という作業において守るべき(暗黙の)指針は存在する。①②③は比較的マニュアル化しやすく，理解しやすい。特に②③は，その明確さと分かりやすさから，「モレなく，ダブりなく(mutually exclusive/collectively exhaustive; MECE, Minto 2021: 117)」という名を冠して，特にビジネスの世界において論理的な思考法として広く浸透している。

MECE は，しかしながら，一見理想的に思えても―それが手順としてある程度有益であることは間違いないが―，“よい”分類の必要条件ではない(し，十分条件でもない)点に留意

が必要である。実際に，自然言語の文法記述においてはこの指針を遵守できない場合もある。その際，提出された分類がいかなる文脈でどういう意味を持つのかを明示すること，すなわち，④の理論的基盤が分類の妥当性を直接・間接に支えるものとなる。したがって，MECE 的な考え方に基づいて紋切り的な視点でのみ分類を評価する態度は，手続き主義に陥る危険性があり望ましくない。

④が重要であることは，分類という作業自体が，程度の差はあれ何らかの分類者の理屈に支えられているということからも分かる。池田(1992: 94)は，「分類することは重要な基準を選ぶこと自体」で，「分類することは世界観の表明であり，思想の構築」であると述べている。分類という作業には，研究者による何らかの基準の選定―分類粒度の決定もここに含まれる―が必須であり，つきつめると，分類は主観的なものでしかあり得ないということである。それをデータとロジックで客観的と思えるものに近づけていくというのが分類という作業なのではないか。

そう考えると，冒頭の判定基準はあくまでも客観性を上げるための指針でしかなく，これに従えば完璧無比な分類ができるわけではない。分類とは，①②③と④を行き来して作り上げる作業であると言ってもよく，分類の技術的な難しさは，分類の過程や結果を理論的な観点―これは当然，形式化を志向する理論に限定されない―から繰り返し問うことで乗り越えるしかない。1 節において，④の理論的基盤に依拠することが分類の技術的な難しさを解消する道筋になると述べたが，むしろそれ無くして分類という作業は成立しないのである。よって，分類が MECE 的であっても，その分類の背後にある分類者自身の「思想」を提示できなければ，分類の価値は判断しがたいということになる。

上記の議論をふまえると，一見マニュアル化が容易そうな分類という作業ですら，職人技的な側面を持つと言える。一朝一夕には得難い技能であるが，先行研究の概念を精査のうえ借りてくることで，不明瞭な基準やアドホックな(=経済性の低い)基準を立てることを避ける方策の一つとすることはできるだろう。当然，①②③を常に念頭に置いて眼前のデータをできるだけ正確に記述することは前提として，である。

5. おわりに

前節までの議論に基づいて，本稿の結論をまとめると以下の通りである。

(4) 分類の“よさ”は，手続き自体の正確さや厳密さの欠如によって即その価値が減じられるのではない。分類概念や導かれる結論が，いかなる理論的含意/広がりを持つのかという理論的基盤によっても判断される。

(5) 分類という作業自体が既に多分に理論的であり，“よい”分類は理論と不可分である。

これはつまり，冒頭の分類基準を不十分な形でしか満たさず，一見すると明瞭性や経済性が低い分類であっても，分類外の体系に対して有益な知見を含む可能性があるということになる。こうした職人技による分類を，MECE 的でないとして棄却せず，広く受け入れて集合知とし，現象の本質的な理解につなげることが求められる。

分類がマニュアルに従ってなされない以上，その体系は必然的に複雑性を帯びるし，紛

れも生じる。さらに観察可能なデータの限界といった理由から，時には分類に，各研究者の嗜好，思想，信念が入り込むことがあるかもしれない。したがって，眼前のデータの表面的で「きれいな」分類に固執せずに，分類者が責任をもって分類の理論的基盤を明示することが欠かせない。ここでの理論的基盤は，分類が思想の構築であるという前提に立って，研究者の分類を動機づけるナラティブと言い換えてもよい。

研究の積み重ねとともに，様々な分類体系はそれら相互の関係性が一見しただけでは読み取りにくくなる。こうした集合知を研究コミュニティでいかに共有するかを模索する必要も出てくる。例えば，GrammarXiv（成田ほか 2024，Kubota to appear）のようなオープンアクセスデータベースを活用するなどして，分類体系の複雑性を鳥瞰できるようにすることも重要であろう。

主要参照文献

阿久澤弘陽(2022)「「つもりだ」の意味的特徴」『日本語の研究』18-1: 36–52.

Akuzawa, Koyo and Yusuke Kubota (2024) The lexical semantics of finite control: A view from Japanese. *Natural Language and Linguistic Theory* 42: 849-896.

Fujii, Tomohiro, Hirotaka Ogawa, and Hajime Ono (2023) Tense Alternation Generalization revisited: A reply to Akuzawa and Kubota. *Gengo Kenkyu* 164:111-123.

池田清彦(1992)『分類という思想』新潮社.

川島拓馬(2020)『歴史的観点から見た「文末名詞文」の研究』筑波大学博士論文.

Minto, Barbara (2021) *The pyramid principle: Logic in writing and thinking (3rd rev. ed.)*. Harlow: Pearson Education Limited.

成田広樹・小林亮一朗・竹内士瑛伊・小町将之(2024)「照応表現「自分」をめぐる諸問題：GrammarXiv を用いた論点整理と将来的展望」『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』55: 89-113.

高梨信乃(2016)「「つもり(だ)」をめぐって：意志表現の指導の観点から」『神戸大学留学生センター紀要』22: 1-20.

田窪行則(1998)「文法(理論・現代)」『国語学』193: 31–38.

Vincent, Nigel (2024) Raising and control. In Mary Dalrymple (ed.), *Handbook of Lexical Functional Grammar*, 603-647. Berlin: Language Science Press.

付記

本稿の内容は JSPS 科研費 JP24K16053 の研究成果の一部である。

周辺といかに向き合うか

大江元貴（青山学院大学）

1. はじめに

■ 問題の所在

❑ 文法記述が周辺現象にまで及ぶということは、多くの場合その領域における典型的現象の記述が一定の到達点に達したということの証であり、研究の前線を押し広げる試みとして歓迎すべきものである[1]。また、個人の研究活動としても、典型的現象を扱う場合には膨大な先行研究の知見の蓄積を踏まえた上で独自性を打ち出していく必要があるのに対して、周辺現象は記述の蓄積がそれほどない場合が多く、〈新規性〉を訴えやすいというメリットがある。

(1) a. 【典型】動詞や名詞など概念的な意味内容を持つ語類 ↔ 【周辺】感動詞や応答詞など談話場の状況と密接に結びついた語類

b. 【典型】「太郎が来た後に次郎も来た」のような“累加”の「も」 ↔ 【周辺】「太郎ももう二十歳かあ」のような“詠嘆”の「も」

❑ 他方で、周辺であるがゆえに伴う難しさもある。特に(1)に挙げたような文法研究においてすでに一定の地位を確立している周辺現象ではなく、ほとんど未開拓の現象を主題に据えて文法記述を行おうとする場合には以下のような困難に向き合う必要がある。

(2) a. 【記述の難しさ】当該の現象がそもそもどのような現象であるか文法研究の中に定位し、分析の視点や道具立てを模索するところから始めなければならない。探索的に進める部分が大きくなる分、記述の〈明瞭性〉を確保するハードルが高くなりやすい。

b. 【意義づけの難しさ】周辺現象は往々にして使用場面や話者の属性などの面で強い制約がかかる。なぜわざわざそのような制限色の強い現象をとりあげるのか、単なる落穂拾いと見られないような（できるだけ多くの研究者に面白いと思ってもらえる）訴え方が求められる。

[1] あるカテゴリーにおいて何らかの基準である対象を中心に据えたとき、その中心事例と共有する特徴が多いほど「典型」、共有度が下がるにつれ「周辺」に位置づけられる（cf. 仁田 1995）。したがって、何を「典型／周辺」と見るかは、どのようなカテゴリーを想定し何を中心に据えるかによって変わり得るものと考える。(1)についても言語研究の進展の経緯の中で「典型／周辺」に位置づけられてきたという意味合いで提示するものであり、一方が言語研究にとってより重要であるとか言語にとってより本質的だというような価値づけの意味合いは含まない。

■ 本発表のねらい

❑ 周辺的な終助詞を扱った大江（2018）において発表者がどのような「記述の難しさ」「意義づけの難しさ」を感じ、その困難にどのように向き合ったかを紹介しつつ、周辺現象を主題とする文法研究における“よい”記述について検討する。

2. 事例の紹介

❑ 大江元貴（2018）「現代日本語共通語における終助詞ガ、ダ」『日本語文法』18(2)

(3) a. そんなことしたらだめでしょうが。
b. 嫌だよーだ。

■ 「記述の難しさ」「意義づけの難しさ」

❑ 文法記述は通常、規則性（パタン）に関する一般化を含むものであり（cf. 森山 2010、窪田 2019）、規則性の抽出には何らかの比較が不可欠。

❑ 終助詞の文法研究では、対立的な終助詞の比較、終助詞が後接しうる文としえない文の比較、終助詞がある文とない文の比較などを通して、終助詞がどのような意味を表しているかを特定していくという方法が採られることが多いが、「が」「だ」はそのようなアプローチが難しい。

(4) a. 「寒いよ。」vs.「寒いね。」
b. 「食べたさ。」vs.「?食べようさ。」
c. 「寒いね。」vs.「寒い。」

❍ 「が」「だ」と意味的に同類あるいは対立する終助詞が見当たらない上に、前接する文のパタンが極度に限られるため、様々な文を比較検討することができない。

(5) a. 「が」:「...推量形＋が。」
b. 「だ」:「...よーだ」or「{ふん／いー／べー／へへーん} だ。」

❍ 「が」「だ」がある文とない文を比べても、意味がそれほど変わらないように感じる。

(6) a. そんなことしたらだめでしょう {が／∅}。
b. 嫌だよー {だ／∅}。

❑ 以上の困難性は、「が」「だ」は他の終助詞との接点を見出しにくく、使用可能な統語環境が極めて限定され、意味的貢献も小さい、ということを示している。

❍ そのような言語形式をそもそも終助詞とみなして良いのか？そのような孤立した形式をとりあげて分析することの意義とは？

■ どのように向き合ったか

❑ 「が」「だ」を典型的な終助詞群と比較し、心的態度を「付加する」終助詞に対置される、心的態度を「顕示する」終助詞として位置づける。

(7) 終助詞には、先行する発話と独立して認められる独自の心的態度を先行する発話に新たに「付加する」ものと、先行する発話によって表明される心的態度を「顕示する」ものがある。ガ、ダは「顕示する」終助詞の典型である。(大江 2018: 91)

❍ 前接形式が極端に限定されること（：統語的限定性)、前接する文で表される態度と同じ態度しか表さないため常に省略可能であること（：意味的依存性)、それ自体が「が」「だ」の特徴。

❍ ただし、「顕示する」の内実については必ずしも明瞭ではなく、「顕示する（際立たせて示す)」というのがどのような意味論的・語用論的なふるまいなのかに関する具体的な議論は行えていない。＝〈明瞭性〉の点での課題

❑ 「終助詞は心的態度を表す」と言われてきたが、その表し方に少なくとも異なる 2 つのタイプがあるという新しい理解の仕方ができるようになった。

❍ 付加タイプは全て動詞基本形につくという事実は当たり前すぎてこれまで少なくとも明示的には言及されていなかった。＝「典型性の再発見」

❍ これまでの終助詞記述（ひいては文法記述全般）が「付加」的な捉え方に引っ張られすぎていたのではないかという問題に気づく。＝「暗黙の前提の発見」

(8) ① 質問・反問 「おや、今朝はどうしたんだい？」
② けいべつ、さげすみ、投げやりの気持をこめた反ばく 「なにいってるんだい」
③ 語気を強める。念を押す気持 「火をつけろい」
（国立国語研究所 1951: 10）

(9) 「太郎ももう二十歳かあ」の「も」自体が詠嘆を表しているわけではないという指摘（榎原 2018、西畑 2022）

3. 周辺といかに向き合うか

■ 「周辺現象」といかに向き合うか

❑ 周辺現象の文法記述の意義の 1 つに、「文法分析・文法記述のきめの細かさを高める」(仁田 1995: 48）ということがあるが、これはどちらかと言うと周辺「も」観察することの意義。周辺「だからこそ」の意義を考えると、その醍醐味は既存の記述が前提とするパラダイムの相対化・更新を促す潜在力の高さにある（定延 2000)。

(10) 「周辺主義」
周辺に置かれている現象がすべてそうだというわけではないが、それらのうち

一部の現象は、既成の理屈では根本的に説明ができない、つまり理屈に合わない現象だからこそ、そのような周辺的な扱いを受けていると考えられる。したがって、言語研究の前提を掘り下げていこうとする時には、こうした『周辺的』で『非合理的』な現象に着目することが有効である。　（定延 2000: 7）

- ❑ 終助詞の周辺現象の事例その 2
  - ❍ 子供を相手としたモノローグでは、既存の「よ」の記述には収まらない（不自然になることを予測する）「よ」の使用が観察される。「よ」における周辺現象(11)は、既存の「よ」の記述があくまで「成人同士の対話」を前提としていたことを浮き彫りにするとともに、「よ」の文法は談話ジャンルごとに異なりうるという文法観を取り入れることを要請する（大江 2024）。

    (11)　はじめまして！僕の名前は「ごみぶくろう」だよ！みんな仲良くしてね！

    ［豊中市伊丹市クリーンランド「ごみぶくろうのページ」https://www.city.toyonaka.osaka.jp/kurashi/gomi_risaikuru_bika/cleanland/sosiki_gaiyo/gomibukurou.html 2024 年 9 月 30 日最終閲覧］

    (12)??〔自己紹介場面で〕はじめまして、（僕の名前は）田中ですよ。
  - ❍ register, dialect の性格を色濃く持つ現象は、現代日本語共通語の文法研究においては周辺的な位置に置かれ記述が後回しにされる傾向にあるが、だからこそ、そのような現象を排除して蓄積されてきた文法記述の前提や限界を浮き彫りにする大きな可能性を有する。今後、記述文法研究が踏み込んでいくべき周辺領域の 1 つ（cf. 野田 2011）。
- ❑ まとめ

  (13)　周辺現象を主題とする文法記述の“よさ”（優位性）は、その現象の記述や意義づけを難しくしているのはそもそも何なのかという問題にまで立ち戻ることで最大限に活かされる。

■ 「周辺現象研究」といかに向き合うか

- ❑ 「記述の難しさ」を克服するために新たにどのような視点や道具立てを導入したか、「意義づけの難しさ」を乗り越えて典型的現象を含む全体の体系や既存の研究が依拠するパラダイムをいかに更新したか、といったところまで提示できればなお良いが、そこまでいかずとも、まずは周辺現象が伴う問題を共有すること自体の価値を積極的に認めるべきである。
  - ❍ 周辺現象に向き合う際に生じる難しさをどのように克服するかは一研究者が一論文内で負うべき課題であると同時に、研究コミュニティで分かち合うべき課題である。
  - ❍ 「記述の難しさ」「意義づけの難しさ」の克服までを常に求めることは、周辺研究への参入障壁を高くし、結果的に「周辺」を「周辺」のまま放置させることにもつながりうる。

参照文献

榎原実香（2018）「文の階層構造から見たモの周辺用法の分類」『日本語文法』18(2), pp.110–126, 日本語文法学会.

大江元貴（2018）「現代日本語共通語における終助詞ガ、ダ」『日本語文法』18(2), pp.76–92, 日本語文法学会.

大江元貴（2024）「子供向けモノローグに現れる特異な「よ」」『日本語文法』24(2), pp.3–19, 日本語文法学会.

窪田悠介（2019）「理論的研究とは？」衣畑智秀（編）『基礎日本語学』pp.260–282, ひつじ書房.

国立国語研究所（1951）『現代語の助詞・助動詞：用法と実例』集英出版.

定延利之（2000）『認知言語論』大衆館書店.

西畑宏紀（2022）「いわゆる詠嘆のモをめぐって」『日本語文法』22(2), pp.3–19, 日本語文法学会.

仁田義雄（1995）「文法における規則性と例外的現象」『日本語学』14(4), pp.42–51, 明治書院.

野田春美（2011）「『現代日本語文法』からみた日本語の記述文法の未来」『日本語文法』11(2), pp.17–29, 日本語文法学会.

森山卓郎（2010）「考えるときの舞台裏—「記述」の段階を中心に—」『日本語学』29(2), pp.14–20, 明治書院.

付記

本稿の内容は、JSPS 科研費 JP20K13046 の研究成果の一部である。

例外といかに向き合うか

鈴木彩香（千葉大学）

1．はじめに

■ 発表の目的

- 分類や仮説の提示を行う上では、例外や反例となる現象に直面することが多い
  - ⇨ 文法記述を行う上での例外的な現象への対処（基本則に対する細則の発見・抽出）については仁田 (1995)が詳しいが、本発表で問題にしたいのは仮説の反例ともなるような「例外」
- 例外のある分類や仮説は、例外に対して何らかの説明を与えるための記述を余分に必要とする点で経済性が低い
  - ⇨ しかし、例外のない規則はないと言われるように、例外への対処は、何らかの基準を立てて分類を行う上で不可避の問題である
- 本発表では、“よい”文法記述を目指す上で、例外となる現象とどのように向き合うべきなのかを検討する

2．研究事例：属性叙述文の分析

■ 鈴木（2022）

- 具体的な研究事例として、日本語の属性叙述文の分析を取り上げる

(1) a. 太郎が今、りんごを食べている。 ［事象叙述］
　　b. 太郎は東京出身だ。 ［属性叙述］

(2) a. 事象叙述：現実 世界のある時空間に実現・存在する事象（出来事や静的事態）を叙述するもの
　　b. 属性叙述：現実世界に属する具体的・抽象的実在物を対象として取り上げ、それが有する何らかの属性を述べるもの （益岡 1987: 21）

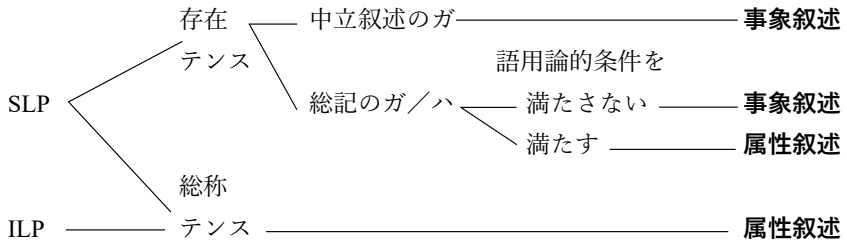
- 問い：叙述の型は何によって決まるのか？
  - ⇨ 述語の品詞（動詞／名詞）や主語名詞句をマークする助詞（ガ／ハ）が叙述の類型と一対一に対応しているわけではない（cf. (1)）

(3) a. 太郎は今、りんごを食べている。 ［事象叙述］
　　b. 太郎は 100 メートルを 11 秒で走る。 ［属性叙述］

- 主張：叙述の型を決定する要因は、テンスの総称性(genericity)の観点を中心とすると、語彙レベル（stage-level predicate/individual-level predicate; Carlson 1977、以下 SLP/ILP）、意味・統語論レベル、語用論レベルの要因に整理することができる
  - ⇨ (1a)や(2a)は特定的な時間軸と結びつけられた存在的な(existential)テンス、 (1b)や(2b)は特定の時間軸に結びつけられない総称的な(generic)テンスを持つ

⇨　日本語における叙述の型の決定プロセスは(4)のように示すことができる

(4)　語彙レベル　　意味・統語論レベル　　語用論レベル



■　**(4)の体系の利点**

➢　①　形式を重視した体系の整理ができる

⇨　(3b)のような動詞を用いた属性叙述文におけるル／テイルのアスペクト対立は、テンスの総称性の対立として位置づけることができる

(5)　a.　太郎は毎朝公園を走る。　　［総称テンス］
　　b.　太郎は毎朝公園を走っている。　　［存在テンス］

(6)　a. *太郎は一昨年から毎朝、公園を走る。
　　b.　太郎は一昨年から毎朝、公園を走っている。

⇨　述語の品詞や主語の助詞がどのように関係しているのかも位置づけることができる（動詞は基本的に SLP で名詞は基本的に ILP、統語構造の違いに応じて主語の助詞が選択されるなど）

➢　②　属性叙述文内部の違いが見えやすくなる

⇨　益岡 (2021)で指摘されている「本来的な属性」と「事象から派生する属性」の違いを明確にすることができる

⇨　存在テンスを持つ属性叙述文は、一定の語用論的要因存在テンスを持つ点では事象叙述文と共通性があるが、一定の語用論的要因を満たすことによって属性叙述文となる

⇨　(7)は(8a)の応答としては事象叙述文であるが、(8b)の応答としては属性叙述文となる

(7)　太郎は昨日、地元のマラソン大会で優勝したよ。

(8)　a.　太郎は昨日、何をしたの？
　　b.　太郎ってどんな人？

⇨　(1b)と(7)は、意味・統語論レベルで形成される属性叙述と語用論レベルで形成される属性叙述という点で異なること、「事象から派生する属性」の中でもテンスの総称性による違いがあることなどが明確に示せる

➢ ③ 他言語の現象とのつながりが見えやすくなる

⇨ 事象叙述／属性叙述の対立は、英語などの言語を対象とした総称文研究（Carlson 1977, Diesing 1992, Kratzer 1995, Krifka et al. 1995 他）との関わりが指摘されている（眞野 2008）ものの、概念が共通していない分つながりが見えにくかったが、各レベルの要因を整理することにより共通点が見えてきた

■ **(4)の体系の例外**

➢ (4)の体系は、ILP は事象叙述文を形成しないことを予測するが、井川 (2012)、眞野 (2023)などにも指摘があるように、一定の環境では ILP が事象叙述文を形成することができる

(9) （いつもと違って）今日健は正直だ。 （眞野 2023: 108）

(10) あっ、月が丸い。

⇨ (9)(10)で用いられている述語は、(11)に見るように通常は属性叙述文を形成するが、通常時との比較や驚きを持ってその属性を知覚する際には、事象叙述文を形成する

(11) a. 健｛は／*が$_{中立叙述}$／が$_{総記}$｝正直だ。
b. 今日の月｛は／*が$_{中立叙述}$／が$_{総記}$｝丸い。

３．例外といかに向き合うか

■ **経済性と明瞭性の相克**

➢ (4)の体系を維持したまま(9)(10)のような例外にも説明を与えようとすると、記述の経済性が損なわれてしまう

⇨ 仁田 (1995)も論じているように、例外的現象への対処としては(12)のような仮説改訂の可能性があり、こうした改訂は直ちに経済性を損なうとは言えない

(12) a. 例外的現象をも包括できるよう、規則の説明能力のさらなる拡大を図る
b. 合理的な細則的説明や付加的条件によって、例外的現象に対する適切な位置付けを与える （仁田 1995: 42）

⇨ しかし、(9)(10)のような例が存在するということは、語用論的要因が語彙レベルの概念にも影響していることを意味しているため、場合によっては(4)のような語彙レベル→統語・意味レベル→語用論レベルという積み上げ式の文法観から見直さなければならない可能性もある[1]

⇨ つまり、例外現象への対処としては、(12)だけでなく仮説そのものを大きく作り

[1] 総称文研究においても、SLP／ILP といった語彙分類ではなく語用論的要因を重視して分析する必要性が主張されている（Glasbey 2006, Magri 2010, Mizutani 2017 他）。

直す必要が生じることもあるということである[2]

- 一方で、(4)の体系が重視しているのは、属性叙述文が属性叙述文たり得る条件とはどのようなものかを、できるだけ明瞭な形で示すということである
  - ⇨ 語用論的要因の扱いが不十分であるが、形式的な対立に重きを置き、明瞭性に志向したアプローチといえる
  - ⇨ (2)のような属性叙述文の定義は(9)(10)のような現象を例外としない[3]が、言語直観に頼った抽象的な定義の仕方とも言える
  - ⇨ (2)の定義は前提として尊重した上で、さらにその内実を分解していく試みが必要
- このような経済性と明瞭性の相克関係は、個別の事例に限らず一般的に存在するものと考えられ、文法記述を行う上では両者のバランスをとっていく必要がある
- ここではもう一歩踏み込んで、“よい”文法記述を行っていくためには、明瞭性の方をより多くとってもよいのではないかと主張したい
  - ⇨ ここでの“よい”文法記述とは、研究コミュニティ間で研究成果を積み上げていきやすい文法記述ということを意味しており、研究の蓄積・共有のためには、明瞭性の高い分析を提示し、どこまでが明らかになり、どこからが分かっていないのかを示すことが重要である[4]
  - ⇨ 自戒を込めた教訓として、経済性よりも明瞭性を重視した場合、例外の存在に言及することが必要である（鈴木 (2022)ではできていなかった）

■ “よい”例外、“悪い”例外

- ただし、例外を認めることが「単なる開き直り」にならないよう、どのような例外が研究の蓄積に志向した“よい”例外なのか、ということを考える必要がある
  - ⇨ “よい”例外とは、過渡期的な研究段階において、その現象を外して考えることによって対立が明確になったり、全体の体系性を考えやすくするものである
  - ⇨ 研究の次の段階で、例外を含めた説明を可能にするためには現状の仮説をどのように修正すればよいか、ということを考えていくことによって、研究が進展する

---

[2] 仮説検証法に関しては、窪田 (2019)が詳しく論じている。窪田 (2019)では、仮説検証の手法に従った研究を理論的研究と呼び、記述的研究と区別しているが、仮説検証を繰り返すことによってよりよい仮説に近づけていくというプロセスをとるという点では、本発表では記述的研究にも共通する部分があると考えている。

[3] 益岡 (1987, 2008)では、事象叙述と属性叙述の対立を連続的なものとしてとらえる見方が示されており、(9)(10)のような例は「非内在的属性叙述」あるいは「中間型」として位置づけられるものと考えられる。

[4] 山泉 (2019)では、理論を支持する研究結果だけでなく、支持しない研究結果も同様に評価されるべきであることが論じられている。山泉 (2019)は理論的研究にまつわるバイアスを様々な角度から論じたものであり、その趣旨と本発表の提言は異なるものの、研究コミュニティ全体で研究が前進することを目指すという理念は共通しているものと考える。

- そのための前提条件として、やはり偶発的、散発的な例外は“よい”例外になりにくい
  - ⇨ 一定の条件下で認められるといった、ある程度の傾向性を持った例外であれば、今は説明が与えられない例外だとしても、研究の進展とともに説明が与えられる可能性がある

４．まとめ

- 例外は記述の経済性を下げるものであるが、その現象を外して考えることによって対立が明確になる現象や、全体の体系性が考えやすくなることもある
- 研究コミュニティ全体で研究が進むことを志向した記述が“よい”文法記述の１つの形だとすれば、例外の存在する分析の“よさ”は、明瞭性をどれだけ示せるかによって測られるのではないか

参考文献

井川壽子 (2012)『イベント意味論と日英語の構文』くろしお出版.／鈴木彩香 (2022)『属性叙述と総称性』花鳥社.／窪田悠介 (2019)「理論的研究とは？」『基礎日本語学』pp.260-282, ひつじ書房.／仁田義雄 (1995)「文法における規則性と例外的現象」『日本語学』14, pp.42-51, 明治書院.／益岡隆志 (1987)『命題の文法―日本語文法序説』くろしお出版.／益岡隆志 (2008)「叙述類型論に向けて」益岡隆志（編）『叙述類型論』pp.3-18, くろしお出版.／益岡隆志 (2021)『日本語文論要綱―叙述の類型の観点から―』くろしお出版.／眞野美穂 (2008)「叙述類型研究史（海外編）」益岡隆志（編）『叙述類型論』pp.193-220,くろしお出版.／眞野美穂 (2023)「書評　鈴木彩香著『属性叙述と総称性』」『日本語の研究』第 19 巻 1 号, 日本語学会, pp.102-109.／山泉実 (2019)「言語学の理論的研究を阻害する諸バイアス」『日本語・日本文化研究』29, pp.44-72, 大阪大学大学院言語文化研究科日本語・日本文化専攻.／Carlson, Gregory N. (1977) Reference to Kinds in English. Ph.D. dissertation, University of Massachusetts, Amherst.／Diesing, Molly (1992) *Indefinites*. Cambridge, MA: MIT Press.／Glasbey, Sheila (2006) Bare plurals in object position: Which verbs fail to give existential readings, and why? In Svetlana Vogeleer and Liliane Tasmowski (eds.) *Non-Definiteness and Plurality*, pp.133-160, Amsterdam: Benjamins.／Kratzer, Angelika (1995) Stage and individual level predicates. In Gregory N. Carlson and Francis Jeffry Pelletier (eds.) *The Generic Book*, pp.125-175, Chicago: University of Chicago Press.／Krifka, Manfred, Francis Jeffry Pelletier, Gregory N. Carlson, Alice ter Meulen, Gennaro Chierchia, and Godehard Link (1995) Genericity: An introduction. In Gregory N. Carlson and Francis Jeffry Pelletier (eds.) *The Generic Book*, pp.1-124, Chicago: University of Chicago Press.／Magri, Giorgio (2010) A Theory of Individual-level Predicates Based on Blind Mandatory Scalar Implicatures. Ph.D. dissertation, MIT.／Mizutani, Kenta (2017) Decomposing individual-level gradable adjectives, *Proceedings of the 41st meeting of Kansai Linguistic Society*, pp.205-216.

謝辞

本発表の内容は、JSPS 科研費 21HP5049 の研究成果の一部である。

理論といかに向き合うか

井戸　美里（国立国語研究所）

1. はじめに

- 発表者の専門：
  - 特にとりたて助詞が関わる日本語の現象について、記述的一般化を提示する研究
  - 特定の理論的枠組みを積極的に用いることはせずに、新しい現象のパラダイムを提示することを重視。本発表ではこれを便宜的に記述的研究と呼ぶ。
- 森山(2010)：

  (1)　「直感的一般化」→「記述的一般化」→「説明的一般化」→「体系的記述」(→「理論化」)
- 特定の枠組みを用いないで記述された文法現象のパラダイムを、特定の理論的な枠組みを用いて再解釈する研究の試みは非常によく見られることである。特定の仮説に立脚する理論的道具立てを用いることで、ある文法現象を反証可能な形で厳密に記述したり、原理的に説明することが期待できる。これは一見すると歓迎すべき展開のように見えるが、一人の研究者が「直感的一般化」から「理論化」までの全てのステップを専門的に網羅するのは現実的に難しい。また、特定の仮説に基づく強力な理論的道具立てを用いて一般化することは、記述のパラダイムを提示した段階では含まれていなかった主張を含むことになり、記述的な立場をとる研究者からすると躊躇われる側面もあるだろう。
- しかし、この発表では、あえて記述的立場の研究者がその主張にまで踏み込む試みの有用性を主張する。具体的には、研究背景の違う研究者との対話によって、自身が暗黙のうちに前提としていた仮定やある種の思い込みを問い直すことになり、見過ごされてきた研究課題の存在に気づくことができる。その研究課題は、「暗黙のうちに」前提となっているもので自問自答では気づくことが困難である。

2. 事例：ダケとシカの「第二陳述」の分析

2.1. 対象となる現象

- ダケ文とシカ文は、主陳述と第二陳述を持ち、ダケ文は肯定的命題を主陳述とし、否定的命題を第二陳述とする。シカ文はこの関係が逆転する。(久野 1999 ほか)

(2)　水だけ飲めれば、1 週間は生きられる。

a. 主陳述　：水が飲める

b. 第二陳述：水以外のものは口にできない

(3)　水しか飲めなかったら、飢えてしまう。

a. 主陳述　：水以外のものは口にできない

b. 第二陳述：水が飲める

- 「第二陳述」はいわゆる non-at issue meaning に当たるが、どのような non-at issue meaning なのか？
  - ダケ文とシカ文の第二陳述は、モーダルや仮定節に埋め込んでも意味が投射しない。つまり assertion のようにモーダルや仮定のオペレータの作用を受ける。→前提や慣習的含意（CI）ではない

(4)　授業参観に母親しか来ないかもしれない。

a. でも、母親は来ずに、父親が来るかもしれない。

b. でも、父親も来るかもしれない。

- この現象のポイント：ダケ文とシカ文の第二陳述は、assertion の一部でありながら、non-at issue meaning である

2.2. 分析の素案の段階（Ido 2019）

- Ido (2019)での一般化(5)(6)
  - (5)(6)は、ダケの意味は maximality（最大値演算子）によって計算されるとする Tomioka (2015)の分析に基づいて、「ダケを最大値を用いて分析するのであれば、シカは最小値を用いて分析すれば、両者の鏡面関係を説明できるのではないか」という素朴な発想に基づく。

(5)　||x dake P|| = [MAX (P) = {x}]

(6)　||x shika not P|| = [MAX (~P) = MAX (λy. y∉x)]

(7)　(5)(6)に寄せられたコメント

「(5)と(6)は論理的に同値なので、これではダケとシカの意味をかき分けたことにはならない」

- 発表者は暗黙のうちに、「(5)と(6)は、表記された形が違うのだから、当然意味が異なる」と思い込んでおり、(5)(6)によってダケとシカの意味の違いが捉えられたと考えていた。これは、発表者自身が「意味計算の過程」と「意味計算の結果」を区別して考えるという暗黙の仮定に立脚していたために起きた。しかしこの仮定は自明のことではない (cf. モデル理論的意味論、論理学)。
- (5)(6)の分析はそもそも、「結果的に同値になったとしても、その意味の計算過程が異なれば、人間はそこに異なる意味を見出すものである」という仮定を主張する必要がある。ただダケとシカの意味の違いを捉えようとする分析では不十分である。

2.3. 仮説提示と厳密な形式化の段階（Ido and Kubota (2021)）

- 主張：ダケ文とシカ文の第二陳述は、ダケとシカが持つ最大値演算子を用いた本質的意味から副次的に派生する、派生的含意 (derived entailment)であり、本質的意味と派生的含意は、意味論的なステータスが異なる。
  - 最大演算子を(11)のように定義することで、(9)(10)は文の主張と最大値演算子の定義から、それぞれ異なる派生的含意を導く。

(8) 派生的含意：文の前提と主張から論理的帰結として生じる、文の取り消し不能な含意。

(9) $\| \text{dake} \| = \lambda X \lambda P.\max C(P) = X$

(10) $\| \text{sika} \| = \lambda X \lambda Q.\max C(Q) = \max C(\lambda y.y \not\leq X)$

(11) $\max C(P) = \iota X: \underline{\neg \exists Y.Y \in C^* \wedge X < Y \wedge P(Y)}.P(X)$

2.3.1. 技術的問題発生の段階

- 査読コメントでは、下記のようないくつかの技術的問題について指摘が入る。
  - 「20cm くらいだけ」のような領域が dense である場合を扱えるか？
  - maximality は自然数ではなく実数の問題に思われるが、その場合 maximal degree を定めることができるのか？
  - 「ジョンかビルだけ」のような選言を扱えるか？
  - 「日本人だけが知っている（知らない日本人もいる）」のような、表現を扱えるか？

- これらの問題は分析の精密さを詰める作業であり、形式意味論的手法においては定

石的なステップであるが、記述的一般化の段階においては意識されない領域である。

- (8)-(11)において共著者間で同意が取れていても、査読に応える段階で方法論の違いが浮き彫りになる。

- これらの厳密化・精緻化の作業によって、一般化の範囲や反例となる現象が詳らかになる。(→鈴木発表を参照) 一方で、たとえ課題として残ったとしても、「assertion であり、non-at-issue meaning である」という意味を派生的含意として分析する、この論文の大きな主張が無効になるわけではない。1 つの論文として完成させるためにこれらの分析を詰める必要があるが、(8)がこの論文が提案する主張であり、積極的に取る仮定であるとすると、技術的問題に対応するために立てる仮定は消極的に取る仮定であると考え、論文内では消極的仮定を採用しつつ加筆修正するも、共著者間ではあくまで一時的措置として考えておく。
  - 記述研究者が理論と向き合うときに、特定の理論的枠組みの方法論全てに迎合する必要はない（逆も然り)。むしろどちらかが全て受け入れてしまうと共同研究としての強みが失われてしまう。「大きな問いと主張」を共有しつつ共同し、それ以外の部分には遊び（消極的仮定）を意識的に持たせておくことで、それぞれが他方の枠組みに過剰に適応することなく、新しい観点を提供することができるのではないか。

3. まとめ

(12) 明示的な枠組み（理論）を持たない記述的研究にも枠組みが存在する。異なる枠組みの研究者と対話することで、自身が与する枠組みに自覚的になり、既存の枠組みに過剰に適応することを避けつつ、新しい観点を取り入れることができる。

- 森山(2010: 19)：(理論とは、)
  - 一つの考え方でいろんなことが説明できること
  - 「一貫性」「体系性」「予測性」がある説明原理
  - 言語研究の根幹に何らかの形で関わる原理的なもの
- ここでは便宜上、「特定の理論的枠組みを積極的に用いることはせずに、新しい現象のパラダイムを提示する」タイプの研究を「記述的研究」と呼んだ。しかし、「特定の理論的枠組みを積極的に用いない」ということは、理論的枠組みがないことを

意味しない。むしろ、特定の枠組みを用いていないからこそ、「暗黙の理論的枠組み」に囚われている可能性があるので注意が必要である。森山(2010)の展開に沿って言うのであれば、「直感的一般化」の時点ですでに、何らかの枠組み（理論）の中で直感を働かせていることになる。

- (1)が記述から理論へ、理論から記述へ循環しているのであれば、「良い記述」は既存の枠組みへの違和感を喚起させる記述であり、良い理論は研究者の直感的記述を新たに喚起させる理論である。そのためには、記述的研究者であっても自身が立つ枠組みに自覚的になることは有用である。
- 「暗黙の枠組み」の存在に、同じ研究背景を持つ研究者同士の対話や自問自答で気づくのは困難である。これは、いわゆる記述研究者が、特定の枠組みを用いた理論研究者と対話することで克服できるかもしれない。その際、記述的立場をとる研究者が特定の理論的枠組みを全て受け入れる必要はなく、大きな主張を共有しつつ保留事項を持たせておくことで、それぞれの枠組みへの過剰適応を防ぐことが肝要である。

❑ 参考文献

Ido, Misato. 2019. The meanings of dake and shika based on their maximality and polarity. Poster presented at: Japanese/Korean Linguistics Conference 26, September 2019, UCLA.

Ido, Misato & Yusuke Kubota. 2021. The hidden side of exclusive focus particles: An analysis of *dake* and *sika* in Japanese. *Gengo Kenkyu*, 160: 83-213.

Tomioka, Satoshi. 2015. (Non)-exhaustivity of dake ‘only’. *Nihon Gengo-Gakkai Dai 150-kai Taikai Yokooshuu* (Proceedings of the 150th Meeting of the Linguistic Society of Japan), 134–139.

森山卓郎(2010)「考えるときの舞台裏—「記述」の段階を中心に—」『日本語学』29(2), pp.14–20, 明治書院.

久野暲 (1999) 「ダケ・シカ」構文の意味と構造」アラム佐々木幸子 (編) 『言語学と日本語教育 実用的言語理論の構築を目指して』pp.291-319, くろしお出版.

❑ 謝辞

本稿の内容は、JSPS 科研費 24K03857 および国立国語研究所共同研究プロジェクト「実証的な理論・対照言語学の推進」の研究成果の一部である。

アカデミック・ライティングのための初級文法項目の再学習

高梨信乃（関西大学）・ 朴 秀娟（神戸女学院大学）・ 庵 功雄（一橋大学）

1. 初級文法項目の再学習とは

本パネルセッションでは、日本語教育文法の考え方の一つとして、「初級文法項目の再学習」（高梨2023）を提案する。

日本語教育文法研究の重要な課題の一つに、「初級文法項目の見直し」がある。それは、現行の文法シラバスに、1）初級の文法項目が多く、重すぎる（野田2005など）、2）初級の文法項目を 1 度教えたら、その後振り返ることがない（小林2005など）という 2 つの問題点があり、その結果、学習者に不必要な負担をかける一方で、学んだ知識が十分な運用に結びつかないといった弊害がみられるためである。この問題に対応するため、さまざまな学習者のニーズを考慮に入れ、文法シラバスを改善するための研究が行われている（山内 2005、庵 2009、森 2011、岩田・小西 2015 など）。このような研究は非常に重要であるが、長期的な取り組みとなるため、並行して現行の文法シラバスで学ぶ学習者を支援することもまた重要だと思われる。

初級文法項目の再学習とは、このような観点から、初級の文法項目を中級以降で再度学ぶ機会を学習者に提供するものである。ただし、ここでの再学習とは、単なる復習ではなく、「学習者が必要とする能力に合わせて取り上げる項目を選び、指導のポイントをしぼって再度学ぶ機会を与えることにより、学習者が必要とする使用につなげること」という意味で用いる。

本パネルセッションでは、その一例として、上級学習者のアカデミック・ライティング（以下、AW）という目的に焦点を当て、どのような初級文法項目の再学習が必要であるかについて考察したい。

2. 上級学習者のアカデミック・ライティングの文法の問題

AW に必要な知識・スキルは、①文レベル（文を正確に書く）、②文章レベル（文章を明快に書く）、③AW レベル（学術的文章らしく書く）の 3 つに分けて捉えることができる（高梨2013）。①→②→③の順により高度なレベルと考えられるが、上級学習者の AW を見ると、もっとも基礎的な①の文法の誤用が多く、その指導に手を取られることが少なくない。

このことに注目した高梨ほか（2017）は、上級学習者 3 名の修士論文の草稿に見られた誤用を分析しているが、その結果、3 名分の誤用 254 件のうち236件（93%）が旧日本語能力試験の 3 級以下の文法項目に関するものであることが明らかになった。

以上から、AW では初級文法項目を正確に習得することが重要であること、そして、それが十分にできていない上級学習者が少なくないということが示唆される。

3. アカデミック・ライティング指導における文法の扱い

では、学習者のAW指導において、文法はどのように扱われているのだろうか。手がかりとして教材類をみてみる。学習者の AW のための教科書は多数出版されている。これらは扱われている内容から、A）文法重視のもの（小森・三井2016など）、B）表現・文型の提示が中心のもの（浜田ほか1997、佐々木ほか2006、二通ほか2009など）、C）AとBの折衷的なもの（友松2008、伊集院・髙野2020など）に分けられるが、数の点で主流なのは B タイプである。B タイプでは、論文の構成や、論文の各

部分で必要な表現・文型が多数提示されている。そのような情報も学習者のAWに必要であることは間違いないが、上で指摘したような、学習者の文法の問題を解決するものではない。

以上のことから、上級学習者の AW のための初級文法項目の再学習の必要性が明らかになったと思われる。

本パネルセッションでは、対比の「は」、テンス・アスペクト、自他動詞の対応の 3 つのトピックを取り上げ、具体的に論じる。

※ 本パネルセッションの構成

[1] 趣旨説明 高梨信乃

[2] 口頭発表

発表① 高梨信乃

「アカデミック・ライティングのための対比の「は」の再学習」

発表② 朴 秀娟

「アカデミック・ライティングのためのテンス・アスペクトの再学習―図表の提示を中心に―」

発表③ 庵 功雄

「アカデミック・ライティングのための自他の対応の再学習―漢語サ変動詞を中心に―」

[3] 全体ディスカッション

【引用文献】

庵功雄(2009)「地域日本語教育と日本語教育文法―「やさしい日本語」という観点から―」『人文・自然研究』3、一橋大学

岩田一成・小西円(2015)「出現頻度から見た文法シラバス」『データに基づく文法シラバス』くろしお出版

小林ミナ(2005)「コミュニケーションに役立つ日本語教育文法」野田尚史編『コミュニケーションのための日本語教育文法』くろしお出版

高梨信乃(2013)「大学・大学院留学生の文章表現における文法の問題―動詞のテイル形を例に―」『神戸大学留学生センター紀要』19、神戸大学留学生センター

高梨信乃(2023)「チュートリアル第 5 回:日本語教育文法」『日本語文法』23-1、日本語文法学会

高梨信乃・齊藤美穂・朴秀娟・太田陽子・庵功雄(2017)「上級日本語学習者に見られる文法の問題―修士論文の草稿を例に―」『阪大日本語研究』29、大阪大学大学院文学研究科日本語学講座

野田尚史編(2005)『コミュニケーションのための日本語教育文法』くろしお出版

森篤嗣(2011)「『現代日本語書き言葉均衡コーパス』コアデータにおける初級文法項目の出現頻度」『日本語教育文法のための多様なアプローチ』ひつじ書房

山内博之(2005)「日本語教育における初級文法シラバスに関する一考察」『實踐國文學』6、実践女子大学

【アカデミック・ライティングの教科書(以下の発表でも引用する)】

浜田麻里・平尾徳子・由井紀久子(1997)『大学生と留学生のための論文ワークブック』くろしお出版

佐々木瑞枝・細井和代・藤尾喜代子(2006)『大学で学ぶための日本語ライティング』The Japan Times

友松悦子(2008)『小論文への12のステップ』ｽﾘｰｴｰﾈｯﾄﾜｰｸ

ニ通信子・佐藤勢紀子・因京子・山本富美子・大島弥生(2009)『留学生と日本人学生のためのレポート・論文表現ハンドブック』東京大学出版会

石黒圭・筒井千絵(2009)『留学生のためのここが大切文章表現のルール』ｽﾘｰｴｰﾈｯﾄﾜｰｸ

大島弥生・大場理恵子・岩田夏穂・池田玲子(2012)『ピアで学ぶ大学生・留学生の日本語コミュニケーション』ひつじ書房

鎌田美千子・仁科浩美(2014)『アカデミック・ライティングのためのパラフレーズ練習』ｽﾘｰｴｰﾈｯﾄﾜｰｸ

ｱｶﾃﾞﾐｯｸ・ｼﾞｬﾊﾟﾆｰｽﾞ研究会(2015a)『改訂版 留学生の日本語 ②作文編』アルク

ｱｶﾃﾞﾐｯｸ・ｼﾞｬﾊﾟﾆｰｽﾞ研究会(2015b)『改訂版 留学生の日本語 ④論文作成編』アルク

小森万里・三井久美子(2016)『ここがポイント! レポート・論文を書くための日本語文法』くろしお出版

ニ通信子・佐藤不二子(2020)『新訂版 留学生のための論理的な文章の書き方』ｽﾘｰｴｰﾈｯﾄﾜｰｸ

伊集院郁子・髙野愛子(2020)『日本語を学ぶ人のためのアカデミック・ライティング講座』アスク

アカデミック・ライティングのための対比の「は」の再学習

高梨 信乃（関西大学）

1. はじめに

日本語の助詞は、学習者にとって習得が難しいものの1つであり、学習者のアカデミック・ライティング（以下、AW）においても、困難点の1つである。そのことは、高梨ほか（2017）で、3名の上級学習者の修士論文草稿にみられた誤用のうち49%が助詞に関わるものであったことからも確認できる。

日本語教育の助詞の指導において、従来特に注目されるのは、「は」と「が」の使い分けであり、AWに関する教科書でも盛んに取り上げられている。一方、「は」に関してこれまで十分に取り上げられていないものに、対比の「は」がある。（1）～（3）は学習者の AW であるが、いずれも下線部が不自然であり、（ ）内のように対比の「は」を使用する必要がある。

（1）『総合日語』以外の教科書は「依頼」と「指示」に関する説明が（→は）なされているが、「勧め」に関する説明が（→は）なされていない。

（2）JPの用例に（→には）ノデハナイカが 10 件あるが、CNに（→には）1 件もない。

（3）このような応答が 10 件のみで、頻繁に（→には）使用されていない。

このような学習者による対比の「は」の誤用（主に不使用）が少なくないことは、従来から指摘されている（謝・金城2005、野田 2007 など）ものの、詳しい考察はなされていない。

本発表では、AW という目的に焦点を当て、対比の「は」についてどのような指導を補えばよいかを考察する。そのために以下の研究設問（RQ）を立てる。RQ1と RQ3で現在地を、RQ2と RQ4 で目的地を明らかにすることにより、何を補う必要があるかを探るという試みである。なお、今回は RQ1 と RQ2 を中心に論じ、RQ3、RQ4 については、調査の現状と今後の見通しを述べる。

RQ1）対比の「は」は、従来どのように指導されているのか。

RQ2）対比の「は」は、AW でどのように使われているのか。

RQ3）学習者は、対比の「は」をどのように使うのか。

RQ4）母語話者は、対比の「は」をどのように使うのか。

2. 対比の「は」

対比の「は」は、「文中のある要素をとりたてて、それと同類のものとの違いを示す（日本語記述文法研究会2009：29）」という働きをもつ「は」である。文法研究では、尾上（1981）、青木（1992）、野田（1996）などにおいて考察されてきた。先行研究の知見のうち、本発表での考察のために確認しておきたいことを以下に挙げ、それについて述べる。

1）対比には、（4）のように対比の相手が明示されている「明示的な対比」と、（5）のように対比の相手が明示されていない「暗示的な対比」がある。

（4）子供たちはカレーは作っているが、ごはんは炊いていない。

（5）子供たちは食器は持ってきた。　（野田1996：200）

この区別は教育上も重要であろう。ただし、後でみるが、いずれの対比にもいろいろな場合がある。

2）対比の「は」には、使わなければ文が不自然になるもの（必須）がある。（4）の2つめと3つめの「は」がそれに当たる[1]。逆に言えば、使わなくても不適格にならないもの（非必須）もあるということである。

[1] 野田（1996：205）は、「対比される部分が構造的に対立しているとき」すなわち「同類の 2 つの名詞にたいし

たとえば、(5)の2つめの「は」や(6)は非必須である。教育上は、必須の場合がまず重要となる。しかし、非必須であっても、使わなければ意味が変わるということには注意が必要である。

(6)あの政治家は国民には人気がある。

3)否定文では、(7)のように「は」が使われることが多い。これは暗示的な対比の「は」である。

(7)田中さんはビールは飲まない。

4)対比の「は」、格成分のほか、副詞的成分、述語などさまざまな要素に現れる。「は」はとりたて助詞であるので当然のことであるが、学習者への指導の際には留意すべき点である。

では、日本語教育では、対比の「は」はどのように指導されているのだろうか。

3. 対比の「は」は、従来どのように指導されているのか

RQ1の手がかりとして、日本語教科書における対比の「は」の扱いをみる。まず、主な初級総合教科書における扱い有無を、明示的な対比と暗示的な対比に分けて整理すると、表1のようになる。

表1. 主な初級総合教科書における対比の「は」の提出課

				中級以降
		明示的な対比	暗示的な対比	
Situational Functional Japanese	全24課	まとめ2(8課後)どちらか不明		
日本語初級大地	全42課	×	×	
★初級日本語 新装改訂版	全28課	9課	×	×
NEJテーマで学ぶ基礎日本語	全24課	×	×	
初級日本語げんき第2版	全23課	×	×	
★できる日本語初級	全15課	11課	×	×
★みんなの日本語初級第2版	全50課	27課	×	×
★文化初級日本語改訂版	全34課	8課	6課(否定)	×
大学の日本語初級ともだち	全24課	8課	×	
★初級日本語とびら	全20課	3課	7課(否定)	△

明示的な対比の「は」は、多くの初級総合教科書が扱っている。ただし、挙げられている例は(8)のように、野田(1996)のいう「対比される部分が構造的に対立している」典型的なものに限られる。

(8)「みんなの日本語初級Ⅱ」27課 練習A

6. サッカーはしますが、やきゅうはしません。

ひらがなはかけますが、かんじはかけません。

暗示的な対比の「は」については、「文化初級日本語改訂版」と「初級日本語とびら」の2種の教科書が否定文での「は」の使用について取り上げているのみである。

(9)「文化初級日本語改訂版」5課

1)A:朝、コーヒーを飲みますか。

B:いいえ、コーヒーは飲みません。ミルクを飲みます。

また、★印の教材は上のレベルの後継教材があるものであるが、中級以降で対比の「は」を扱っているのは「とびら」のみであり、それも「数は、N だけは、N くらいは」(5課)、「少なくとも~は」(15課)に限られている。

総合教科書にみられる上記のような傾向は、AWの教科書にも共通する。文法を詳しく扱っている小森・三井(1996)でも、対比の「は」で扱われているのは明示的な対比の典型的な例のみである。

て、それぞれの述語が肯定と否定で対立しているとき」は、対比の「は」が「ほぼ必ず使われる」としている。

以上から、対比の「は」について従来、指導されている内容はかなり限定的であることがわかる。

4. 対比の「は」は、アカデミック・ライティングにおいてどのように使われているのか

次に、RQ2のために研究論文における対比の「は」の使用をみる。

4.1 調査の方法

人文科学・社会科学分野の研究論文を資料として、対比の「は」の用例を収集した。人文科学・社会科学の論文を調査対象としたのは、日本の留学生のうち両分野を学ぶ学生の割合が高いことと、日本語での論文執筆が求められる場合が多いことによる。対象とする学会誌は、佐藤ほか（2013）が分析対象としているものから人文科学および社会科学領域に属する『日本語の研究』（以下、日研）『日本語教育』（日教）『日本文学』（日文）『日本近代文学』（近文）『社会学評論』（社評）『日本経営学会誌』（日経）『アジア研究』（ア研）の7誌を取り上げ、『日本語文法』（文法）を加えた8誌とした。以上 8 誌から 5 本ずつ、計40本の論文を調査対象とした[2]。調査の目的は、対比の「は」の使われ方を観察して、いくつかのパターンに整理することである[3]。パターンごとの用例数の比較など量的な分析は行わない[4]。

4.2 アカデミック・ライティングにおける対比の「は」の用例

以下では、収集した用例から観察されることと、指導との関連で注目したいことを述べる。

4.2.1 明示的な対比の「は」

（10）一方、拾篇目集は、玉部では類聚名義抄との一致率が低く、風部では一致が目立つ。（日研②）

（11）本人の学歴や仕事の有無についての構成効果を分析した研究は存在するものの、さまざまな社会的地位の構成変化がそれぞれどの程度、性役割意識の平等化に寄与したかについては十分明らかにされていない。（社評③）

（10）は、「は」がつく成分が同じ形の場合である。野田（1996）など先行研究で挙げられているのは、このような場合である。が、収集した用例には、（11）のように「は」がつく成分が異なる形の場合も少なくない。ここでは、それぞれ「同形」「異形」と呼んで区別する。従来、教科書などで対比の「は」を取り上げる際に示されているのは、ほぼ「同形」に限られることに注意が必要である。

また、明示的な対比は、1 文内の対比だけでなく、（12）のように複数の文にまたがる対比もある。

（12）第一事例モデルによるカテゴリー化においては、対象が類概念の指定する特徴に合致するかどうかに焦点が置かれる。一方、フレーム・役割モデルによるカテゴリー化においては、対象が状況の中で他の事物と結ぶ関係に焦点が置かれる。（文法②）

さらに、（13）のように、対比の相手が明示されていても、相手には「は」が使われておらず、「は」が

---

[2] 具体的には、論文選定に着手した時点で入手できた最新の号、あるいは最新号を含む何号かの中から、全抽出法もしくは等間隔抽出法によって論文を選んだ。なお、原著論文に限定し、書評論文、特集論文、寄稿論文は除外した。

[3] 否定とともに使われる、対比的な意味の薄い形式化した「は」（「～ではない」など）や、もとは対比の「は」だと考えられるものを含む固定的な表現（「～とは限らない」「～とはいえ」など）は、対象外とした。

[4] パターンごとの使用頻度は、分野、研究対象、分析・論述の方法などにより異なると思われる。本発表では、学習者が書くことになる可能性があるものとして、パターンを一通り提示することを重視した。

1つの場合もある。

（13）中学校 2 年生では、「いつも」日本語を話す外国につながる生徒は、数学では上回っていないが、理科において日本人生徒全体の全体の得点の平均値・中央値を上回っている。（日教③）

明示的対比では、同形／異形、1 文内／2 文以上、「は」1つ／「は」2つの組み合わせでいろいろなケースがあるとわかった。

4.2.2 暗示的な対比の「は」

先行研究で挙げられている暗示的な対比は、ほとんどが否定述語とともに使われた例である。実際、収集した用例でも否定と共起しているものが多くみられる。

（14）一方、（27）はガの用例で最も RD が高いタイプの用例で、対象名詞「凛くん」の先行詞となる語は 20 節以内にはない。（日研③）

（15）そもそも陸委会と海基会は委任関係にあるが、海基会は民間の寄付も受けており、政府が完全には管轄できない財団法人である。（ア研②）

しかし、一方で（16）～（18）のように肯定述語とともに使われており、暗示的な対比と認められるものもみられる。

（16）これは、高外交性組織であれば・・・結果的にその集団や組織内では孤立するということが現実的にも考えられるからである。（日経③）

（17）この古文書は、『伯耆民談記』に記載のあることから百年ほどは何らかの効力があったのだろう。（日文③）

（18）著者が気に掛けているのは線部のところで、この神社の「縁起」がこの元禄七年には失われているということである。（日文③）

学習者は、これまで受けてきた指導から「否定のときに「は」を使う」と認識している場合がある。一方、肯定との共起については留意していない可能性が高い。それぞれの場合を［～否定］［～肯定］として区別することにする。また、「は」が副詞的成分につく場合については、（17）のような〈程度・量〉を表すものでは「少なくとも～」、（18）のような〈時間・局面〉を表すものでは「遅くとも～」といった意味が加わるため、注意が必要である。

以上で観察したことを踏まえ、AW における対比の「は」の使われ方を表2に整理する[5]。

[5] 暗示的／～肯定／述語につくという組み合わせもありうるが、収集した用例にはみつからなかった。野田（1996:228）は、このタイプに該当する雑誌記事からの用例を挙げた上で、「思わせぶりで、もったいぶった言いかたになる」としている。

表2. **アカデミック・ライティング**における対比の「は」の使われ方のパターン

					用例
A1	明示的	「は」2つ	1文内での対比	同形	(19)構成効果を追加したモデル2では、時代効果はあまり変わらないが、世代効果は大きく減少する。(社評③)
A2				異形	(20)エンジン系では、全体としては地域的な偏りなく輸出が伸びているが、個別品目別には例えばガソリンエンジン部品(HS840991)は、韓国、ASEAN 向けが全体の 67%を占める。(ア研⑤)
A3			2文以上での対比	同形	(21)第一事例モデルによるカテゴリー化においては、対象が類概念の指定する特徴に合致するかどうかに焦点が置かれる。一方、フレーム・役割モデルによるカテゴリー化においては、対象が状況の中で他の事物と結ぶ関係に焦点が置かれる。(文法②)
A4				異形	(22)この観点から、「主役」は芝居や映画をパラメータに取る非飽和名詞であると認められる。一方、「俳優」という語については、あるひとが俳優であるかどうかを問題にすることが原理的に可能であるとし、飽和名詞と呼んでいる。(文法②)
A5		「は」1つ	1文内での対比		(23)しかしながら、五六四番歌が心にかけて紙に祈ると詠むのに対し、一四二番歌は年の経過に思いを馳せるのみに過ぎない。(日文②)
A6			2文以上での対比		(24)多くの場合、他動詞文(1b,2b)が用いられ、自動詞使役文(1c, 2c)を用いることがない。あるいは他動詞文が使えない場合(3b)、自動詞使役形がその空白を補う(3c)。しかし、実際には自動詞使役文と他動詞文の両方が存在する場合もある(4b,4c)。(文法③)
B1	暗示的	～否定	格成分につく		(25)前節で述べたように、自発性と意図性いずれによっても単一の概念では自動詞使役文の成立条件を説明できない。(文法③)
B2			副詞的成分につく		(26)一方、サチ子も「品物として愛されるのは迷惑千万」、「自由を束縛されることが厭」と言いながら、表立っては反抗せず、贅沢な暮らしを享受し、決して母から離れようとはしない。(近文④)
B3			述語につく		(27)同記事によると、「日本の従来の文学」は必ずしもその目的に合致してはいないため、・・・(近文①)
B4		～肯定	格成分につく		(28)このように定義される「可逆性」は、意図的に動作や出来事を起こさせることを表す「自制性」とは区別される。(文法③)
B5			副詞的成分につく		(29)ただし、いくつかの課題が残されている。第一に、「一つのカテゴリーを形成する」ことが正確にはどのようなことかが明確ではない。(文法②)

表2から、AWにおける対比の「は」の使われ方は非常に多様であることがわかる。では、学習者への AW 指導では、どのような対比の「は」を取り上げるべきなのだろうか。まず注目されるのが、必須／非必須の区別である。指導にあたっては必須の「は」が最優先事項となるが、非必須の場合であっても、「は」の有無によって意味は異なるのであり、AWにおいて正確に意図を表現するためには、無視できない。非必須の「は」のさまざまなケースの中でどのようなものを優先的に指導するかを判断する必要がある。そのためには、どれくらいの母語話者がそこで「は」を使うかということが手がかりになると思われる。 そこで、RQ3と RQ4 の両方を目的とした小規模な調査を行った。次に述べる。

5. 学習者と母語話者は対比の「は」をどのように使うのか

5.1 調査の方法

表2で整理したパターンをもとに、空所穴埋め問題を作成し、以下の協力者に回答してもらった。

協力者： JL）上級レベル以上の学習者23名（学部生・大学院生：中国17、台湾3、韓国2、ベトナム1）
JS）日本語母語話者37名（学部生・大学院生）

空所穴埋め問題は、A1～B5 のパターンを網羅し、順番を並べ替えた22題である。空所は、対比の「は」に関するもの30箇所に、対比の「は」に無関係なダミー23箇所を加えた53箇所を設定した。

・指示文：（　　）に適当なひらがなを入れてください。（　　）に入るひらがなは1つとは限りません。また、何も入れる必要がなければ「×」を書いてください。

・問題例：（空所1はダミー、2と3はA1）

1）［大学の学生アンケートについて］「現状に満足していますか」という問い（　1　）対して、生活面（　2　）、「満足している」という回答が7割以上を占めているが、学習面（　3　）、「満足していない」という回答が多く、5割を超えている。

5.2 結果

30箇所の空所について、対比の「は」を使用したかどうかのみに注目した（たとえば、「～では」を用いるべき箇所で「～には」を用いたような不適格な場合も、「は」使用としてカウントした）。

表3. JL と JS の対比の「は」の使用

パターン		A1				A2				A3		A4				A5
空所番号		〈2〉	〈3〉	〈17〉	〈18〉	〈5〉	〈6〉	〈29〉	〈30〉	〈9〉	〈10〉	〈14〉	〈15〉	〈31〉	〈33〉	〈21〉
JL （23名）	使用	18	19	16	18	0	20	17	5	5	12	8	4	4	19	5
	不使用	5	4	7	5	23	3	6	18	18	11	15	19	19	4	18
JS （37名）	使用	19	30	34	34	6	35	37	27	20	36	7	20	7	26	8
	不使用	18	7	3	3	31	2	0	10	17	1	30	17	30	11	29

パターン		A5				A6			B1		B2		B3	B4	B5	
空所番号		〈25〉	〈26〉	〈36〉	〈38〉	〈41〉	〈45〉	〈53〉	〈23〉	〈43〉	〈8〉	〈47〉	〈13〉	〈49〉	〈35〉	〈51〉
JL （23名）	使用	6	19	12	4	12	3	5	10	6	3	3	4	6	10	7
	不使用	17	4	11	19	11	20	18	13	17	20	20	19	17	13	16
JS （37名）	使用	4	37	29	7	31	13	4	4	28	16	14	3	16	34	31
	不使用	33	0	8	30	6	24	33	33	9	21	23	34	21	3	6

JL・JSともに、パターンによる差はあまりみられず、個々の箇所によって使用率が大きく異なる。しかし、JLでは、全体として、明示的な対比に比べ暗示的な対比での使用率が低いことがみてとれるのに対し、JS ではそのような差がみられないことが注目される。以下、いくつかの箇所に注目する。

7）［禁煙のメリットについて］　禁煙には健康上のメリットが多くある。短期的（　〈17〉　）、禁煙してから 20 分以内に心拍数と血圧が低下し、長期的（　〈18〉　）、がんなどのリスクが大幅（　19　）下がるということが明らかになっている。

2）［男性の育児休業について］ 少子化が進む日本では、出産・育児による労働者（　4　）離職を防ぐことが重要な課題であり、近年、法律の整備が進んできた。しかし、男性の育児休業取得率はここ数年上昇し（　〈5〉　）いるものの、顕著な変化（　〈6〉　）言えない。

11）［救急車の有料化をめぐるアンケートについて］　集計（　28　）結果、「安易に救急車を呼ぶこと（　〈29〉　）よくないと思うが、救急車の有料化（　〈30〉　）反対する」という立場の人が多いことが明らかになった。

13）［マンションの修繕計画について］　このマンションは建築から 20年以上（　34　）経っており、遅くとも来年（　〈35〉　）エレベータや駐車場などの設備の修繕を行う必要がある。

5）［大学の学生アンケートについて］　「就職活動の際、キャリアセンター（　12　）利用しまし

たか」という問いに対して「利用した」と答えた学生は 4 割弱にとどまった。このことから、キャリアセンターで行われている就職支援が学生のニーズに必ずしも合致（　〈13〉　）ないことがわかる。

【Ⅰ】「は」の使用率が JL、JS ともに高い箇所・・・〈17〉〈18〉〈6〉

「は」の必要度が高く、学習者も問題なく使える人が多いケースと言える。〈17〉〈18〉は、1 文内・同形の典型的な明示的対比である。〈6〉は、〈5〉との異形の明示的対比だが、直後に否定がきている。

【Ⅱ】「は」の使用率が JL では低く、JS では高い箇所・・・〈30〉〈35〉

「は」の必要度が高いと考えられるのに、使わない学習者が多いケースであり、指導を補うべきポイントの候補といえる。〈30〉は、〈29〉との異形の明示的対比である。〈35〉は、暗示的対比で〈時間・局面〉の副詞的成分につく場合である。

【Ⅲ】「は」の使用率が JL でも JS でも低い箇所・・・〈5〉〈13〉

「は」の必要度が低いと考えられ、学習者が使わなくてもあまり問題にならないケースと考えられる。〈5〉は異形の明示的対比、〈13〉は［～否定］の暗示的対比であるが、いずれも述語部分である点が共通する。

【Ⅲ】については、産出の指導の優先度は低いといえる。ただし、「は」の有無による意味の違いは、読解の際には問題となるだろう。本発表の射程からは外れるが、学習者がどのくらい理解しているか、調べる必要があると思われる。

6. おわりに

以上、上級学習者の AW のための対比の「は」の再学習について考えてきた。初級における対比の「は」の指導が限定的で、かつ中級以降の補充もほとんどないのに対し、AW における対比の「は」の使われ方は多様であり、その間に大きなギャップがあることがわかった。ギャップを埋める指導のポイントを見出すためには、学習者の使用と母語話者の使用を同時にみていく必要があるが、それらについては本発表ではパイロット調査の域を出ていない。今後、データも増やし、さらに考察していきたい。

【用例を引用した研究論文】

（日研）：②＝高橋・高橋論文，③＝池田論文，以上20－1，（日教）：③＝市瀬論文，187，（日文）：②＝古家論文，③＝原論文，以上 68-6，（近文）：①＝田部論文，④＝中尾論文，以上 108，（社評）：③＝阪口論文，74-1，（日経）：③＝高橋論文，52，（ア研）：②＝黄論文，70－3，⑤＝杉田論文，70－1，（文法）：②＝氏家・田中論文，③＝王論文，以上24－1

【引用文献】

青木伶子（1992）『現代語助詞「は」の構文論的研究』笠間書院

尾上圭介（1981）「「は」の係助詞性と表現機能」『国語と国文学』58－5、至文堂

佐藤勢紀子・大島弥生・二通信子・因京子・山路奈保子（2013）「学術論文の構造型とその分布―人文科学・社会科学・工学 270 論文を対象に―」『日本語教育』154、日本語教育学会

謝福台・金城尚美（2005）「日本語学習者の「は」と「が」の使い分けに関する一考察―中国語母語話者と韓国語母語話者の場合―」『琉球大学留学生センター紀要』2、琉球大学留学生センター

高梨信乃・齊藤美穂・朴秀娟・太田陽子・庵功雄（2017）「上級日本語学習者に見られる文法の問題―修士論文の草稿を例に―」『阪大日本語研究』29、大阪大学大学院文学研究科日本語学講座

日本語記述文法研究会編（2009）『現代日本語文法 5 第 9 部 とりたて 第 10 部 主題』くろしお出版

野田尚史（1996）『「は」と「が」』くろしお出版

野田尚史（2007）「日本語非母語話者の日本語とりたて助詞の不使用」中西久実子編『主題・とりたてに関する非母語話者と母語話者の運用能力の対照研究』平成15年度～平成18年度科学研究費補助金基盤研究（C）研究成果報告書

【付記】 本研究は、JSPS 科研費 219K00637 の助成を一部受けています。

アカデミック・ライティングのためのテンス・アスペクトの再学習
―図表の提示を中心に―

朴　秀娟（神戸女学院大学）

1. はじめに

本発表では、アカデミック・ライティング（以下、「AW」とする）、なかでも、図表を提示する際に用いられる述語のテンス・アスペクトに見られる特徴を明らかにすることで、テンス・アスペクトの再学習において上級日本語学習者に必要なものは何かについて論じる。

AWにおける日本語学習者（以下、「学習者」とする）のテンス・アスペクトの使用に見られる誤用には、次のように、図表の提示におけるものが少なからず観察される。（例1、2は、学習者が執筆した論文の草稿より抜粋したものである。括弧内の矢印先に正用例を示す。）

（1）表1は先行研究による婉曲用法の下位分類を*示す（→示した）ものである。

（2）以上の学習支援の内容をまとめると表12のように*なっている（→なる）。

図表の提示で用いられる述語のテンス・アスペクトだからと言って特殊な意味・用法をもつわけではなく、基本的には初級で学ぶテンス・アスペクトの意味・用法でカバーできるものである[1]。このような誤用が見られる背景には、AWにおいて、図表の提示におけるテンス・アスペクトの選択には一定のルールが存在しており、学習者がそれを十分に理解・学習できていないことがあるように思われる。そこで、本発表では、AWにおいて図表の提示を行っている文を対象に以下の2点を明らかにし、従来のAWにおけるテンス・アスペクトの指導において不足している点は何か、また、AWスキルを必要とする上級学習者にとって再学習が必要なテンス・アスペクトとはどのようなものであるかについて考察する。

①図表の提示で用いられる文型・表現にはどのようなものがあるのか。

②図表の提示に用いられる述語のテンス・アスペクトにはどのような特徴があるのか。

2. アカデミック・ライティングで用いられる述語のテンス・アスペクトに関する従来の指摘

AWにおける学習者のテンス・アスペクトの誤用については、これまでも多くの研究において指摘がある（高梨2013、高梨ほか2017、板井2021・2022、近藤・小西2024など）。一方、AWにおけるテンス・アスペクトに見られる特徴については、先行研究を引用する際の引用文におけるテンス・アスペクトの用いられ方に関する考察（清水 2010）、生理学のレポートで用いられる述語のテンス・アスペクトの傾向についての調査（石黒2012）はあるものの、図表の提示に焦点を当てた研究は見当たらない。

AW教材で「図表の提示」が取り上げられることもあるが、図表を提示する際の文型・表現が含む述語のテンス・アスペクトについては十分に記述されていない。12種の教材のうち、図表の提示に関する項目を設けているのは5種のみで、具体的な文型・表現を取り上げているものに絞ると、表1に示す4種に過ぎない[2]。表1は、AW教材において提示されていた、図表を提示する際に用いられる文型・表現、及び説明をまとめたものである。

---

[1] 初級では、完成相非過去形であるスルに対して、〈過去〉、〈完了〉を表すシタ、〈動作継続／進行中〉〈結果継続／結果残存〉を表すシテイルが導入される（初級で導入されるテンス・アスペクトの詳細については庵ほか2000を参照）。

[2] AW教材の出典の詳細については、本パネルセッションの趣旨説明の頁を参照されたい。

表 1．アカデミック・ライティング教材における「図表の提示」

浜田ほか 1997	表現	(1) ～を［図～・表～］に［示す・まとめる・表す］ (2)［図～・表～］は～を［示した・表した］ものである ～を［示した・表した］ものが［図～・表～］である (3) ～を［図・表］にした［(図～)・(表～)］
	説明	なし
二通ほか 2009	表現	A 1.［図／表］に *図／表の主題* を示す。 B 1.［図／表］は *図／表の主題* を示している。 2.［図／表］は *図／表の主題* を示したものである。 3.［図／表］は *図／表の主題* である。
	説明	何についての図／表かを明示する。A の表現は筆者が図／表に何を示すかを述べる場合に用いる。B は図／表が何を示しているか、あるいは何であるかを述べる場合に用いる。(p.96)
アカデミック・ ジャパニーズ研究会 2015b	表現	【本文】・図 A に…N を示す。 ・図 A は…N を示したものである。 【文型・表現】①図 A に…N を示す。 ②…N を図 A に示す。 ③図 A は…N を示している／示したものである。
	説明	【文型・表現】にのみ説明あり： (1) ①～③は、図（figure）や表（table）を提示して説明する時、最初によく使われる文型である。図表の提示は、本論の中で、筆者自身が行った調査や実験の方法や結果を示す場合や、既に公表されているデータを借用して論じる場合に行われる。（中略） (3) ①、②は、筆者が自分で図表を作成した場合にのみ用いる。したがって、筆者が行った調査や実験の結果を示す場合には、①、②がよく使われる。 (4)③は図表を自作した場合でも他から借りた場合でも使うことができる。 (p.78)
伊集・髙野 2020	表現	・(図 1／表 1) は（図表のタイトル）を示している／表している ・(図 1／表 1) は（図表のタイトル）を示したものである ・(図 1／表 1) に（図表のタイトル）を示す
	説明	なし

いずれの教材も、図表を提示する際に用いられる文型・表現の羅列が中心となっている。また、以下の３つは、ほとんどの教材において共通して取り上げられている。

(3) 図／表に［図／表の主題］を示す。
図／表は［図／表の主題］を示している。
図／表は［図／表の主題］を示したものである。

文法的な側面については特に言及されておらず、筆者が自ら作成した図表の提示なのか、他から借用してきた図表の提示なのかによって使える文型・表現が異なることが説明されているのみである。しかし、その観点では（1）（2）に示したような誤用を説明することができない。図表の提示に用いられる文型・表現を適切に産出できるようになるためには、文型・表現そのものの学習だけでなく、テンス・アスペクトに関する学習も必要である。

3. 調査方法

本考察では、人文・社会科学分野において書かれた学術論文を対象に、図表の提示が行われている箇所を抽出して分析を行う。具体的には、『日本大百科全書（ニッポニカ）』（ジャパンナレッジ版）の「日本のおもな学会・協会」リストにある人文・社会科学分野（〔文学、哲学、教育学、心理学、社会学、史学〕〔法律学、政治学〕〔経済学、商学・経緯学〕）の学会から、会員数が多い上位 10 学会を選別した[3]。そして、それぞれの学会が刊行する学会誌のうち、2024 年

[3] 調査対象となる学術論文の選定方法は、清水（2010）を参考にしている。

9 月時点でオープンアクセスが可能であった８つの学会誌に、『日本語の研究』（日本語学会）、『日本語文法』（日本語文法学会）の２誌を加えた計 10 誌から、図表が掲載されていた最新の論文 10 本ずつ（計 100 本）を対象にデータを収集した[4]。その結果、得られたデータ数を表 2 に示す。なお、同一の図表が論文の中で複数回提示されることがあるが、当該の図表を初めて言及した箇所のみを考察対象としている。

表 2. 「図表の提示」の用例数

『雑誌名』（学会名）	用例数
『心理学研究』（日本心理学会）	61
『教育心理学研究』（日本教育心理学会）	69
『体育学研究』（日本体育学会）	74
『保育学研究』（日本保育学会）	46
『特殊教育学研究』（日本特殊教育学会）	54
『日本語教育』（日本語教育学会）	49
『社会学評論』（日本社会学会）	32
『現代経済学の潮流』（日本経済学会）	61
『日本語の研究』（日本語学会）	56
『日本語研究』（日本語文法学会）	35
合計	537

4. 結果と考察

4.1 図表の提示に用いられる文型・表現

図表の提示に用いられる文型・表現は、大きく、図表を「提示する」という意味の述語を明示的に含むものとそうでないものの二つに分けられる。前者を〈述語明示型〉、後者を〈述語非明示型〉と呼ぶこととする。〈述語非明示型〉には、「提示する」という意味の述語は含んでいないものの文中において説明的に使われているもの（タイプ A）と、単に、節末や文末に位置する括弧内に提示するだけに留められているもの（タイプ B）の 2 タイプがある。以下に、それぞれの例を示す。

〈述語明示型〉

(4) 項目、因子負荷量および下位尺度のα係数を Table 1 に示す。（『心理学研究』95-3）

(5) 表 2 は、算数と理科の国内偏差値、HR の平均値を、移民的背景の有無、移民世代、親の出生地の組み合わせ別に示している。（『社会学評論』74-1）

〈述語非明示型：タイプ A〉

(6) 対象者及び授業担当教師の詳細と実施期間は、表 1 の通りである。（『体育学研究』69）

〈述語非明示型：タイプ B〉

(7) 次に、漢字書字成績と学力・資格情報処理の関係を検討するために、ピアソンの積率相関係数を算出した（Table2, Table3）。（『特殊教育学研究』61-3）

上記の型について、学会誌ごとに出現傾向を示すと表 3 のようになる。少数ながら、どの型にも入らなかったもの(11 例)、文中で図表を言及することなく図表を提示していたもの(3 例)があったため、それらは「その他」として分類した[5]。なお、表中の百分率は、最下段の「合計」を除き、各学会誌において各型が占めていた割合である。

---

[4] 一つの学会で複数の学会誌が刊行されていた場合は、和文の学術雑誌を調査対象とした。また、執筆者が学習者であると思われた論文、特集論文は考察対象から除外している。

[5] どの型にも入らないと判断したものは次のような例である。「提示する」という意味の述語を含まないという点では〈述語非明示型：タイプ A〉と共通しているが、(6) のように、「～のとおり」「～のように」のような表現を用いて図表が取り立てられているもののみを〈述語非明示型：タイプ A〉とした。

・益岡（2008）は、属性には表 1 の 4 つの種類があると指摘する。（『日本語文法』23-1）

表 3. 学会誌ごとに見る「図表の提示」の型

学会誌＼型	述語明示型	述語非明示型		その他	合計
		A	B		
『心理学研究』	16 (26.2%)	0 (0%)	44 (72.1%)	1 (1.7%)	61 (100%)
『教育心理学研究』	29 (42.0%)	1 (1.5%)	39 (56.5%)	0 (0%)	69 (100%)
『体育学研究』	30 (40.6%)	8 (10.8%)	36 (48.6%)	0 (0.0%)	74 (100%)
『保育学研究』	13 (28.3%)	2 (4.3%)	31 (67.4%)	0 (0.0%)	46 (100%)
『特殊教育学研究』	33 (61.1%)	0 (0.0%)	21 (38.9%)	0 (0.0%)	54 (100%)
『日本語教育』	21 (42.9%)	7 (14.3%)	17 (34.7%)	4 (8.1%)	49 (100%)
『社会学評論』	12 (37.5%)	10 (31.2%)	6 (18.8%)	4 (12.5%)	32 (100%)
『現代経済学の潮流』	43 (70.5%)	13 (21.3%)	3 (4.9%)	2 (3.3%)	61 (100%)
『日本語研究』	38 (67.8%)	15 (26.8%)	2 (3.6%)	1 (1.8%)	56 (100%)
『日本語の文法』	27 (77.1%)	6 (17.2%)	0 (0.0%)	2 (5.7%)	35 (100%)
合計	262 (48.8%)	62 (11.5%)	199 (37.1%)	14 (2.6%)	537 (100%)

同じ人文・社会科学分野であっても、〈述語非明示型〉、なかでも、節末や文末の括弧内に図表を提示するタイプ B を好む分野（『心理学研究』『教育心理学研究』『体育学研究』『保育学研究』）と、〈述語明示型〉を好む分野（『特殊教育学研究』『現代経済学の潮流』『日本語研究』『日本語の文法』）がある。全体的には、〈述語明示型〉と〈述語非明示型〉が約半々ぐらいの割合で用いられていた。次節では、このうち、〈述語明示型〉の 262 例に見られたテンス・アスペクトの傾向について述べる。

4.2 図表の提示に用いられる述語のテンス・アスペクト

〈述語明示型〉を、文型・表現の構造によって分類すると、表 4 のようになる。X は図表のタイトルや内容を表し、V は述語（「図表の提示」では動詞）を表す。

表 4. 「図表の提示」における〈述語明示型〉の文型・表現

「図・表に V」類	「X を図・表に V」「X は図・表に V とおりである」 「図・表に V ように、」「図・表に V とおり、」「図・表に V-NP」
「図・表は V」類	「図・表は X を V」「図・表は X を V ものである」
その他	「X を V［の・もの］が図・表である」「X は図・表のように V」 「(X ために) 図・表を V」「X を V 図・表」

これらを多く見られた順に、動詞（V）の内訳及びテンス・アスペクトを示したものが表 5 である。最も用いられていた上位 3 位の文型・表現は、「X を図・表に V」「図・表は X を V」「図・表は X を V ものである」であった。いずれも、AW 教材において共通して取り上げられる傾向にあった文型・表現である。動詞は、「示す」が動詞全体の約 8 割を占めている（262 例のうち、211 例）。テンス・アスペクトは、「図・表は X を V」ではシテイル形のみが、「図・表は X を V ものである」ではシタ形のみが用いられている。「図・表は X を V」「図・表は X を V ものであ

る」については、AW 教材で挙げられている文型・表現の特徴と一致した結果となった。

表 5.〈述語明示型〉の文型・表現に用いられていた動詞及びテンス・アスペクト

項目 文型・表現	数	動詞（出現数）	テンス・アスペクト				
			スル	シタ	シテイル	シテイタ	その他
X を図・表に V	159	示す（142）、まとめる（8）、挙げる（3）、表す・整理する・分類する・対比する・引用する・記す（1）	104	40	14	0	1[6]
図・表は X を V	37	示す（35）、表す（2）	0	0	37	0	0
図・表は X を V ものである	28	示す（16）、比較する（3）、まとめる（2）、分析を行う・集計する・推測する・推計する・整理する・トレースする・分類する（1）	0	28	0	0	0
X は図・表のように V	14	なる（10）、まとめる（3）、表す（1）	13	0	1	0	0
X は図・表に V とおりである	6	示す（6）	1	5	0	0	0
図・表に V-NP	6	示す（6）	5	1	0	0	0
X を V［の・もの］が図・表である	4	まとめる（2）、示す・図示する（1）	0	4	0	0	0
図・表に V ように、	3	示す（2）、見る（1）	2	1	0	0	0
X を V 図・表	2	示す（2）	1	1	0	0	0
（X ために）図・表を V	2	作成する（2）	0	2	0	0	0
図・表に V とおり、	1	示す（1）	1	0	0	0	0

問題は、「X を図・表に V」である。最もよく使われているのは、AW 教材で示されている文型・表現と同様にスル形であるが、シタ形、シテイル形の使用も少なからず見られる。シタ形、シテイル形が使用されていた「X を図・表に V」の特徴を以下に示す。

まず、シタ形については、特定分野、特に、自然科学系の分野によく見られる実験や調査の統計分析の報告を中心とした論文に多いという特徴がある。39 例のうち 23 例が、『心理学研究』『教育心理学研究』『体育学研究』『保育学研究』『特殊教育学研究』の 5 誌に収録されている論文からであった。これら 5 誌には、実験や調査の統計分析を述べた論文が多く収録されている。生理学のレポートを対象に文末の述語のテンス・アスペクトの使用傾向を調べた石黒（2012）では、「結果」の章では、シタ形の使用が多く、「文章中のほかの箇所をメタ的に参照・指示・言及する述語」（図表の参照を含む）である「参照述語」のシタ形の使用も多いことが述べられている。今回の調査でも、23 例のうち 20 例は、(8) のような、「結果」の章で統計分析の結果を述べているものであった[7]。いずれもシタ形の連続で結果が述べられている中で現れていた。人文・社会科学系の論文か自然科学系の論文かに関わらず、実験や調査の統計分析の結果を順に「淡々と」報告するタイプのテクストでは、シタ形が好まれる傾向にあると言える。

(8) UUT を実施したサンプル(n=316)に対して、メタ創造性と創造性(流暢性、柔軟性、独創性)の相関係数を、RAT を実施したサンプル(n=339)に対して、メタ創造性と創造性(正答数)の相関係数をそれぞれ算出した。また、メタ創造性と創造性課題の取り組み時間(対

[6] シテアル形を用いていた例である。

[7] 残りの３例は、「方法」の章で、調査項目や協力者の属性をまとめた図表を提示しているシタ形であった。

数変換したもの)の相関係数も算出した。結果を Table2 に示した。(『教育心理学研究』72-1)

これら5誌以外で見られたシタ形の使用には、例9、10のように、結果の提示に先行する調査や分析に関わる述語が同一文中において示されているという特徴があった。このような例では、図表の提示を表す述語（波線部）をスル形にすると、前後の流れにおいて不自然な文になると思われる。このような例はスル形の用例には見られない[8]。中止形で示されているのは、すでに完了している調査や分析を示すものであり、そのことが主文のテンスで示されることとなる。

(9) 節の種類による差異も検討する。各地域で使用される節が異なるので、単純な比較が難しいが、三尾（1942）で丁寧語の使用率が高かったガ節・ケレド節について、聞き手配慮指数を調査し表4に示した。(『日本語文法』23-1)

(10) 最後に、高校ランク・学科について、高卒後教育内部の差異（本人学歴や大学学校歴・学科）を条件づけた効果（仮説1c、仮説2b）を確認する。サンプルを高卒後教育進学層に限定し、以下の４つのモデル――(A) 5.2で用いたモデル、(中略) (D) Cに大学学科を追加――を検討し、推定結果を表3に示した。(『社会学評論』74-1)

次に、「Xを図・表にV」に用いられていたシテイル形について述べる。シテイル形には、スル形への言い換えが可能なものと（例11)、そうでないもの（例12）があった。それまでの記述と関連した内容に基づく図表の提示や、まとめとしての図表の提示に用いられるシテイル形はスル形に言い換えることができる。一方、図表が「には」や「では」で取り立てられているシテイル形はスル形に言い換えることができない。

(11) 新体力テストの結果より、各測定項目の評価基準（文部科学省、1999）に従って体力の得点合計（以下「体力総合得点」と略す)を算出するとともに、新体力テストの総合評価区分（文部科学省、1999）によって対象者の体力水準を評価し、5評価群（A群―E群）に区分した。各群における対象者の身体的特性を表1に示している。(『体育学研

(12) 女性の労働市場における活躍と、男性の家庭における活躍は表裏一体だ。伝統的な性別役割分業意識の下では、女性は家庭で育児・家事において大きな責任を担うことが期待されており、これが男女間賃金格差の大きな原因ではないかとKleven et al.(2019)は指摘している。図3―5には、男性に対する女性の家事・育児時間の比をG7の国々とOECD平均について示している。OECD平均を見ると、女性は男性の1.93倍の家事・育児時間だ。(『現代経済学の潮流』2023)

以上、AWで図表を提示する際に用いられる文型・表現の特徴について述べてきたが、述語のテンス・アスペクトにバリエーションが見られる文型・表現と、テンス・アスペクトが固定された形でしか用いられない文型・表現の間には違いが見られる。主体（＝書き手）の存在が含意されるかどうかの違いがある。「Xを図・表にV」の使用には、文字として明記はされないものの、図表を提示する主体（＝書き手）の存在が含意されており、そのため、テクストの流れに応じて、述語のテンス・アスペクトが多様に選択されうるのだと考えられる[9]。一方、「図・表はXをV」「図・表はXをVものである」では、主体（＝書き手）の存在が含意されない。述

---

[8] 次のように、図表にまとめる際に施した手順が中止形で示されている例は見られる。

・両方のグループから出た項目を合わせ、教師の知識分類（Shuman, 1987）を参考にレベル別に並べた概要を図1に示す。(『日本語教育』181)

[9] 〈述語明示型〉のその他の文型・表現についても、述語のテンス・アスペクトにバリエーションが見られるのは、図表を提示する主体（＝書き手）が含意される文型・表現である。

語は図表が何であるかを説明するものであり、テンス・アスペクトは、主文末ではシテイル形が、従属文（名詞節）ではシタ形が用いられる。

5. 上級日本語学習者にとって再学習が必要なテンス・アスペクト

AW で図表の提示に使われていた文型・表現の多く（262 例のうち 224 例、全体の約 85%）は、AW 教材で示されているものであった（「X を図・表に V」「図・表は X を V」「図・表は X を V ものである」）。その中で、「図・表は X を V」「図・表は X を V ものである」は、述語のテンス・アスペクトが固定された形で使用されており、これら二つについては、学習者が、それぞれシテイル形、シタ形の述語が用いられる文型・表現であると意識して学習すれば、(1) のような誤用は生じないと思われる。述語のテンス・アスペクトにバリエーションが見られていた「X を図・表に V」は、スル形の使用が最も多かったが、特定の分野や、先行する調査や分析を完了したものとして同一文中で表す必要があるときはシタ形が、前後の記述との関連付けや、図表の取り立てが行われているときはシテイル形が用いられることもあった。なお、AW 教材で述べられていた、筆者が自ら作成した図表の提示なのか、他から借用してきた図表の提示なのかによる、文型・表現の選択の差異は見られていない。述語のテンス・アスペクトの選択に影響を与えていたのは、図表を提示する主体の存在が暗示される文型・表現であった。

これらを踏まえ、上級学習者が、図表の提示に用いられる文型・表現を適切に産出できるようになるためには、文型・表現そのものだけでなく、①図表の提示に用いられる述語のテンス・アスペクト、②テクストの流れを意識したテンス・アスペクトの選択、③図表を提示する主体の存在有無の 3 点をも意識した学習が必要であることを提案したい。

6. おわりに

本発表では、上級学習者に必要な初級文法項目として、図表の提示に用いられる述語のテンス・アスペクトを取り上げた。AW でテンス・アスペクトを適切に産出できるようになるためには、テンス・アスペクトがもつテクスト的機能（工藤 1995）を意識した学習が必要であると思われる。テクスト的機能を中心とした詳細な考察は今後の課題とする。

【引用文献】

庵功雄・高梨信乃・中西久実子・山田敏弘（2000）『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク

板井美佐（2021）「中国人上級日本語学習者の博士論文における誤用の傾向・要因と指導方法―中国語を母語とする大学院生の調査から―」『城西国際大学大学院紀要』24、pp.1-23.

――――（2022）「博士後期課程中国人日本語学習者の博士論文草稿に現れた誤用の傾向・要因と指導方法―コロケーション、呼応表現、は／が、動詞、形容詞に焦点を当てて―」『城西国際大学大学院紀要』25、pp.127-148.

石黒圭（2012）「生理学のレポートに見られる文末の述語のテンスとアスペクトの使用傾向」『第 14 回 専門日本語教育学会研究討論会誌』、pp.17-18.

工藤真由美（1995）『アスペクト・テンス体系とテクスト―現代日本語の時間の表現―』ひつじ書房

近藤智子・小西円（2024）「上級日本語学習者の小論文に見られる問題―テキストの観点をもつ必要性―」『東京学芸大学紀要 機構』75、pp.11-24.

清水まさ子（2010）「先行研究を引用する際の引用文の文末表現―テンス・アスペクト的な観点からの一考察」『日本語教育』147、pp.52-66.

高梨信乃（2013）「大学・大学院留学生の文章表現における文法の問題―動詞のテイル形を例に―」『神戸大学留学生センター紀要』19、pp.23-41.

高梨信乃・齊藤美穂・朴秀娟・太田陽子・庵功雄（2017）「上級日本語学習者に見られる文法の問題―修士論文の草稿を例に―」『阪大日本語研究』29、pp.159-185.

【付記】本研究は、JSPS 科研費 22K00638 の助成を一部受けています。

アカデミック・ライティングのための自他の対応の再学習
―漢語サ変動詞を中心に―

庵　功雄（一橋大学）

1. はじめに

自他の対応[1]は初級で取り上げられ、多くの日本語学習者（以下、学習者）が難しいと感じている文法項目である。しかし、実際は、初級で取り上げられている内容だけでは日本語の自他の全体像はわからない。本発表では、中上級レベルで取り上げるべき自他に関する内容を指摘した上で、「初級文法項目の再学習」という観点およびアカデミック・ライティングとの関連から、漢語サ変動詞の自他について新たな提案を行う。

2. 初級で扱われる自他の対応

自他の対応は初級文法の定番項目だが、そこで主に取り上げられているのは、（1a）（1b）のような格助詞の選択や（2a）（2b）のような自動詞形、他動詞形の選択の問題である[2]。ここで、自動詞には動作主は含まれず、出来事が自然発生的に表現されるのに対し、他動詞には動作主が含意されることも合わせて教えられる。

（1）a. 電気（　）つきます。（「が」）
　　b. 電気（　）つけます。（「を」）
（2）a. 窓が（閉　　）。（「閉まります」）
　　b. 窓を（閉　　）。（「閉めます」）

こうした形態論的な練習が不要だとは言えないが、少なくとも、（1）（2）のタイプの問題に正しく答えられたとしても、それだけで「自他の対応」が使えるようになったとは言えない。

3. 学習者にとってわかりにくい日本語の自他の対応

本節では、学習者にとってわかりにくい（したがって、産出しにくい）自他の対応の例を取り上げる[3]。

（3）（電車のアナウンス）
　　a. ドアが閉まります。ご注意ください。　　b. ドアを閉めます。ご注意ください。
（4）（かたい蓋が open したのを見たとき）
　　a. あっ、開いた！　b. あっ、開けた！　c. あっ、開けられた！（Cf. 小林 1996）
（5）この辺にも新しい建物が{a. 建ちました　b. 建てられました}ね。（Cf. 寺村 1976）
（6）先日トンネルが{a. 開通した　b. *開通された}。（Cf. 庵 2010）
（7）今度田中さんと結婚する{a. ことになりました　b. ことにしました}（Cf. Hinds 1986）

---

[1] 自他の形態的対応のパターンや初級における留意点については、庵ほか（2000）参照。なお、本発表で言う「自動詞」「他動詞」は特に断らない限り、自他の対応を持つ自動詞、他動詞のことを指すものとする。

[2] これに加えて、「ている」と「てある」の選択が「自他の対応」との関連で取り上げられるが、こうした取り上げ方は結果残存の「ている」の適切な産出を阻害するものであり、好ましくない。

[3] 学習者は母語話者と同じように話す必要はない、という考え方は妥当だと発表者も考える。しかし、それはあくまで、母語話者の通常の使い方を学習者が知った上で、そうした使い方を目指すか否かを学習者自身が選択すべきものであり、（学習者に対して権力を持つ）日本語教師などが「母語話者のように話す（ことを目指す）べきではない」といった形の押しつけをすべきでない（庵 2013、菊地 2006 の議論も参照）。

（3）は電車の車内放送で使われる表現で、多くの鉄道会社では（3a）が使われている。しかし、こうした環境で他動詞的表現を用いるのが一般的な言語もあり、少なくとも、そうした言語の話者にとっては、仮に自他の対応のリストを見ながら話すとしても（3a）が産出できるとは限らない。

（4）の状況では「蓋を開けた人」は必ず存在するが、日本語ではその人の存在は無視され（言い換えれば「黒衣」的に扱われ）、（4a）の自動詞表現が使われるが、この状況では（4b）の他動詞や（4c）の他動詞の受身形を使うのが一般的な言語も多く、この場合も自動詞表現は産出しにくい。

（5）は寺村（1976）に見られる例で、上級（超級）レベルの英語話者は（5b）を使ったが、日本語では（5a）が自然だろうという寺村の指摘がある。

(6)は庵（2010）の調査文だが、日本語母語話者はほとんど受身形を選択しないのに対し[4]、上級中国語話者は約 66.2%受身形を選択した。これも、トンネルの開通には動作主が不可欠という事態認識の反映であると考えられる。

（7a）は Hinds（1986）においてわかりにくい（puzzling）例として挙げられているものの類例で、これを直訳した英語は「政略結婚」の意味でしか解釈できないという。

こうした例は多くの学習者にとってなぜ自動詞が用いられるのかがわかりにくいものだが、これらはごく一般的な日本語表現であり、この点からも、2節で見た、（助詞を含む）形態的な対応関係がわかっただけでは「自他の対応」が適切に「産出」できるようにはならないことがわかる[5]。これらは本発表の対象であるアカデミック・ライティングに直結するわけではないため、本発表では現象の指摘に留めるが、これらは中上級以上の文法指導において取り扱われるべき内容であると言える[6]。

4. 日本語のボイス体系と自他の対応

3節では中上級以上で扱うべき自他の対応についての例を取り上げたが、アカデミック・ライティングの観点から重要なのは、「漢語における自他対応」とも言うべき、形態論的な問題である。この点は、受身、使役を含めた日本語のボイス体系と密接な関係にある[7]。

よく知られているように、自他の対応がある際、典型的には、他動詞文が成り立てば自動詞文が成り立つ（逆は必ずしも真ではない）。したがって、（9a）は非文法的になる（Cf. 宮島 1985）[8]。

（8） a. 太郎がロープを切った。（他動詞文）
　　 b. 　　ロープが切れた。（自動詞文）

（9） a.??太郎はロープを切ったが、ロープは切れなかった。
　　 b. 太郎はロープを切ろうとしたが、ロープは切れなかった。

（8a）と（8b）の関係は、次のように見ることができる。

（10） Yが X を Vt（Vt：他動詞）
　　↑他動詞化（項が＋1）　↓自動詞化（項が−1）
　　XがVi（Vi：自動詞）

---

[4] 現代日本語書き言葉均衡コーパス（BCCWJ）では、「開通する」323 例、「開通される」3 例である。

[5] 例えば、(3) ～ (5) では「自他対応のリスト」を見ながら答えたとしても、「正解」できない可能性が高い。

[6] 発表者は３節で取り上げたような場合に自動詞が用いられる理由の説明には、定延（2000）で指摘されている「カビはえモデル」の考え方を取り入れた説明が有効であると考えているが、詳細は別項に譲る。

[7] 本発表で言う「ボイス」は「受身、使役、自他の対応」を含むものである。また、本節の内容は庵（2024 近刊）、野田（1991）と密接な関係を持っている。

[8] （9a）で意図される意味（ロープの切断を試みたができなかった）を表すには（9b）を使う必要がある。

すなわち、自動詞から他動詞を見ると（＝他動詞化）項が１つ増えるのに対し、他動詞から自動詞を見ると（＝自動詞化）項が１つ減るということである。

同様の関係は、使役および受身でも見られる。まず、使役の場合は、次のようになる。

（11） a. 太郎は娘にピアノを弾かせた。（使役文）

b. （太郎の）娘がピアノを弾いた。（非使役文）

（12） a.??太郎は娘にピアノを弾かせたが、娘は弾かなかった。

b. 太郎は娘にピアノを弾かせようとしたが、娘は弾かなかった。

使役の場合、通常、使役文が成り立てば対応する非使役文も成り立つ（逆は必ずしも真ではない）。したがって、（12a）は不自然になり、この文で意図されている意味（太郎は娘に働きかけたが娘は反応しなかった）を表すには（12b）のように言う必要がある。

（13） YがＸに・を（Zを）V-（さ）せる[9]

↑使役化（項が＋1）

Xが（Ｚを）Ｖ（V：自動詞、他動詞）

（13）に見られるように、非使役文から使役文を見ると、項が１つ増えている。

次に、受身、特に、益岡（1987）の降格受動文に相当する受身文について考える。

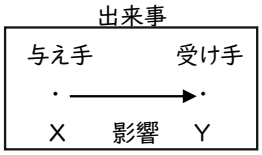


図１　降格受動文

受身は、図１のY（影響の受け手）を主語にして、動詞を有標の受身形に変える統語操作と考えられる。このとき、X（影響の与え手）は背景化するのが普通だが[10]、その中でも、Xの背景化が主目的である受身が降格受動文である。

（14） a. ?コンビニで新しいスナック菓子を発売した。

b. コンビニで新しいスナック菓子が発売された。

（15） a. ?先日テレビでおもしろい映画を放映した。

b. 先日テレビでおもしろい映画が放映された。

例えば、（14a）（15a）のような他動詞文を使うとガ格を特定する必要が生じ、ガ格を欠くと不適格になるのに対し、（14b）（15b）のように受身文にすると、図１のXを特定しなくても文法的な文となる。これが柴谷（2000）などが言う「受身は項を１つ減らす統語操作である」ということの意味である。このことから、受身について次のように言える。

（16） YがＸをＶ　　（能動文）

↓受身化（項が-1）

Xが（Ｚに・によって）V-（ら）れる（受動文）

（16）に見られるように、受動文から能動文を見ると、項が１つ減っている。

---

[9] 「Ｚを」の部分はＶが他動詞の場合のみ存在する。また、Ｖが他動詞のときは「Ｘに」になる一方、Ｖが自動詞のときは（「Ｘを」が多いものの）「Ｘを」「Ｘに」のいずれもあり得る。

[10] このことの反映として、書きことば（BCCWJ）、話しことば（CEJC：日本語日常会話コーパス）のいずれにおいても、図１のＸに当たる能動文の動作主は１割程度しか顕現しないという事実がある（庵 2022）。

以上を受け、自他の対応がある場合、(17a)のように、自動詞があって他動詞がない場合は「使役」が[11]、(17b)のように、他動詞があって自動詞がない場合は「受身」が使われる。

(17) 自動詞・他動詞と使役・受身

a. 他動詞　YがXをV-(さ)せる　:自動詞があって他動詞がない場合(←使役化)
　自動詞　　XがV

b. 他動詞　X が Y をV　　:他動詞があって自動詞がない場合(←受身化)
　自動詞　　YがV-(さ)れる

この考察を受け、5節では(17)に関わるコーパス調査の結果を示し、6節では調査の結果を踏まえて、「漢語における自他対応」における新しい提案を行う。

5. コーパス調査の結果

本節では、(17)を踏まえて「漢語における自他対応」について考察する前提となる BCCWJ を用いたコーパス調査の結果を述べる。なお、本節の内容は一部庵・宮部(2013)の内容と重なる。

表1は、BCCWJ において、「…を～させる」で用いられる二字漢語の頻度順の表である[12]。

表1. 「を～させる」順位

を～させる順位	を～する順位		を～させる	を～する	が～する	が～される	を～する：を～させる比率(%)	に～する
1	758	向上	566	70	333	0	11.01	
2	380	完成	393	200	779	45	33.73	
3	456	発生	356	150	3963	1	29.64	
4	2430	成功	344	3	433	0	0.86	1522
5	2645	発展	342	1	283	1	0.29	
6	2260	低下	336	5	1323	0	1.47	
7	2025	変化	309	4	929	0	1.28	
8	752	増加	296	80	1883	2	21.28	
8	361	充実	296	208	304	6	41.27	
10	1324	成立	255	4	1963	2	1.54	
11	18	実現	252	2252	709	166	89.94	
12	1098	減少	249	37	1145	0	12.94	
13	146	優先	244	589	118	137	70.71	
14	373	連想	237	203	2	25	46.14	
15	863	納得	228	54	237	3	19.15	158
16	2645	悪化	212	2	515	0	0.93	
17	1166	回転	205	31	118	0	13.14	
18	943	増大	193	50	582	0	20.58	
19	1007	復活	188	45	225	3	19.31	
19	204	移動	188	424	221	4	69.28	

[11] 他動詞の代わりに使役形が使われる現象は、(ア b)(イ b)のように和語にもごく一部見られるが、基本的には漢語に見られるものである。

(ア) a. 車が走る。　b. 太郎が車を走らせる。

(イ) a. 雨が降る。　b. 前線が雨を降らせる。

[12] 「を～させる」の検索条件は次の通り(短単位検索)。キーより前方1語:語彙素=を&品詞=格助詞、キー:品詞=名詞サ変可能&語種=漢、キーから後方1語:語彙素=為す、キーから後方2語:語彙素=せる。これで表1の上位20語を抽出し、それぞれについて、キーより前方1語:品詞=格助詞、キー:語彙素=向上、キーから後方1語:語彙素=為る(「向上」の場合)で検索して「を～する」「が～する」を抽出し、そこから「を～する(「させる」を除いたもの)」、「が～される」「が～する(「される」を除いたもの)」を抽出した。

表 1 から次のようなことが言える。

（18） a. 大部分の動詞で「を～する」の使用順位が低い（例外は実現のみ）[13]

b. 「を～する」が言えない「自動詞」が存在する（発展、低下、変化、成立、悪化）[14]

c. 「が～する」が言えない「他動詞」が存在する（連想）

d. b, c 以外は「自他同形」とも言えるが、その中でも「を～させる」の方が「を～する」よりも使われる動詞（「する・させる比率」が 50%以下）が多い（向上、完成、発生、増加、充実、減少、回転、増大、復活）[15]

ここで、（17a）より、b の「自動詞」の場合には義務的に「を～させる」が使われる。一方、d のように、「を～する」で項関係は充足しているにもかかわらず、「を～させる」が用いられる場合を「使役余剰」と言うが（定延 2000）、表 1 は「自他同形」と見ることができる場合において、「を～する」という「使役整合」よりも「を～させる」という「使役余剰」の方が使われやすいことを示している[16]。

一方、「を～する」の頻度順の表は表2の通りである[17]。

表 2. 「を～する」順位

する全体順位	を～させる順位		を～する	を～させる	が～する	が～される	を～する：を～させる比率(%)
1	154	利用	8166	27	291	212	99.67
2	140	実施	6316	29	448	984	99.54
3	150	使用	4547	28	231	379	99.39
4	85	確認	4399	45	109	685	98.99
5	957	意味	4062	2	96	2	99.95
6	272	選択	3925	13	71	190	99.67
7	206	推進	3860	18	43	158	99.54
8	184	紹介	3634	21	108	335	99.43
9	178	作成	3363	22	288	307	99.35
10	190	提供	3247	20	257	198	99.39
11	517	確保	3198	6	17	309	99.81
12	33	理解	2962	93	198	102	96.96
13	309	開始	2555	11	57	759	99.57
14	286	購入	2415	12	111	11	99.51
15	125	維持	2398	32	19	186	98.68
16	517	設置	2318	6	161	841	99.74
17	462	設定	2284	7	72	476	99.69
18	11	実現	2251	252	707	166	89.93
19	178	説明	2191	22	260	60	99.01
20	309	検討	2130	11	29	251	99.49

[13] 表 1 の「が～する」のガ格にはほぼ全ての例において無情物が来ている。これは、表 1 の動詞が自他対応を持つことを示している（他動詞であり自動詞を持たない「連想」を除く）。

[14] 「成功」も「を～する」を取らないが、これは「成功する」がニ格を取るためで、事情が異なる。

[15] 「納得」はニ格も取るので、ここには含めていない。

[16] 定延（2000：4 章）で詳述されているように、「使役余剰」「使役整合」という見方は「ビリヤードモデル的」デキゴト観によるもので、日本語には必ずしも当てはまらない。

[17] 表 2 の「が～する」のガ格は表 2 の「が～される」、表 1 の「が～する・される」との比較のためにも、非動作主用法のもののみカウントすべきだが、今回はこの点の精査ができていないことを断っておく。表 1 と表 2 の比較で、表 1 の「が～する」のガ格に対応するのは表 2 の「が～される」のガ格と考えていただきたい。

表 2 から次のようなことが言える。

（19） a. 大部分の動詞で「を～させる」の使用順位が低い（例外は実現のみ）

b. 大部分の動詞が「他動詞」で、自動詞用法を持たない[18]

c. 「を～させる」の用法をほとんど持たない（「する・させる比率」がほぼ 100%）[19]

（19a）（19b）は（18a）と同趣旨で、「を～する」という「他動詞用法」において「自他対応を持つ動詞」の比率は（かなり）低く、頻度が高いのは「自動詞用法を持たない他動詞」である[20]。また、（19c）は「自動詞用法を持たない他動詞」においては「使役余剰」は現れにくいことを示している[21]。次節では、これらの調査結果などをもとに、「漢語における自他対応」に関する新たな提案を行う。

6. 「漢語における自他の対応」に関する新提案

本発表のテーマである「自他の対応」は和語について述べられることが多い。和語における自他の対応に関する教授上のポイントは形態的な点（語形の暗記）に集中しており、3 節ではこの点に問題があることを指摘した。

和語における自他の対応は、形態的に複雑なのは確かだが、覚えるべき対象ははっきりしている。一方、漢語における自他対応のあり方は「正解」が確定していない点で和語の場合よりも複雑である[22]。

日本語には未だに学習者向けの標準的な学習辞書が存在しない。漢語サ変動詞の自他（以下、漢語の自他）などはそうした辞書に必ず載せるべき情報だが、現状でもし学習者自力で漢語の自他を調べようとするなら、国語辞典を引くしかない。しかし、先行研究で指摘されているように、自他の認定において辞書間でゆれが大きく、規範が確定できない状況にある。

さらに、中国語と日本語の同形ないしそれに近い語彙の間で自他に関するズレが大きいことなどもあり（庵 2010、劉 2021 参照）、「漢語の自他」は上級学習者が論文などを書く際の隠れた学習困難点となっている（中川 2005 も参照）。本発表では、こうした点を受けて、次の提案を行う。

（20） 漢語サ変動詞の自他（漢語の自他）を次のように考える。

a. 「が～する」が言えて「を～する」が言えない「自動詞」の「他動詞」形は「を～させる」

b. 「が～する」が言えず「を～する」が言える「他動詞」の「自動詞」形は「が～される」

c. a, b 以外で「が～する」が言える「自他両用動詞」の「他動詞」形は「を～させる」

d. 次の5語（開店、決定、終了、中断、紛失）は c の例外で、「他動詞」形は「を～する」

この提案は、「自動詞」と「自他両用動詞」の区別をほぼ廃止し、「が～する」（ガ格は無情物）が言える場合の他動詞形は原則として全て「を～させる」とするというものである[23]。これにより、学習者の学習負担をかなり減らすことが可能になる。ただし、（20d）の5語は「を～させる」を使うと使役的に解釈されやすいため、「を～する」を使う方がよい。

---

[18] 表 2 の「が～する」のガ格はヲ格より出現頻度も低いが、現れる場合でもほとんどが有情物であり、これらの動詞は無情物主語の自動詞用法を持たないと言える（「実現」を除く）。

[19] 自他両用動詞の「実現」を除く。なお、「自動詞用法を持たない他動詞」の「を～させる」形は「使役」用法になるが、その数が非常に少ないことは、書き言葉における「させる」はほとんどが「他動詞」を作るために使われており、「使役」としては使われていないという森（2012）の指摘を裏付けるものでもある。

[20] （17b）から、これらの動詞が自動詞用法を必要とする際には受身形（が～される）が使われる。

[21] 同趣旨のことが定延（2000:134）などでも述べられている。

[22] 大規模コーパスにおける使用実態をもとに漢語の自他を定めようとする張（2014）のような論考もある。

[23] 「太郎が入院する」のような意志的自動詞の場合も「太郎を入院させる」という「を～させる」形になるが、この場合は「他動詞」ではなく「使役」なので、ここでは一応別のものとしておく。

7. 初級文法項目の再学習としての「漢語における自他対応」

前節では、漢語サ変動詞の自他についての新提案を行った。本節では、この提案が本パネルセッションの趣旨である「初級文法項目の再学習」に当たるものである点について述べる。

2節で、初級における自他の対応について、格助詞の選択、自動詞形、他動詞形の選択と合わせて、1）自動詞を用いると出来事が自然発生的に表現される、2）他動詞を用いると動作主が含意される、という点が教えられていることを指摘した。この点を念頭に（21）（22）を見てみよう。

（21） 八十三歳の船田[元衆議院議長]が病床にあり、同派の影響力が低下した。

（阿部牧郎「悲しまぬおれたち」LBc9_00084[24]）

（22） ブリヂストンの石橋家は兄弟二人、途中から三人で家業しまや足袋を発展させた。

（森川英正「トップ・マネジメントの経営史」LBk3_00143）

すると、自動詞文（「…が Vi」Vi：自動詞）では出来事が自然発生的に表現され、他動詞文（「…を Vt」Vt：他動詞）では動作主の存在が含意されるという特徴は、（21）（22）においても同様に観察される。すなわち、（1）（2）と（21）（22）の違いは語彙の難易度だけであり、文法的には初級で扱った内容の再確認と考えることができるのである。

このように、本発表の主要テーマである6節の内容は初級文法項目の再学習と考えることができるが、初級とやや異なるところもある。

（23） a. ?陽ざしが肌を焼いた。

b. ok 陽ざしで肌が焼けた。

初級の学習項目は基本的に話しことばであり、話しことばでは（23a）のような「物主語の他動詞文」は避けられ、（23b）のような自動詞文が使われる。しかし、アカデミック・ライティングの対象となるタイプの書きことばでは（24）のような「物主語の他動詞文」は普通に使われる[25]。

（24） 木材は水分の吸放出によって、その寸法を変化させる。

（中井毅尚「木質の形成」PB36_00069）

これとの関連で、中国語話者には物主語の他動詞文や使役表現を多用しやすい傾向があり、それが不自然さの原因になることがあるので注意が必要である（庵・張 2017）。

（25） そのほかの問題[として]はもし晩婚化が続ければ（→続けば）、若い年齢の出生率を低下させて（→が低下して）、それにともなう晩産化や無産化、少子化が[起こることが]挙げられる。（C23-2[26]）

8. おわりに

本発表では、「自他の対応」をテーマに、初級文法項目の再学習という観点から、中上級以上で考えるべき内容について取り上げた。その中でも論文などアカデミック・ライティングを行う際の隠れた困難点となっている「漢語における自他対応」について、「自動詞」と「自他両用動詞」の区別を（事実上）廃止するという提案を行った。この提案の妥当性について、今回はコーパスにおける分布を主な基準としたが、今後は母語話者に対するアンケート調査なども行い、提案の妥当性を高めていきたい。

---

[24] BCCWJ のサンプル ID。

[25] 話しことばなら（24）の代わりに（24'）のような自動詞文が使われると思われる。

（24'） 水分の吸放出によって、木材の寸法が変化する。

[26] これは JCK 作文コーパスの ID で、C は中国語話者を表す。

【参考文献】

庵功雄（2010）「中国語話者の漢語サ変動詞の習得に関わる一要因―非対格自動詞の場合を中心に―」『日本語教育』146
庵功雄（2013）「「文法」でできること」「たかが「の」、されど「の」」『日本語教育、日本語学の「次の一手」』くろしお出版
庵功雄（2022）「母語話者コーパスから見た日本語の受身文」庵功雄編『日本語受身文の新しい捉え方』くろしお出版
庵功雄（2024 近刊）「産出のための文法から見た日本語のボイス表現」『言語文化』61、一橋大学
庵功雄・高梨信乃・中西久実子・山田敏弘（2000）『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク
庵功雄・宮部真由美（2013）「二字漢語動名詞の使用実態に関する報告：「中納言」を用いて」『一橋大学国際教育センター紀要』4、一橋大学
庵功雄・張志剛（2017）「第 1 章 正確で自然な立場の選び方」石黒圭編『現場に役立つ日本語教育研究 3 わかりやすく書ける文法シラバス』くろしお出版
菊地康人（2006）「受難の「んです」を救えるか」『月刊言語』35-12
小林典子（1996）「相対自動詞による結果・状態の表現」『文芸言語研究（言語篇）』29、筑波大学
定延利之（2000）『認知言語論』大修館書店
柴谷方良（2000）「3ヴォイス」仁田義雄・益岡隆志・柴谷方良・矢澤真人『日本語の文法1 文の骨格』岩波書店
張志剛（2014）『現代日本語の二字漢語動詞の自他』くろしお出版
寺村秀夫（1976）「「ナル」表現と「スル」表現」寺村秀夫（1993）『寺村秀夫論文集Ⅱ』くろしお出版に再録
中川正之（2005）『漢語からみえる世界と世間』岩波書店
野田尚史（1991）「文法的ヴォイスと語彙的ヴォイスの関係」仁田義雄編『日本語のヴォイスと他動性』くろしお出版
益岡隆志（1987）『命題の文法』くろしお出版
宮島達夫（1985）「「ドアをあけたが、あかなかった」」『計量国語学』14-8
森篤嗣（2012）「使役における体系と現実の言語使用」『日本語文法』12-1
劉倩卿（2021）「中国語話者を対象とする漢語動詞の教育のための総合的研究」2021 年度一橋大学言語社会研究科博士論文
Hinds, John（1986）*Situation vs. Person Focus*. くろしお出版

日本語文法学会　第 25 回大会シンポジウム

音韻と文法の両面から見る「ドメイン」—音調句形成を中心に—

このシンポジウムで何を議論するのか（趣旨説明）

司会・企画：平子達也（南山大学）
hirako@nanzan-u.ac.jp

1.　本シンポジウムの目的

日本語文法の研究は，形態・統語・意味・談話の諸領域において個々に，あるいは，相互に影響し合いながら発展を遂げてきた。本シンポジウムでは，これらを「**狭義の文法**」あるいは単に「**文法**」と呼ぶが，これら文法の諸領域は，当然，音韻とも関連している。

近年大きな進展が見られる地理的変種（方言）の記述研究では，「狭義の文法」に「音韻」も加えた「**広義の文法**」を記述することが主流となってきている。そして，広義の文法記述を目指す中で，「音韻」と「文法」との間の関連，すなわち**インターフェイス**の問題も論じられている。

本シンポジウムの目的は，狭義の文法を超え，それと音韻とを合わせた広義の文法の記述を目指してこそ直面し得る諸問題があることを示し，文法研究において音韻と文法の両者を視野に入れることが極めて重要であることを（再）確認することにある。

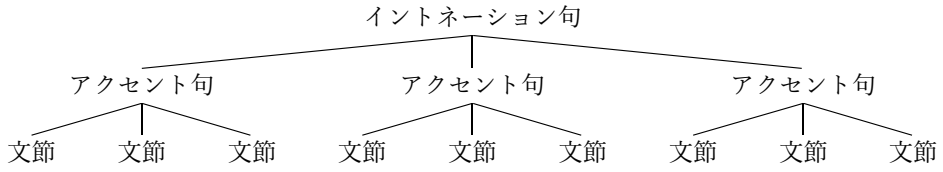
2.　本シンポジウムにおける議論の焦点：音調句の形成と「文節」という単位

上述の目的を達成するために，本シンポジウムでは，諸変種における**ドメイン**に関わる研究を紹介し，それらをもとに，音韻と文法のインターフェイスに関わる諸問題について議論する。言語学におけるドメイン（domain）という術語には，様々な意味・用法がありうるが，ここではドメインを「何らかの規則や制約が適用される範囲（領域）」と定義しておく（Crystal 2008: 155, Trask 1997: 72 など）。

音韻と文法のインターフェイスに関わる諸現象については，これまでにも一定の研究の積み重ねがある。例えば，形態・統語的構造（文法構造）と韻律構造の写像関係（マッピング）や，情報構造と韻律構造の関係に関わる研究は少なくない。そうした研究における主たる問題意識は「文法構造は如何に韻律構造に反映されるか」というものであったが，その際，韻律構造の記述のための単位・ドメインとして用いられてきたのが，**音調句**（あるいは韻律句）であり，**文節**である。

ここに言う「音調句」とは，韻律研究において，通常「**アクセント句**」と呼ばれるものである。五十嵐（2021: 33）は，それを「文節の直上に位置し，音調によって区分された韻律的単位」と定義する。また，「アクセント句の直上に位置し，ピッチレンジが指定される韻律的単位」（Igarashi 2015: 193）として，**イントネーション句**が定義される。つまり，それらは（1）のような階層構造をなしていることになる。

（1）　階層的な韻律構造（模式図）



上記の五十嵐の定義にも見られるように，日本語の韻律研究，特に，音韻（主に韻律，prosody）と文法のインターフェイス（Prosody-Syntax interface）を扱う研究においては，事実上，文節を記述の最も基本的な単位（**語**，word）とし，その上で，音調句（アクセント句／韻律句）が形成される過程を記述・分析してきた。また，語アクセントの研究においても，文節を基本的な単位とする記述が従来から行われてきた。

日本語東京方言における語アクセントは，ピッチの急激な下降として実現するアクセント核の有無と位置によって弁別される。そのアクセントが実現するドメインは「**アクセント単位**」と呼ばれ，東京方言の場合，1 つのアクセント単位の中には，アクセント核の実現としてのピッチの下降は 1 つしか観察されない。

アクセント単位は，基本的には形態統語的な「語」とほぼ一致する。ただ，その語アクセントの実現を観察する際には，しばしば「語」に一つ以上の助詞をつけた「文節」単位での音調実現の観察が行われてきた。例えば，以下の（2）に見るように，東京方言においては，「男」のような語末にアクセント核を持つ尾高型の語と「魚」のようなアクセント核を持たない平板型の語のアクセントの違いは，語単独でははっきりとしないが，それらに助詞を続けた文節単位で観察すると明確になる（[がピッチの上昇を，] がピッチの下降を示す）。

（2）　東京方言における「男」（尾高型）と「魚」（平板型）のアクセント

a. o[tokó	b. o[tokó]=ga	c. o[tokó]=ga	[ni]ge-ta
男	男=NOM	男=NOM	逃げる-PST
「男」	「男が」	「男が逃げた」	
d. sa[kana	e. sa[kana=ga	f. [sa]ke=wa	sa[kana=da
魚	魚=NOM	鮭=NOM	魚=COP
「魚」	「魚が」	「鮭は魚だ」	

また，東京方言では，文節内部にピッチの急激な下降は基本的に 1 箇所しか現れず，文節が 2 つ以上のアクセント単位に分かれることはない。このような場合に，ここでは「文節が 1 つのアクセント単位に一致する」と言うことにする。

本シンポジウムで取り上げられる鹿児島方言などの N **型アクセント**（アクセント単位の長さに関わらず N 個までしかアクセント型の対立がない体系）の体系を持つ多くの方言では，文節が語アクセントの基本的な実現単位となり，文節とアクセント単位が基本的には一致する。例えば，鹿児島方言の語アクセントの実現形は，「（語ではなく）文節の一番後ろ，あるいは，後ろから 2 番めの音節が高くなる」という形で記述できる。

さて，「文節」という単位・概念を提案した橋本（1934）は，様々な形でそれを規定するが，学校文法などにおいて最も重視されるのが「**實際の言語に於て，いつでも續けて發音せられる最も短い一句切**」としての文節である[1]。つまり，この定義に従えば，文節は「**発話の句切れ**」という機能的な単位なのであって，必ずしも文法的な単位ではない。

実際，我々が日本語（諸変種を含む）の例文を提示する際，上記の（2c）や（2f）に見られるように，スペースを空けて句切って示しているのが文節である。一方で，そうして句切られたそれぞれの文節は，形態・統語的な観点から見ると決して均質なものではない。

[1] 橋本は，「文節」を「文を分解して最初に得られる単位」あるいは「直接に文を構成する成分」とし，統語的な観点からも定義している。また，「アクセントが一定してゐる」あるいは「アクセントは，文節を單位として考察した場合に一定の形を示すもの」とも述べ，「文節」が語アクセントのドメイン（アクセント単位）となることも示唆している。

例えば，（2c）（2f）に含まれる 4 つの文節のうち，*otoko=ga*「男が」や *sakana=ga*「魚が」がそれぞれ名詞句（NP）であり，項となっているのに対して，（2f）の *sakana=da*「魚だ」は，コピュラ動詞 *=da* を伴い，名詞述語となっている。また，（2c）の *nige-ta*「逃げた」は，動詞単独の文節である。

問題は，必ずしも形態・統語的には均質でない文節という単位を使って韻律構造が記述されてきたことに対して，従来の研究では十分な注意が向けられてこなかったことにある。実際，文節を単位として韻律構造を記述すると，少なくない数の「例外」が生み出されることになるのである。

例えば，木部氏が取り上げる鹿児島方言など西南部九州の諸方言では，「名詞＋助詞」と「名詞＋コピュラ」とは，どちらも同じ 1 つの文節でありながら，アクセントの実現が異なることが多い（=3）。

（3） 鹿児島方言における「名詞＋助詞」と「名詞＋コピュラ」のアクセントの違い

a. [a]me	b. a[me]=ga	c. ame=[ma]de	d. [a]me=zya
飴	飴=NOM	飴=LIM	飴=COP
「飴」	「飴が」	「飴まで」	「飴だ」

また，松倉氏が取り上げる福井市蒲生方言では，連続する 2 つの文節の音調実現について，そこに含まれている自立語は同じものでありながら，助詞を含むか含まないかで文全体の音調が異なる場合があるという（=4）。

（4） 福井市蒲生方言における名詞「星」を目的語とする文の音調

a. ホ[シ]=オ ミル	b. ホ[シ ミ]ル
「星を見る」	「星（を）見る」

さらに，宮崎県都城市方言は一型アクセントの方言で，文節の末尾音節が常に高くなると言われるが，下地氏の調査では，全ての文節において末尾音節が高くなるわけではなく，また，その末尾音節が高くならないものの分布も様々である（=5）。

（5） 都城方言における末尾音節が高くならない文節（下線部太字）

a. [eQ]	**mita**	b. [eQ]	**kuta**	c. zyozyo[na]	**sekarasi**
焼いて	みた	焼いて	食べた	すごく	うるさい
「焼いてみた」		「焼いて食べた」		「すごくうるさい」	

以上のことを考慮に入れた時，広義の文法記述に向けて必要となるのは，文節を離れ，文法構造（形態・統語的構造）を視野に入れて，それと一貫する形で韻律構造を記述することであると考えられる。ただ，その際には，当然，これまでの韻律研究に関する知見，つまり，「文節」を基本的な単位とする記述の中で発見されてきた言語事実を，十分に踏まえなければならない。

例えば，本シンポジウムで主に議論の対象となる N **型アクセント**の方言では，「助詞・助動詞およびそれらの連続が固有のアクセントをもたず，それらが自立語に接合した文節全体で 1 つのアクセント単位になって音調型が定まる」（上野 2012: 47. 一部改変）という「**文節性**」が広く認められる。仮に文節を用いずに韻律構造を記述したとしても，その記述は，言語事実としての文節性というものを何らかの形で捉えられるものでなければいけない。

3. 広義の文法記述をめざして：共有される問い

本シンポジウムでは，前節で述べたことを背景にして，狭義の文法と音韻との両方を視野に入れ，広義の文法記述を志向した時に見えてくる様々な問題について議論する。本シンポジウムで議論される話題は多岐にわたるが，特に，諸変種における「音調句」の形成を，従来のように「文節」という単位を使って記述した場合に生じる種々の問題を議論の中心におく。

こうした議論の背景にある企画者と講演者の共有する問題意識としては，以下（6）に示した 2 つがある。これをそのまま，本シンポジウムの中心的な問いとする。

（6） 本シンポジウムの中心的な問い

a. 文法研究においては，狭義の文法の「表示」としての韻律現象に目を向ける必要があるのではないか

b. 文法の変化を考える場合にも，韻律現象に目を向ける必要があるのではないか

以下，上記 2 点についてやや詳細に述べる。

3.1 音調句は何を単位にしてどのように形成されるのか？

まず，広義の文法記述を志向し，文法構造（形態・統語的構造）と齟齬のない形で韻律構造を記述するために考えるときの 1 つのポイントは，**特定の韻律現象が何らかの形で特定の形態・統語的構造を表示（写像）しているのではないか**，という点である。つまり，音調句という音韻的な単位が形成されるにあたって，どのような文法的なまとまりが，そのドメインとなり得るのかを考えるのが 1 つの課題となる。これが（6a）の問いに対して，我々がとるアプローチの 1 つである。

一方で，形態的・統語的に同じ構造であっても，韻律構造への写像のされ方が 1 つとは限らない。音調句という単位が音韻的な単位である以上，その形成には，語の長さや語アクセントなど，音韻的な条件がより強く関わる可能性がある。例えば，（4）で見た蒲生方言におけるホ[シ ミ]ルのように，目的語名詞と動詞とが 1 つの音調句にまとまるような現象は，その目的語名詞が 3 モーラ以上の場合には起こらないという（松倉氏講演）。

また，形態的・統語的構造を無視し，むしろそれに矛盾するような形で，音調句が形成される場合もある。例えば，（7）では，統語的には「ンメァー サケ」（旨い酒）で名詞句を形成し，動詞「ノム」（飲む）の目的語となっているが，その主要部である「サケ」（酒）は，韻律的には述語動詞「ノム」（飲む）と 1 つの音調句を成し，形容詞はその音調句外に置かれている（松倉氏講演）。

（7）福井市蒲生方言における修飾語を伴った名詞句を目的語とする例
ン[メァー]#サ[ケ ノ]ム
「旨い酒を飲む」

広義の文法記述に際しては，このような形態的・統語的条件（構造）と音韻的な条件（構造）との競合関係（一致・不一致）を探る必要もある。

こうした観点からのアプローチも，間接的ではあるが（6a）の問いに対しては有効であると考える。松倉氏はじめ，本シンポジウムの各講演においても，これらの問題について触れられるところがある。

3.2 なぜ「文節」がアクセント単位と（概ね）一致するのか

既に述べたように，諸変種を含む日本語の韻律研究（特に語アクセント研究）においては，「文節」を用いた記述が行われてきた。文節レベルでの音調実現を観察することによって，当該言語の韻律体系が大まかながら明らかにすることができることは，アクセント研究者である企画者も実感するところである。

ただ，自戒をこめて言えば，その場合に扱ってきた文節は，名詞に 1 つ以上の助詞が続くものが主で，動詞・形容詞を含む文節は十分に扱われてこなかったと言ってよい。しかしながら，語アクセントの研究においても，名詞と動詞・形容詞とでは，そもそも韻律的特性が異なるとする立場もある（早田 1999 など）。

実際，木部氏がとりあげる，鹿児島方言で文節とアクセント単位が一致する例と一致しない例とを見比べると，文節とアクセント単位とが**一致しない**例のほとんどが，述語句を形成するもの，つまり，動詞の派生・屈折形式，あるいは，それに準ずるものである。名詞を含む文節で，アクセント単位と一致しないという例は多くない。

つまり，**なぜ文節がアクセント単位と一致するのか**，ということを考えたとき，それは，我々が名詞のアクセントを中心に見てきたためである，という（身も蓋もない）理由が考えられる。しかし，そこから一歩踏み込んで考えるべきは，では，**なぜ動詞の派生・屈折形式などに，文節とアクセント単位が一致しない場合が多いのか**，ということである。

本シンポジウムでは，その 1 つの答えとして，アスペクト形式（「～テイル」など）をはじめ，動詞の派生・屈折形式の多くが文法変化を経験した形式であるためだとし，現象の整理とその史的背景について議論する。

そもそも，*=ga, =o* を代表とする一拍助詞を含む文節も，今でこそアクセント単位と一致するが，平安時代の資料では助詞だけで独立したアクセント単位をなしていたと見られる。つまり，現在多くの方言で*=ga, =o* を含む文節が 1 つのアクセント単位となっているのは，助詞に前接する名詞のアクセントが実現するドメインが拡張したこと，つまり，助詞が名詞の語アクセント実現のドメインの中に取り込まれた結果と捉えられる。名詞と助詞からなる文節の多くがアクセント単位と一致するのは，こうした変化が広く起こったためだと考えられる。一方で，動詞の場合には，語幹に種々の接辞などが続いて文法的カテゴリーを表示されるが，その接辞が韻律的な自立性をどれほど失っているか／保っているかに応じて，文節全体の音調の現れが異なってくるのである。

韻律的自立性の変化をある種の文法変化に伴うものと考えれば，アクセント単位と文節の不一致，あるいは，アクセント句（音調句）と形態統語的構造の不一致の問題を，文法変化の進行具合を示唆するものとして，史的観点から解釈することも可能だろう。

下地（2018: 337）は，「言語体系は，個々のパーツが有機的に繋がっていて，それでいて体系内のパーツが異なる速度で，異なった方向に変化し，体系全体が常に軋みを生じながらゆっくりと変容」する，という。すなわち，広義の文法記述を志向すると，不可避的に様々な共時的な「軋み」に直面することになるが，少なくともその一部は言語変化という観点から説明が可能だと考えられる。

本シンポジウムにおける各講演内においても，文節とアクセント単位の不一致，あるいは，形態・統語的単位と韻律的単位の不一致という「軋み」を扱う。その「軋み」に目を向けて，その史的背景について考察し，議論を重ねることを通して，上記（6b）の問いにアプローチする。

4. 本シンポジウムの進め方

本シンポジウムは，以下の（8）のようなスケジュールで進められる。

（8） シンポジウムの構成（案）

趣旨説明　12:30〜12:45（15 分）

講演 1：木部暢子氏　12:45〜13:25（40 分）
「音調単位」と「文節」―西南部九州二型アクセントからの提言―

講演 2：松倉昂平氏　13:25〜14:05（40 分）
北陸方言のアクセントの実現領域―韻律的単位と形態統語的単位の不一致―

休憩　14:05〜14:15（10 分）

講演 3：下地理則氏　14:15〜14:55（40 分）
「文節」概念を超えて―都城方言の韻律記述試論―

総括　14:55〜15:10（15 分）

ディスカッション　15:10〜15:50（40 分）

全体のまとめ　15:50〜16:00（10 分）

趣旨説明に続き，まずは，長く西南部九州二型アクセントの研究に従事にされてきた**木部暢子氏**にご登壇いただき，文節を使った同アクセントの記述および分析の問題点を整理していただく。最新の研究成果にもとづいて，文節とアクセント単位とが一致しない現象を多く取り上げていただき，それに対して，従来，どのような共時的・通時的説明が与えられてきたかをご紹介いただく。

松倉昂平氏には，北陸諸方言の N 型アクセントの事例を通して，やはり，文節とアクセント単位とで一致しない現象，あるいは，形態統語的単位と韻律的単位とが一致しない現象を取り上げていただく。木部氏が主に，1 つの文節が 2 つ以上のアクセント単位に分かれる現象を扱う一方で，松倉氏は，2 つ以上の文節あるいは 2 つ以上の形態統語的な単位が 1 つの韻律的単位にまとまる現象をとりあげていただき，その共時的・通時的観点から考察した結果をご報告いただく。

最後の**下地理則氏**には，都城方言の一型アクセントにおける韻律句（音調句）形成過程の記述を試みた試論を提示していただく。下地氏の試みは，従来の韻律研究で暗黙の了解とされてきた「文節」という道具立てをあえて放棄した上で，文法構造と齟齬のない形での韻律構造の記述を目指すというものである。その結果として，文節を使った場合よりも，よりシンプルで一貫性のある韻律構造の記述が可能であることが主張される。

それぞれの講演において各講演者は，残された課題あるいは発展的な課題を提示される。総括では，それらの課題なども視野に入れた上で，講演内では必ずしも十分に扱われない現象にも触れながら，（6）で示した「問い」をめぐって議論するための準備を行う。

ついで，趣旨説明・講演・総括の内容を踏まえて，全体での議論を行う。可能であれば，最後に全体の議論をまとめる時間を設けたい。

なお，趣旨説明・総括およびディスカッションの進行は，企画者が行う。

企画者としては，本シンポジウムでの議論をきっかけにして，文法研究に軸足を置く研究者は韻律現象に，音韻研究に軸足を置いてきた研究者は文法研究に（より）目を向け，ともに広義の文法記述を志向していく中で，**音韻と文法のインターフェイスに潜む，新たな研究テーマの開拓がなされていく**ことを願うものである。

参加者のみなさまへの御願い

議論を可能な限り円滑に行うために，質問などがあれば，下記 URL（QR コード）から事前にお送りいただけますと助かります。個々の講演内容に関するものはもちろん，全体を通しての質問など，様々な観点からの質問・コメントを御願いします。

日本語文法学会　第 25 回大会シンポジウム　質問受付フォーム
https://forms.gle/NFC5SZ9KdaabWdch9

参考文献一覧

Crystal, David (2008) *A Dictionary of Linguistics and Phonetics, Sixth Edition*. Blackwell Publishing.

橋本進吉（1934）『国語法要説』，明治書院.

早田輝洋（1999）『音調のタイポロジー』，大修館書店.

Igarashi, Yosuke (2015) "Intonation," In: Kubozono, Haruo (ed.) *Handbook of Japanese Phonetics and Phonology,* 525-568, Mouton De Gruyter.

五十嵐陽介（2021）「日本語諸方言のイントネーションと言語類型論」窪薗晴夫，野田尚史，プラシャント・パルデシ，松本曜（編）『日本語研究と言語理論から見た言語類型論』，22-48，開拓社.

下地理則（2018）『南琉球宮古語伊良部島方言（シリーズ記述文法 1）』，くろしお出版.

Trask, Rober. L. (1997) *A Student's Dictionary of Language and Linguistics*. Routledge.

上野善道（2012）「N型アクセントとは何か」『音声研究』16(1): 44-62.

謝辞

下地理則氏には，本企画立案当初より様々にご助言をいただき，また本稿を成すにあたっても多くのコメントとご意見をいただいた。また，木部暢子氏と松倉昂平氏のお二人には，今回の御登壇をご快諾いただいただけでなく，企画全体の方向性や趣旨などについても様々にご意見をいただいた。宮地朝子氏には，大会委員長としてご多用の中，シンポジウムの打ち合わせにも毎回同席いただき，種々ご助言をいただいた。心より感謝申し上げる次第である。

「音調単位」と「文節」—西南部九州二型アクセントからの提言—

木部暢子（人間文化研究機構）

1　語アクセントの実現の領域（ドメイン）に関するこれまでの考え方

日本語のアクセント研究は，これまで「文節」をドメインとして行われてきた。有坂秀世は「アクセント型の本質について」（1941）の中で次のように述べている。

> アクセントの上から言へば，「單語」は獨立性を持つものではない。例へば，サキマシタのアクセントは，サキマシタといふ一つの文節全體をとつて考へる時に，始めてその形（下上上下下型）をなすものである。（有坂 1941：84-85）

> もつとも，各單語も亦アクセントの上にそれぞれの個性を持つて居り，その個性に從つてやはり幾つかの型に分類することは出來る。併しながら，文節アクセントの型が顯在的な形の上の分類であるのに對し，單語アクセントの型は，潛在的な機能（文節構成上の機能）の上の分類に過ぎない。（同:85）

「潛在的な機能」と「顯在的な形」の関係について，このあとに次のような例が上がっている。これを見ると，この２つは現在でいう「基底形」と「表層形」に対応するようである。

体言
- a. ウシ（牛）オカ（岡）‥　m型，n型と結合して下上上型の文節を作る機能を有する
- b. ウマ（馬）ヤマ（山）‥　m型と結合する時は下上下型の文節を作り，n型と結合する時は下上上型の文節を作る機能を有する
- c. ネコ（猫）ウミ（海）‥　m型，n型と結合して上下下型の文節を作る機能を有する

助詞
- m. ガ・ニ・オ・ハ・モ‥
- n. ノ

有坂（1941）以降，アクセント研究の多くは「文節」を観察や記述のドメインとして行われてきた。「文節」の定義自体に「これ以上に句切る事が出來ない一区切」という内容が含まれているので，アクセントの領域（以下「アクセント単位」と呼ぶ）と「文節」とは，もともとかなり重なる部分がある。したがって，「文節」をアクセント研究に援用することには，それなりの妥当性があったものと思われる。ただし，「文節」と「アクセント単位」が一致しない場合もある。このようなものに関しては，これまでも記述や考察が行われ，歴史的側面や機能的側面から説明が行われてきた（上野 1984，2012）。本発表では，このような一致しない例を改めて取り上げ，音調研究と文法研究の接点について考えてみたい。

２　鹿児島市の二型アクセントを取り上げる理由

本発表でN型アクセントを取り上げるのは，N型アクセントでは，音調パターンがN個に限られていて，しかも音調の領域が変動することがほとんどないため，「アクセント単位」の認定が比較的容易に行えるからである。例えば，鹿児島市の二型アクセントは，後ろから２音節目がH（高）となるA型と，最終音節がHとなるB型の２種類のアクセント型で構成されている。このHは，語の固有のアクセント（A型かB型か）を示す弁別機能を果たすと同時に，「アクセント単位」がそこで終わるということを示す境界設定機能を果たしている（上野 1984:171）。(1) は鹿児島市方言の発話例だが，［ガ］［ア］［タ］のHは，それぞれの語がA型，B型のどちらであるかを示すと同時に，そこで「アクセント単位」が区切られるということを示している（［ はピッチの上昇を，］はピッチの下降をあらわす。なお，鹿児島市方言の韻律単位は音節［syllable］である）。

(1) ソラ[ガ　[ア]コ　ナッ[タ（空が明るくなった）

東京方言のような「下げ核」により語のアクセントが示される体系では，上昇が「アクセント単位」の始まりをあらわすことが知られているが，川上（1947）が指摘しているように，この上昇は時と場合によって変動する[1]。(2) のa．b．c．では「アクセント単位」（川上の「句」）の区切り方が異なっているが，この３つは発話意図によって交替する。

(2)「庭に咲いた女郎花」
　a．ニワニサイタオミナエシ（全体を一句に発音されたもの）
　b．ニワニサイタオミナエシ（全体を二句に区切って発音されたもの）
　c．ニワニサイタオミナエシ（全体を三句に区切って発音されたもの）

それに対し，鹿児島市二型アクセントでは発話意図によって「アクセント単位」の境界が変動することなく，常に一定している[2]。例えば，上の(2)の内容の発話は，鹿児島市方言では一貫して(3)のように３つの「アクセント単位」で発話される。

(3) [ニ]ウェ　セ[タ　オミナ[エシ。(庭に咲いた女郎花)

このような特徴を持つ鹿児島市の二型アクセントを素材として，以下では音調の単位である「アクセント単位」と文法の単位である「文節」の一致と不一致を取り上げ，音韻研究と文法研究の連携を考えてみたい。

３　「アクセント単位」と「文節」が一致する例

まず「アクセント単位」と「文節」が一致する例を見ておく。

---

[1] 五十嵐（2021）では「デフレージング」という語でこのような現象が説明されている。

[2] 発話意図は別の形，例えばポーズやプロミネンス等によってあらわされるが，ここでは触れない。

鹿児島市方言の名詞単独形のアクセントと「名詞＋ガ（主格）」のアクセントを示したのが**表１**である。名詞単独の場合も「名詞＋ガ（主格）」の場合も，A型の語は後ろから２音節目がH，B型の語は最終音節がHになっている。つまり，助詞「ガ」は固有のアクセントを持たず，前接する名詞とともにA型，B型のアクセント型を作っている。「名詞＋ガ（主格）」のアクセント型は，前接する名詞の固有の型と同じ型に実現する。

多くの助詞もまた「ガ」と同じように固有のアクセントを持たず，「名詞＋助詞(連続)」がA型，B型を担っている。「名詞＋助詞(連続)」のアクセントは前接する名詞の型と同じ型に実現する（**表２**）。

動詞に続く助詞・助動詞も同じく，固有のアクセントを持たず，「動詞＋助詞・助動詞（連続）」でアクセント型を担い，前接する動詞のアクセントと同じ型に実現する（**表３**）。

表１ 鹿児島市方言の名詞のアクセント

A型 名詞単独形	ga（主格)接続形	B型 名詞単独形	ga（主格)接続形
[ha]a（葉)	[ha]=ga	[ha（歯)	ha=[ga
[a]me（飴)	a[me]=ga	a[me（雨)	ame=[ga
o[na]go（女)	ona[go]=ga	oto[ko（男)	otoko=[ga
kama[bo]ko（蒲鉾)	kamabo[ko]=ga	asaga[o（朝顔)	asagao=[ga
abara[bo]ne（肋骨)	abarabo[ne]=ga	nodoboto[ke（喉仏)	nodobotoke=[ga

表２ 鹿児島市方言の「名詞＋助詞(連続)」のアクセント

A型 [a]me（飴)		B型 a[me（雨)	
[a]me（与格)	[a]me=N（属格)	a[me（与格)	a[me=N（属格)
a[me]=mo（累加)	a[me]=wa（主題)	ame=[mo（累加)	ame=[wa（主題)
ame=[ka]ra（奪格)	ame=[baʔ[3]]kai（限定)	ame=ka[ra（奪格)	ame=baʔ[kai（限定)
ame=ka[ra]=mo	ame=baʔ[kai]=wa	ame=kara=[mo	ame=baʔkai=[wa

[3] 本発表では，標準語の促音に当たる音を /ʔ/ で表記している。鹿児島方言の音節構造はCVCを基本とする。例えば，/kuʔ/（口，首，釘，来る），/suʔ/（杉，筋，為る）はCVCの１音節語である。この /ʔ/ は助詞や助動詞の前では，助詞や助動詞の頭子音に同化して，[kugga]（口が），[kukkara]（口から），[kutto]（来ると），[kuddo]（来るよ）のように，[g]，[k]，[t]，[d] となる。これらは /ʔ/ の異音と考えることができる。したがって，[pp, bb, tt, dd, kk, gg , ss] のような geminate は /ʔp, ʔb, ʔt, ʔd, ʔk, ʔg , ʔs / と解釈し，別に促音 /Q/ を立てることをしない。

表３ 鹿児島市方言の動詞のアクセント

A型　[a]kuʔ（開ける）		B型　si[muʔ（閉める）	
非過去	過去	非過去	過去
[a]kuʔ	a[ke]-ta	si[muʔ	sime-[ta
[a]ke-N（否定）	ake-N-[zyaʔ]-ta	si[me-N（否定）	sime-N-zyaʔ-[ta
ake-[sa]suʔ（使役）	ake-sa[se]-ta	sime-sa[suʔ（使役）	sime-sase-[ta
ake-[ra]ruʔ（受身）	ake-ra[re]-ta	sime-ra[ruʔ（受身）	sime-rare-[ta
a[ke]-mos（丁寧）	a[ke]-mos-i-ta	sime-[mos（丁寧）	sime-mos-i-[ta
ake-[mo]h-aN（否定）	ake-moh-aN-[zyaʔ]-ta	sime-mo[ha-N（否定）	sime-moh-aN-zyaʔ[ta
aku-[re]ba（条件）		simu-re[ba（条件）	
[a]ke-e（命令）		si[me-e（命令）	

４　「アクセント単位」と「文節」が一致しない例

鹿児島市方言の助詞・助動詞の中には，名詞や動詞と一続きになって「アクセント単位」を作らないものがある。(4)のような助詞・助動詞で，これらは，アクセント的には独立した「アクセント単位」を形成する。「文節」の考え方では，これらは直前の名詞や動詞と一体となって１文節を作るので，「アクセント単位」と「文節」が一致しないということになる。

(4) a. コピュラ「ジャ」「ゴワス」
　　b. アスペクト形式「オッ（動作継続）・チョッ（結果継続）」
　　c. 様態「ゴチャッ」
　　d. 終助詞「ド・ガ（情報伝達），カ・ヤ・ナ・ケ（疑問・質問），ナ・ナー・ネ・ネー（訴えかけ）」

まず，コピュラのアクセントを見てみよう（**表４**）。

表４ 鹿児島市方言のコピュラ「ジャ」「ゴワス」

	A型 [a]me（飴）	丁寧	B型　a[me（雨）	丁寧
コピュラ	[a]me zya	[a]me gowas	a[me] zya	a[me] gowas
過去	[a]me zyaʔ-[ta	[a]me gowas-i-[ta	a[me] zyaʔ-[ta	a[me] gowas-i-[ta
否定	(a[me]=zya na[ka)	[a]me gowa[h-aN	(ame=[zya] na[ka)	a[me] gowa[h-aN
否定過去	(a[me]=zya nakaʔ-[ta	[a]me gowah-aN-zyaʔ-[ta	(ame=[zya] nakaʔ-[ta)	a[me] gowah-aN-zyaʔ-[ta

表４では，コピュラ「ジャ」「ゴワス」が続いても，[a]me（飴），a[me（雨）のHの位置が移動せず，[a]me（飴），a[me（雨）の「アクセント単位」がここで終了している。そのため，「ジャ」「ゴワス」で新しい「アクセント単位」の立ち上げが行われている。過去形で最終音節にHが

あらわれていることから，「ジャ」「ゴワス」はB型のアクセントを持つと認定することができる。これは「ジャ」「ゴワス」が「にてあり」「ごあります」に由来し，「あり」のB型のアクセントを受け継いでいるためである。

「ジャ」の否定 a[me]=zya na[ka（飴ではない），ame=[zya] na[ka（雨ではない）では，「ジャ」が独立していないが（網掛け部分），これはこの「ジャ」がコピュラの「ジャ」ではなく，「では」の縮約形であるためである。「では」は助詞連続なので，非独立タイプの表２のカテゴリーに分類される。

また，「ゴワス」の否定過去 gowah-aN-zyaʔ-[ta の「ジャッタ」もアクセント的に独立していない。上と同じように考えるならば，これもコピュラの「ジャ」と同じものではないと考えなければならない〔表３にも否定過去の ake-N-[zyaʔ]-ta（開けなかった），sime-N-zyaʔ-[ta（閉めなかった），ake-moh-aN-[zyaʔ]-ta（開けませんでした），sime-moh-aN-zyaʔ[ta（閉めませんでした）の例を挙げている〕。鹿児島方言の否定過去「ンジャッタ」の由来には，「ズアッタ＞ザッタ＞ンジャッタ」とする説（春日 1933，大西 1999），否定の連用中止形デ（ヂ）＋アッタに由来する説（久保薗 2016）などがあり，いずれも「あり」に由来すると考えている[4]。もしそうだとすると，コピュラの「ジャ」と同じようにアクセント的には独立タイプになると予想されるが，実際にはそうなっていない。したがって，別の由来の可能性を考えるか，あるいは動詞否定過去表現で「ジャッタ」の文法化が急速に進んでアクセント的独立性が失われたと考えるか，さらに検討が必要である。

次に，アスペクト形式「オッ（動作継続）」「チョッ（結果継続）」のアクセントを見てみよう。**表５**にその例を挙げる。

表５ 鹿児島市方言のアスペクト形式「オッ」「チョッ」

	A型		B型	
	[kiʔ]（着る）	[tu]kuʔ（漬ける）	[kuʔ（来る）	tu[kuʔ（付ける）
oʔ（動作継続）	[kiʔ] oʔ	[tu]ke oʔ	[ki] oʔ	tu[ke] oʔ
過去	[kiʔ] oʔ-ta	[tu]ke oʔ-ta	[ki] oʔ-ta	tu[ke] oʔ-ta
否定	[kiʔ] or-aN	[tu]ke or-aN	[ki] o-aN	tu[ke] or-aN
否定＋デ	[kiʔ] o[r-aN]-de	[tu]ke o[r-aN]-de	[ki] o[r-aN]-de	tu[ke] o[r-aN]-de
tyoʔ（結果継続）	[kiʔ] tyoʔ	[tu]ke tyoʔ	[ki] tyoʔ	tu[ke] tyoʔ
過去	[kiʔ] tyoʔ-ta	[tu]ke tyoʔ-ta	[ki] tyoʔ-ta	tu[ke] tyoʔ-ta
否定	[kiʔ] tyor-aN	[tu]ke tyor-aN	[ki] tyor-aN	tu[ke] tyor-aN
否定＋デ	[kiʔ] tyo[r-aN]-de	[tu]ke tyo[r-aN]-de	[ki] tyo[r-aN]-de	tu[ke] tyo[r-aN]-de

[4] ロドリゲス『日本大文典』(1604-1608) に「Ximo（九州)」では「Aguezaru（上げざる)，Aguezatta（上げざった)，Aguezatte gozaru（上げざってござる)」が使われると書かれている（土井忠生訳『ロドリゲス日本大文典』p. 113)。1600 年ごろには九州で「ザッタ」が使われていたらしいが，それ以外のことはわからない。

「オッ」「チョッ」が続いても［kiʔ］（着る），［tu］kuʔ（漬ける），［kuʔ（来る），tu［kuʔ（付ける）のHの位置が移動せず，ここで「アクセント単位」の境界が示され，「オッ」「チョッ」で新しい「アクセント単位」が立ち上っている。「オッ」「チョッ」は動詞に対して低く続き，Hが出現しないことが多いが，「否定＋デ（～ないから）」ではA型のピッチパターンがあらわれる。これは「オッ」「チョッ」が「おる」「ておる」に由来するため，「おる」のA型を受け継いだものである。

次に，様態，希求をあらわす「ゴチャッ」を見てみよう。**表６**にその例を挙げる。

表６ 鹿児島市方言の様態表現「ゴチャッ」

	A型	B型
名詞	a［meN］go tyaʔ（飴のようだ）	ameN［go］ tyaʔ（雨のようだ）
	a［meN］go tyaʔ-ta（飴のようだった）	ameN［go］ tyaʔ-ta（雨のようだった）
動詞	［naʔ］go tyaʔ（泣くようだ）	ku［go］ tyaʔ（食うようだ）
	na［ko］go tyaʔ（泣きたいくらいだ）	kuo［go］ tyaʔ（食いたいくらいだ）
	na［ko］go tyaʔ-ta（泣きたいくらいだった）	kuo［go］ tyaʔ-ta（食いたいくらいだった）

「ゴチャッ」では，「名詞＋ゴ」（a［meN］go（飴のよう），ameN［go］（雨のよう）），「動詞＋ゴ」（［naʔ］go（泣くよう），ku［go］（食うよう），na［ko］go（泣きたい），kuo［go］（食いたい））が一つの「アクセント単位」を作り，ここでA型，B型が終了している。そして次に「チャッ」が別の「アクセント単位」を立ち上げている。「ゴチャッ」は文法書や辞書では１つの語として掲載されているが[5]，アクセント的には〔非独立の「ゴ」〕と〔独立の「チャッ」〕に区切られる。「チャッ」がアクセント的に独立するのは，この語の由来となった「ごとある」あるいは「ごとくある」の「ある」のB型を引き継いでいるためだと思われる。ちなみに，「ゴッ」だけでも「様態」の意味で次のように使われる。このときの「ゴッ」のアクセントも非独立である。

(5) オク［レン］ゴッ　ハシーカ［タ］　ジャッタ（遅れないように走ることだった）
(6) アカ［チャン］ガ　ホ［ゴッ］　ナッ［タ（赤ちゃんが這うようになった）

ここまで見てきたように，アクセント的に独立する「ジャ」「ゴワス」「オッ」「チョッ」「ゴチャッ」は，いずれも存在動詞「ある」「おる」に由来している。これらの語は文法化が進み機能語に変化しているとしても，アクセント的にはもとのアクセントを引き継いでいる。アクセントのこのような性質からこれらの語の性格をもう一度見直すことが必要であるように思う。

---

[5] 上村（1989）の「推定」の項に「『らしい』『ようだ』に相当する言い方は薩隅ひろくゴトアル〔いろいろ訛がある〕で一貫する」，「様態」の項に「種子島ではこのように様態を表わす場合はソウを用いようとせずゴトアルを使い，嬉シカロウゴトアル顔（嬉しそうな顔）と言わなければならない」，「希望」の項に「希望を表わすには比況の～ゴトアルを意志形につけて，行コゥゴトアッ（行きたい），茶オ ノモゥゴトアイと言う」とある。また，橋口（2004）『鹿児島方言大辞典（上）』に「ゴタル 用言について推量の意を表す」とある。

最後に，終助詞の例を見てみよう。**表７**に「ド（情報伝達）」の例を挙げる。

表７ 鹿児島市方言の終助詞「ド」

	A型 [a]me（飴）	B型 a[me（雨）
名詞+COP	[a]me zyaʔ do～[a]me zyaʔ [do	a[me] zyaʔ do～a[me] zyaʔ [do
過去	[a]me zyaʔ-ta do～[a]me zyaʔ-ta [do	a[me] zyaʔ-ta do～a[me] zyaʔ-ta [do
	A型 [kiʔ]（着る）	B型 [kuʔ（来る）
動詞	[kiʔ] do～[kiʔ] [do	[kuʔ] do～[kuʔ [do
否定	[ki]r-aN do～[ki]r-aN [do	[ko-N] do～[ko-N [do
過去	[ki]-ta do～[ki]-ta [do	ki-[ta] do～ki-[ta [do
	A型 [a]ke（赤い）	B型 a[e（青い）
形容詞	[a]ke do～ [a]ke [do	a[e] do～ a[e [do
過去	aʔ-[kaʔ]ta do～ aʔ-[kaʔ]ta [do	ao-kaʔ[ta] do～ ao-kaʔ[ta [do

これまでと同じく，前接する「名詞＋コピュラ」，動詞(活用形)，形容詞(活用形)のHが移動せず，そこで「アクセント単位」が区切れている。したがって，「ド」は独立した「アクセント単位」を立ち上げていると考えられる。ただし，「ド」の後ろには基本的に他の語が接続しないので，「ド」のアクセントがA型かB型かを判断することができない。そのため，木部（2000）では「ド」などの終助詞に対して「X型」という名称を使っている。また，終助詞の「ド」には，文末のイントネーションが被さるので，表７に示したように高く始まることもあれば低く始まることもある。このことも「ド」のアクセント型の判断を難しくしている。他の終助詞のアクセントも，以上の「ド」のアクセントに同じである。

終助詞が独立タイプとなるのは，「終助詞が，前接する語だけを受けるのではない」ということをアクセントで示しているからだと考えられる。文法的には，終助詞は直前の語と一緒になって「文節」を作るとされる。例えば，(7)では形容詞「いい」と終助詞「ね」が１つの「文節」を作っている。

(7) kyoo=wa　teNki=ga　i-i=ne.
今日=TOP　天気=NOM　い-NPST=SFP
「今日は天気がいいね」

しかし，「ね」が「いい」だけを受けるのでないことは明確で，「今日は天気がいい」という叙述内容を，伝達のムードをあらわす「ね」が包み込む形で発話が成立している。

(8) [今日は　天気が　いい] ね

鹿児島市方言の終助詞のアクセントは，このような文法的な性格を示しているわけである。

(9) ‹B›kyu=[wa ‹A›teN[ki]=ga ‹B›yo-[ka ‹X›[ne]e.（‹ › はアクセント型をあらわす）
今日=TOP 天気=NOM い-NPST SFP
「今日は天気がいいね」

謝辞
本発表は，JSPS 科研費基盤研究(A)21H04351 の助成を受けて行った研究の一部を報告するものである。

文献

有坂秀世（1941）「アクセント型の本質について」『言語研究』7・8，83-92.
五十嵐陽介（2021）「日本語諸方言のイントネーションと言語類型」窪薗晴夫・野田尚史・プラシャント パルデシ・松本曜［編］『日本語研究と言語理論から見た言語類型論』22-48，開拓社.
上野善道（1984）「N 型アクセントの一般特性について」平山輝男博士古稀記念会(編)『現代方言学の課題 2 記述的研究篇』明治書院，167-209.
上野善道（2012）「N 型アクセントとは何か」『音声研究』16(1)，44-62.
大西拓一郎（1999）「新しい方言と古い方言の全国分布　ナンダ・ナカッタなど打消過去の表現をめぐって」『日本語学』18(13)，97-110.
春日政治（1933）「「小學方言講義」より」『文学研究』4，1-28.
上村孝二（1989）「薩隅方言の表現文法覚書」『九州方言・南島方言の研究』124-145，秋山書店．（初出は「鹿児島県下の表現語法覚書」鹿児島大学紀要『文科報告』4，1954 年）
川上蓁（1957）「準アクセントについて」『国語研究』7，44-60.
木部暢子（2000）『西南部九州二型アクセントの研究』勉誠出版.
久保薗愛（2016）「鹿児島方言における過去否定形式の歴史」『日本語の研究』12(4)，18-34.
橋口 満（2004）『鹿児島方言大辞典 上・下』高城書房.

北陸方言のアクセントの実現領域—韻律的単位と形態統語的単位の不一致—

松倉　昂平（金沢大学）

1. 問題設定

1.1 研究の背景、注目する現象例

福井県の沿岸地域では、新田 (2012) による越前町小樟方言の報告以来、それまで存在すら知られていなかった未報告種のアクセント体系の発見が相次いでいる（松倉・新田 2016, 松倉 2017, 松倉 2022 など）。それらは上野 (2012) の類型における「三型アクセント」に該当し、語の長さにかかわらず常に 3 種類の声調が区別される体系である（鹿児島市方言など九州西南部方言の「二型アクセント」に比べて、区別される声調の数が 1 つ多い）。

当地の三型アクセントについて注目されるのは、声調の実現するドメインの不規則性・拡張性である。多くの助詞・助動詞の類は (1ab) に見るように固有の声調を持たず、典型的には、内容語の声調がいわゆる「文節」（橋本 1934）全体をドメインとして実現する。しかしその一方で、ドメインが文節とは一致しない——例えば (1c)(2b) のように複数の文節にまたがる——環境も多く確認されており、結局のところ、「文節」という単位のみに捉われないで声調の実現ドメインを特定・記述することが必要になる。その韻律的なドメインにはどのような文法構造が反映されるのか、そして、どのような通時的変化がドメインの拡張をもたらすかについて、最新の調査結果を挙げながら考察する。

(1) 福井市蒲生方言における 2 拍 A 型名詞「箱」の音調[1]（A 型 : ドメインの右端に HL を付与）

a.　ハ[コ]=ガ　　b.　ハ[コ=カ]ラ　　c.　ハ[コ=ガ　ア]ル

H　L　　**H L**　　**H L**

「箱が」　　「箱から」　　「箱がある」

(2) 福井市蒲生方言における 2 拍 A 型名詞「星」の音調

a.　ホ[シ]=オ　ミル　　b.　ホ[シ　ミ]ル

H　L　　**H L**

「星を見る」　　「星見る」

1.2 文法化研究との関わり

本稿で言う「声調が実現するドメインの拡張」には 2 種類の異なるレベルの現象が含まれる。一つは共時的な拡張と言えるもので、(2b) に示した「目的語＋動詞」のような何らかの統語的まとまりに対応して複数の内容語を含む 1 つのドメインが形成される現象である。もう一つは通時的な変化としても捉えられるもので、(1) に例示したようにいわゆる助詞・助動詞などの機能語が韻律的自立性を失い、「内容語＋機能語」で 1 つのドメインを形成する現象である。

機能語の韻律的自立性（の喪失過程）に関する研究は文法化研究の一部に位置付けられる。文法化の過程には意味的・統語的側面の変化に加えて、接語・接辞化、音韻的実質の摩耗、ストレス・トーンの消失など形態音韻的・韻律的な自立性の侵食も生じることがよく知られる（Heine 1993: 56 など）。文法化研究は、意味的・統語的側面を見れば「内容語と機能語の間のカテゴリ

[1] [はピッチの上昇、] はピッチの下降位置を表す。

一の連続性」を捉える研究と言えるが（三宅 2005: 61）、形態・音韻面に着目すれば「語と接語と接辞の連続性」を捉える研究になるだろう。これまでは、文法化研究の文脈でも方言研究の文脈でも、特に韻律的な側面――文法化に伴うアクセントの変化――はあまり注目されてこなかったように思われる。本発表では、北陸の三型アクセント諸方言を例にして、様々な機能語（助詞・助動詞、テ形に接続する補助動詞、「ある」「なる」等の形式動詞）のアクセント上の振舞いを観察することで、文法化とアクセントの相互作用をめぐる新たな課題を提供することも試みる。

2. 対象方言のアクセント体系概説

本発表では福井県沿岸地域の 2 地点（坂井市三国町安島(あんとう)、福井市蒲生町）のアクセント体系を記述対象とする。いずれも近年になって「三型アクセント」が分布することが発見・報告された地点である（松倉・新田 2016, 松倉 2017）。2~4 モーラ（2~4 音節[2]）名詞の実現型を(3)(4) に示す[3]。

(3) 坂井市三国町安島方言の 2~4 音節名詞

	2 音節	3 音節	4 音節
A 型	ハ[コ	[ハ]コ[ガ [サ]カ[ナ	ハ[コ]カ[ラ サ[カ]ナ[ガ ニ[ワ]ト[リ
	L H	**H L H**	**H L H**
B 型	[ヤ!マ	ヤ[マ!ガ コ[コ!ロ	ヤ[マカ!ラ コ[コロ!ガ ア[サガ!オ
C 型	[フ]ネ	フ[ネ]ガ ハ[タ]ケ	フ[ネカ]ラ ハ[タケ]ガ ア[マザ]ケ
	H L	**H L**	**H L**

(4) 福井市蒲生方言の 2~4 モーラ名詞

	2 モーラ	3 モーラ	4 モーラ
A 型	ハ[コ]]	ハ[コ]ガ サ[カ]ナ	ハ[コカ]ラ サ[カナ]ガ ニ[ワト]リ
	HL	**H L**	**H L**
B 型	ヤ[マ	ヤ[マガ コ[コロ	ヤ[マカラ コ[コロガ ア[サガオ
C 型	フ[ネ]]	フ[ネ]ガ ハ[タ]ケ	フ[ネ]カラ ハ[タ]ケガ ア[マ]ザケ
	HL	**H L**	**H L**

両方言で区別される 3 種類の声調にそれぞれ A 型、B 型、C 型というラベルを付ける。各型の表面上のピッチパターンは 2 つの体系間で大きく異なるが、各型に所属する語彙は高い割合で一致する。

安島方言の A 型はドメインの右端に(H)LH、C 型は HL が付与される型である。ただし 3 音節以上の A 型ドメイン末尾にある 2 つ目の H はしばしば抑圧され[ハ]コガ、ハ[コ]カラのように実現する発話も多い。B 型はドメイン末で高いピッチから中程度のピッチへの小さな下降が生じるが、基底のトーンは無指定（無核型のようなもの）と考えておく。

蒲生方言の A 型はドメインの右端から数えて 1(, 2)モーラ目に HL、C 型はドメインの左端から数えて 2(, 3)モーラ目に HL が結びつく型である。B 型はドメインの末尾まで平らなピッチが続くが、その直後に別の語が続く場合ドメイン末尾の境界には義務的に下降が生じる（例：ヤ[マガ＋ミ[エル→ ヤ[マガ]ミエル「山が見える」。*ヤ[マガミエルは不可）。

両方言で「ガ」「カラ」などの助詞は自立語のドメインに組み込まれ、いわゆる文節全体にわ

[2] トーンを担う単位（tone bearing unit, TBU）は蒲生方言でモーラ、安島方言では音節。
[3] [はピッチの上昇、] は下降の位置を表す。！ は H から M への小さな下降、]] は拍内下降を表す。

たって自立語の声調が実現する。蒲生方言ではドメインの長さが 4 モーラに満たないと A 型と C 型の対立が中和するが（例：ハ[コ]]＝フ[ネ]]）、助詞等を付けて 4 モーラ以上の文節を作るとその対立が表出する（例：ハ[コカ]ラ≠フ[ネ]カラ）。

3. 助詞・形式名詞の韻律的自立性

前節で助詞「ガ」「カラ」を含む文節の音調を示したように、多くの助詞は固有のトーンを持たず自立語の声調が実現するドメインに組み込まれる、韻律的な自立性の低い接語である。その一方、一部の助詞・形式名詞は固有のトーンを持ち自立語のドメインにも組み込まれないと解釈できる振舞いを見せる。(5) に安島方言の助詞「ドマ[4]」を例として挙げる。

(5) L 音調を有する助詞「ドマ」（# は声調ドメインの境界を表す）

A 型	ハ[コ]#ドマ	[サ]カナ#ドマ	ニ[ワ]トリ#ドマ
	L H L	H L ↘ L	H L ↘ L
B 型	ヤ[マ]#ドマ	コ[コロ]#ドマ	ア[サガオ]#ドマ
	L	L	L
C 型	[フ]ネ#ドマ	ハ[タ]ケ#ドマ	ア[マザ]ケ#ドマ
	H L L	H L L	H L L

A, C 型に注目すると自立語部分に A, C 型の声調が実現しその後に「ドマ」が低く続いている[5]。また B 型では自立語部分に平らなピッチが続き「ドマ」が低接しており、「ドマ」の次末音節に結びつく助詞固有のトーン（L）を想定できる。ただし自立語と同等の声調（A 型、B 型、C 型）が指定されているわけではない点で、韻律的な独立性は自立語よりも低い。安島方言ではドマの他に、理由の接続助詞サケ（＜境）、述語に付くダケ（＜丈）、トキ（＜時）、ホド（＜程）、モン（＜物）、ンタナ（＜みたいな）など内容語に由来し脱範疇化が進んだ助詞や機能語化が進んでいる形式名詞が同様の韻律的な振舞いを示す。文法化の過程にある形態素が、韻律的にも、接辞以上内容語未満という中間的な段階に位置付けられるわけである。

なお、コピュラ「ヤ」（＜である）も語源に動詞「ある」を含み形態的な融合を経て成立した形式であるが、安島方言ではその活用形「ヤッタ」「ヤッタラ」などに語境界と韻律境界の不一致が観察される。語幹「ヤ（ッ）」までが直前の自立語のドメインに組み込まれ、残る活用語尾（接辞）が韻律的に独立する[6]――すなわちコピュラ内部にドメインの境界が走るのである。(6) に安島方言のコピュラの条件形「ヤッタラ」の音調を示す。(5) とトーンの分布を比較されたい。

(6) コピュラの条件形「ヤッタラ」

A 型	[ハ]コヤッ#タラ	サ[カ]ナヤッ#タラ	ニ[ワト]リヤッ#タラ
	H L ↘ L	H L ↘ L	H L ↘ L
B 型	ヤ[マヤッ]#タラ	コ[コロヤッ]#タラ	ア[サガオヤッ]#タラ
	L	L	L
C 型	フ[ネ]ヤッ#タラ	ハ[タケ]ヤッ#タラ	ア[マザケ]ヤッ#タラ
	H L L	H L L	H L L

[4] 意味・用法は共通語における「なんか」「など」に相当。

[5] 3 音節以上の A 型語に L 音調を有する従属的な形式が後続する場合、2 つめの H が消去される（例：[サ]カ[ナ]ドマ→[サ]カナドマ）。(6) の[ハ]コ[ヤッ]タラ→[ハ]コヤッタラなども同様の例。

[6] 動詞語幹に付く -tara は韻律的に独立しない。

かつてコピュラとその活用形は動詞「ある」のアクセントを引継ぎ韻律的に自立する語だったと考えられるが、現在の安島方言では 1 モーラの非過去形「ヤ」が従属的な接語と化している。その結果、他の活用形（「ヤッタラ」など）に対して、語幹部分「ヤ」のみ直前の自立語のドメインに組み込まれるという変化が及び、活用語尾が自立したまま取り残されたと推測される。

4. 補助動詞の接辞化・接語化

テ形に接続する補助動詞については、従来、主に意味的・統語的観点から本動詞との相違・連続性を分析する研究が重ねられ、個々の形式・用法ごとに文法化の程度が異なることが明らかにされてきたが、種々の補助動詞のアクセントについては（管見の限り方言も含めて）文法化と関連付けて注目されることがほとんどなかったようである。

安島・蒲生両方言の補助動詞は韻律的な自立性の有無に基づき、テ形と 1 つのドメインを形成するもの（Type1）、内容語と同様に固有の声調（A, B, C 型の指定）を有するもの（Type2）に大別できる。さらに Type2 は安島方言で「常にテ形と補助動詞が異なるドメインに分かれる」もの（Type2A）と「テ形が C 型の場合に限りテ形＋補助動詞全体で B 型になる」もの（Type2B）に二分される。

「居る」は両方言で Type1 に該当する (7)。形態的な融合も生じ、継続接辞 -tor, -te を取り出し得る。

(7) 安島・蒲生方言のテ形＋補助動詞「オル／イル」

	安島	蒲生
上がる（A 型）	ア[ガッ]ト[ル（A 型）	ア[ガッテ]ル（A 型）
下がる（B 型）	サ[ガッ]ト[ル（A 型）	サ[ガッテ]ル（A 型）
歩く（C 型）	ア[ルイト]ル（C 型）	ア[ル]イテル（C 型）

「見る」は両方言で Type2（安島で Type2A）に該当する (8)。テ形動詞と補助動詞それぞれの声調が保持されている。

(8) 安島・蒲生方言のテ形＋補助動詞「ミル」（C 型）

	安島	蒲生
上がる（A 型）	[ア]ガッ[テ]#ミル（A 型+C 型）	ア[ガッ]テ#ミル（A 型+C 型）
下がる（B 型）	サ[ガッ!テ#ミル（B 型+C 型）	サ[ガッテ]#ミル（B 型+C 型）
歩く（C 型）	ア[ルイ]テ#ミル（C 型＋C 型）	ア[ル]イテ#ミル（C 型+C 型）

授与動詞由来の「やる」は安島方言で Type2B に該当する (9)。テ形の声調によっては韻律的な自立性を失い得る点から、Type1 と Type2A の中間的な自立性を有する形式と言える。「～てやる」は形態的な融合が進みながら韻律的な構造は変わらず維持されていることで語境界と韻律境界の不一致が生じている（例：[ア]ガッ[テ]#ヤ[ル ＞ [ア]ガッ[タ]#ル）。

(9) 安島・蒲生方言のテ形＋補助動詞「ヤル」（A 型）

	安島	蒲生
上がる（A 型）	[ア]ガッ[タ]#ル（A 型+A 型）	ア[ガッ]テ#ヤル（A 型+A 型）
下がる（B 型）	[サ]ガッ[タ]#ル（A 型+A 型）	サ[ガッテ]#ヤル（B 型+A 型）
歩く（C 型）	ア[ルイタ!ル（B 型）	ア[ル]イテ#ヤル（C 型+A 型）

主要な補助動詞の形態的・韻律的な振舞いを下表にまとめる。

表　主要な補助動詞の韻律的な振舞い

<table>
<tr><th>補助動詞</th><th>韻律@安島</th><th>韻律@蒲生</th><th>融合</th><th>関連カテゴリー</th></tr>
<tr><td>居る（～トル／テル）</td><td colspan="2">Type1</td><td>○</td><td>アスペクト</td></tr>
<tr><td>置く（～トク）</td><td>Type1</td><td>Type2</td><td>○</td><td>アスペクト</td></tr>
<tr><td>もらう（～テモラウ）</td><td>Type2B</td><td>Type1</td><td>－</td><td>ヴォイス・受益</td></tr>
<tr><td>ある（～タル）</td><td rowspan="5">Type2B</td><td rowspan="8">Type2</td><td>○</td><td>アスペクト</td></tr>
<tr><td>やる（～タル／テヤル）</td><td>○</td><td>受益</td></tr>
<tr><td>くれる（～テッケル）</td><td>○</td><td>受益</td></tr>
<tr><td>行く（～テク）</td><td>○</td><td>ダイクシス・アスペクト</td></tr>
<tr><td>来る（～テクル）</td><td>－</td><td>ダイクシス・アスペクト</td></tr>
<tr><td>しまう（～テマウ）</td><td rowspan="2">Type2A</td><td>○</td><td>モダリティ・アスペクト</td></tr>
<tr><td>見る（～テミル）</td><td>－</td><td>モダリティ</td></tr>
</table>

特に蒲生方言で 3 種の授受動詞（やる、くれる、もらう）のうち「もらう」だけが韻律的な自立性を失う点、注目される。

(10) 蒲生方言のテ形＋補助動詞「モラウ」

行く（A 型）　（息子に先に）　イッ[テモラ]ウ（A 型）

住む（C 型）　（息子に近くに）　[スン]デモラウ（C 型）

他 2 語と異なる特徴としてはテモラウ文が受益者項の追加と動作主の降格というヴォイスの交替に相当する統語的操作を伴う点を指摘できるが[7]、これが韻律上の性質に反映される原理が明らかでない。現状あくまでも大雑把な観察にとどまるが、補助動詞の韻律的な自立性と関連する文法カテゴリーの間にはゆるやかな相関が見い出せる。すなわちヴォイスやアスペクトといった、承接順序で考えても語根に最も近い位置に現れる中核的な文法カテゴリーを担う形式は韻律的な自立性を失い（接辞化に向かい）、恩恵性、ダイクシス、モダリティといった主観的な表現を担う形式は韻律的な自立性を維持する傾向が表から見て取れる。また形態的な融合の有無と韻律的な性質の間にはあまり相関がない――それぞれ独立に生じる変化である――こともわかる。

同じ形式でも用法が異なれば韻律的な振舞いも変わる可能性が予想できるが、現在のところ、そのような例は見つかっていない。例えば「～てある」の用法は行為の結果もたらされる〈事物の存在〉を表す用法と行為の結果もたらされる事態の〈存続性・有効性〉を表す用法の 2 つに大別できるが（益岡 1987）、2 つの用法を比較してもアクセント面での振舞いには差が認められなかった。(11) に蒲生方言の例を挙げておく。

[7] テモラウ文と使役文・受身文の共通性については数多くの指摘があるが（山田 2004: 113–114 に研究史のまとめあり）、このうち益岡 (2001) はテモラウ文を受身文に対応する「受動型てもらう」と使役文に対応する「使役型てもらう」に大別し、(a) のような「使役型てもらう」を使役文と強制性の有無において相補的な関係にある構文と位置付ける。(a) も形式上「受益表現」ではありながら必ずしも受益・恩恵の意味合いは強く伴わず、強制性のない働きかけ（依頼や許可）による事態の実現を表す。

(a) 花子に（頼んで）代わりに行ってもらった。　（益岡 2001: 29）

(b) 花子に代わりに行かせた。　（同上）

(11) 蒲生方言のテ形＋補助動詞「アル」

〈存在〉　（机に花が）　オ[イタ]#ル（B 型＋C 型）「（机に花が）置いてある」

〈有効性〉（先にその話を）ユ[ータ]#ル（B 型＋C 型）「（先にその話を）言ってある」

安島・蒲生方言では差が見られなかったものの、方言によっては同じ形式でも文法化の程度によってアクセント上の振舞いが変わる可能性は考えられるので、調査を行う必要はあるだろう（文法調査に際してアクセントも併せて記録するのが効率的か）。

5. 「～がある」「～になる」の接語化

テ形に後続する補助動詞と同様に、動詞「ある」「なる」もまた実質的意味が希薄化した機能語的な働きを有することが指摘されてきた。古く松下 (1974[1930]) は「他語を以て其の実質的意義を補充する必要がある」語のうち「主客語を受ける助動詞」として「あり」や「なる」を挙げた（例 :「徳望有り」、「大人になる」）。「なる」には変化の結果を表す補語が意味的に必須であり例えば「医者になる」「冷たくなる」などで 1 つの述語として機能する。また「N がある」文の「ある」にも機能語的な側面を認められる。例えば「N がある」文には「客がある」「痛みがある」などのように「ある」が「名詞の語彙的意味における性質を述語化する」（大塚 2004: 136）機能を担い、「N がある」全体としてひとまとまりの述語とみなせる場合がある。あるいは「本がある」のように純粋に物理的な状態を描写する場合においても、「名詞にはそれ自体に「存在」というものが前提として含まれている」（同上）という見方をすれば物理的存在を表す「ある」も含めて実質的意味が希薄であると言えるかもしれない。

蒲生方言にはその機能語的な性格を反映して「ある」「なる」が韻律的な自立性を失う（接語化する）環境がある。

(12) 蒲生方言の「～ンナル（～になる）」文

A 型	イ[シャン ナ]ル	ク[ルマン ナ]ル	ニ[ワトリン ナ]ル	（医者、車、鶏）
B 型	オ[ヤン ナル	ハ[シラン ナル	ア[サガオン ナル	（親、柱、朝顔）
C 型	フ[ネ]ン ナル	ハ[タ]ケン ナル	ア[マ]ザケン ナル	（船、畑、甘酒）

(13) 蒲生方言の「～ガアル（～がある）」文

A 型	ハ[コガ ア]ル	（箱）
B 型	ヤ[マガ アル	（山）
C 型	フ[ネ]ガ アル	（船）

(12) の通り蒲生方言では「N になる」文全体をドメインとして N の声調が実現する。「N がある」については N が 2 モーラ以下である場合に限りドメインの拡張が生じ得る[8]。「ある」「なる」を活用させてみると、非過去形の他は現在のところ「～ンナレ（～になれ）」でのみドメインの拡張が生じることを確認している。過去形「アッタ」「ナッタ」や否定形「ナラン」は韻律的な自立性を失わない。3 モーラ以上の語はドメインの拡張に関与しないという音韻論的条件を想定できる可能性はある。

なお「N になる」「N がある」文の N を形容詞や名詞句が修飾している場合でもドメインの拡

[8] 福井市蒲生町のおよそ 15km 南に位置し蒲生方言とごく類似するアクセント体系を有する越前町厨方言でも「N がある」文におけるドメインの拡張現象が報告されている（松倉・新田 2016）。厨方言でも N の長さは 2 モーラ以下に限られる。

張が生じ、結果として統語構造と韻律構造の不一致が観察される (14)。

(14) [エ]ー # イ[シャン ナ]ル （C 型＋A 型）「良い医者になる」
[キ]ノ # ハ[コガ ア]ル （C 型＋A 型）「木の箱がある」
タ[ケァー] # ヤ[マガ アル[9] （B 型＋B 型）「高い山がある」

6. 「目的語＋動詞」の一語化

最後に、複数の「文節」にアクセント単位が拡張するもう 1 つ別の現象として、蒲生方言における「目的語＋動詞」の 1 単位化（目的語抱合）を取り上げる。

(15) 蒲生方言における「2, 3 モーラ目的語＋見る／持つ」

A 型	ホ[シ ミ]ル	オ[モ]テ # ミル	（星、表）
B 型	ヤ[マ ミル	ア[サヒ] # ミル	（山、朝日）
C 型	ソ[ト] ミル	ウ[シ]ロ # ミル	（外、後ろ）
A 型	カ[ゴ モ]ツ	ツ[ク]エ # モツ	（篭、机）
B 型	ハ[タ モツ	ホ[ーキ] # モツ	（旗、箒）
C 型	カ[サ] モツ	ハ[サ]ミ # モツ	（傘、鋏）

このようなドメインの拡張は対格助詞が介在すると生じない。また拡張が生じ得るのは原則として目的語も動詞も 2 モーラ以下の長さである場合に限られるようである[10]。さらに、様々な目的語を自由に抱合し得る動詞は数が限られるようで、現在のところ「出す」「撒く／蒔く」「見る」「持つ」の 4 語を確認している。一方、「折る」「聞く」「切る」「食う」「割る」は基本的に目的語との複合を生じない。「聞く」を除く他 4 語はいずれも被動作性の高い動詞にあたるようだが[11]、動詞の意味が目的語抱合の可否とどう相関するかは今後の調査を待たなければ判断できない。

九州の二型アクセント方言の一つ、熊本県八代市坂本町上深水方言（山田 2018）でも「目的語＋動詞」全体に目的語のアクセントが実現する現象が報告されている。調査の範囲内では全ての「無助詞目的語＋動詞」が 1 単位化するという（同上: 24）。上深水方言と比べると、蒲生方言の目的語抱合はかなり限られた条件下でしか生じない。

なお、目的語名詞句を修飾する形容詞や名詞句は目的語とは異なるドメインを形成する（動詞に抱合されない）。結果として、(16) のような統語構造と韻律構造の不一致が観察される。

(16) ン[メァー] # サ[ケ ノ]ム （B 型＋A 型）「旨い酒を飲む」
シ[レー] # ハ[ナ ミル （B 型＋B 型）「白い花を見る」

7. まとめ

本発表では、福井県の三型アクセント方言を対象として、声調の実現するドメイン（領域）がいわゆる「文節」とは一致しない例、および、形態統語的な単位との不一致・食い違いを生じる環境をまとめた。

---

[9] タケァー [takɛ:]。母音の融合（ai > ɛ:）が生じている。

[10] 手持ちのデータには、目的語が 3 モーラ長でありながらドメインの拡張を生じる例が 1 例だけある：ユ[カタ「浴衣」→ユ[カタ キル「浴衣着る」。調査を重ねればこうした例も多く見つかる可能性はある。

[11] 名詞抱合の類型論的研究（Mithun 1984: 863）ではむしろ被動作性が高い他動詞（e. g. ‘to make’ or ‘to eat’）ほど名詞抱合を生じやすいという指摘がある。

まず 3 節では固有のトーンを有する助詞・助動詞の存在を取り上げた。固有のトーンを有する機能語・文法形式の成因は、意味・統語・形態面と韻律面で文法化の進度に差があることに求められる。機能・形態面では文法化が進んでいる形式であっても、韻律面では元来の内容語としての自立性を固持することがある。

4 節では主要な補助動詞の韻律的な自立性とこれらが担う文法的機能の間のゆるやかな相関を指摘した。アスペクト・ヴォイスといった文法カテゴリーを担う補助動詞は韻律的な自立性を失い得る一方、モダリティ的表現を担う補助動詞は自立性を維持するように見えるが、通方言的な傾向として成り立つのかどうか、調査地域を広げて確かめる必要がある。

5 節では機能語的な動詞「ある」「なる」が限られた条件下ではあるが韻律的な自立性を失い直前の名詞句のドメインに取り込まれる場合があることを示した。

6 節では「無助詞目的語＋他動詞」という統語的単位においても韻律的なドメインの拡張が生じ得ることを報告した。

最後に、本発表で取り上げたデータや問題は、文法体系の記述とアクセント体系の記述を両立しなければ捉えられないものであることを再度強調したい。どちらか一方しか記述しないのは片手落ちで、多くの興味深い現象を見逃すことになる。日本語は、（狭義の）文法体系の地域差と同等かそれ以上にアクセント体系の地域差が著しい言語である。狭義の文法だけを比較すればあまり差がない 2 地域間にも、（狭義の）文法とアクセントの相互作用という観点からは、様々な地域差を発見できる可能性もあるだろう。

謝辞

本研究は JSPS 科研費 JP24K16087 および国立国語研究所共同研究プロジェクト「消滅危機言語の保存研究」の助成を受けたものである。

参考文献

上野善道 (2012) 「N 型アクセントとは何か」『音声研究』16(1), 44–62.
大塚望 (2004) 「「～がある」文の多機能性」『言語研究』125, 111–143.
新田哲夫 (2012) 「福井県越前町小樟方言のアクセント」『音声研究』16(1), 63–79.
橋本進吉 (1934) 『国語法要説』明治書院
益岡隆志 (1987) 『命題の文法―日本語文法序説―』くろしお出版
益岡隆志 (2001) 「日本語における授受動詞と恩恵性」『言語』30(5), 26–32.
松倉昂平 (2017) 「福井市西部沿岸部及び東部山間部のアクセント分布」『東京大学言語学論集』38, 101–122.
松倉昂平 (2022) 『福井県嶺北方言のアクセント研究』武蔵野書院
松倉昂平・新田哲夫 (2016) 「福井三型アクセントの共時的特性の対照」『音声研究』20(3), 81–96.
松下大三郎 (1930) 『改撰標準日本文法』中文館書店
松下大三郎著・徳田政信編 (1974) 『改撰標準日本文法』勉誠社（松下 1930 の復刊）
三宅知宏 (2005) 「現代日本語における文法化―内容語と機能語の連続性をめぐって―」『日本語の研究』1(3), 61–76.
山田高明 (2018) 「熊本県八代市坂本町上深水方言に観察されるアクセント単位の拡張現象」『音声研究』22(3), 17–28.
山田敏弘 (2004) 『日本語のベネファクティブ―「てやる」「てくれる」「てもらう」の文法―』明治書院
Heine, Bernd (1993) *Auxiliaries: Cognitive Forces and Grammaticalization*. Oxford: Oxford University Press.
Mithun, Marianne (1984) The evolution of noun incorporation. *Language* 60(4), 847–894.

日本語文法学会第 25 回大会シンポジウム

「文節」概念を超えて–都城方言の韻律記述試論–

下地理則（九州大学）

1　韻律を考える上で、文節は有効な単位なのか？

N 型アクセント研究では一般に、**文節**を基本単位とした記述と分析が行われる[1]。ここでいう文節とは、文を区切っていき、途切れのない発話単位の最小のものである（橋本 1934）。これは、形式的には自立語に付属語（学校文法の助詞・助動詞）がついたものにほぼ相当する。

(1)　a. 則夫が b. 則夫だ c. 焼いてる d. 焼いてみた

(1d) は 2 文節、それ以外は 1 文節である。文節による分析では、(1d) が異質ということになる。しかし、実際にはこの区別が有効ではない場合もある。例えば、鹿児島市方言や、のちに取り上げる宮崎県都城方言では「則夫だ」が韻律的に「則夫」＋「だ」で別れ、また「焼いてる」も語根とアスペクト接辞が韻律的に別れ、1 つの文節が 1 つの韻律句に対応しないことで知られる[2]。都城方言ではさらに、「則夫だ」が文節数の違いを越え「焼いてみた」と同じ韻律パターンになる（後述）。

文節は、韻律記述において本当に有意義な概念なのだろうか？「文節単位にアクセント」が成り立つなら強力な一般化である。しかし、これはアクセント研究が基本的に「則夫が」「焼いた」のような**文節が最小の句に対応する**場合に偏った関心を寄せて調査してきた結果であるように思われる。1 文節の「則夫が」は最小の項句であるが、「則夫だ」は、実は複雑述語（名詞句＋コピュラ補助動詞）になっているという点は見逃せない（次節）。「則夫だ」は、文法構造的にはむしろ複雑述語「焼いてる」「焼いてみた」と並行的なのである。「則夫だ」が文節性の例外となるのは、文節という（音韻的な単位でも文法的な単位でもない、単なる発話単位としての）独特な単位から記述を試みたからである[3]。

そこで本発表では、アクセント研究で前提にされる文節概念から距離をおき、このことによって、文節性の例外を含め、整然とした記述が可能であることを示す。取り上げる方言は、文節が 1 つのアクセント句に対応すると考えられてきた宮崎県都城市方言である。いわゆる 1 型アクセントに分類され、文節末音節が高いピッチになる（H トーン指定される）とされる（平山輝男 1951）。

2　項と述語の構造

上で挙げた (1a-d) は、文節の観点からは (1a-c) vs. (1d) であることを見た。しかし、文法構造の観点から捉え直すと、(1a) vs. (1b-d) となる。すなわち、「則夫が」という拡大名詞句（extended NP, Shimoji 2008）と、「則夫だ」「焼いてる」「焼いてみた」という述語句の文法構造は大きく異なる。共通語の「則夫が」という拡大名詞句（主語項）は、名詞句「則夫」と、それに役割標識（role marker）としての主格助詞「が」が接続した構造になっている（図 1 左端）。「則夫の弟が」の場合、名詞句「弟」の従属部に別の名詞句「則夫 」が属格句として埋め込まれる（役割標識として属格助詞をとって「則夫の」になる）。

---

[1] 本発表の草稿に対して、五十嵐陽介氏、窪薗晴夫氏、黒木邦彦氏、高城隆一氏、廣澤尚之氏、宮岡大氏、山田高明氏からコメントをいただいた。記して感謝申し上げる。

[2] 上野 (2012) はこの問題に言及した上で、コピュラや終助詞などを文節性の例外とする。より正確には、これらを「付属語」とよび、文節内要素（助詞・助動詞、上野の用語で「助詞類」）と区別することで、事実上、これらを通常の文節に含めない考えに立つ。しかし、「発話を区切った最も短い単位」という文節の定義上、付属語と助詞類の区別は問題にならない（してはならない）はずである。結局、文節の定義に、本来なかった文法的観点を持ち込んでまでこの概念を保守するメリットはなく、この用語を放棄して本発表のような文法構造に直接言及する方針に切り替えるべきであると考える。多くの研究者が「文節」とカッコに入れて呼ぶことで、正確な用語法ではないこと、急場を凌ぐ記述の道具であることを暗に示唆しているが、そうであれば、科学的単位としては一刻も早くこれを放棄した方がいいと発表者は考える。

[3] 韻律現象をより広く考えた時、松岡葵 (2024) が指摘するように、いわゆる最小語制約の適用範囲という観点でも、拡大名詞句（名詞 ＋ 格助詞）と述語句（名詞 ＋ コピュラ）は振る舞いが異なるという通方言的傾向がある。これもまた、文節概念に拘泥していてはむしろ本質が見えにくくなる。

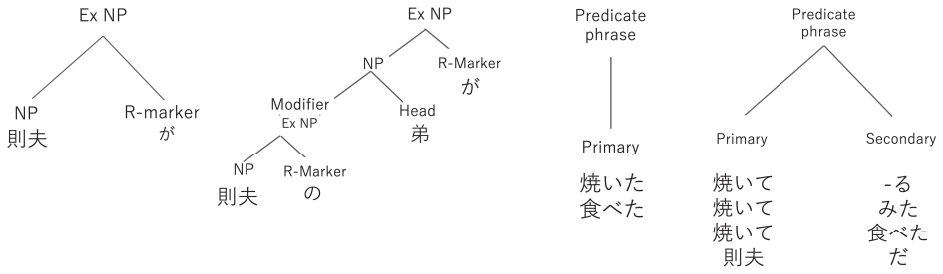


図 1. 拡大名詞句と述語句

一方、述語句は第一要素 (primary component) を必須要素にとり、これが述語全体の語彙的意味と結合価を決める。「焼いた」「食べた」のように、第一要素のみの述語を**単肢述語**、「焼いてみた」「焼いて食べた」「焼いてる」「則夫の弟だ」などのように第一要素が第二要素と複雑述語を形成する場合を**両肢述語**と呼んでおく（下地理則 2018）。両肢述語構造の第一要素は、それが屈折詞（用言）なら非定形屈折する（「焼いて」）。それによって標示できなくなった文法カテゴリー（テンスやムード）は第二要素が担う。第二要素は補助動詞や補助形容詞、または別の語彙的動詞になることもある（例：焼いて食べた）。単肢・両肢述語の別は、語性の違いを超えて成り立つ。すなわち、1 語形式の「焼いてる」も、構造的に第一要素と第二要素に分かれる両肢述語である。統語的複合語も同様である。形容詞述語「高くなる」「高く（は）ある」「高くない」のようなものも両肢述語である。軽動詞構文も同様に、「寝坊する」は「寝坊」が第一要素、「する」が第二要素である[4]。

名詞述語もまた両肢述語である。第一要素は拡大名詞句であり、音形のない空の役割標識をとるとみなす。拡大名詞句が標示できない述語の文法カテゴリーを第二要素のコピュラ動詞が担う[5]。「則夫だ」は第一要素が拡大名詞句（則夫＋ゼロの役割標識）、第二要素がコピュラである[6]。

3　都城方言の韻律句形成の記述

3.1　項と述語の基本的な韻律パターン（表 1 の 1〜5 番）

拡大名詞句は、その末尾音節に H が付与される（/koRmuiN[ga]/「公務員が」）[7]。/koRmuiN[no] ozisaN[ga]/「公務員のおじさんが」では、まず属格拡大名詞句（図 2 の黒丸 1 番）が音調指定され、次に主語拡大名詞句全体（黒丸 2 番）に **cyclic に**音調指定される。拡大名詞句に関して得られる音調パターンは、たまたま文節分析と同じになるが、文節分析は以下にみる述語句の記述で役に立たなくなる。

述語句について、/koRmu[iN]zya/「公務員だ」、/[e]tyoQ/「焼いてる」、/[eQ] mita/「焼いてみた」/[eQ] kuta/「焼いて食べた」の全てに関して**述語句の左端の構成素の末尾音節に H を付与**（他

[4]ある構造体 A+B が両肢述語をなすか、単肢述語（語根 A ＋ 接辞 B）になるかは、記述する言語によって異なる。同じ言語でも、類似した文法カテゴリーが異なった扱いを受ける可能性がある（例：ヨルトル形式、可能表現など）。ここでの論点は、いずれにせよ両肢述語構造という概念を導入しなければ、正しい述語構造の記述ができないという点である。

[5]名詞述語（形容動詞述語も）の場合にも、その結合価を決めるのはあくまで第一要素たる拡大名詞句の方であり、第二要素（コピュラ）ではない、というのが発表者の考え方である。例えば、「専門」という拡大名詞句を述語にとる「専門だ」を考えると、これはその拡大名詞句の語彙的意味により、「専門である対象」が必須項となり、結果、他動名詞述語文になる（「彼は言語学が専門だ」）。コピュラの働きは、動詞述語の場合と全く同様、述語の文法カテゴリーの標示である。

[6]「則夫だ」におけるコピュラ肯定形の「だ」に対して否定形の「でない」は、直感的には第二要素が分岐しているように思われるが（「則夫」＋「で ＋ ない」）、発表者は以下の理由で、「則夫で」（第一要素）＋「ない」（第二要素）と考える。すなわち、取り立て助詞はどの述語句でも第一要素に後続する（「焼いて**は** いない」「高く**は** ない」など）。この振る舞いにおいて、「則夫でない」は「則夫で**は**ない」となり、「則夫で」を第一要素に属させる方が体系的である。まとめると、「則夫ではない」は名詞句「則夫」に役割標識「で」が付属した拡大名詞句を第一要素に、「ない」を第二要素にとる構造である。この分析は後述する都城方言にもうまく適合する。都城方言では、肯定形は/nori[o]zya/「則夫だ」というふうに、第一要素（拡大名詞句/norio/）の末尾音節に H 音調指定される。否定形では/norio[zya] ne/となる。役割標識/zya/を第一要素末尾にするという本発表の分析に従えば、肯定形と全く同様に、第一要素/noriozya/の末尾音節に H 音調指定されると一般化できる。

[7]今回の発表データはもっぱら MT 氏（女性、1955 年生、外住歴 16-20 歳（名古屋））のイディオレクトをもとにしているが、発表者が知る他の話者の内省ともよく一致する。

表 1. 都城方言の様々な文法構造と韻律パターン（H 指定部分に [ ]）

		文節分析（スペースは文節境界）	実際（文節分析とのずれは太字）
1	公務員が	koRmuiN[ga]	koRmuiN[ga]
2	公務員だ	koRmuiN[zya]	**koRmu[iN]zya**
3	焼いてる	e[tyoQ]	**[e]tyoQ**
4	焼いてみた	[eQ] mi[ta]	**[eQ] mita**
5	焼いて食べた	[eQ] ku[ta]	**[eQ] kuta**
6	置いてきてしまった	uQ[tiQ] ki[te] simo[ta]	**uQ[tiQ] kite simota**
7	書いてみてるとこ	[keQ] mityoQto[ko]	**[keQ] mityoQ toko**
8	すごくうるさい	zyozyo[na] sekara[si]	**zyozyo[na] sekarasi**
9	みんなで焼いた	miNna[de] e[ta]	**miNna[de] eta**
10	みんなで焼いて食べた	miNna[de] [eQ] ku[ta]	**miNna[de] [eQ] kuta**
11	さっき食べた魚は	seN[ni] ku[ta] io[wa]	seN[ni] ku[ta] io[wa]
12	公務員だったおじさんが	koRmu[iN] zyaQ[ta] ozisaN[ga]	koRmu[iN] zyaQ[ta] ozisaN[ga]
13	則夫がなくした 財布じゃない？	norio[ga] negoQnake[ta] saihu[zya] ne[to]?	**norioga negoQnaketa** **saihu[zya] neto?**

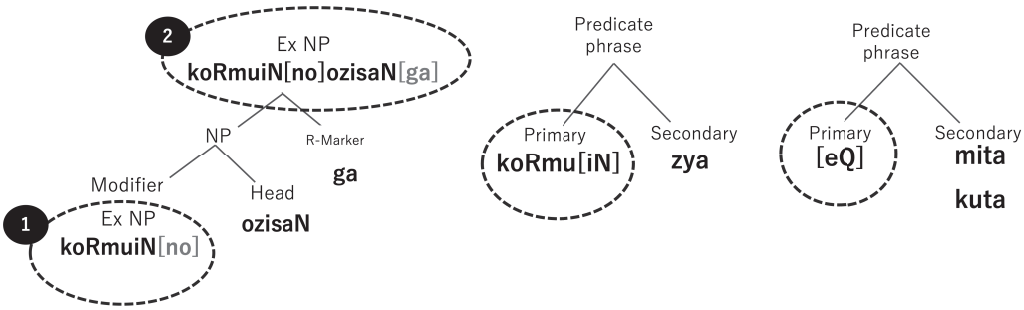


図 2. 拡大名詞句と述語句の音調指定：指定される構成素に破線囲み

の構成素は未指定）と一般化できる（図 2 は紙幅の都合で/[e]tyoQ/は省略）[8]。

なお、上記の分析に対して、本来全ての構成素が H 指定されるものの、短すぎる場合は音調指定されないという別の見方もありうる。しかし、この「長さ不足」分析は成り立たない。/koRmu[iN]zya/「公務員だ」のコピュラを過去形の/zyaQta/にしても、末尾音節に H は生じない（/koRmu[iN]zyaQta/）[9]。さらに、/teNnoRheRka[ga] goraQsyaQtado/「天皇陛下がいらっしゃったよ！」のような存現文（出現や存在の認識局面に特化した文）は、その文全体が述語句扱いとなり、主語項が述語句第一要素として H 指定され、あとは未指定となるが（福田凪子 2023 も当該事実に言及）、動詞が/oQ/「いる」でも/goraQsyaQta/「いらっしゃった」でも H 指定は決して生じない[10]。

3.2 述語句における埋め込み構造：表 1 の 6, 7 番

図 3 の左端（/uQ[tiQ] kita/「置いてきた」）を primary 要素に埋め込んだ構造を持つ/uQ[tiQ] kite simota/「置いてきてしまった」（図 3 の右端）のペアからわかることは、述語句では拡大名詞句と

[8]福田凪子 (2023) は、「韻律語外になる」という表現を用いて述語句の記述を試みる。しかし、これは述語句構造を定義した上での一般化ではなく、パターンの列挙という形をとる。そこから、（語彙語に対する）機能語が韻律語外に置かれるとの結論を示す。この場合、例えば表 1 の 4, 5 番の並行性や、8, 9 番で動詞・形容詞が H 指定されない事実など、多くの例外が生じてしまう。平山輝男 (1974) は、「アクセントの消失」（本発表の未指定、福田凪子 2023 の韻律外）に着目するが、文節（平山の「アクセント節」）が「切れる」場合、つまり文末に来る場合に消失することがあるとしている。これは素朴な発話の切れ目に着目したもので、文法構造に言及した一般化ではない。しかも、文末に来る単肢述語動詞が H 指定されること、埋め込み述語句の左端要素ではない非文末構成素の未指定（表 1 の 7 番）など、説明できない事実があまりに多い。

[9]ただし、これが連体節に置かれた時は H が生じるようになる。例えば/koRmu[iN] **zyaQ[ta]** ozisaN/「公務員**だった**おじさん」のように。しかし、これはコピュラの問題ではなくこの環境の問題である（3.4 節で後述）。

[10]主語項が述語句第一要素扱いされる他の例として、二重主語文がある。例えば/naomiwa sega take ga ne/「直美は背が高いね」は、< naomi[wa]>$_{ExNP}$ <se[ga]>$_{ExNP}$ <ta[ke]gane>$_{Predicate}$ のように、項句と述語句が別々の韻律ドメインになることもあれば、<naomi[wa]> <se[ga] take ga ne> 全体が 1 つの述語句と同じ韻律パターン（左端構成素にのみ音調指定）を生じることもある。

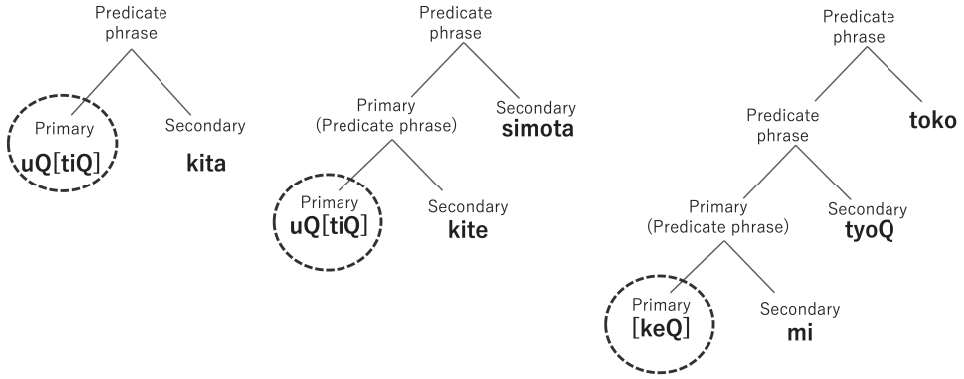


図 3. 述語句の埋め込みと音調指定（音調指定される構成素に破線囲み）

違って cyclic な音調指定がみられないということである。埋め込まれた最下層の述語句の左端の構成素（第一要素）だけが韻律指定を受け、残りは未指定となるからである。もし仮に、埋め込まれた述語句の左端構成素（uQtiQ）と、最上位の述語句の左端構成素（uQtiQ kite）にそれぞれ韻律指定が cyclic に働くなら、得られる音調は*uQ[tiQ] ki[te] simota であったであろう。図の右端「書いてみてるとこ」の埋め込みにおいても、最下層（線形的な左端）に 1 度だけ H 指定される。なお、「書いてみてる」の述語句は、形式名詞起源のモダリティ要素「とこ」と結びついてさらに述語句を作っているとみる（このモダリティ要素や終助詞を句にどう位置付けるかは現在、記述の途中である）。

3.3　述語句がとる補部：表 1 の 8-10 番

項と異なる副詞的な要素は、述語句の補部として、述語句の一部となる。図 4 左端（「とてもうるさい」）と真ん中（「みんなで焼いた」）のように、述語句が単肢述語の場合、その左端は補部であるから、これのみ音調指定される。図 4 右端のように、述語句が両肢述語の場合、右枝分かれ構造となり、述語句の左端は 2 つ（補部と Primary 要素）となって、それぞれ音調指定される。

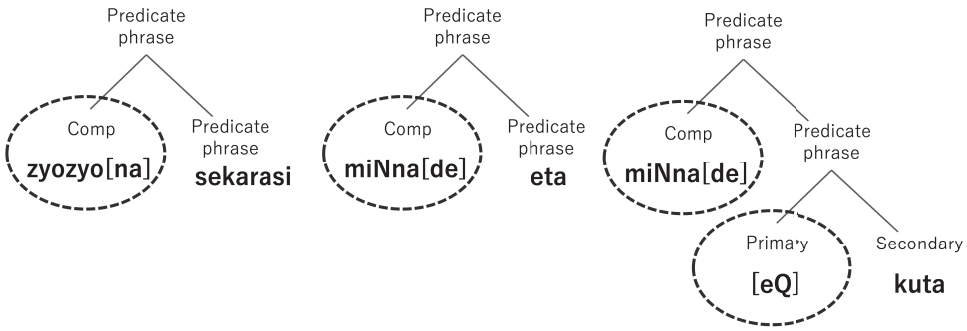


図 4. 補部を取る述語句の場合（韻律指定される構成素に破線囲み）

補部はとりわけ焦点化などの情報構造を動機とした韻律句の再編成に敏感である。例えば補部が焦点化されると（e.g. 「一人で焼いて食べたの？」に対し「いや、**みんなで**焼いて食べた」）、残りが前提句としてまとまり、上記と違った韻律句の再編が生じうる（この点は結論で再度触れる）。

3.4　連体節構造：表 1 の 11, 12 番

連体節は、属格句と同様に拡大名詞句の一種とみて、節が音形のない役割標識をとると見る（琉球諸語などにおける連体形は役割標識の音的実現だと捉える）。図 5 の左（動詞述語）、右（名詞述語）

いずれの連体節構造の場合も、まず連体節内部で拡大名詞句と述語句の音調指定が行われる（黒丸ゼロ番）。例えば「さっき食べた魚は」の場合、/seNni kuta/「さっき食べた」という連体節の内部は補部の/seNni/と述語句/kuta/からなるため、述語句の左端（補部）にのみ音調指定される。この節全体が音形のない役割標識をとって拡大名詞句となり、その句末の構成素（/kuta/）が音調指定される（黒丸 1 番）。最後に最上位の拡大名詞句末の構成素が音調指定される。文末では音調指定されない述語の構成素（「食べた」「だった」）も、連体節末では拡大名詞句末となるために音調指定される[11]。

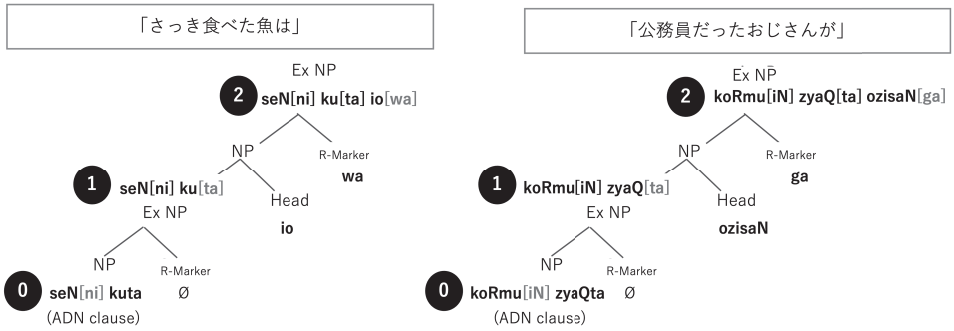


図 5. 連体節構造の音調指定

4　都城方言の H 音調は何を示しているのか

上記の記述の結果、拡大名詞句の韻律と述語句の韻律には、ある重要な対立点が浮かび上がってくることがわかった。図 6 に示すように、拡大名詞句の典型的な役割である項あるいはその連続（つまり文から述語を除いたもの）は、拡大名詞句ごとに、その末尾に生じる音調指定によって、項の終端が示されるようになっている。終端がわかれば次の開始も同時にわかる（上野善道 1984）。音調指定によって、項同士を**分断**させる働きを持っているとも言える。

図 6. 項と述語における音調指定の機能

一方、述語句の場合、線形的に一番左の構成素に音調指定され、残りは未指定となる。よって、ある文を聞いていると、述語が生じるまではたくさんの H 音調が生じ（そしてそれを聞いていれば項の数が大体わかり）、述語が始まった途端、未指定部分の下降が目立つようになることで、述語**全体のまとまり**がわかる。単文に限れば、定義上、述語句は文中に 1 つのみであるから、その終端を示す必要はない。むしろ、述語句に様々に生じる構成素のまとまりを示す必要がある。都城方言では、述語句の開始境界を、その構成素の末尾音節 H という音調指定で表している。あとの未指定の部分は、それがどれだけ続いても、先に聞いた音調指定部分によって区切られた述語の中にあるとわかる。このように、拡大名詞句に生じる音調指定は項同士を分断する働きを持っており、述語句に生じる音調指定は述語のまとまりを示す働きを持っている。いずれの場合も、文節という素朴な発話の単位を区切るのではなく、項と述語の構造を、そしてその境界やまとまりを表示する句音調である[12]。

[11] 佐藤久美子 (2013) は、同じ宮崎県小林市方言の一型アクセントの分析で、語彙語 vs. 機能語という語種の区別によって韻律句形成の一般化を試みる（語彙語が音調指定される）。語彙語にはコピュラも含まれ、コピュラは基底で H 指定されるが、焦点から外れることでこれが削除されるとする。しかし、都城方言に関して、連体節のコピュラが音調指定される事実（図 5 右側）は焦点化とは無関係である。さらに、どちらも情報構造的に同じ（述語焦点）の/uQ[tiQ] kite simota/「置いてきてしまった」と/miNna[de] [eQ] kuta/「みんなで焼いて食べた」の音調指定は言語事実として異なっており、佐藤の分析を借り入れてもうまくいかない。都城方言に関しては、本発表で示すような構造的位置への言及の方が事実をうまく説明できる。

[12] この都城方言の H 音調の働きは、鹿児島市方言の A 型、B 型における上昇音調（すなわち L から H への切り替わり、都

5　再び、文節性について

N 型アクセント類型で決定的だとされる文節性（上野 2012:47）すなわち「文節全体で 1 つのアクセント句になって音調型が定まること」は、上述の通り、述語句の場合は成り立たない。しかし、拡大名詞句の場合には、一見すると有効であるようにも見える。「則夫の弟が」は、外形上/nori[oN]/も/otoQ[ga]/も音調指定されるからである。しかし、実際のデータを詳細に見ると、拡大名詞句に関してもやはり、文節性は支持されない。/koNta **norioga negoQnaketa** saihu zya ne to?/「これは**則夫がなくした**財布じゃないか？」という文における連体節（太字）の音調指定をみてみよう。これまで提案した cyclic な音調指定によれば以下のようになる[13]。

(2)　連体節構造の音調指定（上から順に適用）

a. 連体節内の音調指定：/norio[**ga**] negoQnake[**ta**]/

b. 連体節を拡大名詞句とした音調指定：上記の末尾音節に H（すでに指定済み）

c. 述語（連体節込みの拡大名詞句）に音調指定：/norio[ga] negoQnake[ta] saihu[**zya**] ne/

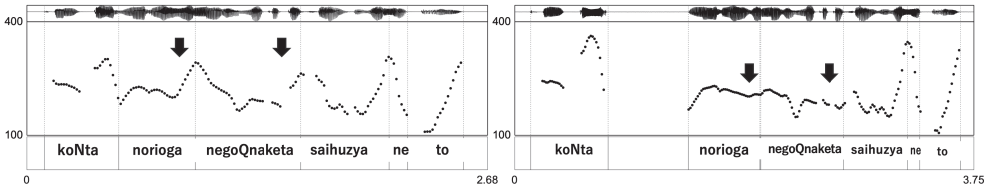


図 7. 連体節構造の音調指定。左は (2) に沿ったパターン。右は (2) のうち、(2c) のみが適用され、拡大名詞句全体にのみ音調指定されるパターン。図の黒矢印を比較すると、左では H 指定される/norio[ga]/と/negoQnake[ta]/は、右では H 指定が生じていない。

(2a-c) の適用されたパターンは図 7 の左である。これは文節を単位とした音調指定とたまたま一致する。ところが、図の右のパターンは、文節分析では予想外で、しかもなぜ 3 つの文節のうち/saihu[zya]/だけが音調指定されたのか説明不能である。

一方、文節概念を用いない本発表の枠組みにおいて、図 7 の右側と左側の違いは、cyclic な指定が働いたかどうかという点で自然に捉えることができる。すなわち、図の右側では、最上位の拡大名詞句に対してのみ 1 度きりの音調指定が生じたということである。しかも、これには動機がある。すでに 4 節で見たように、拡大名詞句の音調指定が主語、目的語など項同士の分断を示すことになるのなら、連体節の内部にまで細かく音調指定されるよりも、項全体（文法構造的には最上位の拡大名詞句）に対して一度きり生じる方が機能的である[14]。

本発表では、文節概念（その定義、すなわち**内包**）の問題点を指摘し、それを使わなくても、より明示的で矛盾のない記述が可能であることを示した。都城方言以外に目を転じた時に同じことが言えるかどうかは議論の中核部分ではない。しかし、文節性は N 型アクセントの通方言的特徴とされるから、以下では、簡単に通方言的な見通しを述べておきたい。例えば長崎の A 型のように、これまで文節の**先頭から数えて** 2 モーラ目に音調指定されると分析されてきた方言を扱う場合、文節に相当する単位が必要になる可能性もある。

城市方言における H 音調と同じ）の機能とも一部、共通するものと思われる。児玉望 (2005) により、鹿児島市方言における語レベルの音調で弁別的なのは下降の方であり、上昇は句の先頭を示すとの見方が示されている。特に B 型の場合、よく言われる末尾音節に H という特徴（すなわち上昇を捉えたもの）は、児玉の分析では句音調ということになる。

[13]文全体につく疑問の/to/には、ここで問題にしている音調指定ではなく、疑問イントネーションがかかる。これは単なる H ではなく rising（LH）であり、/to/の母音長も通常より長くなる。

[14]Igarashi (2022) は、文節ごとの音調パターンが複数の文節にまたがって生じるという現象（アクセント句の拡大現象）が、**1 型アクセントでは生じない**との類型的一般化を行ない、これが無アクセント方言と 1 型アクセント方言を分けるパラメータであると述べる。都城方言は 1 型である。では、図の右側のパターンは Igarashi の一般化の反例になるだろうか？発表者は、以下に述べる理由で、反例にはならないとみる。確かに、図 7 の右のパターンは、多音節の 1 構成素と同様、H 指定された音節に向かって緩やかに下降する点では、1 構成素パターンに類似する。しかし、/norioga/, /negoQnaketa/, /saihuzya/は完全にその境界が消失した 1 つの「多音節文節」のようになっておらず、それぞれの構成素の切れ目がわかる。よって、この時点で五十嵐の基準に合致しない。つまり、図の右側のパターンは、構成素の切れ目が消えて 1 つの長大な韻律ドメインのようになっているわけではないのである。本発表では、名詞句内部のボトムアップで cyclic な音調指定が起こらず、トップダウンで最上位の拡張名詞句を対象に一度だけ音調指定が起こった結果だと考える。音調指定の未指定部分（/norioga/, /negoQnaketa/）の構成素としての切れ目は、その開始点の微弱なピッチ上昇（東京方言について Poser (1984) などを参照）で残存している。

		拡大名詞句（属格句）	拡大名詞句（主語句）	表層
本発表の分析	yomega	N/A	[yome]ga 1　2	[yome]ga
	noriono yomega	norio[no]	norio[no]　[yome]ga 1　2	norio[no] [yome]ga
写像規則分析	noriono yomega	N/A	(noriono) (yomega)	(norio[no])([γome]ga)

図 8.「則夫の嫁が」に対する音調指定（長崎方言の場合）

本発表の枠組み（図 8 の「本発表の分析」）では、拡大名詞句という単位のみを想定するので、まず属格句に音調指定され、次に cyclic に主語句全体に対して音調指定されることになる。この時、拡大名詞句の「先頭」位置の参照が問題になる。現時点では、すでに音調指定されている要素は韻律計算において不可視化する（図 8 で灰色）という、それほど無理のない考え方にたつ。しかし、図 8 の「写像規則分析」で示すように、埋め込み関係にある拡大名詞句（属格句）と、それを内包する拡大名詞句（主語句）について、線形的に左から拡大名詞句の終端に境界を挿入し、それで得られる 2 単位（図 8 最下行の (noriono) と (yomega)）に韻律規則が適用されると考えることもできる[15]。これは、結果的に旧来の（名詞に関する）文節の**外延**に一致する。しかし、この写像規則から生じる単位は、旧来の文節概念（発話の区切りなる概念）と異なり、本発表が仮定した文法構造から二次的に導かれる派生単位である。本発表が提起した最重要の論点は、旧来の不明瞭な文節概念を放棄し、文法構造をより重視して、それに直接言及することで、文節性の例外を含めた韻律記述を前進させようというものである。文法構造から写像規則で導かれる派生単位による記述はこの延長線上にある[16]。

6　むすびにかえて：今後の研究課題と展望

本発表では、旧来の文節概念を離れ、拡大名詞句と述語句の文法構造を観察の土台にして、それが韻律句形成にどのように対応するかを記述してきた。都城方言では、音調指定が拡大名詞句に cyclic に生じることや、述語句の場合は cyclicity が見られず、句の左端にのみ生じることを明らかにした。これにより、文節分析では捉えられなかった韻律パターンを一貫して捉えられることを示した（表 1）。

とはいえ、残された課題の方が多い。まず、従属節の扱いである。特に副詞節を文法構造にどう位置付けるかを解決しなければならない。この問題には、**二節連接の前半節 > 単一節内の補部 > 両肢述語の Primary 要素 > 単肢述語の語幹**へという通時変化が絡む。構造を決めつつ、韻律を観察する際、本発表が問題にする H 指定（項、述語の句レベルで指定される韻律）と文イントネーションとの関係も考えなければならない。現時点でわかっていることとして、/**eiga**[**o**] **mi**[**te**] modoQ[ta]/「**映画を見て**（から）帰った」のような継起節と、/**koRhiR**[**o**] **noNna**[**gai**] modoQta/「**コーヒーを飲みながら**帰った」のような従属度の高い副詞修飾節は、後続する述語/modoQta/の H 指定が明確に異なる。後者が補部（太字）+単肢述語構造をしている可能性を示唆する。

次に、情報構造による韻律句の再編についてである。句音調として H 指定された構成素は、さらにまた、より上位の句（例えば情報構造上のまとまりで形成された焦点句など）のイントネーションによって、その H がブーストされたり、抑制されたりする。例えば、図 9 に示す/yamaNna sogarasi NRmaga oi/「山にはたくさん馬がいる」は、/sogarasi/「たくさん」に焦点があると、それ以降の音調指定が抑制される。主語項/NRmaga/の音調を対比されたい。図の左側は文焦点環境であり、主語項の音調の実現は通常通りである（左側画像の矢印）。しかし、右側の項焦点、すなわち/sogarasi/に焦点が置かれる場合、/NRmaga/の H 指定は抑制され、「下降の踊り場」として、つまり下降に抗って生じるレベルピッチのように実現する（右側画像の矢印）。この意味で、H の特徴が完全に消失するわけではない。よって、末尾 H の音調指定は、まず文法構造に沿って規則的に生じ、その後の焦点句形成に伴うピッチの抑制が生じると見た方が良い。この焦点化による H トーン抑制現象について、同じ一型アクセントの宮崎県小林方言について佐藤久美子 (2013) の先駆的な研究がある。佐藤は H 指定の削除を想定する。都城に関してどちらの考え方が適切かが論点となる（cf. Igarashi (2006)）。

[15]「先頭」位置の参照の問題点と「写像規則分析」アイデアは、方言の例と一緒に五十嵐陽介氏にご指摘いただいた。

[16]写像規則は、本発表が仮定する文法構造からの派生単位であって旧来の文節概念と全く異なる点を別の例でも確認しておく。図 5 の「公務員だったおじさんが」は、その文法構造から、属格句（連体節）/koRmuiN zyaQta/と/ozisaNga/の間に境界が入る。属格句はそれ自体、名詞述語構造であり、拡大名詞句/koRmuiN/とコピュラ/zyatta/の間に境界が入る。結局、派生単位 (koRmu[iN])(zyaQ[ta])(ozisaN[ga]) をもとに韻律計算される。コピュラが韻律計算の単位になるのは文節分析では導き出せない。このように、写像規則による単位と文節は（その内包だけでなく）外延も異なるのである。

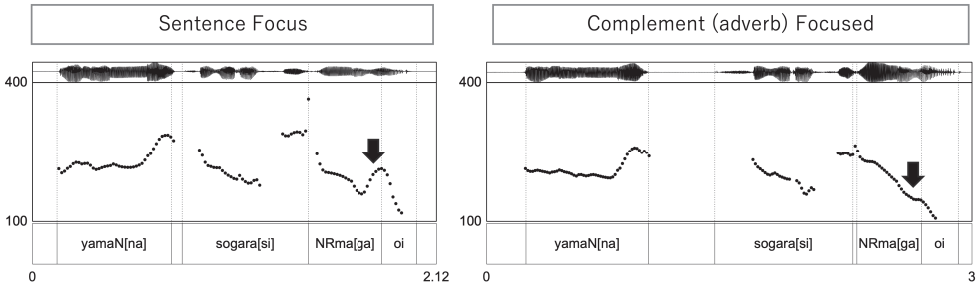


図 9. 後焦点句のトーン抑制

最後に、本発表で「未指定」と呼んだ部分の実態解明である。未指定と呼んだ理由の 1 つは、その構成素が決して積極的なピッチ上昇を持たず、環境によって様々な非上昇ピッチで実現するからである。文末の場合には例外なく下降するが、文中の場合は下降が抑制されるか、あるいはごくまれに、(直前の要素の H の後）そのまま高い音調を維持する（e.g. /ki[nu] ne[bo] site/「昨日寝坊して」における/site/は未指定。ゆるやかな下降 or 高いまま)。よって、積極的な下降音調の指定は文イントネーションの実現であると考え、句レベルでは未指定と呼んだ。一方、周辺方言（例えば鹿児島方言）を見ると、本発表で扱ったのと同じ構造でも、本発表が「未指定」とした構成素が A 型ないし B 型の指定を持つ（木部発表；窪薗晴夫氏との私信、2024 年 10 月 17 日)。これを踏まえ、文法構造による韻律句形成において「未指定」は存在せず、実はすべての構成素が基底で H 指定（周辺方言を踏まえ B 型指定）されており、「未指定」と見られる部分は、焦点化の例で見た後焦点句の構成素と同じく、downstep などで H が抑制されただけであるという可能性も残されている。この場合、本発表がこれまで「H 指定 vs. 未指定」でとらえてきたものは「基底の H 指定がブーストされる vs. 抑制される」の対立となり、本発表で明らかにした音調指定の規則は、ブーストに関する規則ということになる。本発表の論点、すなわち「文節に頼らず、文法構造への直接的な言及を行った方が一貫した韻律記述（基底の H のブーストがどこで起こるかに関する記述）が可能」という点は揺るがないものの、より正確な韻律記述を目指して、今後は「未指定」の実験音韻論的検証を行う予定である。

参考文献

福田凪子 (2023) 「宮崎県都城市方言における句レベルの韻律構造」,, 九州大学卒業論文.

橋本進吉 (1934) 『国語法要説』, 明治書院.

平山輝男 (1951) 『九州方言音調の研究：共通語・京阪語との比較考察』, 学会之指針社.

——— (1974) 「諸県方言の音調研究」,『音声学世界論文集』, 252–258 頁, 記念論文集刊行委員会.

Igarashi, Yosuke (2006) 「Dephrasing in Kobayashi Japanese: Is it a reality？」,『日本言語学会第 133 回発表予稿集』, 日本言語学会.

——— (2022) “Prosodic phrasing, long-distance rise, and structural prominence-marking in Japanese dialects without lexically contrastive tones,” in Kubozono, Haruo, Junko Ito, and Armin Mester eds. *Prosody and Prosodic Interfaces*, pp. 282–297: Oxford University Press.

児玉望 (2005) 「鹿児島タイプ二型アクセントの音調句」,『熊本大学言語学論集』, 281–307 頁.

松岡葵 (2024) 「福岡県柳川市方言の記述研究」, 博士論文, 九州大学.

Poser, William (1984) “The phonetics and phonology of tone and intonation in Japanese,” Ph.D. dissertation, MIT.

佐藤久美子 (2013) 『小林方言とトルコ語のプロソディー：一型アクセント言語の共通点』, 九州大学出版会.

Shimoji, Michinori (2008) “A Grammar of Irabu, a Southern Ryukyuan Language,” Ph.D. dissertation, Australian National University.

下地理則 (2018) 『南琉球宮古語伊良部島方言』, くろしお出版, 東京.

上野善道 (1984) 「N 型アクセントの一般特性について」, 平山輝男博士古稀記念会（編）『現代方言学の課題 2（記述的研究篇)』, 167–209 頁, 明治書院.

——— (2012) 「N 型アクセントとは何か」,『音声研究』, 第 16 巻, 第 1 号, 44–62 頁.

日本語文法学会入会案内

入会についての条件はありません。学会ホームページから入会申し込みの上で年会費１年分をクレジットカードで納入するか，下記の口座にお振り込みの上で学会ホームページから入会申し込みを行ってください（振込用紙の通信欄にはご記入なさらないでください）。学会ホームページにアクセスできない場合は，事務局にお問い合わせください。会費は，振り込まれた年度の会費となります。ただし，３月中の振り込みの場合は，翌年度の会費となります。

振り込みによる場合，入会申し込みは，振り込み後，なるべく早く行ってください。入会申し込みがない場合，入会の手続きは完了しません。なお，振り込みの確認のため，振り込み年月日を必ずご記入ください。

なお，会費には，学会誌代も含まれます。年度途中に入会された場合も，その年度に発行された学会誌が配付されます。ただし，入会以前に発行された号は，入会後に発行される号の発送の際にあわせて発送します。

その他，学会についての詳細は，学会ホームページをご覧になるか，事務局までお問い合わせください（学会ホームページ，事務局については奥付をご参照ください）。

年会費：一般会員 6,500 円，学生会員 4,000 円，維持会員 1 口 10,000 円
ただし，ODA 対象国在住者は，一般会員 3,300 円，学生会員 2,000 円
（なお，新型コロナウイルス感染症の影響等を勘案し，2024 年度も学生会員の会費を半額免除とする。）

●銀行振込みの場合
銀行名：　ゆうちょ銀行
口座名称：　株式会社 QM 日本語文法学会係
ふりがな：　カ）キューエム　ニホンゴブンポウガッカイカカリ
口座番号：　００１６０－０－５４８０８６

※他行等から振込む場合は，受取口座として次の内容をご指定ください。
銀行名：　ゆうちょ銀行
店名(店番)：　０一九（ゼロイチキユウ）店（019）
口座名称：　株式会社 QM 日本語文法学会係
ふりがな：　カ）キューエム　ニホンゴブンポウガッカイカカリ
預金種目：　当座
口座番号：　０５４８０８６

なお，維持会員は，学会の財政的維持に御協力いただくもので，資格，義務等はございません。ご協力のほど，お願い申し上げます。

[住所変更等について]
住所変更等，登録情報に変更があった場合は，学会ホームページ（会員マイページ）から変更を行ってください。学会ホームページにアクセスできない場合は，事務局にお問い合わせください。

[継続会費の納入について]
継続して会費を納入する場合は，学会ホームページからクレジットカードで支払うか，上記口座宛振り込みで８月末日までにお払い込みください。お振り込みの場合は，通信欄に「継続（20XX 年度会費)」と明記してください。その年度の会費を８月末日までにご納入いただけない場合，会員資格が一部停止され，会費納入まで論文投稿や大会発表が制限されます。また，学会誌送付も停止いたします。９月以降にご納入いただいた場合は，９月末刊行の学会誌は，次の号（翌年３月刊行）と合わせて送付することになりますので，ご注意ください。なお，年度が変わった後で，前年度の会費を納入することはできません。会費の納入の確認には２週間ほどかかります。余裕をもってお支払いください。

※開催校へのアクセスおよびキャンパス内の案内については、以下のページをご覧ください。

九州大学 web サイト＞アクセス・キャンパスマップ＞伊都キャンパス
https://www.kyushu-u.ac.jp/ja/campus/ito/

日本語文法学会 第25回大会発表予稿集

主　　催	日本語文法学会
公開シンポジウム共催	言語系学会連合
大 会 委 員	宮地 朝子（委員長），江口 正（副委員長），丸山 岳彦（副委員長），川瀬 卓，窪田 悠介，志波 彩子，永澤 済，林 淳子，平子 達也，森 勇太
発　行　日	2024 年 12 月 14 日
編集・発行	日本語文法学会 〒 305-8571 茨城県つくば市天王台 1-1-1 筑波大学人文社会系 石田尊研究室内 日本語文法学会事務局 E-mail：nihongo.bunpo.daihyo@gmail.com https://www.nihongo-bunpo.org/
印　　刷	株式会社 いなもと印刷

© 日本語文法学会 2024

The Society of Japanese Grammar